

(完結)鉄血の子リン・オズボーン

ライアン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもリインが記憶を失っておらず、オズボーンがリインをテオ・シユバルツアーではなくオーラフ・クレイグへと預けてリインがリイン・オズボーンとして育っていたらというIF設定物となります。

リインの性格がかなり変わっていますので、リインは原作のリインじゃなきや嫌なんだい！という方はご注意ください。

またシユミレートの結果、原作よりもさらにリインが立場とかで雁字搦めになった詰んだ状態になるかと思えます。二次小説は原作よりも状況改善させてなんぼだろ！という信条の方もご注意ください。

リインとクロウの友情及びライバル関係をより際立たせたいという思いからリインがクロウ達と同世代でツールズに入学しています。

ヒロインはおそらくクレアさんとトワ会長の二人になるかと思っ
ていましたが、トワ会長のヒロイン力がシユミレートの結果糞高い事
になったので、トワ会長がメインヒロインになるかと思えます。

それではよろしければ、父に憧れる軍人志望の好青年リイン・オズ
ボーン君が絶望さえ奪われた状態にまで落とされるまでのお話にど
うかお付き合い下さい。

2018/5/26 完結しました。

続編「灰色の騎士リイン・オズボーン」開始しました。

<https://syosetu.org/novel/1586>

目次

鉄血の子の青春時代 | T h o r s M i l i t a r y A c a d e

m y 1 2 0 3 |

鉄血の子の入学	1
鉄血の子の幼少期	16
鉄血の子と教官達	21
鉄血の子と氷の乙女	26
鉄血の子と不良生徒	36
鉄血の子と喧嘩の後	47
鉄血の子と喧嘩の後②	55
鉄血の子とA R C U S	61
鉄血の子とA R C U S ②	66
鉄血の子と中間試験	74
鉄血の子と夏至祭	78
鉄血の子と夏至祭②	84
鉄血の子と夏至祭③	90
鉄血の子と夏至祭④	98
鉄血の子と夏至祭⑤	104
鉄血の子と夏至祭(終)	111
鉄血の子と学園祭	116
鉄血の子と学園祭②	121
鉄血の子と学園祭③	126
鉄血の子と学園祭④	133
鉄血の子と学園祭⑤	138
鉄血の子と学園祭⑥	142

鉄血の子と学園祭(終)	147
鉄血の子と紫電	156
零の軌跡断章〜鉄血の子〜	165
鉄血の子と魔都	171
鉄血の子と魔都②	178
鉄血の子と魔都③	185
鉄血の子と魔都④	191
鉄血の子と魔都⑤	199
鉄血の子と魔都⑥	205
鉄血の子と魔都⑦	212
鉄血の子と魔都⑧	217
鉄血の子と魔都(終)	223
鉄血の子と学院長	232
鉄血の子と星空の誓い	240
鉄血の子と特科Ⅶ組—Thors Military Academy	
my 1204—	
鉄血の子と特別オリエンテーリング①	248
鉄血の子と特別オリエンテーリング②	254
鉄血の子と特別オリエンテーリング③	261
鉄血の子と特別オリエンテーリング④	269
鉄血の子とアルゼイド	278
鉄血の子と歓迎会	284
鉄血の子と過重労働	291
鉄血の子と導き	298
鉄血の子と交易町ケルディック①	306

鉄血の子と交易町ケルディック② | 314

鉄血の子と交易町ケルディック③ | 322

鉄血の子とグランローズ | 332

鉄血の子と最高の相棒 | 341

鉄血の子と翡翠の都《バリアハート》① | 349

鉄血の子と翡翠の都《バリアハート》② | 356

鉄血の子と翡翠の都《バリアハート》③ | 362

鉄血の子と翡翠の都《バリアハート》④ | 369

鉄血の子と翡翠の都《バリアハート》⑤ | 379

鉄血の子と翡翠の都《バリアハート》⑥〜幕間《かかし男》 | 385

鉄血の子と翡翠の都《バリアハート》⑦ | 392

兆し | 402

鉄血の子と悠久なる大地《ノルド》① | 408

鉄血の子と悠久なる大地《ノルド》② | 414

鉄血の子と悠久なる大地《ノルド》③ | 421

鉄血の子と悠久なる大地《ノルド》④ | 428

鉄血の子と悠久なる大地《ノルド》⑤ | 435

鉄血の子と悠久なる大地《ノルド》⑥ | 442

鉄血の子と悠久なる大地《ノルド》⑦ | 449

幕間〜初夏の帝都 | 456

鉄血の子と《巨いなる騎士》 | 465

鉄血の子と姉弟喧嘩（前） | 473

鉄血の子と姉弟喧嘩（後） | 481

北風と太陽 | 489

鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》①	499
鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》②	507
鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》③	515
鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》④	523
鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》⑤	531
鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》⑥	537
かくして？英雄？は舞台へと上がる	542
《魔竜》退治	553
絶望	561
覚醒	569
代償	577
父と子	585
作られた英雄	592
鉄血の子と《アルノールの守護神》	599
鉄血の子と守護の剣	606
父の想い、宰相の言葉	614
変わりゆくもの	621
鉄血の子と《西ゼムリア通商会議》①	627
鉄血の子と《西ゼムリア通商会議》②	634
鉄血の子と《西ゼムリア通商会議》③	646
《赤い星座》	654
オルキスタワーの死闘	661
好きな男の人のタイプは強い人	668
恋する乙女は竜をも超える	677
祭りの前	685

鉄血の子と過去からの試練	692
終わりの足音	699
少女のワガママ	707
想い、伝えて	713
鉄血の子と《赤き翼》	721
鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルール①	729
鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルール②	737
鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルール③	745
鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルール④	752
鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルール⑤	759
鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルール⑥	765
鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルール⑦	773
束の間の休息（前）	780
束の間の休息（後）	787
鉄血の子と最後の学院祭	798
鉄血の子と《灰の騎神》	806
鉄血の子と《戦乙女》	814
夢の終わり	821
かくして鉄血の子は“灰色の騎士”となる	828
鋼の誓い	835
終わりを齎す凶弾	843
明かされた真実	852
《翡翠の城将》は礼賛する	860
リイン・オズボーンVSクロウ・アームブラスト（前）	868
リイン・オズボーンVSクロウ・アームブラスト（後）	876

敗北



鉄血の子の青春時代―Thors Military
y Academy 1203―

鉄血の子の入学

七耀暦1203年3月31日 帝都ヘイムダル近郊都市トリスタに一人の少年が現れた。端正な顔立ちに引き締まった肉体、そして強い意志を瞳に宿したその少年の名はリイン・オズボーン……。

この春、ここトリスタに存在する大帝縁の名門トールズ士官学院へと次席で入学した、かの鉄血宰相ギリアス・オズボーンの実の息子にして後に灰色の騎士と謳われる事となる若き英雄の卵である。

(……)がトリスタ……父さんと、クレア姉さんの母校トールズ士官学院のある街か……)

満開のライノの花に見惚れながらもリインは颯爽とした様子で校舎への道を歩んでいく。この町の住人にとってはこの季節の風物詩なのだろう、「入学おめでとう」と口々に声をかけてくる。そんな住人達に失礼のないようにリインもまたにこやかに挨拶を返しながら歩みを進めていくと、泣きながら何かを探している子どもと、そんな子どもを「大丈夫だよ、きつとすぐに見つかるからね」などと優しくあやしなから一緒に何かを探している様子の、おそらくは同じ新入生なのだろう、平民出身である事を示す緑色の制服に身を包んでいる少女に出くわした。

(最少入学年齢の15歳、と言ったところだろうか)

トールズ士官学院は平民も貴族も問わず幅広い人材を求めている、新入生の年齢は基本的には17歳が一番多いが、自分のように16歳で入学してくるものや最年少である15歳で入学してくる者もいる。リインの目の前の少女は到底彼より年上には見えない、そもそも制服を身に纏っていないければ13歳程度だとリインは思ったことだろう、のでリインはそのように考えた。

「どうかしたのかい?」

務めて威圧的にならないように優しい声を心がけて、リインは目の前の二人へと声をかけた。軍人は民に優しく在るべし、そんな父から教えを忠実に実践すると同時に生来のお人良しさを発揮して。そんなリインに目の前の少女は一瞬驚いたような顔を浮かべた後に

「あ、ええつと……この子が指輪を落としちゃったみたいなんです」「お母さんをお願いして貸してもらった大切な指輪なの……なのに……なのに無くしちゃったりしたら……」

じわりと目に涙を溜めて今にも泣き出しそうな様子の子どもを少女は再び必死にあやし出す

「そういうことならば俺も手を貸すよ。幸いな事に入学式までにはまだ時間があるし、一人よりは二人でやった方が効率が良い」

「わ、ありがとうございます。それじゃあ、お互いなんとか入学式に間に合うように頑張りましょう！」

そうして三人で探し始めて5分ほど、幸いな事を探していた指輪は無事見つかり、笑顔で手を振りながら告げられるお礼の言葉を聞きながら二人はその場を跡にするのであった……

「手伝ってくれてありがとうございます！ 私はトワ・ハーシエルって言います。ご無礼じゃなかったら、お名前を聞かせて頂いても良いでしょうか？」

手伝ってくれた親切な人だからきつと良い人なのだろうとトワと名乗った少女はリインへと問いかける。そんな認識となっても大よそ同世代の相手に話しかけるような態度ではない、敬語口調なのはリインが貴族生徒の証である白服を身に纏っているからだろう。実際皇帝陛下直々に父に爵位が賜った以上、オズボーン家はれっきとした貴族となっており、父ギリアスが亡くなりでもすれば自動的にリインがその跡を継ぐことにはなるのだが、平民として育ち、5歳の頃からそれこそ兄弟のように育った親友も平民、親交のある人物も大体改革派に所属しているリインにしてみると貴族として扱われるのは聊か以上に不本意であった。だがよもや皇帝陛下から直々に賜った爵位を迷惑などと言うわけにもいかず、やり場の無い鬱憤を抱えながらリインもまた応じる

「ああ、敬語は別に不要だよ。一応貴族ではあるものの、俺も父も心は平民のままだからね」

仮に自分が父の跡を継ぐとしてもその時はギリ阿斯・オズボーンの息子だからという理由ではなく、リイン・オズボーンだからこそ相応しいと周囲に思っただけで貫えるようになりたいとリインは願っている。未だ尊敬する二人の父は愚か、氷の乙女との異名を持つ姉の背中も程遠い状態だが、やがては姉にも頼ってもらえ、父に自慢の息子だと言ってもらえるようになって見せるとリインは改めて決意する。そうしてリインは務めて柔和な笑顔を浮かべながら己の名前を目の前の級友となる人物へと告げる

「俺はリイン・オズボーン。これから2年間よろしく、ハーシエル」

「そっか、リイン君は軍人になるつもりなんだ」

あの後オズボーンというリインの家名にトワが驚き、リインとしてはトワが自分よりも年上であったという事実に負けず劣らず驚いたのだが、そんなトワに対してあくまで父の功績は父が為したものであり現状の俺は君と同じただの士官学院生だからあまり畏まらないで欲しいと告げたところ、そういうことならばと互いにファーストネームで呼び合うこととなった二人は歩きながらも言葉を交わして親交を深めていた。

「ああ、軍人になるのは俺の小さい頃からの夢だね。世話になった人達は皆尊敬出来る立派な軍人だったし、その人達のようになって少しでも父の力になれるようになりたいと思っただけ」

「立派な目標だね、リイン君だったらきつとなれるよ。でも少しだけ意外かな、リイン君みたいに明確に軍人を目指している人って大体中央士官学院に進むのが一般的だから」

トールズは大帝縁の名門士官学院ではあるが近年は大分軍事色も薄まっており、どちらかと言えば名門高等学校としての側面が強くなってきている。卒業時の階級も准尉からスタートと中央士官学院の卒業生が少尉からなのに対して一階級下からのスタートである。だからこそリインのように最初から軍人としての栄達を目指している人

間の場合は中央士官学院へと進むのがどちらかと言えば主流である、そんな事情から疑問を呈するトワにリインは苦笑しながら答える

「ああ、それなんだけど、俺の周囲の人達曰く俺はもう少し軍人以外の視点も養ったほうが良いんだってさ」

きよとんとした様子のトワに対してリインはかいつまみながら自分の事情を説明する。自分の周囲は軍人の人ばかりだったのだと。リインにとって尊敬する父ギリアスは元々は軍人であった、そんな父の部下であり、もう一人の父とも言えるオーラフ・クレイグ将軍も、そしてその部下たるナイトハルト少佐も、姉のように敬愛しているクレア大尉も、剣の兄弟子にあたるミュラー・ヴァンダーも彼が幼少期から出会ってきた尊敬する大人達はその大半が軍人であった。

だからこそリインはトールズにするかどうかは寸前まで迷っていたのだ、尊敬する父と姉の出身とはいえ近年のトールズは未だ卒業生の6割が軍人になるとはいえ、軍事色が薄まり名門高等学校としての側面が強くなっている。明確に軍人を志している自分などはあるいは、それこそ帝国軍中央士官学院に進むのがあるいは一番の近道なのではないかと。そんなリインにアドバイスしてくれたのは他ならぬトールズの卒業生であるクレアであった

「確かにトールズ士官学院はともすると迂遠だったり、軍人になるにあたっては余分と言えるものにも時間を割いています。芸術の時間や部活動などはその顕著な例かもしれませんが、ですが、そのある意味では余分とも言える時間が大人になってみると案外役に立ったり視野を広げる事に役立ったりするものなんですよ。リインさんみたいに真面目で幼い頃から軍人に囲まれて育ったような人ならば尚更に」

幼い頃から軍人になることを目指し、暇があれば勉強か剣術の鍛錬かと言った様子であった弟のように思っている少年の、聊か真面目すぎる部分を気にかけて、出最短距離を行くだけが人生ではなく時には寄り道をしたり、どちらの道に行くか悩んだりすることも大事なのだと、クレアは告げて

「これは軍人に限ったことではありませんが、組織の中にいると人は

どうしてもその組織がさも世界のように錯覚してしまいます。ですが経済と政治から切り離された軍事などというものは大よそ存在しえません。そういう意味では軍事だけに留まらずより広範な知識を得られ、軍人だけではなく様々な分野へと人材を輩出しているツールズに行くのはきつとリインさんにとつても大きな+になると思いま
すよ」

優しく微笑みながらそんな事を告げる敬愛する姉の言葉が結局最終的な決定打となり、リイン・オズボーンはツールズへの入学を決意したのであった。

閑話休題

「ちなみにそういうトワはどうしてツールズに？」

全てを語ったわけではないが、自分の事情をかいつまみながら話し終えたリインは世間話の延長とばかりに目の前の少女へと今度は疑問を投げかける

「私はお祖父ちゃんが学者だったから昔からもっと色んな事を勉強したいと思つて、それで奨学金制度が充実している士官学院でありながら、軍事だけじゃなくて色んな事を学べる此処にしたつて感じかなあ。……リイン君みたいに立派な目標がある人に比べると恥ずかしい理由だけどね」

どこか申し訳なさそうにするトワに対してリインは苦笑して

「いや、親御さん思いで立派じゃないか。俺なんてそれこそ学費なんて気に留めたこともなかったし、それどころか優秀な家庭教師をつけてもらえる位に恵まれた立場だったんだから、家族の事を思つて努力したトワの方がよっぽど立派だよ」

リインにとつては軍人となるのは小さい頃からの目標であり、夢であり、憧れであり、当然……の事であった。だからこそ士官学院に進むのは夢への第一歩であり、そこで味わう苦難は全て覚悟の上甘受して当然の事である。だがトワは家族に負担をかけないために、士官学院を選んだのだ。

如何に軍事色が薄れたとはいえ、それでもツールズは正規軍名誉元帥が校長を務めているれっきとした軍人の養成所なのである。当然

そのカリキュラムは通常の学校に比べればはるかにハードとなつて
いる。だがトワはそんな苦難を家族のために甘受すると決めたのだ、
自分の夢のためというあくまで自分本位な理由によつてトールズを
選んだ自分に比べれば目の前の少女の方が立派だろう、そんな感想を
抱いて賞賛の言葉をリインは述べる

「そ、そんな事無いよ！今から立派な目標を持つてそれに向かつて努
力しているリイン君の方がはるかに立派だよ」

「いや、軍人になるのは俺自身の夢なんだから結局俺のやっている事
なんて俺自身のためさ、夢や目標に向かつて努力するなんて当然の事
なんだから家族のために頑張っているトワの方が立派だよ」

「そんな事言つたら私だつて私自身が勉強したくてトールズを選んだ
んだもん。やっぱりリイン君の方が立派だよ」

「いやいやトワの方が」
「ううん、リイン君の方が」

何故か互いに相手の方が自分よりも立派なのだと言張しあうとい
う奇妙な意地の張り合いを始めだした二人。互いに頑張ろうで済ま
せば良いのに、何がそんなに気になるのかどちらも過剰に相手を持
ち上げ続ける、あるいは学院に到着するまで、このまま延々とそんな
やり取りを続けるのではないかと言つたところで……

「いや、どちらも立派つて事で良いんじゃないかな」

二人の後ろから凜とした声が響いた

「少なくとも、モラトリウムとして来た放蕩娘である私などよりは余
程ね」

「えつと……」

「君は……」

肩をすくめて自嘲の笑みを浮かべながら話しかけてきた白服を
纏つたその少女に困惑の声を挙げた二人に対して

「おつといきなりで驚かせてしまったかな。私はアンゼリカ・ログ
ナー、二人と同じトールズ士官学院の新入生さ。これから二年間よろ
しく頼むよ、二人とも」

アンゼリカと名乗つた少女はウインクをしながらそんな風に告げ

るのであった。

「えつと……アンゼリカさんはあのログナー家のご息女様なんですよね？」

おずおずとした様子でトワがアンゼリカへと確認する。ログナー侯爵家、それは四大名門と呼ばれる貴族の中の貴族、過去にも宰相や皇配を数多く輩出している大貴族の中の大貴族である。それぞれの領地ではそれこそ彼らの権勢は皇族さえも凌駕しうるものである。平民が逆鱗にでも触れればそれこそオズボーンが宰相位に就く前であれば、例え平民の側に非がなかったとしても一族郎党纏めて処刑、そんな事にさえなり得る存在であったのだ。

「アンゼリカさんだなんて、そんな畏まらなくてくれよトワ君。そちらの彼はリイン君などと親しげに呼んでいたじゃないか、私の事も親しみを込めてアンゼリカちゃんとも呼んでくれたまえ、なんなら縮めてアンちゃんなどと愛称で呼んでくれても、君なら私は一向に構わない」

「え、えーと、そ、それじゃあ……あ、アンゼリカちゃん」

「なんだい？ トワ君」

だが、目の前の少女はとてでもないがそんな大貴族の一員には到底見えずリインは聊か困惑していた。四大名門と言えば、父ギリアスの宿敵とも言える存在で、この両者の対立は日に日に激化している。他ならぬリインの母が命を落とすこととなった事件も裏で糸を引いていたのは、父を良く思っていなかった大貴族だと言う。

ヴァンダール流を学び、ヴァンダール家の人間と接した事で、貴族の中にも皇族同様己の血に流れる責務を果たそうとする誇り高き貴族がいる事は知ったリインだったが、それでも父の政敵でもある四大名門ともなれば心は穏やかざるものともなるし、向こうは向こうで父を怨敵と思って居るので当然その子息と出会うような事となれば当然穏やかざる関係となると踏んでいたのだが……

「あーなんて可愛いんだ君は……君と出会えただけで私はツールズに來た甲斐があったというものだよ！」

「わわわわ……く、苦しいよ〜アンゼリカちゃん」

目の前のその四大名門のご令嬢はそんな尊大さとは程遠いフレンドリーさである、彼女はこちらを一切平民だから等という理由で見下して来ない。あくまで対等のこれからともに過ごす学友として扱っている

(やつぱりまだまだだな、俺は)

ヴァンダールの人々と接した事で貴族への偏見を大分無くしたつもりだったが、それでもログナーという家名を聞いた瞬間に思わず身構えてしまった。相手はこちらがオズボーンだと知りながら、敵意など一切見せなかったと言うのに。

そんな風にどこまでも糞真面目に反省し出したリインの様子に気がついたのだろう、アンゼリカは若干からかうような口調で

「おやおや、すっかり黙り込んでしまったけどどうしたんだい？ やはり大貴族相手などとは仲良くなれないと言う事かな？ かの、鉄血宰相殿のご子息としては」

そんなどこかリインを試すような挑発の言葉とアンゼリカが来てからすっかり黙り込んでしまった様子のリインに気づいたのだろう、トワもハラハラとした様子でリインを見つめる

「……いや、すまない。決してそういうわけじゃないんだ、家名と個人は別だし、貴族全てが悪というわけではない、そんな事は俺もわかっているんだ……わかってはいるつもりだったんだけどな」

そこでリインは未熟な自分を恥じるような自嘲の笑みを浮かべて「すまない、君のログナーという家名を聞いて一瞬身構えてしまったよ。これから2年間を共にする学友への態度ではなかった、許して欲しい」

これに関しては俺が全面的に悪かったといった様子で、どこまでも真つ直ぐに謝罪をするリインの様子にアンゼリカは一瞬呆気にとられたような顔を浮かべると次の瞬間大きな笑い声を挙げて

「ふふふ……あはははははは、君は本当に真面目なんだな。ああ、わかったその謝罪確かに受けとった。そして私の方からも詫びさせてもらうよ、試すような挑発的な言動をとってすまなかったね」

「改めて2年間よろしく頼むよ、アンゼリカ」

「ああ、こちらこそ、リイン。君の立場で貴族クラスっていうのはきつとかかなり大変なことになると思うが私も級友として力にならせてもらうつもりだ、何か困ったことがあったら言ってくれたまえ」

握手を交わしながらそんな事を告げるアンゼリカに対して、リインはどこか不敵な笑みを浮かべて

「ありがとう、だがあえてそれこそ望むところだと言わせてもらおう。俺の父は俺が対面することとなる壁よりもはるかに困難な壁を乗り越えて今の地位を築き、今も戦っているのだから」

だからそんな程度の苦難を乗り越えられなくては父の力になる事など不可能なんだと、瞳に強い意志を宿らせてリインはツールズにおいて最初に出て来た二人の友人に告げるのであった。

「それじゃあ二人とも、また後でね！」

講堂へと到着すると貴族生徒であるリインとアンゼリカとはクラスの違いトワは二人にそうして笑顔で告げて自分のクラスの列へと歩いていった。

「さてと、それじゃあ私達も自分たちのクラスのところに行くとしてよいか。やれやれ……学院長の話の時に寝てしまわないか、私は不安だよ」

「お前な……ヴァンダイク元帥はエレボニア帝国の誇る英雄であり、生きる伝説と言っても過言では無いお方なんだぞ。その方から入学の訓示を頂けるなんてそれこそ一言一句聞き漏らすことさえ惜しいほどに大変な栄誉であつてだな」

アンゼリカとしては軽い冗談のつもりだったのだろう、しかし堅物と言つていいレベルで糞真面目であり、心の底より学院長を敬愛するリインに対してその発言は虎の尾を踏むに等しい発言であった。

「あーすまない、軽い冗談だったんだよ」などとアンゼリカが慌てて弁明するが熱くなつたリインは止まらない、ヴァンダイク元帥が如何に素晴らしい軍人なのか熱弁をふるい出す。幼い頃より軍人に憧れ、ドライケルス帝を始めとする英雄達の伝記等を好んで読んでリイン・オ

ズボーンは、こと英雄の話になると止まらない少年であった。

「君たち、ちよつと良いかな」

辟易とするアンゼリカへの救いの手は思わぬところから現れた。同じ白服に身を包んだ貴族生徒が取り巻きを連れながら二人へと話しかけてきたのであった

「ああ、良いとも！ 一体何の用件だい！」

「む？ なんだ、君もヴァンダイク元帥の武勇伝が聞きたいのか？」

助かったと言わんばかりに食いつくアンゼリカ、そして意に介さずに話を続けようとする火のついた英雄マニアに若干引きながらもその貴族の少年は大仰に名乗り出す

「ああ、私の名はヨアヒム・リッテンハイム。当然知っているだろうが、あのカイエン公の縁戚たるリッテンハイム伯爵家の跡取り息子さ」

そんな名乗りを聞いた瞬間に二人の表情は苦虫を噛み潰したようなものとなる。良い貴族も居れば悪い貴族もいる、良い平民もいれば悪い平民もいる。平民と貴族というくくり……に囚われるとついつい忘れがちになるが、当たり前……の事である。そう、良い貴族もいれば悪い貴族もまた居るのだ。

リッテンハイムと言えばカイエン公の腰ぎんちやくとして平民には酷薄で、四大名門には媚びるといふまさに駄目貴族の見本とも言うべき存在。

あくまで現リッテンハイム伯爵の評判なので、まだ目の前の少年が父と同様と決まったわけではないが、それでもわざわざ家門の名を殊更強調する様子に好印象を抱けというのは聊か以上に困難な話であった。

自分の名前を聞いた途端に静かになった二人の様子を恐れ入ったと勘違いしたのだろう、ヨアヒム少年は得意気に話し出す

「ああ、一つ忠告をしておこうと思ってね。君たちもわがリッテンハイム家に劣るだろうとはいえ、栄えある帝国貴族なのだ。あまり平民などと親しくないほうが良い」

あまりにもあんなりに絵に描いたような傲慢な貴族のお坊ちゃん

と言った様子のヨアヒムに二人は怒りよりも奇妙な感慨を抱く、ああ、こういう絵に描いたような貴族の馬鹿殿様と言った様子の人間は本当に実在するんだなど。

そんな呆気にとられた二人の様子に恐れ入っているとのおも勘違いしたままにヨアヒムは続ける

「貴族は貴族同士で交流することこそが有意義だろう、この入学式が終わったら先ほどの平民の女にはつきりと告げておきたまえ、自分達と君では住む世界が違うのだとね。それが彼女のためでもある。貴族は貴族同士で交流を深めるべきだろう」

寛大と威厳に満ちた、等と本人は信じて居るであろう、様子でヨアヒムが言い終えると

「ふむ、どうやら貴族と平民は交流をしてはいけないようだ、リイン。不真面目な私は存じなかったが、トールズにはそういう規則があるのかい？ 次席入学殿」

「いや、トールズ士官学院はそもそもドライケルス大帝が平民や貴族と言った別なく優れた人材を集め、いずれ世の礎たる若者を育成すべく、当時としては画期的な事に平民に対しても門戸が開かれた士官学院だ。入学した生徒は如何なる大貴族あるいは皇族だったとしても一生徒として扱われる。当然貴族は平民と関わるな、などと記された校則は一切存在しない。むしろ学院側としては部活動等を通して平民と貴族の別なく、交流を持つ事を推奨している」

とぼけた様子でわざとらしく問いかけるアンゼリカに肩をすくめながらわざとらしくリインもまた答える

「ふむ、だが目の前のヨアヒム殿は学院の理念と正反対の事を言っているが、これはどういう事だい？」

「ああ、可哀想な事にきつと何か勘違いされたのだろう。誰しも勘違いや見間違えというのはありうる事だ」

そんなあからさまにこちらを馬鹿にした様子にヨアヒムは当然ながら顔を真っ赤にして怒り

「貴様ら！ どういうつもりだ！ この私が親切で貴族としての心構えを教授してやったというのに!!!」

そんなヨアヒムを冷めた目で見つめながらリインは答える

「ならば、単刀直入に言おう。誰を友にするかは俺自身が決める、余計なお世話だ」

「私もまあ、ほとんど同意見だね。トワともリインとも既に友人同士だが、別段君と友になりたいなどとは思わない」

トワやアンゼリカ、そして道すがらに接したトリスタの住人に対する親愛に満ちた優しい瞳から打って変ってとても冷ややかな目をリインはヨアヒムに向けて、アンゼリカは肩をすくめながらそれぞれ告げる。お前はお呼びじゃないんだと。

「き、貴様らしく、ええい、私に対してそこまでの口を叩いたのだ覚悟を出来て居るだろうな！ 名を名乗れ!!!」

「アンゼリカ・ログナー、哀れ実家に無理やり婿取りをさせられそうになったので半ば強引にモラトリアムの延長でここトールズへと入学した勘当寸前の放蕩娘さ」

「リイン・オズボーン。一応貴族ではあるものの、俺も父も心は平民のままのつもりなので貴族同士の交流などには誘ってくれなくて一切結構」

ログナーとオズボーン、その名が聞こえた瞬間に周囲にどよめきが走る。「ログナーって言えばあの四大名門の……リッテンハイムよりも格上じゃないか」「それよりもオズボーンってあの鉄血宰相の息子って事かよ」「でもオズボーン宰相は平民出身だろ？ それだったらなんであいつは貴族生徒扱いなんだよ」「馬鹿、知らねえのかよ。オズボーン宰相は皇帝陛下から伯爵位を賜っているんだよ。だけど殊更自分は平民だって強調しているみたいだぜ」「ああ、だからアイツも心は平民のままだなんて言ったのか」

そんな風に周囲にヒソヒソと話し声が飛び交い始める、この時点でリイン・オズボーンの波乱なく平穏に波風立えずに過ごすといった学生生活は望めなくなったと言っていていいだろう。最もリインには端からそんな学生生活を送る気は毛頭なかったのだが……

「口、ログナーだと……」

「ああ、やっぱりそういう反応になるか……さつきも言ったけど勘当

寸前の不良娘だから気にしないで欲しいんだけどね」

権威を頼みにするのは往々にして自分以上の権威には弱いものである、四大名門を敵に回してしまったという事実によアヒムは見るからに狼狽の色を見せる。だがアンゼリカとしてはそんな扱いが不本意なのだろう、精一杯ヨアヒム以外の貴族や平民生徒へと語りかける。どうか気さくにただの同級生として接して欲しいといわんばかりに

「それにオズボーンだと……つまり貴様の父はあの鉄血宰相か」

「ああ、俺の父はギリアス・オズボーン。この国の宰相を務めている。もつともそれは父の地位と功績であって俺自身は未だ何かを為したわけでも無い、一介の学院生にすぎない。どこかの誰かさんとは違って父の七光りを借りる気は毛頭無いので、気軽に接して欲しい」

打って変って敵意を露にするヨアヒムにリインもまた応じる、アンゼリカ同様にヨアヒムではなくそれ以外の周囲に対して。

「ふん、なるほど、理解したよ。成り上がりもののあの宰相の息子ともなれば仲良く平民と戯れているのがお似合いだ。ログナー殿、おそらく貴殿はこの男に毒されたのだろう、今からでも遅くない貴族として在るべき姿に立ち返るべきだ」

四大名門に喧嘩を売ることを避けたいのだろう、ヨアヒムはリインへとターゲットを絞りそんな言葉を口にする。そんなヨアヒムに呆れた様子でアンゼリカが応じようとする

「君たち！ 何時まで喋っている！ もう間もなく式の時間だぞ！

いい加減席に着きたまえ!!! それと互いに相手を無用に挑発する言動は避けるように!!!」

貴族生徒を受け持っているハインリツヒ教頭の雷が落ちて、不承不承と言った様子、小言を受け流すかのようになり、糞真面目に謝罪の言葉を口にしながらと各々異なる反応を示しながら席につくのであった。

「しかしびつくりしたねえ、クロウ。あの鉄血宰相の息子さんだつて

さ」

道すがら友人となった同級生のジョルジュ・ノームの言葉にクロウは応じる

「はは、なんとというか如何にもって感じの野郎だったな。絵に描いたような堅物エリートって感じじゃねえか。遣り合っていたリツテンハイムの方も如何にもって感じの貴族の馬鹿殿だったけどよ」

不真面目でノリのいい大よそ士官学院生らしからぬ気さくな男、そんな仮面を被りながら。

(あの野郎の息子……か)

調査して知ってはいた、11年前に妻を失ったギリアス・オズボーンには一人息子がいたという、そして宰相に就いたオズボーンは程なくして軍人時代に直属の部下であったオーラフ・クレイグへとその子どもを託した。

大貴族との政争にあけくれる以上、息子の存在が足枷になる事を嫌ったとも、赤毛のクレイグを完全に自分の派閥へと取り込むためだったなどと様々な推測がされたが真意は本人にしかわからない。

その息子について判明しているのはオズボーンが軍人となるために最高の環境を用意したという事。氷の乙女との異名を持つ鉄道憲兵隊大尉クレア・リーヴェルト、かかし男レクター・アランドール特務大尉と言った鉄血の子ども達と称される自身の腹心達を教師とした軍人、あるいは自身の後継者として英才教育を施す傍らで、帝都に存在するヴァンダールの剣術道場へと通わせた。言うなれば真の鉄血の子とも言うべき秘蔵っ子、それがリイン・オズボーンである。
(ま、せいぜい遠くから観察させてもらうとするかね)

向こうは貴族生徒、こちらは平民生徒。

向こうは若干挑発的な部分はあるけど絵に描いたような優等生、こちら絵に描いたような不良生徒。

まず間違いなく、親しくなるような事をないだろう。

そうして遠目から観察してあの野郎の弱点でも探れば良し、そんな風に考えながら

帝国解放戦線のリーダー《C》は仇への復讐を改めて誓い、暗い瞳

を湛えるのであった……

鉄血の子の幼少期

「オーラフおじさん、僕、お父さんにとって要らない子なのかな……僕がいると邪魔なのかな……」

それはリン・オズボーンがクレイグ家に引き取られて間もない頃の話、今日から私たちも君の家族だと暖かい笑みを浮かべながら告げる家長オーラフ、フィオナお姉ちゃって呼んでねと優しく告げる長女フィオナ、えつとよろしくね、リン君と戸惑いながらも仲良くなれば良いなど願いながら告げる長男エリオットらの前でリンはポツリとそんな言葉を溢していた。

無理も無い話だ、愛するたった一人の母を失った直後に唯一残された父は、部下であるオーラフ・クレイグに預けて以後、生死の境をさまよう重傷を負ったその5歳の息子のところに姿さえ見せなかったのだから。

自分は捨てられたのだと、そう5歳の少年が思ってしまったところで一体誰が責められようか。

だがそんなリンの心配に対してオーラフは優しく首を振りながら、ポンとその頭に手を置いて

「そうではない、そうではないぞリン君。君のお父さんは決して君が邪魔だから私のところに預けたのではない、むしろその逆。君が大事だからこそ、君を守るためにウチに托してくれたのだよ」

「僕を守るため？」

視線をしっかりと合わせながら優しく微笑みながらそう告げるオーラフの姿にリンはかつて「お前は私の自慢の息子だよ、リン」と告げながら優しく頭を撫でてくれた父ギリアスの姿を重ねながらそんな風に応えていた

「ああ、君のお父さんはもう二度と君や君のお母さんのような目に合う人が出ないようにするために悪い奴らと戦う道を選んだんだ。だが、そのせいで悪い奴らに君が狙われかねない。そうしてそうだった時に今度は君を守りきれず、君が死んでしまうかもしれない。そんな未来を避けるために私のところに預けたのさ」

それは子ども相手だからという理由で世の中を善と悪に単純化した話し方ではあった。人間同士の争いにおいて絶対的に正しい側と絶対的に悪い側というのはそうそう存在しない。自分達改革派と争っている貴族とて守るべき領民の生活などを背負っている。中には今回の凶行を起こしたような者もいるが、それは改革派とて同じこと。皆が皆清廉潔白というわけではないし、貴族派にとて祖国の先を心より案じている者もいる。

改革派と貴族派の争いというのは平民と貴族の争いであると同時に中央と地方の対立でもあるのだから。予算という取り分けるためのパイが限られている以上、その切り分け方で泣く人間はどうしても出てくる、それが国家であり社会であるのだから。

だがそういった事情を学ぶのはもつと大人になつてからでも良い、今日の前で傷ついた少年に必要なのはそんな小難しい話ではないのだから、とオーラフは考えて続けていく

「君のお父さんは君の事を捨てるような人だったかい？」

オーラフにとつて敬愛する上官であるギリアス・オズボーンは心から我が子を愛していた。それこそオーラフがエリオットとフィオナを愛するのと同様に。……どちらの息子が可愛いかで競い合う帝国軍の未来を担う二人の部下の様子に、ヴァンダイク元帥等は呆れた様子を見せていたものだった。

「ううん、僕が良い子にしているといつも優しく頭を撫でながら「お前は私達の自慢の息子だ」って褒めてくれた」

そう応えるラインの様子にオーラフは優しく微笑みながら続ける「きつといつか、ギリアス閣下は君を迎えに来るはずだ。だからその時にお父さんに胸を張ってどういう風に過ごしていたかを報告できるように何時までも泣いていないで、元気に過ごさないと駄目だぞ」「うん！ 僕が良い子にしていたらお父さん、早く迎えに来てくれるかな」

そうして、ようやく笑顔を見せた新しい息子の姿にオーラフはああ、お父さんもその日を楽しみにしているはずだと優しく告げるのだった……

それから程なくして自分を暖かく迎えてくれたクレイグの家にリインは瞬く間に溶け込んだ。それこそ本当の家族であるかのよう
に暖かく包み込むクレイグの人達をリインはすぐに大好きになり、自
分と同じ位の年齢であるエリオットと親友と呼べる関係になるのも、
オーラフの事をオーラフ父さんと呼ぶようになるのにも、フィオナの
事をフィオナ姉さんと呼ぶようになるのにもそう時間はかからな
かった。……なお、リインが二人の事を父さん、姉さんと呼んだ日は
クレイグ家においてそれぞれ記念日となっている。

リインとしては幼少期ならばともかく、思春期となって以降は正直
色々キツイので辞めてほしいと思つて居るのだが、そうやって告げ
ると二人揃つて「うおおおおお、なぜだリインよおおお、リインは
父の事を嫌いになったのかああああ」「クスン……私じやリインちゃ
んに勉強を教えたり出来ないものね……クレアさんにお姉ちゃん
の座を取られちゃうんだわ……」などと泣き出すために毎年その日にな
るとリインは乾いた笑いを浮かべる親友を他所に遠い目をしながら
二人にされるがままとなるのであった。

「リインが来てくれて本当に良かったよ、もしも僕一人だったらコレ
が全部僕だけに向かつていただろうし」とはその親友のコメントであ
る。

「……親友よ、それは友に対する言葉ではなくスケープゴートへと向
ける感想ではないのか？」とはそんな親友のコメントに対して返した
リインの言葉である。

これを聞いたエリオットはにこやかな笑顔を浮かべた後黙つて視
線を逸らしたと言う。

とにもかくにもそんな幸せな幼少期を送りながらも二人の父に憧
れるリインは軍人となるべく、努力を重ねた。努力を重ねたと言つて
も子どもである以上、本格的な訓練などをして成長を阻害するため
に日曜学校での勉強を頑張る、良く身体を動かして好き嫌いをせずに
食べる、いじめっ子がいればそれに立ち向かつていじめられている子
を助ける、困っている人がいれば親切にすると言った、子どもらしく

微笑ましい努力ではあったが、その甲斐あつてと言うべきか日曜学校、及び近所でのリイン少年は正義感が強く、とても優しく親切な良い子と評判であった。

そんなリインに転機が訪れたのは彼が10歳の誕生日を迎えた時であつた……

「久しいなリイン、我が息子よ」

帰宅してきた父オーラフをリインが出迎えるとそこには5年ぶりに見る、父ギリアスの姿があつた。

「今日で10歳になるわけだが、壮健そうで何よりだ、感謝するオーラフ。君に預けた私の判断はどうやら間違つていなかったようだ」

「恐縮です閣下、私にとつてもはやリインはもう一人の息子です。いざ閣下に返して欲しいと言われる時が来てもその時は閣下と一戦を辞さない覚悟ですぞ」

豪快な笑みを浮かべながらそんな事を告げるオーラフにオズボーンはそうかとだけ告げる。そんな二人の様子を見ながらリインはただただ混乱していた。予期せぬ父との再会、自分の誕生日を父は覚えていてくれたのだという事実嬉しさが心を満たす。

言いたいこと伝えたいことが山ほどある、それを告げてまた昔のように優しく頭を撫でてほしい。「良く頑張った、流石は私たちの息子だ」と自慢の息子なのだと褒めて欲しい。そんな想いが心を満たすが、リインは興奮のあまりに何も言う事が出来ない。そんなわが子の様子を見てオズボーンは……

「さてリインよ、お前はかつて私にこう言っていたな。将来はこの父のように軍人になるのだ、と」

どこか試すような口調でそう口にする父にリインは一瞬呆気にとられるが

「その思い、今でも変わつてはいないか？」

そんな父の問いかけにリインは弾かれるように勢い良く答えていた

「はい！ 僕の……俺の夢はあの時から変わっていません！ 父さんとオーラフ父さんのように立派な軍人になってこの国とそこに住む

たくさんの人達を守れるようになりたいんです！」

そして貴方の、父さんのお役に立ちたいんです、と今まさしくただの子どもであった自分と決別するかのようになりイン・オズボーンは尊敬する父にそう宣誓していた。

「そうか、ならばお前には軍人になるに辺り最高の環境を用意してやろう。子の夢を応援するのは父として当然の事なのだから、それが私からのお前に対する5年分の誕生日プレゼントだ」

そう告げて去っていくオズボーンを見送りながらリインは歓喜に打ち震えていた。父が自分の夢をちゃんと覚えていてくれたこと、そしてその夢を応援するのだと言ってくれたその事実涙を流しながら父の期待に恥じないように一層努力する事を誓った。

軍人になりたいかと問いかけた父の言葉の中に我が子に対する思いと同時に、まるでこの駒は使い物になるのかと見定めるかのような不穏な陰を一瞬感じた事を心の奥底に沈めながら……

帝都に存在するヴァンダールの道場に対する紹介状を携えて、「閣下から貴方に勉強を教えるように頼まれました、よろしく願いしますねリイン君」と微笑みながらトールズ士官学院の学生であるクレア・リーヴェルトがリインの下を訪ねてきたのはそれからすぐの事であった……

鉄血の子と教官達

リイン・オズボーンの朝は早い。

ヴァンダールの剣術道場での早朝稽古に通うようになり、リインの身体に染み付いた正確な体内時計は目覚ましなしでその眼を覚まさせる。起床と同時に身支度を整えたリインは日課である鍛錬を始める、未だ中伝で武の至境ははるか遠く。立ち止まっている暇など自分にはないのだと言わんばかりに朝食の時間まで存分に汗を流す。

鍛錬を終えると他の起きてきた貴族生徒らと共に朝食をしつかりと取る、味、量、栄養バランスそれら全てが考えられている事が伝わる食事を毎日考え作ってくれている学生寮の管理人達には全く持つて頭が上がらない。作ってくれたメイド達に感謝の言葉を述べ、軽い準備を終えると友人であるアンゼリカと共に登校。今日もトールズでの一日が始まる。

リインの席は教壇の真前、本来なら誰も座りたがらないであろうこの席をリインは真っ先に希望した、授業中の態度は真剣そのもの。トールズ士官学院は皇族の男児が通うこととなっている名門中の名門、当然ながらそこに務める教官たちは帝国において屈指と言えるだけの優秀な教官が揃っている。一言一句聞き漏らすことすら惜しいとばかりに授業へと集中する。

授業の合間に時折リッテンハイムとその取り巻き達がちよっかいをかけてくるが、軽くあしらう。言っている内容もなら独創性や新鮮味の無いものなので、リインにしてみるともはや関わる時間が勿体無い手合いである。成り上がりだの、文化と伝統を心得ない野蛮人などと言われても自分と父が社会的には貴族であることにむしろ不満を抱いており、芸術方面に対してほとんど関心のないリインにしてみればなんら痛痒を覚えないものであった。

アンゼリカを始めとする一部以外のリッテンハイムの怒りを買うことを恐れた他の貴族生徒にも遠巻きにされてはいるが、そのあたりもリインにしてみればトールズに入ると決めた時から覚悟していた事である。自分がギリアス・オズボーンの息子でありながらも、貴族

クラスに所属することとなるとわかっていた時からこうなる事は覚悟の上だったのだから……

そうして授業が終り放課後になるとリインは一目散に教官室へと向かう。授業で発生した疑問点を教官へと質問するためだ。リイン・オズボーンは次席入学の優等生である、彼が同世代の中で一際優秀である事は疑いようの無い事実である。だがリインは秀才ではあるものの一を聞いて十を知れる天才というわけではない、彼が非凡と言える才を有しているのは主に軍事や剣術といった分野のみでありそれ以外に関しての彼の成績は大よそ彼自身の努力と優秀な教師からの薫陶の賜物である。当然トールズの高度な授業を受けていれば不明点の一つや二つは出てくる、それを解消するための行動であった。

「失礼致します、ハインリツヒ教官殿。本日の講義において不明な点がいくつかあったのですが、質問させていただいてよろしいでしょうか？」

ピシリと綺麗な敬礼を行いリインは教官室へと入室する。通常の士官学校であれば当然の光景だが、色々とその辺が緩いこのトールズにおいてはそうは見ない、綺麗な姿勢での敬礼であった。

「ふむ、何かねオズボーン君」

神経質そうな表情を浮かべハインリツヒ教官はこれに答える。入学式の一件で当初こそリインを快く思ってた居なかった彼だが、入学からの数週間でリインの糞真面目さが良くなったのだろう、規律を尊ぶ彼としては向上心に溢れ、こうして目上への礼儀正しさを伴っているリインは徐々に気に入りになりつつあった。

「は、本日の講義の資料のこの記述についてなのですが」

「ふむ、それについてならばより詳細な記述がされた資料がこちらにあるのだが」

熱心に質問を行なうリインとその質問に答えるハインリツヒ教頭、粗方説明をしておえるとハインリツヒ教頭は何かを思案するようにメモに数冊の本の題名を書いてそのメモをリインへと手渡ししながら告げる

「若干授業の範囲からは外れているが、より広範かつ詳細に知りたい

というのならここに記した本を図書館で借りてよく読みたまえ。その上でわからないことがあったらまた質問に来たまえ」

「は、貴重なお時間どうもありがとうございます！」

そうしてピシリと入室時同様、敬礼を行い退室するとリインはその場を跡にした。

そうしてリインが立ち去ると不良教師であるマカロフは肩をすくめながら他の教官達へと話しかけた

「やれやれ相も変わらず熱心だねえオズボーンは、あれだけ糞真面目なら教頭としてもさぞお気に入りになんじゃないですか？」

「お気に入りになどと、私がえこひいきをしているかのようにとられかねない事を言われるのは心外だなマカロフ君。私が口うるさくしているのも全てはその生徒の未来を思つて事、誓つて私は生徒を差別するような真似はしていない」

ジロリと睨みながら厳格な口調でハインリツヒがそう告げるとマカロフはすいませんね、そういうつもりじゃなかったんですよと謝罪を述べる

「……だがまあ彼が他の模範となるに相応しい生徒であるという点に關しては私も同意見だ、アレで貴族生徒に対する若干挑発的な部分が鳴りを潜めれば私としてもいいう事は無い」

「まあそれに関してはどうかがない部分もあるでしょ、なんたつてあのオズボーン宰相閣下のご子息だ。彼が大人しくしていたところで他の貴族生徒が放っておかない」

「そうですね〜それに彼自身も別に貴族だからという理由で誰彼構わずに喧嘩売つていっているというわけではないですし、その程度は愛嬌という奴じゃないでしょうか」

なんだかんだで向上心の強い素直で真面目な生徒を嫌う教官というのはいない、リインの教官陣からの評価は基本的に高かった

「でも、私としては少し皆さんが羨ましいですよ。あんなにも熱心な生徒だなんて教師冥利に尽きるじゃないですか」

自分一人だけ他の教官と違いリインが質問に来てくれていない事を若干気にしているのだろう、芸術科目を受け持つメアリー教官はど

こか羨望の色を覗かせる。

「おや、オズボーン君はどの授業でも真面目かつ熱心に受けていると思っただけですがメアリー教官の時だけ違うのですか？」

どこかとぼけたような雰囲気のある眼鏡をかけた男性、トマス教官がそう応じる

「不真面目……というわけではないんです。授業自体は真面目に受けていますし……ただなんと言いますか、義務だから仕方がなくやっているというか、あんまりやっていて楽しそうにしていけないですよね……」

少なくとも先ほどまでハイソリツヒ相手に行なっていたような授業の範囲外だろうとお構いなしに貪欲にかつ熱心なラインの様子をメアリーは自分の受け持つ教科で見たことがなかった。意識的にか無意識的にかはわからないが、既に自分の歩む道は決まっています。その道を歩いていくに当たってこれは然程重要なものではない、とても想っているかのよう。

メアリーとしてはそれが少々気にかかる、目標があるのは良い事だ、それに向かって努力していることもなんら非難されるようなものではない。ただその道を歩くだけが人生ではない、もっと色んな可能性がある事を知ってほしいのだ。まるで今歩んでいる道から外れた時点で、理想から外れたしまった時点で自分に価値など無いのだといわんばかりのラインの態度、そこに一抹の不安を覚えざるを得ない。「真面目なのは良いことなんですが、少しだけ心配になりますねえ。ああいうほとんど転んだりした事が無くて、全速力で一本道を駆け抜けるような子はいざ転んだ時に大怪我を負ったり、あるいはその道の先が崖である事に気づいてもそのまま止まれずに転落してしまったりするものですから」

若い頃の挫折の経験、失敗の経験というのは大事である。そういった経験を一度味わっていれば必然そこからの立ち直り方も知っているものだからだ。挫折知らずのエリートがたった一度のミスでそのまま転落してしまってしまうというのは良く聞く話だし、トマス自身もそういう生徒を今まで何人か見てきたのだろう。そんな挫折知らず

のエリートを心配する言葉を吐いていた。

「ま、その辺はこの学院生活の間で色々と変わることには期待するとしましようや。なんとと言ってもまだまだ入学したての一年生だ。これから先いくらでも成長の機会はありますって」

地方出身、中央出身、貴族出身、平民出身、軍人志望に官僚志望、あるいはそういった国家の仕事に携らず民間に就職するもの。ツールズ士官学院は幅広い人材を集めて輩出している、そして若者を成長させるのは大人の導きだけでなく、同年代の友との交流が一番だ。

そんな互いに刺激しあって視野を広げてくれる友人がラインにも出来ることを若獅子達を見守る大人は祈るのであった……

鉄血の子と氷の乙女

「これからよろしくお願いします、クレア先生！」

恩人である閣下から閣下のご子息であるリイン・オズボーン君の勉強を見て欲しいと言われて彼の元を訪れた私を迎えたのは、そんな満面の笑みを浮かべながら元氣一杯の挨拶をするちやうど死んだ弟と同じ位の年齢の少年の姿だった。

いけないとわかっているのに……彼は、リイン君はエミルの代わりなどではないのだとわかっているのに私はどうしてもその笑顔に、寶石のようだったあのこの笑顔を重ねずには居られなくて……

「クレア先生……その、先生が良かったらクレア姉さんって呼んでもいいかな？俺にとってはもう一人のお姉さんみたいだなんて思ってた……」

はにかみながらそんな事を彼が告げるものだから。ますます私は彼を弟のように思ってしまった

「クレア姉さん！卒業おめでとう、実は姉さんに渡したいものがあるんだ!!!」

そういつて彼は私にとってはエミルとの大切な思い出の品でもあるオルゴールを卒業祝いだと言って手渡ししてくれる

「姉さん！鉄道憲兵隊での仕事はどんな感じなの？俺も将来は姉さんみたいに父さんから頼られるような立派な軍人になりたいんだ！」

真つ直ぐな瞳でそんな風に言ってくる彼の言葉に私は居た堪れない気持ちになる。私はそんな風にこの子の尊敬に値するような人間ではないのに……

「姉さん、何か困ったことがあったら相談してね。今の俺じゃ頼りにならないかもしれないけど、少しでも姉さんの力になりたいんだ」

職務上のトラブルで私が落ち込んでいた時にはそんな風に優しく声をかけてくれて……

「姉さん、今までありがとう。ツールズに合格できたのも皆姉さんの、クレア先生のおかげです。本当にありがとうございました」

ツールズの制服に身を包んで、そんな事を告げる彼に

終わってしまったのかと名残惜しさを覚えながらも単立つ彼の姿を私は笑顔で送り出したのだった……

「クレア姉さん！忙しいのにわざわざ来てくれてありがとう!!!」

おそらく今のリインを士官学院での絵に描いたような優等生としての彼しか知らない同級生が見れば驚くだろう。

普段の強い意志を瞳に宿し、どこか不敵な印象を漂わす鉄血の子の姿はそこにはなく、あるのはどこまでも年相応の、大好きな姉に会えた事を心の底より喜び、満面の笑顔を浮かべるリイン・オズボーンの姿であった。

「リインさんの方こそせっつかくの自由行動日だというのに良かったんですか？お友達と遊んだりせずになんかを優先してしまって」

どこか申し訳なさそうにしかし、それ以上に自らもリインと会えた事を喜んでいる様子で鉄道憲兵隊大尉クレア・リーヴェルトは告げる「トワやアンゼリカ達とは普段の学生生活で何時でも会えるし、姉さんがたまにしかない休みでわざわざ来てくれるっていうんだもの、姉さんを優先させるよ」

優しく綺麗で自分に勉強を教えてくれたクレア姉さん。10歳の頃に父の紹介で訪ねて来て最初は先生と呼んでいたが、何時しかフィオナ姉さんと同様にもう一人の姉のように思い、クレア姉さんとそう呼ぶようになるのにはそんなに時間がかからなかった。

単に勉強を教えるのだけでなく、勉強することそのものが楽しいと感じるような丁寧で優しく教えてくれ、トールズ卒業後は父からの信頼を受けて優秀な軍人としてその手腕を振るうクレアはリインにとって憧れの存在であった。

そうしてそんな心からの親愛を込めた笑みを見せながら告げるリインの姿に一瞬クレアはいけないとわかつているのに、どうしても死んでしまった弟の面影を見てしまって……もしも弟が生きていればこんな風に一緒に時を過ごしたのだろうかと呼も無い想像をしてしまっ……

「姉さん?どうしたの、やっぱり仕事が忙しいのに無理して来たんじゃない?」

そんなクレアの一瞬陰が落ちたような表情をリインは察したのだろう、姉に無理をさせたのではないかと心配する

「……………めんなさい、何でもありません。少し、仕事で気になる事があつただけです。ええ、なのでリインさんに気分転換をさせてもらえればと思います」

そういつてすぐにクレアは心からの笑みを浮かべて先ほど感じた思いをかき消す。そう、こんなことは死んだ弟にも目の前の少年に対しても失礼極まりない事なのだから。目の前の少年は断じて死んだ弟の代わりなどではないのだから

「そっか、それじゃ案内させてもらおうよ、といつても2年間此処で過ごした姉さんの方が住んでからまだ一ヶ月も経つていない俺よりも詳しいだろうけどね」

そうして7つ年の離れた姉弟はツールズへの道のりを歩んでいくのであつた……

「アレ、あそこを歩いているのつてオズボーンじゃねえか?……………つてうわ、なんだよ隣で仲良さそうに歩いている綺麗なお姉さんは!」

「見るからに親しげだな……………髪の色とかは全然違うから姉弟つて感じでもなさそうだし、あの野郎、堅物真面目君だと思つていたらあんな綺麗なお姉さんが恋人に居たのかよ」

父親は宰相閣下で自分は士官学校次席の優等生でおまけに美人の恋人もいるとかさぞ人生楽しいんだろうなあと羨望と嫉妬の混じつた声を喫茶キルシエのテラスに陣取り、仲良く歩く二人を偶然目撃したリインの同級生達が呟く

「いや、ある意味では姉弟つて言つていいんじゃないかな。お前らも聞いた事があるだろ、アイス・メイデン^水_乙。鉄血の子達と呼ばれる鉄血宰相の腹心達、その中の一人だろあの綺麗な姉ちゃんは」

友人達と共に陣取つていたクロウはそんな風に呟く

「ああ、なるほど。それで上司の息子の様子を見に来たつてわけか」

「貴族共に虐められたりしていないかどうかとかか？現状虐められるどころかアイツの方が貴族共を叩きのめしているって感じだけだな」
「アイツを良く思っていない貴族生徒達が集団でリンチにしようとしたのにオズボーンの奴一人に逆に返り討ちにされてボコボコにされたって話だろ。アイツ、マジで強いんだな」

「何でもヴァンダール流の道場にガキの頃から通っていたって話だぜ、あの年で中伝だよ」

「はーそんなでもって次席入学者だろ、なんつーかやっぱり住む世界が違うって感じだよなー同じ学院生って言ってもよ」

「ま、遠くから見ると貴族共をボコボコにしている結構爽快だしよ、陰ながら応援するとしようぜ。宰相閣下共々俺たち平民の味方みたいだしよ」

そんな風に談笑する友人二人を他所にクロウは真剣な眼で歩いていく二人を観察していた

(なるほど、ずいぶんと仲が良さそうな事で)

少なくとも氷の乙女のライン・オズボーンへと向ける感情はただの上司の子どもという次元ではない、それこそまるで互いに本当の姉弟のようなではないかと錯覚する程だ。

(もしもの時は何らかのカードになるかもしれないねえな)

おそらくライン・オズボーンに何かあった時、例えば彼が命の危機にさらされた時でも訪れれば、おそらく氷の乙女は平静さを失うであろう。

無論だからといって奴を人質に取るだとかそんな短絡的な事を考えているわけではない。だが知っておけば何らかの形で役立つかもしれない、情報とはそういうものだ。

(やっぱり此処に入って正解だったみたいだな)

リスク自体はあったがそれでもやはり得るものが多い。そんな風に考えながら仮面の奥でクロウは暗い策謀を巡らせる

「それにしてもクロウ、お前良く知っていたな」

「ああ、前になんかの雑誌で見てな。えらい美人な姉ちゃんだから覚えていたんだよ」

周囲にいる学友達には決して本音を見せないようにお調子者な三枚目という仮面を被りながら……

「ご無沙汰しております、元帥閣下」

「おお、リーヴェルト君ではないか。久しぶりだな、軍に入ってから君の話は聞いているよ、学院長として私も鼻が高い」

「恐縮です」

OGとして恩師へと挨拶を行なうクレアの傍らでリインは尊敬する学院長へと失礼のないように直立不動の状態で待機する。そうして一通り挨拶を終え、学院長室を離れると校内を巡っていく、クレアは学生時代を懐かしみながら、リインは姉に学生時代の思い出話を聞きながら

「ところでリインさんは部活動は何にされましたか？」

校内を探索している途中でグラウンドで活動している馬術部やラクロス部の光景が眼に映り、ふと思ったのだろう、クレアはリインへとそんな問いかけを投げかけていた。部活動それは他の士官学院には無いトールズの特徴で文化系から運動系までその幅は広い

「リインさんは運動神経が良いですから体育会系なら当然何でも出来るでしょうし、あるいはそれこそ文化系や芸術系なんてものに挑戦してみるのも案外悪くないかもしれませんね」

ニコリと微笑みながら告げる姉の姿にリインは、彼にしては大変珍しい、というかこれまでそんな事は一度も存在しなかったのだが、まるで宿題を忘れたのを誤魔化すかのように気まずそうな顔をして……

「いや……部活動は特に決めて無いんだ……その、どうしても運動系ならその時間を剣の修練に当てた方がいいと思うし、かといって文化系や芸術系にはそれこそ興味自体が全然湧かないっていうか……せっかく帝国でも屈指の教官達に囲まれて豊富な資料が存在する図書館があるんだから、それこそ勉強したほうが有意義かななんて思っ……もう、入らなくても良いというかむしろ部活をやっている時間すら惜しいかなあ……」

そんなリインの様子にクレアは頭を抱える。真面目な子だと思っ
ていたし、そんなところに自分も好感は抱いていた。だがそれにして
もこれはあまりに真面目すぎる、自分自身もレクター等はその辺を
指摘されていた彼女だが、その彼女をしてリインの生真面目さは想像
を超えるものであった。

「何か、興味があるものはないんですか？例えば、エリオットさんや
フィオナさんの演奏を聞くのはリインさんもお好きでしたよね？」

自分との勉強の合間の休憩時間、お茶を飲みながら姉弟の演奏を聞
くときのリインは幸せそうにしていた、だからこそてつきりリインは
そういった芸術分野にも興味自体はあるのだとクレアは考えていた
のだが……

「アレは合間の休憩時間に聞くから良いのであって、わざわざそれに
時間を注ごうって程にはなれないかなあ。もちろんエリオットがプ
ロの演奏家にならなくても、その時は親友として喜んで演奏を聞かせ
てもらおうつもりだけど。それにしたって聴くのと実際に演奏するの
じゃ全く別物だろうし……」

「フェンシングというのは？リインさんは剣術にはかなり関心を持た
れていましたよね？」

「皆伝ならともかく、まだ中伝の身で他の流派を学ぼうだなんておこ
がましいよ。二兎を追うもの一兎も得ずと言うし」
「……………」

その後もいくつか部活の候補を挙げてみるが、とりつく余地はな
し。決して全く部活に興味がないというわけではないのだろう、文化
系や芸術系に関してはそのような感じだったが、馬術部と水泳部辺り等は
それなりに興味がある様子だった。だが剣術の鍛錬と勉強の方が、よ
り優先度が高いとでも言わんばかりの態度で入部しようとするまでには
至らない様子であった。

「部活動っていうのは己をより高めるために行なう事でしょ姉さん。
遊び呆けている奴ならともかく、俺はいつも一日がもつと長ければ良
いのだと思いつながら勉強と鍛錬に打ち込んでいるからその辺は大丈
夫だよ」

「それはまあその通りではあるんですが……」

10歳の頃から他の子どもが遊ぶ傍らで英才教育を受けて一つの道を全速力で駆け抜けている弊害とでも言うべきだろうか、リイン・オズボーンはあまりに遊び心が無さ過ぎる。真面目すぎると常々部下やレクターから言われているクレアにこう思われる位なのだから、もはやこれは一種の強迫観念とでも言うべきものだろう。

リイン自身が努力家であり、夢を叶える為ならばあらゆる労苦も惜しくないと思っっているのは確かである。彼がそうしている理由全てがそうと言うわけではない、だが同時に誰かを失望させる事を極度に恐れている、そんな本人でさえ無自覚であろう感情に長い付き合いとなるクレアは気づいた。

このままではいけない、やはり彼はもつと同世代の多様な人間との付き合いを持って、軍人としての生き方以外の幅広い選択肢を知ったほうが良い、そうクレアは弟の行く末を心から案じてどう説得するかその頭脳をフル稼働させ始めると……

「うんしょ、うんしょ」

図書館から大量の資料をその小さな身体で抱えながら運んでいるとある女子生徒が眼に映った

「トワ、手伝うぞ。半分俺が持とう」

リインも気づいたのだろう、そうするのが当然だと言わんばかりにすぐさま手伝いを申し出していた。

「わわわ、リイン君。い、良いよ。この位一人で平気だよ」

「汗を滲ませながらそんな必死そうに運んでいても説得力がないぞ。良いから素直に頼っておけって」

笑みを浮かべながらそう告げるリインの姿には先ほどまでのどこか危うさを感じさせる様子はなかった。そこに居るのはどこまでも真つ直ぐで親切などこか若干の子どもっぽさを覗かせる、年相応の好青年。そんな姿であった。

(なるほど、彼女が手紙にも書かれていたトワ・ハーシエルさんですか)

リインからの手紙、彼女はその手紙をとてても大事に保管している、

に書かれていた士官学院で出来たアンゼリカ・ログナーとトワ・ハーシエルという二人の友人の事。そこに記されていた少女の事だろうとクレアは把握した。

前者に関しては大貴族なのにこちらを見下すような尊大さはまるでなく、むしろその天真爛漫な生き方に蒙を啓かれる部分があったこと、後者に関してはとても真面目で優しく、首席を奪われたことに対する悔しさを若干覗かせながらも、どちらもすばらしい友人であると本人達が書かれている内容を知れば居た堪れない気分になるであろう事が書かれていた。

こうして実物を見てみると、なるほど確かに放っておけずに手を貸してあげたくなるような子だとクレアは苦笑して

「そういう事でしたら私も手伝わせていただきます。一人よりも二人、二人よりも三人ですから」

「えっと貴方はもしかして、リイン君が何度か話してくれた……」

「私はクレア・リーヴェルトと言います、よろしくお願いしますね。トワ・ハーシエルさん」

「すみません、わざわざ見送りにまで来て頂いて……」

「何言っているんだよ姉さん、この位当然の事だよ」

「そうですよ、せつかくの休暇なのに生徒会のお仕事まで手伝って頂いちゃいましたし……」

あの後資料を運び終えて、その膨大な資料との格闘を始めようとするトワ相手にリインは気が付けばそうするのが自然かのようにそのまま手伝いを申し出ていた。

そこまでさせるのは悪いと渋るトワ相手に、気づけばリインは

「実は俺まだどこの部活動にするのか決めて無くてさ、生徒会にするってのも悪くないかなって思ってるんだよ。会長や副会長の先輩達にはまた明日正式に申し出るつもりだけど、良ければお試して事で今日はトワの手伝いをさせて貰えないかな？」

等と申し出ていて

「そういう事でしたら私も手伝わせてください。これでも学生時代は

生徒会長を務めていましたからきつと力になれると思いますよ」

とクレアの方はクレアの方で柔和な笑顔を浮かべ、かくして首席と次席の二人は現役 of 鉄道憲兵隊大尉の指導を受けるといふなんとも贅沢な体験をしながら、今週中に終えてくれれば良いと会長より伝えられていた仕事をわずか一日で終えたのであった……

「ふふふ、どうか気にしないで下さい。私としてはリインさんが自分に合った課外活動が見つかったみたいでホッとしていますから」

リインが年相応の少年として振舞うような友人が確かに居た事にクレアは安堵する。

「でも本当に良かったのリイン君？生徒会に決めて、リイン君は色々忙しそうだし無理にそうする必要は無いんだよ」

わたしとしてはリイン君と一緒に活動出来るのは嬉しいけどなどと告げるトワに対して、リインは柔和な笑顔を浮かべて

「ああ、今日一日やってみただけで存外悪くなさそうでき。聞いた話だと生徒や街の人達の相談に乗る遊撃士のような事もするんだろ、そういうのはそんなに嫌いじゃないしね」

そんな風に告げた後にどこか照れくさそうにリインは頬を掻きながら

「それに、みんなのためにとって頑張っているトワの姿を見ていたらコレは自分のためになりそうだし、これは自分のためにならなそうだななんて考えていた自分がとてつもなくちっぽけな奴に思えてきてさ。今、誰かのために働いてもいない奴が将来は皆を護る軍人になるだとか宣言してもお寒いだけだと思ってたのさ」

そこには父の期待に応えるための軍人になるのだと、ならねばならぬのだと思っているどこか危うさを感じさせるエリート of 姿は無く、どこまでも年相応の優しく真つ直ぐな少年の姿があった。

「わ、私はそんな大層な人間じゃないよ。ただ少しでも頑張っているみんなのサポートが出来たらいいなあって思っただけで……」

お世辞の成分などが一切含まれて居ない、どこまでも真つ直ぐに紛れも無い本心からの言葉だとわかるからこそ、そんなリインからの賞賛にトワは照れくさそうにする

「そうやって自然に思えているのが凄いいことだよ。君のおかげで俺はどうしても俺は軍人になりたいって思ったのか、その初心に立ち返れたんだから」

そんなリインの言葉にトワは益々照れて、リインは銜い無く賞賛の言葉を続けていく、そんな微笑ましい光景を何時までも見ていたかったクレアだったが列車の時間が近づいてきたので名残惜しさを感じながらも二人へと声をかける

「どうやらそろそろ時間みたいです。リインさん、どうか身体に気をつけて元気に過ごしてください。またこうして会える日を楽しみにしています」

優しくリインの顔を見つめながらそう言い終えるとクレアは今度はトワの方へと顔を向けて

「トワさん、どうかリインさんと仲良くしてあげてくださいね」

そんな弟の友人に対する姉のような言葉をかけて、二人に見送られながらクレア・リーヴェルトはトリスタの街を跡にした。

リイン・オズボーンが生徒会への参加を申し出たのはその翌日の事である。

鉄血の子と不良生徒

「貴様……もう一度言ってみろ!!!」

リッテンハイムを始めとする自身を快く思っていない者からの嫌がらせ等は歯牙にもかけずにしたたかにやり返し、そうでないものに対しては生徒会の人間として柔和に接する、そんな年齢に不相応な落ち着きを常ならば有する優等生リイン・オズボーン。そんな彼が常の余裕をかなぐり捨てて本気の激怒を目の前の人物に向けていた。

「は、大好きなお父さんの事を馬鹿にされて気に障ったかよお坊ちゃん。何度だって言ってみよう、てめえの親父は別に国のためだの平民のためだのにやっているわけじゃねえ、単なる他人のものを奪っているロクデナシで、てめえの大好きな姉ちゃんもそれに加担していて、てめえはそんなロクデナシの仲間に嬉々として加わろうとしている大馬鹿だつてな!!」

そんなリインに対して彼をここまで激昂させている張本人たる不良生徒クロウ・アームブラストも怯む事無く挑発で返す、こちらも常の気さくでチャライ三枚目という仮面はどこへいったのやら、感情をむき出しにして。

「ッ!!!」

その言葉が決定打になったのだろう、リインがクロウの頬を思い切り殴り飛ばす。貴族の生徒らとやりあい、ともすると喧嘩つばやいように思われるリインだが、その実自らの方から先に攻撃したという事はこれまで一度も無い。売られた喧嘩は買うが、自分からは売らないし、先に手をあげるような真似はしない、それがリイン・オズボーンの流儀であったのだ。その彼が初めて、挑発されたとはいえ自分の方から仕掛けた、それだけでも今の彼が常とは大きく外れたものである事が窺えるであろう。

「やりやがったな、てめえ!」

殴り飛ばされたクロウがこんどはお返しとばかりにリインへと拳を叩きこむ。普段の彼ならば殴られたところで、余裕そうな表情で「凶星かよ」とでも言ってみよう、そんな余裕など無いか

のように感情を露にしている。

それから後はもはや無茶苦茶である、互いに貯まっていた鬱憤を晴らすかのように罵倒をぶつけ合いながら殴り合っていく。

「父も・姉も・心より祖国と民の事を思い尽力している！謂れの無い侮辱は許さんぞ!!!」

「は、それだったら何で民間人保護を第一とする遊撃士が帝国では活動できずに政府からの圧力状態で閉鎖状態になっている!?これこそがためえの親父が内心じゃ、民衆の事など考えていない、自分が権力を掌握するためなら平気でえげつない手も使っている証拠だろうが！」

「遊撃士協会の閉鎖はあくまでも協会が爆破されたことにより、またテロ事件の標的となり市民にまで危害が及ぶことを危惧した一時的な処置だ！」

「は、で、その一時的な処置とやらは一体いつまで続くんだ?数年か、それとも数十年か?治安維持のためのやむを得ない措置だと抜かして軍を寄越した挙句にそのまま実効支配するのは鉄血宰相様の常套手段だもんなあ!?!」

「治安を維持できずに護るべき民衆の生活を護れぬ国と軍に一体何の存在価値がある!国家と軍はそこに住まう市民の権利と安全を保障するためにこそ存在する。治安の維持などその最たるものだ!それが出来なくなった国家に国家たる資格はなく、我が帝国はそんな自治能力のなかった州や国家に変わり、そこに住まう民の権利を保障しているだけの事!非難される謂れが一体どこにある!!!」

「てめえは頭の中に花畑でも咲いてんのか!獵兵の活動やテロによって治安が悪化した直後に狙い済ましたかのようなタイミングで訪れる治安維持の申し出!少し働く脳みそがあれば誰だって裏で糸を引いているのが誰かなんてわかるだろうが!!!」

「貴様は他国の間者か何かか!何故そこまで己の祖国とその祖国を守護する軍を信じない!!!仮に、もしも仮に百歩譲って貴様の言うことが真実だったとしてもそれは必要悪というものだ!一切の悪を飲み干さずして国家というものを運営することは出来ない!!!実際併合され

た国の多くは帝国という大国の庇護を受けて繁栄を謳歌している！
ジュライ自治領などは自ら望んでエレボニアに併合された位だ!!!」
「ッ!!!」

ブチリとクロウの中で更に何かキレる音がして、そういう
大国の傲慢さがにじみ出た発言と平然とそれを正当化するような態
度こそが自分は気に食わないんだと言わんばかりにリインにさらに
激しく拳を叩きつけていく。そしてそんなクロウに負けじとリイン
もまた殴り返す。

怒りの感情に任せてそう叫んだリインだが、しかし、その言葉にい
つものキレはない。今の彼はただ自分の大好きな父親の悪口を言わ
れたのでそれを認めたくないからと感情任せに、とりあえず相手の発
言を否定するためだけに政府発表や帝国の教科書に載っているよう
なお題目をそのまま唱えているだけだ。

発言している本人自身も心の底からそれが正しいと思っっているわ
けではないのだろう、その言葉にはどこか空虚な響が漂っていた。あ
るいは、相手が士官学院に所属している帝国人でなければリインはこ
こまで激昂しなかつただろう。

他ならない祖国と軍の庇護を受け、恩恵を甘受している立場にあり
ながらも祖国と軍の誇りを穢すような発言をする。そんなクロウの
態度がリインにとつては許し難いほどに腹立たしい。

仮にこれを発言した相手が、それこそ他ならぬ帝国に併合された国
出身だったら、その嘆きをリインは正面からきちんと受け止めただろ
う。彼はそこまで恥知らずでもなく、狭量でもないのだから。

一方のクロウの方もクロウの方でその様子は常とかけ離れていた
物だった、何事もおちやらけて不真面目で気さくな三枚目、そんな普
段の様子をかなぐり捨てて感情を露にしながらリインへとぶつけて
いる。リインの父であるギリアス・オズボーンを激しく非難する言葉
を吐きながら。

クロウの方にしても言っていたのがリインでなければ、他ならぬ自
身から大事な祖父を奪った憎き仇の実子でなければ此処まで普段の
余裕と仮面をかなぐり捨てるような事は無かつただろう。他の帝国

人が言っていれば、まあ士官学院に通っているような帝国人ともなれば、そんな認識だろうなとそんな程度に流していただろう。

だが他ならぬオズボーンの息子が、それも絵に描いたような軍人志望のエリートと言った様子の、発言したからこそクロウもまた許せない。如何に年齢に似つかわしくない優秀さを持っているとはいえ、彼とてまだ十代の若者だ。一度そうして火がついてしまえば止まらな。仮面をかなぐり捨てて怒りを露にする。

そんな二人の様子を把握しながら、この時間を受け持っている教官たるナイトハルトは何故か止めにも入らず、それどころか止めようとした生徒達に「ほうっておけ、思う存分にやり合わせろ」とだけ告げて静観の構えをとっていた。まるでああして本音を吐露してぶつかり合うことこそが、あの二人の成長には必要なのだと判断しているかのように。

クロウの所属するIV組の生徒達は常ならぬクロウの様子に困惑を隠せないでいた、堅苦しく如何にもエリート然とした様子のリインはどこか遠い存在であり、堅物すぎてうっとおしく思う者もいたものの、基本的には親切で生徒会に入ってからトワ・ハーシエルと共に同級生の相談に乗ったり悩みを解決したりしているリインの評判は決して悪くは無かったのだ。良い奴なのはわかるが、一緒にいると若干息苦しい、遠くから見ている分には貴族相手に堂々としていて爽快、そんなところだろうか。

またリインの父である鉄血宰相にしても貴族勢力からの評判こそ最悪と言つていいものの、反面平民からは絶大な支持を誇っている。だからこそIV組の生徒達はアレほどまでにも級友たるクロウが鉄血宰相を罵倒して、その息子にまで食って掛かっている理由が全く持つて理解できずに困惑していた。

リインの所属するI組ではリッテンハイムを始めとするリインを嫌う生徒達はリインのその常ならぬ冷静さを失った様子におおいに溜飲を下げていた。「見る、あの無様な姿を所詮は下賤な輩、育ちが窺えるというものだ」などと嘲笑していたところを

「あら、他ならぬそのオズボーン君にこの間数人掛りで襲い掛かりながら返り討ちにされて、今のオズボーン君の状態が目じやない位にみっともない様子をさらしていたのは誰だったかしら」

などとI組におけるリインの数少ない友人であるフリーデルに言われて、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

そして常ならぬ様子で激昂するリインと常の仮面を脱ぎ捨てて怒りを露にしているクロウの二人の喧嘩をリインの友人たるアンゼリカは興味深そうに観察しており、その表情はまるで先を越されてしまったとでも言いたげだった。

何故このような状況になったのか、その説明をするには時を少し遡る事となる。

「それではこれよりI組とIV組の合同武術訓練を行なう」

軍事学を受け持つ現役の士官たるナイトハルトがそう生徒達へと号令をかける。現役の将校たる彼は原隊での仕事と並行で教官職を受け持っているため、教官の中でも一際忙しい。そのためこうして講義の際は複数クラスでの合同となつていたのであつた。またこうすることにより、極力貴族と平民の垣根を失くそうという意図もそこにはあつた。

「改めて言っておくが戦場には貴族も平民もない、不和を抱えた部隊には死あるのみだ。だが普段の諸君を見ていると、貴族生徒にしても平民生徒にしてもそのような些事に囚われている者があまりに多すぎる。故にこの訓練ではしばらくの間I組とIV組の人間で二人組を作り、模擬戦闘を行なつていく。当然ながら如何に個人戦技が卓越していようとパートナーとの不和を抱えていたペアに対する査定はそれ相応の物となるため、覚悟するように。ある程度慣れて来たら今度はパートナーを入れ替えていき、即席のコンビでもどれほどのコンビネーションを出来るかと言つた部分を見ていく。組む相手に関して取替え等は一切認めない、共に同じ部隊に配属された部隊の同期とも思い励むように」

貴族生徒と平民生徒でそれぞれペアを作る、その言葉にどよめきが

走り、中にはあからさまに嫌悪の表情を浮かべている。一方のラインとしては気楽であった、彼にしてみると貴族生徒と組めといわれたほうが余程厄介な事になっていただろうから、平民生徒と組めというのは願ったり叶ったりの状況であった。

上官の命令と在れば否応なしに従わざるを得ないのが軍隊だが、それでも叶うことならリッテンハイムのような愚物と長期に渡って組む等と言うのは避けたいところである。

この時の彼は想像していなかった、所詮リッテンハイムなど彼にとつて見ればただの障害程度の物でどうしようもなく苛立たしいのに意識せずには居られない、そんな対極な相手が同学年に存在するのだと。

「では組み合わせを発表する、一組目I組はライン・オズボーン、IV組からはクロウ・アームブラスト」

(クロウ・アームブラスト、確か度々授業をサボっている問題児だったか……)

生徒会の活動を通して事前に聞いていた事のある、自分のパートナーの名を聞いてラインは若干顔をしかめる。幼い頃から軍隊的な価値観に囲まれて育った彼にとつては、努力、勤労、奉仕と言った価値観こそ尊ばれるものであり、国費によつて学ばせてもらっている立場でありながらみすみすその最高の環境を自ら放り投げているような輩にはどうしても好意的になれなかった。

(だがまあ、これも良い機会か……)

周囲から度々指摘されている、自分は真面目すぎる堅すぎるのだという指摘。他ならぬナイトハルト少佐にも言われたことがある、軍人と言つても皆が皆理想や使命感に燃えているというわけではない。中には、というか一般兵に関して言えばそちらの方が多いいと言つて良いのだが、生活のためにやむをえなくなどと言つた理由で入つた者の方がいい。そういう者達のやる気を引き出すのも士官の役割であり、気に入らない相手だろうと折り合いをつけねばならないと。

ならば、そういった手合いとの付き合い方を学ぶ良い機会だろうと

リインは考えたのであった……

(よりにもよってあの野郎の息子とはな、願ってもねえ)

真の鉄血の子、鉄血宰相の秘蔵っ子とやらの実力を間近で確認しておくまたとないチャンスだ。それだけではない、上手くすればお友達になって色々と情報を聞き出す事も出来るだろう。絵に描いたような優等生のため、不良生徒であるこちらへの印象は悪いがその程度の第一印象などいくらでも覆せる、いや第一印象が悪いからこそ、それを上手いことひっくり返せば信頼を勝ち取る事とて容易だ。真面目でされど他者の意見に耳を貸す度量のある素直なエリートなどというの、ある意味で扱いやすいのだ。何故ならば彼らは頭が良いからこそ、相手に理があるとわかれば自分の持論に拘らない、むしろ偏見を抱いていたなどと自らを恥じさえするだろう、そうなれば占めたものだと、温室育ちのエリート坊ちゃんなど騙すことなど容易いだらうと、クロウは入念にあの手のエリートに受けの良さそうな不良生徒の仮面を被り出すのであった……

「それまで、勝者オズボーン及びアームブラストペア」

鮮やか、その一言に尽きるだろう。あの後リインとクロウの二人は互いに一通り自己紹介を済ませるとリインはヴァンダールの双剣術、クロウは二丁拳銃と互いの武器と戦い方について簡単な情報交換を行なった。そうして行なった模擬戦闘の結果はごらんの通りであった、前衛としては学年最強であるリインと後衛としては学年最強であるクロウ、このコンビに太刀打ちできる存在は同じ学年に、あるいは二年にだろうと、存在しなかった。

「はは、噂に聞いちゃいたが大したもんだな。ヴァンダールの双剣術、その腕前にまでなるのにさぞ努力したんだろ」

クロウはあえて最初は父親の事を言わずにリイン本人が努力して身に着けたであろう剣の腕前を褒める、入学式の時に粗方の人となりは把握しているしこの手の有名人の親を持つ者はとかく親の威光によるものではない、自分自身の実力というものを認められたがるもの

だと考えて

「……そちらも度々授業をサボる不良と聞いていた割には良く鍛えて
いるな、かなりの腕だ。そこに至るまでにはさぞ努力を重ねたのだろ
う」

訝しがりながらもクロウの腕を認めるリイン、そんなリインの言葉
にクロウはほくそ笑みながらも気さくな三枚目の仮面を被り答える

「お、わかってくれるのか嬉しいねえ、そうなのよ。誤解されがちな
ど俺これでも結構陰じゃ努力しているのよ、ただどうにも実技に対し
て座学つてのは苦手だよ。確かお前さん、次席入学者だっただろ？
今度勉強でも教えてくれねえか？」

「……級友の頼みとあらば受けるのは吝かではない。だがそれならば
真面目に授業を受けたらどうだ、トールズの教官達は帝国においても
屈指の方々だ。俺などよりも余程教えるのが上手いぞ」

「そこを突かれると痛いところではあるんだが……ほら、あの政経を
受け持っているハインリツヒ教頭つてのは確か貴族だろ？ どうにも
俺は貴族つてのが好かなくてよお、ついついあの教頭をからかいたく
なっちゃうんだわ」

そうしてクロウは貴族嫌いという如何にも平民にありがちなカ
バーストリーを用意する、これで後は勉強を教えてもらう時にも
適当に鉄血宰相を褒め称えて目の前の相手から色々と聞き出せば良
い。父親を尊敬している平民相手ともなれば、このお坊ちゃんも色々
と口が軽くなるだろうそんな風にクロウは内心の激情を押し隠しな
がら仮面を被り、リインに親愛の笑みを浮かべる。そんなクロウの様
子に何か思案するように眼を閉じた後に

「こちらからも一つ良いか、アームブラスト」

「クロウで構わないぜ、代わりにこっちもリインって呼ばせてもら
うからよ。こっちの頼み聞いてもらったわけだしな、金を貸してくれ
とかじゃなければ聞かぜ」

「そうか、ではクロウ」

そこでリインは目の前の相手を推し量るように目を細めて

「お前は何故そんな仮面を被っている」

虚偽など許さないとばかりに言葉を叩きつけていた

「……………は？」

「あいにくと小さい頃からその手の仮面を被って全く持つて本心を掴ませない知り合いが居てな、その手の演技は見飽きているんだよ」

カカシ男か、とクロウは内心舌打ちをする。クロウは目の前の相手を自分が温室育ちの甘い坊ちゃんと侮っていたことを悟らざるを得なかった。だが違ったリイン・オズボーンは正道だけを磨き上げた脆いエリートではない、邪道と呼ばれる謀略や工作についても教育を受けた完全なエリートなのだ。

「……………おいおい、一体何を言い出すかと思えば勘弁しろよおい、いきなり妙な難癖つけて来やがって」

「そうしてまた本心を悟らせないような仮面を被って表面上だけ合わせるのか。薄っぺらいんだよお前のやっている事は何もかもが」

薄っぺらいとそうよりもよって目の前の温室育ちのお坊ちゃん何かもが父親からの借り物に言われた瞬間にクロウの中で仮面を被る余裕が消えうせた。

「は、薄っぺらいと来たか。俺から見ればお前のやっている事の方がはるかに薄っぺらいけどな、お坊ちゃん」

気さくな不良生徒という仮面を脱ぎ捨ててクロウは敵意も露に叫ぶ、どの道この学院での最優先ターゲットにこうしてバレた以上もはや仮面を被る意味は薄いならばこの温室育ちのお坊ちゃんに一つ現実って奴を教えてやるとばかりに

「何だと……………」

そんなクロウの発言が聞き捨てならなかったのだろう、リインもリインでまた目の前の相手への敵意を露にする

「てめえの言っている事はどれもこれもてめえの父親の受け売りだ。口じゃさも貴族側にも一理あるみたいだな事言つて物分りが良い奴みたいなの面しているが、その実てめえの親父のやっている事が絶対的に正しいのだと信じきっている」

「その何が悪い、実際我が父ギリアス・オズボーンは皇帝陛下下の信任厚くその手腕も確かな優秀な指導者だ、貴族勢力にこそ憎まれど平民

からの支持は絶大と言って良い。そんな立派な父を息子である俺が誇ることに何の問題がある」

「ああ、それだよそれ。てめえはさもアイツが平民の味方だと思ってやがる、そういうところが現実を知らないお坊ちゃんだと言ってんだよ」

リインを嘲笑うかのように、ずっと表に出さず仮面の中で、心の中に燻り続けていた黒い感情をクロウは仇の息子へと叩きつける

「だから俺がそんなお前に現実を教えてやるよ、アイツはギリアス・オズボーンは平民の味方でも何でもねえ、ただの自分の野望のために動いているロクデナシだつてな」

かくして物語は冒頭へと至る

「それにしても止めなくて良いの、アンゼリカ」

調子に乗ろうとする馬鹿への釘刺しを終えたフリーデルはそんな風に話しかけていた

「ああ、中途半端に止めないほうが逆に良いだろう、コレは。だからナイトハルト教官も止めるなど言ったんだろうしね」

チラリと厳粛な面持ちでもしも喧嘩の領域を超えるような事に発展しそうになつたら何時でも止められるようにしている教官の方を窺いながらアンゼリカはそんな風に答えた

「それに、クロウだったかな、リインが彼に言ったことも、彼がリインに言ったことも私がそれぞれ二人に言いたいことではあつたんだよ。ま、リインに関しては友人だからもうちよつとやんわりと伝えようと思つていたけどね」

リイン・オズボーンの己が父親をどこか絶対視している危うさ、それをアンゼリカは感じていた。それは貴族だからとかみつくようなわかりやすいものではなく、己の非を認める度量も、他人の意見を聞く柔軟さも持ち合わせているからこそ逆に根の深さを感じさせた。

「そういう君は君でどうして止めようとしなかつたんだいフリーデル？」

「あらだつて男の子同士のああいうのって女が割って入って良いもの

じゃないでしょ、それに見ていて中々面白いじゃない」

そんな事を笑顔で言うフリーデルの様子にアンゼリカはどこか大物さを感じて苦笑するのであった。

喧嘩をしていた二人の男が両者同時に倒れて、医務室に運ばれた後にナイトハルト教官より懲罰として男子便所の掃除を命じられたのはそれからすぐ後の事である。

鉄血の子と喧嘩の後

「もう少し早く止める訳にはいかなかったんですか？」

ボロボロとなって運ばれてきたリインとクロウに一通りの手当てをし終わると、保健医であるベアトリクスは穏やかながらも有無を言わせぬ静かな圧力を身に纏いながらナイトハルトをそう詰問した

「それでは逆に遺恨が燻り続けるでしょう、やるのならば徹底的に互いに本音をさらけ出したほうが良いものです、それは大佐殿も経験からご存知かと思いますが」

リインにしてもクロウにしても決して狭量であったり、己の身を省みようとしない傲慢な人物というわけではない。ああして売り言葉に買い言葉の果てに最後まで激しくやり合ったとなれば、しばらくして冷静になれば自分が言い過ぎた事を自ずと悟るだろう。

まあそれですぐにすんなりと和解などとはいかないだろうが、ここは戦場ではなくあくまで学院なのだ。不和を抱えたからと言ってすぐに生死に関わるわけではない。

そのの合わない相手とどう付き合っていくか、というのを学ぶ良い機会だろう。等とナイトハルトはあえて二人の喧嘩を放置した意図をベアトリクスへと伝える

「ふふふ、そうですね。本音でぶつかり合える同世代の喧嘩友達というのも、それはそれでこの子達位の年頃では大事ですから。ええ、貴方の意図はわかりますよ」

練磨するという言葉があるように成長するというのは己が身を削るという事である、ならばこそどうにも気に食わない、されど無視することも出来ない、そんな接していて痛みを伴う相手こそが成長のために必要な存在となるであろう。

リインがアレほどまでに怒りをむき出しにした相手はこれまでに存在せず（リツテンハイムとは度々やり合っているが、相手はともかくリインは向こうを歯牙にもかけておらずその言葉になんの痛痒も感じていない）、それはクロウもまた同様である。

そういう意味ではこの二人を組ませたナイトハルトはある意味で

は慧眼だったと言えるのだが……

「この二人を組ませれば最初からこうなるとわかったのですか？だとしたら大したものだと思いますが」

「まさか、流石にそこまで予想してはおりませんでした。小官はオズボーンとは長い付き合いです、もう7年の付き合いになるでしょうか。故に彼にどこか危うさを感じていたのは事実です」

オーラフの信頼厚きナイトハルトは度々彼の自宅に誘われて、夕食を彼の家族と共にしたものだ。そしてそういった時決まって、尊敬の念も露に目を輝かせながら質問をしてくる上官の義息子をナイトハルトは好ましく思っていた。

あるいは自分には兄弟がいないが、弟が居たならばこんな気分なのかもしれない、等と思ったりしたものだ。……あるいは本当に兄弟のような関係となるかも知れず、それには親馬鹿^{オーラフ}というとても大きく大きな壁をナイトハルトは乗り越えねばならないのであるが、それは余談である。

「また、力量が近しく、それでいて性格は真逆とも言えるあの両名を組み合わせることで互いに良い刺激になる事を期待していたのも事実です」
片や絵に描いたような優等生であるリイン、片や絵に描いたような不良生徒であるクロウ。それでいて両者の力量はかなり近い。

これでクロウの実力がリインに遠く及ばないようなものであれば、リインも大して意識しなかつただろうが、あの年頃、そして武人というのとはかく自分と近しい力量を有する好敵手というのに飢えている者だ。

現状貴族生徒でリインと友人と呼べるだけの関係を持っているフリーデルにしてもアンゼリカにしても、学年内でトップクラスに位置する実力者である事は三人が交友を持つようになった事と決して無関係では無いだろう。

それ故にクロウはリインの真面目さに、リインはクロウの不真面目さに互いに刺激を受ければ良いとは考えていた。

「しかし、アームブラストがアレほどまでに宰相閣下に隔意を抱いているというのは予想外でした」

「併合された自治領の出身というわけではないみたいですが、何らかの因縁があるのでしょね。アレほどの地位ともなれば誰からも恨みを買わないという事は不可能ですから」

売り言葉に買い言葉、なのだろうがクロウの発言は帝国軍人として見逃せないような発言が数多く見られた。

併合した国家や自治州で起こったテロの裏で帝国政府の暗躍が起こった事等の示唆などは、ナイトハルトにしても認められないし、認めてはいけない類の発言である。

例え冷静に考えれば誰もがその答えへと行き着くものであろうと、世の中には公然と言っては問題になる発言というものがあり、クロウの先ほどの発言はまさしくそれであった。

「そういう意味ではあるいは私は教官としてアームブラストの発言を咎めて、士官学院生としての模範解答を述べていたオズボーンの擁護をするべきなのかもしれません。……本音を言えば私自身も軍人として、アームブラストの発言には反発を覚えましたし、軍と政府の擁護をしているオズボーンの方に好感を抱きました」

そうリインの発言は帝国の士官候補生としてみればなんら間違っていない、模範解答と言うべきものであった。仮にこれが中央士官学院であれば、クロウの発言はそれこそ即刻教官達の会議にかけられ、便所掃除程度では済まない然るべき処罰が与えられ、リインの方は最初に挑発的な態度をとった事以外は候補生として模範的な態度も合間って軽い口頭での注意で終わっただろう。

「ふふふ、でも貴方もわかつているのでしょう？そうして大人が子ども同士の喧嘩に割って入ったら碌な事にならない位」

「ええ、承知しております。コレはオズボーンにしても、アームブラストにしても成長する良い機会です。私がそこに割って入ってはみすみす彼らの成長の芽を潰してしまうでしょう」

ここでナイトハルトがリインの擁護をしてみれば、リインはやはり自分は間違っていないなかつたのだと思つて終わるだろう。それではいけない、確かにクロウの発言は過激であり、帝国軍人としては看過

できないものであった。だが軍人となるならば向き合って、答えを出さなければならぬものだ。だからこそナイトハルトはあえて、この問題には不干渉を貫いた。

「叶うのならば、1年後や10年後にはこの二人が今日の出来事をそんな事もあったなど笑い合えるような関係となつているのが一番なんですけどね」

そう微笑むベアトリクスの様子にナイトハルトもまた頷くのであった……

「リイン君、怪我の方は大丈夫？」

「ああ、問題ないよ。ベアトリクス教官殿の治療のおかげでね」

嘘である、一日も経たないうちに治るわけもなく当然今もリインの身体を鈍い痛み襲っている。だがそれを言えば目の前の少女は心配するだろうし、そもそもこの痛みも己が未熟さ故のもの、甘んじて受け入れるべきだろう等とリインはどこまでも糞真面目に考えていた。

あの後目覚めたリインとクロウは互いに存分に吐き出したからだろう、自分達が感情的になりすぎて醜態をさらしてしまった事を悟った。かくして互いにそれぞれ言い過ぎた、すまなかつた等と謝罪しあつた二人は先ほどまでの喧嘩が嘘のように仲良く

……なるはずもなく、感情的にはなりすぎたものの自分は間違っていない、悪いのは目の前のコイツだと互いに相手を睨みつけ、取っ組み合いの喧嘩こそしないものの「フン」「ケツ」等と言ひ合いながら互いにそっぽを向くという実に心の温まる目覚めてからの挨拶を行なつた。

そうしてナイトハルトから懲罰として便所掃除を命じられた二人は、サボつて抜け出したクロウを他所にリインは黙々とこなして終了の報告をナイトハルトへと行なつた。当然ながら報告の際にクロウは途中で抜け出したことを告げる事も忘れずに。

そうして生徒会室へと顔を出したリインを友人であるトワ・ハーシエルが心配そうに迎えたのであった。

「無理しないでね、なんなら怪我が治るまでは私がリイン君の分も代

わるから」

「おいおい、俺をお払い箱にしないでくれよ。トワと一緒に過ごすこの時間が俺は結構好きなんだからさ」

本音である。目の前の少女の優しさに触れて、リインはさつきまでのささくれ立っていた自分の心が癒されるのを感じた。これほどまでにリインが心を許すことになった存在は家族であるクレイグ家と敬愛するクレア姉さん以外ではトワ位であろう。

「えへへ、あ、ありがとう。私もリイン君と一緒に過ごすこの時間が好きだよ」

「それは何よりだ」

照れながらも応じるトワとそれに対してクロウに向けていた表情とは裏腹に優しい笑みを浮かべるリイン。なにやら生徒会室に甘酸っぱい雰囲気が出すが……

「オズボーン君、なにやら派手に喧嘩をしたようだな。それも講義中に。君とアームブラストの喧嘩は既に学校中の噂になっているぞ」

ゴホンとそんな空気を振り払うように咳払いをして生徒会長を務める二年生のフリッツ・ブラツケが厳格な表情でリインへと話しかける。

「私としても彼には好意的になれんが、それにしても今回の件は君も聊か感情的になりすぎたのではないのかな？……尊敬するお父上を侮辱されて怒るのはわかるがね」

帝国政府に務める革新派の官僚の父を持ち、規律を第一とする優等生の会長は基本的には不良生徒であるクロウは問題視していたし、逆に優等生であるリインに対して好意的であったものの、そうリインへの注意を述べる

「は、返す言葉もありません。生徒の模範たるべき生徒会の一員として恥ずべき行いをしてしまいました。以後、このような事がないように務めます」

そうして深く頭を下げるリインの様子にブラツケ会長は満足そうに頷き、以後気をつけるようにとだけ述べて今日の仕事へと取り掛かるのであった。共に規律を尊び、親が革新派に属しているこの二人の

相性は基本的に高かった。

「ねえ……リイン君、蒸し返すちゃって悪いんだけど一つだけ、今日のクロウ君との喧嘩の事で聞いても良いかな？」

生徒会での活動を終えて寮へとともに戻ろうとする最中、トワは意を決したようにリインへと尋ねていた。

「……ああ、構わないよ。そんなおっかなビックリしなくても、昼間の件は我ながら大人気なかったなと反省しているんだ」

未だ子どもにも関わらずまるで自分はそんな子どもで居てはいけない、いや早く大人になりたいのだといわんばかりにリインは答える「うん……あのね、リイン君。リイン君がクロウ君に対して言っていた「必要悪だ」って言葉、アレは……リイン君の本音？」

恐る恐ると言った様子で尋ねてきた、トワの問いに対してリインは一瞬息を呑む

「私もこうして士官学院に所属している以上、リイン君の言っていた事はわかるよ……うん、士官学院生としてみればリイン君の発言はきつと正しいんだと思う。私たちの生活が祖国があるからこそ成り立っていて、軍の人達がそれを守ってくれているっていうのも」

実際国と秩序を失った際に一番悲惨な目に合うのはそこに住んでいた普通の人々である。優秀な者は良いだろう、彼らは他国に渡ったとしても、今までの財産などを失っても一からやり直せるような能力がある。

だが、多くの普通の人々はそうはいかない。ある日突然、国という自身を庇護する存在を失って生身で放り出されて平気なものが一体どれだけいるだろうか？そんな存在はどここの国でも圧倒的な少数派である。

近年で言えば塩害にあつたノーザンブリアが良い例であろう、一部の人間は出稼ぎで稼いだりしているが、大半の人間はそれも出来ずに今もボロボロとなった祖国にしがみつき、猟兵が獲得してくる外貨によつてなんとか生活しているという有様だ。

だからそう、こうして自分が安心して暮らせているのもエレボニア

帝国という祖国と、そんな祖国を守護している軍があつてこそというのはトワもわかっている。

「だからね、そんな風にこの国に庇護を受けて何不自由なく育った私にこんな事を言う資格ないのかもしれない……」

自分のいう事が偽善や欺瞞だと、幼稚な理想論だという自覚はある。だけど、それでも

「でもね、私リイン君にはそんな風に必要悪だなんてあっさりとは片付けて欲しくないんだ。……だってリイン君とっても優しい人だもん。まだ一月足らずの付き合いだけど生徒会で一緒に活動して、リイン君が困っている人の力になりたくて、みんなを護りたくて軍人を目指している人だって私は知っている」

初めて会った時に指輪を探すのを手伝ってくれたことを覚えている。国とそこに住む人達を護れる立派な軍人になりたいのだと誇らしそうな表情で夢を語っていたことを覚えている。一緒に生徒会で活動して、厳しいところもあるけど困っている人には親身になるお人よしなところも。

リイン・オズボーンという少年が誰かを護るためにこそ戦う、とても優しい人なのだとトワ・ハーシエルは知っている。

「だからね、そんなリイン君が、不幸な人を作ってしまうことを『必要悪』だなんて切り捨てちゃうところ、私は……見たくないな」
「……………」

どこまでも優しく、間違っているのだと否定するのではなく、ただそんな自分を見たくないのだと気遣う友人の言葉にリインは胸を打たれた。同時に自分がどうしようもなく恥知らずな発言をしてしまったと嫌悪に陥る。

「ご、ごめんね！偉そうなこと言っちゃって!!!」

すっかり沈痛な表情を浮かべて黙ったリインに対してトワは慌てたようにそう口にする

「いや……ありがとうトワ。君は本当に俺に大切な事を教えてくれるよ」

そんなトワにリインは優しい表情を浮かべて答えていた

『必要悪』だなんて簡単に切り捨てて良いことじゃなかった。だって必要だろうとなんだだろうと悪は悪なんだ、非難されて然るべきものだ。護ると口にしなから、その手で誰かを殺す事、泣く人を作る事。俺が本当に軍人になると言うのなら、きちんと向き合って受け売りじゃない、自分の答えを出さなければならぬ問題だったんだ」

そうしてリインは改めて目の前の少女へと、大切な事をまた教えてくれた事について感謝する

「だから、ありがとうトワ。君はまた、俺に大切な事を教えてくれた」
そんなリインの言葉にトワはまた慌てた様子で謙遜をして、リインはそんな彼女への惜しみない賞賛を送るといふ光景を寮に帰るまで繰り返るのであった……

鉄血の子と喧嘩の後②

「しかしクロウ、昨日のお前ずいぶんらしくなかったけど、どうしたんだよ?」

「ああ、オズボーン宰相をえらい剣幕で批判していたけど……」

そんな風におっかなびっくりと言った様子で問いかけてくる麗しの学友達にクロウは内心舌打をする

(ち、まずったぜ)

気さくな不良生徒、そんな仮面を被って数年後にはああ、そういうばそんな奴もいたっけと思われる程度の軽い関係で特に誰の記憶にも残らないように消える、そんな彼の思惑は瓦解してしまった。あまりにも目立ちすぎてしまった。

平民生徒でありながらも、必死の形相で平民の味方とされる宰相を声高に非難して、その息子と本気の殴り合いをする、そんな出来事を記憶から消せなどと言っても無理だろう。

こんな事ならばいつその事普段からあのお坊ちゃんに批判的なポーズをとっておけば良かった。そうすれば宰相を批判したところであのお坊ちゃんが嫌いだから、挑発するために父親の悪口を言ったとでも思われただろう。

だがアレではどう見ても、宰相の方が坊主でその息子の方が袈裟だ。自分は宰相と何らかの因縁があって、その件で恨みを抱いている、そう思われただろう

(どう誤魔化したものか……)

この場面ではどんな仮面を被るのが適切かとクロウが思案を始める……

「すまない、クロウ・アームブラストはいるか」

何かを決心したような様子で今自分の頭を悩ませている張本人たるリイン・オズボーンが自身の下を訪ねて来たのであった。

「で、話ってのはなんだ。昨日の続きでもやろうってのか?」

邪魔の入らないところで話がしたいとリインに言われたクロウは

旧校舎の方へと付いて来ていた。そんなリインにクロウはもはや取り繕う必要性を感じないのだろう、仮面を外した素の顔で接する。

「単刀直入に聞きたい、お前は我が父ギリアス・オズボーンと何があった？」

「はあ？なんででめえにそんな事を教えなきやいけねえんだよ」

クロウには全く持つて目の前の男が何を考えているのかがわからない。

昨日の様子からも目の前の男が実の父である鉄血宰相を絶対視しているのは良くわかった。当然その宰相に対して批判的な自分の話など聞いたところで愉快になるはずもないのに、何故そんな事を言うのか。

もしや情報局あたりとすでに繋がっていて自分の父に反抗的なものを探してでもいるのかとクロウは訝しがるが……

「何も知らないお坊ちゃん」と俺の事をそういったのはそちらの方だ。そしてそんな俺に教えてやると言ったのもな」

謀略の陰など一つも見えないどこまでも真っ直ぐな瞳でリインはクロウを射抜きながらそう告げていた。呆氣にとられるクロウへとリインは告げていく

「お前の言うとおりだ、俺はまだ何も知らない。幼い頃から軍人に憧れ、軍人となるのが俺の目標だった。帝都で育ったのもあって俺の周囲は大よそ父に肯定的な人達ばかりだった。だからこそ俺は父の正義を一度たりとも疑ったことがなかった」

そうして自らの発言を悔いるような、恥じるような表情をリインは浮かべて

「そんな俺が必要悪などと軽々しく言って良いはずが無かった、それがどれだけ多数の幸福に繋がろうとも、そんな事は犠牲となった人達には関係ないのだから」

自己犠牲は尊い行為であろう、だが他者に犠牲を押し付ける行為はこの世で最も醜悪である。昨日の自分の発言はそんな恥知らずなものだったとリインは深く恥じいる

「だからこそ知らないままにしていはいはずが無い、父の行いによつて

生まれた嘆きを、息子だからこそ、俺はきちんと受け止めなければならぬ」

「……………」

何なんだこいつは、クロウの頭を埋めるのはそんな思いだった。世間知らずのただのお坊ちゃんだと思っていた、いけ好かない如何にもなエリートだと思つて、そんなところがたまらなく癪に障つた。そうして気が付いていたらあらん限りの罵倒をぶつけて、そんなこちらに反論してくる相手の言葉はどこまでもこちらの神経を逆撫でするものだった。

それは向こうも同じだったはずだ、そう、普通ならばそうして晴れて縁が切れて終りのはずだった。なのに目の前の相手はわざわざ物好きにもそんな相手の話を聞きたいなどと申し出ている

「聞いていて愉快になるような話じゃねえぞ。特にお前さんの場合はな」

さて、何故自分はコイツに自分の境遇を話そう等としているんだ。目の前にいる相手は憎き仇の息子だというのに、そんな想いがクロウの頭を過ぎる

「構わん、俺に必要なのはそういつた俺にとって聞いていて不愉快になるような話こそなのだろう」

どこまでも真摯な瞳で射抜きながらそう告げるラインの姿にクロウは……

「俺の家は所謂郷里の名士って奴でな、土地を持っていて代々農作物を作っている家だったよ」

自分でもわからぬ目の前の相手に自分の過去を打明けたいという衝動を抑えながらも、自分に用意された嘘の経歴と辻褃が合いそうな仲間の過去を借りることとした

「まあ何不自由の無い生活を送っていたわけだが、そんな折だった、鉄血宰相肝いりの鉄道網拡充の計画が持ち上がったのは。行政執行の下で先祖代々受け継いできた土地を買い上げられた。まあ土地に見合うだけの金銭は与えられたわけだが、金だけがあれば良いってもんでもねえ。お前さんなら良くわかるんじゃないやねえか、お前さんだつて金

よりも誇りつてのが大事な人種だろ？ 一生食うに困らないだけの金をやる、だから軍人の道を諦めろって言われてお前さんはそれに従うか？」

そんなクロウの問いかけにリインは黙って首を振る。仮に軍人となる道がある日唐突に奪われでもすれば、おそらく自分はまさしく道を見失ったかのように途方に暮れるだろう。それは死ぬことよりも恐ろしい事にリインには思えた

「そういうとき、先祖代々土地を受け継いできた事に誇りを持っていた特に俺を可愛がってくれていた爺さんはそれがシヨックでポツクリと逝つちまい、親父は酒に溺れ、お袋はどっかに逃げた。そんな親父を尻目に俺はここに入学してきたってわけだ。てめえが言ってた仮面を被っていたのはそのほうが過ごしやすいからだ、なんと言っても鉄血宰相閣下は平民の御味方だ。こんな話しても言われたほうも困るし、空気が悪くなるだけだろ？ だから俺はまあ仮面を被ってやり過ごす事にしたわけだ。どこかの誰かさんにはそいつが気に食わなかったみたいだな」

一通り話し終えたクロウは黙って聞いていたリインへと向き直り、告げる

「さて、一通り教え終わったわけだが、コイツを聞いてお前さんはどういう答えを下すんだ、お坊ちゃん」

「.....」

リインの頭の中に様々な思いが駆け巡る、仕方が無かった、全ての人を救うことなどそれこそ空の女神にしか出来ない、帝国全土に張り巡らした鉄道網は大多数の帝国民に恩恵を齎した、犠牲なくして政治や国を動かすことなど不可能だ、そんな正論と父を擁護したい思いが心から溢れてくる。

だが、しかし

「リイン君が、不幸な人を作ってしまったことを『必要悪』だなんて切り捨てちゃうところ、私は.....見たくないな」

そう自分に告げてきた優しい少女の言葉が脳裏をかすめて.....

「わからん」

そう素直な気持ちを書いていた。はあ？と身構えていた相手が呆気を取られたような顔をするが知ったことではない

「わからんと言ったんだ。少なくとも今の俺にはその答えに判断をさせない、何せ俺は曰く何もかもが父親からの借り物の世間知らずのお坊ちゃんだからな」

何故かどこか得意気に昨日のクロウの自分に対する煽りを逆手に取ったことをふてぶてしくリインは言う

「てめえ、散々知らなきやならんとかカツコつけておいて答えがそれかよ！人にこんな事を言わせておいて！」

正確には自分自身ではなく仲間であるスカーレットの過去なのだが、今この時クロウはすっかり自分の本音と過去を吐露したような気分になっていた

「仕方が無いだろう、父を擁護したい気持ちは俺の中にある。だが、やむをえない犠牲などと片付けて欲しくない俺に言ってくれた友人がいて、俺自身他ならない被害者自身にそう言うのは恥知らずだという想いがある」

そこでリインは真っ直ぐとクロウを見据えて

「だからこそ、改めて謝罪しよう。クロウ・アームブラスト、そちらの事情を良く知りもしないのに薄っぺらいなどと言った事、必要悪だなどと軽々しく言った事心より申し訳なく思っている。本当にすまなかった」

そうして深々とこちらに頭を下げてくるリインにクロウはまたもや呆気にとられる。そして目の前の人物に本当の事を語っていないことに小さな胸の痛みを覚える、相手はどこまでも真っ直ぐに自分に向き合っているというのにこんな嘘八百を並べて良いのかと考えるが

「……顔を上げろよ。そうやって素直に詫びてくる相手を許さないなんて言う程俺は狭量じゃねえつもりだ」

どうにも目の前の相手と接していると調子が狂ってしょうがない、そんな想いが去来する。昨日までは良かった憎らしい仇の息子で大国のエゴ丸出しのエリート、そんな心置きなく怒りをぶつけられる相

手だった。だが今日の前に居る相手は、そんな傲慢さを感じさせないどこまでも真っ直ぐなガキにしか見えなくて……

「てめーの気持ちは良くわかったよ。だから、これでこの話はもう終わりだ。それで今まで通りの特に大した関りの無い同級生、それで良いだろ。無理に一緒にいて互いに不快になる必要はねえ」

それだけ告げてクロウはその場を去っていく。

鉄血宰相の実子と友達になるチャンスは何故自らふいにして立ち去っているのか、自らもわからぬままに……

鉄血の子とARCUS

リインとクロウの喧嘩からおおよそ一週間が経過した。

一応の和解を果たしたことがクロウから伝えられた後の二人の関係は以前と然程変わらないもの、いや大きな変化が一つあった

「クロウ、貴様いい加減に真面目に授業を受けたらどうだ。俺に語ったハイน์リツヒ教頭に隔意を抱いているというのは嘘だったのだろう。ならばサボるのは貴様のただの怠け根性という奴ではないか？」
「うるせーなてめえは！というか、何気軽に名前で呼んでんだよ！関り合いにならねえ方がお互いのためだって俺が言ったのを聞いてなかったのか!!!」

やたらと口やかましくクロウへと注意するリインとそんなリインをうっとおしそうにあしらうクロウの姿が時折見受けられるようになったのだ。

「？名前で呼んで構わんと言ったのはお前の方だろう、第一そちらはそう思ったのもかもしれないが、俺はそちらの意見とは違う。ナイトハルト教官は同じ部隊に配属された同期と思えと仰った。ならば不真面目な同僚を見過ごすわけにはいかんだろう」

何わけのわからないこと言ってるんだコイツとでも言いた気にクロウにしてみると現状わけのわからない人物筆頭たるリインが言う

「加えてお前のように平民でありながら我が父に批判的な人物というのに俺はこれまで出会った事がなかった。ならばこそ、お前との交流は俺がより成長するに当って大きな益となると判断した」

己を否定する者こそが己を最も成長させると言ったのははて誰だったのだろうか等と呟いてリインは堂々とそんな事を言う

「お前も聞いていただろう、どのような事情があれば組み合わせの変更は一切認めないと。ならば僚友との関係改善に努めるのは当然だ」
「……表面上だけ適当に合わせておけばいいだろうが、てめえと俺ならそれで十分だ。実際前回の時だってそれで楽勝だっただろうが」

目の前の男の腕に感心した言葉を吐いていたのは何もまるつきりお世辞というわけではない、ある程度は本音だったのだ。なるほど、

口だけの野郎ではないと多少なりとも感心した。

今は自分が実戦経験の差で上だが、このまま順調に経験を重ねていけばそれこそ自分にとって大きな障害になり得るかもしれないと、そう思った。

だが、そんなクロウの言葉にリインは首を振る

「ナイトハルト教官は如何に個人戦技が卓越していようとコンビネーションを疎かにした場合はそれなりの評価になると仰っていた。初回ならばこそ、多めに見てもらえただろうが今後とも進歩が見られないようであれば点数は推して知るべしだぞ」

「は、別に俺はてめえみたいな優等生じゃねえんだ、評価が落ち込もうが痛くもかゆくも……」

「座学の方でサボりまくっているのか？ 大方腕に自信がありなところを見れば、その分を実技でカバーする気だったように思えるが」
「ぐぬっ！」

痛いところを突かれたのだらうクロウはそんな凶星を突かれた声を挙げて、リインはそんなクロウになおも言い募っていく。そんなリインの相手をしながらクロウは……

（落ち着け、こいつとの付き合いもペアを組んでいるだけだ。だったらそれが終わるまでの辛抱だ）

そんな風に考える。

クロウは気づかない、仮面を被って潜入しに来たツールズにおいて気が付けば目の前の怨敵の息子の前でのみ、素顔のまま接している事を……そしてそんな目の前の人物の相手とのペアを解消したいというクロウの願いは図らずもすぐに叶えられる事となる。

「新しく武術の時間を受け持つことになった、サラ・バレストアインよ。よろしくね」

講堂にてウインクをしながら季節遅れの新任の教官の挨拶に生徒達は色めき立つ。特に挨拶をしたのが妙齢の美女のためなのだろう、一部男子生徒は色めき立っている。……そんな色めき立つ男子生徒達の大人なお姉さんに対する淡い思いは次の自由行動日昼間から

ビールをかつ食らう彼女の姿が多数目撃されたことによりはかなく散ることとなるのだが、それは余談である。

「以前よりナイトハルト教官は正規軍との兼務で忙しく、その状態で軍事学と武術の二つの時間を受け持つというのはあまりにも彼の負担が重すぎるのでな。バレストライン教官の仕事の都合がついたためにこうして季節遅れではあるが、諸君に紹介させてもらう事となった」

そんな学院長からの挨拶を受けてクロウはどこか冷めた思考で別の事を考えていた

(は、これであの野郎との付き合いも終りか。せいせいするぜ)

教官が変わった以上やり方や内容も諸々変わってくるだろう、そうなれば晴れてコンビ解消だとクロウは考える。いつの間にか自分から鉄血宰相の実子と友達となつて情報を搾り取るために利用するという発想が抜け落ちていく事に気づかないままに。

「あ、今から名前を呼ぶ子は用事があるからこの後旧校舎の方に来てね。えーと1年I組リイン・オズボーン、同じくアンゼリカ・ログナー、1年III組ジョルジュ・ノーム、1年IV組クロウ・アームブラスト、同じくトワ・ハーシエル。以上5人よ」

自分とリインの縁が切れていなかった事にガツカリしたのかホツとしたのか良くわからぬ思いをクロウが抱かされるのはそんな事を考えたほんの数分後の事であった。

「バレストライン教官、それで何故自分達は呼び出されたのでしょうか？ 聊かどのような意図があつてか、判断に困る人選なのですが」

チラリと共に呼ばれた級友達を窺いながらリインはそんな風に目の前の人物を問いただす。実技の実力でならばフリーデルが居ないのが不可解であるし、問題児のみを集めたというわけでも優等生だけを集めたわけでもない大よそ意図の読めない人選であると。

「慌てない、慌てない。せっかちな男は嫌われちゃうわよ」

そうしてはやるリインを嗜めるようにサラはウインクをする。こ

の年頃の少年ならばこういった年上の美女にこんな思わせぶりなことをされれば多少なりとも照れたりしても良さそうなものだが、リンは全く持って揺るがない。あるいは彼の敬愛する姉であるクレアにでもされれば赤面の一つでもしたかも知れなかったが、サラ相手だところの無反応ぶりなのは本能的に彼女の駄目な部分を感じ取っているからだろうか。

「……………」

「そんないや、そういうの良いですからとでも言いた気なりインの冷めた様子にサラは若干引きつった笑みを浮かべた後にゴホンと空気を入れ替えるように咳払いをして

「今回君達を呼んだのはほかでもない、開発中の新型戦術オーブメントの試作品のテスター。それをやらしてもらうためよ」

「質問があります、何故このメンバーが選ばれたのですか？」

「新型機能の適性の問題らしいわ。詳しい話はそれこそ専門の技術屋でもないしわからないと思うわ」

アンゼリカの問いに素気なくサラは答える、そうしてニヤリとした笑みを浮かべて

「まあ、習うより慣れろって事で」

そしてその言葉と共に5人の居た床に大きな穴が空き、纏めて地下へと落とされる刹那リンはとっさに傍にいた大事な友人の少女を抱き寄せ庇うのであった。

「アイタタタ、クロウ大丈夫？」

床へとしたたかに打ちつけた尻をさすりながらジョルジュは友人であるクロウへと問いかける

「ああ、受身は取ったし、どうやら怪我しないように床もクッションになっていたみたいだからな。この程度大したことねえよ」

「へ〜流石だね。えっと後の三人は」

そんな風に二人が会話していると

「リ、リイーーーーー！！！！ー、君はドサクサに紛れてなんて羨ましいことをしているんだ！！！！」

等という叫びがすぐ近くから木霊したのでそちらの方を見てみると

「え、えつとリイン君……」

「……………すまない、とつさに危ないと思っただけで決して他意はなかったんだ」

そこにはリインに大事そうに抱きしめられながら顔を赤くするトワの姿と、そんなトワに詫びるリイン、そしてそんな二人を正確にはリインを見つめながらこの泥棒猫が！とでも叫び出しそうなアンゼリカの姿があった。

「ねえ、クロウ。オズボーン君ってスゴイ真面目で冗談とか通じない人だっと思っていただけで案外面白い人なのかな？」

「……………最近、俺もなんだかそんな気がして来たぜ」

どうにもあの一件以来憎き仇の息子のエリート軍人候補生という喧嘩した時に抱いていた印象とかみ合わないなどと

「さあ、そこに直れリイン！トワが良いと言っても私が許さない！友として彼女の代わりに私が君を殴ろう！」

「よし来い、アンゼリカ！このような不埒な行為をした男には罰があつてしかるべきだ！俺のこの咎、その拳で裁いてくれ!!!」

「ふ、二人ともく私は気にして無いんだから辞めてよー」

愉快的漫才を目の前で繰り広げている三人を見ながらクロウはため息をつくのであった。

鉄血の子とARCUS②

「自己紹介がまだだったな、一応見知った顔ばかりではあるが改めて挨拶しておこう。I組所属リイン・オズボーンだ」

「同じくI組のアンゼリカ・ログナーさ、よろしく頼むよ」

あの後放つて置くそのまま延々と漫才を続けていそうな三人のところにジオルジュが割って入り一応の落ち着きを取り戻すとリインとアンゼリカは改めて自己紹介をしていた。

「あははは、知ってるよ。入学式の時にアレだけ派手に名乗っていたんだもの。僕達の学年で二人の名前を知らない子って居ないんじゃないかなあ」

特にオズボーン君なんか二年の先輩に至るまで知らない人はいない超の付く有名人だと思うけどなどとジオルジュが口にするアンゼリカは苦笑して

「そうは言うけど、当然私の事は知って居るよね？なんて態度でもしも相手が知らなかったら恥ずかしいじゃないか」

「それに今から厄介な課題に共に取り組む仲間なのだ、やはり改めて自己紹介をしておくべきだと思ってるな」

アンゼリカは冗談めかして肩をすくめながら、リインは真面目な様子でそう告げる

「IV組のトワ・ハーシエルです。二人とは実技はそんなに得意じゃないけど足を引っ張らないように頑張るからよろしくねー」

続いてトワが元気一杯の笑顔で

「皆して有名人の中でなんだか気が引けるけどIII組所属のジオルジュ・ノームだよ。技術屋だから何かそっち方面で困ったことあったら相談して欲しいな、一応こっちのクロウとは入学以来の友人同士になるかな」

「改めて紹介する必要も無いだろうが、クロウ・アームブラストだ。どうせこの場限りの付き合いなんだ、別によろしくしてくれなくてもいいぜ」

その体つきも合間って温厚そうな印象を与える笑顔を浮かべて

ジオルジュが、ぶつきらぼうな様子でクロウがそれぞれ答える。そんな自分を面白げに見つめているアンゼリカに気が付いたのだろう、クロウが不機嫌そうに問いかける

「……………何がそんなに面白いんだい、ログナーさんよ」

「いや、ずいぶんと良い顔をするようになったなと思ってね」

「はあ!？」

クスリと笑いながらそんな事を言うアンゼリカにクロウはコイツは何を言っているんだとばかりに

「おいおいおい、アンタ目玉が腐ってんのか？今の俺のどこが良い顔だったんだよ。こちとら変な奴とようやく縁が切れると思つてホツとしていたのに、テスターだかなんだかを有無を言わさずやらされてその変な奴と強制的に一緒にされる有様だ。最悪の気分と言つていいぜ」

「変な奴と強制的に一緒？なんだクロウ、貴様アンゼリカと旧知の仲だったのか？その割には随分と他人行儀だが」

「てめえだよてめえ！てめえがその張本人だ！何自分は無関係ですみたいな顔してんだ!!」

キョトンとした様子で大よそこの場で居る中で客観的に見て、最も変と思われる人物を挙げたリインにクロウが食つて掛かる。確かにパツと見の印象で言えば鉄血宰相の息子という肩書きに見合つた優等生らしいリインとログナーの息女という肩書きに見合わないアンゼリカ、どちらが変な人物といわれれば大抵の人は後者を挙げるだろう。しかし、今クロウの頭を悩ませているのはアンゼリカではなくリインの方であつた。

そんな二人の様子を見てアンゼリカが笑いながら告げる

「ほら、そういうところだよ。以前までの君だったら如何にもな気さくな不良生徒と言つた仮面を被つて適当にやり過ぐしてははずさ。でも今の君はとっても自然にありのままの自分を出しているように私などには見えるがね」

そのアンゼリカの発言にクロウは一瞬息を呑む。そんなクロウの様子を見てどうやら自覚が無かつたみたいだねと呟くアンゼリカに

友人であるジョルジュも続けていく

「こういつたらなんだけどさ、前までのクロウってなんだかどこか無理しているなって感じてたんだ。でも、オズボーン君と仲直りしてからのクロウはすごい自然体になった気がする」

「うん、そこまで親しかつたわけじゃないただのクラスメイトの私が言うのもなんだけど、以前までのクロウ君よりも今のクロウ君の方が良いと思うし、リイン君もどこか雰囲気柔らかくなったと思う……えへへ、なんだか男の子同士の友情って感じて羨ましいなあ」

周囲から見た今の二人がどのように見えるのかをトワはそうやって口にして

「いや、男同士でもあの二人みたいに殴り合いの喧嘩して、それがきっかけで仲良くなるとかいう小説みたいな話はほとんど無いからね、トワちゃん」

ジョルジュがそう突っ込みを入れて

「ふふふふ、羨ましがる必要はないさトワ。君にも私という友人がいるじゃないか！さあというわけで男共が羨ましがるような女同士の友情をたつぷりと深めようじゃないか!!」

「わ、わわわ、急に抱きつかないでよアンちゃくくくん」

一歩踏み外すと百合の花が咲き乱れそうなることをしだした女性陣を尻目に

「……貴様と俺は既に友人同士だったのか、クロウ？」

そんな天然ボケなリインの言葉を聞いて

「知るか!!」

本当に何なんだこいつ等とはとクロウはいつの間にか仮面を自然と外している自分に戸惑いながらも、そんな叫び声を挙げるのだった。

「しかしまあテスターと言われてこんなところに叩き落された時は何をさせられるかと思ったが、結局やることと言えば徘徊している魔獣とやりあう位か。聊か拍子抜けと言えば拍子抜けだね」

あの後新型戦術オーブメントの試作機とやらを装備して道を進み始めた5人だったが学年トップクラスの实力者を三人有しており、特

に不和なども抱えていなかっただけかあつさり道を進んでいった。そんな状態にアンゼリカは肩をすくめながら呟く

「ふむ、確かにこれならばこんな大掛かりな仕掛けを施さなくても街道に出て魔獣退治をすれば良かったのではないかという感は否めないな」

そのほうが市民の役にも立つし有意義だろう、などとリインにしては珍しく教官に用意された課題に疑義のようなものを抱きながらリインが応じる。

「うーんこの旧校舎でやらせる事に何か意味があつたのかな？ ドライケルス大帝が直々に建てた由緒正しい場所だもんね」

トワは旧校舎という実施場所に着目した中

「いやー僕が思うに、街道でやるってなつたら逃げ出しそうな男が居たからじゃないかなと思うよ」

等とジョルジュがチラリと横にいる入学以来の付き合いの友人を見ながら述べると

「はははは、なるほどなるほど。確かにトワとリインだったら二つ返事で了承するだろうが、その不良生徒はそんな殊勝な性格じゃないからね」

「新型戦術オーブメントのテスターに選ばれるなど光栄です！ 加えて民の安寧を護るために魔獣を退治するのも軍属として当然の勤め！ 喜んで協力させて頂きます！」 だとか「え、えっとどこまで力になれるかわからないけど精一杯頑張ります!!」などと言う優等生の友人二人の姿と、それとは対照的に行方を眩ませて後日リインにくどくどと説教をされるクロウの姿を思い浮かべて、アンゼリカは笑いながらジョルジュへと応じる

「そういうてめえはどうなんだよ、アンゼリカ」

そんなアンゼリカの様子に若干イラツときたのだろう、ログナーとかは堅苦しいので名前で呼んで欲しいという相手の希望通りにクロウは目の前でこちらを見つめながら大笑いをしている女へと問いかける

「ふ、愚問だね。トワが居るのならば例え火の中だろうと水の中だろ

うと私は全力で駆けつけるさー！」

ま、一番興味があるのはそんなところよりもトワのスカートの中だけどねと告げるアンゼリカにトワは顔を真っ赤にしてもーアンちゃん！などと怒る

「……聞いた俺が馬鹿だったよ」

「ま、それにだ」

そんなアンゼリカにクロウが呆れていると今度は一転アンゼリカは真面目な表情を浮かべて

「リインじゃないが、領民を護るのは貴族の義務。此処はトリスタ、ログナーの領地ではないし、そもそも勘当寸前の放蕩娘にこんな事を言うのは資格はないのかもしれないが、それでも人として護らねばならない一線がある事はわかっているつもりさ」

そんな事を告げるアンゼリカにリインは友を誇るように満足気に領き、トワは感動したように「アンちゃん……」などと呟く。そしてそんな様子にクロウはなるほど、ふざけているようでこういう部分があるからこそ糞真面目なオズボーンとも特に衝突する事無く入学以來つるんでいたのかと納得の表情を浮かべる。

そんな風に思う事自体がもはや、利用価値のある怨敵の息子に対するものではなく、つるんでいる友人に対する評価そのものである事にクロウは未だ気づいてなかった……

「ヴァンダールが双剣！とくと味わえ、ラグナストライク!!!」

全身を包む淡い光とまるで仲間達が何を考えて居るのか、何を見ているのかがわかる奇妙な一体感を味わいながら、その言葉と共に仲間が作ってくれたチャンスにリインがとっておきの一撃を叩き込む。

頑丈で生半可な攻撃では傷をつけられず、少しの傷程度ならば即座に回復してしまうというのなら最大の火力をぶち込むまでだ！とでも言わんばかりに。

そしてその攻撃を受けたガーゴイルは流石に許容範囲を超えたのだらう、その機能を停止させた。

「ふう、やれやれ最後にとんだサプライズが待っていたね。全く誰だ

い拍子抜けなんて言ったのは」

「君だよ君」

さっきの自分の発言を棚上げにするアンゼリカへとジョルジュは呆れ顔で突っ込んでいた。

「ふう……こんなものまで居るなんてビックリしたねえ。でもリイン君はやっぱリスゴイなあ、私も座学は自信あるけど実技はいまいち……」

「はは、トワだって導力銃とアーツの腕は中々のものじゃないか。多分この調子で努力すればそのうちに……トワ！まだだ!!」

へ？と呆けた顔をするトワを他所にリインは必死にトワに向かって攻撃を繰り返そうとするガーゴイルを止めるべく駆け出す。

(間に合わんッ！)

リインは必死に庇おうとするがそれもむなしくトワへとガーゴイルの手が振り下ろされようとした刹那、再びリインの身体を淡い光が覆い……その振り下ろされようとした腕が銃弾によって弾かれる

「リイン！今だ!!!!」

そんな掛け声を聞いてリインは再度その剣をガーゴイルへと叩きこみ、その首を両断し、今度こそガーゴイルは正式に停止するのであつた。

「トワ！大丈夫か！怪我は無いか!!」

「う、うん大丈夫だよ」

必死の形相でトワへと駆け寄つたリインはそんな少女の言葉にホッと胸を撫で下ろす。

「ごめんね……足を引つ張っちゃって」

「いや、残心を疎かにしていた俺の責任でもある。何にせよ無事ではなかったよ」

そうして怪我が無くて本当に良かったと安堵のため息を漏らした後

「クロウ、本当に助かった。ありがとう、俺の大切な友人を助けてくれて」

そうして右手を差し出してくるリインを他所にクロウは一瞬忘我

の境地へと至っていた。

気が付いたら身体が動いていた、そう評する以外にない状態だった。

打算も何もなかったただ、危ないとそう思ったら当然のように目の前の男を、憎い仇の男の息子を援護していた。

いや、そもそも冷静に振り返ればこのところの自分の行動は無茶苦茶だった。

何故自分は目の前のコイツに自分の境遇を打ち明けそうになった？

何故目の前の相手が謝罪してきたときにその罪悪感に付け込もうとしなかった？

何故先ほど自分はコイツの事をリインと、そう名前で呼んだ？

あの心が繋がるような奇妙な感覚、何故自分はそれを悪くない等と思っていた。

そんなすつかり自分が目の前の男によって仮面を剥ぎ取られていたという事に気づきクロウは呆然とする。

「クロウ？」

そんなクロウの様子を訝しがり、リインは親愛の念を露に手を差し出したまま首を傾げる。そんなリインに対して

「へ、礼なんていらねえよ。トワの奴は俺にとつても大切な友達^{ダチ}なんだからな、ダチを助けた事に対して礼なんて不要さ。そうだろうリイン」

クロウは自らも手を差し出して固い握手を交わしていた。打算も仮面も抜きに、自分でも良くわからぬ思いのままにツールズへと入学してから初めて、心の底からの笑顔を浮かべながら。

「やれやれ、僕の方がリインよりも先にクロウと友達になったはずなのになあ。すつかり一番の友達の座を奪われちゃったみたいだ」

「ふふふ、気にかかるなら君もクロウと殴り合いをやってみたらどうだい？ちようど良いダイエツトになるかもしれないし」

「嫌だなあ、アンゼリカ。知らないのかい？デブは一食抜いただけで死ぬんだよ？クロウと喧嘩なんかしたらその日一日はご飯が食べら

れなくなっちゃうよ。君は僕に死ねって言うのかい？」

そんな二人を眺めながらアンゼリカとジョルジュは既に旧知の間柄のように冗談を交し合い

「いいなあ……やっぱりほんのちよつとだけ羨ましいかも」

トールズでの初めての友人が女である自分ではどこか入れない空気をクロウと漂わせているのにトワはどこか羨望の色を覗かせて

……

その場に居た5人はある共通の思いを抱いていた。きっと長い付き合いになる、そんな予感を。

鉄血の子と中間試験

あの後一部始終を見ていたのだろう、タイミングを見計らったように現れたサラより改めて参加の意志を問われた5人は、喜んで協力を申し出たラインとトワ、ARCU Sの技術に興味を示したジヨルジユ、面白がったアンゼリカ、単位に釣られたクロウと各々理由は異なれど結果的に5人全員が参加を表明したのであった。

そうして定期的に武術教官であるサラ・バレスティンと模擬戦闘も含めた実戦形式の演習及び旧校舎にて発生した異変の調査などで行動を共にするようになった5人は何時しか自然と行動を共にするようになり、学院内でも度々話題の種となるのであった。そうしてあの旧校舎での一ヶ月が経ち、学生であるのなら誰もが避けては通れぬイベントがやってくる、そう、中間試験である。

「以前から思っていたがクロウ、お前は授業こそサボっているものの成績自体はそう悪くないな」

何時かした約束通りに首席の座の獲得に意志を燃やす次席入学者が目の前のお友達の勉強を見ながらそう呟く

「ふふん、わかるか。そうさ、俺はやれば出来る男なのだ！」

そんな風に得意気にハインリツヒ教頭に悪い影響を受けなければ良いのだが……などと心配させている張本人がドヤ顔で告げる

「阿呆、やれば出来るのにできていないという事はつまり普段やっていないという事ではないか。全くもって自慢にならんぞ。出来ないのならそれは致し方ないが、出来るのにしないのは単なるやる気の欠如だ」

「へいへい、わかっているよ。誰かさん達がうるさいから最近はそのままでサボってもねえだろ？」

トワとライン、二人の優等生コンビとすっかり交友を持つようになり挟み撃ちとなったクロウは妥協。サボりが以前に比べて半分程度になる快拳を成し遂げていた。

「威張ることか、そもそもサボらなくて当然なんだからな」

ため息をつきながらラインが本当にしようがない奴だとも言い

た気に目の前の悪友を見つめる

「全くだ。猛省したまえ、クロウ！」

「アンも人の事は言えないでしょ……」

自分の事を棚に上げてクロウをからかうアンゼリカに対して今度はジョルジュがため息をつく

「前から思っていたけどアンちゃんもクロウ君も授業をサボってどこで何しているの?」

学校をサボるといふ選択肢などリイン同様に思い浮かんだ事さえない首席入学たる優等生がそう問いかけると

「ふふふ、迷子の子猫ちゃんを家までエスコートしているのさ」

「夢を……買いに行っているのさ……」

「つまりはナンパとギャンブルだね、全くもう二人ともハイソリッヒ教頭にバレでもしたらタダじゃすまないよ」

抽象的な内容にきよんとするトワに対して二人の行動パターンから察したジョルジュがそう意識して

「ふふふ、心配せずとも教頭殿にバレるようなへまはしないさ」

「ああ、俺もゼリカもそんなマヌケじゃねえからな」

出会い方が違えば剣呑な事にもなったであろうクロウとアンゼリカは問題児同士気が合うのだろう。二人して笑いながらそんな事を告げていた

「やれやれ、時折俺は何故お前達と友人をやれているのだろうと思うよ」

口ではそんな事を言っているが本心からそう思っているわけではないのだろう、その証拠にリインの口元は確かに緩んでいた

「は、そりゃこっちの台詞だ。お前みたいな真面目ちゃんとかうしてつるむようになるなんて思っちゃいなかったぜ」

「ああ、そりゃさうだろうね。君たち二人の喧嘩は今でも学院中の語り草なもの、その後さうしてすっかり仲良くなったのも含めて」

なお、あのド派手な喧嘩の後にすっかり親友同士と呼んで遜色の無い関係となったリインとクロウの二人を見てドロテという平民生徒の中の目覚めてはいけない何かが目覚めたようだがそれは全くの余

談である。

「ははは、私も正直オズボーン閣下のご子息様とこうして友人になるとは入学する前は思っていなかったよ」

「私も初めてリイン君の家名を聞いた時はびっくりしちやつたなあ」

入学式の日の事を思い出しているのだろう懐かしそうにアンゼリカとトワがそう口にして

「ククク、お前も将来はあんなごっついおっさんになったりするのかな」

どこかからかうような口調でクロウが口にする。それは怨敵を思いつかべるようなものではなく、単に友人の父親に対する穏やかなもので……

「おお、そこにいるのは我が宿命のライバルたるリイン・オズボーンではないか」

「ご談笑中失礼します皆様」

5人がそうして話しているとえらく仰々しい芝居がかった様子でリインとアンゼリカと同じI組の人間であるヴィンセント・フロラルドがメイドであるサリファを伴い話しかけてきていた。

「……フロラルドか、そちらは勉強せずに良いのか」

「ふふふ、華麗なる白鳥は水をかくのは水面下で行い、決して周囲にはそうと悟らせぬものさ。我がライバルよ」

「……そうか。俺は見ての通り友人達と勉強中だ」

だからとつとどっかへ行ってくれ。そう続けそうになる言葉を飲み込みリインはそう返した。

リイン・オズボーンは実技の時間に自分に敗れてから勝手にこちらを「宿命のライバル」と認定して張り合ってくるヴィンセント・フロラルドを苦手に思っていた。あくまで嫌っているのではなく、苦手としているのである。

これでも彼はリインとトワに次ぐ三位で入学してきており、なおかつフェンシングにしても貴族の嗜みとしてかなりのもので、そういう意味ではトワが実技では中堅の上位なのを考えれば総合力ではあるいはリインに次ぐ物と言っても過言でも無い学年屈指の実力者なの

だ。

加えて真の貴公子たる貴族を自負しているためなのか、リッテンハイムのように殊更平民だからと邪険にあしらったりするわけではなく、むしろ「美しき花に惹かれるのを当然の理。さあ存分にこの私という花を愛でると良い」と言って親切な位でそういう意味ではリインとしてもある程度の好感を抱いているのだが……

「ふふふ、まあ煌く宝石の輝きに磨きぬかれた鋼の輝きが劣るというものでもない、そう卑下する事は無いさ」

「……ああ」

いや、別に卑下してねえよそう言いそうになる言葉をリインはまたも飲み込む。

一人でこうして盛り上がり、やたらと仰々しく気障な様子のヴィンセントを見ているとどうにもそういう気にならないというか、喋っているだけで疲労を催してくるのであった。

「ふふ、それではさらばだ。我が宿敵よ、明日は正々堂々と雌雄を決するでしょうじゃないか」

「それでは皆様、失礼致しました」

そうして去っていく二人を見送った後にリインにどつと疲労が襲ってきた。思わずため息をつくリインに対して

「ハハハハ、だつとヴィンセントの宿命のライバル」

「彼はアレで実力は本物だからね、君もうかうかしていられないんじゃないかなフロラルド家嫡男の宿敵君」

にやつきながらクロウとアンゼリカはそんな風にからかつてきて

「頼むから勘弁してくれ……」

珍しく本当に疲れたような様子を見せるリインにトワとジョルジュは苦笑するのであった。

なお、中間試験の結果は入学時と同じくトワが一位、リインが二位、ヴィンセントが三位という結果となり

宿命のライバル二人はその結果にどちらも悔しさを滲ませるのであった。

鉄血の子と夏至祭

「夏至祭期間中の奉仕活動で、ありますか」

7月。季節はすっかり夏となり衣替えも行なわれ、夏服に身を包んだリインは直立不動のまま敬愛する学院長からの指示を復唱していた。

「うむ、帝都出身でもある二人は当然良く知っていると思うが毎年この時期は帝都では皇族の方々もご出席される夏至祭が執り行われる。当然ながら警備に万一すらあつてはいけない、帝都駐屯の軍総出による嚴重な警備が敷かれる訳だが、そのせいで住民への対応が滞りがちになっているというのが帝都庁及び軍の悩みの種だな」

「どっかの誰かさんが遊撃士協会を閉鎖したままですしね」

ヴァンダイクの言葉を聞き、サラがとある人物への軽い揶揄を口にする。リインもクロウとやり合つてその辺への耐性は出来たのだろう。特に食つて掛かるような真似はしない

「まあそんなわけで我が校に対しても応援の依頼が来ているわけだ」

「だが当然ながら猫の手を出すわけにはいかん、大帝縁の本校の名誉を保つだけの品格を持ち、素行に関しても問題がなく、それでいて一週間程度授業を休んだとしても問題がないような成績優良生、そんな者でなくてはならん」

くれぐれも遊びにいくわけではないのだぞと釘を刺すようにハイリッツヒ教頭は咳払いをしながら告げる

「そこで、本校としては君たち両名を推薦したいと考えているのだよ、リイン・オズボーン君、トワ・ハーシエル君」

笑顔を浮かべながらヴァンダイク学院長は続けていく

「成績は学年次席と首席。授業態度も真面目そのもの、素行に関してもどちらも優良……まあオズボーン君の方はどうやら度々同級生と衝突したりもしているようだが何、その位は若さゆえの元気さというものだろう」

尊敬する学院長にそう言われてリインはクロウとの大喧嘩を思い出しているのだろう、あの時の視野狭窄としか言いようが無かった自

らの未熟さを恥じて赤面した。

「加えて生徒会の一員として生徒やトリスタの住民の悩み相談にも乗り、解決している奉仕的な精神。以上を踏まえて君たち二人が一番の適任だと我々は判断したわけだ。君たち二人にとつても貴重な体験となると思つて居るがどうか？」

ちなみに余談ではあるが、如何にもエリート士官学院生と言つた颯爽とした様子のリインに対してともすると未だに日曜学校に通つていると言つたちびっ子学生さんであるトワの優等生コンビは二人が学院長が言つたように自由行動日等で行動を共にしているのもあつて、学院生とトリスタの街でもお助けコンビとして有名になりつつある。

特にリインはトワと一緒にいると目に見えて表情が優しくなるのも合間つて、そういう関係なのではないかと言う噂がトリスタと学院には広まりつつあつた。仮にリインが日頃のお礼にトワに花でも贈ろうなどと思ひ立ち専門家にアドバイスでも求めた日には花屋の店員であるジェーンは一切の悪意なくグランローゼを薦める事である。

ともかくにもトワと一緒にいる時のリインは一部の貴族生徒に向けてのような挑発的な部分や喧嘩早い部分も鳴りを潜め、逆にトワはトワで一人だと士官学院生とは到底思われないう風貌をしているため目で軍属とわかるようなリインの存在は道理を弁えないような相手を牽制する意味でも必要であり、そんなわけで大よそ二人はリインとクロウのタッグとはまた違った方向性で名コンビと言えるペアであつた。

加えて言うならば二人揃つて帝都に実家があるというのも十に働いた、学年首席と次席の日頃の頑張りに対する報酬も兼ねた里帰りの機会とまあそんなところであろう。

「リイン・オズボーン、喜んで引受けさせてもらいます」

「せ、精一杯頑張りますー！」

片や如何にも軍属といった綺麗な敬礼を見せる少年と緊張していることが一目でわかる肩に力のはいつた少女、そんなどこまでも対照

的なコンビを見ながら学院長は笑顔で頷くのであった。

「へ〜二人揃って帝都で無断外泊かよ。優等生コンビもやるもんだ。精々トワが途中で退学しないとならなくなるなんて事には気をつけろよリイン」

あの後アンゼリカ、クロウ、ジョルジュという友人達3人へと学院長からの打診の件を伝えた二人に対してクロウはからかう様に笑みを浮かべながらそんな事を告げていた

「も、もうクロウ君ってば、私もリイン君も課外活動として行くのであってそういうんじゃないってば〜〜」

「そもそも無断ではなく学院の了解と推薦を受けている。そして後者については無論そのつもりだ、トワに万一の事が無いように気をつけるとも。夏至祭の時期には色んな人間が来るからな。暴漢の類に狙われるとも限らん……最もトワにだって武術の心得自体はあるんだからそこらの暴漢程度では返り討ちだろうけどな」

赤面しながら言うトワに対して冷静に友人が自分たちの身を心配してくれたのだろうと考えて天然ボケでリインが返す

「……いや、俺はそういう意味で言ったんじゃないけどな」

「?ならばどういう意味で言ったんだ。トワの素行の良さはお前も知っているのだから、そういった外的要因以外にトワが退学になるようなケースなど有り得ないとわかっているだろう?」

「……もう良いわ、なんでもねえ。てめえは相変わらずこういうところだからかい甲斐がねえな」

「?良くわからんがすまない」

天然ボケの返しにクロウが閉口する。決して女性に興味が無いというわけではないのだろうが、リイン・オズボーンはこの手の機微に關してトンだ天然ボケをする少年であった。

「ははは、リインは相変わらずって言うか……それにしても帝都か。遊びにいくわけじゃないとはわかっていているけどやっぱり羨ましいな」

笑いながら仲のいい漫才を繰り広げるリインとクロウを眺めながらジョルジュがそんな風に口にして

「まあ成績優良者である二人に対するある種のご褒美というわけだね。実際は欠席扱いにこそならないとはいえ、二人が休んでいる間も授業は進むわけだから逆に大変だとは思うがね」

肩をすくめながらそんな風にアンゼリカが告げると

「ああ、帰ってからはそれを取り戻すべく一層奮起しないとな」

「そうだねリイン君、精一杯頑張ろう！」

怠ける気など毛頭無い二人はより一層の努力を誓い合うのであった。

そんなわけで、すまないけど休んでいる間のノートをまた見せてくれとジョルジュにのみ告げながら……

「エリオット、リインが来週帰ってくるんですって！」

「リインが？ トールズってこんな時期に長期休暇があったりするの？」

もう一人の義弟であるリインから来た手紙を読み始めたフィオナは見ていてはつきりとわかるはしやぎようで、そうエリオットへと告げる。

「ううん、何でも夏至祭の間の奉仕活動として来るんだって。だから昼間は忙しいけど夜は帰ってご飯食べさせてもらっても良いかですって。うふふ、そんな事わざわざ聞いてこなくたってここはあの子の家だから良いに決まっているのね」

腕によりをかけてあの子の好物を作らないとね、ああ、それから学校はどうかとお友達のこととか一杯お話を聞かせて貰わなくちゃなとど張り切る姉を見ながら、今から見ているだけでも胸焼けしてくるレベルで猫かわいがりされるであろう親友を想像してエリオットは苦笑するのであった。

(でも良い機会だから僕もリインにトールズの話聞いてみようかな……)

「趣味程度ならともかく、帝国男子が音楽で生計を立てるなど認められん」

そう自分に告げて来て、当初希望していた音楽院を諦めて、だがさ

りとして完全なる軍属として扱われるようなところでは流石にハードルが高いと思い、ある種の折衷案としてトールズへと進む事となったエリオットはそんな風に思いを巡らせた。

(最近の名門高等学校って側面の方が大きいって言うけど、ラインが行く事にしたくらいだしやっぱり厳しい学校なんだろうな……)

幼い頃から真っ直ぐでオーラフ父さんのような立派な軍人になってギリアス父さんの力になりたいのだと常々言い(その度にオーラフは喜びの涙を流していた)、10歳の頃からは剣術道場へと通う傍らで専属の家庭教師から教えを受けながらひたむきに努力して次席入学を果たした、勤勉や努力家という言葉が服を着て歩いているような様子であったラインの姿を思い浮かべて、エリオットはそんな風に考える。

(父さん……やっぱり僕にもラインみたいな風になって欲しいのかな……)

強い正義感に困っている人がいれば積極的に手を貸す優しさにヴァンダール流中伝という剣術の腕前、常に自信に満ち溢れて颯爽とした様子。非の打ち所の無いエリートというのはラインみたいな人を指すのだろうか。度々エリオットは思ったものだったのだ。そんな良く出来た義息子に比べれば、音楽などに現を抜かしている自分はあるいは出来ない息子なのかも知れず……

そこでエリオットは首を振る。自分の父に限ってそんな事は無いだろうと、幼い頃から惜しみない、思春期になってからは若干うっとおしい程の、愛情を注いでくれた父の姿を思い浮かべて。

だがそれでも、進路を巡って争った父に対して抱いてしまった隔意のようなものは心の片隅に残ってしまい……

「あら、あらあらあらあら」

そんな風に埒も無い思考をエリオットが巡らせていると手紙を読み進めた姉がそんな嬉しそうな声を挙げたものでエリオットの思考はそこで一旦打ち切られる

「姉さん、そんな嬉しそうな声挙げてどうしたの？」

「それがねエリオット、以前から手紙に書かれていたあの子の学校で

の初めての友人のトワちゃんもどうやら一緒に帝都に来るみたいなのよ。うふふふ、未来の義妹になるかもしれない子だもの、失礼のないようにしなくっちゃね」

「……リインには多分そういう気は無い気がするけどね」

家庭教師に来ていたクレア姉さんとなにやらそういうような雰囲気になるたびに決まって「消えろ雑念！未熟！あまりにも未熟!!!修行が足りん!!!この緩みきった根性叩き直してただかなくては！」等とクレアが帰った後に

叫んでヴァンダールの道場へと導力トラムも使わず走っていき、一体何があったのか察せられるボロボロの状態になって帰ってきた親友を思い浮かべてエリオットは苦笑する。

（でもリインがあそこまで褒める位でリインを差し置いて首席になる位だし、きっとそのトワさんもクレアさんみたいな如何にも出来る女って感じの人なんだろうな）

そんな勘違いを浮かべながら、エリオットもフィオナも久方ぶりの家族との再会を待ちわびるのであった。

鉄血の子と夏至祭②

「トールズ士官学院所属リイン・オズボーン、参りました。短い期間になりますますがよろしくお願いいたします、リーヴェルト大尉」

「同じくトワ・ハーシエル、参りました。よろしく申し上げます」

公私の別をつけるべく普段のクレア姉さんという呼び方からあえてリーヴェルト大尉と呼んでくる弟分と如何にも緊張が伝わってくるそんな弟の友人の少女、そんな二人の敬礼に対して返礼をして、優しく微笑みながらクレアは返答する

「はい、二人の着任を確認いたしました。一週間という短い期間になりますますがよろしく申し上げますね。それでは二人にこれから一週間何をしてもらうか、ある御方からお話がありますのでこちらへ」

そうして鉄道憲兵隊の詰所へと案内された場で今回の依頼人でもある革新派のNO2ともされる大物政治家カール・レーグニッツ帝都知事と面会するのであった。

「つまり、この期間の我々はトールズ士官学院の学生ボランティアと言ったものではなく、あくまで帝都庁の嘱託臨時職員扱いという事です」

伝えられた内容を復唱するリインにレーグニッツ知事は頷く。

「うむ、君たちの学院での評判はヴァンダイク殿から良く聞いている。これでもトールズの常任理事も務めている身だからね、成績優秀、生徒会活動で学院の生徒達、及びトリスタの住民の悩み解決も行い、さらには新型戦術オーブメント導入のためのテスターまで努めている、大よそ非の打ち所の無い極めて模範的な生徒だね」

「恐縮です」

「リイン君はともかく私はそこまで大層なものじゃないですけど……」

べた褒めと言って良い知事からの賞賛を受けて二人は照れた様子を見せる。そんなどこまでも真面目で驕りとは無縁な二人に知事は満足げに頷きながらも、少しだけ釘を刺すように告げる

「だが、これまで君たちが行ってきたのはあくまで学生としての奉

仕活動。まあつまりはボランティアのようなもの。当然やってもらう側としても、こういつては何だがそこまでの期待はせずにあくまで手伝って貰っているというスタンスなわけだ。だが今回は違う、君たちに取り組んでもらう課題は全て住民より正式に帝都庁へと依頼があったもの。当然求めるハードルは高くなり、中には高圧的な者もいるだろう。必死になって解決したのに、「対応が遅い」等と理不尽に詰め寄られる事もあるかもしれない。その辺を念頭に置いた上で行動してもらいたい」

これまでラインとトワのトリスタでの活動はあくまで士官学院生、つまりはまだ未熟な若者に対する依頼だとトリスタの住人達も承知していた。故に出来なかつたとしても致し方ない、トワとラインのコンビはこれまで依頼の達成に失敗した事はなかつたが、というスタンスであった。

しかし、今回の帝都での活動は違う、帝都庁の臨時職員、つまりは学生ではなく大人として扱われるのだ。故に学生気分を取り組んでもらうては困るのだと釘を刺してくるリーグニッツ知事の言葉に「承知致しました。我々はトールズ士官学院だけではなく帝都庁、ひいては革新派に対する評判をも背負っているのだと心得ます。決してその名を貶めぬように取り組みます！」

重々しく気負った様子で返事をする二人の姿に知事も満足したのだろう、顔を緩めて

「まあこんな風に少々脅かさせてもらったが正直その辺に関しては私も心配していないのだよ。トールズの教官陣の太鼓判が推されている上に、私自身も理事として君たちの評判や行いなどは一通り確認させてもらった。その上で大丈夫だと判断したのだからね」

そうして緊張を解すように気さくな笑顔を浮かべて、それでは期待しているよと告げてリーグニッツ帝都知事はその場を跡にするのであった。

「うわあ……流石に多いねえ」

「ああ、要請の場所を地図に書き込んでいつてこの日はこの地区を回ると決めておかないととてもじゃないが回りきれそうにないな」

地下道にいる魔獣の退治、行政調査の手伝い、行方不明者の搜索など要請内容を確認しながら二人は地図にメモを記入して行く。

「宿泊客の人が昨日出たきり戻っていない……これとか急いだほうが良さそうだよな」

「ああ、人命に関わるような物は特に優先させたほうが良いだろうな」
流石に慣れたものというべきか二人はそんな風にして順々に段取りと行動計画を決めていく。

(どうやら、私は特に必要ではなさそうですね)

もしも手間取ったり何をすれば良いのかわからない、または何も考えずにとりあえずは行動あるのみといった様子で始めようとしたらそれとなくアドバイスしようと考えていたクレアだったが、二人の様子を見てその必要はないと目の前の二人に頼もしさと共に若干の寂しさを与える。

「それではリーヴェルト大尉、これより活動を開始致します」

そうして粗方方針を決め終えたのだろう、立ち上がり敬礼をしながらそんな事を告げてくるラインに返礼をして

「もしも何か自分たちの手に負えないと思えるような事に遭遇した場合には相談してください。それではくれぐれも気をつけて」

そうして張り切りながら出発する二人をクレアは笑顔で見送り、自らもまた職務へと戻るのであった……

「全くもって人騒がせな、美術部のクララと言い芸術家というのはああいふ人種ばかりか……」

ホテルよりの依頼で無事行方不明となっていた宿泊客を発見したラインはそうため息をついていた。必死に足取りを追うために聞き取り調査を行い、足跡を辿って発見してみれば夢中になって一晩中絵を描いていただけという始末。

美術部の同級生が下校時刻に残って作業に没頭していたので声をかけたら「今私に石が語りかけて来ているのだ！邪魔をするな——」

!!!」とノミを持って追い掛け回された記憶を思い出しながらリインはサント地区にあるホテルを跡にしていた。

「あ、あははは……でも無事で良かったよ本当に。それにそれだけ集中できる位だしきつとすごい芸術家さんなんだよ」

「君は本当に優しいな、教師にでもなればきつと生徒の短所を叱るのではなく長所を褒めて伸ばすさぞ良い先生になるだろうな」

「それを言ったらリイン君もきつと良い先生になると思うけどなあ。駄目なところは駄目ってきちんと叱るけど、絶対に見捨てたりせずどんな生徒にも真摯に向き合う立派な先生に」

そんな風に談笑しながら歩いていき、さてそろそろ適当なところで昼食でもと思ったところで何故か見知った声が聞こえて来てリインとトワは足を止める。

「ふふふ、というわけでどうか猫ちゃん、この後一緒にお茶でも」
「何事も社会勉強ってな。心配しなくても本当にちよつと一緒にお茶飲みながら楽しく喋るだけさ」

戸惑いつつも満更でもなさそうなアストライアの生徒二人をナンパしている颯爽とした様子の女性と如何にも慣れているといった様子の遊び人風な男。

見覚えのありすぎる二人組を見かけてリインとトワは絶句する。

「ね、ねえリイン君あれって……」

そんなトワの戸惑いの声を聞いてリインは黙って天を仰ぐのであった。

「ふふふ、というわけで友人であるリインが道を踏み外さぬようにこうして帝都へと来たわけさ。私のトワと一緒に外泊など学院が認めなくても私が認めない!!!」

「俺は夢を託した馬の様子を見届けに来たんだが、それまで時間があるからこうしてゼリカと一緒にお嬢様方に貴重な体験をさせてやろうと思ったわけさ」

あの後ナンパをしている二人を止めたリインとトワは四人揃って適当な店で昼食を取っていた。

「俺の心配をする前に自分たちの心配をしたらどうだ、今まさしく授業をサボって帝都に来ているなどという大よそ学院生の道から外れたことをしているわけだが」

「もう、アンちゃんにクロウ君もこのままじゃ本当に単位足らなくなっちゃうよ」

そんな優等生の二人の言葉にも二人はどこ吹く風とばかりに口笛を吹く。

「それにリイン君も私も夜はそれぞれの実家に戻るんだから、一緒に外泊するわけじゃないよ〜」

「お、そいつを聞いて安心したぜ」

待ってましたといわんばかりにトワの言葉を聞いてクロウが応じる

「なありイン、お前の養父ってクレイグ將軍だったよな」

「ああ、そうだが」

「当然家はそれなりの大ききだよな」

「狭いなどと思つたことは一度足りてないな。客人を迎えるための客間もある」

「しばらく泊めてくれね?」

「却下だ。お前は何を言っている、とつとと学院に戻れ」

いやー宿泊費がこれで浮くわーと言つた様子で頼んでくるクロウにリインは絶対零度の視線を向けながら答える

「アンちゃんもだよ、もう成績が良いからってあんまりサボっていると来年は私とリイン君を先輩って呼ばなくちゃいけなくなるかもしれないんだからね」

アンゼリカ・ログナーは不良生徒だが成績自体は良い、入学時も中間時も大体10〜20位の順位を獲得している。

「トワ先輩……それはそれで甘美な響きで魅力的だね」

どこか恍惚とした様子を浮かべるアンゼリカにトワはため息を漏らす。

「まあまあ落ち着いて考えてみるよ、ここで俺らが「確かに学校をサボる事なんていけないことだった!ごめんなさい!今からでも学校に

戻って先生たちに謝ります！」なんて言ったとしたらお前らそれを信じるか？」

「いや、全く」

「あ、何か悪巧みしているなってなるね」

「つーわけだ。だったらせつかくだしここはいつちよ一緒に行動して青春の思い出の新たな1ページって奴を刻むとしようぜ」

悪びれずにそんな事を笑顔で告げるクロウにリインは閉口する

「明日には必ず帰ることを空の女神と何より我々の友情に誓おうじゃないか。明日は自由行動日なのを考えれば実質サボったのは今日一日、それにしたって今からトリスタに戻るとなれば最後の1限に間に合うかどうか位。だったら一緒に過ごすほうがよっぽど有意義というものじゃないかい？ 依頼には魔獣退治とかもあるんだろう？ 戦術リンクシステムのテストの絶好の機会じゃないか」

そんな事を堂々と言うアンゼリカに対してリインは深い、それはもう深いため息をついて

「……明日には必ず帰れよ」

そう告げながら学院に戻ったら協力してくれたことを話してなんとか目の前の二人に対する罰が軽くなるように教官達にお願いしようとする隣のとわとアイコンタクトを交し合うのであった。

鉄血の子と夏至祭③

「もう、お友達を連れてくるんだったら手紙にそう書いておいてくれれば良かったのに……」

「いや、俺も連れてくるつもりは一切なかったんだよ姉さん」

嗜めるかのようにそう告げてくる姉フィオナの言葉に対してリインはため息をつきながら応じる。

あの後魔獣退治など腕の立つ人物を必要とし、緊急性が高いと思われる依頼をクロウやアンゼリカもいるうちにこなしてしまおうという事になった四人は午後の時間を使って取り組んでいった。そうして地下道に居る三体の魔獣を、もう閉鎖したほうが良いんじゃないのかこの地下道とはクロウの弁である、倒し終えた四人が地上に帰るともう夕暮れとなっており、明日の再会を約束して四人はヴァンクル大通りにて別れるのであった。

そうしてトワのほうにはアンゼリカが、リインのほうにはクロウが泊まる事となったわけだが……

「しかしお前反則だろう、鉄道憲兵隊にあんな綺麗な姉ちゃんがいるかと思ったら、こんな優しく料理上手で綺麗な姉ちゃんもいるのかよ」

がつがつとフィオナがリインのために腕によりをかけて作った料理を一切の遠慮なく平らげながらクロウはそんな言葉を口にする

「……クロウ・アームブラスト君、君が今平らげている料理はその優しくて料理上手で綺麗なフィオナ姉さんが久方ぶりに帰省した俺のためにはわざわざ腕によりをかけて作ってくれたものなのだが、少しは遠慮というものをする気はないのかな」

16歳という未だ成長途上のリインの肉体はその激しい運動量に見合うだけの栄養を欲しており、リインはそれなりの健啖家であった。フィオナもそんなリインの事は重々承知の上でそれなりの量を用意して待っていたのだが……

「けち臭い」と言うなよ、俺たち友達だろ、な、親友」

突然押しかけた負い目など欠片も感じさせない欠食児童がもう一

名加わってしまったえばこの通りである。用意されたリインの好物であるシチューはクロウの三杯目のおかわり、リインは二杯お代わりしてフィオナとエリオットはお代わりをしていない、によってあつという間に空になってしまっていた。

「感動的な言葉だな、お前がそういう台詞を吐くのは決まって俺に金を無心する時やさもなくばこういう風にずうずうしく何かを頼み込む時だが」

そんな二人の様子を見てフィオナはクスクスと笑い出す

「ふふふ、安心したわ。貴方にもそんな風に仲の良い友達が出来て。10歳の時に軍人になるって宣言して以来貴方が仲の良い友人と言えばエリオット位だったもの」

少なくとも今、目の前で繰り広げたような光景を見ることもリインが友人を家に連れてくるような事も10歳になってからはとんとなくなってしまう。そんな義弟の様子を危惧していたフィオナとしてはクロウのような友人が出来たことは大変に嬉しかった。

「ククク、面白いやお前さん俺とこうして友人になるまでは男友達いなかったもんな。つるんでいるのはゼリカにトワ、後はフリーデルと見事に女ばかりだったもんな」

数少ないリインに対してクロウが優位に立てる部分なのだろう、してやったりと言った顔で入学してからしばらくのリインの友人の少なさを揶揄する言葉を吐く

「失敬な事を抜かすな、Ⅰ、Ⅱ組での友人がアンゼリカとフリーデル、後はランベルトの奴位でそれ以外の貴族生徒からは敵視されるか遠巻きにされるかと言った状態だったのは認めるが、Ⅲ、Ⅳ組の平民生徒との仲は比較的良好だったぞ」

「で、曰くその比較的良好とやらだったⅢ、Ⅳ組の仲で互いに友人と呼べるような関係だった相手はどの程度居た？」

「……………」

クロウたちと行動を共にする前の自分に友人と言える存在が多くない部類だった事を自覚しているのだろう、リインは拗ねたような顔を浮かべてパイと顔を逸らす

「ほれ見ろ。入学してからのお前さんは鉄血宰相閣下のご子息様という名に一切違わぬ、本当に如何にも言った感じのエリート軍人候補生って感じだったからな。平民生徒は平民生徒でとつきにくいって思っていたんだぜ。だから感謝しろよ、これも全部俺がそんな堅苦しい誰かさんに色々と教えてやったあげたおかげなんだからよ」

不良生徒であるクロウと接するようになって良い意味で肩の力が抜けたのだろう、雰囲気は柔らかくなったと最近のリインは評判であった。根底にある真面目さは変わらないものの、寛容になったと言ふべきだろうか。クロウの方はクロウの方でリインと接するようになってサボる回数が減ったので、そういう意味で言えばこの二人を組ませたナイトハルトは慧眼であったと言ふべきだろう。

「そうだな、その点に関しては感謝している。なるほど、ギャンブルにのめり込むと人はこうも無様をさらすものかと言う生きた見本、反面教師の類にはこれまでの俺はめぐり合った事がなかったからな」

そうリインは目の前の悪友のおかげで確かに自分が成長できたという事を認めつつも素直にそういうのは癪なのだろう、度々金欠に陥り金の無心をしてくる事を思い出しながらそんな揶揄するような言葉を吐く

「あははは、でもリインは確かに変わったよね……雰囲気はすごく柔らかくなったと思う。ツールズに行つて良かったんじゃないかな？」
「そうだな、その点に関しては俺も反論する気はないよ。まだ入学してから半年も経っていないが、既にいくつもの掛け替えのない出会いと経験を積めた。クレア姉さんの薦めに従つてツールズにして良かったと心の底からそう思っている」

エリオットの言葉にリインは微笑をたたえながらそう応じる。

「えっと、せっかくだから聞いておきたいんだけどさ、ツールズってどんな感じなのか聞いて見ても良いかな、リイン」

「まず士官学校として見た場合の規律方面ではかなり緩いと言つていいだろうな。先輩や教官に対して敬礼をしなかったところで鉄拳制裁もされないし、そもそも隣にいるような不良生徒が退学を食らわない位だ。そういう意味では士官学校というよりは名門高等学校と

言った側面の方が強いという近年の評判の通りだ」

自分の学院生活というよりは学院そのものがどういふところなのかを気にしているようなエリオットの様子に一瞬疑問を持ちながらもリインは質問に対する答えを述べていく

「だがそれは決して甘かったり優しいというわけではない、むしろその逆だ。トールズ士官学院の卒業生は准尉として任官する列記とした士官候補生。当然正規軍での士官としての水準を満たすように高度な教育が行なわれている。その上で芸術科目のように通常の士官学院では学ばないような事までやるわけだからカリキュラムに関してはかなりハードと言って良いだろう」

トールズ士官学院は皇族が理事長を務め、大貴族の子弟や皇族も通う大帝縁の名門学校だ。それ故に学ぶ内容はかなり広範かつ多岐に渡る。そしてその上で学院長を正規軍元帥が務めている列記とした士官学校でもあるのだ。いわばそのカリキュラム内容は士官学院と名門高等学校双方の内容をやっているようなもの、当然ながら並大抵の人物だと付いていくことは容易ではない。

そこでリインはフィオナが入れてくれた食後のコーヒーを一杯飲み一息入れて

「加えて規律が緩いがそれはつまり翻すと学院生徒に対して自分を律する事が求められるという事でもある。自由行動日がその代表例だな、学院生は今自分が何をすべきか考えて行動する事が求められるわけだ」

規律が緩いというのは一見すると楽なように思える、だがそうではない。何をすべきか指示された方が自分で何をすべきかを考えるよりもよっぽど楽なのだ。入学したばかりの頃のリイン等はある意味ではその典型と言つて良いだろう、仮に中央士官学院へと進んでいれば彼は大過なく将来有望な非の打ち所のない士官候補生として過ごしていたはずだ。少なくともどの部活動に参加するかを迷うような事も、今隣にいる悪友のような存在と出会って派手な喧嘩をするような事もなかっただろう。

そしてそれは何も悪いわけではない、規律や秩序というのは世の中というものを大過なく動かし、回していくために必要なものなのだ。社会機構、軍組織というものを忠実に大過なく回す歯車となること、それは一部の英才にとつては耐え難い苦痛であっても多くの凡人にとつては多少の不満はあれども十分に幸福と言つて良い道なのだ。

だがトールズ士官学院は違う。忠実な歯車ではなく、自らの意志で考え、行動する事を求めてくる。ただ上の意見に唯々諾々と従うだけではなく、自らの頭で考え自らを律し自ら進んで行動できる、そんな人物こそがかのドライケルス大帝の求める世の礎たる人物なのだろう。一見すると士官学校にあるまじき緩さと甘さに見えるがその実高い水準を求めてくる、それが大帝縁の名門校トールズ士官学院なのだ。

「とまあ、この優等生は糞真面目にこんな事を言っているわけだが、みんながみんなこんな感じってわけじゃねえからその辺は安心して良いぜ。俺なんかこうして学校サボって帝都に來ているわけだしな！」
あくまでリインのようなのは一部の優等生だけで色んな人間がいるのだとクロウは若干気圧された様子のエリオットへと安心させるような笑みを向ける。

「威張つて言うことか。そもそもお前やアンゼリカのように学院をサボるような人間だつて十分希少例だろうが」

「お、その様子じゃ自分も希少例だつて言う自覚は一応芽生えてきたみたいだな。以前までのお前さんはナチュラルに自分がやれる事を他人にも求めている節があったからな。出来る奴にありがちな事だから気をつけておいたほうが良いぜ」

自分が出来たのだから他人にとて出来る事だろうと言う他者に求めるハードルが高くなりがちなる種のエリートが持ちがちな悪癖。遊び心が無いのに加えてそういうところが平民生徒からの評判自体は悪くなかったのに距離を置かれていた原因だとクロウは指摘する。
「……そうだな、留意しよう。確かにこのあたりは以前からクレア姉さんやナイトハルト教官、それにレクターさんにも指摘されていたからな」

自覚をしたのだろう、そう素直に頷いた後にリインはリインで友人への忠告を行なう

「だからお前にしてもアンゼリカにしても気をつけたほうが良いぞ、俺やトワはお前もアンゼリカも陰で努力していることは知っているが、そういう部分は得てしまつての俺のように表面上しか見えない周囲からはわからないからな」

サボってばかりなのに成績自体は良い、こういうタイプは得てして真面目な努力家からは嫌われるものだ。頑張っている自分が何故サボってばかりのあいつらに負けているのだと、というわけだ。無論その人物が真実どれほどの努力を重ねているかなど、陰や内面でどれほどの努力や葛藤があるかなどは当人にしかわからないのだが、それでも自分の目に映るものを信じて、映らないものには中々に意識が向かないのが人間である。

そういつた優等生としての観点からリインはリインで目の前の悪友と、今この場にはいない友人を危ぶんでいた。

「へいへい、肝に銘じとくよ」

心から自分達を慮った発言だったからだろう、そんなリインからの忠告にクロウも肩を竦めながら頷く。そうしてリインとクロウはエリオットとフィオナの前で学院での生活についての話で盛り上がるのであった。

「エリオット、今少しいいか」

「リイン、どうしたのわざわざ僕の部屋になんか来て？」

コンコンと自室のドアをノックする音とそんな声を聞いてエリオットは自室へと親友を迎え入れる。あの後一通り話し終えると寡もたけなわとなり、各々自室に、クロウは客間へと、戻っていたわけなのだがわざわざもう一度尋ねてきたリインの様子にエリオットは首をかしげる。

「いや、なんというか突然ツールズについて尋ねてきたからどうしてだろうと思つてな、少し気にかかったんだ」

「ああ、そつかなるほど。そういえば言つてなかったね、理由としては

簡単だよ。僕も来年からツールズに通うことになりそうだからさ。まだ試験に合格していないからあくまで予定だけどね」

どこか陰のある笑顔を見せながらそう告げてくるエリオットの言葉にリインは目を丸くする

「いや、だけどエリオットの夢を確か音楽家で音楽院に進みたいって話だったじゃないか、なんでまた急に」

「父さんがさ……趣味でやるなら良いけどそれを仕事にする事なんて許さないって……それで士官学校の中でも芸術科目とかがあるツールズにする事にしたんだ」

どこか諦めの色を見せながらそう告げて来る親友の姿にリインは「将来自分がプロになって演奏会を開く事になったらリインを真っ先に招待してあげるからね」と笑顔で告げて来たかつての言葉を思い出して……

「でも……その、良いのか？演奏家になるのはエリオットの将来の夢だっただろ？」

本当にそれで良いのかと問いかけるリインの言葉にエリオットはどこか諦めの色を漂わせて

「しようがないよ……父さんが駄目だって言うんだもの……僕はリインみたいに強い意志を持ってないんだ。リインみたいに父さんに反対されたとしても絶対にこの道を突き進むんだ！なんて出来ないよ……」

「……………」

父親に逆らっても、自分に対するどこか羨望の混ざったエリオットのその言葉を聞いた瞬間にリインの思考が真っ白になる。

軍人になるというのはリインにとって幼い頃からの憧れであり、夢であり、目標であり当然の事であった。そして二人の父は全力でそれを応援してくれた。

クレアとレクターという優秀な家庭教師からの教育、ヴァンダールの剣術道場への紹介、父ギリアスは約束どおりに自分が軍人になるにあたって最高の環境を用意してくれた。

養父であるオーラフにしてもそうだ、リインが軍人になるのだと宣

言したら涙を流しながら大喜びして時間のあるときに貴重な話や軍人としての教えを授けてくれた。

そう、リイン・オズボーンには親に将来の夢を否定されたり、反対されたという経験がない。彼の周囲は皆こぞつて彼が軍人となるという夢を応援してくれたからだ。

だからこそもしも、もしもオーラフが、そしてギリアスがある日軍人になるなど言い出した時果たして自分はどうするのかという事を初めて想像してリインの思考は硬直する。

例えばある日、父ギリアスがお前には軍人にはなく政治家になつて貰いたい、あるいは外交官や行政組織の官僚と言つた職になつて貰いたいと言つてきた時に自分はどうするだろうか？

関係ない、軍人になるのは自分自身の夢なのだからどれほど父さんが反対してきたところで俺は軍人になるのだとそう胸を張つていえるのだろうか？

言えないのだとすれば、あるいはそれは軍人になりたいという夢は自分自身の意志なのではなくただただあの日の約束を守つて父に褒めてもらいたいだけというものかも知れずー

「ご、ごめんね、僕が変な事言うから困っちゃったよね」

思考の迷路に迷い込んでしまったリインの様子を自分になんて声をかけて良いかわからずに考え込んでいるとエリオットは判断したのでらう、そんな風に固まったリインへと話しかけていた

「あ、ああ……いや、良いさ別に……」

「何にせよ合格した時はよろしくね、また色々とツールズについても教えて欲しいな」

「もちろん、構わないさ。それじゃあお休み」

そうしてエリオットの部屋を去り、自分のベッドに横になったリインを睡魔が襲い出し、リインはそれへと身を委ねる。もしも父の希望と自分の夢が食い違ったとき、果たして自分はどうするのかという疑問、それが心のどこかに残ったままに……

鉄血の子と夏至祭④

「素晴らしい、まさかまだこの段階で依頼全てを完了させるとは思わなかったよ。対応に關しても文句のつけようがない。なんなら今すぐにも帝都庁ウチに入つて欲しい位だ」

活動の5日目、リインとトワの二人からの報告を受けたカール・レーグニッツをそう目の前の二人を賞賛した。

「恐縮です。ただこれほど早期に達成できたのは報告にも書きました
が友人達二人の協力あつての事です……」

「ああ、君たち二人を心配して手伝いに来たという話だな。はははは、
友達思いの良い子達じゃないか、理事としては無断で休んだ事を嗜めるべきなのだろうが、一応私の方からも学院側にはそれとなく伝えて
おこう」

「あ、ありがとうございます」

クロウとアンゼリカが学校をサボつたのは友人であるトワとリインの二人を心配して手伝いに来たためという事になった。その上で帝都知事からその旨の感謝が伝わればどうにか軽い罰で済むだろうと二人は胸を撫で下ろす……実際おそらく1割位はそういうつもりであつたとリインにしてもトワにしても思いたいところである。

「ところで知事閣下、最終日はリーヴェルト大尉の指揮下に入つて警備に参加するようという指示を受けております。しかし、本来明日までに完了させるようにとのご指示を受けた依頼はこの通り片付けてしまいましたが無何いたしましょうか」

「手伝えることがあるなら何でも仰つてください！」

「ああ、それなら休みだよ。家族と一緒に過ごすもよし、なんなら二人でデートするもよし、好きにしまえ」

意気込む若くして仕事中毒ワーカホリックの二人に知事はそう笑いながら告げる。

「し、しかし自分達はツールズを代表してきているわけですし、これも
れっきとしたカリキュラムのうちです。そのようなわけには……」

「そのカリキュラムを君たちを今日までに終わらせたわけだ。ならば
明日の休みは君たちが勝ち取った権利というわけさ。怠け者だつた

ら働くように尻を叩くのが、逆に頑張りすぎな働き者には休みを取るよう勧めるのが上司足るものの勤めさ。最初に言った通りに今の君たちは帝都庁の臨時職員という扱い、すなわち私の部下なわけだからここは上司である私の指示に従ってもらおうよ」

そこまで言われてしまえばリインにしてもトワにしても従う以外になく、かくして二人に一日の休暇が与えられるのであった。……なおこんな事を言っているカール・レーグニッツ自身はかれこれ一ヶ月もの間自宅に帰っていない激務に追われているため、彼は彼でそのうち休暇を取った方が良いだろう。

「お休みか……どうしようかリイン君？」

報告が終り、その場を後にしながらそんな事をトワはリインへと問いかけていた

「俺はせっかくだから道場の方に顔を出してみようと思ってるよ、トワはどうするつもりだ」

「うーん私は午前中は実家のお店のお手伝いでもしようかな……あ、そうだリイン君が良かったらうちでお昼でもどうかな？おじさんとおばさんが是非一度来て貰いなさいって言ってて、うちはヴェスタ通りだからライカ地区からも近いし」

実家に招待しているがトワの方に他意はなくあくまで大切な友人を誘っているつもりである

「そういう事ならお邪魔させてもらうかな。午後はせっかくの夏至祭なんだし、俺たちも一緒に帝都巡りでもしてみようか」

完全にデートの誘いなのだがリインに全くそのつもりはない。単に大切な友人と過ごすという程度のつもりである。以前までのリインだったら午後もヴァンダールの道場で修練に励んでいたと思われるので、この辺り大分友人達に影響されて固さが取れたというべきだろう。

「そういう事ならお昼くらいになったら私が迎えに行くね！ヴァンダールの道場だったら有名だから私もわかるし、逆にライカ地区のハーシエル雑貨店なんて言われてもリイン君の方はわからないでしょ？」

道場の他の人間から見れば完全に恋人を昼ごはんに迎えに来た彼女のそれだがトワのほうにその辺の自覚は重ねて言うが一切ない

「そういう事ならお言葉に甘えさせてもらおうとするかな」

そんな傍から見るとどう考えてもデートの約束を取り付けたような状態で二人は別れるのであった。

「ふむ、どうやら修行は怠ってはいないようですね。それに何やら良き出会いにも恵まれた様子。この調子で行けば、皆伝へ至るのもそう遠くはないでしょう。今後とも精進を怠らぬように」

「は、ご指導ありがとうございます！」

息を荒げながらそう、リインは師であるオリエ・ヴァンダール師範代へと礼を行なう。自分なりに成長したつもりだったがまだまだ道のりは険しい。単純な技術などではない、何か分厚い壁のような物それをリインは目の前のオリエから、武術教官であるサラとやり合ったとき同様に感じていた。

「そう焦らずとも順調に成長しています。後はきつかけさえあれば貴方ならその壁を越えられるでしょう」

「きつかけ……ですか？」

「ええ、そうですね。自分で考えなさいと言いたいところですが少しだけ助言をするならば、ヴァンダールが何のための剣なのか。そして貴方が何のために剣を振るうのか、それを今一度考えて見なさい。貴方が壁を越えるきつかけはそこにあるでしょう」

それだけ告げるとオリエは言うべきことは言ったとばかりに他の門下生の指導へと移る。そしてリインは考え出す、ヴァンダールの剣とは守護の剣である。皇族の守護役を任じられていることからわかるように主君を護るための剣で、その剣はアルゼイド流とは対照的に守りに重きを置いている。そして自分が何故剣を振るうのかといえればそれは……

「リインさんー！勝負、お願いできませんか。今日こそ貴方から一本とって見せます！」

リインが考え込んでいるとそんな風に威勢よく3月まで毎日顔を

合わせていた弟弟子たるクルト・ヴァンダールが話しかけて来ていた。

クルト・ヴァンダールはヴァンダール家の当主マテウス・ヴァンダールの後妻オリエ・ヴァンダールとの間に出来た次男坊である。彼とリインが出会ったのはリインがヴァンダールの門下生となつてから3年が経過した13歳、クルトが10歳の時であった。

共にヴァンダール流の大剣術の方ではなく双剣術を使う事、年齢が近くどちらとも真面目で向上心が強いことも合間って良く剣を交わし、これまでのところなんとかリインは年上の意地で全勝している、そこそ門下生の間では本当の兄弟ではないかと思われる位に仲が良かった。

「良いだろう。だが俺とてツールズで遊んでいたわけじゃない、そう簡単にはいかせんぞ」

「望むところです!!!」

ヴァンダールの双剣術その二つがぶつかり合う。振るう流派が同じでリインにしてもクルトにしても良く似たタイプである。どちらも力により、押切る剛剣術ではなく速度と技をこそ重視するタイプ。振るう流派が同じの上、戦闘スタイルまで似通っているならば必然的に実力差が如実に現れる事となり……

「俺から一本取るのはまだまだ先みたいだな、クルト」

中伝であるリインに対して初伝であるクルト、16歳であるリインに対して13歳のクルト、技量も体格も上をいつているのに加えて仲間と共に旧校舎の探索にサラ教官からの指導と言った実戦経験も蓄えつつあるリインに現状のクルトが勝てる道理はなく、クルトは悔しさと同時に越えるべき身近な目標、尊敬する兄弟子が変わらない事を喜ぶような表情を見せながら、何度も何度もリインへと手合わせを願ひ出るのであった。

「ふむ、そろそろ昼時ですね。一旦、休憩にするとしましょうか。リイン、午後はどうするのですか」

「良かったら昼食も一緒にどうですかリインさん、せっかくですので学院での話もいろいろと教えて頂きたいですし」

「ああ、そうか。クルトはセドリツク殿下の守護役になるんだから2年後にはトールズに入学する予定なんだったな」

「はい、リインさんとは入れ違いになってしまるのが聊か残念ですが……」

「俺としても残念だよ。せつかくだから色々と話したいところだが生憎今日は先約があつてな」

「先約ですか？」

そうしてクルトがキョトンとした顔を浮かべると

「し、失礼します。え、えーとこちらにリイン・オズボーンさんがいらっしやると思うんですけど……」

そんな可愛らしい少女の声が聞こえて来たのでそちらの方にクルトが意識を向けると

「トワ、わざわざ悪いな」

見たことのない柔らかな笑顔をその少女に対して向ける兄弟子の姿があつて

「と、いうわけなんだクルト、今日は昼食を彼女の家にお呼ばれしていて、午後は彼女と一緒に夏至祭を見て回る予定でな。冬の長期休暇の時にはまた帰省して道場に顔を出すつもりだから、その時にでもまた話そう」

「い、いえこちらこそ無粋な事を言つてすいませんでした」

何故か焦つたような様子を見せるクルトを訝しがりながらもリインは師に対して一礼を行なう

「ご指導ありがとうございます、師範代。次は冬に顔を出す予定です。ですのでその時はまたよろしくお願いいたします」

「精進を怠らぬように励みなさい。また一回り成長した姿を見るのを楽しみにしていますよ」

そうしてどちらも柔らかな表情を浮かべ、談笑しながら去っていく兄弟子とその恋人の姿をクルトは呆然とした様子で見送っていった。「そんなに呆けるようなことでもないでしょう、あの子の年齢を考えればそういう相手が出来る事は極めて自然な事です」

「あ、はい母上。それは、仰る通りなんですが……」

真面目で暇さえあれば鍛錬に励み、時折根性を叩きなおしていただきたいなどと申し出て自ら望んで、他の道場生の間で絶対に御免被りたいものとして挙げられている懲罰も兼ねた特訓コースを度々申し出ていた兄弟子の姿とどうにも重ならずにクルトは戸惑いを隠しきれずにいた。

「私としてはむしろ腑に落ちた想いです。以前までのあの子はどこか気負って危うい状態を感じていましたが、今日再会した彼は大分それが消えていました。元々有していた強度はそのままにしなやかさを身につけたとでも評すべきでしょうか、それは貴方も感じたでしょう」

「ええ、なんとというかそれは手合わせをしても感じました。こう言葉では上手くいえませんが……以前のリインさんは燃え盛る焰そのものという感じだったんですが、今日手合わせをした時はどつしりと構える大地のような存在感を覚えたというか……正直以前にも増して今日は勝てる気がしませんでした」

頭をかきながらそんな事を告げる息子の様子にオリエは微笑を浮かべて

「ふふ、陳腐な言い方になりますますがやはり愛の力は偉大ですね。この分ならあの子が皆伝に至るのもそう、遠くない未来ではないかもしれないかもしれません。クルト、貴方も見習わなくてははいけませんよ」

「リインさんを見習うという事には異義はないんですが、流石に今の僕には色々と厳しいですよ母上……」

貴方も早く恋人を見つけたいという母の言葉をそうしてクルトは苦笑いを浮かべて誤魔化すのであった。

リインとトワが恋人であるという誤解がヴァンダールの者達の間で解けるのはこれより4ヶ月後、リインが学院の長期休暇にて帰省する12月になってからであった……

鉄血の子と夏至祭⑤

「今日はお招きいただきありがとうございます。トワさんの学友のライン・オズボーンと言います。彼女とは生徒会で行動を共にして、入学以来多くの事を学ばせて頂いています。彼女と出会えただけで、自分はトールズに進んでよかった、そう思える位の大切な友人です」
そんな風にラインは柔和な笑顔を浮かべて目の前の友人の家族へと挨拶をする。

美男子と呼んでなんなら差し支えない精悍な顔立ち、鍛えられている事のわかる引き締まった肉体、強い意志を感じさせる瞳、綺麗な姿勢、礼儀正しい言葉遣い。まさしく絵に描いたような優等生の姿にトワの家族であるフレッド・ハーシエルとマーサ・ハーシエルは思わず感嘆の息を漏らす。

「も、もうライン君つてば大げさだよ〜」

「大げさなものか、入学以来君には本当に多くの事を教えられた。クロウと和解できたのだから君のおかげさ」

「そんな事ないよ、それはライン君自身が頑張ったからだつてば〜」
「そうやって頑張ろうと俺が思えたのは、君が俺に気づかせてくれたおかげさ。君がいなかったらそもそもクロウと和解しようとはだなんて事自体思わなかっただろうからな」

柔らかな笑顔を浮かべながらトワを絶賛するラインとそんなラインに照れた様子を見せるトワ。そんな光景を間近で見せられて……

「で、二人は何時結婚するのかしら？」

「は？」

「おばさん!!!」

思わずと言った様子でそんな事を口走っていたマーサにラインはポカンとし、トワは顔を真っ赤にしながら反応するのであった。

「ふむふむ、それじゃあ二人は入学式の時に一緒に子どもの落とし物探しをして知り合ったわけね」

あの後ポカンとするリインを他所に盛り上がったマーサと顔を真つ赤にするトワと若干収拾がつかなくなつたところを流石は夫と言ふべきか、フレッドがうまい事にマーサを宥めて落ち着きを取り戻し、帰宅してきた夫妻の息子であるカイ少年を含めた5人で昼食を取っていた。

「うん、そうだよ。最初は親切なお貴族様だなぁって思ったからリイン君の苗字聞いたらビックリしちゃった」

「そりやそうでしょうね、なんたってあの宰相閣下様のお子様だもの。そんな子が通っているだなんてツールズって本当に名門校だなんて実感するわね」

あの宰相と呼んだがその言葉にはかつてのヨアヒムのような憎悪の混じつたものではなく、むしろその逆である畏敬の念が込められていた。帝都の平民たちの中の鉄血宰相の支持は絶大と言って良い。

彼らの多くはこの帝国において鉄血宰相の改革の恩恵を一番に受けている存在と言つていいからだ。鉄道網の拡充による輸送の活発化は、首都である帝都に多大なる経済的利益を

司法改革は平民と貴族に区別される事なき、かつては日常茶飯事であり、バリアハートやオルデイス等では今でも日常茶飯事であるが、貴族の横暴相手に平民が泣き寝入りせずに済む公正な裁判をそれぞれ平民へと齎した。

統治者が民衆の支持を得るに必要なのは公正な税制度に公正な裁判、そして安定した生活。これらを平民へと齎した鉄血宰相は帝都では絶大な人気を誇る。

皇帝より伯爵位を賜りながらも、あくまで自分は平民であるという態度もその人気を後押しした。オズボーン宰相閣下は自分達平民の味方である、それが中央にいる多くの平民たちの認識であった。

「あ、でもその宰相閣下様のご子息にこんな無礼な態度とつちやつて良いのかしら?」

「そのあたりは彼女に最初に会つた際も言いましたがどうかお気になさらないで下さい。父を賞賛していただけるのは息子として誇らしいですが、父の功績はあくまで父の功績です。自分はあくまで彼女と

同じ一介の士官学院生ですので、そのつもりで接して頂けたらと思います」

そんな風に柔和な笑顔で親の威光を借りるような奢った態度を見せずに謙虚なリインの様子にマーサのリインへの評価はますます上がる。端正な顔立ちに、引き締まった肉体、育ちの良さが窺える礼儀正しさに誠実な態度。リインは昔からこういった近所の奥様、おばさんと言った層からの受けが非常に良いタイプであった。

「うーむ、本当に嫌味な位に非の打ち所のない子ね。トワ、こんな優良物件そうそう転がってないんだから逃がしちや駄目よ」

「も、もうおばさん、だから私とリイン君はそういうんじゃないんだってば〜」

「はははは……」

そんなマーサの言葉をリインはリップサービスと姪っ子へのからかいだと思つて居るのだろう、リインは笑つて誤魔化す。

実際のリインは非の打ち所のない完璧超人等ではなく、子どもっぽい部分や時折世間ずれした天然な部分などもあるのが大体そういう要素は年上からは愛嬌として見られるのでおそらくマーサからの評価は変わらないだろう。基本的に年長者からの受けが良い男なのである

「ところでリイン君、トワの学院での様子はどんな感じかな？」

放つて置くとまた盛り上がり出してしつちやかめつちやかになる」と判断したのだろう、フレッド・ハーシエルはまたもや絶妙なタイミングで話題転換を図つた。

「模範生と言つて差し支えないでしょう。成績は首席、授業態度も真面目そのもの、品行方正で、困っている人がいれば手を差し伸べる優しき、彼女のような友人を持てたことを俺の誇りです」

何の銜いもなく一切の偽りなく心からの賞賛をリインは述べる

「そ、それを言うなら私の方だつてそうだよ〜リイン君みたいな立派な友達が出来て何時も私も頑張らなくちゃって思つて居るんだから」「うーん貴方達もういつその事すぐにも結婚しちやたら?」

仲良くお決まりとなつた褒め殺し合いを行う二人を見ながらマー

サはまたもやそんな事をポツリと呟く。

「ふん、宰相の息子だかなんだか知らねえけど、俺はまだお前を認めたくわけじゃないぞ、リイン・オズボーン。トワ姉ちゃんはそう簡単に渡さねえから」

ぶすりとむくれたような様子でそう夫妻の一人息子であるカイ・ハーシエルは告げる

「こーらカイ！お兄ちゃんに対してなんだいその態度は。そんなえらそうな事はもつと真面目に勉強してから言いなさい。このお兄ちゃんはアンタみたいに日曜学校の時に居眠りして先生に怒られるなんて事一回だつてなかったんだからね！」

「う、俺は正義の味方の遊撃士になるんだから日曜学校の勉強なんか必要ないんだよ！」

「何言つてんの、お馬鹿な正義の味方なんて危なっかしくてとてもじゃないがみんな安心して任せられないわよ！」

そうして喧嘩し出した二人を他所にフレッドが申し訳なさそうにリインへと語りかけてくる

「すまないね、リイン君。あの子は昔からトワの事を本当の姉のように慕っているものだから、大好きなお姉ちゃんを取られると思ってきつとすねているんだ。どうか気を悪くしないでくれ」

「お気になさらず。俺も姉が二人居る身です、彼の気持ちはわかるつもりですから」

例えば大好きなクレア姉さんと親しそうにしている男が居たらきつと自分は愉快的気持ちにはならないだろう。この男は果たして姉に相応しいのかと見定めにかかるはずだ。ナイトハルトはリインにとつても幼い頃から面識がある兄のような存在だったから比較的すんなりと受けいれられたが、おそらく身も知らぬ男だった場合はあはいかなかつたであろうとシスコンは我が身に置き換えて、目の前の少年を微笑ましく見ていた。

「なあトワ、前にツールズ士官学院にしたのは奨学金が充実していて広範な知識が学べるからだつて言っていたけど本当にそれだけか？

君の優秀さならそれこそ学術院に行つて成績優良者への無償の奨学金給付だつて十分に狙えただろうに」

あの後談笑しながら食事を終えたリインはトワの部屋へと案内され、トワはあんまり女の子らしい部屋じゃないと恥ずかしがっていたがリインはむしろ感嘆していた、そんな事を問いかけていた

「お祖父ちゃんがね、言つてたの。真実を追究するなら都合の悪いものから目を背けてはならないつて」

そんなリインの問いかけにトワは思案するように目を閉じた後に決心したような優しくも力強い意志を瞳に宿しながらそう告げていた

「帝国は昔から武を重んじているでしょう。それは共和国との数百年の戦いが本能的にそうさせたのかもしれない。そして近年では正規軍と領邦軍が互いに争うように軍備を拡張して、革新派と貴族派の対立は激化する一方。……一部ではひよつとしたら内戦になるんじゃないかと囁かれている位」

宰相へと上りつめた鉄血宰相ギリアス・オズボーンはまず自身の支持基盤たる軍部の人事の大規模な刷新を行なつた。とある貴族派の将校の公表されれば正規軍とエレボニア帝国という国家そのものへの民からの信頼が失墜するであろうある蛮行、それを理由に軍において貴族派の将校を次々と肅清して、オーラフ・クレイグを始めとする優秀な若手の平民将校を次々と取り立てていった。

彼の擁護をするのならはこの人事は概ね実力に見合つたものであり、将官にまで取り立てられた平民出身の将校達はまずその地位に見合うだけの実力と見識を有するものであつた。だが結果はどうあれ、これにより正規軍とは革新派、ひいては鉄血宰相の息のかかつた物となり当然ながら貴族としてみれば穏やかではない。彼らは彼らでそれに対抗するべく自分達の手駒たる領邦軍の増強を行なつていた。

正規軍と領邦軍は本来であれば決して敵対するような関係ではない。領邦軍は地方を守り、正規軍は皇帝の直轄領及び外敵相手からの国土防衛を担つており、協力し合う関係そういう建前となっている。

だがそんな建前は近年の二派の抗争の激化により空しくどこかへと行ってしまい、今では下手をすれば敵国たる共和国よりも互いを敵として想定しているような有様。

正規軍の方は軍部において絶大な声望と威信を誇るヴァンダイク元帥とアルノールの守護者と名高きマテウス・ヴァンダール大將が、領邦軍は光の剣匠と名高くルグイン伯を始めとする中核を担う数多くの将校を弟子に持つアルゼイド子爵がそれぞれ睨みを利かしていなければそれこそ何時些細な小競り合いをきっかけに激突し合ってもおかしくないという有様であった。

だからこそ、そんな状況下でこの国を憂うのならば軍事というものはどう足掻いても避けることは出来ないトワ・ハーシエルは考えたのだ。

「私たちを守ってくれている軍人さん達を貶める気はないけど『武』も『軍事』もやっぱりその本質は『暴力』だと思うから……そこから目を逸らしちゃいけないってそう思ったんだ。……ごめんね軍人さんになるのが夢のライン君にこんな生意気な事言っちゃって」

ああ、そういう事だったのかとラインは妙に腑に落ちた思いを感じていた。大半の人間が何気なく流してしまう自分の『必要悪』という恥知らずにも程があったあの発言。彼女がそこから目を逸らさずに友人である自分と不和を抱えるリスクを抱えても、それを指摘したのは他ならぬそういったものを知り、見極めるためにこそ士官学院へと入学してきたからかと。

「真実を追究するなら都合の悪いものから目を背けてはならない、か」
気がついたらラインは先ほどのトワの祖父をポツリと呟いていた。「きつとこれを忘れちゃいけないだろうな。単なる機械ではない、誇りある軍人になるならば。誰かを守ると言いながら振るう俺の剣も、向けられる側にしてみれば単なる暴力でしかなくて、俺にとって敵であったとしても、誰かにとっては俺にとってのトワみたいな大切な人であるってことを」

「ライン君……」

改めて心に刻み込む、彼女から言われた言葉を。父の行いによつて

生まれた被害者の慟哭を。きつと自分が絶対に忘れてはいけないことなのだ。そうリインは噛み締める。

「改めてこれからもよろしく頼むよ、トワ。きつと君が傍に居てくれれば俺は大事な事を忘れずに、見失わずに済む、そんな気がするんだ」
「えへへ、私はそこまで大層な人間じゃないけど……こつちこそこれからよろしくね」

そうして互いの友情を確かめ合った二人は笑顔でむくれたカイ、にやけ顔のマーサ、微笑ましそうにするフレッドに見送られながら帝都観光へと勤しむのであった……

おまけくく昨夜のクレイグ家くく

「と言うわけで明日は午前中は道場に、昼はトワの家と呼ばれていて午後は一緒にトワと帝都を回る予定だから……ごめんね姉さん、せつかくの休みだから姉さん達と一緒に居ようかとも思ったんだけど」

申し訳なさそうに告げるリインのその言葉に対して

「あらあら、あらあらあまあまあまあ」

フィオナは何故か非常に嬉しそうな笑みを浮かべていた。そんな姉の様子に困惑するリインにフィオナはとても良い笑顔で告げる

「良いのよ、気にしないで存分に楽しんできなさい。でもそうね、そのうち私もそのトワちゃんに会ってみたいわ。多分お父さんもそうだと思いますけど」

「そういう事だったら冬に帰省した時にでも誘ってみるよ、彼女も長期休暇の際には帰省するつもりみたいだし」

そんなリインの言葉にフィオナは笑みを深くして楽しみにしているわね、などと告げる。

(リイン、多分自分のやっている事がどう考えてもデートと言われるものだって自覚がないんだろうなあ……)

そんな親友の様子をエリオットはどこか呆れた様子で眺めていた

……

鉄血の子と夏至祭（終）

「それではお二人とも一週間の活動お疲れ様でした。これにて本演習は終了です」

「本当に苦労だったね二人とも。優秀だとは聞いていたが正直これほどとは思っていなかったよ、私も理事として鼻が高いというものさ」

駅のホームにてクレアと知事はそう笑顔でリインとトワに話しかけていた。

最終日クレア・リーヴェルト大尉指揮下の一時的な隊員として夏至祭の警備についた二人であったがテロリストによって襲撃されるのだと言った大規模な事件なども起きる事もなく、精々が興奮した人間の喧嘩の仲裁だのと言った程度で演習は大過なく終了した。

より正確に言えばそういった反動勢力の類は夏至祭が始まる前までに情報局と鉄道憲兵隊の連携によってすでに摘発されていたのである。氷の乙女クレア・リーヴェルト大尉とかかし男レクター・アランドール特務大尉、リインの師でもあるこの二人は巧みな連携によってリインとトワが行方不明者の搜索や魔獣退治だのと言った仕事に励んでいる間に、反動組織『暁の夜明け』のテロ計画を察知して、これの構成員を拘束していた。

それがリインには若干気にかかる、今の自分が一介の士官学院生に過ぎないことは百も承知している。だが、それでもそこらの兵士よりは腕が立つという自負がある……端的に言えば彼は敬愛する姉であるクレアに頼って欲しかったのだった。そんな弟分の稚気を察したのだろう、クレアはクスリと笑って

「それにしても頼もしくなりましたね、リインさん。初めて会った時はこんなに小さかったのに今では背丈も伸びて、今回の最終日での働きも他の隊員達となら遜色のないものでした。身内最良抜きにそう思いますよ」

「あ……………」

頼もしくなったとそう言われた瞬間にリインの心に燦っていたも

やもやが掻き消え、弾けるような笑顔で答える

「ありがとう、クレア姉さん！……し、失礼しましたリーヴェルト大尉」

思わずクレア姉さんと呼んでしまったリインはすぐに自らの失敗を悟ったのだろう、顔を真っ赤にして取り繕うように上官に対する部下の態度に戻ろうとする。そんなリインの様子をクレアはクスクスと笑って

「もう、演習は終わったんですから何時もどおりの呼び方で構いませんよ。私もそう呼ばれるほうが好きですし」

そうしてリインはますます顔を赤くしてトールズ士官学院次席の優等生、鉄血宰相の息子という顔からただの少年の顔へとなる。

(なんでだろう……クレアさんとはとっても良い人でリイン君と仲が良いのもとっても良い事なのに……)

何故自分はそれを見て奇妙なもやもやとした気持ちを抱いているのだろうか？とトワが自分の思いを不可解に思っ居ると

「トワさんも素晴らしい活躍でした。それこそ私の方もすぐにでも鉄道憲兵隊^チに入って欲しいと思ったくらいです。もしもまだ進路を決めていないのでしたら前向きに検討してみてくださいね」

「は、はい！光栄です!!!」

そんな風に笑顔で告げてくるクレアに答えると、先ほどの不可解な気持ちは消えていたのでトワは訝しながらもそこで思考を打ち切るのであった。

「はははは、あまりに隙がなさ過ぎて正直私の息子と本当に同い年なのかと少々不安になった物だったが年相応のところを見れて安心しているよ」

「ち、知事閣下……ど、どうかその辺にして頂けると……」

からかうように笑顔でそんな事を告げてくるレーグニッツ知事にリインは赤面しながら呟く

「私たちと同年代の息子さんがいらっしやるんですか？」

そんなリインに助け舟を出すべくトワは話題を変えるべく知事へと質問をする

「ああ、マキアスと言ってね、ちょうどリイン君と同じ年になる。親の欲目抜きにしても努力家で自慢の息子なんだが、少々視野が狭い部分があつてね。ちょうど来年ツールズに進む予定だから合格すれば君たちの後輩という事になる、その時は先輩としてよろしく頼むよ」

「わかりました、その時は先輩としてしっかりサポートさせて貰います！」

「自分も入学当初はそう人の事をいえない有様でしたし、きつとご子息も良き友人が出来れば心配せずともその辺はすぐ解消されると思いますよ」

「ふふふ、そうなつてくれれば親としては嬉しいんだが……まあそれも全てはあの子がツールズに受かってからの話だな。こんな事を言つておきながら、もしも落ちてしまう不甲斐ない息子だったらその時は申し訳ない」

そんな風に談笑していると時間が来たのだろう、リーヴス行きの列車の発車時刻となつた。最後に改めて二人は知事とクレアへと挨拶して、かくして二人の一週間にわたる特別活動は終りを告げるのであつた……

「それで、我が不肖の息子の様子はどうか？ 君達の意見を聞きたい」

帝都に存在する宰相の執務室にて部屋の主たる偉丈夫はそう目の前の部下へと問いかけた。

「はい閣下、知識、判断力、戦闘力いずれも卓越しており、今すぐに鉄道憲兵隊に入隊したとしてもなんら問題なく務まる水準かと。鼻肩目抜きにそう判断致します」

努めて冷静にそうクレアは主たる鉄血宰相へと報告する。

「俺も軽く見たけど、大分肩の力が抜けたつていうか大人になつたと思うぜ。以前まではかなりおちよくり甲斐があつたんだが、随分とその辺に耐性が出来たみたいだ」

「いや、兄貴分としては嬉しいやら悲しいやらなどとおどけた様子でレクター・アランドールが続ける」

「にじしし、やっぱりおじさんとしてもリインの事は気になるんだね。なんたって実の息子って奴だもんね」

今度久しぶりに会いに言ってみようかなーとミリアム・オライオンはどこまでも天真爛漫な様子でからかうようにそう口にした

「ふふふ、そうだな。アレは私の息子だ。そのことは隠していないし、周囲もそう把握している。だからこそ意味がある」

「閣下……？」

自分の息子だとそう告げた目の前の主、その口ぶりに不穏なものを感じ取ってクレアは訝しがる。息子だと、そう言いながらもまるでその口ぶりは駒を扱うかのようなもので……

「アランドール大尉、例の2月に予定されているクロスベルに帝国より留学生を派遣するという件、進めておきたまえ。対象となる生徒はトールズ士官学院より選抜するでしょう」

「……あんた、一体、何考えてるんだ？」

帝国の自治州であり一大金融都市たるクロスベルへの派遣留学。表向き理由は大陸最大の金融都市に赴く事でより広い視野と経済的な感覚を養い、なおかつ宗主国たる帝国の威信を示すだけのご大層な名目が色々あるわけだがそんな程度の事のためだけにわざわざこの男が動くはずがないのだとレクターは訝しがる

「ふふふ、何我が不肖の息子の更なる成長の機会を作ってやりたいと、まあそんな親バカな理由だよ。笑ってくれて構わんよ」

「親ばかねえ、かれこれ6年間も会わずに他所の家に預けっぱなしで良く言ったもんだぜ」

そんな風にしてレクターは肩をすくめた跡に「畏まりました、宰相閣下。それでは万事ぬかりのないように進めさせていただきます」

あらゆる交渉を成立させてきた敏腕外交官、そんな仮面を被りかかし男アランドール特務大尉はその場を後にする。

「二人も退出してくれて結構だ。ご苦労だったな、今後も期待している」

「それでは失礼致します」

「それじゃあまたね〜おじさん」

そうして部屋に一人となったオズボーンは立てかけていた写真をわずかな間だけ眺めると再び執務へと復帰する。立てかけてあった写真には亡き妻カーシャが優しく赤子のリインを抱く姿が映っていた……………

鉄血の子と学園祭

リインとトワが課外活動が帰ってから二週間が経った。一人だけ置いてけぼりを食らい、拗ねたジョルジュを宥めるのに少しだけ手間がかかったり、相変わらずARCU Sの運用テストとしてサラ教官にみっちりしごかれたりと言った出来事はあったが、その間概ね平和であった。そうしている間に季節は9月、トールズ士官学院における一大イベント学園祭を控え、リインの所属するI組ではドライケルス大帝を描いた演劇をやることが決まったのだが、そこで一つ大きな問題が発生していた。

「ふふふふ、かのドライケルス大帝を演じられるとするならばこの私
ヴインセント・フロラルドを置いて他にない。我が宿命のライバルた
るリイン・オズボーンが大帝陛下の盟友ロラン・ヴァンダールを、フ
リーデル嬢が聖女サンドロットを演じるならば尚の事」

キザつたらしく、豪放磊落として知られた獅子心皇帝を任せたらど
うなるかを示唆しているような様子でヴインセント・フロラルドが
主張する。

「かの大帝陛下を演じるなどあまりに恐れ多いことだが、こうして私
を推薦してくれた者がいる以上それに応えねばなるまい。ドライケ
ルス大帝はこのヨアヒム・リッテンハイムが努めさせてもらう」

ドライケルス大帝を演じられるとするならばヨアヒム様しかいな
いですよーなどという何時もの取り巻き連中の声を受けながら相手
はかけ離れた尊大さが服を着て歩いている（リイン談）
ヨアヒム・リッテンハイムがそう主張する。

「え、えーと他に誰か主演であるドライケルス大帝に立候補する人や
この人が相応しいという推薦対象はいませんか……居なかったらヨ
アヒム君かヴインセント君、どちらかという事で多数決を取りますが
……」

委員長を務めるオットー・マリィンドルフはこの二人が主演を勤め

たらどうなるかを察したかのように救いを求めるようにそう言った。しかし、手を挙げる者は誰も居ない。何故ならばヨアヒムが立候補してしまったこの状態で立候補すればどうなるかが目に見えて居るからである。

ヨアヒムに公然と対抗できるリインはヴァンダール流の使い手であり、主君に忠誠を誓う真面目な武人というイメージにピッタリという事でロラン・ヴァンダール役に、フリーデルは聖女リアンヌ・サンドロットに内定してしまっているため立候補することが出来ない。そもそもフリーデルは列記とした女性であり、リインはリインで自分が大帝陛下を演じるなど恐れ多いと思ったわけだが、それでもヨアヒムかヴィンセントかというのはあまりに悪夢の二択が過ぎる。

(……リッテンハイムの奴が大帝陛下の役をやったら、俺はロラン・ヴァンダールを演じる自信なんてないぞ)

ドライケルスの盟友ロラン・ヴァンダールが我が身と引き換えに大帝を守るシーンは劇の中盤におけるクライマックスと言って良い。だがしかし、もしもヨアヒムが大帝の役を演じた日にはリイン演じるロラン・ヴァンダールはその身を挺して主君にして親友であるドライケルスを守るどころか平然と暗殺者を素通りさせるであろう。ヨアヒム演じるドライケルスはドライケルスでリイン演じるロランが死んだところで涙を見せるどころか祝杯をあげてしまいそうである。

(かといって代わりにフロラルドというのはあまりにも……あまりにも……！)

まるで上官から作戦のために民間人を見殺しにしろと言われた軍人のような苦悶の表情をリインは浮かべる。ヴィンセント・フロラルドは決して悪い男ではない、いや立派な貴族と言ってもいい。だが哀しいかな、本人は二枚目を演じているつもりでも傍から見ればどう考えてもその様子は三枚目のそれである。役者がよければ芝居は至高という論に則るなら、彼を主演に据えた芝居で至高となるとするなら、それはコメディ作品位であろう。

(誰か、誰か居ないか……リッテンハイムの奴に目をつけられたとしても平然としてられるような家格であり、それでいてドライケルス帝

が務まるような人物は……!」

ドライケルス帝を扱った伝記、史書、小説などは星のようにあるが基本的に共通しているものは、出自に囚われない公明正大な人物であったこと、どこか奔放なところがあり、親友たるロラン・ヴァンダーは度々振り回され苦勞が耐えなかつたこと、それでいて己が身に流れる血に宿る義務を果たすことには真摯であり、心の底から国と民の安寧を願っていたことなどが挙げられる。

(……うん? 出自に囚われず公明正大で奔放なところがあるが高貴なる者の義務に対しては真摯?)

はて、と確か身近にそんなような人物がいたようなとラインの思考がそこで一瞬止まる。

「委員長、もう良いだろう。これ以上は時間の無駄というものだ。早く採決を取りたまえ、最も結果など見えているがね」

「ふふふ、ヨアヒム殿も可哀想に。だが落ち込むことはない、相手があまりに悪すぎた。ただそれだけの事なのだから」

自分が選ばれないはずがないという自信に満ち溢れた様子でそう二人が口にするると委員長は諦めの表情を浮かべたところで

「いや、遅れて申し訳ない。迷子の子猫ちゃんのおうちを捜していたものでね」

そんな言葉と共にアンゼリカ・ログナーが遅れて来たのであった。

そしてその時ラインの脳裏に電流が走る。そうして弾かれるように手を挙げて

「委員長、俺は主演であるドライケルス大帝の役にアンゼリカを推薦する」

そんな風に発言していた。

「貴様オズボーン! 何を言っている!!! ログナー殿は女性だろうが!!!」

「女が男役を演じるのも、あるいは男が女役を演じることも演劇の手法としては然程珍しいことではない、確かそうメアリー教官が以前授業の時に仰っていた気がするが俺の聞き間違いだったかな?」

「うぐ、それは!?!」

思わずと言った様子で食って掛かったヨアヒムであったが、授業自

体は真面目に受けているリインに反論されて押し黙る。

リッテンハイムに目をつけられたところで痛くもかゆくもない口グナー家の息女であり、出自に囚われず平民だろうと貴族だろうと気さくに接する態度、度々ロランの胃を痛める奔放さを持ち、それでいて高貴なる物の義務に対しては真摯である。

うむ、何から何までピツタリだとリインは腑に落ちたような思いを感じていた。アンゼリカ・ログナーが仮に主君であるならばリイン・オズボーンはその身を差し出してでも、親友の命を守ろうとするだろう。

「ふふ、確かに案外嵌り役かもしれないわね。普段リイン君と一緒に居るところなんてまんまドライケルス大帝とロランの二人組って感じだし」

フリーデルがそんな風に口にするのと教室の中をあくと普段の二人の様子を思い出すかのように納得の声漏れる。奔放な主君とそれに胃を痛める真面目な従者の親友コンビ、なるほどまさしくそんな感じだと。

「し、しかしログナー殿がドライケルス帝を演じるという事はすなわち君はログナー殿とラブシーンを演じるという事になるが君はそれで良いのか……」

獅子心皇帝ドライケルスと槍の聖女リアヌ・サンドロットは恋仲であったという解釈は小説などではかなりの主流と言って良く、今回I組が演じることとなる劇の脚本も例によってその内容を踏襲している。

ロラン・ヴァンダールの死が中盤のクライマックスであるなら、リアヌが最後に死ぬ瞬間にドライケルスに初めて愛していると告げるシーンはこの劇の一番と言って良いのだが……

「正直貴方達二人とやるよりは100倍くらいマシね」

バツサリとそう切って捨てるフリーデルに二人の男がぐふつ等と声を挙げてその場に突っ伏す。言っている事はかなり酷いのだが陰湿さやとげとげしさを感じないのは彼女と言われた男たちの人徳というものであろう。

「いまいち状況が掴めていないがフリーデルとラブシーンを演じられるというのなら、ふふふ、これは引き受ける以外の選択肢はないね」
そう不敵な笑みを浮かべる親友の姿にやはり早まったかもしれない
いと等とリインは早くも推薦したことを若干後悔し始めるのであった。
かくして投票の結果主演である獅子心皇帝ドライケルス・ライゼ・アルノールにはアンゼリカ・ログナーが圧倒的得票率で決まるのであった……

鉄血の子と学園祭②

学園祭の準備が徐々に始まる中、久方ぶりに集まった5人は各々のクラスの出し物について話し合っていた。

「へ〜それじゃあI組は演劇をやるんだ」

「アンがドライケルス大帝でリインがロラン卿だっけ？確かに中々に嵌り役かもしれないね」

「特にお前なんて普段の通りにやっていたら多分そのまんまだろ」

二人からI組の出し物の内容を聞いた三人はそんな風に口にする。

「III組は機械を使ったアトラクション、IV組は猫喫茶だっけか？」

「うん、せっかく技術畑の人間が集まったクラスなんだからその長所を活かそうってなってるね」

「うううう……恥ずかしいなあ……クロウ君の悪乗り提案にみんな乗っちゃって……当の張本人は出し物の総指揮を取る実行委員だからって逃げるし……」

「ふふふ、良くやってくれたクロウ、グッジョブだ！」

「恥ずかしそうにするトワに対してアンゼリカは提案した元凶へと爽やかな笑みを浮かべながらその行いを褒め称える。

「出し物の総指揮か、お前はこの手のイベントは得意そうだな」

お祭り男というのはまさしくこういう奴のためにある言葉なのだろうなどと想いながらリインは苦笑を浮かべる。

「ふふん、まあな。で、実は相談っていうか提案があるんだけどよ」

「提案？」

訝しがるリインに対してクロウはとても爽やかな笑みを浮かべて

「俺たちで演奏会をやるうぜ」

「お前は何を言っているんだ」

学園祭の準備が始まり出して皆多忙を極めていた。当然である、普段の活動に学園祭の準備などと言うものが加わっているのだから楽はずがない。特に生徒会にも所属しているリインとトワの忙しさなど殺人的なスケジュールと言っているいい、そんな中でのこの突然の提案。思わずリインは相手の正気を疑い真顔で聞き返す。

「だから、演奏会しようぜ演奏会。俺たち5人だよ」

「……何がだからなのかさっぱりわからないんだが順を追って説明してくれないか」

何時になく爽やかな笑顔を浮かべてそんな事を言ってくるクロウへと困惑した様子でリインは問いかける。

「2年の先輩達見ているとき、進路だのなんだので色々忙しそうだよな」

「ああ」

「特にお前とトワは多分会長と副会長になるだろうから目茶苦茶忙しいよな」

「決まっているわけではないが、まあ順当に行けばおそらくはそうだろうな」

首席と次席、生徒会役員として活動している実績、教師陣からの評価、それらを客観的に分析してそうなる確率が高いとリインは踏む。自分とトワ、どちらが会長になるかはわからないがおそらくこのまま行けば自分達二人が来年は会長と副会長になるだろうと。

「そうなると来年この5人で何かやろうと思っても中々出来ないわけだ、だったら今年やるつきやねえだろ！青春の思い出を5人で作ろうぜ!!!衣装の調達に関しては俺に任せてくれて良いからよ！」

「いや、しかしだな……」

今のリインは本当に忙しいのだ、ロラン・ヴァンダールという偉大なる先人を演じる事になったリインは糞真面目にロラン関連の史書を読み漁り役作りに取り組んでいた。やると決めたからには全力でやるのがリイン・オズボーン、手抜きをする気など毛頭ない。それに加えて生徒会も当然ながら大忙しで、それでいて学業と鍛錬を怠るわけにもいかない。そんな状況でさらにライブをする余裕など……

「ふふふ、面白いじゃないか。私は乗ったよクロウ、振り付けなどは私が考えさせてもらう」

「導力楽器に関しては僕がなんとか用意してみせるよ」

そんな風にクロウの提案にアンゼリカとジョルジュが思いの外乗り気な様子を見せる。

「良いのか？二人だって暇なわけじゃないだろう？」

ジョルジュは皿組での機械を使ったアトラクションの製作の総指揮、アンゼリカは言わずと知れた演劇での主演である。特にアンゼリカの方はドライケルス大帝の幼い頃からのファンである。どこかの誰かさんからの熱い演技指導が入っており、他のクラスメイ卜達はその誰かさんの意外な一面に困惑させられていた。

「そう思うんだったらもう少し手心というものをだね……」

「却下だ。かの獅子心皇帝陛下を演じる以上手抜きなど一切許されん。全力でやれ、お前はやれば出来る女だアンゼリカ」

有無を言わさぬその口調にアンゼリカは珍しく深々とした様子でため息をつく。

「あははは……アンの方はともかく僕の方はまあ何とかなるよ。みんな優秀だからね、それにクロウの言うとおりせっかくの機会なんだ、この奇妙な縁で知り合った5人で、大切な友達たちと一緒に思い出を作れたらって思うんだ」

出会ってからの出来事（主にサラ教官にしごかれたり、サラ教官に無茶振りされたりなどである）を振り返りながらジョルジュは感慨深そうにそう口にする。

「わ、私も！せっかくだからみんなと一緒にやってみたいな！きつとクロウ君が言ってたように出来るとしたら今年だけだろうから!!」

意を決したようにそう告げるトワの様子にリインも苦笑して

「やれやれ、みんなしてこう言っているのに何時までも反対していたらそれこそ空気の読めない奴みたいじゃないか。わかったよクロウ、俺だってこの5人でせっかくだから何かやってみたって思う気持ち位はあるんだからな。だが演奏会と言われても俺は楽器なんてほとんど弾けないぞ」

「わ、私も楽器の方はからっきし……」

そんな事を言う二人にクロウはチツチツチと指を振って

「心配するな、その辺はちゃんと考えてあるって。ずばりお前達にはボーカルをやってもらおう。まさか歌が歌えないって事はないだろう？」

「そ、そんなに自信があるわけじゃないけど……」

おずおずとした様子でトワはそう答えるがこれは常の謙遜というものだろう。

「国歌と軍歌ならば無論歌えるぞ。士官学院生にふさわしくその辺でも歌ってみるか？」

「アホか！そんなもの歌った日には会場の空気が凍りつくわ!!」

とんだ天然ボケをするリインにそうクロウがツッコミ入れるわ。

「俺らが歌うのはロックってジャンルだ、聞きなれたジャンルをやったらプロと比較されてきついが目新しいジャンルだったら新鮮なのもあつて多少の荒には目を瞑ってもらえるからな」

「なるほどね、確かにメアリー教官の指導を日頃から受けている吹奏楽部の演奏もある以上、似たようなお上品な曲をやったらそこと比較されてしまうからね」

「技術が稚拙な分は勢いでカバーってわけだね」

合点が行った様子の三人に対してリインとトワは疑問符を浮かべる。リインが知って居る曲のジャンルといえば基本授業で習い、クレイグ姉弟が演奏していたクラシック位でトワはそれよりマシと言ったレベルのためにロックというものがどういうジャンルなのか想像が出来ないのだ。

「まあその辺の細かい部分は俺らに任せといて、お前達は出し物の申請やつといてくれや。なんといつても一年の誇る優等生コンビだ、お前ら二人だったらきつとすんなり通るだろ」

「ああ、二人は色々と忙しいだろうからその辺は私たちに任せておいてくれ。確かちようどそろそろ生徒会の時間だろう？またおいおい話し合つて合間を見つけて練習しようじゃないか」

「……まあ確かにこの手のものに関して俺は門外漢だからな。わかった、任せる事にしよう」

「ごめんね二人とも、ちゃんと私も出来る範囲で協力するから！」

何かを通じ合ったように晴れやかな笑顔を浮かべながらそんな風に告げてくるアンゼリカとクロウの二人に若干釈然としないものを感じながらもそうして二人は仲良く連れ立って生徒会室へと向かうのであった。

忙しきにかまけてこの二人に何から何まで任せてしまったのは痛恨の極みだったと二人が後悔する事となるのは学園の一週間前になつての事である……

鉄血の子と学園祭③

「拝啓 親愛なるクレア姉さんへ

さわやかな秋晴れの続く今日此頃如何お過ごしでしょうか。

おそらく任務へと励み、お忙しいこととは思いますがお体には十分お気をつけください。

姉さんは何かと頑張りすぎなところがあるので弟としては心配です、ご自愛下さい。

(以下しばらく他愛のない挨拶とクレアに対する気遣いの言葉が並びため中略)

さてトールズの卒業生たる姉さんは当然ご存知かと思いますが

10月に本校にて学園祭が開催されます。当クラスはドライケルス大帝の演劇を実施する事となり

私はロラン・ヴァンダール卿と言う身に余る大役を演じる事となりました。

ロラン卿といえば獅子心皇帝の腹心にして武人の鑑とも名高く、その名前を冠した勲章もあるほどのお方です。

(以下ロラン・ヴァンダールが如何に素晴らしい人物かを讃える文章がしばらく続くため中略)

私如きでは役者不足も良い所ですが、それでも精一杯演じさせて頂くつもりです。

また、それ以外にも以前から何度かお話しさせていただいたトワ・ハーシエル、クロウ・アームブラスト、ジョルジュ・ノーム、アンゼリカ・ログナーら私の最高友人達と一緒に演奏会にも挑戦してみる予定です。

お忙しいとは思いますが、是非ともクレア姉さんにも来ていただけたら望外の喜びです。

それではまたいずれ会える日々を楽しみにしております。リイン・オズボーンより 敬愛する姉へ 敬具」

(頑張りすぎなところがあるから心配……ですか、それはこちらの

台詞なんですけどね)

手紙を読み終えたクレアはクスリと笑みを零してそんな風に感慨に浸る。

「お、あいつからの手紙か、なんて書いてあったんだ」

そんな風にレクター・アランドールはクレアへと問いかけると

「あ、クレアの方にもリインからの手紙届いたんだね。にしし、学園祭で演劇とかやるんだってね、楽しみだなあ」

学校ってどういう感じのところか前から興味あったんだよねーと
ミリアム・オライオンが天真爛漫な様子で告げてくる

「……ちよつと待て、お前ら二人には手紙が来ているのになんで兄貴分の俺には来てないんだ？」

例によつて大好きなクレア姉さんだけへの手紙かと思つていたら
ミリアムにも届いていた事を訝しがるレクターへとミリアムはキョトンとした様子で告げる

「だってレクター、リインをいっつもからかつてばかりいたからリインから嫌われているじゃん。別に今回に限らずリインは毎月僕とクレアには手紙出してくれていたよ」

ミリアム・オライオンはリインにとってはある種奇妙な妹のような存在であつた。自分よりも幼いにも関わらず父からの信頼を寄せられ、学校に通つた経験がないなどと妙に浮世離れたこの少女をリインは訝しがつたが、そこはミリアムの人徳というものだろう。その天真爛漫な様子に警戒の色はあつという間に消えうせ、今ではリインにとっては妹のような存在となつていた。

一方のレクター・アランドールはリインオズボーンの幼い頃の家庭教師の一人である。だが真面目で綺麗で優しいクレア姉さんとリインからの敬愛を一身に集めたクレアと違い、何かと真面目なリインをおちよくつていたこの男は若干リインから苦手に思われていた、決して心底嫌つているわけではないのだが真面目な弟と遊び人な兄貴分、二人はそんな感じの関係であつた。

「ミ、ミリアムちゃん……レクターさんも、その……リインさんも決してレクターさんの事を嫌つているというわけじゃないと思ひますよ。

ただその何と言いますか……ここぞという時には頼りになりますけど普段のレクターさんは見習っては駄目な人しか見えないために、真面目なリインさんとしては素直に尊敬できないだけなんだと思います」

フオローを入れているようでしたたかにトドメを刺しながらそんな事を言うクレアにレクターは肩をすくめて

「やれやれ、俺としては何かと肩の力が入りすぎているから親切なつもりで色々遊びも教えてやろうと思っただけなんだけどねえ」

どうにも軍人になるのだと意気込んでそれしか道がないとでも思っているかのようなさまが痛々しかったから遊び心というものを教えてやろうというレクターなりの気遣いだったのだが、残念ながらそれは余裕のない頃のリインに対しては逆効果へと働いた。優秀なのは認めるが、何故こんな不真面目な男が父の信頼を得ているのかとそれが当時のリインの心境であったのだ。

それはさながら父親に褒めてもらいたくて頑張っている弟が遊び呆けているのに自分よりも父から頼られているチャライ兄へと嫉妬するような構図だったのかもしれない。

「ふんふん、ちなみに本音は？」

「あいつが乗ってきつてくれればそういう名目であいつを出汗に遊びにいったんだけどなくあいつが糞真面目だったせいでその辺全然出来ずに毎回真面目に勉強教えないとならなかったわ」

ハツハツハと笑いながら一体どこまでが本音なのかわからない様子でかかし男レクター・アランドールは告げる。……初対面の時にリインがアレほどにクロウに食って掛かった事とこの虫の好かない兄貴分に近いものをクロウから感じた事は決して無関係ではないだろう。

「ま、最近のあいつは大分その辺の肩の力抜けたみたいだし、学校を卒業した暁にはその手の店に連れて行ってやるとするかね」

「……あまり、真面目なリインさんに道を踏み外させるような事はないでくださいねレクターさん」

真面目な弟を悪の道に引きずり込もうとする兄へと長女はそんな

風に釘を刺す。

「何にせよ！楽しみだね学園祭！皆でリインのところに遊びに行こうね!!!」

そんな末っ子の満面の笑みにクレアとレクターも笑顔で頷き、かくして鉄血の子達は久方ぶりにツールズにてリイン・オズボーンと顔を会わせることが確定するのであった。

「クロウ君！何なのこの露出の激しい衣装!!!」

「クロウ！貴様このふぎけた衣装は何だ!!!」

リインとトワ、優等生二人のそんな怒りの声が木霊する。学園祭当日まで後一週間という時期になり、どこのクラスも準備が佳境を迎えていた。そんな中合間を塗って練習を重ねていた5人だったが、ようやく届いたステージ衣装、しかしその実物を前にリインとトワの二人は困惑を、というよりはそれを用意した男へと怒りを露にしていた。

「どうよこれならインパクト十分だろ」

そんな事をウインクをしながら告げてくるクロウへと二人は言い募る

「ふぎけるなクロウ！貴様こんなふぎけた衣装を俺に着ろというのか！学園祭にはクレア姉さんもオーラフ父さんも、弟分のクルトも来るんだぞ!!!」

「そうだよ！マーサ叔母さんもフレッド叔父さんも来るのに!!!とかこんな露出の激しい衣装着れないよ!!!」

ギャーギャーと喚きたてる二人を見ながらジョルジュはため息を呟きながら横にいるアンゼリカへと話しかけていた

「やつぱりこうなった。だから僕はもうちよつと控えめにしたほうが良いって言ったのに」

「ふふふ、だがクロウの言うとおりにアレならばインパクト十分だ。学院内でも良く知られた優等生コンビがあんな派手な衣装を着るんだ。みんなきつと度肝を抜かれるさ」

「まあそりゃ、確かにそうかもしれないけどね。でもそれにはあの二人の説得をどうにかしないと」

そうしてチラツと様子を窺っているとクロウはふてぶてしい様子で二人を宥めにかかっていた。

「まあまあ落ち着けよ、俺らに細かい部分を一任するって言ったのはお前たちだぜ」

「そ、それはそうだけど……」

「……痛恨の極みだ。まさしく一生の不覚だ」

忙しさゆえに任せつきりしていた負い目のようなものがあるのだろう、クロウにそんな風に言われ二人は押し黙る。

「それによおトワ、お前の衣装はゼリカとそう変わらないんだぜ。親友にだけ恥ずかしい格好させて良いのかよ?」

「そ、それは……ううううう」

ここぞとばかりにアンゼリカはそんなクロウの言葉に乗って哀しいよトワ……私たちの友情がその程度だったなんて……などと援護してそれを聞いたトワがうめき声を挙げる

「わ、わかったよお……」

観念したような様子にそう告げるトワにさすがは私のトワだ!やはり私たちの友情は不滅だね!!などといったものようにトワを抱き締め出す。そんな二人を見てクロウは今度はリインの方へと矛先を向ける

「で、トワの方がOKをしたのにお前の方は断るつもりか?それでも男か?」

「口車には乗らんぞ。トワの衣装はアンゼリカとお揃いかもしれんが俺の衣装はお前達二人とはあからさまに違うんだからな。わざわざこんな衣装にしなくてもお前達二人と同じ衣装で良いだろう」

というか本当に何なんだこの衣装はとリインは魔界皇子セットなどと名づけられた衣装を白けた目で眺める

「チツチツチ、わかってねえなお前がこの衣装を着ることはトワを守る事に繋がるんだぜ」

「トワを守る?…どういう事だ?」

「トワを守る」という言葉にピクリと反応したりインはそんな風にクロウへと問いかけなおす

「良いかリイン、お前が仮に普通の格好をしたとしよう。そうなる和学校中の奴らは当然トワへと注目するわな。なんとたつてトワは学院の連中じゃ知らない奴はいない優等生だ。そんな優等生がこんな派手な格好をするんだからよ」

「……そうなるだろうな」

そもそもその派手な衣装を用意したのはお前だがなどと言いながらジロリとリインはクロウを睨みつけるがクロウは意に介さずに続ける

「だが、そこでだ。同じく学院生なら知らない者は居ない、絵に描いたような優等生、帝国印の鋼鉄戦車、歩く規則、堅物が服を着て歩いているような鉄血宰相の息子リイン・オズボーンがこんな衣装に身を包んでいたらどうだ!? 誰だつてそつちに注目するに決まっている、トワの露出がやや強いことなんてゼリカとおそろいなのも合間つて流されるだろうさ!!!」

クワツと目を見開きながらクロウはそんな風に熱弁を奮う。

「どうなんだリイン! てめえはそこまで聞いても我が身可愛さにこの衣装を着ることを拒むのか! 違うはずだ! 俺の知つて居るリイン・オズボーンは、例え自分が汚れる事になつてでも大事な奴を守り抜く! そんな尊敬できる漢だつたはずだ!!!」

そういわれてリインは深く思案するように一度目を閉じて……

「良いだろう、そこまで言うなら引き受けよう。だが覚えていろよ、クロウ。この礼はいずれするからな」

そうしてリインは開き直る、これを着ているときの自分は鉄血宰相の息子リイン・オズボーンに非ず、魔界皇子リインなのだとロラン・ヴァンダールを演じるとき役作りのように自己暗示をかける。やるからにはきつちりやるのがこの男の流儀である。

「それでクロウはなんでそこまでしてこの衣装をリインに着せたかつたんだい」

「ククク、なあに言ったとおりインパクトが抜群だからさ。練習したといっても俺たちは素人だからな、そうなつてくるとまず見た目のインパクトで客の心を掴めるかってのは大事だ」

その点優等生コンビが派手な衣装を着るっていうのは抜群のインパクトだろうなどと言った後にクロウは一呼吸置いて

「それにだ、せっかくだから学院の奴らにコイツが存外面白い奴だつて事を知ってもらおうと思つてな。勿体ねえだろ、第一印象だけでコイツの良さに気づけないのはよ」

ラインの評価はクロウとつるむようになって大分柔らかくなったと評判であった。だがそれでも大半の生徒の第一印象に来るのは堅物、真面目、近寄り難いというようなものであった。それは事実ではあるが、決してそれだけというわけではないことを、存外面白い奴なのだという事を良い機会だから学院の連中に教えてやりたいとクロウは遊び心と親友を思う気持ち双方の入り混じった言葉を告げるのであった……

鉄血の子と学園祭④

「やっほーリイン、来たよー」

そんな元気一杯な声を挙げながら胸に飛び込んでくるミリアム・オライオンをリインはしつかりと受け止める。

「ははは、良く来てくれたなミリアム。半年振り位か、元気になっていたか」

そう言いながらリインはそつと可愛い妹分の頭を撫でてミリアムは嬉しそうに目を細める。今日はトールズ士官学院の学園祭当日。生徒達が準備の成果を存分に発揮する日である、校内では既に各部や各クラスの出す屋台が立ち並んでおり、トリストタだけではなく近郊の帝都からも人が来ていて大賑わいとなっている。

「クレア姉さんも来てくれてありがとう」

そうしてリインは輝かんばかりの笑顔をミリアムの後ろからゆっくりと付いてきた人物へと見せながら言う。

「ふふふ、こちらこそわざわざ誘ってくれてありがとうございます。何でも午後はクラスでの演劇だけでなく、ご友人の皆様と一緒にステージまでやるとか、楽しみにさせてもらいますね」

数ヶ月前に部活をやるよりも鍛錬や勉強をやるほうが有意義だ、そんな風に言っていた目の前の少年を思い出し、そこから随分成長した可愛い弟分の様子を見てクレアは微笑ましいものを見るように慈愛の笑みを浮かべるのであった。

「あ、あははは、少し何時ものイメージと違ってびっくりするかもしれないけど……でも友人達と一緒にそれなりのものには仕上げたつもりだから」

そんな風に会話しているとリインは今更ながらにこの姉にあの格好の自分を見られるのかと羞恥の感情が沸き上がって来て……

「おっす、俺にだけ手紙を寄越さなかった薄情者。何でも友人達と一緒にステージをやるらしいじゃねえか。そんな面白い物にどうして俺を呼ばない」

「ミリアムと姉さんに送っておけば貴方にも伝わると思っただけで他

意はないですよ」

そうして苦笑しながら目の前のどこか親友に似た部分を持つナイトハルトやミユラーと違い、尊敬できる部分もあるのだが素直に尊敬できない兄貴分相手にリインは内心頭を抱える、おそらく来るだろうとは思っていたがある意味で一番今日の格好を見られたくない人物が来てしまったと。

（いや、腹をくくれ。どうせもう皆に見られるんだ、ならば変に恥じるほうが余程恥ずかしくなる。劇で役を演じるのと同様だと思って堂々とするんだ）

そうステージの時の俺はリイン・オズボーンではなく魔界皇子リインだ。等とリインはやけくそ気味に自己暗示をかける。

「にしし、にしても賑やかでみんな楽しそうだね！」

「そりや今日は学院祭だからな、何時もこんな風じゃないんだぞ」

ここに来るまでの間は準備ですごい大変だったしなと今日までの過密スケジュールをリインは走馬灯のように思い出しながら告げる。劇でのロラン役及びドライケルスを演じるアンゼリカへの演技指導（これに関しては勝手にリインがやり出したので自業自得である）、生徒会での活動、ステージのための練習、これらをこなしながら学業と剣の鍛錬も疎かにするわけには行かず流石のリインをして昨日の夜は疲労困憊であった。

「流石にそれ位わかってるよー、でもやっぱり楽しそうだなあって思っ。えへへ、機会があれば僕も一回通ってみたいなあ」

「ミリアム……………」

「ミリアムちゃん……………」

特殊な事情で学校に通わず自分よりも幼いにも関わらず既に情報局の局員として働いているミリアムからポツリと零れ出たそんな言葉にリインとクレアに同情とは少し違うどこか形容し難い想いが過ぎる

「それだったらいっその事来年あたりでもここに入りたいてあのおっさんに頼み込んだら駄目だ、何やらちようどあの放蕩皇子様も面白い事をやろうとしているみたいだしな」

「面白いこと？オリヴァルト殿下がここの理事長を務めているというのは知っていましたけど、何かやろうとしているんですか？」

「あ、やべ、これまだオフレコだったわ。悪いけど忘れてくれ」

そんな事をおちやらけながら言うレクターの様子にリインは苦笑する。以前はこういうチャラけた部分はどうにも好きになれなかったが、クロウと付き合っていた影響だろう、この手のノリも何時の間にかそう気に障らなくなっていた。そんなリインの様子を見てレクターは面白いものを見るような顔をして

「持つべきものは友達って事かねえ、あるいはそれとも恋か？そこどころどう思うよ、クレア姉さんとしては？」

可愛い弟分が取られるようで複雑なんじゃないのかとレクターはからかうような笑みをクレアへと向けてそんな事を言う

「ふふふ、恋かどうかというのはわかりませんが、良い友人に恵まれたというのは確か見たいですね。5月に会った際にも帝都で会ったときも大変に仲睦まじい様子でしたし」

しかしクレアとしてもそんなレクターの相手は慣れたものなのだろう、さらりと受け流す。

「お、手紙で散々書かれていた噂のトワの事!?会ってみたい、会ってみたい!!ねえねえ、リイン！トワはどこにいるの?」

「確か今はちょうどクラスの出し物の猫喫茶だったかな、で働いているはずだけど」

そこでチラリとリインは時計を窺う。現在の時刻はまだ学院祭が始まったばかりなので9時30分。オーラフ、フィオナ、エリオットの三人は11時位に来るという話だったのでそれを考えればまだ時間には余裕がある

「それじゃあ、せっかくだから行って見るとしよるか」

俺も猫の着ぐるみをした彼女を見てみたいしな等と呟いてリインは三人と共に1年IV組の実施している猫喫茶へと赴くのであった。

「おや、リイン君。それにそちらは……ふふふ、鉄血の子らが勢ぞろい、というわけかな」

奇遇と言うべきだろうか、猫喫茶へと赴く途中で出会った見知った顔、帝国人少なくとも帝都近郊に住んでいる者達の中で見知らぬというほうが圧倒的少数派な顔だが、に出会った四人はそんな風に声をかけられていた。

「二三無沙汰しております、知事閣下二三」

「あ、知事のおじさんだ。やつほー元気？」

「ミ、ミリアムちゃん……」

恭しく挨拶をするリインとクレア、レクターでさえも礼儀を保った様子を見せる中、どこまでもぶれない天真爛漫な様子でまるで親戚のおじさんに接するように気安い態度のミリアムにクレアとリインは焦った様子を見せるが

「はははは、何とか元気にやっているよ。君たちもそんなに畏まらないでくれたまえ」

そんなミリアムの態度にも知事はまさしく親戚のおじさんのような微笑ましいものを見るかのような態度でミリアムへと接する。そんな様子にホツとしながらもリインは知事に良く似た自分と同年位の少年の存在へと気づく

「閣下、ひよっとしてそちらにいるのは……」

「ああ、夏の頃に言っていた私の息子のマキアスだ」

そうしてマキアス挨拶しなさいと声をかけると知事の傍に控えていたその真面目そうな少年はぺこりと一礼して

「マキアス・レーグニッツです。初めまして、リインさんの事は父から聞きました。来年自分もツールズへと入学する予定ですが、その時にご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします」

「リイン・オズボーンだ、その時が来るのを楽しみにしているよ。こちらこそよろしく、マキアス」

そうして笑顔を浮かべながら二人は握手を交し合う。親が共に改革派の重鎮で盟友同士、そしてそんな親をどちらも心より尊敬している真面目な秀才タイプと、そんな互いに近しいものを感じ取ったのだろう。あつという間に二人は打ち解けあい、互いの目標やツールズがどういった学校なのかと言った話題に華を咲かした。

「なるほど、リインさんは軍人になるのが目標なんですね」

「ああ、小さい頃からの目標でな。そういうマキアスは知事閣下のよ
うな官僚職からの政治家志望なのか？」

「はい、帝国に未だ歴然として存在する身分の差、これを是正するのな
らばやはり父のように政治の道に進むのが一番かと思ひまして」

「頼もしい限りだな。君のような者が政治の道に進んでくれるのなら
俺としても安心して軍人に専念できる。知事閣下もさぞ誇らしい限
りだな」

「いえ、そんな。まだトールズに受かったわけでもありませんし。
リインさんの方こそトールズでは実技も座学も優秀な成績で、この間
の夏至祭の時も今すぐにも帝都庁に欲しい位だと父が絶賛してい
ましたよ。きっとオズボーン宰相閣下も誇らしく思っついていらつしや
るでしょう」

父が誇らしく思っている、そう聞いた瞬間にリインは万感の想いが
込められたような笑みを浮かべて

「ああ……それならば嬉しいんだがな……」

果たして今の自分は父にとって誇らしい息子なのだろうか？ 鉄血
の子と呼ばれて既に父の腹心として活躍している今傍にいる三人に
比べてどうなのだろうか？ 自慢の息子だと、そう思ってくれるのだろ
うかそんな想いが過ぎる。

「ねえ、リイン。そろそろ行こうよく、着ぐるみ姿のトワを見に行くん
でしょ」

話し込み出した親をせかす子どものような様子でそう囁し立てて
きたミリアムにリインは苦笑して

「ああ、悪い悪い。それじゃあマキアス、君が後輩になるときを楽しみ
に待っているよ。その時にでもまたゆつくりと話をするとしよう」

「（こちらこそ、リイン先輩とそう呼べる日を楽しみにしています）」

そうして二人は固い握手を交わして、リイン達4人は知事へと改め
て挨拶を行い、その場を後にするのであった。

鉄血の子と学園祭⑤

「いらっしやいませ、1年IV組の猫喫茶にようこそ……ニヤ」

「つて、わー！ー！リン君！うううう……できればリン君には来て欲しくなかったのに……」

「ふふふ、とても可愛らしくて素敵ですよ」

そんな風にクレアは微笑ましいものを見るかのように口をする。

「あ、クレアさん。お久しぶりです。あ、あんまりこの格好は言わないで下さい……えっとそちらに居る人達は……」

そういつて恥じるかのように縮こまりながらもクレアの傍にいる見知らぬ二人の存在に気づいたトワはそんな風に問いかける。

「やつほー僕はミリアム・オライオンって言うんだ。よろしくね、トワ！リンからの手紙で色々と話聞いてるよ！」

「えっと……クレアさんの妹さん……とかですか？」

「ま、ある意味では俺たちは全員兄弟みたいなもんだって言えるかもしれないねえな。鉄血の子っていう異名、お嬢ちゃんも聞いた事位あるだろう？」

「あ、はい。オズボーン宰相閣下の腹心とされる人達でリン君からもそういえばクレアさん以外にも妹のような子とクロウ君に似ているところのある困った兄貴分みたいな人がいるって話を聞いた事が」

「その鉄血の子が俺たちちってわけだ。ちなみに俺はコイツが10歳の頃からの付き合いでな。そっちのクレアお姉さん共々そいつに勉強を色々と教えてやったんだぜ」

「わあ、じゃあリン君の先生なんですネ！」

「おう、勉強だけじゃなくてこっちは色々教えようと思ったのにこの真面目ちゃんと来たら悉く断りやがってな。だからまあ劇の方はともかくステージなんてものをやるとは思わなかったから正直驚いているぜ。ふーんそれにしても……」

「え、えっと……」

まっているじやないですか、特にレクターさんは真面目なリインさんをあまりからかわないでください」

そんな風にクレアは二人を、特にからかう気満々のレクターを嗜める。そういうところが真面目なリインに良く思われていなかった理由なのにこの男はそれを知りつつ改める気は毛頭ないようである。

「え、えっと、とりあえずその、席に案内させてもらいますね！」

そんな風にトワについていこうとした三人はそこで訝しがる、リインが何故か硬直したまま付いてこないのだ。というかよくよく考えてみればここに入室した瞬間からリインは一言も喋っていないかった。常のリインであれば何かツツコミを入れていいようなところでも地蔵のように固まっていた。

「リイン、どうしたの？」

おーいとミリアムが目の前で手を振ってもリインは硬直したまま動かない

「リイン君、大丈夫？」

心配そうに猫の着ぐるみ姿のトワが覗き込むとようやく再始動を果たしたかのようにピクリと動いて……

「あ、ああ……大丈夫だ。すまない、あまりの衝撃に我を失っていた。……その似合っているぞトワ。むしろ、似合いすぎていて色々と危険だ。うん、その姿の君はあまりにも可愛すぎる」

まじまじと見つめながらそんな事をしみじみと深い実感の籠った様子で告げるものだからトワも俯きながら顔を赤くして

「え、ええと……その……ありがとう」

これまでもリインが自分を褒め殺して来たことは多々あったがこうしてマジマジと容姿を褒めてくるのは初めてだったからだろう、トワは何時にも増して顔を赤くする。

そうして甘酸っぱい空気が漂ったまま二人はそこで固まってしまった。

「ふーむ、こりや思ったよりもガチな感じだったかな」

レクターはしみじみと弟分の春を喜ぶように呟き

「にじしし、二人とも顔真っ赤だねー」

ミリアムは囁し立てるようにそんな事を言い

「……微笑ましい光景ですね」

クレアは胸にわずかばかりの寂寥感を覚え、寂しげな笑顔を浮かべながらも弟分を祝福する言葉を述べていた。

そうして何時もに比べてぎこちない様子でトワと会話しながら猫喫茶にて過ごしたリインは、三人と別れオーラフ、エリオット、フィオナの三人を正門へと迎えに行くのであった。

鉄血の子と学園祭⑥

「拝啓 尊敬するオーラフ父さんへ

早いものでトールズ士官学院へと入学して数ヶ月が経っています。教官方は優秀な方ばかりで友人にも恵まれて、日々充実した日々を送っています。

以前の手紙に対するお返事で友人達について聞かせて欲しいという旨の内容を頂きましたので、

今回は特に日常的に親しくしている友人達を紹介させてもらいます。

一人はトワ・ハーシエル、入学して初めて出来た友人で学年首席の子です。

彼女の見識の深さには舌を巻かされることがしょっちゅうで、それでいてそういったところを鼻にかけた事もなく

常に誰かのために頑張れるそんな優しい少女です。彼女といると自分の小ささを思い知らされるようでしたただただ恥じるばかりです。

(以下しばらくトワを褒める文章が続くため中略)

ともかくにも素晴らしい少女ですので、きっと父さんも気に入るかと思っています。

彼女も帝都の出身と言う事ですので、機会があれば是非一度会って欲しいです。

もう一人はアンゼリカ・ログナー、おそらく苗字から察せられたと思いますがかのログナー家の息女です。

もともと彼女は常々勘当寸前の放蕩娘などと自虐しており、実際その様子は尊大さや傲慢さからはかけ離れたものです。

何より奔放でありつつも根っこの部分に誇り高さを有している尊敬に値する奴です。

そんなわけで彼女もまた色々困ったところもある奴ですが、それでも俺にとっては掛け替えのない友です。

三人目はクロウ・アームブラスト。サボリの常習犯の問題児で時折

どうして俺はコイツと友人になれたのかと思う時があります。

第一印象は正直最悪と言って良いものでしたし、それはおそらく向こうもそうでしょう。

友人となった今でもやりあうことはしよっちゅうです。

ただ、それでもコイツと一緒にならば自分は無敵なのだ、誰にも負けない、そんな風に錯覚するときがある位に頼りになる相棒です。

四人目はジョルジュ・ノーム、ルーレ工科大学からの誘いも受けていた程で導力技術の分野に関してはおそらく生涯自分は彼に及ぶことはないでしょう。

性格も温厚を絵に描いたような男で自分達5人組みの中では大体宥め役に回ることが多いように思います。

そんな形で自分は今、最高の友人達と共に毎日がとても充実しています。

彼らと出会うことが出来た、それだけで自分はツールズを選んでよかったと心の底よりそう思っています。

だからこそそんな素晴らしい友人達に恥じない己となり

次に会うときはより大きくなった自分を父さんに見せられたらと思います。

それでは、再会できる日を楽しみにしております。

リイン・オズボーンより　もう一人の父へ」

注釈：第一級歴史資料灰色の騎士リイン・オズボーンの養父オーラフ・クレイグ中将へと宛てた手紙

英雄灰色の騎士の学生時代の交友関係、及び養父オーラフとの関係が窺える貴重な資料である

「うおおおおおおおリイーーーーーんよおおおおお！元気にしていたか!!!」

リインの姿を確認するや否や大柄な赤毛の男性はそう叫びながらリインへと駆け寄り熱烈な抱擁を行なう

「お前の手紙は余さず読ませて貰っているぞ！元氣そうにやっている

「ようで何よりだ!!!」

「オ、オーラフ父さん……流石に俺もこの年になってコレは恥ずかしいよ……」

「何を言うか、親子の久方ぶりの再会なのだ！恥ずかしがる必要などあるまい!!さあこの父にもっと良くお前の成長したその顔を見せてくれ!!!」

そうしてオーラフからの熱烈なスキンシップを受けるリインはオーラフの背後にいるエリオットとフィオナへと助けを求めるのだったが、二人は黙って苦笑するのであった……

「ふーむ……」がツールズか、やはり中央士官学院とは随分と雰囲気が違うのだな」

リインに学校の中を案内されながらオーラフはそんな風に、先ほどから目に映るいい意味でも悪い意味でも軍属と言った感じの雰囲気纏っていない生徒の多さにオーラフはそう呟く。

「しかし、どうやらお前にとつてはそれが+に働いたようだな。随分と良い顔をするようになった」

おっと決して以前までが悪かったという意味ではないのだぞと慌てた様子を見せながらオーラフは優しい瞳でもう一人の息子を見つめる

「手紙にも書いたけど最高の友人に恵まれたからね。此処に来て良かった、心からそう思っているよ」

そんな風に友人達を誇る笑みを浮かべてリインは答える

「そうか……そういった友人はきつとお前にとつて生涯の宝となる、大事にするのだぞ」

「うん、そうするよ。きつとあいつらとは学院を卒業して進路が別々になっても、それこそ俺が爺さんになるまでずっと付き合ひがある、そんな気がするんだ」

しみじみとそんな事を言う息子の姿にオーラフは胸を撫で下ろす。10歳で軍人になると宣言して以来、ひたむきに努力をしていたリインの事を無論オーラフは誇らしく思っていたが、それと同時にエリ

オット以外の同年代の友人の姿が見えなくなっていました。彼は危惧していたのだ。

共に青春時代に切磋琢磨しあった同年代の友というのは生涯の友となる、それをオーラフ自身も実感していたのである。

「そういえばリインよ、今回何でもロラン・ヴァンダール卿を演じるそうだな。ふふふ、楽しみにしているぞ。きつとお前ならそれこそ将来は彼の名を冠した勲章を生きたままに授与されることとて不可能ではあるまい」

獅子心皇帝ドライケルスは自らの命を救ってくれた幼少期からの唯一無二の友ロラン・ヴァンダールへと報いるために即位後彼の名を冠したロラン・ヴァンダール勲章を作った。この勲章は皇族の命をその命と引き換えに救った死者へと送られるのが慣わしで、存命でこれを送られたものは帝国の歴史においても数えるほどしかない。

授与されたものはアルノールの忠実な盾にして剣と呼ばれ、皇族から全幅の信頼を寄せられていることを示すものである。

帝国の武人においては国難を救った者へと送られるリアンヌ・サンドロット勲章に次ぐ最大級の栄誉とされ、この勲章を有しているものが仮に平民出身であった場合同時に帝国騎士の称号が送られる事が慣わしとなっている。

存命の帝国人でこれを有しているのは生きる伝説ヴァンダイク元帥、アルノールの守護者マテウス・ヴァンダール大将、光の剣匠ヴィクター・S・アルゼイドらわずか3人であり、目の前のこの養父名將オーラフ・クレイグでさえ未だそれを得ていない。

つまりはリインならば自分を超えてその3人と並ぶほどの存在になれる、そうオーラフは言っているのだ。そんな養父の期待を受けてリインは苦笑して

「流石にそれは恐れ多いけど、それでもロラン卿の名を穢すような演技だけはしないつもりだよ」

「はっはっは、楽しみにしているぞ」

それは演劇の事を指していたのか、それとも息子が自分を超える男となる事を指していたのか、おそらくは両方の意味だろう、オーラフ

はそんな風に告げながら豪快な笑みを浮かべる。

「ふふふ、私はステージの方も楽しみにしているけどね」

「あ、僕も。ラインがステージをやるなんて想像してなかったから驚いたよ」

聞くのはともかくやるほうに対してはほとんど関心を向けていなかったラインの様子を思い出すかのように二人はそんな事を告げる。

「ま、まあ二人の期待に沿えるかはわからないけど、友人達とそれなりに頑張ったつもりだから、それなりに楽しんでくれれば良い。ただ普段クラシックをやっている二人からするとなじみがないかもしれないし、なんなら劇を見たら帰ってくれても良いぞ、うん」

そんな二人の期待を受けながらラインは何かを誤魔化すように明日の方向を向きながらそんな事を告げるのだった……

鉄血の子と学園祭（終）

「ロラン、私はこの血に流れる責務を果たそうと思う。付いて来てくれるな、友よ」

男装の麗人と化したアンゼリカが演じる獅子心皇帝、否この時はただの庶子の皇子であったドライケルス・ライゼ・アルノールがそう告げる

「この命、尽き果てるまで」

そうしてリインが演じるロラン・ヴァンダールは目の前の主君に恭しく跪く。

学院際も佳境となりリイン達の所属するI組の演劇「獅子心皇帝」がトールズの講堂にて行なわれていた。演劇の出し物自体は帝国ではもはや幾度となく行なわれた定番物、獅子戦役及び帝国中興の祖と謳われるドライケルス・ライゼ・アルノールの英雄譚を主軸に描かれた作品である。定番故にそれはともすると目新しさのない退屈な物になりかねなかったが……

「殿下お下がりを！ここはこの私が引き受けましょう！」

「リアンヌ殿、貴殿も殿下と共に引いてくれ。あなた方二人はどちらも帝国に必要な方なのだ！ここは俺が引き受ける!!!」

「いいや、リアンヌ！ロラン！私はどちらも犠牲にする気など毛頭ない！三人一緒に此処を切り抜けるんだ!!! 私たちならば出来るはずだ!!!」

そこは全員が軍属である士官学院生だからこそ出来る迫力のある殺陣シーンでカバーをする。また男装したアンゼリカ、リイン、フリーデルの三人が綺麗にドライケルス、ロラン、リアンヌの主役格三人のイメージ通りなのも合間ってそれ相応に見応えのあるものへと仕上がっていた。

そうして劇は順調に進行して行き……

「ドライケルス……どうやら、俺は此処までのようだ……どうか、どうかこの国を……」

「ロラン、目を開けろロラン！ロラー……ロラン！！！！」

その過程でドライケルスは唯一無二の友であったロラン・ヴァンダールを失い

「ドライケルス、貴方を愛している」

「ああ、私も君を愛しているよりアンヌ」

最後には最愛の人リアンヌを失いながらも獅子戦役を終結させるのだった。

彼こそはドライケルス・ライゼ・アルノール、最愛の人も唯一無二の友を失っても決して折れずにエレボニアに繁栄を齎した獅子の心を持つ大帝、偉大なるエレボニアの中興の祖である。

「うわあ気合入っていたねえ……」

万雷の拍手を浴びる友人達を見てジョルジュ・ノームはそんな風にポツリと感想を零していた

「ううううう、緊張してきたなあ。これの直後にやるなんて……会場
の空気凍り付いちやうんじやないかなあ」

とうるかやつぱりあの衣装恥ずかしいよおなどとトワ・ハーシエルは縮こまりながら言う

「おいおい弱気になるんじゃないやねえって、俺たちだってそれなりのものを作り上げてきただろうが」

そんな二人を励ますようにクロウは口にする

「それに心配するなってトワ。さっきまで真面目にロラン・ヴァンダール演じていた奴があんな格好するんだ、きっと皆そつちに度肝抜かれるだろうさ」

おどけながら緊張を解すようにそんな事を元凶たるクロウは言う

「もう、クロウ君ったらライン君本当に怒っていたよ、そのうち痛い目にあつても知らないんだからね。私だって、衣装に関して言いたいことは色々あるんだから！」

そんな風にトワは精一杯威圧するように、傍から見ると大変微笑ましい様子で、クロウを咎める

「へいへい、肝に銘じて起きますよと」

「二人とも、それじゃあそろそろ行くこうか、アンとリインが待つて居るだろうし」

そんなジョルジュからの言葉を聞いてそれぞれ控え室へと赴くのであった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

本番となり用意された衣装へとリインは身を包んでいた、それはもう見事な仏頂面を浮かべながら。

「え、えーとその、いつもとは違う格好だけどカッコいいと思うよりイン君！」

そんな風に必死にフオローを入れようとするとトワの何時もと変わらぬ優しさが逆にリインにとつては辛い。とりあえず自分の方を見ながら腹を抱えて笑っている諸悪の根源を一発ぶん殴っておく、きりもみ回転して吹っ飛んでいった。それを見てリインはいい気味だと思った。

「ああ、ありがとうトワ、君も何時もとは随分と印象が違う大胆な衣装だが中々に素敵だ」

そんな風にリインはちらりと常とは違う胸元が露になった衣装のトワの姿を窺う。中々に目の毒である、久しぶりに雑念が湧いてきたので今度冬に帰省した時にはまた師範代にスペシャル特訓コースを頼もうなどと思いつながら顔を赤らめる。

「うううう、あんまり見ないで……」

「あ、ああごめん……」

そうしてリインは慌てて目を逸らす。

「うーん、あの二人は何時になったら進展するんだろうね」

青春真っ盛りといった様子の友人二人を眺めながらジョルジュはそんな風にポツリと呟いていた。

「ふふふ、いくらリインとは言えどそう簡単に私のトワは渡せないな。彼とはいずれ決着をつけないとね」

不敵な笑みを浮かべながらそうアンゼリカは口にする。彼女もトワと同じく中々に大胆な衣装に身を包んでいるのだがその辺を気に

した様子がない。なんとというか漢前な女性である。

「いててて、ったく思いつきりぶん殴りやがって。本番前にこのハンサムフェイスに傷でもついたらどうするんだ」

殴られた頬をさすりながら起き上がったクロウがそんな事を告げる

「これでチャラにしておいてやる、何時までも引きずるのも女々しいからな」

「おうおう、そりやありがとうございます魔界皇子様」

プククと笑いながら自分の方を見て告げるクロウを見てリインは、それはもう見ていて寒気がしてくるような綺麗な笑顔を浮かべる。笑顔とは本来攻撃的なものである、そんな言葉がピツタリのそれはもう美しい笑顔を。

「あははは、でもなんだかんだで様になっているじゃないか。やはり元が良いからだろうね、これがジョルジュだったらきつと喜劇役者みたいな事になっていて会場みんなも失笑間違いなしだったよ」

「アン、友人だったら何言ってもいいってわけじゃないんだからね？ただでさえクロウとリインが二枚目なのに僕だけこんなんで若干コンプレックス感じているんだからね」

放って置くとかつてのようになんてこそ本番前だというのに取っ組み合いの喧嘩になりかねないのでそんな風にアンゼリカが告げ、ジョルジュはそんなアンゼリカに傷ついた顔を見せる。

「はっはっは、いいじゃないか。私は君のその見ていてホツとできるような感じ、嫌いではないよ」

「はあ、ずるいなあアンは。そんな風に言われたら気にしている僕がちっぽけな男って気分になつてくるじゃないか」

ウインクをしながらあっけらかんと言うアンゼリカとそれに苦笑しながら満更でもなさそうなジョルジュ。そんな二人を見て、リインは仲が良くて何よりだとまるで察する事がなくうんうんと頷き、トワはひよつとして微笑ましそうに見つめ、クロウとはある危機感を抱いた。アレ、これってひよつとすると来年俺だけ独り身になるんじゃない、と。

後夜祭で仲良く踊るジョルジュとアンゼリカ、トワとリイン。そんな中一人ポツーンと佇む自分、そして後輩たちから指を指されてクスクスと笑われながら哀れまれる、そんな未来を思い浮かべてクロウは一瞬薄ら寒い思いを抱く。そもそも彼の本来の目的を考えれば今こうして送っている青春時代こそが仮初のものと言えるのに。気が付けば目の前の四人と一緒にいることが当然だと感じるようになっていた自分にクロウは全く違和感を感じていない、あるいは本人も知らないうちにそのことを心の奥底に封印しているのか。

「準備はよろしいですか？」

そんな風に仲良くじゃれあっていると実行委員会の人間たちから声をかけられて5人は我へと返る。

「さてと、そんなじゃそろそろ行くとしようぜ。いっちょ最高のステージにするとしようや」

そう笑顔で告げるクロウへと四人もまた頷き、かくして5人によるステージが始まるのであった。

「もうすぐリインのステージだね、楽しみだなあ」

ミリアム・オライオンは目を輝かせながらそう告げる

「しかしまあどんな曲を歌う気なんだか、まさか軍歌や国歌でも歌う気じゃねえだろうな」

レクター・アランドールはそんな弟分の性格を良く熟知した言葉を吐く

「さ、流星のリインさんもそれはないとは思いますが……」

クレア・リーヴェルトは苦笑しながらそんな風に告げる、残念ながら彼女のフォローとは裏腹に仮に一人でやる事になっていた場合リイン・オズボーンは軍歌と国歌どちらにするか迷った挙句国歌を選択していた事だろう。そもそも彼一人の場合、ステージをやるうなどとは思わなかっただろうから無意味な仮定ではあるが

「先ほどまでロラン・ヴァンダール卿をああも見事に熱演していたのにこの上ステージまでやるだなんて、リインさんは随分と多才なんだね、父さん」

マキアス・レーグニッツはそんな風に尊敬の念を露にする

「ああ、お前も彼を見習うんだぞマキアス。一見すると関係ないと思えるような分野の知識や経験というのが予想外なところで役に立つものだ、彼はどうやらそれがわかっているようだな」

カール・レーグニッツはそう絶賛するが入学当時のリインはクレアにそんな風に教えられながらも部活をやるよりも鍛錬と勉強をする事を選ぶほうとしていた男である。彼がそうなったのはひとえにトルズという環境、そして何よりも友人に恵まれた事に依るものだろう。「ふふふ、先ほどのロラン・ヴァンダール卿役も名演でしたが、さらにステージまでやるとは随分と視野が広がったようですね」

「ええ、それでいて剣の腕は前以上に冴え渡っていました、ずいぶんと密度の濃い生活を送っているんですねリインさんは」

「貴方も覚えておきなさいクルト、剣のみに拘らず色々なものへと触れて経験することがひいては剣の深奥へと近づける事があるのでですよ」

「はい、母上」

そうしてクルト・ヴァンダールは尊敬する兄弟子の、オリエ・ヴァンダールは教え子の晴れ姿を目に焼き付けようとする。

「それにしてもあの子ったら、どんな歌を歌うんでしょうね」

「はっはっは、リインの事だおそらく国歌を歌うに違いない」

「さ、流石に学院際のステージでそれはないんじゃないかなあ……」

流石は養父と言うべきか、あるいは考えが似通っているのかレクターと同じくリインの考えを正確に把握しているオーラフに対してエリオットは苦笑しながら否定して

「メアリー教官、嬉しそうですね」

「ええ、オズボーン君がいつの間にか自分からステージをやるようになる位音楽を好きになってくれたことが私とつても嬉しくて。ふふふ、この間もせっかくだから良いステージにしたいのでって熱心に質問してきたんですよ」

マカロフ教官からの問いかけにメアリー教官はそれはもう教師冥利に尽きるとでも言わんばかりの嬉しそうな表情を浮かべて

「ふふふ、それにしてもステージか。いやあ楽しみだね、なんなら僕も今からでも飛び入りで」

「辞めろ阿呆」

「流石に冗談だよ親友、でしゃばる大人は嫌われるからね、ここは君の弟弟子君の晴れ姿を見守らせて貰うさ。ふふふ、しかし意外だね、君から聞いていた彼の息子はそういった催しに参加するタイプではなさそうだったから」

そう告げてトールズ士官学院の理事長を務めるオリヴァルト皇子は興味深そうに見つめ

そんな多くの人が見守る中でその男は現れた。

啞然、呆然、まさしくそう形容するのが正しいだろう。

誰もが、一人必死に笑い出すのを堪えている男と一人目を輝かせている少女がいるが、その少年を見た瞬間に呆気に取られる。

そりやそうである、さつきまでロラン・ヴァンダールを熱演していたそれはもう如何にもといった感じの一目で軍属とわかる真面目そうな少年が「闇の炎に抱かれて消えろ！」だとか言い出しそんな奇抜な衣装に身を包んでいるのである。

常の堅物を絵に描いたようなリインを知って居る学院生や教師陣、そしてリインの知己たちはより一層である。

ついにストレスのあまり壊れたのではないか、そんな想いが一瞬頭を過ぎるが……

始まり出した歌の内容に皆心を奪われる。技術自体はそこまでではない、決して下手ではないが特筆するほど素晴らしいというものではない。学生としては良く頑張っていると、まあそんなレベルであった。

だがその歌には心が込められていた。大人になりきれない少年の、時に躓いてかさぶたを作ったとしても決して失いたくない理想や情熱、そんな等身大の少年の思いが。それは紛れもない、リイン・オズボーンという少年とトワ・ハーシエルという少女の今だからこそ歌える心が込められていたものだったからだ。

後夜祭となり、リインは誰と踊ることもなくぼんやりとキャンプファイヤーの火を眺めていた。

ステージは大成功に終わった、観客からアンコールの声援が出るくらいに。流石にそれを用意する時間はなかったために応えられずに終わったが

そうして学院祭も終り、こうして後夜祭と出席したわけだが正直リインはステージが終わった後夢見心地のような奇妙な気分陥っていた。

知人たちと二言三言言葉を交わしたのだが、なんというか奇妙にふわふわとしているというか、そんな味わったことのないような高揚感が身を包んでいたのだ。

「よ、おどらねえのかよ魔界皇子様」

そんな風にからかうような口調で告げてくる自分があんな格好をする事になった元凶相手にリインは苦笑する。着る前はあんなにも腹立たしかったのに、何故だろう今はそうして目の前にいる友人達と後々まで記憶に残るような思い出が出来たことを悪くないと思っている自分がいた

「ああ、そんな気分にならなくてな、ハンサムフェイスの三枚目」

そんな風に軽口で応じるとクロウの後ろから見知った顔の三人が現れて

「ふふふ、どうやら皆同じような気分みたいだね」

「えへへへ、なんだか奇妙にふわふわした気分っていうか……」

「クラスでのアトラクションを作り終えた時も少し似たような気分は味わったけど、それよりもさらに高揚した感じがするっていうか……」

「へ、どれそれじゃあどいつもこいつも相手のいない奴ら同士ということ、ここで揃ってぼんやりと火を眺めながら話でもするとすつか」

そうして四人もそれぞれリインの傍へと座り出す、それからしばらく誰も話すことがないままにぼんやりと眺めているとおもむろにリインが口を開いて

「なあクロウ、ありがとな」

ポツリとそんな事を呟いた

「なんだ？そんなにあの衣装のトワを見れて嬉しかったのか、それともお前まさかあの衣装実は気に入ったのか？」

「くくくくくく」

おちやらけた様子でそんな事を言うクロウにトワは怒ってクロウをポカポカと殴り出す。そんな二人を見てリインは苦笑して

「そうじゃなくてさ、ステージをやるうって誘ってくれたのお前だっただろ。正直最初は何言っただこの馬鹿って思ったけどさ、あの時お前が誘ってくれなかったらこんな充実感味わえなかっただろうからさ。だから、ありがとな」

そんな事をクロウに対して告げた後にリインは他の三人にもそれぞれ顔を向けて

「トワにジョルジュにアンゼリカもありがとな、お前たちがいなかったらきつと俺はこんな体験する事なかった」

そんな事を改まって告げるリインへと四人は苦笑して

「つくづく真面目だねえ、お前さんは。俺だつてやりたくてやっただけだから礼を言われるようなこんじゃねえよ」

「右に同じく」

「リインは本当になんというか何時でも真つ向勝負っていうか、すごく恥ずかしいような事をさらつと言ってくるよね本当に」

「えへへへ、私だつて同じ気持ちだよ。みんなと一緒にだから出来た事だもん」

そうして5人は心の底から笑い合うのだった。きつと自分達のこの友情は何時までも続くのだと、そう信じて……

鉄血の子と紫電

学院際が終り時間は瞬く間に過ぎ去っていった。11月に行なわれた次期生徒会長を決める選挙ではリインとトワ、そしてリインの宿命のライバルたるヴィンセントの三つ巴の末、主に平民生徒からの支持を集めたリイン、貴族生徒からの支持を集めたヴィンセントを抑えて、貴族、平民を問わず幅広い支持を集めたトワの会長への就任とリインとヴィンセントの副会長への就任が決まった。

温和な人柄で人望の厚いトワが会長となり、規律にうるさく厳格で平民生徒の味方と見られているリインが副会長として目を光らせ、相対しているところか毒気が抜かれる三枚目の貴族生徒たるヴィンセントが同じく副会長を務めるというこの新体制は貴族生徒、平民生徒、教官陣にとつても凡そ満足できるもので、比較的好意的に受け入れられていた。

そうしてその後の12月に行なわれた期末試験でリインはついにトワと並ぶ念願の主席の座を獲得。歓喜の咆哮を行なっていた。この10月～12月の間に、6月～9月にかけては毎月のように起こっていた旧校舎の異変がまるで生じなくなった事をリイン達は訝しがりながらも、七耀歴1203年も終りに差し掛かろうとしていた……

「さあ、それじゃあ今年最後のARCU S運用テストを実施させてもらうわ。君たちがこれまで培った成果、見せてみなさい！」

常のだからしない駄目教官という雰囲気脱ぎ捨て、A級遊撃士にして現ツールズ士官学院武術教官たるサラ・バレストアインは真剣そのものの表情で告げる。向けられるのは殺意こそないものの遊び心のない本気の闘志、もう数度目にもなるそれを前に5人は……

「今日こそ勝たせてもらいます、教官！」

今の自分達ならば十分に届きうるはずだとリインは双剣を構えながら気圧されぬように闘志を露にして

「ふふふ、あまり柄じゃないけど、それでも負けっぱなしというのは酌だからね」

アンゼリカは受け流すかのような飄々とした態度ながらも静かに闘気を漲らせて

「は、ここで勝てば当然文句なしのS評価だよな。座学の分の単位ここで稼がせてもらうとするぜ」

クロウはいつものように軽口を叩いて

「しつかりサポートさせてもらうね！」

トワ・ハーシエルはそう見るからに緊張した面持ちで張り切り

「頼んだよりイン！君が突破されたら僕とトワは5秒でやられるからね!!!」

初回の時の忌まわしき記憶を思い出しながらジオルジュはそんな風に告げた

「それでは、紫電のバレストイン推して参る！」

その言葉と共に闘いの火蓋は切って落とされた。

先制したのはサラ・バレストイン、まずは補助と回復を担当するジオルジュとトワを落としかかるが

「させん！」

二の轍を踏むまいとそれを予期していたリインは紫電と化したサラを双剣にて迎撃する。

「ふふん、やるようになったわね」

「お褒め頂いて赤面の至りですよ、バレストイン教官殿」

初めて出会った時に為す術もなく突破されて支援役の二人を落とされた、そんな屈辱の記憶を思い出しながら未だ余裕のあるサラの猛攻をリインは必死に凌ぎ続ける。如何にトワとジオルジュからの導力魔法による支援を受けているとはいえ、そのまま行けば数分程度で限界が訪れるところだったが……

「連れないね教官、リインばかりだけではなく私の相手もして欲しいね」

そうはさせじとアンゼリカが瞬時に接近して強烈な蹴りを放つ。しかし、サラは自身の頭部へと放たれたそれもバク転めいた動作によって回避する。そうして二人から距離を取り、導力銃を放とうとするが

「ドンピシヤだ」

阿吽の呼吸、戦術リンク機能の恩恵を受けてそれを予期していたかのようにクロウの放たれた銃弾が飛来していた。

それらをブレードによって切り払うが――

「テンペストエッジ！」

それもまた織り込み済みかのように先ほどまで守勢に回っていたリインが攻勢へと躍り出る。

「ふふふ、本当に強くなったわね、貴方達」

息の合ったコンビネーションを見せて、自分と五分にやり合う目の前の教え子達相手にサラは気が付けばそう笑顔で告げていた

「教官の薫陶の賜物です！」

「ふふふ、そりやもうこの5人で旧校舎の調査やら魔獣退治やらでどれだけこき使われた事やら」

「普通は卒業の時にするんだろうが、一足早いお礼参りって奴だ。感謝にむせび泣いてくれよ教官殿」

そう言いながらも5人の心に油断は無い。此処までは前回の時もなんとかこぎ着ける事が出来ていたのだ、そう問題は此処からなのだ。

「それじゃあ、一つこつちも大人の威厳つてもものを示しておこうかしら！」

そうしてコオオオオという気合の裂波と共にサラのギアが一つ上がり出す。

「気合を入れるよ！此処からが本番だ!!!」

紫電、その異名に相応しいブレードによる高速の連撃をリインは四人の援護を受けながらなんとか凌ぎ続ける。ヴァンダールの剣とは護りの剣、そこに戦術リンクシステムによる恩恵を受けてアンゼリカ、クロウと息のあったコンビネーション、そしてトワとジヨルジュからの援護、これらを受けた状態のリインを攻略するのはサラとて決して容易ではない、しかし凌いでいるだけでは駄目なのだ。

このまま防戦に徹していればサラは自らの持つ切り札を切るだけの事。前回はそうして5人纏めてやられて終わった。故に勝ちに行

くのならば――

「大地の息吹よ、我が同胞に力を与えたまえ。アダマンタイト・キユクロプス」

そうしてジョルジュは己の持つ切り札により仲間への援護を行い

「アンちゃん、行くよ！」

「ああ、共に行こうトワ！」

「レインボー・ドラグーン!!!」

導力銃のリミットを解除したトワによる放たれた一撃、そんな援護を受けながら閃光と化したアンゼリカがとっておきの一撃をサラへと放つ

「オメガエクレール！」

生半可な攻撃では迎撃不可能、そう判断したサラは自身もまた紫電と化して切り札によって迎え撃つことを選んだ。閃光と紫電が激突し、まるで雷が落ちたかのような激しい光と轟音が辺りに響いた後アンゼリカが吹き飛ばされる。しかし、その吹き飛ばされる刹那、アンゼリカの口元には確かな笑みが湛えられており……

「!?!」

そうしてサラは5人の真の狙いに気づく。しかし、遅い。切り札を放った直後、如何なる達人でも決して逃れられない秒にも満たないそのわずかな隙を見計らって――

「クロウ、頼む！」

「任せとけ相棒！」

「クロス・ストライク！」

リンとクロウ、トールズ最強のコンビによる最強のコンビネーションがサラへと叩きこまれた。

「あたたたた、全くもう容赦なくやってくれちゃって。もう少し年長者を労わりなさいよね」

そんな事を告げながらサラはよっこらしよと立ち上がる

「でも、いつかこういう日が来るかもしれないとは思っていたけど、こんなに早く来るとは思ってたわ」

しみじみとした様子でそんな風に呟いた後にサラは教え子たちの成長というこれまで味わったことのなかった喜びに綺麗な笑顔を浮かべて

「本当に強くなったわね、特に、あんなコンビネーション技まで身に着けているとは思わなかったよ」

そんな風にウインクをして告げる

「ふふふ、これが私とトワの愛の力という奴ですよ教官」

「あ、愛じゃなくて友情です！友情ですからね！サラ教官!!!」

トワとアンゼリカは仲良く肩を組みながらそんな事を告げて

「ふっふっふ、当然ですよサラ教官！僕とリイン君は決して揺るがない絆で結ばれた親友同士ですからね！」

やたらと爽やかな顔でリインと肩を組みながら、何時になくうさぐさい様子でクロウはそんな事を告げて

「……異論はないが、クロウ、貴様今度は何をやった」

そんな親友の様子を当然リインは訝しがるのであった。

「嫌だなあリイン君、僕は何にも隠し事なんかシテナイヨ」

「お前が俺を殊更親友呼びする時は大体何か厚かましい頼みごとをしてくるときと相場が決まっている、良いからとつとつと言え。内容次第で対応を決める」

「いやあ、それがよお、学院生活により潤いを齎すためにお馬さんに夢を託したわけだがよお、このお馬さんの上に乗っているが最終コーナーで落ちちやつてよお」

そこでクロウは笑顔を浮かべたままチラリと横にいる親友に何かを期待するような目線を寄越して

「そうか、またしばらく水とパンの耳でしのごうとする仙人のような生活に挑戦するわけか。見上げたストイックさだな、友人として心より応援させて貰おう」

リインはそんな親友からの頼みを澄み渡った青空のような笑顔で切って捨てるのであった。

「俺たち親友だろう！相棒だろう！金貸してくれよ!!!」

ガバリと継りつきながらクロウはリインへとそんな風に頼み込む

「自業自得だ阿呆！そもそも博打の類は校則で禁じられていると何度言ったらわかる!!!」

そうしてギャーギャーと何時ものように漫才を始めたリインとクロウ、ああ君は地上に舞い降りた私の天使だよ等と言いながら百合の花が咲き誇りそんな空間を作り出している女子二名、そんな中どこか所在無さげにしているジョルジュを見てサラはポツリと呟く

「ねえ、ジョルジュ貴方って」

「別に僕だけこの四人からはぶられているとかそういうわけじゃありませんからね教官」

夏至祭の時に結果として一人だけ留守番するようになった事を未だ根に持っているような事をジョルジュ・ノームを仏頂面で告げるのであった。

「そう、それなら良いけど」

他の四人がコンビクラフトをそれぞれのペアで披露したのに対してジョルジュだけそういうのがなかった先ほどの様子を思いつつ学院祭や普段の仲の良い様子を思い浮かべて、サラはまあたまたまかと判断して

「それじゃあ改めて、これで今年最後の運用試験は終了よ。後は各々の好きにしてね」

そうしてサラはひらひらと手を振りながらその場を後にして学院長への報告に赴くのであった。

「と言うわけでARCCUSの恩恵もあるんでしようけど、あの5人の実力は既に学生の域を超えていますね。まさかこんなに早く膝をつかされる事になるとは思いませんでした」

肩を竦めながらそう報告してくるサラにヴァンダイク学院長は重々しく頷く

「ふむ、つまりあの5人が揃った状態ならばサラ教官にも匹敵、いや凌駕しうるとそういう事かな」

「ええ、特にクロウとリインのコンビなんか二人だけでその領域に至

るのもそう遠くない未来かもしれないね」

阿吽の呼吸、以心伝心まさにそう評する他無い連携を見せていた二人を思い出しつつサラは笑いながらそう告げる。今はまだどちらも未熟だがこのまま成長して行けば、それこそかつてやり合ったこともある西風の旅団、そこで名コンビと称される連隊長二人に匹敵、あるいは超える大陸でその名を知らぬ者は居ないなどと称される名コンビになるかもしれない、そんな罫も無い想像を巡らせてサラは流石に妄想が過ぎるかと思える。

「でも突然今の5人の実力を測るようになってご指示をわざわざ出されてどうしたんですか？」

そんなサラの疑問を受けてヴァンダイクをしかめっ面を浮かべる

「うむ、実はな……帝国政府より2月に一週間、クロスベルへと親善の意味も込めて送る生徒を5人選出するようにという指示が本校へと来たのだ。それもわざわざ直接名前こそ示していないが、あからさまにオズボーン君をそのメンバーに含めるようにというお達し付でな」
そんなヴァンダイクの言葉にサラは目を丸くした後思案するよう口元に手を当てて

「息子可愛さの身内びいきって事ですか。鉄血宰相閣下も結局は人の親だったみたいだな」

「そういう理由ならば私としても安心なのだがね、今の彼を見ているととてもそうは思えんよ」

「ですよねえ、息子の晴れ舞台の学園祭にも全く姿を見せない親ですしねえ」

ため息をつきながら告げられたヴァンダイクの言葉にサラもまたため息をつきながら応じる。

「留学には経済知識を広げるためのIBMの訪問、自治州の実態を知るための歴史々との会談、後は導力技術の最先端という事でエプスタイン財団の技術者との交流、等もあるがメインはクロスベルの警備隊との実戦形式の演習となっていてね、そこで政府からは以って帝国の威光を示すようにとのお達しだ。くれぐれも帝国が侮られるような人物を送るな、とね」

「あーなるほど、そういう事ですか」

「そういう事だよ、バレストイン君」

すなわち帝国の未来を担う士官学院生は未だ学生の身でありながらもクロスベルの誇る精鋭、それを凌駕するものなのだと示せと、そういう事なのだ。

どうにもそういった大国の面子だのなんだのといった話が好きになれないサラは不機嫌そうな様子を見せるが、ヴァンダイクはそれもやむを得ぬ反応だと受け止める。

「でも良いんですか？リインとトワはそりや絵に描いたような優等生で、ジョルジュにしても素行に特に問題はあるわけじゃないですけど、クロウにしてもアンゼリカにしても優等生とは程遠いつてのは学院長もご存知でしょう。ハイニンリツヒ教頭あたりなんかはまたぶつぶつと言うんじゃない……」

普段から学院の品位がー誇りあるトールズの教官としての自覚がーととかくうるさいがみかみ親父を思い浮かべてサラは顔をしかめる。最もリインに言わせれば、そもそも教官の普段の生活態度があまりに酷すぎるせいだとなるのだが……

「まあ確かにハイニンリツヒ君は確かに君の言う事はあまり良い顔はしなかったな。だが理事会での話し合いの結果そういう事ならばと、レーグニツツ理事は夏至祭の時の実績からオズボーン君とハーシエル君を、イリーナ理事は導力技術への知識からノーム君が、ルーファス理事は四大名門の一員という事でログナー君をそれぞれ推薦されてな、各々が推薦した四人が皆ARCS運用のテスターへと関わっていることに気づいたイリーナ氏がそういう事ならばと、その5人を派遣する事は望まれたのだよ」

「……なるほど、それで最終試験という事で肝心の今の実力を測ることになったわけですか」

「うむ、そしてその結果は期待以上のものだったわけだ。これにて本校から派遣されるメンバーは決まったわけだ」

そこでヴァンダイクは自分自身の心の中にも燻っているものを吐き出すように

「政府の意図はどうかあれ、クロスベルを訪れることは若い彼らにとつても得難い経験となるだろう。教育者としては少しでも彼らにとつて得るものが多くなる事を祈るのみだ」

ある意味では来年度から実施する予定の特別課外活動の予行演習とも言えるな等と告げるヴァンダイクにサラもまた肩を竦めながら頷くのであった。

かくしてリイン・オズボーン、トワ・ハーシエル、アンゼリカ・ログナー、ジオルジュ・ノーム、クロウ・アームブラスト、この5名の一週間という極めて短い期間だが、クロスベルへの派遣留学が決まるのであった。

零の軌跡断章く鉄血の子く

クロスベル、それは西ゼムリア大陸に存在する二つの大国カルバート共和国とエレボニア帝国の境に存在する両国を宗主国とした自治州である。その地政学的な要員と豊富な七曜石な資源を巡って両国はこの地で度々衝突、多くの血が流される事となった。

そんなクロスベルが自治州となったのは70年前、クロスベル戦役と謳われる事となったカルバート共和国とエレボニア帝国の全面戦争の結果である。発端となった出来事は両国共に相手のせいだと主張しており、未公開の情報も多く定かではないが、とにもかくにも両国はそれまでの比ではないほどの戦力をクロスベルの地へと投入し、そして結果は誰も得をすることなく終わった。クロスベルの地は戦火によって蹂躪され、共和国も帝国も国の未来を担う多くの有望な将校や若者を失う事となった。このまま行けばそれこそどちらか滅びる事となる、そんな危機感を抱いたのだろう。両国の首脳部はとある妥協を行なう。

すなわち係争地となったクロスベルの自治州化である。無論多くの犠牲を払ったにも関わらず何も得られなかったで両国の国民が納得するはずも無い、表向きはどちらも自分達こそがクロスベルの宗主国である、我々は戦争に勝利したのだと伝えたのだが。

以来70年、影で多くの暗闘は行なわれているものの、暗闘で済んでいる事こそが両国のこの目論見が上手く行った結果と言って良い、クロスベルにて両国の大規模な軍事衝突が行なわれる事はなく、概ね小康状態を保っていた。さらに2年前、リベールの女王アリシアII世の調停により不戦条約が成立した事で緊張関係が緩和されたことにより、クロスベルを取り巻く状況はまたも変わる。

かねてより国際的な金融機関IBCが存在した事で金融都市として栄えていたが、その流れが加速。カルバート共和国とエレボニア帝国から多くの資本が流れ込むようになる。かくしてクロスベルは加度的に発展して行く事となるがそれは同時に、クロスベルが共和国

と帝国双方にとってもより魅力的な都市となる事を意味する。かねてより宗主国としてクロスベルに存在する議員の抱きこみを図っていた両国だがその流れは加速、どちらも自国にとって有利な法律を成立させるべく圧力をかけ、議会は帝国と共和国の代弁場となり、肝心のクロスベル市民のためというものがなおざりにされ、クロスベルの政治は汚職と腐敗によって塗れる事となる。そんな光と闇が同時に混在する様子に人々はクロスベルの事をこう呼んだ、『魔都クロスベル』と……

「帝国からの留学生の護衛と案内、ですか」

クロスベル警察特務支援課所属ロイド・バニングスは上司であるセルゲイ・ロウよりの指示をそんな風に復唱していた。

「おう、そうだ。期間は一週間、くれぐれも万一の事が無いようにしろという帝国と大変仲のよろしい議長様直々のご指示だとさ」

如何にもめんどくさそうな様子でセルゲイはタバコをふかしながら部下の疑問へと答える

「いやいや、ちよつと待ってくださいよ課長。帝国から来る旅行者だとかなんて山ほどいるじゃないですか、こういう言い方はアレですけど、そんな人達を一人一人護衛なんてしていたら幾ら人手があっても足りないですよ」

「最もな疑問だが、その辺は多分来る留学生のプロフィールを読めばすぐに理由がわかるだろうさ」

そういつてセルゲイは帝国政府より提供された留学生の面々の資料をエリイへと渡す。そうしてペラペラと資料を読み進めて行くエリイだったがある生徒のページで止まる

「1年I組所属アンゼリカ・ログナー……四大名門の一角ログナー侯爵家の一人娘、万一の事になれば帝国貴族との禍根になりかねないため特に留意すべし。なるほど、この人が理由ですか」

得心が行ったとばかりに頷くエリイに対してテイオは疑問符を浮かべて問いかける

「その四大名門というのは？侯爵という事なのでかなり偉いことはわ

かるのですが」

そんなテイオの疑問に対してエリイは妹に優しく勉強を教える姉のような表情を浮かべる

「エレボニア帝国ではまだ貴族制が健在な事はテイオちゃんも知っているわよね」

「はい、まあその位は」

「四大名門はね、そんなエレボニアの中においても特に力を持った四つの家のことよ。彼らは各々の地方を治める裁量を皇帝より与えられて、領邦軍と呼ばれる正規軍とは別の自分達の軍を所持しているわ。そうね、言ってみればある意味ではエレボニアという国は連合国家でその盟主を務めているのが皇帝、四大名門はその連合国家を構成しているそれぞれの国の王、そう呼んでも過言ではない位よ」

「なるほど……そんなところの令嬢ともなればそれこそある意味では王女様みたいなもの、というわけですか」

納得がいったと言った様子でテイオはエリイへと感謝の意を示しながら頷く

「貴族の令嬢様か……写真で見ても中々に美人だが流石に手を出すとすると後が厄介そうだな。いや、だがしかしそういう立場を超えた愛や恋つてのもそれはそれで燃えそうだな……」

至つて真剣と言った様子でランディ・オルランドは何かを思案するように考え込む。最もそのお嬢様はランディのようなタイプにとつては口説き相手というよりもむしろ好敵手と言っていいような女傑なのだが、そんな事を知る由もないランディは如何にも深窓の令嬢を想像しているようである

「いや、あんなランディ……」

「流石に考えなし過ぎるか……」

「頼むから、国際問題になるような事はしないで頂戴ね」

そうため息を付きながら呟く三人にしても如何にもと言った貴族の令嬢を想像している。人間立場という先入観に囚われないことは中々に難しいものである。

「盛り上がっているところ悪いが、問題なのはそいつだけじゃないぞ。」

最後の一人のプロフィールを読んでみる」

セルゲイのそんな言葉を受けてエリイは少しだけ慌てた様子でプロフィールをめくる。

「えーと最後の一人は1年I組所属リイン・オズボーン、かの鉄血宰相ギリアス・オズボーンの実子。アンゼリカ・ログナー同様その安全には細心の注意を払うべし……オ、オズボーンって!？」

留学生の中の最後の一人その中の人物の名前を読み挙げた瞬間にエリイは驚きの声を挙げる

「テイオすけ、今度は説明しなくても大丈夫か？」

「馬鹿にしないで下さい、ランディさん。流石にそれ位は知っています」

からかうような口調で問いかけてくるランディに対してテイオはむっとした様子を見せて

「鉄血宰相ギリアス・オズボーン。エレボニア帝国で平民出身ながら初の宰相となった人物で、就任時の演説の際に「国の安寧は鉄と血によるべし」と訴えたことからついた異名が鉄血宰相。ある意味ではエレボニアの皇帝よりも有名人物なのでは？」

教科書を読むようにすらすらしとした様子で言った後にそこであれ？とテイオは疑問符を浮かべる

「ですが妙ですね、確かそのオズボーン宰相は革新派と呼ばれる勢力のリーダーで確か貴族から蛇蝎の如く嫌われていると読んだ気がするのですが、そのオズボーン宰相の息子さんと大貴族の娘さんが一緒に来るんですか？」

「そこはまあ別に関係ないんじゃないかな。親がどんなに偉かったり嫌いあっていたとしてもって本人は本人さ、それこそ立場を超えて友人同士になる事だつてあるんじゃないかな」

さらりと実は祖父が高名な政治家であるエリイ・マクダエルにとつてはある種救われるような言葉をロイド・バニングスは吐く

「はは、案外それこそ立場を超えた恋人同士！とかだったりしてな、その二人」

「流石にそれは飛躍しすぎだと思っけど」

当人達が聞けばひとしきり笑った後に真顔で「有り得ない」と否定するであろうランディの冗談めかした言葉にエリイは苦笑いを浮かべる。

「事情をわかりました、ですが課長、その本当に俺たちでよろしいんでしょうか？」

特務支援課は特殊な部署である。遊撃士の真似事、警察の露骨な人気取り、そう批判する声も少なくない。魔獣被害の傍らにルパーチエの暗躍があったことを突き止めた事で、大分前向きに評価されるようにもなつて来たがそれでもやはり現状の評価は必ずしも高いものではない。そんな自分達が護衛につくことで帝国の機嫌を損ねるのではないかとロイドは危惧の問いを投げかけたが

「ああ、むしろある程度名が売れてきたが、売れ過ぎていない、今のお前達だから都合が良いんだよ」

セルゲイはタバコをふかしながらさらりとそんな風に告げていた。

「？あの、それは どういう……」

「……なるほど、帝国側だけではない、共和国側への配慮も必要という事ですか」

疑問符を浮かべたロイドに代わり、政治的な事情に精通しているエリイが得心した様子で頷く

「そういう事だ。さっき言ったとおりのご本人様が来るんだつたらそれこそ警備隊の精鋭による入念な警備が敷かれる事となる、だが流石にそのご子息方の一週間程度の滞在に警備隊を動かしていたら今度は共和国と仲の良い議員様達が良い顔をしない。かといってまるつきり護衛をつけないわけにも行かないが、それこそ遊撃士になんて任せたら面子が丸つぶれだ」

そこでセルゲイはふーと息を吐いて吸っていたタバコを灰皿に押し付けて

「そこであちに白羽の矢が立ったわけだ。なんだかんだでそれなりに実績を挙げていて失礼にはならない、それでいて動かしやすい便利な連中、そんなノリだな」

そこでセルゲイは人の悪そうな笑みを浮かべて

「それで、どうするんだ。俺もどんな奴らが来るかはプロフィールで
の内容程度しか知らん、それこそ鼻持ちならん如何にもといった感じ
のお貴族様やら、あからさまにこつちを属州だと見下してくるエリー
ト様が来るかもしれん。どうしても嫌だっというのなら断って、おそ
らくは議長様へのゴマスリに熱心な警備隊の司令官が嬉々として引
き受けると思うが……」

元部下としてセルゲイの言うように現場の隊員たちへと無茶振り
する無能な元上司の様子がありありと想像できたのだろう、ランディ
はうげえと苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

そうしてロイドは確認を取るように仲間達に視線を送った後に
「わかりました、その支援要請引き受けさせていただきます」

かくしてお膳立ては整った、後に灰色の騎士と謳われる事となる帝
国の英雄リイン・オズボーン、そして後にクロスベルの英雄となるロ
イド・バニングス、二人の英雄はこうして七耀歴1204年の2月に
初めて邂逅することとなるのであった……

鉄血の子と魔都

「……以上の観点からクロスベルが我がエレボニア帝国の属州である事は疑いようの無い歴史的事実である、しかしこの地から自治権を取り上げて正式に帝国の属州とする事はカルバート共和国を刺激する事となり、70年前のクロスベル戦役の再来を招く事となるだろう。

故にクロスベルに関しては自治権を与えた今の状態のままに、宗主国たる我がエレボニア帝国に対する配慮を求めることが最も国益に叶うと私は結論付けるものである」

そう締めくくられた学術院の教授が記した著書「クロスベル自治論」を読み終えたリインはそつと閉じる。そうしてその本を仕舞い終えると今度は続いて別の本を取り出す、全く別の方針が綴られた内容「クロスベル併合論」というタイトルの先ほどの教授とは異なる学派の教授が記した著書である。

クロスベルの扱いに関してはエレボニアには二つの学派が存在する、一つはクロスベルはあくまで自治州という形にしておき共和国を極力刺激にしないようにし、現状を維持しつつ自治州政府へと配慮を求めて、経済的な旨味を享受しようというクロスベル自治論。

もう一つはクロスベルを完全に併合してしまい、その経済力を吸収し、それを以つてクロスベルを対共和国のための橋頭堡にしようというクロスベル併合論である。

前者の主張はこうである、クロスベルの併合、それをしてしまえばカルバート共和国との緊張関係に繋がり、やがてはかつてのようなクロスベルを巡った全面戦争を招くだろう。そしてそうなれば最終的にエレボニアが勝利したとしても手痛い代償を払う事となるだろう。

戦争とは勝てば良いというものではない、勝つにしても支払った代償に見合うだけの対価が得られなければ意味がないのだ。そして共和国との全面戦争に対して支払う代償とは莫大な物となるだろう、それこそかつてのクロスベル戦役の時のように両国共に疲弊してポロポロになつた挙句得たのは戦火によつて荒廃したクロスベル、そんな身も蓋もないものになりかねない。

ならば現状を維持しつつ経済的な利益を得るのが一番だという主張である。基本的に政府の官僚や財界からはこちらの論が支持を受けており、二年前の不戦条約以降特にその流れは加速している。

後者の主張はこうである、クロスベルは地政学的に極めて重要な土地であり、そこを万一共和国奪われればそれはすなわち共和国によってエレボニアへと攻め入るための橋頭堡を築かれることとなる。故にそうなる前にクロスベルを完全併呑し、要塞化して共和国からの侵攻に備えるべしと、要はこういう主張である。

エレボニア帝国にとってカルバート共和国は最大の脅威と認識されている。ガレリア要塞とそこに用意された列車砲はすなわちエレボニア帝国の抱くカルバート共和国に対して抱いている恐怖の象徴と言つても良い。ガレリア要塞と列車砲の存在、それは共和国がクロスベルを併呑した場合、それに備えて作られた対共和国の防衛の要だろう。特に列車砲などその最たるものと言つていいだろう、金融都市であり、エレボニアの自治州たるクロスベルに列車砲を打ち込んでエレボニアにとって当然得るものなど何も無い。では何のためかと言えばそれは至つて簡単で、クロスベルを共和国に奪われた際にその都市機能を破壊してしまう事、いわば得るためではなく相手の成果を破壊するためのものなのだ。

クロスベル市民にとつてみればさも自分達を威嚇するために作つたかのように錯覚するかもしれないが、それは副次的なものである。何故ならばそもそもエレボニア、これはカルバートもそうだが、にとつてクロスベル自治州それ自体は脅威でもなんでもないのだ。クロスベルには空挺部隊は愚か、戦車すら存在しないのだから。仮にクロスベルが万が一とち狂い、自国に宣戦布告したところでそれこそ戦いにすらならず終わるであろうというのが両国の見解であり、厳然たる事実である。故にガレリア要塞に存在する列車砲とはクロスベルを敵と想定したものには非ず、あくまでカルバート共和国との全面戦争を想定して用意されたものなのである。

こういつた事情からクロスベル併合論を支持する人物は一般の国民や軍部に根強く存在し、国防上の観点からこの論を支持する数も決

して少なくとも無くエレボニアにおいては無視し得ない影響力を持つ論である。

特に現在平民から絶大なる支持を集めている鉄血宰相は百日戦役という帝国人の誰もが予想していなかったリベール相手の敗戦後に「強いエレボニア」を取り戻した事で軍部や民衆から絶大なる支持を受けているが、その「強いエレボニア」を支持する層はこの併合論を支持する人間が多い。それ故に鉄血宰相としては自身の支持基盤からの支持を失わないためにこの論を無下には出来ないだろうというのが大方の見方である。

政財界としてはクロスベルを自治州のままにする事を、軍部と国民感情としてはクロスベルの併合を望む、大まかに分ければそんなところだろう。あくまで大まかな分け方ではあるのだが。

「まあた難しい顔して難しい本読んでやがんな、お前は」

もう一冊も読み進めて、終りにさしかかったところで、どこからともなく現れた悪友はうへーとリインが先ほど読み終えた本を手にとって、しかめっ面を浮かべながらそんな事を言う。

「クロスベル自治州に関する資料についてハインリツヒ教官に質問したらこの二冊を薦められたからな、留学前の予習という奴だ」

年末年始の休暇を終えて1月となったトールズでリイン達5人は学校側から2月のクロスベルへの留学の件を伝えられていた。そうして当然のように張り切ったリインはこうして事前学習に務めているのであった

「やれやれ相変わらず糞真面目っていうか……でもよ、それはあくまで俺らの側から見た話だろ、クロスベル側にしてみるとそれこそ勝手に併合だとかなんとか言われてもふざけんな！って話だろ、下手にその手の論説読んで影響されるとむしろ現地での軋轢に繋がりがねないんじゃないかね」

まただ、とリインは思った。この悪友はおちやらけているようでいて、この手の大国のエゴの話になると必ずこうして食って掛かって来て小国側の代弁めいたことを言う。リインにとってはこの手の反論と向き合うことは己の視野を広げる事に繋がっており、そういう意味

では歓迎出来るものでもあったのだが、その実感が籠っているかのような様子にリインは度々違和感を抱いていた。

まるで他ならぬ自分がその併合された属州出身であるかのような、祖国を失うという事がどういふ事なのか、それを身を持って知っているかのような様子だと。

「お前の指摘は最もではある。俺たちがただの旅行者として行くならそれこそお前の言うとおおり、あまり考えないほうが上手く行く類ではあるだろう。だが俺たちは士官学院生だ。そして今回の留学はエレボニア帝国を背負って行く事となる。故に我がエレボニアから見た場合のクロスベルの立ち居地、これを確認しておかないわけにはいかないだろう」

「じゃあお前は宗主国の人間として属州に行くつもりで今回クロスベルに行く気なのか？」

クロウは目を細めて試すかのようにそう問いかける

「宗主国の人間として自治州に行くつもりでクロスベルに行く気さ。クロスベルは紛れもない我が帝国の一部だが、同時に自治州として認められている。これは政府及び皇帝陛下が公式に決定された事だ」

そんなクロウの問いかけに対してリインもまた怯む事無く返す、自分はいくまでエレボニアの人間であり、政府と祖国の利益と立場を擁護する側に居るのだと改めて目の前の悪友に宣言するかのよう。

そうして二人の間に何時になく、どこか張り詰めた空気が漂って……

「別段、殊更居丈高に振舞う気はないさ。そんな風に振舞っても反発を買うだけだからな。だが俺たちはエレボニアという国を代表して行く以上、クロスベルは我が帝国の一部である、ここを譲るわけには行かない。それ位はお前にもわかってるだろう」

その境遇から政府に対して何かと懐疑的な様子を見せる悪友に釘を刺すようにリインはクロウを見据えながら告げていた

「わーってるよ、まったくお前やトワ、それにジョルジュの奴はともかく何で俺やゼリカのような不良生徒まで選ばれたかね」

「実技の実力を買われたんだろう、後はARCSの運用テストの最

終段階、その意味も含まれて居るのだろうか」

留学の後半に予定されている錬度のみで言えば帝国正規軍にも引けを取らない、そう言われているクロスベルの警備隊との演習予定、そこから目の前の悪友が選ばれた理由をリインは推測する。

「ま、そんなところだろうか。でもよ実技の実力を買って採用したんだ、当然俺が不良生徒だって事は学院側も知っているよな」

そうしてクロウはニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべて

「そんな俺にまさか首席で副会長も務める模範生徒のリイン・オズボーン君みたいな振る舞いを求められたって困るわけだ」

ふてぶてしくそんな事を言うクロウにリインは目を丸くして

「おい、クロウお前は俺の話を……」

「聞いてたさ。お前はエレボニア帝国や政府を背負うつもりで行くし、そういう風に振舞う気なんだろ。いいんじゃないか、好きにしろよ。それがお前の、リイン・オズボーンの生き方なんだろう」

お前がそういう堅物野郎なのだという事をもう良くわかって居る、今更そんな程度で友人付き合いをやめるつもりはないとでも言うかのようにクロウは落ち着いた様子でリインへと語りかける

「だけど生憎と俺の、クロウ・アームブラストの生き方ってのはそうじゃない。人には個性ってもんがあるからな。お前にお前の生き方があるように俺には俺の生き方がある」

そこでクロウはおちやらけた様子から真剣な表情で今度はリインを見据えて

「それとも何か、お前は自分の生き方ややり方が絶対的に正しい、だから自分に従えとそう言うつもりかよリイン。だとしたら悪いがお前との奇妙な友人関係も此処までだ」

リインに譲れないものがあるように自分にも譲れないものがあるのだと、友人同士だろうとそこに平然と踏み込んでくるというのなら自分はそれを許容できないと真剣な表情で告げるクロウに対してリインは……

「……わかった。お前の言う事も最もだ。同じ学院生として帝国人として、何より友人として度を越した振る舞いには忠告させてもらう

が、お前個人のクロスベルに対するスタンスについて干渉するような事を言ったのは俺の方に非があった」

素直に自分の非を認めた。明確な軍人ではなく、未だ公職にも就いていない状態の自分達に国家の利益を代弁する義務はなく、自分の語っていた内容があくまで自分個人の思想や考えであつて他者に押し付けて良いものではないと気づいたのだ。

「それに、あるいはお前やアンゼリカのように国という枠組みに囚われずに、一人の対等の人間としてどんな相手にも接する、そんな生き方こそがあるいは人として正しい生き方なのかもな」

苦笑しながら、立場に囚われずに自由に生きる友人二人に対するどこか羨望と自分には出来ないという諦観の入り混じった複雑な感情を抱きながら告げられたリインの言葉。その言葉にクロウは一瞬息を呑む。

「……………ははは、俺はそんな大層な人間じゃねえよ」

そうして、どこまでも真っ直ぐな目の前の友人に対する羨望の色を覗かせながらクロウはポツリとそう零した。

「やけに殊勝だな、何時ものお前だったら「ようやく俺の凄さがわかったか!」だとか「これを機に俺を見習うんだな!」とか言うところだろうに」

そんな友人の様子にリインは普段とは違うその妙な様子に訝しがる

「いや、流石の俺も金欠になった時に何時も快く奢ってくれる大親友にそんな事は言えねえって」

そんな風にクロウは何時ものおちゃらけた様子にすぐに戻り、そんな何時もどおりの様子に戻った悪友にリインはリインで呆れ顔を浮かべて

「誰が何時奢った。あくまで貸しに過ぎん、きつちり取り立ててやるから覚悟しろよ」

そんないつもどおりに金欠の友人に対する釘を刺すのであった。

鉄血宰相を憎む者と慕う者。薄氷の上で成り立っているこの二人の奇妙な友情が終りを告げる時は徐々に近づいてきていた……

鉄血の子と魔都②

クロスベルへと赴く当日、リイン達5人は駅へと集まっていた。

「ふふふ、しかし一週間のクロスベル旅行だなんて政府と学院も粋な事をしてくれるね。これはつまり、トワと一線を越えろという後押しかな」

どこまで本気なのか不明な様子でそんな事を告げるアンゼリカにトワはいい加減に慣れてきた様子で

「アンちゃんったらそんな冗談ばかり。旅行じゃなくて短期留学なんだから真面目にやらないと駄目だよ」

めっだからね等と本人としては精一杯厳格な、傍から見ると微笑ましい、様子でトワはそんな友人へと注意する

「わかっているさ、だがしかし実際問題一週間程度じゃ旅行のようなものだろうか？後半には何でも現地の警備隊との演習を行なうとは聞いているけど」

「そういえば前半何をやるかいまいち聞かされてないよね、最初にハルトマン議長だっけ、クロスベルでの親帝国派で知られる人と会うってのは聞かされているけど」

「ああ、その辺の細かい話は今回の留学の引率を務める政府の人が教えてくれるって話だったな」

今回の留学はトールズ士官学院主導のものではなくあくまで帝国政府が主導となったもの、加えてトールズの教官というのは基本的に多忙であり、本来予定されていなかったこの時期に生徒の引率を務めるとなれば必然その時間の授業に穴が空いてしまう。そこで今回のクロスベル行きに当っては政府の人間が引率を行なうとリイン達は聞かされて、こうして待ち合わせ場所であるトリストア駅に集まっているのであった。そうしてしばらくその場でとりとめのない話をしていくと……

「レクターさん？」

何時もとは異なる正装できちつと身を固めた兄貴分レクター・アランドールの登場にリインは目を丸くして

「よ、学院際以来だな。元気にしてたか？」

「その格好を見ると、貴方が我々の引率を務める方という事で良いのかな？」

「ああ、その認識であっているぜ。今回の留学の引率を務める、帝国政府三等書記官レクター・アランドールだ、よろしくな」

三等書記官という固そうな地位からは凡そ想像できない気さくなまるで近所のちやらいあんちゃんのような様子でレクターはワインクをして

「ま、積もる話は列車の中でするとしようや。まずは帝都まで行って、そこでクロスベル行きの大鉄道に乘換えだ」

そんなレクターの言葉を皮切りに5人はトリストタを跡にするのであった。

「えーと、つまり引率と言ってもあなたが一緒にいるのは初日の挨拶回りと最終日に帰る時だけでそれ以降は基本私たちだけでの行動になるという事かな、レクター書記官」

クロスベル行きの列車に乗り込み自己紹介もそこそこに、最もレクターの場合は粗方リイン達の事を知っていたのでレクターが自分がリインの兄貴分のようなものと説明した程度だが、レクターは今回の留学の予定の説明を行っていた。

「正確には現地の特務支援課ってところと一緒に行動して貰うけどな、お兄さんがいなくて寂しいかも知れないがまあ我慢してくれや」
「その特務支援課というところと協力して、ハルトマン議長より渡される現地での課題に取り組みとそういう事でよろしいでしょうか、アランドール書記官」

さらりと自分に対するからかいを受け流してリインは公私のけじめをつけるかのようにそうレクターの事を呼んでいた

「ま、やることはぶっちゃけ遊撃士共の真似事みたいなもんだが、そうして未来の帝国を担う将来有望な若者達にクロスベルという地を知ってもらい、親善と交流を深めると、まあそれが前半の目的になるな」

「前半の……ですか」

「ああ、政府としての本命はやはり後半の方の警備隊との演習にある。ここでの演習では警備隊との精鋭との模擬戦闘も含まれて居るわけだが、そこで諸君らには以ってエレボニアの威信を示してもらいたい、とまあそんな感じだな」

「……なるほど、どうして私とクロウのような不良生徒が選ばれたのかと思っただけでそういう事か」

レクターのその言い方に政府としての意図をアンゼリカは理解したのだろう、ため息をつきながらやれやれと肩を竦める。

「承知しましたアランドール書記官、全力を尽くします」

そう宣言した後にはリインはチラリとクロウを窺うかのような目で見て……

「わーってるよ、正直思うところはあがるが、手を抜くような真似はしねーよ」

無然とした様子でそう答えるクロウにリインも静かに頷くのであった。そんな弟分と友人のやり取りをかかし男は興味深そうに眺めていた……

「ようこそ、クロスベルへ。皆さんの案内役を任されております、クロスベル警察特務支援課のロイド・バニングスです。これから一週間よろしくお願ひします」

クロスベルへと到着したリイン達を、爽やかな笑みを浮かべながらロイド達は迎えていた。ロイドの挨拶の後に気さくな様子でランデイが、丁寧な様子でエリイが、どこかそっけない様子でティオがそれぞれ挨拶していく。

「帝国政府三等書記官レクター・アランドールだ。出迎え、痛み入る」
常になく真面目な外交官としての仮面を被ったレクターの挨拶の後に、レクターから挨拶をするようにと目で促されて

「トールズ士官学院所属、リイン・オズボーンです。こちらこそよろしくお願ひいたします」

(この子が……)

(ギリアス・オズボーン宰相の息子)

(なんとというかこりやまた如何にもって感じだな)

(真面目そうな人ですね、流石は士官学院生という感じですよ)

ピシリと敬礼を施して如何にも軍人候補のエリートと言った様子で挨拶をするリイン。そんなリインを見て特務支援課の面々はその肩書きとプロフィールから想像していた大国のエリート軍人候補生と言った様子と違わぬ様子に若干警戒の色を強める。それに続いて

「トワ・ハーシエルです。これから一週間よろしくお願いしますね」

「ジョルジュ・ノームです。クロスベルは導力技術がとても発達していると聞いていたので楽しみにして来ました」

そんな片や頑張り屋さんの女の子、片や如何にも温厚そうな太っちょの青年と言ったトワとジョルジュの挨拶によってリインの挨拶によって緊張していた場が和む。

「クロウ・アームブラストです！クロスベルの歓楽街はすごいって聞いていたので楽しみにしてきました！色々と案内してくれると……ってリイン君ったらそんなに睨むなよく親交を深めるためのお茶目な冗談って奴じゃないか」

ジロリと今にも殴りかかってきそうな様子で拳を構えながらこちらを睨んでいるリインの視線を感じて殊更おどけた様子をクロウは見せる

「ま、とにもかくにもあんまり国の誇りがどうのこうのだからさういふのは柄じゃないんで、その辺あんまり気にせず仲良くしてくださいと助かります！」

「お、お前さん中々に話がわかりそうだなよくつしゃ気に入った、今晚辺りお兄さんがとっておきのところに連れて行ってやろうじゃないか！」

「お、おいランディ……」

「はあ……未成年を大人が悪い道に引きずり込まないの。貴方も、まだ学生なんですよ？きちんと節度ある行動を心がけるように」

「………なんかスゴイ落差ですね」

如何にもお調子者と言った様子のクロウの言葉にランディは笑顔で乗り、そんなランディをロイドは慌てた様子で止め、エリイはため息を付きながら嗜め、ティオはリインと見比べながらしみじみとした様子で呟く。

「こ、この阿呆は俺の車内での言う事を聞いていたのか……」

「まあまあ、クロウはいつもあんな風だし、ある意味クロウらしいじゃないか」

「き、きつとクロウ君なりの特務支援課の人達と仲良くなるための軽い冗談だろうからリイン君も抑えて抑えて」

顔をひくつかせて今にもマグマが噴火しそうな様子のリインをトワとジョルジュが必死に宥める。本来クロウを諫めるべき立場にあるはずのレクターは面白そうに静観していた。そうして一通りの挨拶を終えてどこか和やかな空気が漂い始めたところでハルトマン議長の下へと訪れる事に……否、アンゼリカの挨拶が未だ済んでいなかった。

「おい、アンゼリカ」

「アンちゃん、挨拶、挨拶しないと」

なぜか微動だにせず何時までも挨拶をしないアンゼリカを不審に思ったリインとトワは挨拶を促す。しかし、それでもアンゼリカは反応しない。まさかログナー家の息女としてたかだが属州民如きに挨拶など出来ないという事なのかと特務支援課の面々が若干身構えて、アンゼリカに限ってそんな事はあるまいとリイン達が何事かと思っっていると……

「……………」

「?あの、私が何か?」

じつとティオを凝視したかと思うとプルプルと震えだして……

「……………」天使だ」

そんな言葉と共にがばりとティオを抱きしめにかかる、唾然とする特務支援課の面々と友人達を他所にアンゼリカ・ログナーはヒートアップしていく

「ああ、ティオ君!まさかこの地で君のような天使に会えるとは思っ

ていなかったよ！魔都だなんてとんでもない、君のような天使がいるこの地はまさに女神の祝福を受けた楽園に違いない!!」

そんな事を叫びながらアンゼリカはティオを抱きしめたままにすりすり頬ずりを行なっている。そこに大貴族の令嬢らしい貞淑さなどどこにもありはしない、居るのはただの変質者であった。

「おい、こらまで何をやっているアンゼリカ、お前は俺の此処に来るまでの間に話を聞いていたのか」

そんな道を今まさに踏み外そうとしている友人を止めるべくリインはアンゼリカを引き剥がしにかかるがアンゼリカはびくともしない、そして顔だけリインの方に向けて告げる

「ああ、帝国人としての誇りが云々がどうかという話だろ？勿論聞いていたさ、その上であえて言おう、知ったことか！とね。今私にとつて大事なのを目の前の天使と思う存分に戯れる事さ！は、いつその事に帝国にお持ち帰りを!」

「何を寝ぼけたことを言っている！今の貴様は完全に誘拐犯のそれだぞ！いいから正気に戻れアンゼリカ・ログナー！貴様は誇りあるトルズ士官学院の生徒であり、俺たちは祖国であるエレボニア帝国を代表して来ているんだぞ!!!」

「あの、どうでも良いのですが、私の耳元で二人して大声を出さないで欲しいのですが……というかい加減に離してくれませんか……」

ギャーギャーと自分のすぐ傍で口論(?)し出した二人に対してティオは遠い目を浮かべてそんな事をポツリと呟く。

「もう、アンちゃんったらティオちゃんが苦しそうにしているよ、いい加減に離してあげなよ」

「は、天使がここにもう一人！違うんだトワ！決してこれは浮気などではなく、私は君に対する思いも、ティオ君に対する思いも、どちらにも偽りなどなくどちらに対しても本気なだけなんだ！」

まるで浮気を正妻に見咎められたかのようにアンゼリカはそんな風に錯乱した様子で錯乱したことを口走る。

「やれやれ、ゼリカの奴も仕方ねえ奴だな」

「なんか肩を竦めてさも自分は手のかからない奴みたいな風な雰囲気

出しているけどリインにしてみるとクロウも大概だと思うよ？」

キリツとした様子でアンゼリカを眺めてそんな事を呟くクロウに
ジョルジュはツツコミに入れる。

「あはははは、なんとというか……」

「随分とイメージが違ったわね……」

「トワちゃんはテイオすけと同じ年位にしか見えねえし、アンゼリカ
ちゃんに期待していたんだけどなあ……」

大国エレボニアの名門士官学院からの留学生、そんな肩書きから抱
いていて如何にも真面目な軍人の卵の集まりと言ったイメージが崩
れながら、ロイド達は苦笑するのであった。

鉄血の子と魔都③

「ようこそ、トールズ士官学院の諸君、クロスベル自治州議会にて議長を務めているミハエル・ハルトマンだ。帝国の未来を担う俊英達にこうして会えて嬉しく思っているよ。我が自治州と宗主国たる帝国の友好の架け橋となるべく、短い期間ではあるが思う存分にクロスベルという地について学んで行って欲しい」

堂々とした様子でそう挨拶するのはクロスベルにおいて親帝国派の重鎮として知られる自治州議会議長を務めるミハエル・ハルトマンである。帝国貴族とも縁のある名家出身の彼は議会においても明確な親帝国振りをアピールし、それによって様々な便宜を帝国政府から得ておりクロスベルの政界において絶大な存在感を誇るが、それと同時にルパーチェ商会での裏での繋がりなど黒い噂が絶えない人物であり、清廉潔白で持つて知られる彼の政敵たるマクダエル市長とは対照的な存在と言って良い。

しかし、そんな黒い噂が絶えない人物にもかかわらず政界においては絶大な権勢を誇ることに、清廉潔白で知られるマクダエル市長の方こそがむしろ苦境にあること、それこそがそのままクロスベルの今を映し出していると言って良いだろう。

「そして君がリイン・オズボーン君か……ふふふ、君のお父上である宰相閣下とは親しくさせていただいていたね、つい数ヶ月前にもそのアランドール書記官の仲介でお会いさせていただいたのだよ。お忙しい方故、真に残念な事にマクダエル市長には会われなかったようだがね」

殊更自分とだけ鉄血宰相は会ったという事実を優越感を滲ませながらハルトマン議長は口にする。その様子にその場にいた多くの人間達は大小、差はあれど各々不快感めいた感情を抱く。平然としているのはレクター位であろう

「今回の留学でも全面的にサポートさせて貰うつもりだ、何か困ったことがあったらいくらでも言ってくれたまえ。このミハエル・ハルトマンが最大限君達の力となる事を約束しよう」

「……」厚情、痛み入ります。ですが自分は一介の士官学院生ですので、どうかそのおつもりで接していただければ幸いです」

どうにか、抱いた嫌悪感を表に出さないように務めながらリインはそう応える。個人的に好意を抱けない人物ではあるが、目の前の人物はクロスベルにおける親帝国派の重鎮。失礼のないように務めなければならぬ、そう自制して挨拶をする

「ふふふ、真面目な事だ。だが君が望む、望まないに関わらずこちら側としてはそういうわけにはいかないのだよ。君にもしものことがあるれば、我々は宰相閣下に申し訳が立たないのだからね」

そんなリインの青さを見抜いているのだろう、若いな、とでも言いた気に魔都において確かな権勢を誇る男はそう口にする。どこまで言ってもリインは鉄血宰相オズボーンのただ一人の実子である、その事実から決して逃れることは出来ないのだと改めてわからせるように。

「特務支援課の諸君も努々そのことを忘れぬようにくれぐれも頼むぞ。有事の際はその身を張って、彼らを護るように」

「心得ています」

「さて、それでは聞き及んでいるとは思いますが私より、君たちへと滞在中の課題を出させてもらう。といっても難しいことではない、要はそちらの支援課の諸君が普段やっている支援要請だったかな、それを共にこなして貰う事で我が自治州と帝国の友好を深めると同時に、諸君にこのクロスベルの地に対する理解を深めてもらうと、まあそんな程度の事だ」

そう言ってハルトマンは用意していた封筒をリインへと手渡す。中の封筒には様々な依頼、主に帝国寄りの内容が多いが、書かれておりその中でも、5日目のベルガード門での警備隊との演習、6日目のタングラム門での警備隊との演習には必須と赤字で判が押されている。

「帝国の未来を担う事となる、君たちにそのような雑事をさせてしまうことは申し訳ないが、まあ何事も経験と思ってくれたまえ」

そうして話は終わったといった様子の子のハルトマンにリイン達は挨拶をしてその場を跡にするのであった……

「お〜こりやまた豪勢な部屋じゃねえか。場所も歓楽街にあつてと最高だし、全くもって持つべきものは親が宰相の友人つてもんだな。お零れに預かせてもらいます、リインさん！」

「ちよ、ちよつとクロウ……」

ハルトマンへの挨拶後一行は初日という事で市内のパトロールの意味も含めた巡回を一通り行なった、一先ず一通り市内の様子を把握して、明日以降改めて依頼をこなして行こうという手筈である。そうして一日の行動を終えた5人はハルトマンの厚意によって用意された宿泊施設、歓楽街にある高級ホテル『ミレニアム』へとたどり着いた。いくら宗主国の名門士官学院の人間とはいえ、一介の士官学院生に用意されたものにしては明らかに度を超した豪華さで、ありがたい議長からの配慮が働いているのは明白であった。

そして、そういったものに嫌悪感を抱くのがリイン・オズボーンという少年である。リインにとっては凡そ好意的になれない人物だが、そんな人物こそが帝国にとつては有益であるという事実、もう数年もすればそういったジレンマも飲み干せるようになるだろうが、それらを飲み込むにはリインは未だ若く未熟であった。

そんなわけでハルトマン議長と会ってからのリインの機嫌はかなり悪く、そんなリインに対して殊更挑発するような事を言うクロウにジオルジュは慌てた様子を見せる。

「……………」

案の定、と言うべきカリインは何も言わずにただジロリと機嫌が悪そうにクロウを一瞥する、しかしそんなリインからの視線にクロウは軽く肩を竦めて

「ま、そんな程度に考えておいたほうがいいぜ。お前さんが軍人になるっていうのならどう足掻いたってお前さんの親父が鉄血宰相だつて言うのからは逃れられない。こういったゴマすりもあるいは妬まれるのも、それこそ日常茶飯事になるんだからよ」

お前の選ぼうとしている道はそういう道なのだ。と改めて突きつけるかのようにクロウは口調や態度こそ軽いものの、友人の事を心から慮った様子で口にする。

「せっかくの旅行なんだ、楽しんで行こうじゃねえか」

そうして笑みを向けて来る友人に対してリインは毒気を抜かれたように

「旅行ではなく留学だ。俺たちは遊びに来ていたわけじゃないんだぞ。……だがまあお前の言うとおりではある。あの手の手合いに？み込まれぬように注意をする必要があるが、あまり気にしすぎても仕方が無い……か」

「そうそう、こういうのは少し大げさな位に喜んでおけば良いんだよ。そうしておけば向こうもそれで懐柔に成功したと勝手に思ってくれるんだからよ」

不敵な笑みを浮かべながら、受け取った瞬間にこちらにとっても弱みとなるあからさまな賄賂ならばいざ知らず、こういった多少の便宜などと言ったものを向こうが勝手に恩を着せたと思いついたとして、もこつちが気にしなければないも同然なのだ。とクロウはふてぶてしく告げる。そんな友人のたくましさにはリインは肩をすくめて苦笑するのであった……

「さく、そんなわけでもない、ちよめくるめくクロスベルでの素敵な夜を堪能して来ると」

「それじゃあ今日一日あった出来事をレポートに纏めるとしよう。安心しろクロウ、友として俺がきつちり添削してお前のレポートも相応のものに仕上げてやる」

そういつて部屋からちゃっかりと抜け出そうとするクロウの腕を笑顔で浮かべながら掴みリインは告げる

「ジョルジュもアドバイス程度なら出来るから気軽に相談してくれ」
「ありがとうリイン。でも僕はレポートを描くのは実験で慣れているし、クロウの方を見てあげてくれればそれでいいよ」

「おい、お前らそれで良いのか!?あのクロスベルだぞ！そして俺らがちょうど今いるのは歓楽街なんだぞ！レポートなんて描いている場

合かよ!!!」

お前らはそれでも男か！などと叫ばんとする勢いのクロウに二人は冷たい目を浮かべて

「逆に今書かずに何時書くつもりなんだ。このレポートはツールズだけではなく政府にも提出する事になっているんだ、半端な物を書くわけにはいかんぞ」

「どうかクロウ金欠なのに、遊びに出かけてどうするの？遊ぼうにも遊ぶための元手がないでしょ？」

そうして告げられるほら大人しくレポート書いた書いたという友人二人の言葉を聞いてクロウのちくしょーという叫び声が木霊するのであった。

「よ、お疲れさん。それでどうだったよ、帝国から来たお坊ちゃん方は」

どこか興味深そうな様子で四人の上司を務めるセルゲイはそう問いかけてくる

「そうですね、中々に個性的ではありませんでしたが皆悪い人達ではありませんでしたよ。少なくとも課長の言っていたように属州民なんて風にごつちを見下してくるような人は居ませんでした」

「ほう、そりや何より。名門士官学院の人間ともなればその辺ある程度弁えた奴らが来るって事かね」

「その割にはなんとというかランディさんみたいなおちやらけた人やら、人をいきなり人形みたいに扱う人やらがいきましたけどね」

とても士官学院の人間とは思えない位に奔放な様子で、市内の巡回中にも気が付いたら道行く女性を口説き出して、その度にリインに青筋を立てさせていた約2名を思い出しながら呆れた様子でテイオは
眩く

「はははは、トワちゃんなんてテイオすけと同一年か下手したらそれ以下じゃないかってなるくらいにちっこかったしな」

本人が聞いていればむくれそうな、しかし紛れもない真実であり本音でもある事をランディも笑いながら告げる

「でも、今日一日色々と話させてもらったけど見識や知識の深さは流石は名門士官学院の生徒だって感心させられるものだったわ。それはリイン君の方もそうだったけどね」

「確かあの二人が首席だって話だったよな……なんというか色々苦勞してそうな感じだったけど」

ロイドもまた青筋を立てながら奔放な二人に対して怒るリインとそんなリインを宥めつつ二人に釘を刺していたトワという優等生コンビの様子を思い浮かべながら苦笑する。

「知識という点で言えば導力技術の分野に関してはジョルジュさんの独壇場でしたね、今すぐエプスタイン財団に就職してもやっていけそうです」

「どうやら随分と仲良くなれたようで何よりだよ」

まるで友人達について語るように好意的な様子を見せる面々にセルゲイはホツとしつつも若干つまらなそうに呟く。

「ま、仲良くなるに越したことはないがくれぐれも気は抜くなよ。何かあれば帝国との国際問題になる面子っていうのは脅しでもなんでもない事実なんだ。来月には創立祭も控えているこの時期に下手な火種を作るような事にならんようにな」

そんな風に念のために釘を刺すような事をセルゲイは最後に告げて、その場は解散となるのであった。

鉄血の子と魔都④

「班を二つに分ける？」

「ええ、流石に9人全員で行動するというのは大所帯過ぎますし、それだったら日によって互いに回る地区をある程度決めて4人と5人の二班に分けたほうが効率的に回れると思うんですが、如何でしょうか？」

二日目の朝、ホテルのロビーにて集合し終わると、リインはそう口イドへと提案していた。

「うーん、確かに一理あるが……」

そうしてロイドは考え込むような仕草を見せる。理屈の上では確かにリインの言うとおりである、9人もの大所帯となると通りを歩くのにも中々不便となるだろうし、二班に別れて行動するほうが効率という点で考えれば一番だろう。

(だけど、課長とそれと議長からもくれぐれも万一の事がないようにって釘を刺されているしなあ……)

二手に別れるという事はすなわち戦力が分散するという事でもある。万一を考えるなら当然固まって行動するほうが望ましいのだが、そんなロイド達の思惑を察したかのように

「そう心配なさらずとも俺もクロウもアンゼリカも、それにジヨルジュにしてもトワにしても自分の身は自分で護れるつもりですよ。これでも皆士官学院生ですので、戦闘に関する訓練は一通り受けていますし、この5人で魔獣退治やらをやったことも、もう数え切れない位ありますから」

「ま、信じて良いんじゃないかねえかなロイド。なんたって5日目や6日目には警備隊との演習だって予定しているんだ、下手しなくても俺たち4人よりも強いつて事も十分に有り得ると思うぜ。市外ならともかく、市内で流石におおっぴらに襲撃だとかが来るって事もないだろう」

もしもそんな事になったらそれこそすぐに警察本部や遊撃士がすっ飛んでくるだろうしなとランディはリインからの提案に乗り気

な様子を見せる。そうしてロイドは少しの間思案すると……

「わかった、それじゃあ班分けをどうするかだけだ」

「もちろん私はテイオ君とトワと一緒に班を希望する!!! 異論は一切認めない、構わないだろうリイン! 君は夏に散々二人つきりで帝都でデートしたんだ! 今回は私に譲ってもらおう!!!」

ロイドが言い終わる前に、鼻息荒く四大名門ログナー侯爵家の一人娘、貴族の中の貴族、令嬢の中の令嬢、そんな立場のアンゼリカ・ログナーが主張する。その様はどう見ても貞淑さとは真逆である。アンゼリカが女性だったから良かったが、仮に男だった場合にはそれこそどう考えても変質者のそれなので、ロイド達は真面目に捕まえることを視野に入れねばならなかっただろう。天の女神はこの女性の生まれてくる性別を間違えたようできて、その実深い考えの下波風が立たぬように女としての生を与えたらしい。

「ヒュー、なんだなんだ真面目な堅物だと思っていたがそういう仲だったのかよ、お前さんも案外やるじゃないか」

「いえ、今回の留学の時のように臨時で帝都で働いていただけですよ、ある種の特別課外活動みたいなものです。それは単にコイツらがデートだ何だと言っているだけです」

そんな風に二人つきりでデートしたという言葉に反応して口笛を吹きながら囃し立てるランデイにリインは苦笑しながら応じる。実際には、リーグニッツ知事から休みを与えられて二人つきりで夏至祭を見たりしたという列記としたデートも行なっているのだが、リインとトワの中ではデートに含まれて居ないためノーカウントである。

「なんだつまんねえな、お前さんもせっかくの学生時代なんだからもっとこう学生のうちにしか出来ない事をだな……」

「やっていますよ、帝国でも最高峰の教官達から指導を受けながら、整えられた文献を思う存分に読み漁ることが出来て、と全力で自己の研鑽へと時間を当てられるなんて学生のうちだけですから。学べるという幸福を常に噛み締めて、日々精進しています」

もっと青春しようぜとでも言いた気なランデイの言葉にリインはどこまでも糞真面目に答える。言っている事はまさしく学生の模範

とでも言うべき内容なのだが、あまりに模範的過ぎてなんといいか聞いている方としては引くような内容である。案の定ランディは引きつりながら「あ、そうですか。それは良かったです」等と答えている。「うーん、そういう事なら僕もテイオちゃんと同じ班でも良いかな?」アンゼリカの熱烈な要望によってアンゼリカとテイオ、そしてトワの三人が同じ班となる事は決まったわけだが残りをどうするかと言ったところでジョルジュ・ノームがそう口を開く。

「ジョルジュ……お前まさか……」

そういう趣味だったのかと友人を見る目から変態を見る若干引いた様子に変わってクロウは己が友人を見つめる。

「いや、違うからね。単に導力ネットワークの話とかそういうのを色々聞きたいなと思っただけでそういうんじゃないからね?」

「そういう事なら俺はテイオすけの方に行くとするからね、その面子だと妙な奴らに絡まれんとも限らん」

テイオにトワは言うまでもないがジョルジュにしてもアンゼリカにしてもパツと見あまり荒事に長けているようには見えないタイプである、実態はきちんと訓練を受けて最新式の戦術オーブメントを装備しているこの面々にそこらのチンピラ如きが相手にもなるわけではないのだが、そういったものがわからず外見で強さを推し測るものが大多数なのがその手の手合いだろう。それ故、支援課内で一番ガタイが良くて、その手の抑止力になる自分がいくべきだろうとランディは買って出る。

「ふ、私のトワとテイオ君に手を出すような不屈き者がいたらその時は私がこの鍛え上げた拳で地獄に送ってやるさ」

「アン、トワはともかくテイオちゃんは君のものでもなんでもないからね?」

「私だつてアンちゃんは大事な友達だけどアンちゃんのものじゃないよ!」

ジョルジュのツツコミなのかボケなのか判断に困る発言を聞いてトワは憤慨したように声を挙げる。

「あの、なんだか私の意志を無視して勝手に決められている気がする

のですが私に拒否権は……」

昨日終始ベタベタと引つ付かれたことを思い出しながらテイオが辟易とした様子で告げるとアンゼリカはこの世の終りのような顔を浮かべて

「そ、そんな……テイオ君は私と一緒にでは嫌だと言うのかい!？」

「正直に言いますと、はい、その通りです。正直うっとおしいです」

バツサリと切り捨てるその言葉にガーンなどと言いながらアンゼリカはその場に突っ伏す。

「た、頼むテイオ君！私に駄目なことがあるなら改めようじゃないか！だから私を捨てないでくれ!!!」

「いや、捨てるも何も私とアンゼリカさんはそもそも昨日出会ったばかりなのですが……わかった、わかりましたよ」

必死に縋りつきながらまるで恋人に捨てられるような様子で懇願してくるアンゼリカ相手にテイオはそれはもう大きなため息を深々とついで

「あまり過度なスキンシップはしないでください、そうすれば同行することも吝かではないです」

「ああ、承知したよ。昨日は予期していなかった喜びに聊か舞い上がりすぎた、猛省するでしょう」

そうして丸く収まった二人の様子を見てランディは

「なんというか、ずいぶんと個性的な子だよなあ」

大貴族の令嬢という事で抱いていた貞淑な女性像昨日散々に打ち碎かれながらも未だ未練がましく抱いていたそれを今度こそ捨て去る。

「あ、あははは、でもとっても良い子なんですよ」

「ふだんはああしてふざけていますけど、アレで良い意味での貴族の誇りというか気高さみたいなものも持っているんですよアンは」

そんなランディに対してトワとジョルジュはそつと苦笑しながら友人へのフォローを入れるのであった。

「えっと、それじゃあこっちは残った四人という事になるのかな」

和やかな雰囲気です話し出した5人を苦笑しながら窺いつつロイドは改めて共に行動する事となる相手に確認を取る

「そうなりますね、よろしくお願ひしますバニングス捜査官」

「えっと、良ければ名前で呼び合わせてもらっても構わないかな。君の苗字は流石にちよつと有名すぎるし、それ抜きにしてもこれからしばらく一緒に行動する事になるんだ、だったらあまり堅くなりすぎずに仲良くなれたらと思うんだけど」

「……わかりました、それでは改めてよろしくお願ひしますロイドさん」

「ああ、こちらこそよろしくリイン君」

そういつてリインとロイドは互いに笑顔で握手を交わす、片やエレボニアにて軍人を目指す少年、かたやクロスベルで警官を務める青年、立場こそ違うがどちらも正義感が強く真面目で遵法意識の高いこの二人の相性は基本的には良かった。

「ふふふ、もちろん私もエリイで構わないからよろしくね」

「俺もアームブラストなんて長つたららしい苗字で呼ばれるとむず痒くなるんでクロウで構わないぜ」

かくして特務支援課とツールズ士官学院の面々は集合時刻と場所だけ決めて、二手に別れて動き出すのであった……

「ああ、ケン、ナナ……良かったよお……もう危ないから飛び出したりしたら駄目って言ったでしょ」

そういつて桃色の髪の少女は、わんわんと泣いている大切な弟と妹を強く抱きしめる。

「リイン君、怪我はなかったかな？」

「ええ、ロイドさんの方こそ大丈夫でしたか？」

そういつてロイドとリインの二人は軽く衣服についた砂を払いながら起き上がって声を掛け合う。

「しかし、勿論飛び出してしまった子ども達が悪かったんですがそれにしても今の車両は市内だというのにスピードを出しすぎでしたね。番号は覚えていますし、追跡調査して然るべき処罰を下すべきでは

？」

先ほどの市内だというのに街道か何かだと勘違いしているかのよう
に猛スピードを出して、あわや今泣きじゃくっている子ども達を轢
きかけるところだった導力車を思い浮かべながらリインはそう言う。
察知したリインとロイドがとっさに子ども達を庇っていなければ危
うく大惨事となるところだっただろう。

「……そうしたいのは山々なんだけどな」

故にこそその悪質な運転手に対する取締りと然るべき罰を与えるべ
きだというリインの至極真つ当な意見。しかし、それに対するロイド
の反応はなぜか鈍い。悔しそうな様子を滲ませながらため息をつく
その姿にリインがいぶかしんでいると……

「残念ながらあの人を捕まえたり処罰を与えたりすることは出来ない
の、あの人は帝国人だから」

同じく悔しさと同時に目の前の相手に告げていいものかとどこか
悩むような様子を見せつつエリイがロイドに代わってそうリインへ
と伝える。

「前から問題になっていて警告と注意が行っているんだけどね、それ
でも導力車の市内での運転についてはまだ法律が整備されていない
のも合間ってそこが限度なんだ。拘留することは勿論、罰金刑にする
事さえ出来ない」

クロスベル自治州がこれだけ発達して導力車も多く普及しながら
も何故未だ法律の整備が追いついていないのか、それにはまたしても
クロスベルの政治上の問題が関係している。クロスベルは帝国と共
和国の狭間に位置して、それを象徴するかのように議会もその2派に
別れていることは周知の通りだが、此処でもその問題が噴出して
いる。

というのも何故かと言えば帝国では車両は左側通行となつて
いるが、共和国では右側通行と定められているためだ。もしも両国のル
ールが同じであれば問題はなかった、右側通行であろうと左側通行であ
ろうとそちらにあわせてルールの整備をすれば良かった。しかし、此
処で別れていたことが災いする。帝国派の議員は当然ながら帝国へ

とあわせる事を主張するし、共和国派は共和国派で共和国へと合わせ
ることを主張する。

たかが車両のルールされど車両のルール、かくして議会は最初に決
めるべき右側通行にすべきか左側通行にすべきかという点で真つ二
つに割れ、法律の整備が全く進んでいないというのが実情であった。
「……………」

そうして告げられた事情を前にリインは押し黙る。祖国の圧力に
よって不平等と理不尽を強いられている罪無き人々、そしてそんな祖
国の威光を笠に来て居丈高に振舞う同国人、それを目の当たりにして
一体何を言えば良いというのか。

自分にとつてもそんな祖国の在り方は不本意だ等という事は出来
ない。何故ならばクロスベルに来る前に宗主国の人間として自治州
へと赴くつもりでクロスベルに行くと言ったのは他ならぬ自分自身
なのだ。士官候補生として軍人を志すものとしてこの件について己
が祖国を非難するような真似は彼には出来ない。かといって
自分は帝国人だからという理由で横柄に振舞う存在など、それこそ
貴族だからという理由で横柄に振舞う彼が最も唾棄して止まないタ
イプと大差はなく、クロスベル自治州に対する己が愛する祖国の圧力
がそんな人間を生み出してしまっていることは確かな事実で。故に
彼は何も言えず押し黙って、ただやり場の無い憤りを抱えながら強く
己が掌を握り締めるしかないのであった……

そうしてどこか重苦しい雰囲気がある場を包み込んでいると

「あの、弟と妹を助けてくれてありがとうございます！私はユウナ・
クロフォードって言います。先ほど助けて頂いたケンとナナのお姉
ちゃんです」

二人の幼子を連れて桃色の髪の少女がそうロイドとリインへと輝
く笑顔を向け、そう挨拶していた。

「ほら、ケンにナナもお兄ちゃん達にきちんとお礼を言いなさい、お兄
ちゃん達が助けてくれなかったら本当に危なかったんだからね」

「お兄ちゃん、助けてくれてありがとう！」

ぺこりと頭を下げてそう挨拶してくる子ども達相手にリインはど

こか救われた思いを抱いて

「どういたしまして、今後はもうあんな風に道路に飛び出したりしちゃいけないぞ。お姉ちゃんに心配かけないようにしないとな」

そうしてリインは優しくケンという少年の頭を撫でてやる。

「あの、よろしければお名前を窺ってもいいですか？特務支援課の方、ではないですよ？」

「ああ、エレボニア帝国ツールズ士官学院所属リイン・オズボーンだ。クロスベルには親善の意味を込めた留学で来ている。……どうやら随分と迷惑をかけている同国人がいるようだね、同じ帝国人として謝罪させてもらうよ」

気が付けばリインは自嘲の笑みを浮かべながらそう告げていた。言ったところでどうこうなるわけでもないし、恩人に当るリインにそんな事を言われてもユウナも困惑するだけだというのに、言わずには居られなかったのだろう

「あ、いえいえ。そんな！リインさんが別に悪いわけじゃないですし！」

案の定と言うべきかユウナは慌てた様子でそう告げる。そうしてロイドの方にも視線を向けて

「ロイドさんもありがとうございました！あのよろしければ四人ともうちに寄っていてくれませんか？ケンとナナを助けてくれたお礼がちゃんとしたいですし」

そう告げてくるユウナの言葉に甘えてリイン達はクロフォードの家にてささやかな休息を取った後、活動を再開するのであった。

鉄血の子と魔都⑤

「……………」

5日目、ベルガード門での警備隊との合同の演習を終えた一同はクロスベルへの帰還の途についていた。しかし、その足取りは一樣に重い、演習での肉体的な疲労というのも少なからずあるのだろうが、それでも既に一年近く士官学院での生活を送っていた5人が根をあげる程のものではない。故にどちらかと言えばそれは、肉体的なものによるものではなく精神的なものによるものであった。何故ここまで重い空気が漂っているのか、それはクロスベル警備隊との模擬戦にリイン達が負けたから、ではない。模擬戦自体はリイン達の勝利で終わった。

そうして、警備隊の司令を務めるジョン・マツケイン准将はリイン達をそれはもうあからさまに媚びるような様子で褒め称え出した。そこまではまあ悪い事ではないだろう、実際に未だ学生の身でありながら、錬度で言えば帝国と共和国の正規軍と比べても遜色ないと言われる警備隊を破ったリイン達の力量は、ARCSの戦術リンクシステムによる恩恵があるとはいえ、賞賛されて然るべきものであった。そう、故にそこまでは問題はなかった。

問題はその後であった。マツケイン准将は、リイン達に負けたミレイユ准尉率いるベルガードの面々を手酷く罵り出したのだ。戒めの意味を込めた叱責というレベルではない、それはあからさまな私怨の籠った罵倒であった。

ジョン・マツケイン准将の部下である警備隊の面々からの評判は最悪と言って良いものである。ハルトマン議長へと媚を売ることでの地位を手に入れた男、本来であれば副司令を務めるソーニヤ中佐の方が相応しい、警備隊に入隊することとなる新人達は己が配属先を発表された際タングラム門に決まったものは、ベルガード門に決まった者に飯を奢ることが慣わしとなっていて、等とソーニヤ副司令が賞賛される一方で彼を馬鹿にするネタは尽きない。

そしてそんなマツケイン准将の腰巾着たちが牛耳るベルガード門

において多くの兵士の人望を集めている良心ともいえる存在がミレイユ准尉であった。自分達こそがクロスベルを護る誇りある警備隊員なのだと呼びかけ、隊員たちの士気と練度を保ち、腐敗した司令たちにも臆する事無く苦言を呈する。そして、そんなミレイユ准尉の事を司令たちはは当然ながら煙たく思っていた。

ジョン・マツケイン准将とて決して最初からそのような腐敗したただの無能ではなかった。若い頃の彼はそれこそ今のミレイユ准尉のようにクロスベルを護るのだという志に燃えていた。だが、無情な現実の前に彼の心はへし折れた。ベルガード門付近で行なわれる、帝国の誇る機甲師団、その中でも特に精鋭でもって知られる第四機甲師団、その演習を間近で見せられることによってエレボニア帝国という大国の前にはクロスベル警備隊など所詮張子の虎、いいや猫にすぎないのだと痛感される。そして苦勞して密輸の犯人などを捕らえたとしても列強からの圧力によって解放される。帝国と共和国の暗闘によって同僚や部下が犠牲になったとしても何も出来ない。そんな現実を前に心は磨り減っていき、手段であったはずの警備隊の司令という地位と権力の獲得それ自体が目的となっていく。どうせ自分一人が足掻いたところで、クロスベルを取り巻く現実は変わらないのだ、ならば抗うだけ馬鹿を見る。それならばいつそ自分も甘い蜜を啜る側になってしまえば良い、と。

かくして清廉なクロスベルのためにその身命を捧げることが誓った警備隊員ジョン・マツケインは死に、今残っているのはその残滓、腐敗し己が権力の維持に固執する無能なる司令官ジョン・マツケイン准将であった。

そしてだからこそだろうかジョン・マツケイン准将は特にミレイユ准尉を快く思っ居なかった。あるいは彼女の理想に燃えるその姿に昔の自分を思い出しているのかもしれない、ロマンチストを憎悪するのは得てして生来のリアリストよりもかつて同じ夢を見て、そして挫折した者である。そんな煙たく青臭い小娘のさらした無様を前に彼は自分の部下を嘲笑し、罵倒した。その罵倒は思わず止めに入ったランディ、そして特務支援課にも及び出す。

そんな様を見せられて愉快になるようなひねくれた精神の持ち主はリン達の中にはおらず、当然ながら警備隊の面々へのフォローへと入る。「結果だけ見れば自分達の勝利だったが、ミレイユ准尉たちの力量は卓越したものだ。どちらに勝利の天秤が傾いてもおかしくはなかった」と。ハルトマンと対峙していた時以上のこみ上げる嫌悪感と不快感、それらを必死に堪えながら。こんな相手でも腐つても鯛、准将という地位にある紛れも無い雲の上の存在なのだ、そう心に言い聞かせながら。

そうして矛を収めて部下に対する態度とは打って変つたにこやかな様子の警備隊司令に見送られながらリン達はベルガード門を跡にしたのであった……

「酷い司令官も居たものだ、あんな上官を持ってミレイユ准尉も可哀想に」

クロスベルへの帰路で、そう吐き捨てるかのようにリンは口にする。彼が幼少期から出会ってきた軍人は皆尊敬に値する立派な人物ばかりであった。「上官は部下をわが子のように慈しみ、我が身を持って規範を示すべし。それでこそ部下はそんな上官を護るために命を賭けていざという時に戦うのだ」と。そう彼は養父オーラフやナイトハルトと言った者達に教わってきた。だからこそ、己の地位にか興味がなく、部下を慈しむどころか理不尽に罵倒する一方で、鉄血宰相の息子だから等と言う理由であからさまに自分に媚を売ってくるマツケインなど彼にとっては侮蔑の対象でしかなかった。ハルトマンと会った時よりもはるかに、今の彼は機嫌が悪かった。

「ふう、流石にあんなものを見せられては憂い顔のミレイユ准尉も中々乙なものなどと言えたものではないね」

「ミレイユ准尉達も頑張っているんだからあそこまで言わなくても良いのに……」

「なあ、ランデイが警備隊を辞めたのってひよつとして……」

「ま、お察しの通りあのマツケイン司令と色々あってな。あの野郎の下で働くのがほとほと嫌気が差しちまったんだ」

「……うちの課長って案外良い上司なのかもしれませんね、少なくともあの人を見た後で文句を言ったら罰が当りそうです」

一行はそう口々に感想を述べていく。共通しているのは腐敗した上官を持つミレイユ准尉に対する同情の念であろう。その場に置いて少なくともマツケイン司令の肩を持つ者は居なかった。トワでさえも顔を顰めながら批判をしているのだから、その嫌われぶりは初日に会ったハルトマンを上回るものであったであろう。そうして特務支援課一同とトールズ士官学院生による垣根を越えたクロスベル警備隊司令に対する悪口大会というある意味不毛な交流会が開かれそうになったところで……

「あの司令が部下を罵倒したっていうのはそこまで責められる事かね」

常ならぬ真面目な様子でクロウ・アームブラストがそう呟いていた。思いもよらない言葉に目を丸くする一行を他所にクロウは続けていく

「あんな上司を持ちたくないってのはまあその通りだと思うけどよ、おれら学生に負けたことを非難されるってのはある種当然じゃねえか。コレはクロスベルの面子がかかった問題だったんだからよ」

どこか普段とは違う、冷めた様子で何かを思い出しているかのよう
に不機嫌な様子でクロウはそう告げる。クロスベル警備隊にとつて
みれば自分達との模擬戦は負けてはいけない戦いだっただのと。

「それは……」

クロスベル警備隊がエレボニア帝国の士官学院生と模擬戦を行い
負けた。その持つ政治的な意味合いを理解してエリイは押し黙る。
元来帝国にしても共和国にしてもクロスベル警備隊の存在は常々不
要だと主張していた。所詮は戦車も空挺部隊すらも所有していない
治安組織、有事の際には役に立たない、張子の虎だと。他ならぬ自分
達がクロスベルが軍備を整えられぬように法律で制限させておきな
がら。

だからこそ今回の齎した模擬戦闘の結果を受けて帝国政府は主張
するだろう、「クロスベル警備隊など我が国の未だ正規の軍人ですら

ない、士官学院生にさえ劣る程度のもの。故に、そのような税金泥棒たちにわざわざ金を注ぐ価値などなし。その分の金を帝国の誇る正規軍の駐屯費に回したほうがよほど有意義だろう」等と。帝国の正規軍の中でも戦術リンクシステムの恩恵を受けたリイン達に勝る部隊はそう多くは無い、この5人のチームは既に正規軍の最精鋭部隊である鉄道憲兵隊と比較しても遜色ないという事実に触れる事無く、あくまで士官学院生に過ぎないという事実を前面に押し出しながら。

だからこそミレイユらが自分達に負けたことでクロスベルが不利益を被る事となつたという事は事実なのだから、その件についてミレイユ達が叱責されるのはある種当然の事なのだとクロウは冷めた様子で主張しているのだ。

「で、でもミレイユさん達だつて頑張つて！」

「頑張つたけど負けてしまいました。許してください。そんなものが通用するのはスポーツの試合位だろ。この世にはそういう言い訳が許されない仕事や戦いつてもんが存在する。そして治安維持組織だとか軍隊なんてのはその最たるもんだろ。違うか、リイン」

そうミレイユらを庇おうとするトワの言葉をクロウはどこまでも冷たく切り捨てるかのように言い放ち、この場において日頃から軍人になるのだと公言している男へと問いかける

「…………いや、お前の言うとおりだろうな、クロウ。確かに彼女達は俺たちに負けて良い立場ではなかった。結果だけ見ればマツケイン司令が激昂して叱責するのはある意味では順当と言えるだろう」

戦いを生業にするものにとっては、祖国の命運や誇りを背負う人間には敗北は許されない、弱いという事それ自体が罪になり得るのだというある意味では無慈悲極まりないクロウの言葉にリインもまた頷く。そうして一行の間にはどこか気まずい沈黙が下りる。

この5日間、行動を共にした。人間的に好感を抱ける相手だと互いにそう思った、幾つもの言葉を重ねた。されど、それでも一行の間には越えられない壁が存在する。片や宗主国たるエレボニア帝国の士官学院生、片や二大国の狭間によって翻弄され続けるクロスベル自治州の警察の人間。

どれほど互いに私人としての好感や好意を抱いたとしても、自分達の間には立場の違いという明確な断絶がある事を互いに実感して
.....

(くそ、なんであんなこと言っちゃったんだ俺は)

和やかだった空気が消えて、重苦しい雰囲気包む一行の中でクロウ・アームブラストは自らの発言を後悔していた。普段の自分のキャラであれば、わざわざあんな事を言う必要はなかったのだ。それこそ他の面々と一緒に冗談めかしながら司令をひとしきり罵倒して、ミレイユ准尉らに対して同情的な様子を見せる、それで八方丸く収まっていたのだ。なのにどうして自分はわざわざクロスベルと帝国、その立場の違いから来る断絶を友人達に突きつけるような真似をしてしまったのかと、クロウは己が言動を後悔する。

まるで自分自身にそうして目の前の友人達と自分の立場の違いを言い聞かせているかのように、そうしなければもう<<<C>>>という仮面を被れなくなってしまうのだと無意識のうちに感じていたかのように

(深く、関りすぎちゃったのかも知れねえな)

この一年間、クロウは本当に楽しかった。いつの間にか利用してやろう、2年にも満たない短く浅い、卒業すれば自然と縁の切れる程度の関係等という当初の目論見は何時しか消え去って、4人の事を心の底から大切な仲間だと友人だと思ふようになっていた。

だからこそクロウは言わずにはいられなかったのだ、どれほど好意を抱こうと友情が芽生えようと、立場が違えばそれぞれ目指す場所が異なるのだという事を。どれだけ好感を抱こうと、それでも敵同士となる事があるのだという事を。

リイン・オズボーンが自らの抱く正義感と祖国の国益という狭間で葛藤している頃、帝国解放戦線のリーダー<<<C>>>、否、旧ジュライ市国最後の市長の孫であるクロウ・アームブラストもまた、ツールズで出来た絆と自らの抱いた復讐の炎で揺れていた.....

鉄血の子と魔都⑥

クロスベル市に帰還して程なく東通りの飲食店前にて不良たちが喧嘩しているとの住民からの報告があったので仲裁に向かえとの連絡がロイド達の下へと入った。ライン達一同もこれを了承して一行はすぐさま東通りへと向かうのであった。

「あれは……ヨシユアとエステル」

「どうやら、俺たちが来る必要はなかったみたいですね」

旧市街へとたどり着くとそこでは既に支える籠手の紋章を身につけた遊撃士の青年と女性が不良グループへの仲裁に入っていた。

遊撃士、それは民間人保護を第一の理念とした存在でそのあり方からゼムリア大陸において絶大な支持を誇る。その仕事は多岐に渡り、護衛や魔獣退治といった荒事から迷子やペット探しといった雑事までにも及ぶ。一般市民にとっては高圧的なところのある軍などに比べると、住民生活にそった身近な頼れる存在であり、その事から軍人を嫌う市民はいても、遊撃士を嫌う人間と言うのはほとんどいない、そんなところが軍人や警察と言った組織の人間からすると面白い部分ではあるのだが、とにもかくにも遊撃士の市民人気は高く、特にこのクロスベルにおいては実力者多く、警察や警備隊と言った治安維持組織が諸般の理由により自由に動けない事も合間って、クロスベル市民では何かあった時は警察ではなく遊撃士を頼れと言われるほどである。

おそらくは今回もその辺の事情から頼りにならない警察ではなく遊撃士協会に連絡した住民がいたのか、あるいは察知した二人の遊撃士が自発的に駆けつけたのかそのどちらかであろう。二人のグループの間で仲裁をしている二人の遊撃士が居た。

「だ・か・ら、ここで喧嘩したら他の人の迷惑になるでしょう。実際そういう苦情が来ているんだから、控えなさいって言ってるの」

「ああん、なんでそんな指図を俺が受けなきゃいけないんだ。てめえ調子に乗ってんじやねえか」

見たところギャーギャーとそんな擬音語が聞こえてくるかのよう

な様子で遊撃士の女性エステル・ブライトと不良グループの片方サーベルバイパーのリーダーを務める鶏のトサカのような特徴的な髪型をした男ヴァルド・ヴァレスが言い争っている。エステルは相方を務める黒髪の青年を務めるヨシユア・ブライトはため息をつきながらそんな相方を宥め、もう片方の不良グループのリーダー、ワジ・ヘミスフィアは面白がりながらもその光景を眺めて居るようだ。

(調子に乗っているのはどっちなのやら……)

ヴァルドの発言を聞き、リインは思わず失笑を漏らしてしまう。元々リインは不良と呼ばれる人種が嫌いであつた。腕試しをしたいのならそれこそ然るべきところに行けばいい、世の中にはそれこそ無数の強者がひしめいているのだから、なのにそうする事無く狭い世界で戦う力のない一般市民を悪戯に威圧するようならつまらない連中。社会に貢献しようとする事もなく駄々を捏ねている餓鬼なのだ、そう侮蔑さえしていた。——彼が真の大人ならば、例えば彼の尊敬する養父オーラフなどであれば、そういった手合いも好感を抱かないまでも、ある程度温かい目線で見守れるものなのでそうしてどこかむきになって反発している事こそ、彼自身未だ未熟な子どもである事の証左ではあるのだが。

そしてヴァルドが今まさに威圧している遊撃士の女性がかなりの、ヴァルドを数段上回る、実力者である事も武の道に身を置き、自身もまたそれなりの実力者であるリインにはわかつた。だからこそリインは思わず笑ってしまう、自分と相手の力量差もわからずに威圧している、まさに井の中の蛙とも言うべき光景に。

そしてその手の自分を馬鹿にするような態度に何よりも敏感なのが不良と呼ばれる人種である。その場に現れた如何にもといった感じのエリートのお坊ちゃん、そんな相手が自分を小ばかにしたように失笑した様子をヴァルド・ヴァレスは見逃さなかつた。

「そこのでめえ……一体何がおかしいんだ」

「いや、自分の力量も弁えずに格上の相手に居丈高に振舞う存在というのはいくらも滑稽なものなかなと思つてね。ああ、井の中の蛙というのはこういう事を言うのかと、そう思っただけさ」

「リ、リイン君……………」

睨みつけながら威圧してくるヴァルド、ここで一般人で言えば慌てて謝罪したりしてヴァルドも溜飲を下げて矛を納めたのだろうか、あいにくリインはこの手の人種など怖くもなんともなかった。それでも常の彼ならばトワの心配するような諫める声で冷静さを取り戻しただろうが、今の彼は酷く機嫌が悪かった。八つ当たり気味に殊更ヴァルドを挑発するかのように、彼を嘲笑する。

「てめえ……………」

「(こらこらこら、言ってる傍から一般人に手を出そうとしないの)」

当然温厚という言葉とは対極に位置するヴァルドは今にもリインに殴りかからん勢いとなるが、エステル・ブライトがそれを黙ってみているはずもなし。すかさずヴァルドを静止にかかる。そうしてエステルに邪魔をされたヴァルドはリインを小ばかにするような笑みを向けて

「ハッ、どこのお坊ちゃんか知らんが結局は腰抜けか。遊撃士に護られて背中から遠吠え吐くなんざ、みつともねえつたらありやしねえ」

面と向かって自分に言うような度胸はなく、この場に遊撃士が居るからこそその強気な発言なのだ。ヴァルドは思い打って変ってリインを嘲笑する。タイムンで喧嘩を売る度胸もなく、護ってくれる誰かが居るからこそ安全圏から偉そうな言葉を吐く人間など彼にとつては心底見下げ果てた相手だからだ。そしてそんなヴァルドの言葉に

「なるほど、俺が遊撃士や特務支援課の方々に護られているからこそさっきのような強気な意見を言えたのだと、そう君は主張するのかな」

「は、違うのかよ。どこのお坊ちゃんか知らないが皆が皆、てめえの親の威光に恐れ入ると思つたら大間違いだぜ。このヴァルド・ヴァレス様は逃げも隠れもしねえ！何時でもかかって来やがれ!!!」

「良いだろう、その勘違いは俺にとっては甚だ不本意だ。ヴァルドと言つたな、お前の望みどおり俺自身の手で正面から叩き潰してやる。俺が勝つたら手下共を引き連れてとつとこの場から消えるんだな」
「ほう、ちつとは度胸あるみたいじゃねえか。良いぜお坊ちゃん、その

威勢に免じて半殺しで済ませてやる」

売り言葉に買い言葉と言うべきだろうか、気が付けば、何時になく喧嘩腰な様子でリインはヴァルドの挑発へと乗り自らもまた挑発を叩き返していた。父親の威光を傘に来て調子に乗っているボンボンと、目の前の不良如きに思われることが我慢ならないとでも言うように。

平時の彼であればもう少し波風が立たないように収めたか、そのまま遊撃士たちへとその対処を任せていただろうに喧嘩を積極的に買う何時になく好戦的な様子。鉄血宰相の息子だからという理由で頼んでも居ないのに、勝手に媚び諂ってくる人間をこの数日で相手にしていた事によって、今の彼は明らかに平時に比べて気が立っていた。

「いやいやいや、ちよつと待ってくれリイン君!!」

そんなリインの様子に慌てた様子を見せるのは特務支援課の面々である。当然である、何かあったら国際問題になりかねないと言い含められているのだ、訓練中に多少の怪我を負うといった程度ならばともかく、不良との喧嘩で怪我でもしたともなれば、それはもう各方面から非難轟々であろう。そういった事情を抜きにしても、目の前で行なわれる喧嘩を見過ごすわけにはいかないとロイドは制止しようとするが……

「心配なく、この程度の相手にやられるほど柔じゃありませんし、万が一怪我を負ったとしてもロイドさん達のせいにするような真似は一切する気はありません」

「い、いや……そういう問題じゃなくて……」

「り、リイン君、喧嘩は駄目だよ……」

聞く耳持たずといった様子のリインにロイドはどうしたものかと困り顔を浮かべると、トワ・ハーシエルが何時になく熱くなってしまう様子の友人を止めようとする。しかし、常であればそれで冷静さを取り戻すリインが、何時になく熱くなったまま聞く耳を持たない。助けを求めるようにアンゼリカやジョルジュらの方にも目線を向けるが、二人も肩を竦めて黙って首を振るのみ。

不良同士の喧嘩を止めに来たはずがなぜか後から到着した少年と

不良の方がむしろ一触即発と言った状態になっている事にエステルとヨシユアも困惑した様子を見せながらも止めに入ろうとすると……

「騒がしいな、一体どうした」

武の世界に身を置く者ならばわかる圧倒的強者の風格、その気配を感じ取りリインは弾かれたようにそちらの方を向く。クロスベルの守護神、風の剣聖、多くの異名を持ちクロスベル市民から絶大なる支持を誇る理に至りし者、八葉一刀流皆伝、ゼムリア大陸においても有数の実力者アリオス・マクレインがそこに立っていた。

「なるほど、諸君が帝国より親善で来たという留学生か。話だけは聞いていた」

アリオスの登場によって三十六計逃げるに如かずとばかりにワジ率いるテストメンツが引いた事で、サーベルバイパーの面々も引き上げ東通りは落ち着きを取り戻していた。ヴァルドだけは最後まで不服そうにしていたが、自分からの「流石に風の剣聖を敵に回すのは不味い」という言葉を聞いて、悪態をつきながらではあったもののその場を引くのであった。井の中の蛙と言えど、流石に相手が竜ともなれば力量差も多少は理解できるのだろう。

「しかし聞くところによると随分と挑発的だったようだな。君の言動は親善のためという題目に聊か反するものだったのではないか？ どうやら腕にそれ相応の自信はあるようだが、だからと言ってそれを振り翳すような真似をしては君の剣が泣くというものだろう」

「……仰るとおりです。返す言葉もなく己の未熟さと短慮さにただただ恥じ入るばかりです」

落ち着いた様子で自分を諭すアリオスの言葉に冷静さを取り戻したりインは先ほどまでの自分の行動を深く恥じる。全くもってどうかしていた、ヴァンダールの剣は護るための剣だというのに、如何に相手が自分にとって好意を抱けない存在だったとしてもヴァルド・ヴァレスは別段討ち果たさなければいけない邪悪でも、衝突がどう足掻いても避けられないような存在だったわけではないのだ。

力を持つ者を自制をしなければならぬ、首輪につながれて居ない狂犬など人にとっては恐怖の対象でしかないのだ。軍人にしても遊撃士にしても護らなければならぬルールが存在して、それらを護るからこそ民は安心して頼ることが出来るのだ。自分が気に入らないからという理由で容易く力を奮うような存在に、力を持たない人達がどうして安心できるだろうか？いつその気に食わない対象に自分が加わるのか、それはその者の胸先三寸のみで決まってしまうというのに。そんな理由で力を奮うなど、それこそ自分が嫌っている先ほどのチンピラ共となんら変わるところがないではないか、と。

「特務支援課の皆さん、すみません。先ほどの自分はどうかしていません。自分があんな事を言い出した事でさぞご心労をおかけしたことでしよう」

自分が軍人になって護衛対象が街の不良相手に喧嘩を売るような真似をしていたらどう思うか？決まっている、頼むから落ち着いてくれ。勘弁して欲しいと思うだろう。そう思いリインは特務支援課の面々へと深く頭を下げる

「お前達もすまない、手間をかけさせたな。クロウやアンゼリカに日頃素行を注意しておきながら、いざ自分がこんな短慮な行動に出してしまう等全く以って情けない」

続けてリインは巻き込んでしまった友人達へと謝罪する。アレほど来る前に帝国人としての誇り、ツールズの生徒としての誇りを説いた自分がこの有様。全く持って笑い話にもならないと。

「エステルさんにヨシユアさんもすみませんでした、自分がしやしやり出たせいでお二人の仕事を拗らせてしまいました」

そうして最後にリインは遊撃士の二人へと謝意を告げる。結局自分のしたことといえど喧嘩の仲裁を行っていた遊撃士二人に余計な手間をかけさせただけだった。目の前の二人の実力ならば不良程度、あのワジというもう一人の青年は底知れないところがあつたが、歯牙にもかからない存在だったのだ。おそらくは適当にあしらって終わっていた事だろう。そんなリインの謝罪を受けて……

「あははは、そこまで気にしなくたって良いわよ。私だって気に入らない相手に喧嘩腰になっちゃうなんて事はたまにあるしね」

「たまに？」

「うーん、ヨシユアったら何が言いたいのかしら？こほん、とにかくリイン君だっけ、そこまで気にしなくたって良いわよ。結局誰か怪我人が出たりしたわけでもないし」

そういつてエステル・ブライトは太陽のような笑みをリインへと向ける。

「帝国からの留学生って聞いていたけど、どうやら仲良くなれているみたいだね、ロイド君」

「ああ、おかげさまでこっちも色々の良い刺激を受けさせて貰っているよ」

「いや、会う前はどんな奴らが来るかと心配になったけど案外話のわかる奴らでなあ。これでもうちよつとスタイルの良い美人が居てくれれば俺としては言う事はなかったんだが……」

「ふふふ、ご期待に添えなくて申し訳ない。最も私はテイオ君という天使に出会えた時点で文句のつけようがないよ」

リインのどこまでも糞真面目なその様子に一同は思わず噴出し、重苦しい空気はどこかへと行き再び和やかな空気が戻り出す。

「おう、猛省しろ猛省しろ！そして謝罪の証として晩飯奢れ!!!」

「クロウは調子に乗らないの、君の場合どう考えてもリインの貸しの方が超過しているでしょ」

「えへへ、いつものリイン君に戻って良かった」

そんな国の垣根を越えて和やかな様子で交流を深める若者達を見てアリオス・マクレインは穏やかな笑みを浮かべ、静かにその場を立ち去るのであった。

鉄血の子と魔都⑦

「へーじゃありイン君はミュラーさんの弟弟子なんだ」

もぐもぐとそれはもう料理人冥利に尽きる満面の笑みを浮かべながらエステル・ブライトは龍老飯店名物の龍老炒飯を平らげていく。あの後律儀なリインが詫びとして食事を奢る事を提案したが皆それは笑いながら断ったものの、一人嬉々として乗ろうとした男が居たがアンゼリカから冷静なツツコミを受けてあえなく撃沈した、せつかくの機会という事で一同は東通りでも評判の店である龍老飯店にて夕食を取っていた。

「ええ、ミュラー・ヴァンダールは自分の兄弟子です。最も軍務とさらにはオリヴァルト皇子の守護役という大任を務めておられる方だったので、そこまで頻繁に会う事は出来ずにたまたま手合わせして頂く位でしたけど」

リインもまた料理の数々に舌鼓を打ちながら、昔を懐かしみながら兄弟子たるミュラーとの思い出を語る。彼とリインが出会ったのはリインがヴァンダールの道場へと通い出した10歳の頃。既にトールズ士官学院を卒業して現役の帝国軍人であり、皇族の守護役という大任を務めるミュラー・ヴァンダールはリインにとっては身近な目標の一人であった。彼の方は彼の方でそんな弟弟子を目にかけて、時折苦笑を浮かべながら放蕩皇子等と噂される親友でもある主君の話をどこか困ったように、されど嬉しそうに話をしてくれたものであった。

「しかし、お二方がオリヴァルト皇子とクロードディア王太女に協力されてリベールの異変の解決に尽力されていたとは。それもブライトという苗字から察するに……」

リベールの異変、それはリベール王国において結社身喰らう蛇によって起こされた事件の総称である。突如ヴァリア湖畔に謎の浮遊都市が浮上すると、まるでその建造物に吸われているかのように王国において謎の導力停止減少が発生。リベールがエプスタイン博士の三高弟の一人であるラッセル博士の尽力と女王アリシアⅡ世の施

策によって導力製品が王国全土に普及していた導力先進国であったことが皮肉にも災いし、リベール王国は大混乱へと陥った。さらにはこの動揺の隙を付き、結社身喰らう蛇は王都グランセルを強襲、導力兵器が機能せず混乱していた王国軍は完全に虚を突かれ、リベールは一時王城が陥落する危機へと見舞われる。

そんな異常事態に際してエレボニア政府はいち早く隣国であり友邦たるリベール王国への支援としてゼクス中将率いる救援部隊を派遣。結果としてこの部隊そのものは事態の解決には繋がらなかったものの、この際同行していたオリヴァルト皇子及びその護衛役たるミユラー・ヴァンダール少佐がリベール王国のクローディア王太女らへと協力。結果として遊撃士の協力も得た両名の活躍もあって、謎の浮遊都市は崩壊。

百日戦役以後一応の和平こそ結ばれたものの緊張関係にあった両国であったが、このリベールの危機に際して帝国の皇子がいち早く駆けつけて協力したこの話は美談として広まっており両国の雪解けの象徴とされている。ライン自身、自分の兄弟子と兄弟子の主君たる皇子の活躍を誇らしく思っており、リベールの遊撃士が協力したという事自体は知っていたが、それが自らと然程変わらない年齢だったという事に驚く。加えて二人のブライトという苗字、リベール王国でブライトという姓を聞けば連想するのはある一人の人物で……

「察しの通り、僕らの父は剣聖カシウス・ブライトだよ。最も僕の方は養子だけだね」

「うーんリベールに居た頃からそうだったけど、父さんって偉い有名な人のね。私としては全然そういう実感ないんだけど」

予期していたかのようにヨシユアが、慣れてきたはものどどこにもいる父親という印象とやたら他人から持ち上げられる剣聖という大層な異名を持つ「英雄」とがいまいち重ならないかのような様子でエステルが答える。

「有名人も何も、カシウス・ブライト殿といえば近代戦術の転換点の一つと言える、飛行艇を初めて軍事作戦で用いた方ではないですか。どこの国でも士官となるものならば必ず学ぶ人物ですよ」

剣聖カシウス・ブライト。それはリベールの救国の英雄にしてそれまで地上で行なわれていた戦争に新たに「空」という概念を齎した男の名であった。大陸中の誰もがエレボニアの勝利でもって終わると予想していた百日戦役。しかし、それは一人の男によって覆された。世界でも初となる飛空艇の軍事投入。これにより、王国へと侵攻した帝国の誇る機甲師団は完全に分断され、王国各地で各個撃破されていく。エレボニアの誇る大陸最高峰の機甲師団が各地で敗退していくその様は人々に新しい時代の到来を予感させた。

そしてそんな大陸の軍事史を塗り替えた男こそがリベールの英雄カシウス・ブライトであった。その統率力と智謀は勿論の事、単騎戦力としても八葉一刀流皆伝という大陸最高峰の実力者で、帝国の情報局においては「その脅威、機甲部隊一個師団にすら匹敵する」とまで謳われている人物である。

中には家族や友人の仇として憎んでいる者も帝国には少なからず居るが（百日戦役の原因は不幸な行き違いにより帝国が侵攻したことが原因のため、非は帝国にあるのだが、そういった理屈で割り切れないのが人の心というものである）、リイン個人としては属する国家こそ違えど尊敬に値する名将という認識で、叶う事ならば教えさえ請いたいと思っている人物であった。

「うーん、そう言われても、私にとっては本当に不良中年っていうイメージしかないからいまいちピンと来ないというか……それはリイン君だって似たようなものじゃない?」

「え?」

「リイン君のお父さんはオズボーン宰相なんですよ?色々と凄い人みたいだけど、貴方からしてみると普通のお父さんで何で皆そこまで騒ぐんだらうーってなったりしない?」

そう屈託のない笑みを浮かべながら問いかけてくるエステル言葉にリインは言葉を失う。普通の父、そうギリアス・オズボーンは10年前までは間違いなく立派な、普通の父だった。当然尊敬していたし、憧れてもいた。だけど同時に母に怒られてしよげた様子を見せる

など、そんな普通の人間らしいところを見せていた事も覚えている。ただあの事件以降はどうだろう？自分はそんな父の人間らしいところを見ただろうか。いや、一度たりとてない。何故ならばこの11年、リインが父に会ったのは10歳の誕生日の時、一度きりなのだから……

「はは、そうですね。家事の事で母に叱られて時折しよげたりしていましたがよ、父さんとしては良かれと思ってやったつもりだったのでうも不慣れなせいで逆に母の仕事を増やしてしまったみたいで」

結局リインは昔の、記憶にある頃の父の思い出を語る事とした。まるで必死に父は変わってなどいないのだと、悪い奴^{貴族}らを倒せば昔の優しい父が帰ってくるのだと自分自身に言い聞かせるように。リインの母が11年前に死去して、以来リインがオーラフの下で暮らしていたことを知るトールズの面々はそんなリインをどこか痛まし気に見ていた。

「ふふ、やっぱりそんなものよね。私の父さんだって何か一人で何でも出来るように思われたり、言われたりすることもあるけど別にそんな事もないもの。リイン君の話していた百日戦役の時だって父さんだけじゃなくてリシャルルさんにシードさん、それにモルガンのおじいさん、その他多くの人達が協力してくれたからこそって何よ、ヨシユア」

良い所だったのにとそこでエステルは静止するように促していた相方に気づいてしかめっ面を浮かべるが、そこでヨシユアはちらりと気遣うようにリインを初めとするトールズの面々を見て

「エステル、あまり帝国の人達の前で百日戦役の話題をするのは、その……」

「あ……」

リベール王国にとってはカシウス・ブライトは救国の英雄だがエレボニア帝国にとっては忌むべき敵。カシウス・ブライトとその仲間達の活躍はリベールにとっては誇るべき英雄譚だが、エレボニアにとっては屈辱の敗戦の記憶である。幾らリインの側からしてきた話題とはいえ、リベールの人間である自分達はその話をするのはリイン達に

とっては余り気分の良いものではないのかもしれないという事に気づいてエステルは押し黙る。

しかし、そんな気遣いにリインは苦笑して

「元々自分の方が言い出した話題ですし、どうかそこまでお気になさらないで下さい。それに過去に悲劇はあったものの、今では我が国とリベールは紛れもない友邦です。お二人が活躍したりベールの異変の時にオリヴァルト皇子が救援に駆けつけた事こそがその象徴です」
「うん、そうよね……過去は過去。忘れちゃいけないけど、それに囚われてちゃ前に進めないもの」

何かを噛み締めるかのようにそうエステルは呟いた後に

「ま、とにかく私が言いたいことは「英雄」だとか何だとか呼ばれたって人間一人で出来る事なんて限られているって事よ。リベールの異変の時だつてたくさんの人達が協力してくれたからこそ解決できた。だから、リイン君もロイド君も何か困ったことがあったら何時でも相談してね。遊撃士として、何よりも私個人として幾らでも力になるから！」

そう、太陽のような笑顔を浮かべながら告げるエステルの姿をリインはどこか眩しそうに見つめるのだった……

鉄血の子と魔都⑧

「そこまで！勝負あり……ね」
「く……」

ソーニヤ副司令のその号令にノエル・シーカー曹長ら警備隊の面々は悔しげに顔を歪める。クロスベルに滞在しての6日目リイン達は昨日のベルガード門での演習に引き続き、タングラム門での演習へと参加していた。そうして演習の締めくくりにタングラム門の警備隊の精鋭との模擬戦をリイン達は行なった。戦い自体はほぼ五分に推移、勝利の天秤はどちらに転んでもおかしくはなかったが結果は引き続きトールズ士官学院の勝利で終わった。

自分達が帝国の士官学院生に敗北すること、その意味が良くわかって居るのだろう、警備隊の面々は悔しそうに顔を歪める。

「見事ね……流石はオズボーン宰相閣下の……いえ、この言い方は貴方達に失礼ね。流石は帝国屈指の名門士官学院トールズの生徒達と言うべきかしら。未だ学生の身でありながらこれほどの技量と連携を見せてもらえるだなんて、ふふふ帝国の未来は安泰と言うべきかしら？」

「恐縮です」

ソーニヤからの賛辞を受けながらリインは若干後ろめたい思いを感じる。現状の自分達の連携は戦術リンクシステムの恩恵に依る部分が大きいからだ。一年間ともに過ごしてそれ相応の絆と連携を培ったという自負はある、されどARCCUSの恩恵なしにこれほどの連携を出来るかは怪しいだろう。ある意味ではズルをしているようなものだと言えらるが……

(いや、それを言い出したらキリがないか)

同じ条件で戦ったらどうなるかなどと言う考えほど軍事の世界において無意味なものはない。装備の質、部隊の錬度、地形の把握そういった自分達に有利な条件を整えるのが戦略と呼ばれる分野で戦略無き戦術など有り得ないからだ。第一装備の事を言い出したら、自分は双剣、アンゼリカなど徒手空拳なのに対して向こうは最新鋭の装備

に身を包んでいるのだ。ヴァンダイク元帥、アルゼイド子爵、マテウス大将と言った達人級の面々などはそれこそ剣で戦車とて粉砕することが可能な以上、一概に剣が銃に劣っているというわけではないが、それでも部隊規模での運用を考えるならば戦場の主役はやはり剣ではなく、銃、もつと言えば戦車であろう。剣の研鑽を積むことが決して無意味とも無駄とも想わないが、それでも戦場の主役が剣から銃といったものに映ったのは厳然たる事実。クロスベルの警備隊とリインの装備、どちらが時代遅れの装備かと言えばそれは間違いなくリインの方だろう。故にそういう意味で言えば装備の面ではクロスベル側が有利だったと、そう言えなくもないだろう。だからこそ装備の優劣に関する思考など無意味なものだとリインは思考を打ち切る。

帝国は自国の威信を賭けたメンバーとして自分達を選び、クロスベルは目の前の警備隊の精鋭たちを選んだ。そしてその結果自分達が勝った、それが厳然たる事実というものである。クロウが言った様に不利な条件だろうと勝利を求められるのが軍人で、クロスベルの警備隊はそれを果たせなかったとそれだけの話である。勝利かそれとも敗北か、戦いにおいては、明らかに人道に外れたりルールを無視するような外道は当然論外だが、それが総てなのである。

そうして一通りリイン達に対する賞賛を述べた後にソーニヤ副司令は謹厳な表情のまま自分の部下達へと視線を向けて

「この場においてとやかく言う気はありません。自らの不甲斐なさを一番痛感しているのは貴方達だろうから。故に私から言う事はただ一つ、これがエレボニア帝国の水準よ。今回貴方達が敗北した相手は正規軍の精鋭部隊でも皇帝陛下の直属でもない、未だ士官学院の生徒という立場の若者達。その意味を良く理解する事、いいわね」

「……イエス、マム!!」「……」

(ああ、これは器が違うな)

どこまでも謹厳な様子で告げる副司令の姿と昨日のみつともなく部下を罵倒する司令の様子を比較してリインは否応なしに実感する。

そしてこのような優秀な人物が共和国方面のタングラム門に駐屯しており、議長と蜜月関係にある無能な司令の方が帝国方面のベルガード門を担当している事と、クロスベルの議会においてハルトマン議長率いる帝国派がキャンベル議員率いる共和国派より優位にある事は決して無関係ではないだろう。リイン個人として言えば尊敬に値する有能な人物こそが、帝国にとつては不利益に働くと判断され、遠ざけられた。そして到底好感を抱けない俗物こそが帝国にとつては有益だと判断されて厚遇されているという事実、それをリインは理解する。

(軍事や政治など所詮は悪魔の領分……か)

兄貴分であるレクター・アランドールの教え、どこか皮肉気にそう呟き、軍人の名誉を穢すような事を度々言うレクターにリインは不満を抱いていたが今、それらの教えの正しさをリインは痛感する。レクターは何も自分をおちよくったり、からかったりするだけのために(そういう意図も含まれていたが)言っていたのではない。ましてや別に軍人や政治家と言った職業を貶めるつもりだったのでもない。単に自分の進む道とはそういう道なのだと言われれば彼なりに忠告と助言をしてくれていたのだ。軍人等というのは往々にして嫌悪を覚える豚と握手をして、敬意に値する人物と殺しあわなければならない仕事だという事を、正義感の強いリインのような人物こそが嫌になるような現実が待っているのだという事を。リイン・オズボーンは光と闇の混在する魔都クロスベルにて強く実感させられるのであった……

「持ち堪えるだけで良い！持ち堪えればじきに異常事態を察知した警備隊や遊撃士が駆けつけるはずだ!!」

そう檄を飛ばしながらリインは襲い掛かる武装集団を双剣にて相手取る。タングラム門での演習を終え、後はクロスベルに戻るだけとなった段階で事件は起きた。リイン達の乗る導力バスがバスジャックされたのだ。それ自体は特務支援課によってすぐさま犯人が取り押さえられて解決したのだが、問題はその後だった。

バスジャックによって本来のルートから外れ、停車したところをまるで見計らったかのように謎の武装集団が襲い掛かってきたのだ。タイヤを破裂させられバスが動けないために、即座にリイン達はバスの外に出て応戦を開始したわけだが……

(こいつら、ただの野盗の類ではない！)

目の前の集団は明らかにそこらのごろつき崩れなどではない、統制の取れた戦闘集団であった。おそらくはバスジャック犯も目の前にいる集団のメンバーの一人だったのだろう。自分達がバスの外に出た途端、他の乗客に目もくれず襲い掛かってきた以上狙いは自分達にある事は明白だが……

「自分達はクロスベル警察特務支援課の者だ！君たちの目的は何だ!!! これは明確な犯罪だぞ!!!」

そう、ロイドが呼びかけるも目の前の集団は答えない。この時点で政治的な思想を持ったテロリストという線は薄くなる。政治的な意図があるテロリストの類ならば何らかの声明を出す事が多数である。加えて目の前の人間たちの行動もどこかちぐはぐであった、リイン達の殺害を意図しているのならばそれこそ戦車砲なり爆弾なりでバス毎吹き飛ばすのが一番であった。敵はリイン達があのかのバスに乗っている事を知っていてバスジャックを行なった以上出来ない事はなかっただろう。武器とてこれほどの錬度と規模を持つような部隊が用意できないとは考え辛い、にも関わらずそれをしなかったという事は生きたままリイン達を捕らえること、すなわち誘拐が目的かと思うが、しかし目の前の敵は明らかに死んだとしても構わないという意図で攻撃を行なってきた。故にリイン達を誘拐することが目的というわけでもない。

リイン達の誘拐と殺害、そのどちらもが主目的というわけではない、その上で爆弾などで吹き飛ばしては不味い理由が存在する。これらの条件に当て嵌りそうな敵の目的と言えは……

(狙いはARCUSか！)

すなわち帝国がラインフォルト社、エプスタイン財団と協力して開発を推し進めている次世代の戦術型オーブメント、その奪取にあるの

だとリインは見抜く。実際ARCSの恩恵は絶大である、これを装備した部隊はそれだけで連携のレベルが跳ね上がる。本来なら数年単位の訓練によってようやく培われる筈のものが、数ヶ月足らずで身につくようになるのだ、戦場に齎される新たな革命となり得るだろう。さしずめ敵の正体は共和国に雇われた猟兵团と言ったところだろうか。

しかし、それがわかったところでどうにもならない。弾丸の嵐を双剣で捌き続けるが、当然捌ききれないいくつかのリインの肉体へと当る。臨戦態勢となり闘気を纏い肉体を強化した状態の今のリインにとってそれは一発やそこらで致命傷になるようなものではない、しかしこのまま攻撃を受け続けていけばいずれは限界が訪れるだろう。故に守勢に徹するのではなく、どこかで攻勢に出る必要があるのだが……

「リイン君ー」

「問題ない、この程度の攻撃、何万発喰らおうが俺の命には届かない。トワはそのまま導力魔法で援護してくれ!!!」

背後にいるトワとの存在、それがリインに攻勢に出る事を躊躇わせていた。この一年の間に実力をつけてきたとはいえ、トワは自分やアンゼリカのように闘気によって肉体を強化することを不得手としている。今、自分が守勢に徹しているからこそなんとか凌げているが、攻勢に出れば当然敵の攻撃のいくつかが向かうだろう。そして自分にとっては我慢すれば耐えられる程度の攻撃もトワにとっては致命傷へとなり得る。

こうした状況の際に普段なら突破口を切り開くのが遊撃の役割を果たしていたクロウとアンゼリカだったが、最初の奇襲で分断されてしまい二人もジョルジュの援護を受けながら目の前の相手に手が一杯で、それは特務支援課も同じだ。だからこそ、リインは攻勢に移れない。

(いや、落ち着け、時間はこちらに味方する)

バスジャックという派手な手段に出た以上程なく異常を察知した

遊撃士なり警備隊なりが救援に駆けつけるだろう。故に未だ攻撃をして居るのに目立った成果を挙げられていないというこの状況、プレッシャーを感じているのは自分よりも向こうの方なのだ。だからこそリインは耐え続ける、仮にこのまま敵が最後まで同じ戦法を取り続けようとも自分の後ろに控える何よりも大切な少女を絶対に守り抜くのだと決意して。

そうしてついに敵が痺れを切らす。こちらに被害の出ないアウトレンジからの一方的な攻撃、それでは救援が来るまでの間に目の前の敵手は仕留め切れないとそう判断する。故に銃から剣へと装備を変えて、敵は突撃を敢行してきた。部隊から例え欠員が出ようとも目の前の敵を仕留め、依頼を完遂するのだと言う決死の覚悟を以って。

(よし、それを待っていた！)

敵は優秀だ。任務遂行のためならば犠牲をも厭わない、そのプロ意識、錬度の高さ、目の前の敵手は間違いなく一流所の猟兵だろう。だからこそ凌ぎ続けていればそうしてきてくれると信じていた。敵がしびれを切らして攻勢に移って来るこの時をリインは待っていたのだ。敵が接近してくる間のわずかな時間、その数秒程度の闘気を練りこむための時間が、とっておきの攻撃を放つために欲しかったのだ。

「トワ、援護を頼む！」

「うん、行くよりイン君。導力銃リミット解除、出力最大！」

「レインボーストライク!!!」

そうして導力銃より放たれた七色の光に包まれたリインは練りこんだ闘気を一挙に解放して最強の一撃を叩き込む。閃光が包み込んだその後には、地に付す敵の姿があった。

そうして形勢の不利を悟ったのだろう、即座に指揮官と思しき男の号令によって特務支援課の面々やクロウたちの方と交戦していた敵も次々と撤退していく。深追いは危険だとリイン達も判断して、その撤退をあえて見送る。程なくして、異常を察知したタングラム門の警備隊が到着して事態は一応の終息を見るのであった。

鉄血の子と魔都（終）

事件から一夜明けた最終日、午後の列車で帰国する事となっている一行はそれまでの短い時間、クロスベルの観光に勤しんでいた。

「ふう、やれやれグッズをかうだけでこんなに時間がかかる事になるとは……悪いみんな、待たせたな」

アルカンシエルのトップスターイリヤ・プラティエのサイン入りプロマイド、その他諸々のグッズをなんとか入手したリインは疲れたような顔で劇団の近くのカフェで待たせていた面々の下へと戻る。

「ふふふ、アルカンシエルはクロスベルの誇る国際的な劇団だから、それこそ他国に熱心なファンがたくさんいる位に……ね」

どこか誇らしそうな様子でエリイはそう呟き

「意外です。そういう事には興味のないタイプの人だと思ってましたので」

如何にもお堅い軍人志望と言った様子のリインがアルカンシエルに興味を持つている事に驚きながらティオは目を丸くする。

「ああ、いや。これは自分のためのものじゃないんだ。恩師の一人にアルカンシエルの熱心なファンが居るから、日頃のお礼と思ってね」
「ああ、なるほど麗しのハインリツヒ教頭殿か」

そのリインの言葉に同じクラスのアンゼリカは察したように苦笑する。Ⅰ組とⅡ組のクラスを受け持つ担任でもあるハインリツヒ教頭がアルカンシエルの熱烈なファンである事を貴族クラスではある程度知られている公然の秘密である。今回のクロスベル行きの際にも彼は公私混同ではないか、遊びではないのだと釘を刺しておきながら生徒に私事を頼むなど教育者としてあるまじき事と、悩んだ末に結局リインに直接頼むような事はしなかったが、リインは教師思いな事に自腹を切つてプレゼントをするようだ。

「……………なんというか、お前も本当に奇特な奴だよな。そこまであの教頭慕っているのってお前位じゃねえか？」

メアリー教官辺りにとかならわかるけどよ等とクロウはなんとも形容し難い表情を浮かべながら己が親友を見つめる。トールズ士官

学院において生徒からの人気は美術を受け持つメアリー教官が一番人気を誇る。その可憐な容姿と伯爵家令嬢という立場から男子生徒からの人気は絶大で、一部女子生徒からはやっかみも受けたりしているものの、基本的にはその穏やかで優しい人柄から慕う生徒の方が多い。

そして教官陣の中で生徒から最も人気がないのが口うるさく、規律に厳しい事で有名なハインリツヒ教頭である。決して悪い教師ではなく、学院や組織を回すのにあたって必要なタイプではあり、卒業して大人になればそこまで悪い先生ではなかった等と後々気づくタイプではあるのだが、そこはそれ。そういう口うるさい大人が若者から嫌われるのは、どこの時代、どこの国でも変わらぬ法則である。

しかし、そんな中そのハインリツヒ教頭に対する尊敬の念を露にする生徒がいた、あまつさえ自腹を切つてまでお土産を用意する程に。それが自分の親友だと言う事実にくロウは驚きは隠せない。

「ハインリツヒ教頭には何かとお世話になっているからな、この一年熱心にご指導いただいた。この位は当然の礼さ」

目指す進路の関係上リインが今年度特に熱心に指導してもらったのは政治と経済を受け持つハインリツヒ教頭と軍事学を受け持つナイトハルト教官の二名である（サラ教官にも武術の稽古をつけてもらったりで色々世話になったが、その分色々苦勞もさせられたのでリイン的にはお相子である）。ナイトハルトにもいずれ礼をしたいところだが、生憎とナイトハルトはリイン同様に物欲の薄いタイプでいまいちピンと来るものがないため、今回は見送りとしたようである。

「やれやれ、リインは本当に何と言うか、君がプレゼントすべき相手はもつと別にいると思うんだけど」

チラリと傍らに居るトワを窺いながら、同年代の気になる少女にではなく神経質そうなおっさんにプレゼントを贈るといふ健全な青少年にあるまじき事を行なおうとしている友人に肩を竦めながらジョルジュは告げる

「ああ、ナイトハルト教官にはそれこそ学院に入る前からずっとお世

話になっていくからな。いずれ然るべきお礼をしたところではあるんだが……」

「いや、そつちじゃなくて」

「?他に俺が誰か礼をすべき相手がいたか?ああ、特定の教官だけではなくどの教官にもお世話になっていくんだから全員分買えと、そういう事か?」

「いや、だからそうじゃ……ああ、うん。まあそんなところだよ。もうそういうことでもいいよ」

全くもって察しの悪い友人に深い、それはもう深いため息をジョルジュをつく。友人として塩を送れるのは此処までで、後はもう本人達が気づくのは待つ以外にないだろうと。

「ふーむ確かに、言われて見ればそれもそうだな。他の教官方にも何かと世話になっているのだ。しかし参ったな、流石にそうなる聊か予算が心もとない」

そんな友人の気遣いに気づかずに勘違いしたリインは見当違いの方向へと走り出す。

「リイン君、そういう事なら私も出させて貰うよ。私も先生達にはお世話になっているもん」

そう、トワ・ハーシエルが笑顔で告げる。一步間違えば賄賂と受け取られかねないところではあるが、この二人に関して言えば賄賂など送らずともほとんど最高評価の優等生なので、そのように誤解を受ける事はないだろう。こういう時に日頃の行いや信用というものが出てくるのである。

「……じゃあ、その言葉に甘えるところかな」

「うん、それじゃあ百貨店では一緒に先生たちへのお土産選ぶか」
そうして一行は次の目的地である中央広場にある百貨店へと向かう。向かっている途中自分達二人を見ながら、時折ヒソヒソと話をしている支援課と友人達の様子を不審に思いながらもリインとトワは隣り合いながら道を歩いて行くのであった。

「それじゃあ、色々とお世話になりました。短い間でしたが貴重な体

験をさせて頂きました」

一通りの観光を終え時間となったリイン達は、クロスベルの駅前にてレクターと合流し、支援課の面々へと別れの挨拶を告げていた。

「ううう、テイオ君と別れなければならぬだなんて……どうして世界はこんなにも理不尽なんだ……ああ、空の女神は一体何をなさっておられるのか。テイオ君、私と一緒に来て」

「丁重にお断りさせていただきます」

バツサリと切って捨てられ四大名門が一つログナー侯爵家の令嬢アンゼリカ・ログナーはその場に膝を突き、神は死んだ！等と敬虔な信徒や教会の人間が聞いたら眉を顰めて説教をし出すような内容を口走っている。放置しておくとは危険なので、ジョルジュ・ノームがため息をつきながらフオローへと入り出す

「色々と話せて楽しかったわ、また機会があったらその時はよろしくね、トワちゃん」

「はい、その時はもっと勉強してエリイさんに負けないようになっていきますから」

「ふふふ、こっちの方がこそ貴方に負けないように頑張るわ」

和気藹々と可憐な少女二人が話しているその様子を傍から見ると、ファッシュオンやらスイーツやらと言った華々しいものを想像するかも知れないが、この二人がこの一週間語り合った内容は主に政治と経済、それめかなり高度で専門的な内容である。エリイ・マクダエルとトワ・ハーシエル、この両名はどちらもこの世代最高峰の才女と言っても決して過言ではない才覚の持ち主であった。

「……………」

スタイルで競ったら残念ながらも前足掻いてもお前に勝ち目ないけどな、そんな軽口を思わず口走りそうになったが、クロウ・アームブラストは寸前でどうかその言葉を？み込む。言った日にはその場の女性陣から総すかんを食らうのは目に見えているからだ。クロウとて流石にそこまで考えなしではない

「結局今回は俺の行きつけの店にはいけずじまいか」

「頭の固い奴がいましたからね、俺としては行きたくてしようがな

かったんですが。鬼教官にしごかれまして」

肩を竦めながら告げてくるランディにクロウは大げさによよよよと泣きながら答える。

「阿呆、士官学院生である俺らがそんなところに行けるわけないだろう」

「彼の言うとおりだぞ、ランディ。流石にまだ学生の彼らを連れて行くのは流石に問題だろう」

そんな二人にリインとロイドはそれぞれため息をつく。そしてそんな真面目で順当な発言を聞いて二人の素行不良者はひそひそと話し出す

「知っていますかランディさん、こいつこんなさも僕女の人なんかに興味ありませんみたいな面していますけど、すっごい美人で優しい血の繋がっていないお姉さんが二人も居るんですよ」

「おいおいおい、それは本当かよクロウ。ロイドの野郎だけじゃなくてリインの野郎まで弟ブルジョワジーかよ。かー空の女神は何をしておられるのか！こんな不公平が許されて良いのか!!」

持たざる者の妬み、それらを共有してクロウとランディは意気投合する。そしてそんな二人を見ながらリインとロイドはどちらも苦笑を浮かべて

「なんというか、お互い大変ですね」

「ははは、でもアレでとても頼りになる仲間なんだ。それは君の方だって同じじゃないのか？」

有事の際にはまさに阿吽の呼吸と言える絶妙なコンビネーションを見せていたことを思い出しながらロイドは告げる

「そうですね、あいつになら安心して背中を任せられます。正直、あいつと組んで居るならどんな相手にだって負けないとそう思える位には」

クロウと一緒にならどんな強敵にだって勝てる、リインは時折そんな風に想うことがある。もちろんそれはある種の錯覚なのだろう、5人揃って初めてサラ教官に勝てたばかりなので。現状のリインとクロウ二人だけのコンビではおそらくサラに勝てないだろうし、ましてや

そのサラ以上であろう光の剣匠や黄金の羅刹と言った帝国最高峰の実力者には及ぶべくもない。

ただそれでもリインは時折想うのだ、こいつと一緒ならばどんな相手にだろうと勝てる、自分達二人が組んで出来ない事等ないのだと、そんな風に。思春期にかかる種々の麻疹の様なものかもしれないが、この掛け替えのない仲間と友人達と一緒にならば自分はきつとどんな壁も乗り越えられるのだと。

「はは、俺も同じだよ。……君もこの一週間で色々わかったと想うが俺たちの前には大きな壁が幾つも立ちふさがっている。でも俺はきつとその壁を仲間達と一緒に乗り越えられると信じている」

「……そうですか」

爽やかな笑みでそう告げてくるロイドの言葉にリインはどこか複雑な感情を抱く。ロイドの言った壁、その中には間違いなく自分の祖国であるエレボニア帝国が意図して作り出したものが存在するからだ。個人的な感情で言えばリインはロイドを応援したい、祖国のために理不尽な現実に対抗する支援課の面々に抱いた敬意や好意は決して嘘ではない。尊敬している、心から。だが、他ならぬエレボニアの士官候補生である自分、鉄血宰相の息子である自分がどの口で頑張ってくださいなどと言えるのかという葛藤が存在する。そうして葛藤の末にリインは……

「こんな事を自分が言えた義理ではないのかもしれませんが、どうか頑張ってください」

素直に自分の心に従う事にした。いずれ激突しあう敵同士となるのかもしれない、相容れない立場なのかもしれない。だが、それでも、目の前の人物に対して抱いた心からの敬意、それに嘘をつくことは出来なかった。

「ありがとう、リイン君の方も頑張つて。また会おう」

そうして二人は固い握手を交わす。立場が違えど、この一週間共に過ごし、語り合った時間とお互いに抱いた想い、それらは決して嘘などではないのだと想いながら……

こうしてリイン・オズボーン以下トールズ士官学院所属の生徒5名

は一週間のクロスベルへの留学を終えるのだった。

「で、これで満足ですか、オズボーン宰相閣下」

帝都へイムダイルに存在する皇帝の居城たるバルフレイム宮、その一室でレクター・アランドール特務大尉は己が主である鉄血宰相へと報告を行なっていた。宰相閣下と呼んではいるもののその言葉には敬意は宿っていない、慇懃無礼の生きた見本とも言うべき態度であった。

「ああ、上出来だ。君の流した餌へと共和国はまんまと食らいついてくれた。結果我が帝国から親善のためへと訪れた若者達が危機へと晒された。演習において警備隊が我が国の学生に敗北したという点と合わせて、クロスベル自治州の保有する警備隊、この存在に対して一考の余地を齎す事だろう」

「餌ねえ……」

レクターがオズボーンより受けていた密命、それは帝国の開発した新型戦術オーブメントのテストを務める士官学院生達がクロスベルへと留学するという事。そしてそのスケジュールを、共和国の強硬派へと伝わるように流せというものであった。さも帝国を裏切ったように見せかけて。

「襲撃こそ失敗に終わったものの、君の齎した情報が正しかったという事は向こうとて把握している筈だ。これで、君は奴らの信用をある程度獲得することが出来た」

「それを利用して二重スパイになればと」

レクターの返答にオズボーンは満足げに頷く。そんなオズボーンの様子が何故だか今のレクターには自分でもわからない程癪に障る。「しかし、ラインの奴らが襲撃を凌げたから良かったものの、もしもあいつの手に負えないような敵が襲ってきていたら、あんた一体どうするつもりだったんだ」

「ARCCUSを奪われるリスクについてか？ああ、その件に関しては心配要らない。所詮あれは試作段階のもの。この一年我が不肖の息子たちが取ったデータを元に正式な後継機がすでに完成している。故に奪われたところでたいした痛手にはならんよ、君の信用をより高めることも出来るしな」

故に何の問題もないのだと告げる目の前の男、その様子にレクターは奇妙にいらだつ。違うだろう、アンタが気にすべき事はそうじゃないだろうと

「俺が言いたいのはそういう事じゃねーよ、一步間違えばあんたの息子は命を落としてもおかしくなかったと、そう言っているんだぜ」

父親としてそれで良いのかというレクターからのいらだち混じりの問いにオズボーンは不敵な笑みを浮かべて

「帝国の未来を担う有望な若者達が親善留学の最中にクロスベルの地で命を落とす、帝国政府としてはクロスベルの安全保障能力に対して重大な疑義を抱かざるを得ない事件だな。それも我が帝国の宿敵たるカルバード共和国の関与が疑われ、そして犠牲者の中には、かのログナー侯爵家のご息女とこの私の息子が含まれて居る。革新派と貴族派、そんな馬鹿馬鹿しい対立を超えて今こそ祖国の脅威に対して一致団結すべきなのだ、そう訴える絶好の機会となる。そうは思わんかね、アランドール大尉」

平然とそう告げるオズボーンの言葉にレクターは一瞬言葉を失う。

「……あなたはそれで良いのかよ？あいつは、リインは」

あんたの息子だろうかと家庭教師に行く度にどこまでも真面目な様子で早く一人前になって父の力になりたいのだと、そう言っていた弟分の姿を浮かべながらレクターはオズボーンへと詰め寄るが……

「アレは軍人になるのだとそう宣言していた、ならば祖国のために命を捧げるのは本望というものだろう」

オズボーンが告げるのはどこまでもそんな冷徹な言葉。そこに父の我が子に対する温かみなどない、あるのはどこまでもこの国を統べる宰相として一士官学院生を見る言葉であった。

正しいのだろう、身内だからという理由だけでえこひいきするより

は、公人としては。やっている事は確かに外道のそれだ、だが目の前の男は今までもこの程度の策謀は幾つも実行してきて、自分もそれに加担した。

今回その犠牲となる生贄として我が子たるリインがなるかもしれない。何が変わらない、目の前の男の行いも自分の行いも、レクター・アランドールにとって特別怒りを抱くような事情はない、そのはずなのだ。

ならば、なぜ

「ご苦労だった、アランドール大尉。今後とも君の活躍には期待している」

用件はこれで終りだと告げる主の言葉を受けてレクターは一礼をしてその場から退出する。自分でもわからない、鉄血宰相への憤りを抱きながら……

鉄血の子と学院長

「今回の留学に関する君のレポートは読ませてもらった。凡そ非の打ち所のない模範的なものだった。帝国の士官学院生としてはまず満点と言って良いだろう」

「ありがとうございます」

敬愛するヴァンダイク学院長からの賞賛の言葉にリインは確かな喜びを味わいながら、礼をする。

クロスベル留学から帰還して一週間が経った。教官陣に対する日頃の感謝を込めたプレゼントは概ね喜んで貰え（ハインリツヒ教頭は予想だにしていたサプライズに見たこともない歓喜の様子を見せた後に取り繕うように咳払いをして「好意は嬉しいがこういった贈り物は下種な勘繰りをするものも出るかもしれないため気をつけたほうがいい」と忠告を行なってきたが）、レポートも提出して一段落したリインは学院長室へと呼び出されていた。

自分のレポートの内容に何か不備があったのかと思っただが、学院長から告げられるのは贅辞でリインは聊か拍子抜けするが、あるいは一度褒めた上で何らかの注意を行なうつもりなのかもしれないと気を引き締めなおす。

「うむ、正規軍名誉元帥を務める身としては君のレポートには聊かの不備も見受けられなかった。故に此処からは教育者として、若者に対する年寄りの老婆心になるのだが……」

「リイン・オズボーン君、今回描かれていたレポートの内容、アレは紛れもない君の本心からのものかね」

若者の未来を導くべく真摯に、決して問い詰めるようなものではなくどこまでも穏やかに見つめられながら告げられたその言葉にリインは一瞬言葉に詰まる。

「私には君がアレをどうしても無理して書いたとしか思えないのだよ。君自身の考えではない、誰かの受け売りのね。内容自体はよく出来ていた、おそらくは学院の教授の論文なども参考にして居るのだろう、士官学院生としてみれば凡そ非の打ち所がなかったとも」

「だが、読んでいく中で私は君の中に何か迷いのようなものを感じた」
エレボニア帝国の人間として、士官学院生としてリインの提出したレポートはエレボニアの国益に沿ったものであった。併合論と自治論、どちらの論も参考に入れて、その上で実際に現地で体験した住民の生活、クロスベルの持つ警備隊の練度や装備に基づくとそれは凡そ非の打ち所がなかった。政府の人間や軍の高官がこれに目を通せば、まず間違いなく将来有望な士官候補生だと高く評価するだろう。

故に自分が今も現役の軍人であり、目の前の少年が部下という立場であるのならばヴァンダイクも特に何も言わなかったかもしれない。だが今の自分は予備役となった学院長であり、目の前の少年は自分の教え子だ。

おそらく彼は今何か迷いを抱いており、そしてそれはこの少年にとつてとても大事な事の筈なのだ。故に教育者として老婆心ながらもおせっかいを焼かずにはいられなかった。加えて、理事長を務める皇子より頼まれていた来年の話も存在する。

「どうかな、その悩み私に話してみるといいのは。何度も言うが、レポートの内容自体は非の打ち所のないものだった。故に決してお説教をしようというわけではない、単なる年寄りの冷や水だよ」

そのヴァンダイクの言葉にポツリポツリとクロスベルの地を訪れて抱いた自分の中の迷いをリインは語り出す

「自分はずっと軍人となる事を夢見て目標としてきました。父のように、ナイトハルト少佐のように、ミユラー少佐のように、そして貴方のように祖国とそこに住む人々を護るために」

それこそが自分の生きる道なのだ。リインは信じていた。生涯を賭けるのに値する誇りある道なのだ、その過程で例え命を落とす事になったとしても本望だと。母を失ったときのような無力さをもう味わいたくないのだと、あの日何も出来なかった自分を変えたくて、あの日の自分のように泣いている誰かの力になりたくて。そして、唯一残された、たった一人の肉親の力になりたくて。

「光荣だな。若者にそうして憧れるのはこそばゆいが、素直に嬉しく想うよ」

「ですがクロスベルで自分は味わいました。国が違うという理由で自分が本来であれば護りたいと、力になりたいと願うような人ともすれば殺しあわなければならぬという事を。然るべき報いをくれてやりたいと想うような相手とも握手をしなければならぬのだという事を。軍人とは唾棄すべき豚に従って、尊敬に値する人を殺さなければならぬことがあるのだという事を」

尊敬に値する立派な人物こそが自分の祖国からは警戒されて遠ざけられており、自分個人としては到底好意を抱けないような俗物こそが祖国から厚遇されているという事実をリインは目の当たりにした。「わかっていたはずなんです、そんな事は。ずっと教えられてきた事でした。なのにいざそれを目の当たりにしただけでこんなにも自分は……」

「迷いを抱いてしまった、と。なるほど、だから君は今回のレポートで殊更国益の代弁を行なったのだな」

「はい、軍人ならば祖国とそこに住まう民を最優先すべきですから。それが正しいはずで、自分の今抱いている迷いなど弱さでしかありません」

不甲斐ないとばかりにリインは拳を強く握り締め奥歯を強く噛み締める。敬愛するエレボニアの英雄、それと比較した己の懦弱さがリインは不甲斐なくてたまらなかった。

自分の尊敬する人達はこんな迷いなど抱かず、それこそ鋼の強さをもって己の道を進んでいるのにそれと比較してなんと自分は弱いだろう、と。

頭では理解していたつもりになっていた、しかし真実それはつもりでしかなかった。こんな有様で父の力になりたいなどと大言壮語も良い所だ。

父は、ギリアス・オズボーンはこんな弱さなど欠片も見せていない。まさしく鋼の如き意志と強さでもって多くの反発と嘆きを飲み干した上で止まらずに進み続けているというのに……

「それは違うぞリイン君、迷いを抱くことは決して悪いことなどではない」

思い詰めた様子のリインに対して、しかしヴァンダイクはそれは違うのだと告げていた。

「え……？」

「全く自己の正義を疑わない人間ほどこの世に危険な存在はない。正しいからこそ彼らは決して止まらないし、妥協もしない」

正しさというのはある種の麻薬である。自分が正しいという思いは、やがては自分と敵対する者が悪なのだという考えへ。そして自分は正しく相手は間違っているのだから何をしてもいいのだという考えへと繋がっていく。

「強固な信念というものは確かに人を魅了するものだ。君位の年の若者がそういった者に憧れるというのもまあ、わかるつもりだ。他ならぬ私自身の若い頃もそうだったのだからね」

ヴァンダイクの脳裏に浮かぶのは一人の男。鉄血宰相の異名を持ち、まさに鋼鉄の戦車のように突き進み続け熱狂的な人気を誇るかつての部下であり、おそらく目の前の少年にとっての憧れであり、目標でもあるかつての部下だった。

「だが信念というものはね、一歩間違えば頑固さにしかならないものでもある」

決して折れず曲がらず変わる事のない不屈の信念。なるほど確かにそれはまぶしく輝いて見えるだろう、自分を信じる事のできない者に何かを成し遂げることなど出来るはずがないのだから。

自らの信じる正義、信念、誇り。それらは尊ばれるべきものだろう。だが、決して変わらないという事はそれすなわち他者の意見など聞く気がないという事も同然ではないか？ 信念や正義とはそうした危うさも同時に孕んでいるものなのだとヴァンダイクは目の前の若者へと告げる。

「自分の好きな者は皆味方で自分の嫌うものは皆敵にいる、こんな状況だったらそれは楽だろう。何せ嫌いな連中なのだ、いくらでも容赦も躊躇もせずに戦える。だがそんな状況にもしもなってしまうえば、それこそその戦いはどちらかが滅びるまで決して止まらなくなってしまうだろう」

外交の延長線上として行なわれたのではなく、相手が憎いから滅ぼしたいという理由で行なわれる殲滅戦。そんなものになりかねない
「故に我ら軍人は相手も同じ人間であるという事実、そのことをしかと認識した上でなお感情と理性を切り離してその相手と戦わなければならぬ」

幾度も教えられてきた軍人としての心構え、リインは目の前の老兵へと合わせて復唱する。そんなリインの様子にヴァンダイクは穏やかな笑みを見せて

「君は今回、それを頭ではなく心によって理解できる機会へとめぐり合ったわけだ。苦しいのだろう、どうして自分は真っ直ぐに決めた道突き進むことが出来ないのだと、自らを不甲斐なく思っているのだろう」

自分自身もかつて味わった思い、真っ直ぐに決めた道を走る、何故そんな簡単なことも出来なずに、自分は自らの描いた理想通りに生きる事が出来ないのだという自分自身への憤り。それらを余さず理解した上でヴァンダイクは目の前の若者へと告げる

「だが、それこそが君の成長のためには必要なのだ。だから、それは決して悪いことなどではない」

他の道もあるのだと理解した上で信じる道を選んで進むのと、その道しかないのだと思えば似ているようで全く違う。他の道を知っていればこそ選択肢は広がり、それが柔軟性へと繋がる。

トールズ士官学院に入学するまでのリイン・オズボーンは後者だった。彼にとつて軍人となる事は憧れであり、夢であり、目標であり、当たり前前の事だった。軍人になる事、それ以外の選択肢など彼の目には映っていないかった。

だが今は違う、トールズに入つて彼は多くの掛け替えのない友人達と出会った。そして光と闇の混在する魔都で現実を目の当たりにした、だからこそ彼の視野は広がった。だからこそ迷いを抱くようになった。

そしてそれこそが大事な事なのだと、ヴァンダイクは考えるのだ。

「故に私から君に言う事はただ一つ。若者よ、大いに迷いたまえ。それがやがて君にとつての大きな財産となるだろう」

君がそれを糧により大きく成長するその時を楽しみにしていると、ヴァンダイクは目の前の少年へと笑みを浮かべながら告げるのであつた……

「それで彼はどうでしたか、学院長」

「どうやらクロスベルで色々と思うところがあつた様子。入学当時に感じた危うさを想うと色々感慨深くなりますな。教育者冥利に尽きると、そう思いますよ」

あの後ひとしきり話してリインが退出すると、ヴァンダイクはとある人物へと会つていた。その人物の名はオリヴァルト・ライゼ・アルノール、放蕩皇子などと呼ばれているエレボニア帝国の皇子であり、このツールズ士官学院の理事長を務める男である。

「なるほど、学院際の時もミュラーから聞いていた印象とは大分違つたので少し驚かされたが、色々成長したと、そういう事かな？」

「陳腐な言い方になります、やはり持つべき者は友人とそう呼ぶべきですな。同年代の友人達との出会いと日々が彼を大きく成長させたのでしよう。若人の成長をこの目で見られるというのは、この年になると何にも変えがたい喜びです。そういう意味でも、殿下のなさろうとしている特科Ⅶ組と特別実習、非常に興味深い試みかと」

貴族、平民、革新派と貴族派、そういった枠組みに囚われないツールズの理念を色濃く反映させた新クラス。理事長たるオリビエが行なおうとしているその試みをヴァンダイクは好意的であつた。

「ふふふ、さしずめこの一年の彼らの成長がある意味では前例と、そう言えるのかな」

「かもしれませんな」

出自も立場も違う友人達との出会いとARCUSのテストとしての日々、クロスベルへの留学、この一年のリイン達5人が行なつたそれらはまさしくオリビエが企図している特科Ⅶ組の予行演習と言

えるものだった。そしてその結果を今、ヴァンダイクは確認することが出来た。

「そして殿下、理事会でも話題となった二年生より特別実習の際のリーダーを二人選出するという話、私の腹は決まりました。正式な会議にもかけるつもりですが、おそらく結論は変わらないでしょう」

特別実習それは帝国各地に赴き、様々な現地でのトラブルを解決することで生徒の視野を広げ、成長を促すことを意図したものである。訪問場所と訪問時期は概ね問題なく決まったのだが、その際に理事の一人であるルーファス・アルバレアより一つだけ提案が行なわれた。

曰く、二年生より二名それぞれの班のリーダーを選出してはどうかと。リーダーが決まっていたほうが班の統制も取れやすく、先輩がリーダーを勤めるならばⅦ組の面々としても比較的抵抗なく従えるだろうし、リーダーとなる二年生にとっても得難い経験となるだろう、と。

この意見はその他理事にも好意的に受け入れられ、かくして教官会議よりあくまで本人の同意を得た上でだが、二年生より二人の生徒を選出することが決まるのであった。選出された生徒は住む場所もⅦ組と同じ第三学生寮となり、文字通り苦楽を共にする事となる。

そして二年生でそういったものに教官会議で満場一致で選ばれる2人と言えどもはやほとんど考える余地もなく……

「1年I組所属リイン・オズボーン、1年IV組所属トワ・ハーシエル、来年2年生となるこの兩名を推薦させて頂く事となるでしょう。すでに会長と副会長を務めて忙しい身、もしかすると断られてしまうかもしれません」

「その時は仕方がないでしょう、当初予定していた通り2年生は不在の状態です。1年生のみで実習を行なうだけの話です」

そうしてヴァンダイクと談笑しながらオリビエは愛する祖国へと思いを馳せる。革新派と貴族派という二派の対立、そんな中で特科Ⅶ組が帝国に新たな風を齎す事を期待して……

おまけ

「ふむ、オズボーン君一体どうしたのかね？……ここ……ここ、これはイリヤ・プラティエのプロマイド!!!しかもサイン付き!!!ここ、こんなものを見せて一体どういう……何、私へのプレゼント!?日頃のお礼?なんと!!!本当に良いのかね!!!……ゴホン」

「オズボーン君、君の好意はありがたいがあまり生徒から教官へこういった贈り物をするのはよろしくないぞ。君がそのような事をするとは思わんが、何分下種な勘繰りをする者というのはどこにでもいるものだ。媚を売っているなどと言ったり、賄賂を渡している等と言った者が出ないとも限らん。気をつけるように」

「だが、だがしかした。わざわざ私のためにと君が買ってきてくれたもの、それを受け取らないというのはそれはそれであまりに人情がなさ過ぎるというものだ。故に君の好意は素直に受け取っておこう、うむ。あくまで君の好意を受け取らないのは失礼だから、という理由によるものなので勘違いしないようにな」

鉄血の子と星空の誓い

「みんなで星を見ないか？」

第三学生寮へのトワとラインの引越し、その最中にラインはそんな事を手伝ってくれている友人達に提案していた。

特科Ⅶ組を率いて特別実習へと赴くことを快諾したラインとトワは3月に入って生徒会会長及び副会長として多忙を極めていた。卒業式の在校生代表としての挨拶、入学式への準備等等まさに目に回る忙しさであった。そしてようやくそれらが一段落してくると今度は自分達の第三学生寮への引越しが待っていた。幸いにもいつもの三人の快い協力も合間って引越しは無事終わったわけだが（その際アンゼリカがまたもや同棲なんて私が許さないぞおおおお、私も此処へ引越す！などと叫びだしたがサラの私も此処に住むから大丈夫よという言葉で事なきを得た）、その際トワの荷物の中に大きな天体望遠鏡を見つけたラインはふと、そんな提案をしていた。

それは入学前のラインだったらほとんどありえなかった提案だっただろう。ツールズ士官学院に入学する前のライン・オズボーンはどこか生き急いでいるところのある少年だった。自分には余分な事をしている時間などないのだと言わんばかりに夢に向かって最短距離を全速力で駆け抜ける事しか考えていないかのように。だが、四人の掛け替えのない友人達との出会い、そして混沌の魔都クロスベルを訪れたことで彼の視野は大きく広がった。

ある意味では弱くなったとそういえるのかもしれない、全力で最短距離を行く者だからこそ持てるある種の単純さ故の強固さ、すなわち彼の父ギリアス・オズボーンが持つ強引さとも言うべき強さが今のラインからは薄れた。トワのように温厚でラインの持つ生来の人の良さとも言うべき優しさをこそ元々好ましく思っていた者はそんなラインの反応を好ましく思っていたが、逆に自分達の味方で貴族の敵であるなどと思っていた、平民生徒の中には今のラインに対してどこか物足りない思いを抱いている者も居るのであった。

当人自身もそんな今の自分に対する若干の戸惑いを抱いていた。ヴァンダイクより伝えられた「大いに迷え」という言葉、それは迷いとは弱さだった捉えていたリインにとっては大きな衝撃だった。何故ならば彼こそ父に負けず劣らずの強さの象徴。迷いなど微塵も感じさせない英雄だったからだ。

だからこそリインは戸惑いを覚えつつもその言葉に素直に従っていた、以前までなら抱いていたこんなことよりも鍛錬や勉強を行なうべきではないかという想いを抱えながらも精力的に様々な事にチャレンジする。それは例えば絵画であったり、馬術であったり、あるいはチェスであったり、写真であったり、釣りであったり、調理であったり、5人で協力して完成させた導力バイクを使ったツーリングだったり、生徒会副会長としての部活動のチェックという仕事との一石二鳥を兼ねて、2月と3月のリインは何時になく様々な事に挑戦していた。

だからこそだろう、トワの持つ天体望遠鏡、それを見つけたときリインはふとそんな提案をしていた。それはARCU Sのテストとしての役目も終り、自分とトワは生徒会活動とⅦ組との特別実習で忙しくなるためにこの5人で集まる事が減ることをどこか寂しく思う気持ちがそうさせたものであった。他の四人もそれは同じ気持ちだったのだろう、リインの提案を快諾して、かくして一年間のARCU Sテストの打ち上げ会とも言うべき会を学校の屋上で行なうのであった……

「おお、こりやまた絶好の星見日和って奴だな。うんうん、これも俺様の日頃の行いって奴だな」

「日頃の行い云々言うならクロウよりもどっちかというとりインやトワじゃないの？学院でもトリスタの街でも評判の困ったことがあつたらすぐ解決なお人よし会長と副会長のコンビなんだから」

どこまで本気なのかドヤ顔でそんな事を告げるクロウへとジョルジュはさらりとツツコミを入れる。

「ふふ、私のトワが天使なのは出会った時からだったがリインは本当に随分と丸くなったものだね。まさかりインの口からこういったこ

とを提案されるとは想っていなかったよ」

「あ、それは確かに。基本ラインって何時も忙しそうに勉強しているか、ナイトハルト教官やサラ教官と一緒に武術の稽古をしているか、さもなくて生徒会の活動をトワと一緒にしているかって感じだったもんね」

「それがこんな風にみんなで見ようだなんて、一体どういう風の吹き回しなのやら」

天体望遠鏡をセットして準備をしている二人を他所に最近随分と様子が変わってきた自分達の友人の様子について三人は話す、そうしている準備が出来たのだろうトワが元気な声で三人を呼ぶ。目に映ったその光景に心を奪われ、入れ替わり立ち代りで5人は星々の輝きを堪能する。そうしてひとしきり堪能し終わると5人は仲良く並んで腰掛けて星を眺めていた……

「気が付いたら俺たちももうじき先輩か……」

「うん……あつという間だったね……」

ポツリと零したラインの言葉にこの一年の思い出を振り返りながらトワが応じる。

「いやはや色んな事があったもんだね、サラ教官に旧校舎に突き落とされたり、サラ教官とやりあったり、サラ教官からの指示で魔獣とやりあうことになったり、サラ教官の指示で旧校舎の異変の調査をやったり、サラ教官とやりあったりだとか」

「いや、サラとやり合っただけじゃねーかよ」

とぼけた様子で肩を竦めながら告げるアンゼリカにクロウはびしっとツツコミを入れる。

「はははは、まあでもこの5人での思い出というやつぱりそれが一番に浮かぶんじゃないかな」

この1年間、ARCSのテストで5人はサラ・バレスティンから散々にしごかれた。それは模擬戦という形であったり、旧校舎の調査だったり様々な形だったがやはり一際5人にとって印象に残っているのはそれだろう。

「いやいや、もつと他にもあるだろうジョルジュ。例えばこの間のクロスベルへの留学だとか」

「お前が魔界皇子とかいう奇天烈なコスプレを披露した学際のライブとかな」

ぷくくくと笑いを堪えながら言ってくるクロウへとリインは青筋を立ててしたたかに殴り飛ばす。

感謝はしている、あんな体験を出来たのは間違いなく目の前の悪友のおかげだろう。

だがそれはそれ、これはこれ。あんな衣装をよりにもよってオーラフ父さんやクレア姉さんやらの前で晒すこととなった恨みは消えていない。後夜祭での賞賛しながらも「そういう年頃なのだろう」と考えているかのようなどこか生温かい目線を受けた居た堪れなき、レクターに爆笑された屈辱、ミリアムの無邪気な笑顔により抉られた胸の痛み。それらをリインは余さず覚えていて。いつまでも引きずるのも女々しい上にそれを勝る喜びがあったために水に流そうかとも想ったが元凶が自ら掘り返すというのなら是非もそのなし。貴様は喧嘩を売った、俺はそれを買った、である。

「いってーなこの野郎！何も殴ることはねーだろうが！」

「黙れ！貴様に生温かい視線で男子ならばそういうものに憧れる年頃あるというのはわかっておるぞと久方ぶりに再会した義父に言われ、クレア姉さんから「何か心配な事があるならいつでも相談に乗りますからね」などといわれた俺の気持ちが変わるか！」

「へいへい、そりゃすいませんでしたー魔界皇子様ー」

そうしてギャーギャーと言い合いを始めて喧嘩を始めた二人を他所に残った三人は苦笑する

「クロウはクロウでトワとは違った意味でリインとの名物コンビだね。まあ、あんなド派手な喧嘩を授業中にやってああやってしよつちゆう喧嘩しているのに戦いの時は本当に息のあっている生徒最強コンビだから当然といえば当然だけど」

リイン・オズボーンとクロウ・アームブラストのコンビは紛れもない学院最強である。もとよりどちらも近接、遠距離においてそれぞれ

生徒の中では最強とされる二人である。その上に当初のわだかまりも解けて、戦術リンクシステムにより息のあったコンビネーションがさらに強化された、この二人のコンビは既に武術教官を務めるサラ・バレストアインにすら匹敵する領域となりつつあった。

「でも最初の喧嘩の時みたいなの感じじゃないよね、喧嘩しているんだけど、なんだろう凄く奥底の部分で分かり合っている感じがするっていうか……相手の事を信じているんだって事が伝わってくるんだ……」

「ふふ、この二人こそ雨降って地固まるの典型という奴だろうね。卒業して、大人になってもこの二人はこういう関係なんじゃないかな」「卒業かあ……もう学院生活も半分終わっちゃったんだよね……」

しみみりとしたそんな呟きにクロウと取っ組み合いの喧嘩をしていたリインもぴたりと動きを止めてポツリと質問をする。

「そういえば四人は卒業後はどうする気なんだ？」

トールズ士官学院は士官学院ではあるが卒業後軍へと進むものは4割程度で様々な方面へと人材を輩出している。そして目の前の四人はおそらく性格的にも軍という進路を選ばないだろうと想い、リインはそんな風に問いかけていた。

「私は、まだ決まっていけないけど一度この国だけじゃなくて色々な国を見て回れるNGOのような仕事に就きたいかな」

リインがクロスベルの地で色々と学んだようにトワもまた同様だったのだろう、そんな風に穏やかながらも凜とした意志を携えた瞳でトワ・ハーシエルは答える

「僕は一度リベールや共和国に行ってみて見たいかな。帝国だけでなく外国の導力技術も色々と学んでみたいよ」

のんびりとした口調ながらも弛まぬ向上心と探究心を見せながらジオルジュ・ノームも答える。

「私はそうだな、ジオルジュが作った導力バイクにでも乗って気ままな旅にでも出るかな」

「いや、流石にそれは厳しいんじゃないのか？だってお前は」

「なーにいざとなればそれこそ親父殿も不良娘など勘当して親戚から

養子なりなんなりを迎えて後継者にするだろうさ。最も私としても色々わがままを言わせて貰った身だ。それなりの恩は感じているから、なんとか折り合いをつけたいところだがね。だが、私個人の希望を述べさせて貰うならそうなる」

アンゼリカ・ログナーはどこまでも自由奔放な様子でそう口にする、そんなアンゼリカに一同は流石に呆気を取られる

「そうだ、いつそのこと5人全員で卒業旅行で一年間くらいあちこち旅をするってのはどうだい。ちようどトワもジョルジュも外国に行くつもりなんだろう？ だったら一人よりも二人、二人よりも三人、そして三人よりも四人で、四人よりも五人だ」

アンゼリカのそんな提案に一同は目を丸くする

「いや、俺は」

気持ちは嬉しいが卒業後は軍人になるのだと、そう告げようとしたラインの言葉を予期したように

「軍人になるつもり、かい？ 別段それを否定するつもりはないけど、そこまで急ぐ事ないんじゃないかいライン。軍人になってしまえばもう自由に海外に行けることは出来なくなる、こうして気軽に仲の良い友人同士で集まることもね。だったらその前に、一つ私に付き合っつて卒業旅行で皆であちこち旅する、どうかな、そんな日々も悪くないと想うんだが？」

面白がりながらもどこか心の底からの願いを込めつつアンゼリカは真摯さを漂わせてそんな風に答える。

そんなアンゼリカからの提案にラインに多くの思いが過ぎるが……

「ああ、悪くないな」

気が付けば微笑を携えてラインはそんな風に口にしていた。それで良いのかという想いはある。

自分が成るべき夢と目標に向かって最短距離を全力で駆け抜ける、そんな生き様こそが男の本懐ではないかと。

アンゼリカの提案はただの現実を前にしたモラトリアムに過ぎな

いのではないかと、そんな風な思いも。

だがそれでも今のラインにとつて、この掛け替えのない友人達と共に卒業後も一緒に旅をするというのはとても魅力的に映った。それこそ一年の遅れ、それを補って余りあるだけのものが得られるだろうと思える位には。

「うん、とつても楽しそう！」

トワ・ハーシエルも輝く笑顔を浮かべながらそんなアンゼリカの提案に賛成して

「やれやれ、その流れだとサイドカーを利用するにしても足りない分の導力バイク後二つの作成って」

「もちろん君の役目さジョルジユ！頑張れ、君は出来る男だと私は信じている!!!」

「全くもう、調子が良いんだから」

ジョルジユ・ノームも苦笑しながら賛同して

「クロウ、当然君も行くだろう？なんととっても君はこの中じゃ一番身軽で気軽な立場だ」

「……勝手に決め付けるんじゃないよ。俺にも色々あるんだっての」

クロウ・アームブラストは頭をかいて苦笑しながらそんな事を告げるが……

「ほう、それはすまなかつた。ちなみにその色々というのはどういう内容か聞いても良いかな？」

からかうような口調でアンゼリカはどう問いかける。見栄を張っているだけなんだろうとでも言いたげに。

「ぐむ、それはだなあ……とにかく色々あるんだよ！」

「それは悪かった。でもどうだい、その色々をとりあえず置いておいて皆で一年間、いや数ヶ月でも構わないからあちこち導力バイクで旅するつてのは。きつと色々楽しいと想うけどね」

そんなアンゼリカからの提案にクロウは様々な思いを飲み干すかのように一瞬眼を閉じて

「ああ、そうだな。中々に楽しそうな話だ」

微笑を携えてそう口にしていた。

そんなクロウの問いを受けて四人も笑みを浮かべて

「ふふ、決まりだね。ま、実際は今話した通りにはいかないかもしれないけれど、そうなった時でもこうしてまたこの5人で卒業式の後にでも集まろうじゃないか。そして、またこんな風に星でも眺めながら騒ぐうじゃないか」

「うん！約束、だね！」

「ああ、約束だ。俺たち5人の」

そうして5人は澄み渡る星空の下で誓い合う。また今日のように星空の下で集まろうと。

卒業しても。大人になっても。家庭を持っても。老人になっても。それでも。

自分達の友情はきつとずっと続いていくのだとそんな風に心から信じて……

鉄血の子と特別オリエンテーリング①

「サラ・バレスタイン、君たち特科Ⅶ組の担任を勤めさせてもらおうわ。よろしくね」

入学式の後、特別オリエンテーリングと称して旧校舎に集められた紅い制服に包まれた8人の生徒相手にサラはウイंकをしながらそう挨拶を行なう。

「そしてこっちの二人が今後君たちが何かと世話になるであろう先輩達よ」

「2年Ⅳ組所属のトワ・ハーシエルです。何か困ったことがあったら何時でも相談してね」

「2年Ⅰ組所属のライン・オズボーンだ。これから一年よろしく頼む」
トワは自然と、ラインは務めて柔らかな笑みを浮かべて後輩たちへと挨拶を行なう。見知った顔二人がどこか嬉しそうな顔を浮かべ、妙に落ち着いた雰囲気のある長身の青年は悠然と、銀髪の小柄な少女は気だるげに、そのほかの面々は案の定と言うべきか、「オズボーン」という名に驚きの様子を浮かべている。

「あ、あのサラ教官、Ⅶ組というのはどういう事ですか……確かクラスは全部で5クラスのはずですし、それに先輩達も見たところ貴族クラスの方と、平民クラスの方と居るようですよ……」

「お、流石は首席入学。良く勉強しているわね。うーんまあざっくり言ってしまうと、貴方達は今年から立ち上げられた身分や出自に囚われずに集められた新クラス特科Ⅶ組の所属になります。そしてその二人は貴方達にやってもらう特別実習の時に班長を務めてもらう先輩達になります。以上」

眼鏡をかけたおさげの少女エマ・ミルステインの言葉にサラはニッコリと笑顔を浮かべながら答える。

(彼女が今年の首席、という事はマキアスは次席辺りか)

首席入学の才女と革新派の重鎮を父に持つ次席入学者、なんとかどうにも色々とダブって見えるなとリインは一人ごちる。案の定というべきかサラの発言に1年生達は困惑の様子を浮かべ……

「冗談じゃない！ 身分に関係ない!? そんな話は聞いていませんよ!？」

そんな一際大きな声を挙げてリインも良く知る人物、マキアス・レーグニッツがサラへと食って掛かる。

正直リインとしては意外であった。リインが昨年会った時のマキアスは至って理性的な人物という印象だったからだ。おそらくは誰かしら食って掛かる人物が出てくるだろうとは想っていたが、それは昨年も飽きるほど見てきたタイプの貴族生徒の方だとばかり、リインは想っていたからだ。

(あの様子、何かしらの因縁が貴族との間にあるのかもしれないな)

サラへと食って掛かっているマキアスの様子は明らかに尊敬する父親の敵だから嫌いだと言ったレベルではない、それは根底にまで刻まれた不信感であり、憎悪とも言うべき根深い物をリインは感じていた。

「うーん、そうは言うけどね。若い者同士、一緒に過ごせば自然と仲良くなるんじゃないかしら？ ほら、その先輩二人も貴族生徒と平民生徒だけど、入学当時からずっと仲良くしている学校でも評判のカップルだし」

「教官、後輩たちが誤解するような言動は慎んでください。彼女は掛け替えのない友人ですが別に交際しているわけではありません」

どこか面白がるような口調で根と葉はあるが事実ではないデマを後輩達へと吹き込もうとするサラへとリインは釘を刺す。

「リ、リイン先輩は貴族生徒と言っても実質僕たちと同じ平民じゃないですか！」

「うーん、でも君の尊敬するそのリイン先輩にだって仲の良い貴族生徒の友人は何人が居るわよ。そうよねリイン」

サラのその言葉にリインは黙って頷き肯定の意を示す。

入学してからしばらくの間こそ友人が少なく、貴族生徒での友人となると入学してからつるんでいたアンゼリカと互いに剣の腕を切磋琢磨しあうフリーデル位だったリインだったが、生徒会に入り、さらには学園祭で案外面白い奴だと広まり、クロスベル留学後は「柔らかくなった」と評判になった事で随分と友人が増えた。馬術部部长を務めるランベルト、写真部部长フェデリオ、ラクロス部の副部长を務めるテレジアなど、リッテンハイムとは相も変わらず不倶戴天と言った様子でこそあるもの、今では貴族クラスの中でもリインはそこまで浮いてはいなかった。

「マキアス、君が貴族に何らかの隔意を抱いているのはわかったが、君が入学したこの学院の理念を思い出して欲しい。トールズ士官学院は貴族、平民その別なく『世の礎たる』人間を育成すべく、ドライケルス大帝が建立した学院だ。つまり、君たち特科VII組はそんな学院の理念を体現すべく選ばれたわけだ。これは、大変名誉な事だぞ。なんといっても特科VII組は理事長を務めるオリヴァルト皇子殿下直々の発案なんだからな」

ちようど一年前の自分を見ているようなむず痒い気分を味わいながらリインは優しくそう後輩を諭す。ああ、あるいは教官方も自分をこんな風な気分で見ているのかと、そんな感慨を味わいながら。だが流石に此処まで露骨ではなかった……とリインとしては思いたいところであった。

そうして完全に納得したわけではないのだろうが、尊敬する先輩の言葉だからと耳を傾けて黙ったマキアスを見てリインは

「まあ偉そうなことは言ったが、俺自身も入学したばかりの頃はちようど今の君みたいな感じだったよ」

肩をすくめながら自嘲するような笑みを浮かべて、そう告げる

「俺がこういう考えになれたのもたたくさんの掛け替えのない友人と出会えたからこそだ。それは隣にいるトワを始めとした平民もいれば、中には貴族もいる」

トワにクロウにジョルジュにアンゼリカ、四人の掛け替えのない親友を始めとした多くの友人達。彼らと接することで自分はトールズ

に入学する前に比べて大きく成長できたという実感がある。未だ未熟な半人前の分際でこんな事を言うのは教官方にしてみれば片腹痛いものなのかもしれないが、それでも先輩として目の前の後輩に伝えたい思いがリインにはあるのだ。

「勿体無いぞ。貴族だから、平民だから、そんな理由で自分から可能性を狭めるのは。あるいは貴族の中にだって、君にとってそれこそ生涯の友だと呼べるような人物がいるかもしれないんだ」

入学する前にリインは貴族生徒と、それもよりにもよって四大名門であるログナー侯爵家の令嬢が親友と呼べる存在になるなどとは微塵も思っていなかった。

そういう意味でもアンゼリカにはある意味感謝しても感謝しきれないだろう。最初に出会ったのが四大名門という貴族の中の貴族でありながら、全く以つて貴族らしくない彼女だったからこそリインは多少なりとも貴族に対して柔軟になれた。

これが最初に出会った相手がリッテンハイム辺りだった場合には、それこそ目の前のマキアスと同じく、やはり貴族などろくでもない連中なのだと、そう断じていたかもしれないのだから。

「リイン君の言うとおりだよ、マキアス君。マキアス君がどういう過去を抱えているかは私にはわからない、でもね貴族だからって理由だけで皆悪い人だなんて想って欲しくないんだ。だって私もリイン君も大切な親友の子が貴族だから」

トワの脳裏に浮かぶのはいつも飄々としていて事ある毎に授業を抜け出したりするとしても困った、だけど優しくして気高さを持った大切な親友の姿。

怒りはしない、目の前の貴族に対して怒りを抱いている少年がどのような理由でそうなったかを自分は知らないからだ。

「ただど全ての貴族が悪である、などと想ってほしくないとそうトワは願うのだ。」

「.....」

志を同じくしていると信じている尊敬する先輩と、同じ平民の先輩。その両名からどこまで優しく諭されてマキアスは押し黙る。彼

とて決して聞かん坊というわけではない、喚き散した自分と優しく諭してくる目の前の二人、そのどちらに理があるのかはわかっているのだ。

わかっているがそれでも理解と納得は別物である。貴族と聞くとどうしても彼には脳裏に過ぎるのだ、敬愛していた大好きな姉さんを自殺する程の絶望に追いやった貴族の男を。

姉の遺体を前に「妾として大事にすると言った」等と恥知らずにも叫んだ男の姿を。言葉だけで、それらを消すことはマキアス・レーグニッツは出来なかった。

そうしてマキアスが押し黙ったことでその場を沈黙が包むと

「はーい、まあそんな風に納得してもらったところで。時間も押しているし、後は若者同士で交流を深めてもらうという事で♥」

そうにこやかな笑顔を浮かべながらサラ・バレスティンがレバーを引く。するとリイン達の立っていた床が大きく開いて……

「またこれですか！サラ教官!!!」

どうして昨年と同じくこういうやり方をするのだと恨みの籠った雄叫びをあげながら、リインは近くに立っていたトワと共に地下へと落ちていくのであった……

おまけ

「クシユン」

「なんだゼリカ、風邪か？」

「いや、これはおそらく私のトワが今頃私の事を噂しているね。きつと「アンちゃんは私にとつてとても大事で素敵な一番の親友何だ」みたいな事を後輩たちに言ってくれてくれるに違いない！」

「……………季節の変わり目だからな。体調を崩したんだろう」

「僕、ベアトリクス教官に言っただけをもらってくるよ」

「ああ、そうしてくれやジョルジュ」

「おーい、二人ともーなんだいその可哀想な人を見る目は。賭けたって良いんだぞー」

「ほうそりやありがてえ、明日の昼飯を奢ってくれるなんて流石は口グナー様は気前がよろしいことで」

「アン、ありがとう。ありがたくご馳走になるよ」

「ぐぬぬぬ、見ていたまえ！絶対にとっは今頃そんなような事を言っているに違いないんだからな！ほえ面をかく事になるのは君たちだぞ!!!」

※言っていました

鉄血の子と特別オリエンテーリング②

「あいたたたた……ガイウス、大丈夫?」

エリオット・クレイグは床に打ち付けてしまった臀部をさすりながら、入学式で席が隣同士となり知り合った留学生ガイウス・ウォーゼルへと語りかける。

「ああ、少し驚いたがどうやら床はクッションになっていたようだからな。しかし、これが帝国流の歓迎という奴なのか?」

「その発言は帝国の名誉のために否定させてもらおう」

悠然とした様子でどこかずれたことを呟くガイウスに、金髪の青年ユーシスが不本意だとばかりに否定する。

「全員、無事か」

スタツという音とともに若干遅れてリインが降り立つ。

「大丈夫か、じゃないですよ。もう一体なんだってこんな事を……つて」

「……………」

そうして降り立ったリインの方を皆見て、固まる。

「悪いが、こんなやり方をするのは俺達も聞かされていなかった。文句ならば教官に言ってくれ」

無然とした様子でリインが言うが、違うそうじゃない。自分達が聞きたいのはそっちもだがそれ以上にとても言いた気に一同はリインの方を見つめる

「あ、あのく先輩方って本当にお付き合いされているわけじゃないんですよね……?」

おずおずとした様子でエマ・ミルステインがそう問いかけるが

「ああ、何故か良く勘違いされるんだが、そういった事実は現状ない」「いやだって勘違いも何も……」

全く以ってわけがわからなくても言いた気に答えるリインに、アリスはむしろ貴方が何故そう思われなと思うているのかがこっちはわからないと言った様子を見せると

「リ、リイン君……そ、そろそろ降ろしてくれないかなあ……」

恥ずかしげにリインに抱きかかえられた状態のトワ・ハーシエルがおずおずと口を開く。

今の彼女は横たわった状態でリインに両腕で抱きかかえられている、俗に言うお姫様抱っこをされている形であった。

「ああ、すまない。危ないと思ったらつい、ね」

「う、うん……ありがとう。でも私も自分の身位は自分で護れるからそこまで心配しなくても大丈夫だったのに」

優しく降ろされてトワはリインにそんな事を言うがリインは困った笑みを浮かべて

「別に君の力量を疑っているわけじゃないんだ。ただつい、危ないと思ったら体がとつさに動いてしまっただけ」

自分でも半ばは無意識での行動だったんだと伝え、そんなリインの言葉にトワは照れたように顔を紅くするのであった。

「ねえ、聞いていても僕は無意識でもとつさに君を庇ってしまう位君の事が大事なんだ、って惚気られているようにしか思えないんだけど」

アリサはそんなリインの発言にしかめつつらを浮かべながら傍らに居たエマへとヒソヒソと話しかけて

「あ、あははは……多分本人は意識していないんじゃないでしょうか……」

エマは困ったように笑いながらそれに応じて

「ふむ、あの身のこなし、それに身に着けている双剣……かなりの使い手のようだ……」

ラウラはどこかずれた様子でとつさの動きからリインの力量を見抜き

「ふわあ……」

フィーはどこ吹く風とばかりに欠伸をかみ殺して

「ふむ、なるほど。確かに大事な友の危機ともなれば自然な行動だ」

ガイウスはどこか天然さを感じさせる様子で納得の色を見せて

「う、うーん友達っただけでああいいう行動には出ないと思うんだけど……」

エリオットは昨年冬、わざわざ家へとリインが連れてきたことを思い出しながら苦笑いを浮かべて

「昨年の学園祭の時も一緒にライブを行っていたがやはり、そういう関係なのだろうか……」

マキアスは学園祭の時の様子を思い出しながら困惑した様子を見せて

「どうでも良いが、早くこのくだらん茶番を終わらせて欲しいものだ」

ユーシスは何やらまとめ役にも関わらず惚気出した二人を冷めた目で見るのであった。

「全員、装備は整えたな。それではこれより二班に別れて旧校舎の探索、及び攻略を行なう。男子の方は俺が、女子の方はトワがそれぞれリーダーを務める。何か質問は？」

装備を整え、簡易的な自己紹介を終え（ユーシスが自らの姓を明かした際にマキアスと険悪な空気となったがリインとトワが間に入り一応事なきを得た）、リインは一同の前でそう告げていた。

「あ、あのリイン先輩……男子と女子で分けるというのは、少々不味いのでは……？」

「実力の意味で言えばまず問題ない。何故ならばアルゼイドとクラウゼルの両名はおそらく、この場においては俺の次に強いからだ。多分、君よりも力量で言えば上だぞマキアス」

リインから告げられた言葉に一行の視線がフィー・クラウゼルへと集中する。ラウラの方は違和感無く受け入れられた、帝国において少しでも武に携った事のある人間ならばヴァンダールとアルゼイドの名を聞いた事がないというのはまずいないし、明らかに常人が扱うことは出来ないような大剣を携える彼女がただ者ではないというのは、一目でわかる。

しかし、パツと見小柄でこの場においては下から数えた方が早いよ

うに思えるファイーがそのラウラに準ずる実力者だという発言に一度は驚きの色を隠せない。

「……ひよつとしてこれ、今から皆で行動しないと駄目なパターン？」
そんな風に自らに集中した視線も意に介さずファイーはきよとんとした様子で告げる

「うん、サラ教官も目を光らせてくれてはいるだろうけど単独行動は危険だから」

「此処の魔獣程度には遅れは取らないよ」

「そんなに強いんだつたら是非とも皆を護ってあげて欲しいなあ。
ファイーちゃんみたいにみんながみんな、荒事慣れしているってわけではないだろうし。かくいう私もリイン君に比べると全然だから」

優しい笑顔を浮かべながら告げてくるトワの言葉にファイーはため息をついて

「めんどくさいなあ」

しぶしぶと言った様子ではあったがとりあえず同行する事を了承するのであった。

「それにしてもさらつと今、自分がこの場で一番強いって言ったわね、この先輩」

「事実だからな。これでも2年生では最強と自負している身だ。同輩達の名誉のためにも後輩に遅れは取らんよ」

ジト目で自身を見つめてくるアリサへとリインは確かな自負を窺わせながら答える。傲慢になつては問題だが、過度の謙遜も逆に嫌味というもの。強者が過度に自分を貶めてはそれこそ、負けた者達に失礼というものだろう。あいつに負けたのならばしょうがないと、敗者がそう思えるようにあり続けることこそが勝者の義務というものだ。ここでリインが自身の力量を後輩たち以下だと言ってしまうえば、それすなわち自分に負けたフリーデルやクロウと言った友人達も後輩以下だと言ってしまったも同然なのだから。

そうしてリインは静かな闘気を滾らせて先ほどからこちらを見ているアルゼイド流の後継者を見据えて

「もちろん、異論があるのならば正々堂々と何時でも受けて立つ。俺としても、ともに切磋琢磨し合って刺激し合える関係は望むところだからな」

クロスベル留学から帰ってきたリインは様々な事に挑戦してみた。好きになれたものもあれば、やはり自分には合わないと思つたものもあった。だがそれでもそれを実際に経験してみてもよかつたとリインは思っている、色々と刺激を受ける事が出来た。そうしてその上でリインは思つたのだ、やはり結局のところ自分は政治や経済、軍事について学ぶ事と剣術が好きなのだ。

無理をしていたわけでは決してない、自分にとっては剣の道も学問の道もどれも楽しかつたからこそやってきたことなのだ。リインは改めて気づいたので。だからこそ、自分の修めているヴァンダールと双璧を成すアルゼイド流、その後継者とめぐり合えたというのはリインにとっても僥倖であつた。

「有り難い。それではこのオリエンテーリングが終わつた後、是非とも胸をお借りしたいのだがよろしいかな、オズボーン先輩」

そうして不敵な笑みを浮かべたリインの様子にラウラもまた喜びの様子を見せる。ああ、故郷を出てトールズに来て良かった、故郷での日々も充実していたがそれでも年の近い他の門下生は師の愛娘という事で自分に対する遠慮がどこかに感じられた。此処まで気持ちの良い清廉な闘気、それを自分に向けてきてくれる同年代の相手はついぞ見つからなかつたとラウラは空の女神にこのめぐり合わせに感謝を捧げる。

「ああ、勿論だ。名高きアルゼイド流の後継者と手合わせできるというのならばそれは俺にとっても望むところだからな」

そうして高笑いでもしそうなレベルで嬉しそうな笑みを浮かべながら闘気をぶつけ合う二人に他の面々は引きつった顔を浮かべるのであつた。

「と、とにかくそういうわけで女子の方の心配は要らないから平気だよー！」

放って置くとヒートアップしてこの場で果し合いを始めてしま
いそうな二人に水を差すべく、トワは務めて明るい声でそう告げる

「し、しかしですね……」

それでもマキアスは何か言いた気な様子を見せるが……

「ふん、はつきりと言ったらどうだ。別段心配しているわけではなく、
単に貴族と一緒にの班など御免なんだとな」

不機嫌そうな様子でユーススがそうマキアスの言葉を遮るかのよ
うに告げていた。

「俺としてもやたらと吠え立てる躰のなっていない狂犬に絡まれなが
ら進むのは御免だ。何時後ろから撃たれるかわかったものじゃない」
「なんだと！先輩達の顔を立てて、下手に出ていれば良い気になつて
！」

「何時貴様が下手に出たという、笑わせるな」

そうして険悪な様子でにらみ合い出した二人にトワは困ったよう
にリインを見つめるが、リインもお手上げだと言わんばかりに肩を竦
める。

何というか、この二人致命的なまでに相性が悪い。どちらに非があ
るかと言えば元を正せば貴族相手に敵意をむき出しにしたマキアス
の方なのだが、ユーススはユーススで一見すると如何にもな傲慢な貴
族の御曹司に見えるためにあまりにマキアスのような革新派寄りの
平民にとっては癪に障るのだ。トールズで一年間過ごして視野が広
がったためにリインもこうして冷静に眺めていられるが、もしも自分
の入学が一年遅れていればおそらくリイン自身もマキアスと同調し
てユーススを敵視していただろう。

そうしてリインは二人の喧嘩を眺めながらため息をつく、トワの
方を向いて

「トワ、こっちはこっちの方でなんとかするからとりあえず、もうそち
らはそちらで先に行行っててくれ」

「え、でも」

「良いから良いから、何時までもこの場に全員留まっ
ていてもしょうがないだろ」

「う、うん……えっと、それじゃあ今から特科Ⅶ組B班は旧校舎地下の
攻略を開始します！」

そのトワの号令と共に女性陣がその場を去っていく。

そうして去っていく女子達を見送った後、リインはさて目の前で言
い争っているこの二人をどうやって仲裁したものかと深いため息を
つくのであった。

鉄血の子と特別オリエンテーリング③

(ふむ、どうやら態度に裏打ちされただけの實力はあるようだな)

あの後宥めるやり方では何時までたつても収まらないと判断したリインは多少強引だが班長としての強権を発動。A班の方も遅れながらではあるが出発したわけだが、当然ながらマキアスとユーシスは「ふん」と互いに言い合いそっぽを向き合い、極力互いに顔を合さないように努めながら進むという大変に心温まる光景を披露してくれていた。

そうして余り自分が前に出張りすぎではオリエンテーリングの意味が無いと判断して魔獣との戦闘は基本4人へとリインは任せたわけなのだが、ユーシス・アルバレアの實力はかなりの腕と言ってよかった。その剣筋からは彼が地道に積み重ねた確かな研鑽の跡が見て取れ、マキアスが言うところのその尊大な態度も、少なくとも自分がアルバレア家の人間だからという家格や血筋のみを依りどころにしたものではないとリインは判断した。

「ふむ、見事な腕前だな。帝国は剣術が盛んだとは聞いていたが、一体どのような流派なのだ？」

「俺が扱っているのは宮廷剣術だ。帝国貴族に生まれた男子は主にコレを習う。帝国は武を重んじる国だ。故に貴族は上に立つものとして率先して民に範を示すべし、とまあそんな具合にな」

「なるほど、ノルドにおける族長こそが部族で一番勇敢なる戦士であるべしという教えと同じようなものかな？」

「まあ似たようなものだろう、生まれつき上に立つ事が約束されたものはそれ相応の責務を同時に示すべしというわけだ。こういった考えはこの国や民族でもそう変わるわけではないだろう。別段貴族だからと言って遊び呆けて過ごせるわけではない」

最後の言葉はそれまでの和やかなものとは打って変わった冷やかさで、後ろにいるとある人物に向けながらユーシスは言い放つ。

意外と言うべきか、ユーシス・アルバレアとガイウス・ウォーゼル、

現在前衛をともに勤めているこの二人は中々に打ち解けているようであった。片や帝国有数の大貴族四大名門アルバレア公爵家の次男、片やノルドの族長の長男、一見すると全く接点がなく話が合わないかにも思えた二人であったが、あるいはそれが功を奏したのか中々に馬が合っているかのようだ。

本人の生来の気質か帝国について詳細には知らないためか、あるいはその両方か、アルバレアの名にエリオットののように萎縮する事も、マキアスのように噛み付く事もなく、どこまでも泰然自若とした様子でガイウスはユーススへと接していた。ユーススの方はユーススの方で気位が高いのは間違いないだろう、だがそれでもガイウスが遊牧民だからという理由で嘲ったりするような様子を見せる事もなく、ガイウスに対してあくまで対等の学友として接しているようであった。「ぐぬっ」

「まあまあ抑えて抑えて、実際言うだけの實力はあるわけだし」
「しかしだなあ」

そしてそんなユーススの挑発の言葉に苛立ちを見せたマキアスをエリオットが必死に宥める。

後衛は後衛で同じ帝都の平民出身という事でそれなりに仲良くやっているようであった。

（エリオットはアレで図太いというかしたたかなところがあるからなあ）

その柔らかな外見からともすると気弱なような印象を受けるエリオットであったが、アレでどうしてしたたかな奴だということを知っているのは長い付き合いから良く知っていた。養父オーラフ、義姉フィオナからの熱烈なスキンシップを受ける際に義兄弟たる自分を生贄に捧げて、ちゃっかりと自分は避難しているような事が度々エリオットにはあった。今は流石にアルバレアという名に気後れしているようだが、ユースス自身が対等の学友として接することを求めている辺り数ヶ月もすれば普通に「ユースス」と気軽に名前前で呼んでいるところがリインにはありありと想像できるのだ。

（女子の方は特に陰悪な様子もなかったし、こうなるとやはり問題は

この二人か)

最後尾を歩きながらリインはマキアスとユーシスの二人を見る。ガイウスとエリオットが仲立ちする形となつてゐるため時折嫌味を言い合う程度で済んでゐるがそうじゃなければそれこそ取っ組み合の喧嘩でも始めそうな様子で火花を散らしてゐる。

(いや、それともいつその事取っ組み合の喧嘩をさせたほうが良いのかもしれないこの二人は)

いがみ合う二人を見てリインの頭に浮かぶのは第一印象こそ最悪だったものの、今では自分に取つて掛け替えのない、大切友人の中で優劣などつけられるものではないが、一番の親友にして悪友たる一人の男の姿。そしてそんな親友と出会つた初っ端に今でも学院で語り草のド派手な喧嘩を繰り広げた事である。

(あの時思いつきり互いの胸の内をぶつけ合ったからこそその後意気投合できたわけだしな、俺達も)

そういう意味ではあるいは止めに入らずに一度徹底的にやらせたほうが良いのかもしれない、そんな考えがリインの頭を過るが……

(だが、流石に時期と場所が悪いな)

生憎と今は特別オリエンテーリングの真つ最中、大したことはないとはいえ魔獣も徘徊しているこの場所でやらせるわけにはいかないだろう。自分とクロウの時のように両者互いにKOするまでやらせたら自分とガイウスがそれぞれ二人を背負つて運ばないといけなくなるだろう。だがいずれは徹底的にやり合わせた方がいい、などと思ひながらリインは後輩たちを見守りながら進むのであつた。

「ここらで一旦小休止を入れるとしよう」

ちようど道を半ばまで来た段階でリインはそんな提案をしていた

「自分は別段休息を取る必要性はないが……」

「僕も必要ありません！蝶よ花よと育てられた貴族とは違い鍛えていきますから！」

「……なるほど、さすがは班長。よく見ている。気づかなかつたな」

対抗意識を燃やして睨み合う二人に対してガイウスはリインの言

葉を受けて気遣いの視線を後衛にいる赤毛の少年に向けて

「良かったくそうしてもらえると助かるよ」

他の3人と違い、疲労した様子を見せていたエリオットはリインのその提案に安堵の声を挙げる。

エリオット・クレイグは決して外見で受けるほどひ弱な男というわけではない。どのような分野であろうと身体が資本なのは変わらないうい、将来音楽家を目指していた彼はそれなりの体力づくりにならり組んでいた。新入生の中で見れば平均に位置する程度の体力はあるだろう。

だがノルドの高原で風とともに生きてきたガイウス・ウォーゼルは言うまでもなく、貴族としての英才教育を受け研鑽を怠らなかつたユーシスにしてもかなりの身体能力を有していた。マキアスの場合はこの二人ほどではないが、それでもユーシスへの対抗意識からだろうユーシスが大丈夫と言っている以上意地でも自分から休息を求めようような事はしないだろう。

故に疲労の色を見せているエリオットを理由にしたほうが角が立つまいとリインはそう提案をした。ガイウスはリインに感心したように、ユーシスは学友への気遣いを自分が怠っていたことに気づいてどこかバツが悪そうにして、マキアスもどこか安堵の様子を見せながらユーシスと同様の反応を見せるのであった。

「ごめんねみんな足を引っ張っちゃって。リインも気遣ってくれてありがとう」

「気にするな。入学したてで今までこういういった荒事に関わった事なかったんだ。慣れない魔獣との戦闘で疲弊するのは仕方がない事だ。これからおいおい体力づくりも含めて、慣れていけば良い。どうせ士官学院生、それもあのサラ教官の教え子になった以上これからもこういった無茶振りはいしょっちゅうある。嫌でも慣れるさ」

彼にしては珍しいどこか意地の悪そうな笑みを浮かべながらリインは告げる

「ううう、いきなりこんな事やるような人だもんね……不安になってきたなあ」

「ま、何かあったらいくらでも頼ってくれば良いさ。先輩として相談には乗るからな。それにサラ教官も普段はどうしようもなくだし無いだめな人だが、それでもその実力は本物だし何だかんだで根っこはしっかりした人だ。いざという時には頼ると良い」

「ふむ、随分と親しそうだが二人は古くからの知り合いなのか？」

ただの先輩と後輩という関係を超え、明らかに気心の知れた関係を見せつける二人にガイウスはそう疑問を呈していた。

「えっとそれは……」

「ああ、エリオットの家に俺は5歳頃から世話になっていてな。互いに兄弟のように育った関係だよ」

言っつていいものかと口籠った様子のエリオットに対して特に気にした様子もなくリインはあつけらかんと伝える。

「なるほど、クレイグという名、どこかで聞いた事のある名だとは思っていたがあの赤毛のクレイグだったか」

赤毛のクレイグ。それは鉄血宰相ギリアス・オズボーンの軍時代からの腹心とされる帝国正規軍きつての名将である。その果敢かつ迅速な用兵術による果敢な攻勢は帝国軍の中でも随一の破壊力とされる猛将で、帝国において最重要拠点たるガレリア要塞に駐屯する第四機甲師団を預かっている事からもその実力は折り紙付きである。

そして鉄血宰相が宰相位に就く際に我が子を託す程に信頼を受けていることでも有名であった。

「かの鉄血宰相閣下のご子息に帝都知事閣下のご子息、そしてクレイグ中将閣下のご子息とこうして轡を並べさせていただけるとは中々に光栄な事だ。貴族風情がお歴々の名を穢してしまわないかと不安になる」

「何が言いたい！」

「別に何も。ただ革新派はとかく貴族同士の繋がりや親の特権が子に引き継がれることに批判的だが、やっている事はそれこそ貴族とそう変わらないのではないかとそう思っただけだ」

革新派の重鎮、その子息が揃い踏みとでも言えるような状況をユーシスは揶揄するように口にする。まさかコレほどの面子が一箇所に集められている事、それはどう考えても偶然ではないだろうと。貴族の特権や横の繋がり革新派は非難するが、その実自分たちの方でも息子たちに似たような事をやっているではないかと。学院長を務めるヴァンダイク名誉元帥は軍時代のギリアス・オズボーンの上官であった。軍時代の腹心からの頼みを聞いたとしても不思議ではないだろう、実際にはギリアスとヴァンダイクはギリアスが宰相位についてから疎遠となつているのだがユーシスにそれを知る由もない。

故に特科VII組とはすなわち鉄血宰相ギリアス・オズボーンが自分の実子の栄達のために各種有力者とのコネクションを紡ぐために手を回して設立したクラスではないのかと、ユーシスはそんな風に考えたのであった。

「なるほど、ユーシスからは俺の父が親馬鹿を拗らせて手を回して俺のために特科VII組を作ってくれたとそんな風に思ったわけか」

怒りながら今にも掴みかかりそうな勢いのマキアスを手で制してリインは肩を竦めながらユーシスからの言葉を受け止める。

「違うのかな。そのレーグニッツ殿はとかく貴族がお嫌いのようだが、親の威光という点で言えば貴方も当然受ける事になるだろう。かの鉄血宰相の実子であるという事実、それを意識せずにいられる人物などどう考えても圧倒的な少数派だ。貴方が望むにしろ望まないにしろ有形無形の配慮が当然働くはずだ」

自分がアルバレアの名から逃れられないように、とそんな言葉が最後に付け加えられたように聞こえた気がしたのはリインの気の所為だっただろうか。

「故に特科VII組もそんな我が父、ギリアス・オズボーン宰相の威光が働いた結果成立したものではないかと……なるほど」

言われてみれば確かにそういう風にも見えるのかとリインは納得の色を見せつつユーシスの誤解を解くべく言葉を告げる。

「中々に筋の通った推理だが、残念ながら外れだ。マキアスにも言ったが特科VII組を作り上げたのは理事長を務めるオリヴァルト皇子だ。

革新派と貴族派の対立で割れる今の帝国にこそ、ドライケルス大帝の貴族、平民の別なくとも肩を並べ手を取り合う事のできる帝国に新たな風を齎す事のできるトールズの理念を体現する人物、そんな者を育成するためのな」

学院長より伝えられた特科Ⅶ組、その設立の目的をリインはユーシスへと伝える。本当に一年早く入学してよかったものだどリインはひとりごちる。これで自分もユーシスやマキアスと一緒に入学していた日にはそれこそガイウスとエリオットの二人の気の休まる暇のないこととなっていたであろう。

「そしてトールズ士官学院の理事には君の兄君であるルーファス・アルバレア殿もいらつしやるし、学院長も革新派と貴族派の争いに対しては中立的だ。故に、我が父ギリアス・オズボーンの意図がこのクラスの成立に働いているという事はないよ」

そう告げた後にリインは肩を竦めて

「最も君の言うとおり、俺に対してそういった「鉄血宰相の息子だから」という理由での配慮が働かないと言ったらそれは嘘になるだろうがね」

鉄血宰相の実子であるという事実によって受けるはた迷惑な配慮、それをリインはクロスベルに行つて嫌というほど味わった。こちらが望むと望まないに関わらずそれは今後もしインの人生に大きく関わってくるだろう。それは十に働く面もあれば、一に働く面も当然ある。

「だがそれがどうした。俺は俺だ」

そんな事はもはや承知の上だ、自分がギリアス・オズボーンの実の息子というのは紛れもない事実なのだから。悪意も好意も憎悪も媚びも、それらを余さず受け止め飲み干して、時にそれらに惑う事があつても、その上で自分は進んでいこう。

少なくともそんな色眼鏡など一切かけずに自分をただのリインとして見てくれる掛け替えのない親友が四人、すでに自分は居るのだから。臆する必要は全くない。

「少なくとも、このトールズにおいては鉄血宰相の息子である俺も、そ

してアルバレア公爵の息子である君も、あるいは皇太子殿下だろうと皆平等だ。君の言うように、社会に出れば俺にしても君にしてもそういった目線がどうしても働く事になるだろう」

人は生まれから完全に自由になることなど出来ない。あるいは全て放り出すという生き方もあるのかもしれないが、自分にしても目の前のユースにしてもそういう生き方を出来るタイプではない。

「だからこそ、今のうちだと思うぞ。そういうのに囚われない生涯の友、それを作れるのはな」

自分にとってのトワ、アンゼリカ、クロウ、ジョルジュといった掛け替えのない友人達。例えばこれから先何があろうとも、どれだけ互いの立場が別れる事となったとしても不滅だと信じられる友情を抱ける無類の友。

特科VII組とはユースにとってもそんな存在を作れる事のできる絶好の機会なのだ。リインは笑顔を浮かべながら後輩たちに告げるのであった。

鉄血の子と特別オリエンテーリング④

「いや、やっぱり最後は友情とチームワークの勝利よね。うんうん。お姉さん感動しちゃったわ」

拍手とともに階段を降りながら、Ⅶ組を地下へと叩き落とした張本人は告げる。あの後も探索を続行したA班は程なく終点にてガーゴイルと交戦していたB班と合流、最後はARCSの本領発揮とも言わべき、全員の連携によつて見事勝利を収めたわけだが、Ⅶ組の生徒たちはジトツとした様子で教官たるサラ・バレストインを見つめる。(しかし、このガーゴイルも昨年 continué 苦勞な事だな)

昨年度の失敗、残心を忘れて危うくトワがやられかけていた覚えからリインは念のためとばかりにガーゴイルの方に注意を払うが、昨年の時ような心配はないと判断して、ふとそんな感慨を抱いていた。

まだ特科Ⅶ組が今後も続いていくのか、この学年だけの試みで終わるのかはわからないがもしも今後も続いていくとなるとあるいはこのガーゴイルを倒す事が毎年の伝統行事になるのだろうか。トールズ士官学院特科Ⅶ組入学式の伝統行事、旧校舎探索とガーゴイル退治。毎年最後は新入生の団結を確かめるための道具に使われるガーゴイル、そう思うとなんとか思わずこの意志なき怪物に憐憫を抱いてしまいそうである。

(まあ、まだ続いていくと決まったわけじゃないか)

来年どころか今年成立するのかどうか、それは今から決まるのだから

「さてそれじゃあ文句を受け付けて挙げるわ、先輩二人からも言われたと思うけどあなた達8名はARCSのテスターとして、そして同時に理事長であるオリヴァルト皇子殿下からトールズの理念を体現してくれる事を願われて特科Ⅶ組へと選ばれた」

そこでサラは改めて意志を問うようにそれまでのどこか緩んだ雰囲気ではなく教官としての威厳を感じさせるしつかりとした眼差しを生徒たちに向けて

「だけど、意志のない者に務まるものではない。A R C U S のテストとして今回のような荒事だつてやつてもらふことになるし、その二人の先輩と一緒にある特別活動も通常のカリキュラムに加わるのでかなりハードな事になるわ。だから辞退したいというのなら今のうちに受け付けてあげるわ、軍隊だつたら問答無用で命令に絶対服従だろうけど、この学院の生徒は正式な軍属じゃないし、私もそういうノリはあんまり好きじゃないからね」

張り詰めた空気を緩めてひらひらと手を振りながらサラはいつもの様子でさらりと告げる。

（此処で仮に辞退者が半数を超えた場合は特科Ⅶ組は白紙に戻す、という事だつたな）

通常の士官学校であれば此処で辞退の選択肢など与えられないだろう。用意されたA R C U S にしても、特別実習にしてもすでにそのつもりで各所は動いていて多額の予算が動いているのだ。有無を言わず選抜されたので従えと、それで終わりだ。だがツールズ士官学院は生徒の自主的な意志をこそ尊重する。他人に強制されたのではなく自らの意志で選んだからこそ、自覚が生まれるというわけだ。

リインにしてもトワにしても特科Ⅶ組は是非とも成立して欲しかった。それは目の前の後輩達の成長につながると信じているからという部分が半分、もう半分は自分自身のためであった。クロスベルで二人は知った、自分たちが学んできた事はあくまで知識でしかなかったという事を。二人は勤勉な努力家の秀才で、いずれは間違いない帝国を背負う優秀な若者であることは疑いようがない。

しかし、それでも知識で得られることには限界がある、そう二人はクロスベルへの留学で実感した。自分たちの知ったつもりとなつていた事は文字通り知つたつもりだった事でしかないのだと、学ぶのが断じて無意味というわけではないが、それでも現地に行つてこそ得られるものがあるのだとそう実感したのだ。だからこそ、帝国の各地をめぐる事のできる特別実習は帝都育ちの二人にとつても渡りに船であつたのだ。

故に学院長や理事の面々に要望を出された時も二人は引き受ける

事に一切の迷いはなかった、むしろより成長する事のできる絶好の機会だと大喜びしたのであった。ただでさえ生徒会長と副会長で忙しく、殺人的なスケジュールになるとわかっていながら、である。リン・オズボーンとトワ・ハーシエル、この二人はどうやら母の胎内に怠惰という言葉置き忘れてきたようである。

そんなわけでリンとトワは後輩の為を思う気持ち半分、自分たちのためという気持ち半分で特科Ⅶ組が無事成立する事を祈ったわけなのだが……

「ガイウス・ウオーゼル、参加させてもらおう」

「お、一番乗りは君か。さつきも行っただけかなりハードなカリキュラムになると思うけど良いかしら？君は留学生だし、そういう意味では人一倍苦勞する事になると思うけど」

「問題ない、これも風の導きというものだろう。もとより俺は貴族と平民というこの国の制度に関しては疎い部分がある、そういう意味では貴族と平民に囚われない新たななる風を齎す、というこのクラスの設立には大いに惹かれる部分があった。是非とも参加させてもらいたい」

どこまでも悠然とした様子でガイウスは氣負う事なく告げる。……背丈の大きさと良い、リンとしては正直本当に後輩なのかと疑いたくなる心境であった。リンにしてみると自分が一年掛けてようやく到達した境地に、入学してから到達しているように思えて、なんとというか先輩としては若干立つ瀬がない気分である。

最もガイウスがノルドの生活でその泰然自若とした精神を養ったのに対して、リンはリンでクレアやレクターからの英才教育を受けてガイウスは身につけていない物を入学時に幾つか身につけていたのだが。

「ふふ、私は参加させてもらおう。元より修行中の身。此度のような試練は望むところだ。」

飽くなき向上心を見せながらラウラも続くとエリオット、アリサ、エマ、フィーといった他の面々も相次いで参加を表明していく。そう

して残ったのはずっと激しい火花を散らしていた二人だけとなる。

「そんなに難しく考えなくても、一緒に青春の汗を流していればすぐに仲良くなれると思うんだけど。貴方の尊敬するリイン先輩も、私が赴任する前に大喧嘩したって話の相手とあつという間に大親友になつたし」

その言葉を聞いた瞬間にその場に居た者達の視線がリインへと集中する。ひよつとしてそれが最初の話で拳がっていた貴族の親友とやらかと

「いや、そいつは平民だよ、貴族じゃない。喧嘩の理由についてはまあ……若さゆえの未熟さによるものだけ言っておくでしょう」

「なーに年寄りみたいな事言つてんだか。一年早く入学したつてだけで年齢なんて此処に居る面々と大して変らない癖に」

肩を竦めて告げるリインにサラは呆れたようにツツコミを入れる。

「まあそんなわけで貴方達もすぐにでも仲良くなれるんじゃない？ きつと一年も経てばこんな感じで喧嘩した事も懐かしい思い出みたいな感じになつているわよ♥」

そうおどけながらいうサラへとマキアスは猛然と反発する

「そ、そんな訳ないでしょう!? 帝国には強固な身分制度があり、明らかな搾取の構造がある！ その問題を解決しない限り、帝国に未来はありません！ そうですよね！ リイン先輩!!」

同じ志を抱いているとそう信じている先輩へとマキアスは同意を求め。そんなマキアスの言葉にリインは……

「ああ、そうだな。それに対して異論を唱える気はない。すべての貴族が悪ではないという事は熟知している、中にはアルゼイド子爵のような尊敬に値するその血に流れる責務を果たすような方が居る事もな」

貴族と言つてもふんぞり返つたようなものばかりではない、まさに貴種と呼ぶに相応しい生まれながら背負った責務を果たさんとする真に高貴なる者が居ること、それは確かだ。

「だが、それでもこの国には変革が必要な時期が来ている」

帝国にとつては宿敵たる東の脅威カルバード共和国、君主を戴かな

いこの民主制の勃興。それに伴う平民の権利の拡大による身分制の崩壊。リベール王国もレミアア公国も君主は未だ健在だが、身分制は緩やかに変革されていった。そんななか、エレボニアでは未だ厳格な身分制が存在し、様々な部分で貴族には明確な特権が存在する。平民と貴族の別はないという理念を持つ、このトールズ士官学院でさえも貴族専用のサロンが存在するなどある種の特権が存在している。「だからこそ、俺は我が父ギリアス・オズボーンの推し進める改革を支持しているし、自らもいずれは軍人となり父へと協力するつもりだ」

掛け替えのない親友のように、父の改革により泣いている多くの人がいるのだろう。誰もがギリアス・オズボーンを支持する義務も義理もない、その事を改めて胸に刻み込んでおく。だが、その上でリインはやはり革新派である事を選ぶのだ。父の改革こそがこの国の未来を開いていくと、リインは信じている。

ならば自分はそんな父の力となろう、その上で少しでも己の親友のように父の突き進む鋼の進撃、その過程ですり潰されて泣く人間を減らせるように尽力すること、それが今のリインの目標であった。

故に同じ革新派たるマキアスの言う、この国に改革が必要なのだという意見、それに対する異論はリインは持ち合わせていない。

「だけど、そういった制度的な問題と個人として友人になれるかというのは全く別の話じゃないか？」

だがそれとこれとは別問題だとリインはそう思うのだ。なぜならば彼はクロスベルで出会ったのだから、立場で言えばいずれは敵となるかもしれない、されど人間的には尊敬に値する特務支援課の面々と。彼にはアンゼリカを始めとする貴族の友人達も居るのだから。世の中には尊敬に値する敵も居れば、殴りたくなるような味方も居るのだという事を。

リインは一年間の間で良く良く理解した。故に立場が違うのだから仲良くなれるはずがないと言うマキアスに対して言うのだ、それとこれとは別の話だと。

「むしろ、そう思っているならなおの事君は貴族の友人を作るべきだと、そう思うけど俺は」

「な、何故ですか!？」

「決まっている。敵の中に信頼できる相手が居れば、交渉がやりやすくなるだろ。それとも一切合切敵対する者は滅ぼし尽くすつもりか君は?」

交渉や取引というのは相手との信頼関係があつてこそ成立する。勝ち目のないと悟った時に降伏する事ができるのも、相手が条約やそうした取り決めを守るといふ信頼が有ればこそだ。そういった信頼がなければ互いに死ぬまで、滅びるまでやりあうしなくなる。だからこそそういった何処かで戦いを辞める妥協点を探り合う時には敵の中でも信頼できる相手が居る事が肝要となる。

特にマキアスの目指す政治の世界とはそういった調停力とバランス感覚こそが重要となってくる。リインの父たるギリアス・オズボーンが辣腕を奮い、ともすると強引にでも改革を推し進められているのもそういった調停の役割を革新派のNO2たる、マキアスの父カール・レーグニッツが引き受けていればこそなのだ。

「君が目指している行政組織にも領地を持たない法衣貴族は多数いるし、アルゼイド子爵のように領民から尊敬を集めている貴族もいる。それらすべてをいきなり無くすなんて事になったら、それこそ帝国は大混乱だ。より良き国にするための改革なのにそんな事になったら本末転倒だろう?」

「それは、まあ……」

リインの言葉に理があると認めてマキアスは頷く。此処までマキアスが素直に聞いてくれていたのもリインがやはり同じ志を持つ革新派だからこそだろう。敵からの意見は受け入れがたくとも、味方からの説得ならば人間それなりに耳を貸すものなのだ。

「だからこそ、俺は君は貴族の友人を作つてそういう将来の交渉のためのパイプを作つておくべきだとそう言っているのさ。もちろん、そんな小賢しい打算抜きに色々君の視野を広げてくれると思つているからこそ言っているわけだがな。悪いな、たった一年早く入学しただけのやつにこんな先輩風吹かされてもうつとおしいだろう?」

どうにも今日は自分はやたらとえらそうな事を言っているな、未だ

自分はただの一士官学院生にすぎない癖にずいぶんと自分は偉くなつたものだそんな風にリインは自嘲する。

「い、いえそんな事は！リイン先輩の言っている事はいちいちごもつともだと思えますし！」

「はい、じゃあ納得してもらつたという事でマキアスも参加つて事で良いわね」

慌てたように言うマキアスの言葉を聞いてサラ・バレスティンが間髪入れずに言う

「なあ？！」

「あら？リインの言葉がもつともだつて思つたんでしょ？じゃあ参加つて事で良いんじゃないの？それとも口ではもつともだつて言っていたけど内心では「うわつ、なんだこの先輩長々と説教してきつうつとおしいなあ。言っている事はまるで納得出来ないけど、否定するとめんどくさいことになりそうだからとりあえず表向きは合わせとこ」みたいな風に思つていたつて事？」

「なんでそうなるんですか！わかりました……わかりましたよ！マキアス・レーグニツツ、特科VII組に参加させてもらいます!!!」

あらぬ疑いをサラに着せられかけてマキアスはどこかヤケクソ気味に参加の意を表明する、そうして残つた一人ユーシスは思案するように幾ばくか目を閉じて

「ユーシス・アルバレア、特科VII組に参加させてもらおう」

決意をその瞳に宿して参加を表明していた。

「な、一体どういう風の吹き回しだ！」

「別に。こちらのほうがうつとおしい取り巻きなどに纏わりつかれずに済むと思つただけだ」

それに敵の中に信頼できる友人を作れという言葉、それはユーシスが敬愛する兄ルーファスに教えられた言葉でもあった。ユーシスにとつては兄ルーファスはすべての師であつた、剣術も知識も作法も馬の世話も何から何まで兄に教わりユーシスは育つた。だが、いい加減自分も兄離れしないとユーシスは感じていた。そしてそのためのきつかけがこの特科VII組で得られるかもしれない、そんな予感をユー

シスは覚えたのだ。

「ずいぶんと残念そうに見えるが、貴族の中にも友人を作るのではなかったのかな？」

「ふん！リイン先輩が言っていたのは貴族の中でも尊敬出来る相手と友人になれという話だ！誰が君なんかと！」

「そうか、その言葉を聞いて安心した。俺としてもお前のようにうるさい男から友などと呼ばれて纏わりつかれるのはごめん被るからな」

そうして再びマキアスとユーシスは互いに睨み合う。そんな二人を見てトワとリインは苦笑して

「何ていうか、先が思いやられるなこれは」

「で、でもきつとすぐに仲良くなれるよ。ふたりともとっても良い子だもん」

「君は10個欠点があつたとしても一つ美点があればそれを強調するタイプだから君の良い子は当てにならない、と言いたところだけどもまあ確かに何だかんだでこの二人、そのうち仲良くなれそうな気が俺にもするよ」

何故ならば今日この場に居合わせたⅦ組の面々の中で一番言葉を交わし合っているのは今晚み合っているこの二人だから。相棒と呼べるような関係にはならずとも、敵対してもどこか相手に対する敬意を抱く好敵手と、そう呼べるような関係になれる、そんな気がするのだ。

「これで8名——全員参加つてことね。それでは、この場をもって特科クラス《Ⅶ組》の発足を宣言する！この一年、ビシバシしごいてあげるから楽しみにしてなさい——」

「みんな、改めてよろしくね！」

「何かあつたら頼つてくれ、先輩として力になろう」

...

階段の踊り場の更の上。丁度、出口から直ぐの場所に一部終始を見守る人影があつた。

一人はこの学院の最高責任者、エレボニア帝国の生ける伝説、軍神
ヴァンダイク学院長。

「やれやれ、まさかここまで異色の顔ぶれが集まるとはのう。これは
色々と大変かもしれないな」

「フフ、確かに」

もう一人は放蕩皇子などと呼ばれる、この学院の理事長を務める特
科Ⅶ組、その発起人たるオリヴァルト・ライゼ・アルノールであった。

「——ですがこれも女神の巡り合わせというものでしょう」

「ほう……？」

「ひよつとしたら、彼らこそが“光”となるかもしれません。動乱の
足音が聞こえる帝国において対立を乗り越えられる唯一の光に」

彼の息子である少年、ヴァンダイクから聞いた通りに彼は大きく成
長していた。その姿にオリビエは未来の希望を見た。敵だからと互
いに憎悪し殺し合うのではなく、平民と貴族の別なく手を取り合いな
がら未来へと進む、そんな希望を。

「見守らせてもらいましょう、大人として」

「ええ、そして我々も大人として若者に恥じぬような背中を見せねば
なりませんな」

鉄血の子とアルゼイド

「さて、それでは御指南頂けるだろうか、オズボーン先輩」

ラウラ・S・アルゼイドはそう戦意を露わにもう待ちきれないとばかりに剣を構えながらリインを見据える。

「俺は特に構わないがそちらは大丈夫か、ガーゴイルとやり合ったばかりだが」

「それはそちらとて同じこと、ならば条件は同じだろう。私としてはせっかくの機会だ、一刻も早く我がアルゼイド流と双璧をなすヴァンダールの剣を是非とも体感させて頂きたい」

告げられた言葉にリインは不敵な笑みを浮かべて

「サラ教官、そういうわけですので武術教官として立会いをお願いします」

「……あんたも存外手が早いわねえ。私やフリーデルだけじゃ飽き足らず、こんなに早く後輩に手を出すだなんて」

ことこの手の分野となると驚くべき食欲さを見せるリインに呆れた様子をサラは見せる。昨年度も事ある毎に稽古を強請られ付き合わされたものだが、どうにも帝国人で剣術を嗜んでいる生徒というのは強い相手と巡り合うとすぐに剣を交えたがる傾向にある気がする。こいつら剣をコミュニケーションの道具かなにかと勘違いしているのではないかとサラとしては幾度が思ったものだ。

他の面々はいええ巻き込まれないように二人から慌てて距離をとる。エリオットなどは二人の背後に竜と虎が見えるような心境である。

「そんじゃまあ、お互い正々堂々とやってどんな結果になっても遺恨を残さないようにするって事で」

大怪我しようものなら私がどやされるからそうなりそうな時は止めるからねー等という武術教官の承認を確認して

「二人ともー怪我だけには気をつけてね！特にリイン君はまた保健室に行くような事があつたらいい加減ベアトリクス教官から雷が落ちても知らないからね！」

目の前のどこか危なかつしくて放っておけないようなところを感じさせる大切な男の子と後輩相手にトワは心配半分、釘刺しが半分の声を聞きながら

「ヴァンダール流中伝、リイン・オズボーン」

「アルゼイド流中伝、ラウラ・S・アルゼイド」

どちらともなく構えながら名乗りをあげて

「推して参る！」

帝国を代表する二大流派の剣士は激突を開始した。

「はあ!!」

先制したのはラウラの側。打ち込まれるのは小細工不要の全身全霊の力が込められた袈裟斬り。打ち込まれる剣戟は彼女の精神を表すかのようにどこまでも真っ直ぐなものであった。並の使い手であれば為す術もなくやられて終わりのそれを……

「しゅ!!!」

正面から受け止めるのではなく横からいなすように弾く。アルゼイドの剛剣、ヴァンダールの中でも大剣術の使い手である兄弟子のミユラーならば正面から受け止められたのだろうが、どちらかと言えば柔に寄る双剣術の使い手であるリインの場合は正面から受け止めるには流石に些か分が悪い。故にとつた戦術は受け流すように弾くことであった。

「見事、全力で放った一撃だったのだが」

全霊の一撃を防がれたという悔しさと決して口だけではない尊敬する先達、それに巡りあえた喜びにラウラは口元を緩める

「散々カッコつけておいて一発目でやられたら流石にあまりにも無様というものだろう。遠慮は要らん、全力で来い」

「では、お言葉に甘えて」

その言葉と共にラウラはリインへと猛攻を加え始める。対してリインはそれを巧みにしのぎ続ける。

ともするとリインが防戦一方かのように見えるこの状況、そうなったのは両流派の持つ特性に由来する。

アルゼイドの剣とは主の敵を駆逐するための剣。アルゼイド流は

そも《槍の聖女》リアンヌ・サンドロットに任せ、鉄騎隊副長を勤めたアルフレッド・アルゼイドが興した流派である。

鉄騎隊はドライケルス大帝のいわば剣として活躍した精鋭部隊。その役割とは主たるドライケルスの道を切り開く役割が主であった。故にその剣は主の敵を打ち倒すべく攻勢に秀でたもの。必然的に先の先を取ることこそがアルゼイドの真価である。

対するヴァンダール流は主を護るための剣。ドライケルスの傍らで常にドライケルスを護り続けたロラン・ヴァンダールを筆頭に皇族守護職を務めるヴァンダールの一族が興した流派である。故にその剣とは主を護るために守勢に秀でたもの。必然的に後の先を取ることこそがヴァンダールの真価である。

かくして戦闘はラウラの猛攻をリインが巧みにしのぎ続けるという状況になるのであったが……

「……なんかあの先輩、自分が生徒の中では一番強いんですって宣言した割にラウラの攻撃に対して防戦一方じゃない？」

傍から見ればリインが防戦一方なようにしか見えない状況を前にアリサ・Rはジト目で目の前の光景を見つめながらポツリと呟いていた。自分ならばおそらく最初の一撃を防げもせずによられていたであろう辺り、なるほど確かに口だけというわけではないのだろう。だがそれにしても思えば先程のガーゴイル戦でも攻撃を凌ぐばかりで自分からはほとんど攻撃していなかったし、本当にそこまで強いのかというある種の疑念が彼女の中に芽生えていた。

「いや、一見すると防戦一方のようだがその実余裕が無いのは彼女の方だろう。最小限の動きで凌いでいる先輩の方に対してアルゼイドの方は動作が大きく激しい。どちらのほうが消耗が大きいのかは明らかだ」

目の前で繰り広げられる剣戟、その光景から今それを繰り広げている二人の剣士の実力が自分よりも上だという事を感じ取りユース・アルバレアは若干の悔しさをにじませながら拳を握り

「ああ、さながら風のように巧みに彼女の攻撃を受け流しながら反撃の機会を伺っている。まるでノルドの雄大な大地のようなどっしり

とした安定感、それをあの先輩からは感じる」

感心したように手を口元に当てながらガイウス・ウォーゼルはどこか叙情的に目の前の光景を表して

「うん、有利なのはあっちの先輩の方だね。私よりも強いって言う発言もどうやら自信過剰だったってわけじゃないかも。正面からやり合ったら多分3：7で私が不利かな」

ま、そういう相手なら正面からやり合わなければ良いだけだけど等と物騒な事を言いながら先程までの気怠気な様子から一変どこか真剣な表情を覗かせてフィー。クラウゼルは目の前の攻防を見据えていた。

「私もラインくんが押されているなあって思ったんだけどフィーちゃんたちから見るとそう見えるんだね」

この場における上位の実力者三名からの怒涛の反論を受けて恥ずかしがるようにそっぽを向くアリサをフォローするかのようにはそう問いかけていた。実際口にも出していなかったがエリオットやマキアスにしてもアリサと同様に思っていたのでこの辺りは武術の経験が薄いものにはわかりづらい点だろう。

「ん。このまま行けば限界が来たところで向こうの先輩のほうが攻撃に転じて、消耗したラウラじゃそれを防げずに終わりかな。最も外野がわかっている事が戦っている本人達にわかっていないとは思えないけど」

そんなフィーの言葉を証明するかのようにはラウラは一旦距離を取って

「はああああああああああああ」

このままではジリ貧、目前の相手の鉄壁の防御を貫くには生半可な攻撃では不可能。そう感じ取ったラウラは己が使える最大最強の攻撃を叩き込むべく己が剣へと闘気を収束させるが

「ああ、君はそうするしかない」

故にそうしてくるのを待っていたのだと言わんばかりに一瞬でラインはラウラとの距離を詰めて

「!？」

「悪いが奥義は撃たせない、これで終わりだ『クロスエッジ！』」

闘気の収束を行い、無防備となったところへと双剣による十字斬りを叩き込んだ。

・・・

「そこまで！勝負あり、ね」

息を切らせながら膝をつくラウラと悠然と立つリイン、その光景を見ればどちらに勝利の軍配が上がったかは一目瞭然であった。

「く……………」

結局最後まで上を行かれていた、文字通りの完敗。その悔しさにラウラはその凛々しい顔を少し歪ませる。真剣勝負の結果の敗北、別段相手を恨む気持ちなど毛頭持ち合わせていない。されどそれでも負ければ悔しいものなのだ。それに賭ける思いが強ければ強いほどに敗北した時の悔しさは深まる、そしてラウラ・S・アルゼイドの剣の道に賭ける思いはまさしく全霊と言って良いものであった。尊敬する父の下、幼い頃からアルゼイドの剣を習い若干17歳の若さで中伝にまで至った、普通の貴族の子女が行うような時間も剣の道へと費やしてきたその思い、生半可なものであるはずがない。故に敗北の味はどうしようもなく苦い。

「…………いい勝負だった。結果として俺が勝利したものの、そちらの猛攻には内心何度か冷や汗をかかされたよ。あのまま押し切られたとしても何ら不思議ではなかった。機会があればまた……」

そう言いながらリインは目の前の後輩へと手を差し出す。そこにあるのは純粹な賞賛である、彼の言葉に一切のお世辞や虚飾はない。リイン・オズボーンは真実目の前の少女ラウラ・S・アルゼイドへと敬意を払っていた。剣を交えた相手だからこそわかることもある。ラウラの剣、それはどこまでも真つ直ぐなものであった。それは紛れもない目の前の少女の気質が反映されたものであっただろう。その在り方にリインは好感を抱いた、目の前の少女もまた自分にとっては敬意を払うに値する真の貴族なのだと思ふ風だ。

そうして差し出されたリインの右手に対してラウラは…………

「機会があればその時は是非ともよろしくお願いしたい。今回は負け

ましたが次はそうはいきません」

立ち上がってから手を取って握り合いながら、そう告げる。リインがラウラの剣からラウラの人となりを感じたように、ラウラも同様にリインの人となりを感じ取った。どこまでも実直に磨き上げられたその剣はラウラにとつても心よりの敬意を抱けるものであった。

負けた悔しさは当然ながら存在する。だが尊敬に値する先達へと出会えたという喜びはそれを大きく上回るものだからだ。

そうしてアルゼイドの剣士とヴァンダールの剣士は互いに固い握手を交わして爽やかに笑い合う。それは戦う前の不敵なものではなく、どこまでも爽やかで清々しいものであった……

鉄血の子と歓迎会

「えーそれでは、改めて入学おめでとう。無事特科クラスⅦ組に8人全員参加という事でここに簡単ではあるけど歓迎の宴を用意させてもらったわ」

「用意したのは俺達でサラは何もしてないけどなー」

飛ばされた野次にサラはジロリと飛ばした張本人である不良生徒クロウの方を一瞥して

「そこ！茶々を入れない！私は仕事で色々忙しいの!!!」

「忙しきでいったらトワとリンなんかそれこそ目が回る程忙しいはずなんですけど」

「ふふふ、そうだね。どこかの不良教官の分まで生徒会長と副会長として生徒手帳の用意なんてのもやっていたし、この歓迎会だってそもそも二人の企画だったし」

「は ジョルジュとアンゼリカ、二人からの相次ぐツツコミを受けてサラは

「あーあーきーこーえーまーせーん。そういう、あの人は貴方よりも働いてますよ？」なんて言っていたらだーれも休めなくなって職場環境は悪化する一方なんだからね。私は断固としてそんな社会の闇へと立ち向かうわよ!」

相次ぐ教え子たちからのツツコミを受けて威厳をかなぐり捨てた（もともとそんなものがあつたかはやや疑問だが）様子でサラは叫ぶ。サラ・バレストラインとて実際働いていないわけではないのだ、今回のような修羅場に放り込んだ際にも彼女なりに万が一にならないように細心の注意を払っている。だが悲しいかな、普段の態度が理由でどうにも不真面目な不良教官というイメージが生徒の中では先行していた。無論、三人とてそんな事は理解している上であえて言っているのだが。

「コホン、とにかく！余計な茶々が入ったけど改めて、新入生たちの入学祝いと貴方達5人の昨年の慰労をこめて祝いの宴を用意したわ。改めて乾杯!」

そういつてサラは高々とグラスを掲げる。入っているのは帝国産のビール。仕事が終わった以上誰に遠慮する事もなく彼女は思う存分に飲むつもりだ。

「乾杯」

そんなサラの号令に続いて今回の宴の準備を行った二年生5人が微笑を浮かべながら続く。中に入っているのは当然ながらソフトドリンク、学生の身でアルコールなど厳禁である。最もそんなルールなどどこ吹く風と言わんばかりの不良生徒が二人居るのだが、さすがの二人も優等生二人に説教される事が目に見えているので自重している。最も隙きがあれば何時でも教官用に用意されたアルコールを拝借するつもりだろうが。

「か、乾杯」

おずおずとした様子で新生生の8人もそれに続く。士官学院というにはあまりにも砕けすぎている教官と生徒のやり取りに面を食らっているのだろう。特別オリエンティングを終えて寮へと案内された彼らを待っていたのはよくよかな青年と、銀髪のちららそうな青年、そしてライダースーツを来た麗人、そして先程まで自分たちと一緒に居た二人の先輩も含めた5人の先輩によって用意された宴であった。

「悪いな三人とも、それぞれの寮での歓迎会があったらこうにこっちの方を手伝ってもらって」

「うん、ごめんね。クロウ君とジョルジュ君は第二学生寮での、アンちゃんは第一の方でそれぞれの歓迎会があったのに」

手伝いに来てくれた3人の親友、その友情に感謝と申し訳無さを覚えながらリインとトワは謝意を告げる。

毎年トールズにおいて入学式の後には第一学生寮でも第二学生寮でも先輩たちが新生生の歓迎会を開いて後輩達と交流を深めるのが慣わしとなっている。しかし、現在第三学生寮に所属する二年生はリインとトワの二人のみ。生徒会長及び副会長を勤め、入学式でも当然な

がら仕事があり、さらには特別オリエンテーリングの参加も決まっている二人だけではとてもではないがそこまで手が回らない。故にこうして二人と特に仲の良い三人の友人達が手伝いに来てくれたという事であった。

「ま、良いって事よなんたって俺達は『親友』だからな！」

爽やかな笑みを浮かべて、この男にしては珍しく特に文句のつけようのないタイミングで親友というワードを使い、クロウは親指を立ててそうリインの言葉に応じる。

「流石にリイン達二人だけで歓迎会の準備なんて難しいだろうからね。学生寮の皆も、二人には普段から助けられているし快く送り出してくれたよ。最も逆に邪魔にならないかが僕としては心配だったけどね」

せつかくなのだし二人きりで準備させたほうが進展するのではないか、等と何時までたっても友人以上の関係から進まない二人を傍から見ているジョルジュとしては思ったりもしたのだが

「何を言っているんだジョルジュ、お前が邪魔なわけないだろ。お前にはむしろ導力技術関係では何時も頼ってばかりで申し訳ない位だよ」

「うん、それにジョルジュくんが居てくれるとそれだけで場が和むもん！助けられてばかりだよ」

「そういう意味じゃないし、居るだけで場が和む云々言ったらそれこそ僕よりもトワの方だと思うけど……ははは、ありがとう二人とも」

友人二人からの気遣いにジョルジュは笑みを浮かべる。この二人に関してはまだあなるようになるだろうしあまり気を遣わない方が良いのかもしれないなどと思いながら。

「ま、第一学生寮の方では優秀な使用人さんたちがたくさんいるからね。元々人手に關しては心配要らないんだよ。それにまだ学院に慣れていない新入生諸君は私のログナーという名に構えてしまうだろうからね、それならこっちに参加する方が私としても気楽なのさ」

肩を竦めながら告げられたアンゼリカのログナーという言葉にVII組の面々にどよめきが走る。

「ロ、ログナーって……」

「四大名門の一角……ログナー侯爵家！」

ログナーという名にエマが驚きの声を挙げ、マキアスは敵意のこもった声を挙げる

「リインから話だけは聞いていたけど本当にそんな人と友達だったんだ、リイン」

すごいなーと感心したような声を挙げているエリオット自身もクレイグ中将の息子であり、そもそもリイン自身があの鉄血宰相の息子というログナー侯爵家令嬢に負けず劣らずのビッグネームなのだがこういうのはとかく身内になるとその凄さが実感し辛いものなのだろう。

「ふむ、あの様子を見るに先輩方の言ってた大切な貴族の親友というのはあの御仁という事か」

「おそらくはそうなのだろうな、お二人曰く掛け替えのない親友というお話だったが」

そんなガイウスとラウラの悠然とした呟きにアンゼリカはピクリと反応して

「少し聞きたい事があるんだけど、二人がそんなような事を言ったのは何時位のことだったかな？」

「？ふむ、確かアレは旧校舎へと集まって少し経ってからだだったので……ちようど正午位の事だったかと」

そうしてアンゼリカは勝ち誇った笑みをクロウとジュールジュへと向けて

「ハツハツハ、どうだい聞いたかい二人共！私の言った通りだっただろう!!どうやら明日の昼食を奢る事になったのは君たち二人のようだね!!!」

「う、嘘だろ……ありえねえ……」

「アン、君の第六感一体どうなっているの？どう考えてもおかしいよ……」

愕然とした様子で打ちひしがれる二人にアンゼリカは得意気に笑いながら

「アツハツハツハ、これも私とトワの持つ絆と愛の力というやつさ！
ハハハツハツハツハ。喜んでくれトワ！私達の絆の勝利だ！明日の
昼食はこの二人の奢りさ!!」

「え、えっと……よくわからないのに奢ってもらうのは流石に気が引
けるっていうか……特にクロウ君なんて万年金欠だし……」

目の前の光景が理解できずに困惑した様子をトワは見せるが

「ぐ、ちくしょう……負けたぜ。お前達の愛の力に……」

「うん、恐れ入ったよ。トワとアンの愛の力には」

「ふ、二人共何言っているのか私にはわからないよ……というか私
とアンちゃんのはあくまで友情だつてば……」

勝利の笑みを浮かべるアンゼリカと困惑した様子のトワ、そして打
ちひしがれるクロウとジョルジュ、そんな親友四人の様子にリインは
苦笑して

「な、貴族にも色々なやつがいるだろう、マキアス」

軽く肩をポンと叩きながらと啞然とした様子を浮かべている貴族
嫌いの後輩へと語りかける。

「あ、あのリイン先輩あそこにいるのは……」

「正真正銘、帝国北部ノルティア州を統括する四大名門が一角ログ
ナー侯爵家、その一人娘様さ」

どうだ存分に驚け、あそこに居る方をどなたと心得られる、恐れ多
くも四大名門が一角ログナー侯爵家のご息女、アンゼリカ・ログナー
様にあらせられるぞ。見えない？うん、そうだろうな。俺も見えな
い。等とでも言いた気にリインはマキアスへと答える。その表情は
驚くマキアスの様子をからかうようでも、己が親友を誇るようでも
あった。

「そうだろうユーシス？同じ四大名門の人間の君なら、アンゼリカと
顔を会わせたことだつてあるだろう？」

「ええ、まあ……確かにあそこにいらっしやるのは間違いなくログ
ナー候のご息女殿ですね」

なんとも形容し難い複雑な表情を浮かべてユーシスは答える。奔
放な方であると知ってはいた。だがいくらなんでもあそこまで破天

荒ではなかったはずだと。

「何というか変らないというか……色々悪化しているというか……」

「うん？その様子だと君もアンゼリカと面識があるのか、アリサくん？」

まるで旧知の仲のような様子を見せながらため息を付くアリサに對してリインは訝しがる。身なりや所作からいって彼女がかなり裕福な家庭の出身である事は明白であった。だがログナー侯爵家の一人娘とも交流があるほどの家となれば当然限られてくるだろう。そんな家でRなどという頭文字を持つ家名といえば、リインの頭に真っ先に浮かぶのは帝国人であるならば知らぬものは居ない帝国最大の企業で……

「え、えつとそれは……」

「まあ、君も色々とあるのかも知れんが決心が付いたら打ち明けてやると良い。見ての通り鉄血宰相の一人息子である俺とログナー侯爵の一人娘である彼女がこうして親友になれたんだ。きつと君の方も「実家なんて関係ない」といつてくれる親友が見つかるだろうからな」
どうやら訳ありの様子を見せる後輩の少女へ特に頭に浮かんだ推測を問い質すような真似をすることはなくリインは穏やかな笑みを浮かべながら告げる。

「そういうわけでこれから二年間、苦楽を共にする仲間同士存分に親睦を深めあってくれ、この会はそういう目的で開いたんだからな」

そういつてリインはまだほとんど言葉を交わしていないエマとフイーの下へと向かい出す。そんな背中を眺めるアリサ達へと

「立派な先輩だなくって感心しただろ？今はだいたいぶ落ち着いたけど昔のあいつはもつと危なかつた感じだったんだぜ」

ひとしきり漫才を終えたクロウが語りかけて来ていた。

「えつと貴方は……」

「2年IV組所属のクロウ・アームブラストだ。2年生、いやツールズの最強コンビといえば、そりゃあ、あいつと俺の事よ！」

ビシリと右手の親指を立てて自分を指差しながらクロウはそう名

乗りを挙げる。

「は、はあ……」

「ど、どうも……」

「……………」

そんなクロウの様子にアリサとマキアスは戸惑った様子を浮かべ、ユーシスは冷たい視線を送る。顔自体は二枚目と言っていい位整っているのだが、なんとというかその発言とかがどうにも三枚目という印象が拭えないものであった。

「あ、あのリイン先輩が危なかつしい感じだったというのは……？」

マキアスからの問いにクロウは待つてましたと言わんばかりに笑みを浮かべて

「おう、昔のあいつはそりやもうガツチガチの如何にもエリート野郎って感じだったんだぜ。貴族生徒ともしよっちゅう喧嘩してやがるし、自分の親父や革新派が絶対的に正しいと思ってやがるし、ガツチガチの国家と軍隊の信奉者よ。当然不良生徒の俺との相性も最悪でな、大喧嘩したもんだ」

一年前のリインを思い出し、しかめっ面を浮かべながらそんな事を言ったクロウだがふいに顔を綻ばせて

「でもよ、同時にどこまでもまっすぐでそれでいて変な野郎でな。気がついたら他の三人共々つるむようになっていて、次第にあいつも色々影響受けて今じゃすっかり立派な先輩様だ」

そこでクロウは先程から親睦会だというのに睨み合っている二人の後輩を見据えて

「だからよ、お前らも焦らずゆっくりと仲良くなっていけば良いのさ。そのうち俺らみたいに「そんなこともあったな」と笑い合えるようになっていけるだろうからよ」

そんな風にクロウは笑みを浮かべながら後輩へと告げる。険悪な二人の様子にどこか一年前の自分たちを重ね合わせながら……

第三学生寮の親睦会はそんな風にして進んでいった……

鉄血の子と過重労働

「ふう、これで後もう少し」

一年生が初めての自由行動日を翌日に控えた4月17日、うず高く積まれた書類を頼りになる副会長と一緒に片付けてその7割がたを終えたトワはもうひと頑張りだと気合を入れる。

「お疲れ様。ここらで一旦休憩にしないか？時間も時間だし、あまり遅くなってしまうと学食が閉まってしまっただろうし」

生徒会室に掛けられた時計を指さしながらリインがそう提案する。時刻は現在19時30分。学食の営業時間が夜の20時までなのを思えばそろそろ利用できるギリギリの時間と言える。第3学生寮には寮の管理人がおらず、リインにしてもトワにしても現状自炊するだけの時間的余裕がない。そのため二人は基本的に味、量、値段、栄養それら全てを兼ね備えた学生の味方たる学生会館に存在する学食の常連となっていた。

「わ、もうそんな時間?!リイン君此処までやれば後は私だけでもなんとか出来るし、リイン君は先に帰ってくれても……」

常日頃から忙しくしている、自分もリインに負けず劣らず忙しいのだが、リインをそんな風に気遣うがリインは悪戯っぽい笑みを浮かべて

「なんだ？君はそんなに俺と一緒に食事するのや帰るのが嫌だったのか？悲しいなあ……一緒に居て楽しいと思っていたのは俺だけだったのか……」

そんな風に似合わない下手糞な演技をするリインにトワはクスリと笑って

「もう、そんなわけないでしょう。かれこれ一年の付き合いになる大切な友達だもん。私だってリイン君と一緒に居て楽しいよ」

「じゃあ、君も今更そんな水臭い事を言わないでほしいな、会長殿」

「失礼しました、リイン副会長」

そうして二人はどちらともなく笑い合っただけで一旦生徒会室を出て一階へと降りて行くのであった。

「あら、あなたたちこんな時間まで仕事していたの？ちよつと働き過ぎじゃない？」

そんな風にして仕事を終えた様子のサラが二人に気がつき声をかけてくる

「色々と忙しくて……でもリイン君のおかげでもう後ちよつとです」

「教官は今仕事を終えられたところですか？珍しいですね、キルシエではなくこちらで食事を取られるのは」

学食は教官を始めとする学院の職員たちも利用可能だが、あくまで学院生に向けられた食堂であるため当然ながらアルコールの提供はない。そしてサラ・バレストアインは仕事終わりのビールを何よりも愛する酒豪である、故に彼女が夕食を学食で取るというのは珍しく、専らキルシエを利用することが多いからだ。

特に明日は自由行動日、誰に憚ることなくそれこそ浴びるように飲んでいのではないか等と思つたのだが……

「ベアトリクス教官にたまには酒を飲まない休肝日を作れって言われてねえ……お酒が飲めないならキルシエに行く意味もないからこつちにしたのよ」

「ああ、なるほど……」

渋面を作りながら答えるサラの言葉にリインは納得する。

ハイブリツヒ教頭やナイトハルト教官に小言を言われようがどこ吹く風と言つた様子のサラ・バレストアインにも頭の上がない存在がいる。それが保険医を務めるベアトリクス教官である。実際トールズに来るまでは軍医として大佐階級にあつたベアトリクスは穏やかながらも静かな迫力を感じさせて、生徒の間では決して怒らせてはいけない教官として慕われながらも畏怖されている。さらにサラの場合はある恩義もそこに加わっており、彼女に対しては頭が上がらないのであつた。

「せっかくだし、一緒に食べない？働き者の優等生二人に特別に奢つてあげるわよ」

お邪魔虫だつていうのなら退散するけど等と冗談めかしながら言う教官の言葉に二人は苦笑を浮かべながら甘えることにするのであった。

「まあ真面目な話、あなたたち二人、ちよつといくらなんでもオーバーワークだと思わよ。ある程度は他の人間に任せないと」

もぐもぐと注文したりゾットを口に運びながら若くして仕事中毒の優等生二人へとサラは教官としての忠告を行う。

「それはわかっているつもりなんですけど……特別実習中はヴィンセント君達にまかせつきりになつちやう事を考えるところについて今のうちについて思つちやつて……」

「加えて今の時期はちょうど新入生が入ってきたばかりで、生徒会に入ってくれた新メンバーもまだ仕事に慣れていない時期ですから。どうしてもこちらでフォローしなければいけない案件が多くなりまして」

どこか言い訳めいた様子で二人はそう告げる。優秀すぎる人間はとかくついつい自分で何でもこなそうとしてしまう。その方がなまじ効率的で上手く行ってしまうからだ。そんな優秀すぎるエリートが嵌りがちな陥穽へと目の前の二人がまさしく落ちかけている事をサラは察知してあつけらかんと言いつつ

「良いじゃないまかせつきりにしておけば。獅子は我が子を千尋の谷に突き落とすってね。なまじ貴方たちがなんでもかんでも引き受けちやうから、皆貴方達に頼りつきりになつちやうのよ。」

貴方たちだつて来年の3月には卒業でしょ？ だったらそういう後を託せる後輩の育成だつて先輩としての大切な仕事の一つだと思わよ」

人を育てる事は非常に難しい。特になまじ優秀な人物だと思えば己と比較してこれならば自分がやった方が早いなど思つてついつい他人に任せようとせず自分で片付けてしまいがちだ。だが、それでは行けない。手本を見せてもらい、自分で考え、自分でやってみて初めて真の意味でそれを理解できるのが大多数なのだ。

あるいはただの優秀な下っ端で終わるのならばそれでも問題は無いのかもしれない、だがこの二人はこのまま行けばトールズ士官学院主席卒業者というこの世代を代表する俊英として社会に出る。当然いずれは上に立つことを期待されるだろう、特にリインに関しては父親の威光もあつて尚更である。

故にこそそろそろ他人に任せる事や、後輩を育てるという事。それらをやってみるべきだとサラは説いているのだ。

「ごもつともです、確かに何時までも自分とトワだけでやっていたら後輩達の成長の機会を奪つてしまいます」

「うん……ブラツケ先輩が私たちを信じて仕事を任せてくれたみたい私たちも皆を信じないと……だね」

神妙にうなずく二人の様子にサラは快活に笑つて

「そこで、私から一つ提案があるんだけど、どうかしら貴方たちがやっていた生徒会の依頼を幾つかⅦ組の生徒に回してみるってのはどう？」

自分が思いついた考えを二人へと伝えるのであった。

・・・

「生徒会の手伝い？」

「ああ、去年は俺とトワの二人で何とかこなしていたんだが流石に俺たちも会長と副会長になって全部を捌く事は難しくなってきたんだ」「もちろん強制とかそういうのじゃ全然ないから、ガイウス君が良ければ良いんだけどね！」

あの後仕事を終えて仲良く第三学生寮へと帰宅した二人は、サラのアドバイスに従いそんなお願いをガイウスへとしていた。

「俺としては問題ないが、良いのだろうか？お二人もご存知の通り、俺はこの国の平民や貴族の関係の機微に疎い所がある。知らず無礼を働いてしまう可能性もあるかと思うが……」

自分が帝国人ではなくノルドからの留学生であること、それ故の懸念をガイウスを伝えるがリインはその懸念に首を振り

「その心配はないだろう、気の難しいところのあるユーシスといち早く君は仲良くなつて見せたんだ。むしろ、そういう貴族や平民といった身分について気にしない君だからこそ俺たちは頼んでるんだ」「というど?」

「えつと、もう何度も聞いたと思うけどツールズ士官学院は貴族生徒と平民生徒、そういった区別なく同じ生徒として仲良くする事を目標としているのは知ってるよね?」

ラインの言葉に訝しがるガイウスへとトワはラインの言葉を引き継ぐように優しく告げる

「ああ、正直最初に聞いた時は「当たり前的事」と自分として感じたものだが、それでも同じクラスとなったあの二人の様子からどうやらそれが一朝一夕では行かないものがあるという事はなんとなくわかってきたつもりだ」

ノルドの民に身分の差というものはない。もちろん皆を率いる族長は存在するが、それとて長としての実力を示さなければ瞬く間に信頼を失う。大地や風と共に生きるノルドの民にとつては同胞は皆家族のようなもの、そこに所謂特権階級と呼ばれるものは存在しない。ガイウス自身、族長の息子であり順当に行けばいずれは族長となるなどと呼ばれているがそれはほかならぬガイウス自身がそう信じられるに足るだけの行いをしてきたからこそ。

もしもガイウスがそれを笠に傲慢に振る舞いでもすれば瞬く間に皆からの信頼を失い、次期族長候補は別の者が挙げられる事となっていたであろう。……そうなる前にそもそも現族長である父から激しい叱責を受ける事となっていたであろうが。

「耳が痛いな……そう当たり前的事ではあるんだ。貴族だろうと平民だろうと同じ人間には違いないんだから。ただ入学してすぐにそう出来る平民生徒は割かし珍しいタイプだな」

貴族であるという理由で居丈高に振る舞う者は当然だが平民側は平民側で相手が貴族であるという理由で反感を抱いたり、逆に萎縮したりと貴族と平民というくくりを気にしていないガイウスのような生徒は本当に少数派なのだ。

「何せもう数百年も帝国はこの体制だった。いわば帝国人にとっては身分の差というのは謂わば常識だ」

「?ならばなおの事、その常識を理解していない俺では不資格では?」
「ううん、逆だよガイウス君。そういうガイウス君だからこそ生徒会の手伝いをして欲しいんだ。だってガイウス君は理解してないわけじゃなくて、理解して尊重した上で、それを気にせずにユース君とかにだって接しているんじゃない?」

ガイウス・ウォーゼルの優れた点、それはこの年にして自分たちの文化と相手の文化そのどちらも理解した上でそれを尊重できているその懐の深さであろう。彼にとって帝国の身分制というものは理解し難いものである、だが彼はその上でその持つ長所と短所それらを理解しようと努め、尊重する。

そこには決して自身を貶めるような過度な謙りも、逆に相手を馬鹿にしたりするような色は一切見られない。どこまでも雄大なノルドの大地のように在るのだ。彼と比べればトワは若干謙遜しすぎなところがあるし、ラインの方は逆に自信過剰なところがあるとさえ言えるだけの均衡のとれた精神性をガイウスは入学した時点で既に有していた。

「だからこそ、私たちはガイウス君が生徒会の手伝いをしてくれたなら嬉しいなあって思っているんだけど……も、もちろんガイウス君にだって都合があると思うから断ってくれても一向に構わないから!」
「もちろん、何か他に興味のある部活があるというのならそちらを優先してくれて構わない。これはあくまで奉仕活動のようなものだからな。自分を疎かにしてしまつては本末転倒だからな」

告げられた二人からの言葉にガイウスは少し思案する。此処まで見込まれたのは素直に嬉しいし、自分が力になれるのなら喜ばしいと思う。加えて生徒会の手伝いをする事で多くの人物と接する事が出来るのは自分にとつても望むところだという思いもある。

故に彼は……

「承知した。これも風の導きというものだろう。美術部との掛け持ちで良ければ、その役目引き受けさせて頂こう」

そう快く了承するのであった。

鉄血の子と導き

「ふう、もう後少しと行ったところだな」

姉であるフィオナより送られてきた大量の仕送り、それをエリオットと共に片付け終えていき、ようやく終わりが見え始めたことでリインは一心地つく。

「ありがとうリイン、僕一人じゃとても終わらなかつただろうから助かつたよ……全くもう姉さんも過保護っていうか……」

「まあそれだけ俺たちの事を思ってくれてるって事だしありがたいことじゃないか」

ため息をつくエリオットにリインは苦笑しながら応じる。暖かく自分を家族として迎えてくれた恩義故というべきか、リインはエリオットに比べるとどうしてもフィオナとオーラフの過保護さに対して強く出れないところがあった。

「でも、やれ夜更かしをしないようにーとか外食ばかりだと栄養が偏るからちゃん野菜も食べなさいーとか……困った事があつたらリインを頼るようにとか……僕だつてもう16歳だつて言うのにまるで子どもみたいな扱いなんだよ?」

「俺も昨年入学したばかりの時は割とそんな感じだつたぞ? やれ喧嘩しないで仲良くしなさいーだとか、やれ勉強も良いけどお友達も作るのよーだとかまるつきり子ども扱いさ」

そう言つて肩を竦めるリインにエリオットは目を丸くして

「リ、リインもそうだつたんだ?」

「ああ、フィオナ姉さんにとっては俺たちは何時までも多分小さい頃のイメージのままなんだろうな。年末に顔を出してからはそういうのも減ってきたんだが、代わりにトワと仲良くやっているかとかの近況をやたらと知りたがつているみたいでな」

やれやれそんなに俺は友人と上手く行つてないように見えるかねとぼやくリインにエリオットは引きつった笑いを浮かべて

「ね、ねえリイン一応念のために聞いておきたいんだけど、リインにとってトワ会長つてどういう人?」

その問いにリインは少しだけ訝しんだ後に穏やかで爽やかな笑みを浮かべて

「手紙でも書いたし、去年の年末に家に招待した時にも言ったはずだけれどな。心から尊敬できる大切な友人だよ」

「そ、そうなんだ……………」

父さんと姉さんはすっかり年末に会って二人が交際していると思っているけどという言葉をエリオットは目の前のどこかずれている親友へと伝えようと思ったが、結局辞めた。あんまりこういうのは外野が口を挟むものではないだろうと思ったためである。

「この古い楽譜は…………姉さんと何時も弾いていた曲だよな」

「うん…………母さんに一番最初に教えてもらった思い出の曲だよ」

「なあエリオット…………本当に良かったのかツールズで？」

気がつけばリインはそんな風に問いかけていた。それは使い古された楽譜の様子から目の前の親友がどれだけ音楽に強い情熱を抱いていたか、それを思い出したためかもしれない。

「うん…………だって仕方がないよ…………夏の時にも言ったけど父さんがそう言うだもん。それに元々音楽に対してそこまで真剣だったわけでもないし」

諦めの色を伺わせた後に誤魔化すようにそう告げるエリオットを見てリインは

「馬鹿を言うな、真剣じゃない奴が暇さえあれば練習ばかりの生活を送ったりするものか」

ため息をついた後に静かにそう告げていた。

「え…………？」

「知らないでも思ったか、学院に入学した後もお前と来たら暇さえあればバイオリンの練習をしているじゃないか。ハードなカリキュラムで身体がバテバテにも関わらず」

ツールズ士官学院は軍事色が薄れてきたとはいえそれでも列記とした士官学院である。当然ながら未来の士官足り得るようハードな訓練も行われている。リインのように武術の経験があり、鍛えているようなものとはかく、そうでない新入生はそれこそ入学してからし

ばらくの間は一日の講義が終ったら、何もする気力が起きなくなる位の。

にも関わらずエリオットは吹奏楽部の練習は勿論、寮に帰宅後も自室で練習を毎日休まず行っている。そこまでしている音楽に対する思いが真剣でないはずがないのだ。

「そんな奴が真剣じゃなかっただなんて言うなよ、自分で自分の積み重ねてきた研鑽と努力を否定するような事を言わないでくれ」

どのような道を最終的に選ぶとしてもそれでも真剣に物事に打ち込んだ経験、それ自体が無駄になるなんて事はないはずなのだ。例えばエリオットが夢であった音楽家になれないとしても、ならないとしても、それを目指して努力した事それ自体は。歩む道は違えど、夢を語ってそれに向けて努力するエリオット・クレイグをリイン・オズボーンは親友として、兄弟として誇らしく思っていたのだ。

だからこそ、音楽に対して自分はそこまで真剣ではなかった等と言う目の前の親友の姿がリインには見ていられないのだ。どうか自身自身の想いと重ねてきた努力、それを自分で否定するような事だけはいないでくれと。

「リイン……ありがとう、そう言ってくれるのは嬉しいよ」

自分の努力を知って認めてくれていた人が居る事、それが嬉しくないはずがない。

「でも、それでもやっぱり僕は自分の想いを真剣だなんて今はもう言えないよ……だって父さんに反対されただけで結局音楽院に進むことを諦めちゃったんだもの」

目指している目標が高い人物ほど自身に課すハードルというのは高いものだ。なまじそれを目指している人物達が一体どれほどの情熱を持っているかを知っているからこそエリオットは自身の想いが中途半端なものだったのだと断ずる。本当に自分が音楽に人生を捧げる気があったのなら、それこそ父に逆らっても、家を飛び出してでもそれを目指したはずなのだ。

「だから、結局僕の想いはその程度だったんだよ」

そう諦めの色を漂わせながら告げる義兄弟の姿にリインはそれ以

上何も言う事が出来なくなるのであった……

・
・
・

どこか気まずい空気のままエリオットと別れたリインは彼にしては珍しくどこか重い足取りで学院へと歩んで行く。目的は図書館での自習だ。来週にはいいよいよ、初の特別課外活動が行われる事となる。故に不在の間に進む講義の範囲を自習しておくためだ。幸いな事にこの件に関しては教官方も全面的な支援を約束してくれて、有り難いことにトワとリインのために特別に課題を用意してくれていた。

わざわざ自分達二人のためだけに貴重な時間を割いてそこまでしてくれている事、全く持つて感謝の念しか湧かない。この期待をくぐれも裏切りたくないというリインは気分を入れ替える。エリオットの事は気がかりだが、それも彼自身が答えを出す事。自分とてまだ半ばの未熟者な以上、他人の事ばかりで自分を疎かにしては思い上がりも甚だしいだろうと。

そうして学院への道を進んでいくリインだったが、キルシエの前を通りがかったところで見知った顔を見つけて声をかける。

「マキアス、こんなところで勉強か？」

「あ、リイン先輩！はい、たまには気分転換も兼ねてこういう開放的なところでの勉強も良いかなと思ってます。リイン先輩はどちらに？」

「ああ、俺は図書館に行って資料を漁りながら教官方から頂いた課題をこなす予定だ。此処の図書館はまさしく知識の宝庫だからな、君も積極的に利用すると良い」

「ええ、そうさせて頂きます。あのリイン先輩……いえ、何でもありません」

何か聞きたそうに、しかしこちらを気遣ったかのように質問するのを辞めたマキアスの様子を見てリインは微笑して

「しかし、そうだな。図書館に行く前に此処で一服して行くのも良さそうだ。相席しても構わないか？」

「は、はい！それはもちろん！」

「ついでだ、何か質問したい事があるのならしてくれても一行に構わ

んぞ。頼んだ珈琲が来るまでに多少時間がかかるだろうからな」

「よ、よろしいんですか！それではすいません、この間の政治と経済学に関する質問何ですが……」

「ああ、その内容に関しては……」

そうしてリインは昨年自分がハインリツヒ教頭へとしたのと同じような質問をしてきたマキアスへと丁寧に教えて行き

「とまあ、こんなところだが他に何か質問はあるか？」

「いえ、ありません。ご教示いただきありがとうございます！」

「もしもより詳細に知りたい時はハインリツヒ教頭に頼むと良い。あの人は帝国有数の経済学者だ。俺などよりもはるかに丁寧に教えてくれるからな」

コーヒーを飲み干しながらリインはそう告げるが

「ハインリツヒ教頭に……ですか……」

マキアスはどこか複雑そうな様子を見せる。そんな様を見てリインは目を丸くして

「もしかして、ハインリツヒ教頭が貴族である事を気にしているのか？」

「いえ、その………はい、恥ずかしながら。リイン先輩にアレだけ言われたのに申し訳ありません」

「いや、俺に謝っても仕方がないんだが……」

想像以上に根が深い様子の目の前の後輩の筋金入りの貴族嫌い振りにどう言ったものかとリインは思索して

「なあマキアス、君がハインリツヒ教頭を貴族鼻根の人だと思ってるんだったらそれは間違いだぞ」

「そ、そうなんですか……講義を聞いていてもその貴族派寄りの事を言っていますし、事あるごとに僕ら平民生徒達に、貴族生徒を見習うようにと言っていたりしますし………てつきり」

平民を見下している偉そうな貴族なのだと思っていたと告げるマキアスに対してリインはゆっくりと首を振って

「少なくとも俺はあの人から鉄血宰相の息子だからという理由で不当に扱われた覚えは一度足りとてないよ。規律を破るような事があれ

ば平民生徒だろうと貴族生徒だろうと公正に罰する」

昨年度入学式の一件以来リインはリッテンハイムと度々やり合ったが、その際に担任を務めるハインリツヒはどちらか一方を贖するなどと言うことは決してなかった。あくまで平等に鉄血宰相の息子だからという理由でリインだけを罰するようなことも、リッテンハイム伯爵の嫡男だからという理由でヨアヒムだけ罰せられないという事もなく、罰則を下す際はどこまでも厳格かつ公正であった。これは他の平民生徒と貴族生徒がもめた時も同様である。

「それに確かにあの人は貴族派だが、その事を明言した上できちん革新派側の意見も一緒に紹介しているだろうか？」

完全な公平、中立な情報というのはあり得ない。学者の中でもどの学派の論を支持するかというのが学者によつて違うものなのだ。故にハインリツヒ教頭が自らの私見として貴族派の論を主張する事、それ自体は別段リインは問題とは感じていなかった。自分とて私見を述べればどうしても革新派寄りとなるのだから。

重要なのはその際にそれはあくまで自分の私見に過ぎない事を述べているかどうか、そして対立する側の論もきちんとして紹介しているかどうかであろう。それが教育者として公正であるという事だ。

そしてこの一年リインが接した限り、ハインリツヒ教頭はそれらをきちんとして守る尊敬に値する教官だった。

「だからな、マキアス。繰り返しになってしまいが、相手が貴族だからという理由でせっかくの機会を自分から潰してしまうのは本当に勿体無い事だぞ。俺たちがどれだけ恵まれた立場にいるのか、わからないわけじゃないだろうか？」

15歳になれば職について働く者の方が多い中、こうして最高の環境で最高峰の教官たちの下で思う存分に学ぶことの出来る自分たちは本当に幸せなのだというリインの意見、それにマキアスは黙って頷く。

「……わかりました、リイン先輩がそこまで仰るんでしたら、自分も何とかハインリツヒ教頭に偏見を捨てて接してみようと思います」

「ああ、そうすると良い。きつと教頭殿と君の相性はそういった貴族

と平民というくくりさえ外してしまえば悪くないはずだからな」

そうして珈琲を飲み終えて、一休みを終えたリインはマキアスと別れた後に当初の予定通り図書館での自習に励み、充実した自由行動日を送るのであった。

・・・

「それで、何時まで様子見しているつもりなの？アレがあんたの導くべき起動者ライザーなんだから早く貴方の使命を果たすべきじゃない？」

その光景を見たら多くの人間がまず自分の目と耳を疑う事であろう。猫が流暢に人の言葉を喋っているのだから

「騎神が封印されている旧校舎とやらを確認してきたけど、既に第一の試しまでに關しては突破しているみたいだったけど、この先はヘクセンブリード魔女の眷属の導きが必要になってくる。

あの女がとつくの昔に他の起動者を目覚めさせている以上、目覚めが遅ければそれだけアイツは不利になるって事よ。早いとこ覚悟を決めた方が良いと思うんだけど？」

「…………めんなさいセリヌ、貴方の言うとおりだと思うんだけどもう少しだけ待って」

そんな光景に驚く様子を見せる事もなく特科VII組の委員長エマ・ミルスティンは思案するかのように目を閉じて

「まだ私は確証が持ててないの。果たしてリイン先輩が騎神の担い手に相応しいのかどうか」

騎神それは時に災厄を退けて人々を守り、時に全てを破壊して支配する支配者と謳われる「巨なる騎士」

それがどう使われるか、それは全てその担い手たる起動者次第なのだ。故に導き手たる魔女はその力が正しく使われるように起動者を導かなければならない、そうエマは教えられてきた。

「良い先輩だとは思うの……………」

それほど多く接したわけではないがそれでもリインの人となりは多少だが知る事が出来た。

文武両道で後輩である自分達にも優しく、困っている人がいれば力を貸すとおおよそ非の打ちどころのない人物として学院では評判

の人だ。エマにしても言葉をいくらか交わしたが、決して悪い印象は受けなかった。しかしだ

「出会ってまだ一ヶ月も経っていない状態じゃ流石に決められないってわけね。まあ確かに騎神の力に溺れた起動者の例も枚挙に暇がないからね。貴方が慎重になるのもわかるわ」

そういった人物が騎神という力に魅了されて溺れてしまったという話もまたエマは聞かされていた。故にどうしても慎重にならざるを得ないのだ。

「ま、そうやって二の足踏んでいる間にもう手遅れなんて事にだけはならないように注意しておきなさいよ。魔女の使命ほっぽり出したあの女がどんな起動者を導いたのか、それこそわかったもんじやないんだから。止めなきやならない奴がいるのに、こっちの起動者は目覚めてもいなかったから何もできませんでしたくなんて事になったらそれこそ目も当てられないわよ」

そんな忠告にエマはそつと頷くのであった……

鉄血の子と交易町ケルディック①

4月24日、ツールズ士官学院特科VII組総勢8名と生徒会長を務めるトワ・ハーシエル及び副会長を務めるリイン・オズボーンは早朝にトリスタ駅へと集合していた。学院は通常通りに講義が行われる日に、こうして集まっているのは決して今から学校をサボって遊びに行くというわけではなく、列記とした特科VII組の特別カリキュラム、すなわちいよいよ特別課外活動の日を迎えたからであった。

「……………」

相も変わらず険悪な様子で顔を合せようとしないユースとマキアス。班長を務めるトワはなんとか和解出来ないかと苦慮しているようだが、前途多難と言うべきだろう。明かされた特別実習の編成と行先、それは以下のようなものであった。

【4月特別実習】

A班：リイン、アリサ、ラウラ、エリオット、フィー（実習地：交易町ケルディック）

B班：トワ、エマ、マキアス、ユース、ガイウス（実習地：紡績町パルム）

不和を抱えている状態のユースとマキアスをあえて一緒にし、『青春の汗を共に流させる』という目論見が滲み出ている編成であった。班長をマキアス寄りのリインではなくトワにして、他の班員にしても委員長を務めており温厚な性格のエマに悠然としたガイウスと見ている辺り、それなりの熟慮が感じられる。適当でだらしないように見えても根底にはしっかりと考えた考えがあるのがサラ・バレスタインの流儀というものであった。

「お、間に合ったみてえだな」

そんな言葉と共にリインとトワの良く知る三人が駅へと入って来て

「いよいよ特科VII組本格始動という訳だね、フフフフ」

「みんな気をつけて行ってきてね、土産話楽しみにしてるから」

そう声を掛けてくる親友たちの姿にリインとトワは顔を綻ばせて

「わあ、わざわざ見送りに来てくれたの？」

「やれやれこの分じゃ現地の天気が心配だな」

「おう、ちょうど時間が空いたからな。初っ端位それじゃあ見送るかって話になつてな」

「やれやれ、そちらの二人は未だにそんな状態かい。君たち、喧嘩も結構だがあまり私のトワを困らせるようだったら帰ってきた後に私の泰斗流をその身で存分に味わってもらうからね？」

どこか冗談めかした口調で微笑みながらそう告げてくるアンゼリカの迫力に気圧されて、二人は冷や汗をかきながら黙って頷く。冗談めかしているが多分8割がた本気であろう。やるといったら相手が公爵家の息子だろうが帝都知事の息子だろうが、宰相の息子だろうが、皇族だろうが殴るのがアンゼリカ・ログナーという女である。

「そういえばリインとトワがこういう課外活動で別々に行動するって何気に初めてだよな？」

「ああ、そういえばそうかもしれないな。思えば入学してから彼女とはこの手の活動で大体行動を共にしていたからな」

生徒会での活動、ARCU Sのテスター、夏至祭中の帝都での活動、クロスベルへの留学、クラスこそ違えど思えばリインとトワはずっと行動を共にしていた。こうしてそれぞれが班長として別々に行動するというのは二人にとっても初めての経験である。

「大丈夫なのかよお前ら？何かあっても俺らがいないからフォローできないうぜ？」

「そうだね、私の可愛いトワがかどわかされなにか私は心配でならないよ。ああ、やはり私も講義なんてほっぽり出して一その事ついていくべきでは……」

そうクロウは二人に対してからかい半分心配半分の問いかけを、アンゼリカはぶつぶつと呟きだす。

トワもリインもこの世代を代表する俊英なのは間違いないが、万能の超人というわけでは決してない。それぞれ長所もあれば短所もある。そしてこの二人は入学以来から互いの抱く短所をそれぞれ補い

合う事で多くの問題を解決してきた。リインの果斷さが強引とないかねない時はトワが間に入り、トワの柔和さを軟弱と取ってくるような相手に対してはリインが然るべき対応を取るといふ風に。

「忠告どうも。お前たちの方こそ俺とトワがいなくてもちちゃんと講義に出ろよ」

「もうアンちゃんは私をなんだと思ってるの？ 私ももう2年生、VII組の皆のお姉さんなんだよ」

そう（無い）胸を張りながら告げるトワと隣にいる大きなお山を二つ持っているエマを見比べて、いや、どう見てもお姉さんには見えねえぞという言葉をおうとした直前でクロウは飲み込む。本人の自助努力でどうにもならないツルンでペターンな事を弄るのは冗談として悪趣味と言われる部類。加えて言おうものなら女性陣に袋叩きに合いそうなので辞めようと思う程度の良識と思慮程度は彼にも存在していた。

「……クロウ君、その何やら可哀想なものを見るような目は何かな？」
「いや別に、ただまあ空の女神は何とも残酷だなと思っただけだ」

ツルペタストーン、ボンキュボン、悲しいまでの持たざる者と持つ者の貧富の差、それを目の当たりにしてクロウは思わずこの世界の残酷さへと思いを馳せる。

「……最低ね、あの先輩」

「リイン先輩はなぜあのような御仁と親しくされているのか」

目は口ほどに物を言うということわざがある、その言葉通りクロウの努力は実を結ばなかった。彼の視線から彼が何を考えているかを如実に感じ取ったアリサとラウラは絶対零度の視線をクロウへと送る。オリエンテーリングの時の活躍とこの一ヶ月同じ学生寮で生活して『頼りになる先輩』という評価のリインに比べると、クロウの評価はなんか『チャライ先輩』というものであったが、どうやらそれは『チャラくてスケベな先輩』というものに悪化したようである。

「言っておくがなあ、その剣と勉強が趣味とかいう変態に比べれば俺の方がよほど普通なんだからな！ 野郎なんてスケベなのが当たり前なんだ!! そうだろうジョルジュ!？」

「いや、そこで僕に話を振られても困るんだけど……リインが希少例っていうのはまあ同意するけど」

「……貴様ら人を一体なんだと思っっているんだ？」

そんな風に仲良く漫才をしていると目的の列車が来たというアナウンスが流れて一同は三人に見送られながら改札へと進んでいく。そしてリインが改札を通るその直前

「リイン」

先ほどまでのどこかおちやらけた空気とは一変、真剣な表情で

「真面目な話、注意しておけよ。お前が行くのはアルバレア公爵閣下のお膝元のクロイツェン州でお前はあの鉄血宰相様の息子だ。加えて今回、お前の傍にはゼリカも俺もジョルジュもトワもいねえ。くれぐれも短気を起こしたりするんじゃないぞ」

「……ああ、わかってるさ」

親友からのどこか常とは違う忠告に答えて、リインはいよいよ特別実習へと趣くのであった。

・・・

「向こうは大丈夫かなあ」

流れ行く風景を眺めながらエリオットがそうポツリと言葉を溢す。

「まあトワが班長を務めている以上大丈夫だろう、その手の喧嘩の仲裁は彼女の十八番だ」

昨年度幾度もあった貴族生徒と平民生徒の喧嘩、その仲裁役としてトワ・ハーシエルは目覚ましい活躍を果たした。彼女を相手にすると大抵の人間は毒気を抜かれるというか、どうにもそれ以上のやる気が削がれるのである。それでも矛を収めない類にはリインが物理的に止めるとというのが基本であった。今回はリインは居ないが、もしも時はガイウスがその役割を果たす事だろう。最も、止めずに徹底的にやり合わせた方が案外好転する可能性もあるが。

「随分と信頼されているんですね、会長のこと」

「当然だろう。親友だからな。彼女は俺よりもよほどしっかりしているよ」

アリサからの問いにリインは静かな笑みを湛えて答える。

ラインのトワに対する評価は極めて高い。それは一緒に行動して彼女の持つ優しさという強さを間近で実感させられたからでもあるし、生徒会長選挙という勝負に於いて彼女に敗北したからでもあるし、本人自身も自覚していないある種の感情があるからでもあった。「そういうわけでB班の方は彼女に任せておけば大丈夫さ。すぐに和解とはいかんだろうが、それでも空中分解という事にはならんだろうさ」

「そうそう。その辺は私もちゃーんと考えているのよ。だから、貴方たちは自分たちの班の心配をしなさい」

A班へと同行していたサラ教官の言葉にA班の面々は顔を見合わせる。心配と言ってもこちらの班は別段何か不和を抱えているわけでもない、班長を務めるラインにしても頼もしい先輩だし、戦力的にもVII組、いや学院でもトップクラスの面々が揃っている以上別段心配になるような要素はないはずだと。

「言っておくけど、班長だからって何でもかんでもラインに頼っちゃ駄目よ。この実習はあくまで貴方達一人一人に考えて行動してもらったためのものだからね。ライン一人に頼りきりのワンマン状態だったと判断したら、評価はそれ相応のものになるからそのつもりで居なさい」

自ら律し、考えて行動できる人物こそがツールズ士官学院の求める「世の礎たる人物」。上のいう事にただ従うだけの駒を決して求めている訳ではないのだと、頼られるとすぐに抱え込んで自分一人で何とかする傾向の見えるライン自身も含めて、サラはA班の面々へと釘を刺す。

「……別に私は評価が低くなったところで特に気にしないけど」
「フィー……あんたねえ……」

珍しく教官らしい威厳を見せながら告げられたサラの言葉に他の四人が神妙に頷く中一人だけどこ吹く風とばかりのフィーの様子にサラは呆れた様子を見せる。

「……フィーよ。常日頃から思っていたのだがそなた、もう少し背筋を正して真面目に取り組むべきではないか？ 講義の際も良く居眠り

をしているであろう」

「そう言われても、私はずっとこんな感じだったし。学校とやらに通うのも初めてだから授業は正直何を言っているのかわからなくて眠くなるし。それに明確な指揮官が決められているのなら部下はそれに従っていれば良いものじゃない?」

無能な上官に従っていたらこっちの命が危なくなるから誤射しちゃうかもしれないけど等と背中が薄ら寒くなってくるような事をサラリと言うフィーにラウラは首を振り

「そなたが今までどのような過ごしていたかは私は知らぬ。だが今のそなたは列記としたトールズ士官学院の生徒だ。その立場に見合った行動をとるべきであろう」

「……………善処する」

ラウラのいう事に納得したというよりは相手をするのもめんどくさくなったのであろうフィーはそれだけ言うとは話は終わりだとばかりに昼寝をし出し、ラウラはラウラで釈然としないものを感じながらも矛を収めるのであった。

(こちらはこちらで一筋縄では行かないかもしれないな)

不和と言うほどのレベルではないが真面目なラウラと気分屋なフィー、この二人も気質的にどうにもそりの合わない部分を抱えているようだ。ラウラの言っていたことは正直リインも言いたい事ではあったのだが、この状況で片方だけに自分が味方してしまうのはあまりよろしくない事だろうと静観したのだ。

(人を纏めて率いるというのも中々に大変だな…………)

たった四人を率いるだけでこれなのだ、既に数百名規模の部隊を率いている義姉と数万人にも及ぶ師団を率いる義父、そして宰相としてこの国を総べる父の苦労は一体如何ほどなのかと改めてリインは自分の目標とする人物たちの偉大さを実感するのであった。

……

「うーん、アタシも流石にどうかとは思っただけだねえ。サラチャんに構わないからって強く言われちゃってさ」

ケルディックへと到着して教官に案内されてリイン達は今回の実習の拠点である宿酒場《風見亭》へと案内されて寝泊りする部屋へと案内されたのだがそこで問題が発生した。一室にベッドが5つ、つまりは男女共同の部屋であったのだ。これに困った様子を見せたのがアリサとエリオットの両名であった。

お嬢様育ちの彼女にしてみれば男子と同室で寝泊まりするという事はやはり耐え難い事なのだろう、女将から告げられた言葉に絶望的な表情を浮かべている。エリオットの場合は女性陣に対する気遣いであろう。

(どうしたものか)

正直な感想を述べればリインとしては特に文句はない。それは別に女子と同室だぜヒヤッホーなどと言う彼の悪友ならば言いそうなる理由ではなく、自分たちが士官学院生であるという事に対する自覚によるものであった。今回の活動が列記としたカリキュラムの一環である以上、それこそ郊外な適当な場所で野営しろと言われたとしても何ら不思議ではないリインは思っていたのだ。それに比べればこうしてきちんとした宿に寝泊まりできるというのに文句を言つては罰が当たるといふものだろう。

自分たちは士官学院生なのだという自らの置かれた立場、それを伝えようとしたところで

「……屋根がある、ベッドがある。アリサは一体何が不満なの？」

心の底から何がそんなに不満なのかわからないと言ったきよとんとした様子でフィー・クラウゼルが呟いていた。

「だ、だって男子と一緒にするのはやっぱりその……」

「これから肩を並べる仲間なんだからその位当たり前じゃない？」

何でそんな事を言っているんだろうこの人と言わんばかりの様子でフィーは答える。そこには女の子としての恥じらいはなく、どこまでも戦士としての態度があった。

「……ふむ、アリサよ。フィーの言う通りであろう、我々は列記とした士官学院生。それこそ野営をしろと言われる事とて有り得る立場だ。で、あるのならばこうしてきちんとした宿を用意して貰えただけむし

る感謝すべきというものであろう」

「ううっ……分かった、分かりました！」

先ほどまで小競り合いをしていたはずのフィーとラウラ、自分以外の女子二人が問題ないと告げた事でアリサもまた観念したような声を挙げる。そんな様を見てリインは胸を撫で下ろす。開始早々士官学院生としての心構えだのなんだのと言った説教をしなければならぬのは出来れば避けたいところであった。

「では納得してもらえたところで、ひとまず荷物を置いて一階にいるサラ教官に改めて課題の確認を行うとしよう」

そのリインの言葉と共にそれぞれが部屋から退室していく中

「……お手並み拝見」

ペーペーの新米もいる中どう部隊を率いて行くのか、指揮官として信頼に足るのか見極めさせてもらうという、まるで新米士官を見極める古参の下士官のようなフィーの言葉を受けてリインは気を引き締め直すと共に彼女の素性についてある推測をするのであった。

鉄血の子と交易町ケルディック②

特別実習一日目はつつがなく終わった。出された課題は3つ

・東ケルディック街道の手配魔獣

これに関してはリイン、フィー、ラウラというすでに学生のレベルを大きく超えた戦闘力を有している三人を擁するA班にとつては特に問題なく一蹴。もうあいっただけで良いんじゃないかなとならないようにリインはアリサとエリオットも実戦経験を積めるように配慮を行った。

※「そんな配慮は要らなかった！」と二人は主張したがコレも二人の未来のためである。リインは心を鬼にして愛する後輩を千尋の谷へと突き落とした。これでも師であるオリエ師範代、そしてサラ教官に比べればかなり優しい方だと本人としては自負しているようである。

・壊れた街道灯の交換

こちらも手早く実施して異常なく完了。工学系分野に深い造詣を持つアリサが実施して交換中の護衛を残り四名にて実施してつつがなく完了した。

・薬の材料調達

こちらも問題なく完了。大市でベアズクロー、西ケルディック街道の農家より皇帝人參を分けてもらった。同じく西ケルディック街道に位置する薬草の群生地よりベズリーフを調達、薬草を見分ける際にはフィーが活躍。曰く、この手の薬草は緊急時に昔から調達していたとの事である。

途中、大市にて出店場所をめぐる商人同士のトラブルなどもあったがこちらもリインらが仲裁した後にまとめ役であるオットー元締めが出張ってきた事で一応の解決を見た。そうして一日が終わり、後は寝るだけとはならず5人は後一つ残っている重要な課題へと取り掛かっていた、そう今日行つた事に関するレポートの作成である。

「一応教官に提出する前に俺が軽く目を通して添削するので出来たものは順々に俺に見せるように」

そうリインは告げて自らもまたレポートの作成に取り掛かる。無論学年主席たる彼にしてみればもはやこの手のレポートの作成は十八番と言っている。ケルディックに来る前に収集していたこの地域の地理的な要因、元締めより聞かされたアルバレア公による増税、そしてその背景にある革新派と貴族派の対立等も合わせながらスラスラと作成していく。

「出来た」

「は？」

レポートの作成へと取り掛かり始めてわずか数分、フィーのその宣言に一同は呆気にとられる。

「だから、出来たよ今日のレポート」

そういつてつかつかとリインの下へと歩いてきてフィーはその作成したレポートを手渡してくる

「いや、出来たってお前……」

こんな数分でまともなレポートが出来るわけがないだろうとフィーから差し出されたレポートを見てリインがピシリと固まる。

「じゃ、私はもう寝るね。おやすみ」

リインからの返答を聞くこともなくそのままフィーは自分のベッドへと潜り込むと、すぐにスースーと実に穏やかな寝息を立て始める。

「リイン、フィーのレポートってどんな感じだったの？」

「いくらなんでもこの短時間で作成できるとは思えないが……」

「箇条書きとかそんな感じの内容だったり……」

そうして三人はフィーから提出されたレポートを手を取ったまま固まってしまったリインの背後へと回り込みその内容を確認して呆気に取られる。そこにはこう書かれていた

来た。やった。終わった。

「……………」
「……………」
「……………」

硬直していたラインがフルフルと小刻みに震えだす、そうして黙ってそのレポートを置く、とすつくとおもむろに立ち上がって……

「何を呑気に寝ているクラウゼル！このレポートとは到底呼べない代物はなんだ!!!」

そんな叫び声に叩き起こされたフィーは寝ぼけ眼をこすって

「……………寝込みを襲うなんてケダモノ。トワと言いつつ、そういう趣味？」

「誰が貴様に欲情などするか！それよりもこのレポート、いやレポートということすらおこがましいやる気の無い子供の日記のような何かは何だ！」

「会心の出来」

そんな言葉と共にブイとドヤ顔を見せつけるフィーへとラインはしばらくひくついた後にとともにこやかな笑みを浮かべて

「そうかそうか、コレがお前にとっては最善を尽くした結果だということだな」

「そ」

「なるほどなるほど、それならば仕方ないな。なんといっても出来ないんだ、それは今までの環境により培われたものであって別段お前の責任というわけではない」

「わかってくれたみたいで嬉しい」

それじゃあおやすみと言おうとするフィーにラインはそのままにこやかな笑みで

「ああ、出来ないならば出来るようになれば良いだけの事だ。俺が班長として責任を持って指導してやろう」

そうだなまずはレポートの書き方の基礎から叩き込んでやろう等と言いだしたラインの迫力にフィーは冷や汗をかいて

「……………めんない、手を抜いてました。書き直します」

「よろしい」

そうしてほとんど添削を受けるところもなくアリサが一番目に、多少の添削を受けながらラウラとエリオットが、何度も添削を受けた後に「……まあ、入学してすぐという事を勘定に入れて合格にしておいてやろう」というリイン先輩のありがたいお達しを受けて精も根も尽き果てた様子でフィーがそれぞれレポートを完成させて一日目は終了となるのであった……

・・・

実習二日目は波乱の幕開けとなった。昨夜出店場所を巡りトラブルとなった二人の商人マルコとハインツその両者の屋台が破壊されて商品が盗まれたのだ。昨日の今日という事もあり、オットー元締め
の仲裁もむなしく、リインが実力行使も止むを得ないかと思つたところで、昨日とは打つて変わった迅速さで領邦軍が到着。領邦軍は被害者の二人に逮捕されるか、水に流すかを選ばせるという、無茶苦茶にも程がある方法でその場を取り持ち、大市は遅れながらも開かれた。

両者の屋台が同時に破壊されるという状況、そして昨日とは打つて変わった領邦軍の無茶苦茶ながらもやけに迅速な対応、その二点から不審な物を感じたリインは領邦軍の詰所を訪問。エリオットの策士ぶりなども相まってこの事件は領邦軍と結託してくれた計画的な犯行と推定。ケルディック市内にいたルナリア自然公園の元管理人を自称する酔っぱらいからの証言を下に、ルナリア自然公園に犯人たちが潜伏している事を突き止める。

そうして強行した現場にて抵抗する犯人を取り押さえ、図つたようなタイミングで突如出現した魔獣も問題なく撃退して後はこの盗品と盗人共を引き渡す事で完了とするというタイミングで事件は起きた。現れた領邦軍がリイン達を取り囲んだのだ

「弁えろと言っている。此処は公爵家の治めるクロイツエン州の領内だ。これ以上、学生ごときに引つ掻き回されるわけにはいかん。手を引かぬというのならば……このまま容疑者として拘束し、バリアハー

トに送つても良いが？」

告げられた言葉にリインは灼熱のような憤怒を燃やしながらそれを押さえ込むように強く唇を噛みしめる。

(落ち着け……目の前の部隊を実力行使によって蹴散らす事自体は容易いがそんな事をしてしまえばそれこそ言い訳の余地なく犯罪者だ) そう自分自身に言い聞かせながらリインはこの場を打開するための手立てを考える。

第一案：実力行使によつて領邦軍を蹴散らす

可能か不可能かで言えば問題なく可能である。この場にいる部隊は高々一個小隊。見たところ突出した実力者もいるわけではないし、ラウラやフィーもいるこの状況であれば問題なく蹴散らす事、それ自体は可能である。だがそれをしてしまえばそれこそ反論の余地なく犯罪者だ。故にこの案を取ることは出来ない

第二案：相手の士官に軍人としての誇りを今一度呼び起こすように説得を行う

これも効果は薄いだろう。昨日の挨拶の際、そして今日の対応を見るに目の前の兵士たちはどこまで行つてもアルバレア公の私兵集団だ。犬に人としての誇りを説いたところで意味はない。それこそ現実を知らぬ青臭い学生の綺麗事だと切つて捨てられて終わりだ。

第三案、これがおそらく最も効果的となるだろう、だがそれをリインとしては出来ることであれば使いたくないものだった。

第三案、それは権威に頼るのだ。此処での権威とはリインの父たる鉄血宰相、養父たる赤毛のクレイグではない、革新派たる彼らの権威では目の前の兵士たちはどこ吹く風というものだろう。

頼るべき権威、それは領邦軍の中でも絶大な武名を誇り、アルバレア公爵として決して無下には出来ない帝国屈指の実力者光の剣匠ヴィクター・S・アルゼイド、その人である。

目の前の士官に言ってやれば良いのだ、たかだか一士官如きにすぎない分際で一体誰を容疑者扱いしているのかと。こちらに居るのはあの光の剣匠の愛娘だぞと。

領邦軍においてアルゼイド子爵の武名は絶大と言つていい、授与さ

れた勲章の数、重ねた武勲は数知れず、加えてかの黄金の羅刹をはじめに領邦軍の中核を担う将官や佐官には彼の愛弟子が数多く存在する。

そんなアルゼイド子爵のご息女を貴様はあろうことか盗人扱いするのかと、そうしてアルゼイド子爵と揉めた時貴様の主君であるアルバレア公爵はわざわざ庇ってくれるほどに部下に慈悲深いお方かと。

アルバレア公爵にしてもそのような瑣末ごとで名高き光の剣匠と事構えるつもりはないだろう、アルゼイド子爵の武名と領邦軍における影響力は決して四大名門とて侮れるものではない。貴族でもない一士官の首一つを差し出す程度で丸く収まるなら躊躇いなくそうするだろう。現場が勝手に暴走した事で私は一切関知していないと。

この士官が此処まで自分たちに強気に出られているのもそれはアルバレア公の威光があると思っっているからこそ。権威に頼るものは権威に弱い、おそらくそこまで言えば自ずと退く事だろう。

故に有効性という点で言えばこの第三案が最も有力である、いか実質現状それ以外に選択肢はないと言っただけ。

だが、しかしそんな自ら築き上げたものでもない権威を振りかざす事はリイン・オズボーンにとっては最も唾棄すべき行いであった。

『光の剣匠』という自分が築き上げたものでもない力を振りかざす事、それこそが今までリインが侮蔑してきた自分はリッテンハイム家の嫡男だからという理由で居丈高に振る舞っていたヨアヒム・リッテンハイムと一体何が違うのかと。

(いや、ある意味では俺はアイツ以下か)

なにせリインがやることは「此処に居るお方をどなたと心得る、恐れ多くもかの光の剣匠の愛娘ラウラ・S・アルゼイド様にあらせられるぞ」と言っただけを使い目の前の士官たちを脅すのだ。

(さしずめ俺はリッテンハイムのコバンザメ共と同じか)

大貴族の権威を振りかざす馬鹿殿の太鼓持ち連中、そんな連中と同列となることにリインは我慢がならない。ラウラとて同じであろう、彼女は自分と近いところがある、その手の権威を振りかざすような事に嫌悪を覚えるタイプの人種である。まずリインがそのような事

をすれば失望を禁じ得ない事であろう。故に心情的に言えばコレは使いたくない手段であった。

(だが、此処でこいつらを取り逃がせば彼らの生活は……)

せめて商品だけでも戻ってくればなんとかやり直せる。そう祈るような気持ちで呟いていた商人の青年の姿がラインの脳裏に過る。彼はこの商品を集めるために資産のほとんどを費やしたと言っていた。商品が取り戻せなければ、それは即ち彼の破滅を意味する。

自分の誇りか。それとも見も知らぬ民の生活か、突きつけられた二択に対してラインは静かに瞳を閉じて

(そんなものは決まっている)

自分が何のために軍人となるのかそれを今一度問いかけなおして、決断した

「フン、さつきから聞いていればたかだか一士官如きが随分と偉そうな口を叩いてくれる」

口角を釣り上げながらラインは殊更威圧的かつ挑発的にそう告げる

「何……!?!」

「貴様！なんだその無礼な態度は我々を誰だと思っている!!」

「ちよ、ちよつと……」

「リ、ライン……」

「ライン先輩……?」

「……」

挑発的に振る舞いだしたラインに対してアリサとエリオットが慌てたように心配そうな声を挙げる。ラウラが何か考えがあるのかと訝しがる。フィーは興味深そうにラインを見据える

「ふん、無礼な態度か。知らぬというのは哀れだな、故に教えてやるとしよう。貴様らが一体誰に向かって無礼な口を叩いていたのかを！」

おそらくこの件で自分はラウラからの信頼を失うだろう、だがそれでも構わない。優先すべきは罪なき自国の民の生命と生活、それこそが自分の目指す軍人の存在意義なのだから。失った信頼はまた言葉と行動によつて取り戻すのみ

「良いか、こちらに居るお方は」
そんな覚悟と共にリインがラウラの名を告げようとしたその瞬間
に

「……その必要はありません」

リインにとっては旧知の敬愛して止まない女性の、凜とした声が響
いた……

鉄血の子と交易町ケルディック③

駆ける、部隊を率いて一刻も早く現場に駆けつけられるように私は駆ける。

ローケルディックで窃盗事件が起きた。領邦軍はグルとなっているため解決に動こうとしない。絶好の機会だ

そんなレクターさんからの連絡を受けてその意図を理解する。ケルディックはクロイツェン州内でも屈指の交易都市。

帝国中に食料を供給する、一大穀倉地帯でも有るこの地はアルバレア公爵家の要の一つと言っている。そしてアルバレア公爵の実施した増税に対しても兼ねてより抗議を行っている地でもある。

そんな不満が燻っており、領邦軍が有効な手立てを打てないこの状況で我々鉄道憲兵隊が颯爽とその事件を解決する事が出来れば、それはケルディックの民の支持をそれだけ我々革新派が得やすくなるという事でもあるのだ。

だからこそその絶好の機会というレクターさんの言葉、それを理解して現在すぐに動かせる直卒の部隊を纏めて出立の準備を行う。

そういった政治的な背景を抜きにしても、罪なき民の生活を護り、犯罪者には然るべき罰が下るようにする、それこそが我々憲兵隊の役目なのだから。

ローケルディックに言っておくとどうやら可愛い俺らの義弟が後輩達と一緒に解決に乗り出しているみたいだな。一歩間違うと面倒な事になるかも知れんから頼んだぜ、クレア義姉さん

続いて告げられた言葉を聞いた瞬間に私の頭の中は一瞬真っ白になる。

そうだ、何故その事に思い至らなかったのだろう。あの子の性格を考えれば、このような事態になって介入しないという選択肢などあるはずがない。

あの子は真実、「軍人は自国民の生命と生活を護るためにこそ存在する」という建前を心の底から信じて居るのだから。発生した窃盗事件、動こうとしない領邦軍、そんな状況で「自分たちはまだ学生に過

ぎないから」等とおとなしくしているはずがない。まず間違いなく、領邦軍が頼りにならないならば、自分たちで解決しようと動くはずだ。

それ自体は素晴らしい事だ、身内として誇らしいと思う。だが、グールとなつている領邦軍がそれを許すはずがない。まず間違いなく犯人を庇うだろう、そしてそうなった時あの子はどうするだろうか？

——激発してしまい、領邦軍相手に実力行使に出してしまうのではないか？

——あるいはあの子の素性に気がついた領邦軍が主君に対する手土産になるとでも考えるのではないか？

そんな心配が頭を支配する。どちらもそこまで短慮ではないはずだ、と理性はそう言っているのにそれでも一度過ぎった想像は頭を離れず、私は一刻も早くケルディックへと駆けつけるべく急ぐのであった……

・・・

——間に合った。

領邦軍に取り囲まれるあの子の姿を確認して私は安堵する。向こうも私に気がついたのだろう、私を見て輝かんばかりの笑顔を浮かべてくれている。

姉さん、姉さんと呼んで慕ってくれる大切な少年。その一度は失ってしまった温もりを今度は護れた事に安堵し、気を引き締める。

こちらに敵意を向ける領邦軍の士官、彼に対してケルディックにおいては我々も捜査権を有する事を伝える、そうすると彼は忌々し気にこちらを睨みながらも、こちらとこの場で揉めてまで使い捨ての駒如きを庇うのも馬鹿らしいと思ったのであろう、程なく部隊を引き上げさせた。

「鉄血の狗」という嫌味を最後告げてきたが、その程度の嫌味は慣れたもの。殊更目くじらを立てるようなものではない。そもそも我々が閣下の狗だというのならば、そちらの方こそアルバレア公の狗だろうに。

——そんな事よりも、今は

こちらに対して輝く笑みを向けてくれている大切な義弟から話を聞く方が余程重要だ。

本音を言えば久方ぶりの再会を喜び合い、いつものように他愛もない話をしたいところだが此処に来たのは鉄道憲兵隊大尉としての列記とした軍務、そういうわけにも行かない。

向こうもそう思ったのだろう、何かに気がついたように慌てて、士官学院生の現役士官に向ける態度となり、こちらに対して敬礼をしてきた。

そんな様がどうしようもなく愛らしく思えて、私は思わずクスリと笑みを零して

「トールズ士官学院の皆さんですね、私は鉄道憲兵隊所属クレア・リーヴェルト大尉です。調書を作成するのに少々お時間頂けるでしょうか」

微笑みかけながら、そう告げるのだった。

・・・

「以上の情報から犯人たちはルナリア自然公園に潜伏していると推定、領邦軍はこの件では頼りにならないと判断して自分たちはルナリア自然公園へと趣き、盗品と共に居た容疑者達を発見。こちらの勧告に従う事なく攻撃してきたためにこちらも応戦しました」

そう真面目に答えるライン、だがその言葉と表情は普段より随分柔らかかった。本人としてはおそらく何時も通りのつもりなのだろう、だがその言葉と表情にはどこか浮かれているような印象が見受けられた。

所謂、鼻の下が伸びている、という奴である。だが単純なスケベ心というよりはどちらかと言えば憧れのお姉さん相手にはしゃいでいる子供のようで……

「なるほど……では、そうして容疑者たちを制圧したところで領邦軍の方々が来たということでしょうか？」

そう応じるクレア大尉の言葉と表情もかなり柔らかい。基本的に

この女性はそうなのかもしれないが、それだけでは済まされないレベルで。リインに対する微笑むその姿はさながら、可愛い弟を見守る姉のようで……

そんな二人をどこか冷めた目線で女子三人は見つめて

「なんか普段とは随分と違うわね……」

「うむ、本人はそのつもりはないのだろうが表情がずいぶんと緩んでおられる」

「あの先輩が来る前に言っていた通りだったね。男は皆スケベだつて」

しらーとした目でリインを見ながら女子三人は奇妙な連帯感を抱いてヒソヒソと話し合う。班長という事でまずはリインが事情聴取に応じているため、他の四人はその間なんというか暇を持て余している状態であった。曰く、こういった事情聴取をする際は同時ではなく別々に行った方が良く、特にその集団の中に明確なリーダーが居る場合は他の面々はついついそのリーダーの証言に流されてしまいがちになるためとの事である。そんなわけでまずは班長たるリインの調書作成からスタートしたのだが、普段の真面目で精悍な顔立ちはどこへやら、今のリインは間違いなく鼻の下が伸びていた。昨日の自分たちと同室の際には全く意に介していなかったのとは打って変わったその様子に三人はどこか面白くない気持ちを抱く。

本人としてはそんな気は毛頭ないのだろうが、言わば自分はお前達のようなお子ちゃまに興味はないのだと言われたような気分である、尊敬する先輩の鼻の下が伸びた様子というのは後輩としてはあまり見たいものではなかった。

「あははは、しょうがないよ。クレアさんはリインにとっては憧れの人だから」

そんな風に女性陣の中でチャライ先輩とは違って真面目で尊敬できる先輩という評価から、所詮あのスケベな先輩と親友、むっつりスケベという風にはリインの評価が悪い方向に修正されようとしている最中、そうエリオットは己が親友に対するフォローを入れる。

「クレアさんはリインが10歳の時だったかな、うちに来てさ。それ以来リインに勉強を教えていたんだよ。だからリインにとってはおひとりのお義姉さんみたいな存在なんだ」

だからアレは久しぶりに会えたお姉さんに対して甘えているようなものなんだと、そうエリオットはフォローを入れる。持つべきものは優しい親友である。これがこの場に居たのがクロウのような悪友であつたら喜々として有る事無い事吹き込んだ事であろう。

そんな風にエリオットに言われて改めて見ると、なるほど、確かに綺麗な年上の女性に鼻の下を伸ばしているというよりは久方ぶりに再会できて喜ぶ姉弟に見えなくもない、等と思えなくもなかった。これも日頃の行いというやつであろう。

「以上で持って調書の作成を終わらせていただきます、ご協力ありがとうございました。最後に皆さんの方から、何か質問はありませんか？」

5人全員の調書の作成が終わる頃にはもう夕暮れとなっていた。そうして最後にクレアのそんな問いを受けてリインが口を開く

「リーヴェルト大尉、今回の事件は結局どうなるのでしょうか？あの犯人たちは明らかにただの使い走りです。背後に何者かが居ること、そしてそれが領邦軍と手を組んでいる事は明らかですが？」

何かを期待するようなその弟分の真っ直ぐな視線にどこか申し訳無さを感じるかのようにクレアは一度視線を落とした後に改めて見据えて

「……実行犯に関しては我々で取調べを行った後に司法の場へと移される事になるでしょう」

何故ならば実行犯達は所詮は公爵家にとつて見ればわざわざ庇い立てる価値のあるような存在ではないから。

「ですが、その背後にある公爵家と領邦軍に関して言えば刑事責任を問うことは出来ないでしょう」

十中八九実行者達は黒幕につながるような情報は持たされていない

いだろう。よしんば持たされていたとしてもこの程度で逮捕まで漕ぎ着ける事はできない、精々革新派側が交渉カードの一枚になる程度のもので終わるだろう。

そうして告げた自分の言葉に歯噛みをする目の前の少年にクレアは申し訳なく思う。任せておいて欲しい、必ずや正當な裁きを齎してみせるとそう、言えたらどんなに良かったらうか。だが情けない事だが、これが自分の限界なのだ。《氷の乙女》等と持て囃されようと所詮自分は一介の大尉、四大名門アルバレア公爵家の権力を前にすればどうにも出来ないのだ。

「そう……ですか。お答え頂きありがとうございます、大尉」

誤魔化さずに真実を教えてくれてありがとうとそう告げてくる可愛い義弟の姿にクレアは眩しく思うと同時に自分の不甲斐なさを情けなく思うのであった……

・
・

「いえ、正直なところ余計な事をしたかもしれません。リインさんの方は何やらあの場を切り抜ける考えがあったようですから」

調書を終えて、ケルディック駅へとやってきたリイン達の感謝の言葉にクレアはそう答える。

あの時は領邦軍にリインが取り囲まれているという状況に焦り、慌てて介入したが今思えばあの時のリインには何か考えがあるような様子だったと。

「そう言えばなんだか急に挑発的になっていたわね……」

「うん、単に領邦軍の横暴にキレちゃったってわけじゃないよね？」

「ふむ、よければ教えていただけないだろうかリイン先輩。あの時どのような思案があったのか」

「私も興味あるな」

集中する後輩達からの視線、最終チェックだと言わんばかりにこちらを見据えてくるフィー、そして懐かしさを覚える問題に対する回答を採点するかのように優しい視線を向けてくるクレアに対してリイ

ンは

「別に大した物じゃない、というか他力本願も良いところだったんだが……光の剣匠の威光をお借りしようと思っただけの話さ」

「……なるほど、それで殊更威圧的に振る舞いだしていただけですね」

ラインの告げた言葉にクレアは即座にその意図を読み取り、理解する。そして同時に弟分の成長に感慨深さを覚える。クレアの知っているラインはどこか潔癖なところのある少年であった。それはクレアにとっては好ましいものではあったが、同時に欠点でもあった。誇り高い事は良い、クレアとて権威を振りかざすような存在は嫌いではある。

だが結局のところ、世の中どんなものも使い方次第なのだ。嫌いだから使わない、頼らないではどうしても出来ないことが出てくる。重要なのは必要な時を見誤らない事、それに溺れてしまわない事なのだ。そして今回のラインはそれが出来ていた。自分の物でない、権威に頼るといふ彼にとっては不本意な手段を誰かを護るために使おうとした。

故にこれはきつと墮落ではなく成長なのだ、そしてそんな弟分の成長がクレアにとってはたまらなく嬉しく、そしてどこか寂しかった。

「父上の……それはどういう事であろうか？」

理解したクレアとは裏腹に他の四人は詳しく説明して欲しいとラインへと問いかける。そしてそんな問いかけに対してラインは順を追って話していく

まずあの場にいた士官、あの年で未だ大尉という階級である以上十中八九平民の出身である。何故ならば貴族出身であるのなら領邦軍では優遇される、30代になる頃には佐官になっている事が通例である。にも関わらずあの士官は見たところ40は超えているのに未だ大尉の上に、名前にしても聞いたことのある貴族の家名ではなかった。故に彼は凡百いる平民出身の士官だと判断できた。

そしてラウラの父、アルゼイド子爵の武名に関しては何もはや語るまでもないだろう、その威光は決してアルバレア公爵とて無視できるものではない。そんなアルゼイド子爵の愛娘にして列記とした貴族で

あるラウラをを平民出身の一士官があろうことか盗人扱いする。

そんな事をすればどうなるか？まず間違いなくあの士官の暴走であったという風に処理されて終わるだろう。故にその事を伝えてやれば向こう側は退かざるを得ないだろうと、それがあの場において自分が考えた策だったとリインは伝えたのである。

「なるほど、私としては思うところがないわけではないが……」

どこか複雑そうな表情をラウラは浮かべて

「だが、確かにあの場を切り抜ける手段がそれ以外にはなかったという事も理解できる。そしてリイン先輩が彼らの生活を護らんがためにそうしようとしたという事も。故に我が父の名を使おうとした事、それに対する不満等はない……とは言い切れぬが理解も納得しよう」
「そう言ってもらえると有り難い」

苦笑しながらそうリインは応じる。

「……自分のプライドを優先して部下を死なせるような上官って結構多いんだよね」

何か嫌な事を思い出すかのように目を閉じてポツリとフィーはそうつぶやいた後にリインを見据えて

「だけど、先輩ならそういう時に自分のプライドじゃなくてきつと部下の命を優先してくれる。兵士としては良い上官だと思うよ」

微笑を浮かべてそう告げる。どうやらリイン新米士官はフィー先任下士官殿より指揮官としての合格点を貰えたようである。

「……どうよ、お預かりしたお宅の息子さんも随分と成長したでしょう。これも偏に私の指導の賜物ってわけよ」

どこか冗談めかしたような口調でそんな事を告げながらⅦ組の担任、サラ・バレスティンが駅より姿を現す。事情を聞き駆けつけたのであろう、もしも鉄道憲兵隊が来ずに生徒たちが領邦軍によって拘束されたという状態に陥った時に備えて。

「ええ、随分と成長した様子で。……義姉としては嬉しいんですけど

少々寂しい部分もありますね」

「全くあんた達はちよつと過保護すぎるんじゃないの？大慌てで駆けつけちゃって。リインだってもう17歳、それこそ働いていたってなら不思議じゃない年なのよ」

「そこはご容赦を。何と言つても7年前からの付き合いですから。どうしてもリインさんが小さかった頃のイメージを引きずってしまっているんです」

会話の内容、それ自体は穏やかな談笑と言つていいもののだがどこか火花が飛び散っているような気がするのはリイン達の気のせいだろうか。そんなやり取りを少しだけ行つた後にクレアはリイン達の方へと向き直り

「それでは皆さん、私はこれで失礼させていただきます。―――特科クラスVII組、私も応援させてもらいますね」

そうVII組の面々へと告げた後にリインの方を愛おしげに見つめて「リインさん、くれぐれもお気をつけて。貴方は閣下に残されたただ一人の肉親なのですから。貴方に何かあれば多くの人が悲しみます。閣下もレクターさんもミリアムちゃんも……そして私自身も」

かつて失つてしまった大切な宝石のような弟の笑顔、あんな思いを味わうのはもう二度とごめんだとクレアは告げて

「……うん、クレア義姉さんも身体に気をつけて」

そうしてクレアらが引き上げて程なく、リインたちもオットー元締め達に別れを告げて初めての特別実習を終えるのであった……

...

時刻は深夜、ケルディックの町を見下ろす丘に二人の男が佇んでいた。

「君の言うとおりであったな、《同志C》。《氷の乙女》はあの男の息子に對して立場を超えた執着を抱いている。故に“あの男”の息子が危機にさらされるような事があれば平静さを失うだろうと」

一人は眼鏡をかけたどこか知性と同時に神経質そうな壮年の男性

「これで、私がただ遊んでいたわけではないと理解してもらえたかな、
《同志G》」

もう一人はそんな男より《同志C》等と呼ばれた仮面の男。変声機を使っているのだろう、その声はくぐもったように聞こえ、誰の声かの判別をつけるのが難しいようになっていた。

「ああ、そして謝罪しよう。君が“あの男”の息子に絆されてしまったのではないかというあらぬ疑いをかけてしまったという事を。むしろその逆、君はあえて懐に潜り込み見事欺いて、有力な情報を手に入れてくれていた。その献身に心からの感謝を」

「……理解してもらえたようで何よりだ」

どこかまんまと騙されている相手を嘲笑するかのような様子で告げる男に対して、仮面の男は何かを振り切るかのように一拍遅れて答える。

「《鉄道憲兵隊》と《情報局》、今後の計画の障害になりうるこの2つの連携についても把握する事ができた。最初の成果としては上出来だろう」

「故に、そろそろ始めるとしよう」

「ああ、全ては“あの男”に無慈悲なる鉄槌を下すために」

「全ては“あの男”の野望を完膚なきまでに打ち砕かんがために」

リイン・オズボーンの青春時代、それが終わる日は刻一刻と近づいていた……

鉄血の子とグランローズ

「えへへ、それじゃあ行ってくるね、リイン君」

「ああ、行ってらっしゃい。ゆっくり楽しんできてくれ」

微笑みながら告げるトワへとリインは穏やかに微笑み返しなが
見送る。彼女のその笑顔にリインは一日の疲れがすべて洗い流され
ていくかのような心地よさを覚える。

「悪いねリイン、ジョルジュ、このバイク二人用なんだ。まあ生憎私は
野郎とタンDEMする気はないし、サイドカーはトワが定位置なため諦
めてくれたまえ」

そんな冗談を不敵に笑って告げるとアンゼリカは導力バイクのエ
ンジンをつけてトワを乗せてめくるめくツーリングへと出かけるの
であった。

「これでトワが元気になってくれると良いんだけどね」

「ああ、マキアスとユーススの事をずっと心配していたからな」

特別実習は無事に終わった。リインの読み通りと言うべきか、B班
の方もユーススとマキアスの険悪さこそ解消されなかったものの、ガ
イウスとエマの二人が緩衝材となりトワが纏めた事で空中分解する
事もなく、そこそこの結果で終わったという事である。そう、あくま
でそこそこの結果である。残念ながら「青春の汗を共に流す」事でど
こかの二人のように険悪だった事が嘘のように親友同士になる、等と
いう事はなく相も変わらずユーススとマキアスの関係はさながら革
新派と貴族派の関係をそのまま象徴するかのような状態であった。

ある意味ではB班の面々の気性が裏目に出たといえるのかもしれない、トワもそうだがエマにしてもガイウスにしても当然ながら二人
が喧嘩をしそうになると必死に間に入り、宥めた。その結果空中分解
するような事は未然に防がれたのだが……逆に言う二人がむき出
しの感情でぶつかり合う機会を奪ってしまったとそう言えなくもな
い。リインとクロウが親友となれたのも、そうしたぶつかり合いを経
てこそだったのだから……

その事にトワも実習が終わった後に気がついたのだろう、良かれと

思つて止めに入つたが二人が仲良くなるにはむしろ止めに入らないほうが良かったのかもしれない等と少し落ち込んでしまったのだ。そうしてそんな落ち込んだ親友をアンゼリカが放つておくはずもなく、巡つてきた自由行動日の日、生徒会の仕事をリインと共に終えたトワを誘い、ああしてツーリングへと出かけたというわけであつた。時刻はそろそろ夕刻、アンゼリカが早く出かけるためにと手伝つてくれた事もあつて思いの外早く終わった事で、リインにとっては非常に稀な事に暇な時間が出来ていた。

「どうだジョルジュ、キルシエで一服しないか？お前には何かと世話になつてゐるし、たまには奢るぞ。二人が女同士で交流を深めてゐるというのならこつちは男同士で交流を深めるとしようじゃないか」

導力機器の故障が起きた際など、技術関係で日頃世話になつてゐる友人へとリインは笑みを浮かべながら提案する。

「ありがたい誘いだけど、ちよつと片付けたい案件があつてさ、もう少し時間かかりそうなんだよね」

「なあに、それなら俺たち二人も手伝うから手早く片付けるとしようぜ！」

リインが手伝いを申し出ようとしたところ、ガラリと技術棟のドアを開く音と共にクロウが現れていた。

「……言つておくが俺が奢ると言つたのはジョルジュ相手であつて、お前に奢るとは言つてないぞ」

「おいおい、未来の元帥様がケチくさい事言うんじゃないやねえよ。気前の悪い奴何か碌に出世できねえぞ」

末端の兵士の心をつかめる事ができるのはどういふ指揮官というものには多種多様な意見があるが、その一つに予算取りが上手く気前が良いという事があげられる。この世はミラが全てではないが、大抵の事はミラで解決出来る事もまた事実。訓練をするにも、兵士を雇うにもミラが居るのだ。良い指揮官というものは即ちそれだけ予算取りが上手く、部下に対して気前の良い指揮官という事でもある。きちんとした待遇を用意しない国や指揮官のためにどうして命を賭けて戦えるだろうか？自分達の生活を保障してくれる存在なればこそ兵士は

命を賭けて国のために戦うことが出来るのだ。

「ああ、そうだな。正当な働きに対しては正当な報酬があつて然るべきだ。だから俺はジョルジュに奢ると言っているんだ。何か言いたいことはあるか、アレほど俺とトワが釘を刺したというのに学校をサボつたこの大馬鹿野郎」

青筋を立てながらリインはそんな事を告げる。リインたちが特別実習へと赴いていた4月24と25日、目の前の悪友もまた学校をサボっていた事をリインたちが聞かされたのは帰つてからの事であった。ただでさえ単位がギリギリでアレほど口を酸っぱくこのまま行けば留年になるぞと言ひ聞かせたのにこの有様。流石のリインも堪忍袋の尾が切れた。

「この分だと卒業旅行用に行くバイクはもう一台作るだけで良さそうだね、クロウはもう一年の学生生活を存分に謳歌してくれると良いよ」

哀れ一人学院に残つたクロウ・アームブラスト。後輩達からもヒソヒソと遠巻きにされて教官達からも呆れきつた目で見られる三年目の学院生活。そしてそんなクロウの下に卒業旅行を謳歌している様子の友人達四人の写真とが送られてくる、このまま行けばそんな未来も十二分に有り得そうであつた。

「だーなんて友達甲斐のない奴らだ！そこは意地でも俺が卒業させてみせる！とか言うところだろうか！」

「なんだ、そうして良いのか。よしそういう事ならば教官方に温情を頂けるように奉仕活動をさせる代わりに幾つかの単位を得られるように」

「すいませんでした。心を入れ替えます」

晴れやかな笑顔を浮かべながらさーて一日の睡眠時間はまあ六時間あれば良いだろう等と言いだしたリインへと悪寒を感じたクロウは慌てて平謝りする。そんなクロウを仕方のない奴だと笑いながら三人は修理に取り掛かり、手早く済ませた後に学生会館へと向かうのであつた。

・
・
・

「ふむ、つまりはそのハイアームズ家の三男坊が随分と増長して
どうしたものか悩んでいると」

「端的に言うとそのころね」

コーヒーを飲み干しながらリインはふむ、と持ちかけられた相談の
内容を吟味する。

キルシエを訪れた三人であつたが、ちょうど夕刻時という事もあり
生憎席が満席となつていた。どうしたものかと思案する三人だつた
が、フエンシング部の部長と副部長を務めるフリーデルとロギンスが
相席を提案して来たのでその言葉に乗ると、してやったりと言つた表
情でフリーデルはあることを相談して来た。

「お前さんが叩きのめしてやりや良いんじゃないのか？ロギンスと引
き分けだつたつて事はお前さん以上つて事はないだろ」

ちよつと油断しただけだというロギンスの弁解の言葉を受け流し
ながらクロウはサラリとそんな事を告げる。フリーデルは自分たち
と同じく昨年度の獅子心勇士章の受賞者で二年四傑にも数えられる
使い手だ。まず遅れを取ることはないだろうから、そうやって生意気
な大貴族のお坊ちゃん鼻っ柱をへし折つてやれば良いだろうと。

「あ、それはもうやつたの。でも駄目だつたわ。ほら、私一応これでも
武門の名家フェルデンツ伯爵家の人間でしょ？パトリック君的には
負けてセーフの相手だつたみたいなのよ」

フェルデンツ伯爵家は領邦軍の中核を担う将校を幾人も輩出して
いる名家である。フリーデルの兄二人も両方軍において既に将来を
嘱望される将校としてすでに活躍している。そんなフェルデンツ伯
爵家の人間が相手、加えて先輩が相手ともなれば負けてもハイアーム
ズの面目は立つと判断したのでだろう、パトリック・ハイアームズの
鼻っ柱が折れる事はなかつた。

「……返す返すもロギンスが最初に分けたのが痛いな、それですつ
かり調子に乗ってしまったのだろう。「ああ、自分の腕は副部長を務め
る先輩にも引けを取らない、平民などこの程度か」とな」

「だなーったく何やつてんだか」

「ロギンス君アレですっかりパトリック君に舐められちゃったもんねー」

「て、てめえら………!」

ボロクソに貶してくる友人達にロギンスはひくひくと青筋を立てる、大分丸くなつたとは言え元々一年の頃はかなりの問題児だった男、気が長い方では決してない。言い返したいところであるがなまじこの三人は学年四傑とも呼ばれている実力者、まず一年坊相手に遅れを取らない事を考えると言い返す事もできなかった。

「ふむ、そうなると同学年の平民生徒相手にでも一度負けるのが一番効く薬なんだろうが……」

「うーん、こつちからパトリック君の鼻っ柱折ってなんて頼んだらそれこそ私達が気に入らない後輩イジメているみたいになつちゃうし、やっぱりしばらくは見守るしかなさそうね」

元々すぐに名案が浮かんで一発解決等を期待していたわけではないのだろう、あつけらかんとフリーデルは言い放つ

「ち、あの生意気な野郎のお守りをまだしばらくは続けないとならねえのか」

「あら、誰かさんだつて去年はそんな感じで先輩方を困らせていたじゃない、ねえロギンス副部長」

「そういえばヴァンダール流だかなんだか知らないがとか言つて俺に果し合いを申し込んできた男が居たな、ロギンス副部長」

「狂犬みたいにあちこちに噛み付いているやつが居たよな、ロギンス副部長」

「……てめえらアレか、実は俺の事が嫌いなのか」

そんな漫才をしながらリインはハイアームズ家の三男坊、パトリック・ハイアームズを少しだけ注意すべき新入生として少しだけ心に留置くのだった……

……

「ん、アレは……」

キルシエを出たリインとはある光景に目を丸くする。遠目からでもひとときわ目立つ長身の青年、ガイウス・ウォーゼルが花屋《ジェー

ン》の前に立っていたのだ。

「アレは《グランローズ》だな」

グランローズ、それは帝国において主に想いを告げる際に使われる大きな赤いバラの花で花言葉は『熱烈な求愛』。手渡すだけですなわち告白したと見なされるような花である。

「ヒュー、なんだなんだ、つて事はこれからアイツ誰かに告白するつて事かよ。やるなあ、おい」

口笛を吹きながらクロウは囁し立てるようにそう口にする。

「……いや、待て。ガイウスはノルドからの留学生だ、帝国の文化に疎いところがある。ひよっとしてグランローズが求愛を意味する花だという事を知らない可能性もあるんじゃないか」

例えば日頃のお礼に誰かに花をプレゼントしようと思ひ立ち、店員であるジェーンへと相談した結果ジェーンは悪意なくグランローズを薦める。グランローズが求愛を意味するのは帝国では半ば常識である、その気がないただの友情であるのならば断るだろうし、そうであるのならば背中を押す事に繋がるからだ。

だがガイウスはノルドからの留学生、そうとは知らずに店員が薦めるのだからこれで問題ないのだろうと判断して親愛のつもりでグランローズを渡す等という事になる可能性もある。

「いいじゃねえか、放っておけば。それはそれで面白い事になるだろうしよ」

不幸な行き違いを未然に防ぐべくガイウスへと念のため確認を行うおうとするリインはクロウはそんな風に笑みを浮かべながら止めるが

「そういうわけにはいかん」

真面目なこの男はそんな悪友の囁きには乗らなかつた。

「つまり……同じ美術部のリンデに元々スノーリリーの受取を頼まれて、その後にグランローズを追加で頼まれたのか」

「ああ、あくまで頼まれたものであって俺からのプレゼントというわけではないんだ。……しかし求愛を意味する花だったとは。リンデ

は誰か意中の相手でも居るのかな?」

「はは、かもしれないな。呼び止めて済まなかったな」

そう言ってリインは学院へと戻るガイウスを見送る。

ここでリインが女心に敏感であれば『熱烈な求愛』を意味するような花の受取をうら若き乙女が同年代の男子にお願いするような事をするかという風に違和感を抱いたかもしれないが、この男はその手の機微に割り振るべきものを軍事的センスだとかに振っている男。特に違和感を抱く事はなかった。

「やれやれ、何も気づいてないんだなお前さんは」

そしてそんな親友を小馬鹿にしたような、いやようなではなく真実馬鹿にした笑みをクロウは浮かべる。

「俺が何に気づいていないって言うんだ」

そんな悪友にリインはイラツとする気持ちを抑えながらも問いかける

「ふう、やれやれニブチンなお前に特別に教えてやるとしよう」

そうしてクロウはチツチツチと指を振る。大変にうざい、今すぐにその頬に右ストレートを叩き込みたい衝動がリインを襲う

「良いか、グランローズは求愛を意味する花だ。それくらいは流石のお前さんも知っているよな」

「ああ、流石にな」

グランローゼの恋物語は帝国においても特に有名な話だ。恋物語それ自体への興味が乏しいリインにしても、歴史上の知識としてその程度は把握している。

「そしてそんなグランローズを買って学院の方へと歩いていくガイウスの姿はあちこちで目撃されるだろう、なんせあの長身だからかなり目立つし、特科VII組は何かと注目の的だからな。そして何事かと思っ
て追ってみるとそこにはグランローズを笑顔で受け取りながら礼を言う同じ美術部のリンデの姿があるわけだ。さあ此処まで言えばわかるだろ?」

「いや、全くわからん」

そりゃ頼んでいた物を買ってきてくれたんだから笑顔で礼を言っ

て当然だろう、お前は一体何が言いたいんだと言わんばかりのラインの様子にクロウはずっこける。政治だの経済だの戦争だのと言った分野に関しては驚く程鋭い癖に何故こういう分野だとかこの男は何故こんなにも鈍いのか、それがクロウには不思議でしようがなかった。「あーつまりだ、ガイウスのやつにはその気がなくても傍から見るとガイウスのやつがリンデの奴に告白したようにしか見えねえって事だよ、しかもリンデはそれを笑顔で受け取る。傍から見るとまあ二人が相思相愛にしか見えねえわな」

いやー人畜無害そうな顔をして女って怖いわー等と呟くクロウの様子にラインもようやくクロウの言っている事を理解する。すなわちコレは所謂外堀から埋めにかかったリンデの巧妙な策なのだ。その強かな策略に薄ら寒いものを覚えながらラインは急いで後輩を魔の手から救わんと奮い立つが

「辞めとけて、お前さんこの手のアレには疎くて役立たずなんだしよ。他人の恋路に首突っ込んだって良いことなんて一つもないぞ」

言われずとも自分がこの手の分野で役立たずのはラインと手百も承知。馬に蹴られる趣味もない。故にこれが正面からの告白であるならばラインは特に関わる気はなかった。だが

「だが留学生というガイウスの無知につけ込むような真似を看過するわけにはいかないだろう」

ラインにとって引っかけかりを覚えるのはそこであった。無知な者に対してそこにつけ込むような真似をする事にはどうしても嫌悪を抱くのだ。

「で、そんな風に問い詰めて「私はガイウス君に花を自分の代わりに受け取って欲しいとお願いしただけですよ」と言われたらどうするつもりだ？」

「む……………」

この策の巧妙なところ、それはあくまで周囲が勝手にそう解釈するだけであってリンデ本人がそんなつもりはなかったと言ってしまうばそれで終わりの点だ。実際ラインの様にそうとわからなかった朴念仁も居た以上、有り得ないとは言い切れない。そう言われてしまえ

ばただの邪推と難癖にしかならない。

「ま、見たところ中々に可愛い子だったしよ。上手く行く事を祈るとしようや」

「すまないガイウス、無力な先輩を許してくれ……」

さらばガイウス・ウォーゼル、せめて自分が罫に嵌められた事も気づかないままに安らかに幸せになってくれと二人はノルドから来た後輩の冥福を祈るのであった……

鉄血の子と最高の相棒

呆然とした様子でⅦ組のメンバーはその光景に魅入られていた。
「電光石火！」

片方は文字通り《紫電》と化した彼らの担当教官であるサラ・バレスタイン。その様子に常のだらけた空気は欠片も存在しない、先程ユーシスとマキアスの二人が為す術もなく敗れ去った光景で彼女の評価は一気に上がったが、今の彼女を見ていれば自ずと理解しざるを得ない。あんなものはまだ手抜きも良いところだったのだと。それ程までに今のサラ・バレスタインは先程までとは桁が違う。

「クロウ！」
「おう！」

そしてそんな《紫電》をツールズ最強と謳われる二人のコンビが迎え撃つ。多くを語らずとも通じる、以心伝心、阿吽の呼吸、そんな言葉を体現するかのように絶妙なコンビネーションを見せつける。

こいつならばこうすると互いが次に何をするのか理解しているかのように。どこまでも正道を往くりインの剣と奇抜な行動によって翻弄するクロウの銃撃、どこまでも対照的で下手な事をすればそれこそ互いに足を引っ張り合って終わりかねない、それが絶妙に噛み合っている。

ほんの一瞬遅れればリインに直撃しかねない攻撃がすり抜けるかのようにサラを襲う。仮に今のリインが、あるいはクロウが二人居たとしても未だサラには及ばない。だがリインとクロウの二人ならばすでにサラと五分、いやあるいはそれ以上と行っても良い領域へと至っていた。

そんな目の前の完璧とも言えるコンビネーションを見せつけられてⅦ組の面々は理解する、自分たちは未だ戦術リンク機能を全くと言っていない程使えていなかったのだと。

「……………」

「……………」

苦虫を噛み潰したような顔でユースとマキアスをその光景を目にする。

2回目の特別実習の班編成の二人の抗議に対して行われた「力づく」の抗議は虚しい結果に終わった。そうして協力し合うどころか足を引っ張り合って文字通り瞬殺された二人に対して告げられた「あまりにも酷いからお手本を見せて貰いなさい」という言葉と共に姿を現したのは、一人は毎日顔を合わせ、同じ学生寮で寝食を共にもしている男、学年随一の秀才と名高き副会長リイン・オズボーン。

もう一人はチャラくてふざけた不良の先輩という印象であったクロウ・アームブラスト。目の前で素晴らしいコンビネーションを見せつける二人に対して無様としか言いようがなかった先ほどの自分たちの醜態を思い出しているのだろう、剣術を使う前衛と銃を使う後衛、誰に一番この光景を見せたくてあの二人をサラが呼んだのかは明らかであった。

「本当に！此処まで、やるようになるだなんてね！あんたたち、出会ってまだ一年程度の付き合いだっけ言うのに！ちよつと、仲良すぎるんじゃないの！」

「そうですね、自分でも時折不思議に思いますよ。なんでこんな奴と俺は親友になったんだろうって」

「奇遇だな親友。俺もだよ、なんでこんなクソ真面目なやつと俺はつるんでいるんだってたまにと言わずにしょっちゅう思っている」

激戦の最中、そんな風に名コンビは軽口をたたきあう、その口調は言葉とは裏腹にどこまでも相手に対する信頼を感じさせるもので

「けけど妙に気があつてしまつたんだから仕方がない」

何故仲良くなれたのか、それを聞かれれば二人はこう答えるだろう、なんか妙に気が合ったのだと。もちろん本音を晒し合う喧嘩をやったからというのは大きな理由ではあつた、だがそれは互いに知り合うきっかけであつて今日までつるむようになった理由、それを聞かれればやはりこう答えざるを得ないだろう。「気がついたら妙に馬が合っていた」のだと。友情等というのは案外そんなものなのかもしれない。

「すごいねあの二人、息ピッタリ」

ゼノとレオのコンビを思い出すかも等と彼女が今まで見てきた中で凡そ最高峰に位置する名コンビを比較に挙げながらフィーは目の前の光景を興味深く眺める。タイマンで以前リインが自分より上だと認めた彼女だったが、それでも勝機が全くないとは思わなかったのだ。正面きって戦えば不利だろうが、それでもやり方次第では十分対抗できる、そう思った。

だがあの二人を相手にしたら駄目だ。それは2対1だからとかそういう次元じゃなくてコンビを組んでいる状態のあの二人はお互いの力量を何倍にも引き出し合っているから。その光景はまさしく団にいた頃幾度も目にした真のパートナー同士の姿で

「……うむ、あの御仁を少し見誤っていたようだ」

「そうね、ただのスケベな先輩じゃなかったのね」

片や真面目な優等生で軍人志望で鉄血宰相を敬愛する男

片や不真面目な不良生徒で軍や国というものに対して懐疑的で鉄血宰相を憎悪する男

そんな凡そ対照的な二人が仲の良い親友同士である事はⅦ組の面々にとつては長らく謎であった。特にⅦ組の中でも一際リインを尊敬しており、気質が近いところのあるマキアスとラウラ等は何故あんな不真面目な先輩とリイン先輩が友人同士なのかと本気で訝しんでいたのだ。

そう、こうしてクロウの戦う姿をⅦ組の面々が見るのはこれが初めてだったのだ。そうして普段とは打って変わった様子を見た事でラウラとアリサはクロウに対する評価を上げる。

先月の実習に行く際のやり取りでチャラくてスケベな先輩という認識になっていたクロウだったが、此処に来てどうやら「チャラくてスケベだがやる時はやる先輩」という風になったようである。

「さながらリイン先輩の方がノルドの大地のような剛直さならば、あちらの先輩の方はノルドの風の如き奔放さだ。そしてそんな対象的な二人が反発し合うのではなく調和しあい、互いを高めあっている」「ふふふ、ガイウスさんは本当に故郷を愛しておられるのですね」

事あるごとに故郷であるノルドの大地や風のようにだと形容するガイウスの様子にエマはクスリと笑みを溢す。

「む……不快だったのならすまない。俺としてはあくまで賛辞のつもりだったのだが……」

「いえいえ、ガイウスさんが本当に故郷を大事に思っていていらつしやる事も褒め言葉として言っていていらつしやる事もわかっていますから。不快だなんて事は全く無いですよ」

「うん、それがガイウスの個性なんだと思うよ。それにしても……すごいねあの二人」

良かったねという思いと一番の親友の座を奪われてしまったという僅かな寂寥感を覚えながらエリオットはそう言葉を漏らす。昨年の夏至祭の時の出会いでラインとクロウの両名が親友であることは知っていた。そして今こうして息を合わせて肩を並べて戦うその姿は、入学して以来何時もラインの後ろで護られっぱなしの自分などよりもよっぽど兄弟のようである。

「そう、焦ることはない。皆それぞれに個性や良さというものがある。エリオット・クレイグはライン・オズボーンやクロウ・アームブラストにはなれないかもしれないが、あの二人とてエリオット・クレイグになれるわけではないのだから」

エリオットの心が暗く闇に閉ざされかけたその時に爽やかな風が吹き抜けるかのように、そう言葉が響いた。

「え……？」

「何やらエリオットはライン先輩に出来る事が自分には出来ないし殊更自分を卑下しているようだがな、逆に言えばライン先輩に出来ないがエリオットに出来る事とて無数にあるだろう。少なくともライン先輩は音楽や芸術への造詣がお世辞にも深いとは言えなかったと思うがな」

学園祭などを経て多少の改善は見られたものの芸術分野に関してはやはりライン・オズボーンはどこまで行っても門外漢。本気でプロを目指したこともあり、今も忙しい生活の合間を縫って練習を続けているエリオットへと当然及ぶべくもない。

「でも僕は男なのにリインみたいに強くないし……」

帝国男子の鑑。正義感が強くイジメっ子に対しても怯むこと無く立ち向かい、剣術道場にも通いだしてたくましく強く育ったリインは何時しかそう呼ばれるようになっていた。エリオットの地区では何かが起こった時には、リイン兄ちゃんに言いつけるぞ！が子供にとつての必殺の言葉になったものだった。

それに対して自分は言うのと女顔で言われるのは可愛いという言葉、帝国は武を重んじて質実剛健を是とする国。そんな帝国男子の鑑とも言える親友に対して柔弱な自分に、エリオットはずっと心の何処かでコンプレックスを抱いていたのだ。

「ふむ……俺の部族にドルジさんという方がいてな。彼は槍の腕はからつきしだが、一族でも随一の笛の名手でな、祭りの時等、皆彼の演奏に聞き惚れるものだ。諍いが起きた時も彼が笛を吹くだけで争い合っていた者たちも落ち着きを取り戻す。槍を振るう事無く、な」

そうしてガイウスは真摯な瞳をエリオットへと向けて

「俺は彼より槍の腕が優れているという自負はある、だがそれだけの事だ。強いとか弱いとか、そんな事で人の価値は決まらんだろう」

「あ……」

ガイウスのその言葉にエリオットは思い出す。音楽は人と人をつなぐ架け橋になれるのだと、そう信じていた頃を。

胸を張って父に言えば良かったのだ、自分は音楽の力を信じている。父さんやリインとは違う道だけど、それでもきつと多くの人を幸せにできると。

「……ありがとう、ガイウス。僕、頑張ってみるよ」

「迷える友の力になれたというのなら幸いだ。もしも俺が迷った時は、活を入れてくれると助かる」

「うん、その時にはガイウスが元気になれるような曲を演奏するよ」

未だ迷いが完全に晴れたわけではない、でもリインと自分を比較して一人で勝手に落ち込むのは辞めよう。そうエリオットはガイウスに笑顔で礼を言いながら決意を新たにするのであった……

「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

そんな風に義兄弟が自分にコンプレックスを抱いていた事も、自分の知らない内にコンプレックスが解消されたという事を知る事もなくリインは心を満たす高揚感と共に双剣を振るっていた。成長しているという実感、全力で背中を預ける事のできる無二の相棒、次に何をやるかが互いに理解し合っているという境地、一対一では未だ高みに位置する教官相手にこうして五分に渡り合えているという事実、それらがリインにとつては頼もしく思えた。

自分たちは無敵なのだ。俺たち二人揃って出来ない事はない。そんな錯覚さえ覚える程に。

「クロス・ストライク!」

放たれるのは心を通わせあつた真のコンビだけが使えるコンビネーションクラフト。決着をつけるべくリインとクロウは昨年度、5人がかりで目の前の相手を倒した切り札を叩き込む。

「ノーザンイクシード!」

(舐められたものね)

確かに以前その技に自分は遅れをとつた。だがそれはアンゼリカとトワの放つたコンビネーションクラフトの迎撃にこちらも奥義を使った直後だったからこそ。正面からの打ち合いであれば未だ遅れを取らない自信がある。加えて言うのならあの時はジョルジュの援護もあった、そして今自分が使う奥義は遊撃士となってからは封印していた猟兵時代に使っていたとおき。どこをとつても自分に敗北する要素はない、そう確信を抱く

「!?」

敗北は有り得ない。そのはずだった。

押し負けていく、自分の最大最強の奥義が。正面から。

同じ技でも、もはやコレは以前とは別物だ。

迫ってくるリインの双剣、それを前にして

「本当、仲良すぎでしょ」

悔しさと教え子の成長に対する喜びを味わいながらそんな言葉を

零して、サラ・バレスタインは己が敗北を認めるのであった……

……

コツンと見事勝利した二人は無言で拳をぶつけ合う。多くを語る必要はない、それだけで分かり合える。やったなど、そう笑みを浮かべ合う。

「アタタタタ……ああ、もう本当は貴方達二人に真のコンビネーションをもってものを見せつけてもらった後にそんなアンタ達を私が蹴散らして「やっぱりサラ教官ってすごいなー」ってする予定だったのに台無しじゃないの」

「サラ、台無し」

「その発言がなければ素直に尊敬出来た物を」

せつかく上げた株を自ら下げようような真似をする己が担任に一同はしらーつとした目を送る。

「よっしゃー！これで単位ゲットだ！！」

「……こつちもせつかく見直しかけていたのに」

ガッツポーズをしながらそう雄叫びを上げるクロウにアリサは冷めた目を送る。

当然だがリインやトワではあるまいし、クロウ・アームブラストの辞書に無償労働という言葉が存在しない。わざわざ実技を披露したのも「自分に勝てたら単位上げるし、勝てなくても考慮してあげるわよ♥」という餌に釣られての事である。

「でも、本当にすごかったですよ」

「ああ……素晴らしいものを見せてもらった」

「やっぱりリインはすごいなあ」

そうエマにガイウス、エリオットが感嘆を漏らす。

「さて、若干予定とはずれちゃったけどコレで貴方達も良く理解できましたでしょう。ARCSの持つ力が。真のコンビネーションは足し算ではなく乗算になる。互いを高め合うものなのよ。最もここまでの境地に至ったコンビを見たのは私にしてもそう多くはないけどね」

「ふ、これも俺達の友情あつてだな、親友！」

「ああ、そうだな」

調子の良いことを言いだしたクロウの親友という言葉に異論を挟む事無くリインは苦笑しながら首肯する。否定するところはどこにもない。クロウ・アームブラストはリイン・オズボーンにとつて間違はなく無二の友なのだから。掛け値なしの友情を自分は目の前の親友に抱いている。

「ま、私はあの教頭と違ってあんまりくどくど言う趣味はないからこの辺にしておくけど。足し算にすらならずにもしろ引き算になつていたその二人はしっかり反省するように、良いわね」

最後に釘を刺すかのようにサラは二人へと告げる。仲間内における不和は死に直結する、猟兵として戦つていたサラ・バレストアインはそれを良く知つていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（やはり、どこかで一度とことんまでやり合わせたほうが良さそうだな）

無然とした面持ちの二人を見つめながら、二回目の特別実習を前にしてリイン・オズボーンは静かにそう決意するのであった……

鉄血の子と翡翠の都 《バリアハート》①

「えっと……つまり、お二人が喧嘩したらあえて止めに入らないようにするという事でしょうか？」

特別実習を翌日に控えた28日の夜、リインはエマの部屋を訪れた。

夜に年頃の男が同年代の女子の下を訪れるとあらぬ想像をするかもしれないがそういった意図はリインには一切ない。訪ねた目的、それは目下Ⅶ組内において不協和音を奏でているユーシスとマキアスの事だった。

「ああ、これは経験談だが一度徹底的にやり合わせてお互いの抱いている想いを存分に吐き出させあつた方が良い。なまじ周囲が途中で止めるからいつまでも火種が燻るんだ。一度思いつきり爆発させてしまおう」

自らにとつての一番の成功体験を踏まえてリインはそんな提案をする。

「トワが班長でも和解まで至らなかつたという事はつまり穏健的なやり方では解決しない」

柔和な着地点を模索するやり方でツールズに於いてトワの右に出るものは居ない、そのことをリインはよく知っている。そのトワで駄目だったという事は即ち穏健的な話し合いのみでは解決しないという事、故に優しい彼女では取れない少々荒っぽいやり方以外にないだろうとリインは判断した。

「考え自体は悪くないと思うけど」

ちようどエマの部屋にて勉強を教えてもらっていたフィーは興味があるのかないのか判断に困る表情で指揮官の判断を肯定も否定もしなかつた。

「でもバリアハートと言えばクロイツェン州の州都ですよね……そんなところで公爵様のご子息であるユーシスさんが顔を赤く腫らすような事になったら不味いんじゃないでしょうか？」

「最悪マキアス捕まるかも」

バリアハートは貴族の街でありアルバレア公爵家は皇族を除けばその頂点に位置する言わば王と行っても過言ではない。学院での喧嘩であれば生徒同士の良くある諍いという事でリインとクロウがうだつたように精々便所掃除と言った罰則が課されて終わりだろうが、バリアハートであればそうは行かない。もしもユーシスが怒りのままにマキアス突き出すような真似をすればマキアスは一卷の終わりだろうし、それこそ止めなかったリイン達も纏めてしよつ引かれかねない。

「確かにユーシスがマキアス突き出すような真似をすればそうなるだろうな。だが2ヶ月一緒に過ごしてみても君たちはユーシスが思うと思うか？」

「……いえ、確かにユーシスさんは気難しいところがある方ではありませんけど、そういったアルバレア公爵家の権威や権力を傘に着るような真似は嫌う誇り高い方だと思います」

「ま、確かに。マキアスに殴られたからと言って実家に泣きつくとかそういうのは意地でもしなさそう」

ユーシス・アルバレアは誇り高い男だ。親しい友人同士と言える仲間になったのはⅦ組の中でも現状まだガイウス位だが、それでも2ヶ月も寮での生活に学院での授業とほとんど四六時中に居れば凡その人となり程度はわかる。現状彼が四大名門アルバレア公爵家の威光を自分から笠に來たという事はないし、貴族はおろか帝国人ですらないガイウスと友人になっている事からもその手の差別意識があるわけではない事は明らかである。

「無論他者に迷惑のかかるようなところでやろうものならこちらも止めざるを得ないが、そうでないところ、例えば魔獣退治に出た街道などで二人が喧嘩をはじめたならば極力仲裁せずに徹底的にやり合わせたいと思っている。怪我にしても魔獣にやられたで済むしな」

最も流石に街中でやるような真似はあの二人もしない程度の分別はあるだろうが等と呟きながらリインは肩を竦める。班長としてある程度の釘刺しは最初に行うつもりではいるが、戦術リンクシステムはリンクしている者同士の心が諸に反映される。自分とクロウのよ

うに信頼し合ったパートナー同士であればそれこそ互いの力を何倍にも引き出すが、逆に不和を抱えた状態やあるいは距離が離れすぎた場合には《リンクブレイク》と呼ばれる現象が起きることが昨年のテストの際に確認されている。

後者は技術的な要因なのでもかくとして前者は使い手の心というある種どうしようもない要因なので、これこそが戦場に新たな革命を齎しうるポテンシャルを秘めていながら、未だARCSが量産体制に移っていない最大要因でもあるのだが、それは今回の話にはあまり関係ないのでおいておく。

兎にも角にも上っ面を取り繕っただけの状態でやれば十中八九その《リンクブレイク》が起きるだろうとリインは読んでいる。そしてその時、二人は奥底に溜まった相手に対する感情をぶつけ合うだろう。その時に自分たちが静止したり、邪魔が入っては台無しになる。それ故にこうしてリインは二人の居ないところでエマとフィーに対して言い含めているのだった。

「……リイン先輩の意図は理解できます」

前回の実習の際も自分たちが必死に仲立ちしようとしてもついで無駄に終わってしまった事を思い出す。そして部長から熱く語られた目の前の先輩の今では名実ともに親友となった男との大喧嘩の話も。確かにアレほど息の合った親友と仲良くなつたきっかけが、部長の言っていたように大喧嘩によるものだったというのなら、なるほど一度喧嘩したほうが良いという提案にも頷ける説得力がある。

「ですが、お二人の時のように対等の喧嘩になれば良いですが、一方的な蹂躪になった場合はどうしますか？それこそやられた方は何時までも引きずる遺恨が残りにかねないかと」

「……む」

リインとクロウが喧嘩の果てに和解できたのは対等の殴り合いだったからこそだ。どちらかが明確に勝ったわけではなく両者共に気絶するまでに殴り合うという結果になったからこそ。だがユースとマキアスの場合もそう上手く行くとは限らない、どちらかが一方的に勝利して勝った方は奢り、負けた方はますます相手に対する反感

を強くするという可能性とて十分にありえるのだ。

指摘されてそのリスクに気づいたのだろう、リインもまた押し黙る。

「……確かに。マキアスとユーシスの二人だったらマキアスが一方的にボコられて終わりって可能性も十分に有り得そう」

悲しいかな、現状戦いの分野においてマキアスは明確にユーシスを下回っている。剣術とは何も剣の扱いだけを学ぶわけではない、剣を持たない無手の戦い方も同時に仕込まれるものなのだ。そしてユーシスが宮廷剣術の使い手なのに対して、マキアスは士官学院に入学するまで何らかの武術を修めていたわけではない。その秀才さ故にサラ・バレスタインの指導を受けてみるみる成長していつては居るが、それでも現状の二人の間には明確な開きがある。対等の喧嘩になった二人のように行かないリスクは十二分にあった。

「……どうにも自分の成功体験に縛られすぎていたか」

ガシガシと頭を搔きながらリインはそうひとりごちる。

前はコレで上手く行っただから今度も上手くいく。自分達の時はこれで成功したのだからアイツラもこれで上手くいくはずだ。

そんな柳の下の二匹目のドジョウを狙うような事をしていた事にリインはエマからの指摘で気づく。なまじ自分にとつて一番の親友が出来たきっかけだからそれに囚われすぎていたのだと。

「でも私は先輩の案もそんなに悪くないとは思うよ、先輩の狙い通りに何もかも上手く行く可能性だって十分にあると思うし。それ位の荒療治じゃないと何時まで経ってもあんな調子になりそうだし」

似たような例を自身も見たことあるのだろう、どこか実感のこもった様子でフィーはリインの案を擁護する。

「……こういうのはどうでしょうか。お二人が互いの感情を存分にぶつけ合えるようにはする、ただ過度の暴力沙汰になりそうになったら止めるようにするとそんな風に様子を見ながら対応していくという事で」

エマが提案したのは言わば折衷案だ。リインの一度感情を吐き出させあった方が良いという言葉に理を認めてすぐに慌てて仲裁をす

るような真似はしない、その代わりに一発殴り合う程度ならともかく本気の殴り合い、にならずにマキアスが一方的にボコられる可能性が高いが、になりそうな場合は止めに入る。とそういうものだ

「そうだな、そんなところが妥当だな」

流石に街道でリインとクロウの時のように気絶し合うような事になれば運ぶのも手間だし、危険でもある。リインはエマの提案を是として話し合いを終えるのであった……

・・・

「しかし羨ましいものだね、両手に花の状態で翡翠の都へ旅行とは。なんなら私も導力バイクに乗って追いかけて行こうかな」

迎えた特別実習の朝、ARCU Sの調整のために技術棟を訪れ、しばし雑談に興じているとアンゼリカがそんな事を言ってきた。

「後ろでいがみ合っている二人がお前の目には写っていないのか？朝起きて顔を突き合わせてからずっとコレだぞ。俺は何時から士官学院生から日曜学校の引率教師になったのかと、そんな気分だ」

「む……」

「う……」

わざと聞こえるように言ったりリインの嫌味にユーシスとマキアスは少しだけたじろぐ。この程度の嫌味を言う権利くらいはあるはずだとリインはそんな二人を意に介さずにアンゼリカとの談笑を続けていく

「ふふ、その二人は未だに《貴族》だの《平民》だのを気にしているようだね。人それぞれの考えがあるからあまりとやかく言う気はないが、二人とももう少し肩を抜いていいと思うがね。何と言っても我らトールズ士官学院は平民と貴族の別なく学べる場所を作りたいという思いの下に、ドライケルス大帝陛下が建立したところなのだから」

昨年度ドライケルス大帝を演じるにあたって目の前の友人によって課せられたスパルタ特訓によって覚えさせられた事をウインクをしながらアンゼリカは告げる。

「貴族だの平民だのに囚われるのなんて勿体無いことさ、少なくとも私にとっては貴族であるラウラ君も平民のエマ君もフィー君もアリサ君も私のハーレムに加えたい逸材な事には変わりないのだから」
「……割りと真面目にお前が男じゃなくて良かったと俺は思っているよ」

女だから冗談やスキンシップの範疇で済んでいるが昨年度のクロスベルでのテイオ・プラトーと出会ったときといい、日頃のトワへのスキンシップといい、コレが男だった日には目も当てられない事になつていただろうとリインは目の前の友人に対して遠い目を浮かべる。

「まあ、平常運転のアンは置いておくとしてバリアハートに行くって大丈夫なのリイン。鉄血宰相の息子の君が行ったらそれこそ付いた途端に拘束されるなんて事も有り得るんじゃないや……とごめん」
「……いえ、お気になさらず」

貴族の総本山といえるような場所に鉄血宰相の息子が赴く、その事実から良からぬ想像を浮かべ心配するジョルジュだったが他ならぬアルバレア公爵の息子が目の前に居ることに気づいて謝意を告げる。
「ふむ……まあ俺も正直それを全く心配しなかったと言えば嘘になるが、流石にそこまで短絡的な事はしないだろう。内心忸怩たるものがあるが今の俺は所詮一介の士官学院生にすぎない、アルバレア公爵にしてみればそれこそ未だ路傍の石程度の存在だろうさ」

父ギリアス・オズボーンに対する交渉カードにするという発想はこの時リインにはない。そんな事をすれば貴族派の名誉と誇りを自ら地に落とすようなものだからだ。加えて言うのならギリアス・オズボーンは鋼鉄の男、一人息子を人質に取られた程度で止まる程甘い男では断じてない。

「それに口幅つたい言い方だが俺はコレでも学年首席を勤めている身だ。そんな俺が列記としたカリキュラムの一環で訪れたのに拘束されたなんて事態になれば、学院長も理事長も黙っていないはずだ。軍神ヴァンダイク元帥とオリヴァルト皇子、この二人は幾らアルバレア公爵とてそうそう軽視出来ない相手のはずだ。……サラ教官もアレ

で結構頼りになる人ではあるしな」

リインはトールズ士官学院の2年首席生徒言わばトールズの代表としてバリアハートへと赴く、そんなリインが何らかの罪状で拘束されたとなればそれは学院の名誉に関わってくる。この際、その罪が実のあるものならリインが除籍処分を受けて終わるだろう、だがそれがアルバレア公爵側がつけた難癖に過ぎないものであったら？トールズ側は生徒と学院の名誉を護るために全力でリインを擁護し、アルバレア公爵へと抗議を行うだろう。

この際、学院長や教官陣がアルバレア公爵への媚としてリインを売り渡すという発想はリインの中にはまったくくない。「そんな事は有り得ない」とそう言えるだけの信頼をリインは抱いていた。

「ま、そうだろうね。僕もちよつと念のため言ってみただけでそこまで本気だったわけじゃないんだ」

流星にそこまで短絡的な行動をとってくるはずがないと

「だが、0を1にすることは難しくても1を10にする事はそこまで難しい事じゃない。本来だったらいちいち罪に問われないような事を殊更大げさに取り上げて難癖つけてくる可能性は十分にある。くれぐれも気をつけてくれよ。ただでさえクロウの卒業が危ういのにこの上、君まで退学することになったら我々は3人で卒業旅行に行かないといけなくなるからね」

「ああ、わかっているさ。ま、こつちには他ならぬアルバレア公爵の息子であるユースも居るんだ。そこまでの事にはならんと思うがね」

冗談めかしながら告げられた忠告にリインもまた肩を竦めながら答え、調整の終わったARCUUSを受取りリイン達は駅へと向かうのであった……

鉄血の子と翡翠の都 《バリアハート》②

ラインの「仲良しこよしの友人ではなく、B班に負けないための一時的な協力関係と思え」という言葉。首席卒業を狙うマキアスとプライドの高いユースにこの煽りは効果覷面だったようで、ラインは一時休戦の約束を二人に取り付けさせた。最も行く前にエマとフィーに話したように、その休戦を取り付けた仲介人自身がこの休戦が実習中ずつと続くなどは欠片も思っていないのだが。

とにもかくにもそうしてバリアハートへとたどり着いたライン達を迎えたのは、アルバレア公爵家の威光を実感させる駅員総出の迎えだった。そうしてそんな歓待にうつとおしそうにするユースの前へ現れたのこそユースの実兄にして、次期アルバレア公爵、貴族派きつての才子と呼び声高きルーファス・アルバレアその人であった。

用意されたリムジンへと乗り込み、軽い自己紹介を行った彼はどこか推し量るような目でラインを見つめて

「こうして直接顔を合わせるのは初めてになるかな、ライン・オズボーン君。君の話は学園の理事として耳にしていたよ、文武両道のまさに帝国男子の鑑足る人物とね。ふふ、君のような者が弟を導いてくれるというのなら兄としてこれ程に嬉しい事はない。何かと苦労をかけるとは思いますが、今後も弟をよろしく頼むよ」

とても大貴族とは思えない親しみやすさを漂わせながら、さりとしてその優雅さは一片も損なわれない様子を見せ、そんな弟を思う兄心、ツールズの理事を務める身として雛鳥の成長を見守らんとする親鳥のような心、そして四大名門の一角たる人間として将来の敵手を見極めんとする心、それらが入り交ざったような言葉を告げていた。

「ふふふ、それにしてもオズボーン宰相閣下とリーグニッツ帝都知事のご息がこうして揃い踏みとは。聞くところによれば、揃って入学時には次席だったと聞いている。お前も負けてはいられないな」

言葉だけで言えば革新派に負けているユーススを叱責していると

も取られかねない言葉だが、その言葉に叱責するかのような刺々しさは一切感じられない。それは言葉の中にどこまでも弟を思う兄としての愛情が込められているからだろう。良きライバルと切磋琢磨し合えと、どこまでも弟の成長を願う兄の姿がそこにはあった。

(これがルーファス卿、貴族派きつての貴公子と名高き人物か)

曰く非の打ち所のない貴公子、帝国貴族の鑑。すでに父たるアルバレア公爵の名代として領地経営、貴族間の交渉などで幾つもの実績を打ち立てており、次期アルバレア公爵の座を確実視されている。おっぴらには言えることではないが、むしろ領民や領邦軍の面々は早く彼に当主となつて欲しいとさえ思っている者の方が多い位である。

どこまでも優雅で、かつ静かな微笑みを湛えて親しみを感じさせながらも、さりとして確かな威厳を感じさせるその所作はなるほど、確かに彼が凡百の人物ではない事を示していた。加えて言うのなら、武術の腕前にしてもかなりの物だろう。ラインの見立てでは師であるオリエ・ヴァンダールや教官たるサラ・バレストラインともいい勝負になるのではと思えるほどである。

一つ言える事は現状のラインは武術、軍事、政治、交渉等いずれの分野に置いても目の前の人物の後塵を拝しているという事だ。10もの年齢差があるのだからそれはある種当然の事なのだが、ラインが今後身を投じる事になるのはそうして自分よりもはるかに経験豊富な者たちが鎬を削り続けている世界なのだ。父の力にならんとするのであれば避けては通れぬ難敵であろう。

「こちらこそ、後輩にカッコ悪いところは見せられないと何時も気が引き締まる思いですよ。ユース君は優秀ですので」

知らず強く握っていた拳を緩めて、ラインは努めて柔和な笑顔を浮かべながら応じる。言っている言葉は別にお世辞ではない、実際のところユースは優秀である。学業では若干マキアスが上を行っているが、実技も入れた総合成績であればおそらくユース・アルバレアが現状の一年生ではトップだろう。人格にしても気位が高くときにくいところはあるものの、真の意味での誇り高さを持つ男なものもあってラインのユースへの評価は高い。これが同年代で入学して

いれば、おそらくはマキアス同様に敵視して張り合った事だろうが。「ふふ、そう言ってもらえると兄としては安心できる。何分素直でない弟なのでね、つい照れ隠しで憎まれ口を叩くような事もあるかもしれないが、どうか暖かく見守って欲しい」

「あ、兄上……」

普段であれば仏頂面を浮かべながら釘を刺すようなからかいにも敬愛する兄が相手故だろう、困ったような声をユーシスはあげる。普段とは打って変わった様子にマキアス等は夢でも見ているかのような心境に陥り、フィーは面白そうな様子で見ている。色々たくましい少女なのでおそらく、機会があればこのネタでユーシスをからかう気でのだろう。

そんなユーシスにとってはある意味で堪ったものではない談笑をしばしリムジンの中で繰り広げて、目的地たる《ホテル・エスメラルダ》へとたどり着くと貴族派きつての貴公子はどこまでも優美な様子でリイン達へと別れを告げ、去っていくのであった。

・・・

《バリアハート》、それは翡翠の都とも謳われる帝国東部クロイツェン州の州都にして四大名門の一角アルバレア公爵家が治める街。かつて皇帝が居城を構えていた事もあり、美しい歴史的な街並みが広がっており、周辺は宝石や毛皮の産地としても知られている。

「貴族の街」たるこの都ではそんな貴族たちを相手にした、名だたる職人達が生かしのぎを削っており《職人通り》等と称される通りが存在している。そこで看板を出している店の主人はいずれもが超一流と呼んでも過言ではない職人達、この通りで屋敷の調度、服、宝石等全て揃えるには庶民では一生働いても届かない額がかかると言われている。

興味のある人種にとってはそれこそ職人通りでどの店を選ぶかだけで一週間費やす事すらある街なのだが、逆に言うとなんか質実剛健とかいう言葉が大好きで、宝石だとかの類に対してとんと興味がなく、屋敷の調度等生活に必要なものさえあれば良いだとか、服は機能的な軍服こそが最高だと思っているような人物の場合だとほとんど素通りし

て終わるところである。

婚約指輪の材料の調達という依頼を終えたリイン達はそんな職人通りにある《ターナー宝飾店》を訪れていた。しかし、そんな彼らを待っていたのは依頼人の男性の笑顔ではなく、尊大なバリアハートの貴族ゴルテイ伯爵であった。

リイン達が彼の為に用意した《樹精の涙》は“正当な契約”の元、その場で伯爵の腹の中へと収められてしまうという、何とも後味の悪い結果となってしまうのであった。思わず激昂してゴルテイ伯爵を“貴様”と呼んでしまつて窮地へと陥つたマキアスであったが、公爵家の人間たるユーススが居た事で事なきを得る。

リインにマキアスを叱責する気は起きなかつた、憤懣やるかたないのはリインとて同じ事、ただリインは経験のぶんだけ若干忍耐力が上がつていた、それだけの違いだったのだから。

あまり納得がいかないまま、リイン達は二つ目の依頼を受けに中央広場のレストランのテラスで談話に耽る青年貴族のハサン・ヴォルテールを訊ねる運びとなるのだが、ここでもあまり良い思いはしなかつた。まるきり遊び気分で奉仕して当然という尊大な態度で接されて何も感じないのはとことんまで奴隷根性が染み付いているか、相手を喋るミラ程度にしか思っていない割り切りの上手い人物位である。

そんな風にまたもやマキアスの（それほど大きくない）堪忍袋の尾が切れそうになったが、相手がユーススの姿に気づき途端に慌てて下手に出だし、先程までの高飛車な様子とは打って変わった媚びへつらう笑みを浮かべながら「バスソルトの調達」という依頼を行ってくるのであった。

「しかし、随分な人気者だったな」

手配魔獣の退治と《ピンクソルトの調達》のためにオーロックス峽谷道を歩きながらリインはそんな言葉をポツリと零していた。

「何がですか？」

「いやユーススの事だよ、媚びへつらう輩も多かつたが、平民からは随

分と慕われているようだった」

常の誇り高さから考えてもまあ嫌われてはいないだろうとは思っていた。しかし、バリアハート内を見回してみると嫌われているどころか明確にユーシスは貴族からはあくまでアルバレア家の人間という事で媚びへつらわれていたが、《職人通り》等を歩いてみると公爵家の人間だからという理由ではなく、ユーシス・アルバレア個人に対して敬意を払っている人物が幾人も見られた。本来であれば平民の方こそ、むしろそういった大貴族を畏怖する感情は強いにも関わらずである。

「ふふふ、そうですね。子供達からは特に人気者だったみたいで……」
「ふん、皆アルバレア公爵家の人間である俺に媚びているだけかもしれんがな」

そういつてユーシスはそっぽを向くが本心ではなく照れ隠しである事は明白であった。ルーファスから頼まれた通りにリイン達は約1名を除きそんな素直でない男を暖かい視線で見守る。

「……おい、なんだその揃いも揃って気色の悪い微笑ましいものを見るかのような目は」

「いや、ルーファス卿の言っていたとおりに素直じゃないと思ってな」
「照れ隠しに憎まれ口叩く。流石お兄さんだけあって弟の事良く見ているね」

「ふふふ、大人はともかく子供はそこまで器用な事は出来ませんよ。彼らは真実ユーシスさん自身を慕っているんです。それはユーシスさんにだってわかつているでしょう?」

「ふん」

そうしてユーシスは再びそっぽを向く。そんな様がまたどこか子供っぽくて三人は笑みを溢す。

出会ってからもうそろそろ2ヶ月。何だかんだでとつつきにくいところのあるユーシスでも凡その人となりというものは把握できて来ていた。この分で行けばガイウス以外のⅦ組の面々ともユーシスが友人と呼べる関係性になるまでそこまでの時間は掛からないだろう

「．．．．．」
　　無然とした様子でその光景を見つめている一人を除けば、
　　が。である

鉄血の子と翡翠の都 《バリアハート》③

「一度は協力すると言っておきながら腹の底では平民を見下す……結局貴族とはそういうものなのだろう!!」

「阿呆が。その視野の狭さが原因であると何故気付かん!!」

そうして怒りをむき出しにして二人は互いの胸ぐらを掴み合う。そんな今にも殴り合いに発展しかねない険悪な様子を見てもリインとフィーはどこ吹く風とばかりに眺め、エマはハラハラとしながら見守っている。

「フィー、念のため周囲の警戒を頼む」

「了解」

此処は街中ではなく街道、何時魔獣が現れるとも限らない、そんな危惧の下くだされた指示にフィーは首肯して周囲の索敵を行う。その手際のそれはベテランのそれである。正面戦闘に於いてはリインの方が上を行っているもの、こういった索敵や偵察といった所謂正面での戦いではない裏工作等ではフィー・クラウゼルは明らかにリインの上を行っていた。

それは単なる才能や適性の違いという言葉で片付けられるのではなく経験に裏打ちされたもので……

フィーの境遇、それに関する推測を行おうとしたところでリインは頭を振る。人それぞれに事情というものがある、こういう事は本人から言うのを待つべきであろう。何より今は彼女の方よりも

「僕が貴族憎しの偏見に囚われた見方をしていると、そう言いたいのか!？」

「は、副会長殿や会長殿にアレほど注意されていながらよもや自覚がなかったとはな。副委員長殿は次席入学の秀才と聞いていたが出来るのは紙の上でのお勉強だけだったのかな？」

「貴様言わせておけば!!」

周囲の事など目に写ってないと言わんばかりに取っ組み合って罵り合っている眼の前の二人の方を優先しなければならぬだろう。それが事前に話し合って決めたことだ。

「僕の貴族への怒りを偏見と貴様は断ずるが、ならば今日宝飾店で目にしたあの光景をどう説明する!!アレこそが歴然たる貴族による平民に対する搾取の事例だろうが!!」

「それが視野の狭さだと言っているんだ!!僅かな例を持って全体に当て嵌めるなど愚かにも程がある!!」

オーロックス峡谷道にて手配魔獣《フェイトスピナー》の退治へと取り掛かった5人が、そこでユースとマキアスにとっては予期しなかった、他の3人はある程度予想していたアクシデントが発生する。戦術リンクの断絶である。

幸いにもフィーとラインという実力者二人がいたことで手配魔獣自体は問題なく退治されたが、問題はその後である。戦闘が終わったと同時に二人は元々反りの合わない相手と止む得なく共闘しているという状況で積もり積もっていた不満が爆発。戦術リンクの断絶は相手の方に一方的に責任があると断じて、こうして取っ組み合いに至っているのであった。

「僅かな例だど?」

マキアスの脳裏に過るのは絶望して死んだ姉の姿。そしてそんな遺体を前にして「妾として大事にすると言った!」等と恥知らずにもほざいた伯爵家の男の姿。ふざけるな、僅かな例だというのなら何故姉は死んだというのだ、不幸な少数例に当たってしまった結果だとしても言うのかとそんな怒りが心を満たす。

「少なくとも俺も兄も貴族の誇りに恥じるような行いは断じてせん!!」

貴族だから、アルバレア公爵家の人間だから、そんな理由で自分に事あるごとに突っかかってくる目の前の男がユースにとつてはうっとおしくて仕方がなかった。目の前の男は貴族は全員遊んで暮らしているような愚物だと思っている、それがユースには我慢がならない。一体自分がアルバレア公爵家の名に相応しくあるべく陰で努力をどれほど重ねたか、常に家門の名を背負わなければならない重圧が如何程のものか知りもしない癖にとそんな怒りがこみ上げる。

一触即発の状態で睨み合う二人。互いを見るその瞳はどちらも怒

りと敵意に満ちており、それはさながら革新派と貴族派の対立をそのまま象徴するかのような構図であった。故に二人は気づいていなかった、倒したと思つた魔獣にまだ息があつた事に。

「!？」

猛然と襲いかかつてくる手負いの獣、怒りに身を任せていた二人がようやくその姿に気づくも——遅い。

武器を手放して取っ組み合っている状態では回避する事も迎撃する事も不可能。

《ランドスピナー》のその鋭い爪が無防備な二人を切り裂こうとした瞬間

「シッ」

甲高い金属音が辺りに響いた。

予想していた痛みが二人の身体を走る事はなく、ランドスピナーの攻撃はすんでのところまで双剣によって阻まれていた。

まるでそれを予期していたかのように《ランドスピナー》が動くや否や静観の様子を見せていたリインが機敏な動作で割つて入つただ。

「《クロスエッジ》」

放たれた十字斬りの戦技は硬い甲殻に覆われた《ランドスピナー》の身体を4つに引き裂き、今度こそ魔獣は完全に絶命するのであった。

・・・

「どうした続けないのか？」

罰が悪そうな顔を浮かべる二人の姿を見てリインは計画の成功を悟る。

取っ組み合いの喧嘩をさせてもこの二人の場合は自分とクロウのように上手く行かず泥仕合になる。下手をするともつと拗れかねない、そうエマからの指摘を受けてリインが行ったのはあえて魔獣にトドメを刺さずに互いの不和が何を齎すのかそれをその身を持って実感させる事であった。

無論一つ誤れば大惨事に繋がりがねないので最大限警戒してい

でも対応出来るように準備はしていたが、どうやらリスクを背負った甲斐はあったようだ。

「リイン先輩……その……」

「……………」

「幸いな事に大した敵じゃなかったからなんとか間に合って大事には至らなかったが、そうじゃなかったら大惨事になっていた、それは理解できるな？」

いけしゃあしゃあと告げるリインの言葉にマキアスは目に見えて落ち込んだ様子を見せ、ユーシスを黙って拳を握る。事情を知るエマとしては少々気の毒になって来る光景であった。

「反省会は街に戻ってからだ。ひとまず《オーロックス砦》に報告へ行くでしょう」

…

「ユーシスの言うとおりだな、協力を求められたのならいざしらずそうでないのならば殊更こちらが気にする必要はないだろう。それこそ領邦軍が威信を賭けて探しているだろうからな」

今日だけで自分はいずれあの世に行つたときに《空の女神》に叱責を受けるであろう事をどれだけ行つただろうか、素知らぬ顔でユーシスへと応じた後バリアハートへの帰路を歩きながらリインはふとそんな感慨を抱く。

オーロックス砦での報告を終えてバリアハートへの岐路、銀色の飛行物体へ乗る少女を見かけ、さらに装甲車に乗ってそれを追跡してきた兵士からそれがオーロックス砦への侵入者だと言う話を聞きリイン以外の四人は騒然となるのであったが、実のところリインはその正体を知っていた。

情報局所属《ミリアム・オライオン》

それが銀色の飛行物体《アガートラム》に乗った少女の名前だ。
鉄血の子の一人であり、リインにとっては妹のような存在でもある。

(領邦軍の軍備拡張それを探るためと言ったところか)

先程オーロックス砦へと運ばれていた最新鋭の戦車《18》アハツエンそれを思い出す。大規模な増税と合わせて貴族派が革新派との戦いに備えている事は明白であった。そして革新派は革新派で当然指を啜えて眺めているわけではない、ということなのだろう。

今冷静になって振り返れば先月、父の腹心たるクレア義姉さんが凶つたようなタイミングでケルディックでの窃盗事件に介入してきたのもその一環だったのだろう。ケルディックはクロイツェン州でも屈指の要衝であり、経済規模を誇る街だ。その住人の支持を獲得できれば、それは革新派にとって大きな前進を意味する。自分を慮る姉の言葉には嘘はなかっただろうが、ケルディックへと介入できたのは元よりそういう意図で情報を集める人員を潜ませていたからなのだ。

内戦になるかもしれないという危惧、それを杞憂と笑い飛ばす事はもはや出来ない状況となっていた。もちろん、貴族派とてすぐに戦端を開く気はないだろう。もしも内戦になれば革新派が勝利する、それが大半の見方であるのだから。

革新派が勝利すると見られている要因は主に2つ

一つ目は帝国正規軍の強大さ。

帝国正規軍は強大だ、規模、練度、装備の質、そのいずれもが大陸最高峰と言って良い。領邦軍にも黄金の羅刹など名だたる将がいるが、それでも外敵からの国土防衛を主とした正規軍と地方の治安維持を主とした領邦軍では正規軍に明確に分がある。故に正面から戦えばまず間違いなく正規軍が優位である。

二つ目は指揮系統の確立

鉄血宰相という明確なトップを戴く革新派に対して、貴族派はあくまで反鉄血のための連合に過ぎない。特にアルバレア公爵はカイエーン公に対する対抗意識を燃やしているという話からもいざ戦いになった時には内部での主導権争いで揉める事は必至である。

この二点から純軍事的には革新派が優位だが、当然ながら内戦となれば革新派側とて無傷で終わるはずがない。決して少なくない代償を支払う事になる。だからこそ両派においても穏健な者やそも

そも革新派にも貴族派にも属していないような立場の者は政治的な駆け引きによつて穏便な着地点へと至る事を望んでいるのだが……

(果たして父さんはどう考えているんだろうか)

革新派のリーダーたる《鉄血宰相》ギリアス・オズボーン、彼の貴族派に対する対決姿勢は強まる一方である。

それは果たして自身の支持基盤からの目を気にした貴族にもひるまない『強い平民のリーダー』という演技の結果なのか、はたまたそれこそ貴族に対する怒りと憎しみによつて突き動かされている物なのか、その真意の程がリインにはわからなかった。何故ならばあの事件以来、彼が父と会つたのは10歳の誕生日の時だけだったのだから。

(演技なら良い、けどももしも父が母を奪われた憎しみによつて動いているのだとしたら……その時は止める)

それこそが息子たる自分の役目だとリインは心する。国家を導く指導者が自分の身勝手な私情で多くのものを巻き込んで良いはずがないのだから。

だが、もしも父が憎しみ等ではなく、大義のためにこそ内戦を起こそうとしていると考えていたら自分はどうするのだろうか？ かつてクロウに自分が言つたように国のためのやむを得ない犠牲だと考えているのなら？

当然従うべきだろう、何故ならば軍人を目指すというのはそういう事なのだから。犠牲なくして国を動かす事など出来はせず、軍人とはそれを効率よく回すための暴力装置なのだから。

だがそうして革新派として戦うということそれは即ち自分にとつて掛け替えのない親友の一人、ログナー侯爵家の人間たる彼女と袂を別つという事で……

(軍人は感情と理性を切り離して行動しなければならぬ……か)

なんとも残酷で無慈悲な標榜だとリインはかつて誇らしげに諷んじていた言葉を思い出す。

言うは易し、行ふは難しの典型だろう。例えどれだけ大切な友人だ自分の心と感情が訴えていても理性が敵だ上からの命令と言うのなら殺せという事なのだ

から。

貴族のお膝元たるバリアートにて目の当たりにした革新派と貴族派の対立、現実味を帯びてきた内戦の二文字。それを前にしてリィンは改めて己が進む道の重さを実感するのであった……

鉄血の子と翡翠の都 《バリアハート》④

「マキアス、この後少し良いか。ホテルのロビーで一度じっくり話し合いたい」

夕食を終えてホテルへの帰路、マキアスはそんな風にリインから呼び出しを受けていた。そうして昼間の件での叱責かと思つたマキアスを待っていたのはホテルのフロントから借りたであろうチェス盤を用意してソファーに腰掛けるリインの姿だった。「一局打たないか」と誘われるがままにマキアスが席につき対局を始め、しばらくするとリインは世間話から打って変わって問いかけてきた。

「なあマキアス、お前が気に入らないのは本当にユーシス個人か？」

「……リイン先輩も、僕が貴族憎しの偏見で動いていると仰るんですか」

「ああ、俺からするとそう見える」

バツサリと切り捨てるような尊敬する先輩からの言葉にマキアスは鼻白む。

リイン・オズボーンはマキアス・リーグニッツにとつては尊敬する先輩だ。真面目で努力家で文武両道の首席、軍人志望との事だが軍事の枠だけに囚われない政治と経済に対する深い造詣は政治家志望たるマキアスをして感嘆を禁じ得ないものだった。同じ革新派としていずれば肩を並べて共に大貴族へと立ち向かう、そんな日が来ることを夢想さえしている。

だからこそ、そんな尊敬する先輩からの齒に衣着せぬ指摘はマキアスの心に突き刺さる。

「もちろんどうしたって馬の合わない奴、気に食わない奴というのは居るだろう。俺にだっているしな」

大分成長したリインとて全員が全員と仲良く出来るわけでは当然ない。中には当然そりが合わない者もいる、リッテンハイムとその取り巻き達などは未だに険悪なままだし、改善しようという気もない。選民意識に凝り固まった大貴族等というのはリインにとつても依然変わらず打倒すべき敵だ。

「だが、ユーシス・アルバレアは果たしてなんら美点が見出す事の出来ない傲慢極まる平民を虐げる腐敗した貴族か？俺はそうは思わない」
「……リイン先輩は、あいつのことを随分と高く評価しているんですね」

「まあな、正直最初は俺もこれは如何にもな大貴族のご子息殿だと思っただが、接して見ると中々どうして大した奴だ。少なくともあいつの振るう宮廷剣術には確かな修練の跡が見て取れた。決して口だけの男ではない、それはお前もわかるだろう？」

「それは……はい」

ユーシス・アルバレアは優秀だ。凡その事をそつなく水準以上にこなす。だからこそマキアスとしても対抗意識を燃やしているのだ。もしもユーシスが口だけの家柄しか扱ひ所のない男ならばマキアスも張り合う事はなくただ鼻で笑って終わった事だろう。何時までもこの国が貴様達のような奴らの所有物だと思ふなよ、と。そんな具合に。

「加えて言うのなら、ガイウスとも随分と仲が良い。ガイウスへの態度は対等の友に対するそれだ。見下しているような素振りはその一切ない」

「……………」

気難しいところがあり、アルバレア公爵家の名によつて平民からは遠巻きにされて、さりとして貴族生用のサロンに顔も出さないうまさしく「孤高」といふべき様子のユーシスだったが、ただ一人ガイウス・ウォーゼルとは明確に友と呼べるだけの関係を築いていた。それはガイウスの持つ、身分に囚われない氣質が良い方向に働いたのが最大の要因ではあるが、ユーシス自身がガイウスを「蛮族」等と見下すような素振りを見せてなかったからでもある。如何にガイウスがその年齢に似つかわしくない成熟した精神を有しているとは言え、無制限に寛容というわけではない。自身を見下してくるような相手であれば友となる事など出来るはずはないのだから。

「そのあたりを踏まえた上で改めて聞こう、マキアス・レーグニッツにとってユーシス・アルバレアは一切わかりあう余地のない不倶戴天の

存在なのか？」

決して高圧的にならないように、刺々しさを感じさせないように柔らかな表情と声でリインは告げる。マキアス・リーグニッツは基本的には善良で優秀で、リインにとっては可愛い後輩だ。同じ革新派の父を持つ事も含めて、道は違えど同じ理想を目指す同志足り得ると思っ
ている。だからこそ、リインとしてもこうしてお節介を焼きたくなるのだ。

「……………リイン先輩」

リインの言葉を聞いてすっかり黙ってしばらく考え込んでいたマキアスだったがおもむろに口を開いて

「なんだ？」

「チエックメイトです」

会話の傍らで行っていたチエス、その勝利を告げていた。

「……………」

そうしてリインは改めて盤面に目を落とす。リインの方の白のキングは完全に孤立していた。

「やれやれ、此処でこつちが優勢な盤面で颯爽と席を立つのが理想だったのに、どうにも様にならん」

肩を竦めながら告げられるリインの冗談めかした言葉にマキアスは苦笑いを浮かべる。

リインはチエスは姉のクレアが好んでいるのもあって多少は嗜んでいる。だがあくまで本当に嗜みという程度である。チエス部に所属しており、帝都のアマチュア大会で入賞の経験もあるマキアスには当然及ぶべくもない、この結果は必然と言えるものだろう。

「それで俺の問いかけに対する答えの方はどうだ？」

「…………しばらく一人で考えさせて下さい。リイン先輩の言っている事も理解は出来るんです、僕があいつに對抗意識を燃やしているせいで昼間の時みたいにクラスの皆に迷惑をかけている事も…………」

先月の実習でもそうだったように委員長を勤めているエマを筆頭に副委員長でありながらユーシスとの関係が原因でクラスにいらぬ緊張を齎してしまっているという自覚はある、理性においてはリイン

の言っている事に理があるという事も

「でも……」

「心が納得してくれないと、そんなところか」

リインの言葉にマキアスは申し訳なきように黙って頷く。そんなマキアスにリインは微笑を浮かべて

「わかった。ゆっくり考えてみてくれ。そしてその上でユースとどうしても反りが合わないというのならはその時はしょうがない。俺の方からもサラ教官に色々と手を尽くしてみたがお前達二人の溝はこちらが思っていたより大きかった旨を伝えて、今後の実習では別々の班にするように報告しよう」

そうしてあらかた話終えたリインはチェス盤と駒を片付け、フロントへと礼を言いながら返却して一足先に部屋へと戻るのであった。

・
・

部屋へとリインが戻るとそこには今日のレポートの作成に取り掛かっているユースが居た。女子の方も問題児のフィーに関してエマがしつかり見ていることだろうし、ユースにしてもマキアスにしても成績優秀であるためリインとしては今回はほとんど添削で苦労をする事はなさそうだった。代わりに別の方面では散々苦労させられているのだが。

「副委員長殿との話し合いは終わられたかな？魔獣退治の時の演技と言い、班長殿には我々二人の諍いで何かとご苦労をおかけしている様子。俺としても大変申し訳なく思っている」

「なんだ、気づいていたのか」

二人に戦場での不和が齎されるもの、それを実感させるためにあえて魔獣にトドメを刺していなかった事それに気づかれたリインは誤魔化すかのように頭を掻きながら苦笑して応じる

「ふん、あの場ですぐには気づけなかったが、後々冷静になつて振り返ってみればわかる。油断なく周囲の警戒をクラウドに任せるような班長殿が魔獣に未だ息があった事に気づいていなかった等というのは些か無理のある偶然だ」

ユース・アルバレアのリイン・オズボーンへの評価は高い。

アルゼイド流の後継者たるラウラとの一騎打ちの時に見せられたヴァンダール流中伝の腕前、学年首席を務める秀才であり努力家。同じ第三学生寮で過ごしている事で彼がそうなるために一体どれほどの研鑽を重ねているかをまざまざと目の当たりにしている。さらに革新派の重鎮を父に持つという点では、犬猿の仲であるマキアスと同じだが、マキアスとは異なり貴族だからという理由で敵意を剥き出しにすることもなく評価すべきは公正に評価する公明正大な態度。なるほど、副会長、そして自分たちの班長を務めるに相応しい敬意に値する先輩だ、と口に出してはあまり言わないがそう思っていた。

だからこそ、そんな自分が認める程に優秀な先輩であるリインが最も重要である対象の生死を確認もせずに自分達の喧嘩を放置するような真似をした事に引っかけかりを覚えた。予期しなかつた事態故に混乱していたというのであれば自分たちの喧嘩を止めようとする気配もなく傍観していたのは妙だし、冷静にフィーに周囲の警戒をさせていた事に説明がつかなくなる。故にユーシスは勘付いたのだ、アレはリインにとつての計算ずくの事だったのだと。

「でも、効果はあっただろうか？」

「否定はしない、業腹ではあるが確かに頭を冷やすには十分な体験だった」

悪びれる事無くしれつと言うリインにユーシスは釈然としないものを感じつつ頷く。元を正せば、敵の絶命を確認もせずに、周囲への警戒もそつちのけで同じ班員同士でいがみ合っていた自分たちが悪いのだから。その件でリインを責めても恥の上塗りというものだろう、そんな風に考えて。

「こういう時に、アルバレア公爵家の名を持ち出さない所は君の美点だな」

マキアスの、そしてリインの嫌うような尊大な大貴族であればまず食って掛かって来ていたはずだ。そんな事をして○○家の人間たる自分の身に万一の事があれば一体どう責任を取るつもりなのだと、だがユーシスはそういった事はしない。彼がアルバレア公爵家の名を持ち出すのは、他者を威圧するためではなく自らを律するため、その

名に恥じぬよう在ろうとする誇りとしてだ。ユーシスのそういう点をリインは高く評価していた。

「ふん、別段美点等という程ではない。ただ恥というものを知っているだけだ」

「その恥を知らない、偉大なる先祖の名誉を自ら汚しているような輩が多いからこそ美点だと言っているのさ」

「ならば尚更だ。そのような愚昧な連中と比較されて褒められたところで嬉しくもなんともない。班長殿は豚と比較され、褒められて喜ぶのか？」

「……なるほど、それは確かにそのとおりだ。そうだな、むしろこんな褒め方は侮辱だったか。すまなかつたな、ユーシス」

当人にとってみれば当たり前前の事を褒められても人は嬉しくないだろう。「君は息が出来ている、すごい」等と言われればむしろ褒められているのではなく馬鹿にされていると受け取る方が大半だ、自分がユーシスに対して言っていたのはユーシスにしてみればそういう類だったと気づいたのだ。

そしてしばらく沈黙が場を包む。そこでリインが先程までの軽口を叩いていたのとは打って変わった真剣な様子でユーシスへと問いかける

「ユーシス、本来であれば人様の家庭の事情に突っ込むべきではないのだが、夕方の君のお父上とのやり取りについて聞かせて貰っても構わないか？」

「……それは革新派として将来の敵手について探るための言葉か？」
「いいや、トールズ士官学院の先輩として、班長として手のかかる後輩達の仲立ちをするための言葉さ」

ある程度の推測は出来ている。ユーシスはレストラン《ソルシエラ》の味を「この味で育つたようなものだ」と言っていた。邸宅に専属の料理人を抱えているであろうアルバレア公爵家の人間がである。加えてユーシスの身体に対する配慮を感じた栄養バランスの取れたあの食事、実の父たるアルバレア公爵のあの冷淡な様子、そして紛れもない大貴族の人間でありながらどこか同じ貴族からも距離をとつ

ているような孤高さ。おそらくは、そういう事なのだろう。しかし、
こういうのは当人の口から聞いてこそ意味があるものである。

「……良いだろう。別段隠す程の事でもない。班長殿には何かとご迷惑をおかけしていることだし、その詫び代わりではないが話させてもらおう」

そうしてユースはポツリ、ポツリと喋りだした。彼の母親が平民出身であり、自分が所謂妾腹の子である事を。そしてソルシエラのオーナーが伯父であり、母が8年前に死んで公爵家に正式に引き取られるまでは半ば父代わりだった事を。母が死んで屋敷に引き取られるからは、兄に貴族の何たるかを全て教えられた事を。

「……なるほどな、中々に苦勞したんだな、君も」

大貴族であるが故に平民からは畏怖される。だが平民出身の妾腹の出であるが故に同じ貴族からも表立ってはともかく裏では陰口を叩かれる。ユースの立場は中々に苦勞が耐えないと言うべきものであろう。

「ふん、別段その日に食う物に困った経験あるでもなし。母と死に別れている事も、父との関係が冷え込んでいる事もそう、珍しい事ではないだろう」

「ああ、確かにそうかもしれないな」

同情は不要だとばかりに告げられた言葉にリインは頷く。確かに母と死に別れる事も、実の父との関係が冷え込んでいる事もそう、珍しい事ではない。

「だが、それでも太平楽に暮らしてきたというわけでは断じてない、だろう？」

リインは革新派である。血統によって地位や権力を継承させる貴族制に対して批判的である。

だが、それでもその血に相応しくあろうと努力を重ねている真の貴族が居ることは知っている。

そしてリインやマキアスがに軍人や政治家を目指したのはあくまで自分の意志だった、周囲からの無言の期待はたしかに存在したかもしれない。だがそれでも選んだのは自分自身だ。

だがユーシスは違う。彼はアルバレア公爵の血を引いているという理由のみによつて、本人の意志が介在しない所でそう振る舞わなければならなくなった。その重責と重圧は軽いはずがない。プライドの高い男故、弱音を吐くような事こそ決してしないが。

「ああ、そのとおりだ。アルバレア家の名を汚さぬよう、何より尊敬する兄の名に泥を塗らぬようそれ相応の研鑽を重ねた自負がある。だからこそ……」

「だからこそ、ただ貴族だからという理由でさも苦勞知らずのようになしているマキアスの態度が我慢ならない、そんなところか？」

リインの言葉にユーシスは黙って頷く。加えて言うのなら、それは自分以上に尊敬する兄を擁護したい気持ちもあつたのだろう。彼にとつてルーファス・アルバレアは尊敬できる兄であり、目標でもある貴族の鑑たる人物なのだから。貴族である事を侮辱される事、それはユーシスにとっては尊敬する兄を侮辱されたに等しい行為だったのである。

「会長殿や副会長殿、そして奴以外のⅦ組の面々に迷惑をかけている事は俺とて不本意だ。だが、生憎と喧嘩を売られて笑つてやり過ぎるほどに寛容でもない」

リインはユーシスの言葉に理がある事を認めた。この件に関して言えばユーシスはあくまで買った側であるというだけであつて喧嘩を売っているのはマキアスの方だろう。まあ同じ革新派という事で最真目に見ても責任の割合は3：7といった所だろう。

「そういう事ならば、マキアスの方が歩み寄つて来たのならそれに応じる用意はあると、そう思つていいかな？」

「貴方達のように仲の良い友人同士には到底なれんだろうが……まあ同じ目標に向かつて一時的に協力する仲間としてなら受け入れん事もない」

そのユーシスの答えを聞いた瞬間にリインは言質はとつたと言わんばかりに笑みを浮かべて

「だ、そうだマキアス。どうだ、答えは出たか？」

ドアの向こうに向かつてそう問いかけていた。程なくガチャリと

いう音と共にどこか気まずそうな様子でマキアスが入室してくるのであった。

「き、気づいていたんですか……」

「ヴァンダールは主君を外敵から守護するための剣。当然暗殺者からの不意打ち対策のために気配の察知についてだって教わるさ。最も、別にヴァンダール流に限らずある程度以上の実力者ならだいたい出来るけどな」

戦時には鬨気を身に纏い銃弾を物ともしない達人でも平時に不意を突かれれば驚くほどに脆い。それこそ臨戦態勢であるのなら何百発くらおうが致命打にならない銃弾たった一発で死んでしまう位に。だからこそ、どの流派でもそうした不意打ち対策としての気配察知の修行は一通り行われる。中でもヴァンダール流は皇族守護というその役目からもそういった技術は特に重要視されている。

中伝であるリインはまだまだ未熟故そう大した事はないが、これが皆伝に至った達人ならばこのホテル丸々感知する事とて出来るだろう。

「副委員長殿の趣味が盗み聴きだったとはな。チェスとは違い、あまり公言出来ぬような趣味だ。謹んだほうが良いとクラスメイトとしてそう忠告させてもらおう」

「なあ?」

「ここら、そう責めてやるな。部屋に戻ってきたのにこんな会話をしていたらそりや入りにくいだろうさ」

リインはそうマキアスは庇う。最もこつそりと何も聞いていなかったのように部屋に戻ってくるという選択肢をマキアスから奪い取ったのはこの男が暴露したためなのでマッチポンプも良いところなのだが。

「それで、どうなんだマキアス」

ユーシス・アルバレアとお前は果たして本当に不倶戴天なのか、とリインに見据えられ、マキアスは思案するかのように一度目を閉じる。

そして、改めてユーシスを見据えて

「ユーシス・アルバレア、僕は君の事が嫌いだ。事情があるとはいえ、その尊大な態度はともじやないが好意的にはなれない。だが」

そう、だけど

「僕が大貴族だからという理由で色眼鏡をかけて、君個人を見ていなかったのも確かな事実だ」

そう、貴族故の苦労がある事などマキアスは考えた事もなかった。貴族とは苦労知らずの特権階級で平民を踏みつける事を何とも思っていない連中、そんな程度に思っていた。

「だから、改めて宣誓しようユーシス・アルバレア。僕は君には決して負けない!!学業だけじゃない、実技でもだ!!そのためにも友人ではなく、同じクラスの仲間として協力する!!あくまで君やエマ君に負けないうように、首席になるためだ!!」

それはともすると今までと同じようにユーシスに対して喧嘩を売っているかのように感じられる言葉だったかもしれない。だが、その言葉の中には数時間前までにはなかった確かな敬意が宿っていた。敬意を払うに値する好敵手ライバルだからこそ負けたくない、そんな想いが。

そんなマキアスからの宣戦布告を受けてユーシスは一瞬呆気に取られたかのような顔をした後に、不敵な笑みを浮かべて……

「面白い、貴様に格の違いというものを思い知らせてやる」

「ふん、言っておくが座学は僕の方が上なんだからな!」

「座学はとわざわざ限定する辺り、どうやら実技に関しては俺に負けている自覚があるようだな?」

「ぐぬっ!」

勝ち誇るマキアスの言葉を捉えてしてやったりとばかりにユーシスは反撃する。

そんな風にどこか清々しさを感じさせる張り合いを始めた後輩二人をリインは穏やかな顔で見守るのであった……

鉄血の子と翡翠の都 《バリアハート》⑤

ユースとマキアス、険悪だった二人の和解が成立して昨日の遅れを取り戻そうと意気揚々と朝を迎えたB班、そしてそんな二人の和解を成立させた立役者たるB班班長にしてトールズ士官学院副会長でもあるリイン・オズボーンは今

「……………」

後輩であるマキアス・レーグニッツと共にバリアハートにある牢屋の中に居た。

「ど、どうしましょうリイン先輩」

「そうだな、暇だし武術の稽古でもつけてやろうか？ユースに勝ちたいんだろ？」

弱りきって縋るような様子で声をかけてくるマキアス相手にリインは平然とした様子で答える。あまりにも平然としているために此処が牢屋ではなく学院のどこかではないかという錯覚さえマキアスは起こしそうになった。

「い、いやそんな事をしている場合では……………」

「じゃあどんな事をしている場合だ？正直この状況下で俺たちに出来る事なんて何もないぞ。だったら武術の型稽古なりでもやって居る方が有意義だと思うがな？」

肩を竦めながらそう告げるリインの様子にマキアスは呆氣に取られる。領邦軍に冤罪をかけられて捕まったというこの状況下でも全く目の前の先輩は動じていない。それこそまるで普段と何も変わらないかのように悠然と構えている。

「そう心配するな。サラ教官も普段の態度はアレだがこういった非常時には間違いなく有能で頼りになる教官だし、生徒を見捨てるような人でもない。そして、軍神ウォルフガング・ヴァンダイク名誉元帥閣下が学院長を勤め、オリヴァルト・ライゼ・アルノール皇子が理事長を勤めているトールズ士官学院の影響力は四大名門アルバレア公爵家としてそうそう無視できるものではない。俺達は大船に乗ったつも

りでどっしり構えていれば良いのさ」

ポンと肩を叩きながら恐れる必要などないのだとそう笑いながら告げるリインの様子はマキアスにとってはこの上なく頼もしく、ようやく落ち着きを取り戻す。

「そ、そうですね、僕らにかけられた嫌疑は冤罪なんですから！特にリイン先輩なんて副会長も勤めていらっしやて先生方の信頼も厚いですし！」

「ああ、だからそう心配する必要はないさ。居心地が良いとは言えない場所だが、せっかくの空いた時間だ。有効に活用するでしょう」

「そういう事ならば、是非ともお願いします。あの男に何時までも大きな顔をさせておくのは癪ですし」

実を言えばこの時のリインはマキアスが思う程に余裕があつたわけでもない、このような状況に陥つた事に忸怩たる想いを抱いていたし、大貴族という存在について見誤つてまんまと捕らえられた事には内心で激しい怒りを燃やしているし、わずかながらの不安とて当然ながら存在する。

何せ此処バリアハートはアルバレア公爵家のお膝元、証拠の捏造や嘘の証人をでっち上げる事などいくらでも可能なのだ。何せこの街の住人ですらなくとも伯爵を敵に回す事を恐れて婚約者のために用意しようとしていた《樹精の涙》を譲り渡した。ましてこの街に住む平民が四大名門アルバレア公爵の威光に逆らうことが出来るだろうか？脅しという鞭と買収という餌、これらを使えばそれこそ嘘の証言をでっち上げる事など朝飯前だろう。

直接の脅しが効かないのならばリインとマキアスに冤罪を掛ける事で間接的に二人の父の評判を落とすしにかかる、等という風な手段を取るかもしれない。「息子の教育も満足にできないような者に国や帝都を任せる事が出来るのか？」というわけだ。無論、学院側がそれを黙って見過ごすとは思えないが、どうもリインが思っていたよりもアルバレア公爵は強引な人物のようだ。果たしてツールズ士官学院を敵に回すリスクを考えて思いとどまると言ったりリスクを考えて自制が効く人物なのかどうか、些か自信がなくなってきたところではあ

る。

だがそんな事はもはや考えるだけ不毛というものである。何せこうして捕らえられてしまつてはもはやリインに打てる手など何もないのだから。指揮官は内面はどうあれ表立つては樂觀的に振る舞うべしというのは基本中の基本だ。リーダーが不安そうにしていればそれは部下にも伝播する。指揮官が悠然とどつしりと構えていけば逆に部下は安心できるものなのだ。そんな可愛い後輩を相手に無様などころを見せられないという意識がリインの冷静さを保たせていた。もしも捕らえられたのが自分一人であれば、もう少しリインも取り乱すなりしていたかもしれない。

「よし、それじゃあ軽く型稽古と行くか。基礎はサラ教官にも習つていると思うがおさらいとしてな」

「はい、お願いします先輩！」

捕われの身には似合わない覇気でそうして二人はしばしの間稽古へと興じるのであった……

……

「ど、どうでしょうフィーちゃん……」

班長たるリインが不在の状態で、今後の方針を話し合うために職人通りにある宿酒場へと来たエマは今頃どんなひどい目に合っているのかと囚われの二人を心配し、そう残された班員であるフィーへと助けを求める。最もその二人はとても囚われの身とは思えない精力的な様子で稽古に勤しんでいるのだが。

「マキアス……色々うざかったけどそれでも悪い人じゃなかった……リイン先輩……口うるさくはあったけどいい先輩だった……二人の事は決して私は忘れない。安らかに眠って欲しい」

そうしてフィーは「おお、空の女神よ。今貴方の下に貴方の子が召されます」等とまるで死んだ戦友を弔うかのような厳かな様子で祈りを捧げる。

「フィーちゃん！」

「軽い冗談。どんな時も落ち着いてユーモアセンスを忘れない事が大

事」

「ブラックジョーク過ぎて私には笑えませんよ……」

しれっと答えるフィーにそう言つてエマはがっくりと肩を落とす。そうしてフィーは打つて変わった真面目な表情となり

「ま、真面目な話、あの二人が捕まったのは人質としての意味合いが大きくて、捕らえたのは列記としたプロの軍人なわけだからそう酷い目にはあつてないと思うよ。さつき困んでいたの部隊を見るに流石州都に駐屯しているだけあつて中々の練度だったし。あの統制の取れた様子を見るに下っ端が暴走して危害を加えるつて事もないだろうから」

「そ、そうですよね！ 仮にも列記とした軍人さんがまだ学生の二人に危害を加えるなんてのはないですよね」

あえて明るい材料を話したフィーの言葉にエマは若干気持ち明るくする。アマチュアは恐怖から人質に危害を加えたり、練度が低く統制の取れていないような部隊ならば下っ端が普段の鬱憤ばらしに危害を加えるなども考えられたが、バリアハートにいる部隊は流石に州都に駐屯する部隊だけあつて領邦軍の中でも中々の精鋭と言えた。交渉が煮詰まつてくれば革新派に対する脅しとしてやる可能性もあつたが、少なくとも今すぐにどうこうという事はないだろう。

「問題はこれからどうするかですよね……」

「今の私たちは指揮官を欠いた状態。こういう時は上官の上官に報告して指示を仰ぐべきだと思う」

「あ、そうですね。まずはサラ教官に相談してみましよう」

慌てる新米士官をそれとなくフォローする下士官のようにフィーは冷静にエマをサポートする。エマにしても首席入学をした才女なのだがこの辺りはくぐつてきた場数の違いというものだろう。加えて言うなら、なまじリインが頼れる先輩であつた故にその不在が与える動揺を大きくしていた。

「駄目ですね……繋がりません」

通信不良か、はたまたサラの方が気づいていないのか、理由は不明

だが名案かに思われた行動であったがそれは無駄に終わる。ARC
USの本領とはあくまで戦術オーブメント、そのため距離が離れてい
る場合には繋がらない異常が多々発生する。

「そうなる選択肢は2つに1つだね。一つ目としてはあの二人の事
は放っておく、もう一つはこっさり忍び込んで連れ戻す」

まるで今日の夕食は何にしようかと言った気軽な様子でフィーは
さらりと告げる。

「……なんとかユーシスさんと合流できないでしょうか？公爵家の人
間であるユーシスさんの言葉なら領邦軍の方も無下には出来ないで
しょうし」

「難しいんじゃないかな、向こうだってそれを予想していたからこそ
わざわざユーシスを屋敷に呼び出したんだろうし……それにしても
見捨てる気はないんだ」

若干フィーは意外に思う。根無し草の自分と違ってエマは帝国の
辺境出身だと聞いている。いまいち身分の差に疎いフィーであった
がそれでも2ヶ月こうして帝国で過ごし、貴族の持つ力というもの
目の当たりにした。普通の平民にとって貴族に逆らうという行為が
どれほどの難題かも。それにも関わらず目の前の委員長にはどうや
ら四大名門たるアルバレア公爵家の怒りを買う事に対する恐れと
いったものが見えなかったからだ。

「フィーちゃんだって同じじゃないですか？もしも私が怖気づくよう
でしたら、一人でお二人の救出へ向かうつもりですよね？」

「……ま、戦友は見捨てないのが私達の流儀だし」

言うなれば運命共同体。互いに頼り 互いに庇い合い 互いに助
け合う。一人が皆の為に 皆が一人の為に。部隊とは兄妹であり家
族である。それでこそ地獄のような戦場でも生きられる、それが
フィーが団で教わった在り方であった。戦場に出たわけではないが、
それでも今のフィーにとっての仲間である事は変らない。故に此処
で見捨てるというのはフィー・クラウゼルの獵兵の矜持として有り得
ない事であった。

「なんとかこっさり侵入していつの間にかいなくなっている。そんな

ふうであれば元々冤罪ですし、向こうも強く出る事は出来ないと思います」

「そうなるにあの砦に移される前までが勝負かな。流石にあんな大掛かりで本格的な要塞に忍び込める気はしないし」

そうして囚われの二人を奪還するための具体的な作戦を話し始めた二人は地下水路が領邦軍の詰所に通じているという話を聞いた事でそこから侵入を決意するのであった。

鉄血の子と翡翠の都 《バリアハート》⑥ 幕間 《かかし男》

「なんだかりインと知事のおじさんのところの子が領邦軍に捕まっちゃったみたいだけどどうしたら良いかな？」

レクター・アランドールの下に 《鉄血の子供達》 専用の通信機でそんな連絡が入ってきたのは正午になってからであった。

「いざという時は強行手段で奪還する事を視野に入れつつとりあえずは様子見だな。ツールズにしても自分ところの生徒が冤罪をかけられたとなりや動くだろうし、向こうがなんとかしてくれて終わるならそれに越したことはない」

理事長を務めるあの放蕩皇子にしても、学院長を務める軍神にしても生徒が冤罪をかけられて四大名門を敵に回すことを恐れて黙殺するというタイプでは決してない。革新派にとっても貴族派にとっても無視できぬ影響力を持つ、中立の両名と貴族派の関係がコレを機に悪化するというのはならそれは革新派としては福音と言うべきであった。

「ほいほーい、了解。それならクレアの方にもその辺の事はレクターの方から説明しておいてね」

「はっ」

さて、今コイツはなんと言った

「いやーちょうどクレアから通信が来てさ。調子はどうかって聞かれたから僕は元気だけどリインが領邦軍に捕まっちゃったみたいだよーって言っちゃったんだよね」

「ちよ、おま……」

「それじゃあ後はよろしくねレクター、ダメそうな時は僕の方でリインと眼鏡の子を助けるから」

その言葉を最後にプツンと切れた通信を前にレクターは一瞬忘我へと陥る。そしてミリアムとの通信が切れて程なくしてまたもや通信機がけたたましくなり出す、噂をすればなんとやらクレアからの連

絡である

「へいまいど、こちら宰相のパシリ。一体どんなご用件で……」

「レクターさん！ミリアムちゃんからの連絡でリンさんが領邦軍に囚われてしまったと!!!私は今すぐ部隊を纏めてバリアハートに向かいますので、レクターさんの方もすぐにアルバレア公爵に対する抗議を……」

「落ち着け、リーヴェルト大尉」

氷の乙女という異名はどこへ行ったのやら、冷静さ等かなぐり捨てたクレアの焦った様子にレクターはため息をつきながら殊更階級で呼ぶ。お前の立場と職務を思い出せと言わんばかりに。

「バリアハートはアルバレア公爵の完全なお膝元、いくら鉄道があつて鉄道憲兵隊にも捜査権限があるとは言え反発だつてケルディックの時とは比べ物にならないものになる。……あいつ自身はともかくこつちだつて清廉潔白とは言えねえ身だしな」

リンとマキアス自身がオーロックス砦に侵入した等というのは事実無根の冤罪ではあるが、オーロックス砦への侵入それ自体は紛れもない革新派の犯行。この状況下で鉄道憲兵隊が突つ込めばそれこそ一触即発の状況になりかねないだろう、何せ統制を取るべき指揮官本人が常の冷静さをどこかへやつてしまっているのだから。

「でしたら、レクターさんの方でなんとかリンさん達を解放するよう交渉を！」

「足元を見られないようにするのは交渉の基本中の基本だぜ？この段階でこちらから交渉を持ちかけるのは、みすみす弱点を晒すようなものだ。喜々としてさぞ高い値段をつけてくる事だろうな」

「ですが……!」

もう、私は二度と弟を失いたくないのだとなおも言い募ろうとしたところでようやくクレアは少しだけ冷静さを取り戻す。これは自分の私情でしかないのだと。

人質の身の安全を最優先にするなら相手の要求に全て従うというのも一つの手ではあるだろう、例えばこれが家族を人質に取られた民間人であるのなら犯人の逮捕や財産などよりも家族の安全が大事だ

！と思つて行動する事はむしろ愛情の深さを示すもので、賞賛にすら値するかもしれない。

だが自分たちは革新派という派閥の利益を考えて行動しなければならぬ公人だ。私人としての情に囚われて義弟の身を最優先するわけにはいかない、そう告げるレクター言葉こそが正しいのだと。

(だけど……！)

姉さん、クレア姉さんとそう輝く宝石のような笑顔を自分に向けてくれていた少年の笑顔を思い出す。一度失つて、奇跡のようにもう一度手に入れる事ができたそれをまた失う事になるという恐怖が高性能の導力演算機と称される頭脳を機能不全に陥らせていた。

「まあ冷静になれつて。おっさん本人ならともかくあいつ自身はまだ貴族派の恨みを買うような事はしていないし、こういつちやなんだがあくまでおまけだ。そうそう手荒な扱いは受けねえだろうよ。それにツールズの方だつて自分のところの学生が冤罪をかけられたなんてなれば、沽券と名誉に関わつてくる。それなりの手を打つて来るだろうさ」

リイン・オズボーンは生徒会副会長を勤め、学年首席でもある俊英だ。そんな俊英が冤罪をきせられればそれは大帝縁の名門校であるツールズの名誉にも関わつてくる、当然アルバレア公と領邦軍に嚴重な抗議を行うだろう。

最も学院長を務めるヴァンダイクの性格からして、例えこれが不良生徒であつたとしても捕らえられている理由が冤罪である以上、教育者として教え子を守ろうとするだろうが。

「ですけど、今とらわれているであろうあの子の心中を思うと……」

無意識の内にリインを、かつていた弟であるエミルと重ね合わせ、心細そうに自分に助けを求めている弟の姿を想像して言い募るクレアにレクターをため息をついて

「アイツがそんな事でビビるタマかよ。どつちかというと公爵の横暴ぶりに怒りを燃やしながら、空いた時間を使って牢屋の中でトレーニングでもしているようなタイプだと思いがね」

理不尽に合った時に人が取る代表的な例は対応は2つである。すなわち耐え忍ぶか、それとも怒りを燃やして理不尽の元凶を打ち倒そうとするかである。ライン・オズボーンという少年は後者に位置する。理不尽を強いるものが居た時それと戦う事を選ぶプライドが高い少年だ。だが、短慮では決してない。今の自分ではそれが不可能な事も理解して、内心に秘めた怒りを押し殺し、いざれ然るべき報いを与える事を心に誓いながら耐えている事であろう。

そして同時に暇な時間というものを何よりも嫌う人種であるから、おそらく気晴らしとばかりにたくましくトレーニングにでも勤しんでいる事だろうとレクター・アランドールは外交官として培った観察眼と過ごしてた日々の長さからラインの内面と行動を正確に洞察していた。

「というわけで、しばらくは革新派^{ウチ}としては静観だ。一応いよいよやばくなった時にはミリアムの奴に強硬手段で奪還するように伝えてあるからそれで納得してくれや、クレア義姉さん」

「……………わかりました。少し、頭を冷やします」

そうして通信が途切れ、レクターはため息をつく。

（つたく、一体誰と重ね合わせているのかしらんが随分と拗らせちまってるなあ）

クレアはラインを護るべき庇護の対象として見てしまっている。おそらく彼女の中では未だラインは幼い子どもの頃のままなのだろう。既に彼は守られる幼子などではなく今すぐ軍に入っても通用するだけの実力を有している俊英にも関わらずである。

まるで幼い頃の姿でイメージが固定されてしまっているかのよう。決してライン自身を見ていないというわけではない、だがクレアのラインへの態度はあまりに過保護が過ぎた。今はまだラインが士官学院生という立場だから良い。だが、もう一年もすれば正式に軍人となるだろう。そして彼の性格と能力や適性からして安全な後方勤務を志望する気はまずないだろう。

最精鋭で知られる鉄道憲兵隊か、オーラフが指揮する精鋭の第四機甲師団か、あるいはその第四機甲師団と並ぶ精鋭と謳われる西部にあ

る第八機甲師団と、まあその辺だろうか。そして軍人とは死と隣り合わせの仕事だ。指揮官たるもの部下に範を示すために突撃の時は先陣を勤め、撤退の時は殿を務めるべし。力のない民間人を護るためにその身命を捧げるべし。そんな綺麗事を体現してしまう勇敢で誠実な理想の軍人程に早く死んでいく。

そうなった時、果たしてクレアはその事実を受け止めきれぬのだろうか、そんなお節介な気持ちが湧いて来た所でレクターは頭を振る。

(俺も、人の事は言えねえか)

2月にあつたリインを囚役へと使った宰相に対して抱いた奇妙な不信感をレクターは思い出す。諸々の事情からリインに入れ込んでいる所があるという点では自分もクレアに対して偉そうな事を言えるわけではないのだと。

(もしも、俺の親父があんな事をしでかしていなければ……)

自身の父親が行ったある蠢行。それによつて幸福に過ごしていたリイン・オズボーンは母親を失った。そして残された父もまた人が変わったように覇道を進むようになった。そして自分はそんな父が何をしでかすのかを半ばわかつた上で止めなかつた。言わば、リイン・オズボーンが見舞われた不幸の元凶は自分にあるのだ。

リイン・オズボーンとレクター・アランドールが出会つたのはクレアと同じく7年前。

その才能を買われて情報局員として働いていたレクターの下にオズボーンからとあるお願いが舞い込んで来たのである。

「我が不詳の息子が軍人を目指すと言っている、現役の士官として綺麗事だけでは済まされぬ軍人としての何たるかを君には教えてやつて貰いたい」と。そうして言われるがままに訪れたクレイグ家にてレクターを出迎えたのは、必死に背伸びをしている絵に描いたような優等生の姿であつた。

「アランドール特務少尉ですね。今日より、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します！」

そんな10歳の子供とは思えないような口調で軍人ごっこをして

いるリインの姿にレクターは思わず吹き出して気がつけばめいっ
ぱいおちよくつていた。そうして激昂するリインに対して

「オズボーン君！君はこんな安い挑発に乗るのかね!?軍人とは理性を
持つて感情を律する存在。怒りに飲まれるようでは軍人失格だぞ！」
等と適当にそれっぽいデタラメを言ったら、それをまんまと信じ
て、ハツとした様子で

「申し訳ごいませぬ！自分が誤っておりました！」

等と真面目くさった様子で言うものだから、そんな様が余計にレク
ターにとつてはおかしく

「ま、これは今適当に考えたデタラメだけだな。そんな素直な様子
じゃすぐ敵に騙されるぞ」

と笑つて言つてやれば、ゆでダコのようにしてますます怒り、そん
な様が余計におかしくと初回は授業らしい授業にならなかつたもの
だ。

その次からはもう少し真面目に授業の方をしだしたが、二人の関係
は変らなかつた。真面目な弟とそんな弟をからかうチャライ兄貴、
リインとレクターはそんな関係であつた。

そしてそんな日々がレクター・アランドールにとつては何時しかた
まらなく楽しくなつていた。唯一の家族である父を亡くし、その後は
《鉄血の子供》として情報局員というばかしあいの世界に身を投じる
事になった彼にとつて、どこまでも真つ直ぐでひたむきなリインとの
日々が心の癒やしとなつていた。自分は一人っ子だったが、もしも弟
が居たのならばあるいは、こんな感じだつたのかとそんな風にさえ
思つた。

だがその弟から家族を奪つたのは他ならない自分なのだ。自分の
父があんな蛮行を行わなければリインは母親を失わず、父が覇道を歩
む事もなく今も優しい両親の下で穏やかに過ごしたのだろう。こん
な風に必死に背伸びする必要もなく。

故にこそクレア・リーヴェルトがそうであるようにレクター・アラ
ンドールのリイン・オズボーンに対して抱いている思いもまた、ただ

の仲の良い兄弟のような関係、そう一言では言えない複雑なものとなっていた。

(ま、でも流石に俺はあそこまで重症じゃねえけどな)

先程のクレアの血相を変えた様子を思い出してレクターはそう苦笑を漏らす。いくらなんでもあそこまでではないはずだと。

(やれやれ、あいつが結婚なりした時に大丈夫なのかね、クレア義姉さんは)

恐ろしい小姑と化して嫁いびりをするのではないかと小姑と化したクレアとそれの板挟みになっているラインの様子を想像してレクターは思わず吹き出す。

(何にせよ、ここはお手並み拝見と行くかね)

あの放蕩皇子が希望をこめて作り上げた特科クラスVII組、未だ未熟な雛鳥達はその軌跡を見守らせて貰おうとレクター・アランドールは今回の事件をきっかけに打てる手を思い浮かべながらミリアムからの通信を待つのであった。

鉄血の子と翡翠の都 《バリアハート》⑦

地下水路を使って侵入を果たしたフィーとエマは途中で「奴が泣きべそをかいているところを拝みに来た。それに副会長殿の方には借りもある」等と素直じゃない事を言うユーシスと合流を果たし、マキアスとリインの捕らえられている地下牢へと進んでいく。

「マキアスさんとリイン先輩……大丈夫でしょうか？」

「いくらなんでも捕らえた容疑者を暴行する程ここの部隊は腐ってはいまい」

「二人共まだ学生だから大した情報持っていないだろうからね。拷問してまで聞き出すつてのは考えづらいと思うよ」

エマの不安を払拭するかのようユーシスは「誇り」、フィーは「実利」とそれぞれの観点から二人はおそらく無事だと告げる。そうして進んでいくと程なくして地下牢と思しき場所に三人はたどり着いたのだが……

「よし、そうだマキアス！その感覚を忘れるな!!」

「はい、リイン先輩！」

何やらとても囚われの身とは思えない威勢の良い声が響いてきて

「イメージしろ！拳を憎いあんちくしょうに叩き込む所を！差し当たつての対象はもちろん」

「僕らをこんな所に送ってくれたアルバレア公爵ですね!!」

そしてその言葉を皮切りに2つの拳が空を切る音が響いてくる。一体革新派の二人はどこへ向かおうとしているのか、その答えは当人たちも忘れかけているかもしれない。

「……………」

「泣きべそかくどころかすごい元気そうだね」

「あ、あははは……」

冷え切っているとは言え仮にも父を仮想敵にされて何とも形容し難い表情をユーシスは浮かべる。

そうして現れた三人の姿に二人は驚きの表情を浮かべる。これが行動を共にしていたのがクロウやアンゼリカ、トワ、そしてジョル

ジユだつたらリインは驚きはしなかつただろう。ただ一言助けに来てくれたその友情に感謝の言葉を告げて終わりだった。それだけの信頼関係が自分達の間にはあると彼は自負しているからだ。5人は1人のために1人は5人のために。自分達はそんな絆で結ばれた仲間であり、友であるのだから。

だがフィーにしてもエマにしてもユーススにしても現状リインは未だそこまでの信頼関係を築けているとは思っていなかった。彼らが冷淡だと言っているわけではない、この帝国で四大名門に逆らうというのはそれだけ重い行為なのだ。それこそ昨日ゴルデイ伯爵を相手にした平民の青年のように、従ってどうにかやり過ぎず、それが一般的な大貴族に対する平民の対応である。

ユーススにしてもそれはそうだろう、家でのユーススの立場や実の父のあの冷淡な態度を思えばアルバレア公爵の意向に逆らつてどうなるかわからないという点で言えば、ユーススも他の二人とそう変わらない。それにも関わらず、危険を犯して助けに来てくれたというその事実には二人は感動を覚える。

「いやはや、不甲斐ない班長で申し訳ない。苦勞をかけたな」

だからこそリインの心の中にみすみす捕まり無様を晒す事になった自分の不甲斐なさに対する怒りが芽生える。これでは班長失格ではないかと。

「あの状況では仕方ありませんよ」

「最適解と思う行動をとってもそれが裏目に出る事もある、そんなものだよ。大事なそこからどうリカバリーするか」

「……ああ、そうだな。失敗は自らの行動によつて晴らすべしだ。ところで離脱の手はずは整えているのか?」

「駅まで突破して乗り込む予定」

「……………この状況下で領邦軍が駅を放置しているとは思えんが」
「あつ」

うっかりしていたと言わんばかりのフィーとエマの様子にリインは冷や汗をかく。此処を抜け出した所でクロイツェン州から抜け出してアルバレア公爵の勢力下から抜け出さないと意味がない。当然

向こうも万一脱走されれば、駅へ向かう程度の事は想定しているはずだ。このままではミイラ取りがミイラになつて終わるだけになりかねない、そう考えたリインは助けに来てくれた目の前の後輩達に感謝しつつもバレない内に退いてもらおうかと考えたが……

「……不本意だが俺の名を使おう。現場レベルの兵士であればおそらくそれで押し通せるはずだ」

「……良いのか？」

アルバレア公爵家の名をそうした事に使うのを嫌っており、何よりそんな事をしてしまえばまず間違ひなく此度の騒動を主導したアルバレア公爵の怒りを買うだろう。それこそ元々関係が冷え切つている事も相まって勘当される事とてありえるかもしれないなかつた。

「構わん。今回の一件は間違ひなく父の暴走。兄上がこの場にいらつしやれば間違ひなく父を諫めた事だろう。それこそが真の意味でアルバレア家の誇りを護る事に繋がると俺は信じている」

「そうか、そういう事ならばその言葉に甘えさせてもらおう」

当人が覚悟の上だというのならばこれ以上の問答は不要だろう。今はとにかくこの場からの離脱を優先すべきだ。

「それに、なんとか駅まで行けば先輩のお姉さんが助けてくれるんじゃないの？ 確か、鉄道憲兵隊の大尉さんだったでしょ？」

「……ああ、そうかもしれないな」

だがバリアハートはケルディックとはわけが違う。事件にしても窃盗事件と軍事施設への侵入とでは領邦軍の本気具合も。自分の救出のためにもしもクレアがケルディックの時のように強行してきた場合、革新派と貴族派の対立は更に悪化する事となるだろう。そしてそれを行ったクレアの軍内の立場でもまた……

まただ。先月に引き続きまたもや自分は無力だ。首席だの副会長だのと持て囃されようが所詮今の自分は一介の学生に過ぎない。力になるどころか足手まといになつてしまつていゝという我が身が不甲斐なくてたまらない。先月の時、あの局面を打開するための手札はラウラという光の剣匠の娘という威光だった。そして今もまた、ユースというアルバレア公爵の息子という権威がこの場を切り抜ける

切り札となっている。自分はそこに何ら寄与していない、それどころか今回は囚われの身となったことで明確に足を引っ張ってしまったている始末だ。

そんな自分の不甲斐なさに憤懣やるかたない、何が姉と並び立って父の力になりたいだ。増上慢にも程がある、未だ自分は誰かの庇護がなければあつさりとうとうして囚えられて、政争の道具に使われる程度の存在なのだと突きつけられた現実にリインは激しい怒りを燃やす。「とにかく方針が決まった以上迅速に行動するでしょう」

自らの不甲斐なさを戒めるかのように血が滲み出そうな勢いで強く握りしめた拳を解いて、気を取り直したリインはそう号令をかける。今は、そんな事を考えている状況ではないと。かくしてリインとマキアスを奪還したB班のバリアハート脱出行が幕を開けたのであった。

・
・

結果としてB班の脱出口は失敗に終わった。流石は州都と言うべきか、領邦軍の練度は精鋭と呼ぶに足るものであった。リインとマキアスが脱走した事を悟った未だ試作段階の大型の軍用犬を地下水路へと放つ。これの撃退には成功したものの、交戦している間に瞬く間にリイン達を包囲。

逮捕対象にユーシスがいた事を確認して動揺の色を見せたものの、指揮官足る士官は冷静に「如何にユーシス様であろうと軍事施設への侵入は許される事ではありません」と毅然な対応を見せる。……これにはリインとマキアスの捕縛はアルバレア公爵直々の命令だったこと、そしてユーシスと公爵の関係が冷え切っている事も大きく関係していたであろう。ユーシスを捕らえたところで、公爵の不興は買わない。むしろここでリイン達を取り逃がしてしまう方が公爵の不興を買うこととなる、そう判断したのでだろう。万事休すとそう思った時――

「その必要はなからう」

どこまでも優美な声が響き、ツールズ士官学院の常任理事たるルーファス・アルバレアが姿を現した。そうして現れたルーファスの「父

には私から話しを通しておいた」という言葉と「この上、私に余計な恥を搔かせる気か」という静かだが有無を言わさぬ言葉をその言葉の迫力に領邦軍は即座に撤退して、リイン達は事なきを得るのであった。

「済まなかったね、君たちには要らぬ苦勞をかけた。アルバレア公爵家の人間として改めて謝罪させてもらおう」

領邦軍が退いた後にルーファス・アルバレアはどこまでも真摯な様子でそう謝意を告げる。その姿はまったくもって困った人だと己が父に対する呆れの色が出ていた。

「……いえ、ある意味では中々に得難い経験をさせて頂きましたよ」

その気になれば大貴族という存在はいくらでも平民を破滅に追いやるのだという事をリインはその身を持って味わう事が出来た。ある意味では得難い経験だったと言えるだろう、ケルディックに続いて地方における貴族のその権勢を味わう事が出来たのだから。

目の前のルーファス卿が悪いわけではないと理解していながらリインの言葉は自分自身に抱いた怒りから、そんな刺々しく皮肉気なものになってしまう。だが、ルーファスはそんなリインの八つ当たりに対しても怒る事無く苦笑して

「そう、皮肉を言ってくれるな。今回の事は私としても予想外だったのだ。まさか父が宰相閣下と知事閣下の息子である等という理由だけで未だただの学生に過ぎない君たちを拘束する等とは思っていないからね」

子供の癩癩を宥めるかのようにどこまでも大人な態度をリインに見せつけていた。

「……ッ！」

ただの学生、そう所詮自分はただの学生に過ぎない。ルーファス卿の言っている事は別に嫌味というわけではない、ただ事実を述べているだけだ。

（何が……帝国男子の鑑だ……！何が……いずれ乗り越えなければならぬ難敵だ……！）

ルーファス卿にとって見れば自分など文字通り未だ独り立ちして

いない、親の庇護が必要な子供でしかないのだ。為す術無く捕まった挙句後輩達までも巻き込みかねなかった自分に対して、「私に恥をかせるつもりか？」という一言のみで領邦軍を退かせたルーファス卿、今の自分などルーファス卿にとっては本当に取るに足らない存在に過ぎないのだろう。

無力だった。所詮今の自分は学生としては良くやっているという程度の身に過ぎない。次期アルバレア公爵たるルーファス・アルバレアにとっては文字通り敵にすら値しないのだろう。

「だが、無論未だ学生の身である君たちを政争の道具に使うなど理事を務める身としては見過ごす事は出来ない。故にこうしてバレスタイン教官からの報告を受けて戻ってきたというわけさ。今回の件は父の独断であり、決して我々貴族の総意というわけではない、そう理解して貰えると助かるのだがね」

「……承知致しました。先程の無礼極まる態度、申し訳ございませんでした」

「ははは、何構わないさ。決して居心地の良いとはいえぬこのような場で拘束されていたのだ、それは嫌味の一つ程度言いたくもなるだろうさ。君も何かと苦勞が耐えない身だろうしね」

そこでチラリとルーファスは弟であるユーシスの方を見て

「お前も後輩だからと言ってあまり先輩である彼に甘えすぎないようにな。如何に優秀とは言え、彼とて年齢で言えばお前と同じ17歳、未だ学生の身に過ぎない。互いに刺激し合うライバルならば結構だが、班員同士でいがみ合い等をされては彼も班長として苦勞が耐えないだろう」

先日の自分の醜態を見透かしたかのような兄の態度にユーシスとそしてまたマキアスも顔を赤くする。海千山千の妖怪たちがうごめく社交界、そして政界ですでに確固たる実績を挙げているルーファスにしてみれば未だ未熟な学生との僅かなやり取りからどういった関係を見抜く事など朝飯前なのだろう。

昨日のほんの僅かなやり取りからユーシスとマキアスの仲が陰悪だったこと、そしてそれが解消された事をルーファスは見抜いてい

た。

「さて何時までもこんな場所にいても気が滅入ってくるだろう、どうやら課題も一通りこなしたようだし、今日はもう宿に帰って休み給え」

そう、ルーファス・アルブレアはどこまでも優美にそう生徒を氣遣う理事としての言葉を告げるのだった……

……

「ま、そこら辺は今には気にする必要ないわ」

バリアハートからの帰りの列車、領邦軍と正規軍の対立に対するエマの懸念に対して教官であるサラ・バレストアインは告げる

「君たちはまだ、学ぶ立場にある」

告げられるのは昨日のルーファスが言っていたのと同じ事。リイン達はまだ正規軍の軍人でもなんでもない、ただの学生に過ぎないという言葉。焦る必要はないのだと、大人として焦る子供を諭す言葉。「今回みたいに厄介で面倒な現実を少しずつ知りながら、それでも今しか得られない何かを掴む事が出来るはず。掛け替えのない仲間と一緒にならね」

そうだ、自分は奢っていた。首席だの副会長だの、帝国男子の鑑だのと賞賛を受けてそれに満足していた。

現状に満足してしまえばそれ以上の成長など有り得ないというのに。高みを目指して羽ばたく事を怠っていた。

だが、今回で現実を知る事ができた。所詮今の自分など一介の、無力な学生に過ぎないのだという現実を。大貴族の有するその権勢を。「それは、社会に出たら何の意味もない儂いものかもしれないけど……どこかで君たちの血肉となり、大切な財産になってくれると思う」

ああ、そうだ。トワ、クロウ、アンゼリカ、ジョルジュ、彼らと過ごした日々はもはや切っても切り離せない大切な財産だ。彼らに出会う事がなければ今の自分はなかった。

ーだからこそ、自分はその心地良さに甘えていた。大切だから、彼

らと過ごす日々が楽しいから。未だ頂きには程遠い未熟な身にも関わらず研鑽を怠っていた。

鍛錬というのは長ければ良いというわけでは決してない、だがそれでも今の自分は入学していた頃程の研鑽を積んでいただろうか？脇目も振らずに全身全霊を持って理想を実現しようとしていたか？

「いいや、否だ。何時しか自分の走る速度は間違いなく遅くなっていた。」

「迷うことが大事だと学院長は言っていた、確かにその通りだ。あの迷いは間違いなく自分にとって必要な行為だった。」

だが、何時までも迷っていては間違いなく進む速度は遅くなるのだ。そして自分が目指しているのは生涯を費やしても届くかどうか分からない頂きなのだ。

故に、そろそろ迷うのは辞めよう。多くのことを知った、掛け替えない仲間から多くの財産を受け取った。打倒しなければならぬ敵を知った。

ならばそう、再び全身全霊で持って進み始めるべきだろう。受け取った財産を無駄にしないためにも。

「少なくともあたしはそう信じている」

「ええ、教官の仰るとおりだと思いますよ。きっと俺にとってのトワヤクロウやアンゼリカやジョルジュがそうだったように、彼らにとつてはⅦ組がそうなるでしょう」

胸の中に静かに灯りだした決意の炎を表には出さずリインはそう柔和な笑みを浮かべてサラの言葉へと応じる。教官の言葉それ自体に対する異論など全く無いからだ。

「ふふふ、そうですね私達もいつか先輩たちのようになれたら良いなと、そう思います」

「ふん、他の面々とはともかく副委員長殿とは仲良しの友人等御免こうむるがな」

「な、何おう！それはこっちの台詞だ！」

「……また始まった。実は二人共仲良しでしょ？」

「断じて違う」

「……やっぱり仲良しじゃん」

そんな光景を見てエマはクスクスと笑う。

VII組の面々は気づかない。彼らにとってリイン・オズボーンは頼れる先輩だから。自分達よりも成熟した、非の打ち所のない先輩だから。

首席であり生徒最強の文武両道、人格の方も公明正大そのものとなんな先輩が今の自分を不甲斐なく思っているなど想像の埒外だから。「うーん雨降って地固まるって奴かしら。さすがねリイン、この調子で先輩として頼むわね」

「ええ、おまかせ下さい教官。俺にとってもこの特別実習は大変得難い経験ですから。望むところですよ」

「あんたとトワってばつくづく優等生ねよくもまあクロウみたいな不良生徒と仲良く出来ているもんだわ」

「はは、まあそれについては教官が来る前に色々ありました」

教官であるサラ・バレストインもまた気づけなかった。

何故ならば彼女が赴任してきたのはリインがクロウと大喧嘩を繰り広げた後だったから。

彼女にとつてのリイン・オズボーンという生徒は向上心が強いものの常軌を逸したレベルではない、微笑ましいものだったから。

一番危うかった時期のリインを知らず、友人達と共に年相応の少年らしい笑顔を浮かべるリインを見てきたから。

落ち着いた様子で後輩達を導く頼もしい先輩としての成長した姿をこの2ヶ月見続けたから。

(ああ、そうだ、忘れるな。あの光景を)

思い出すのは何時までも続くと思っていた日常が唐突に終わりを告げた日。愛する母を失った日。

何も出来ずに、血まみれで倒れた状態の父と母、炎によって真っ赤に染まった我が家の光景。わけがわからぬままに胸に走った激しい痛み。そしてそれを齎したのが大貴族であったという事。

ユースやアンゼリカのような友になれる大貴族も居れば、バリアハートで見たような傲慢極まる者や自分から母を奪ったような貴族

たちがいる事もまた現実。

——ケルディックで商品を盗まれた青年のように

——バリアハートで婚約者のために用意した品を泣く泣く譲らなければならなかった青年のように

——そして大貴族にとっては都合が悪いというだけで公正さ等欠片もない冤罪をかけられている者達のように

今も貴族の横暴によって虐げられている無辜の民が居るのだ。そしてそんな不公正を是正すべく自分は強くならなければならないのだ。

そう、リインは決意の炎を燃やします。知らず知らずの内に自分はそうした現実を忘れて今ある幸福に甘んじていたと。

かつて自分が味わった悲劇をもう誰にも味合わせない、そんな理想を抱いて軍人を目指していた事を再び強く誓って。

掛け替えのない友人達によって解きほぐされていた心を、鉄血の子は再び自らの意志によって鋼で纏い始めていた……

兆し

(よしー)

張り出された中間試験の結果、それを見てリインは小さくガッツポーズを行った後に自らを戒める。所詮は学校の試験での結果にすぎない。この現状に満足するな。まだだ更なる高みを目指せ。もつとだもつともつともつとー！ー！ー！そう燃え盛る意志に更に薪を焚べていく。止まるな前進し続けろ、と。

そして張り出された結果はこうなっていた

1位：リイン・オズボーン 1000点
2位：トワ・ハーシエル 990点
3位：ヴィンセント・フロラルド 975点

「おいおいおい、リインの奴、全教科満点ってマジかよ」

「……あいつ、生徒会の活動だの一年の新設クラスと一緒に特別実習だのにも参加してなかったか」

「ついでに言えば暇さえあれば街道に出て魔獣退治やったり、サラ教官やナイトハルト教官に稽古をつけてもらっているらしいな」

「……奴は本当に俺達と同じ人間なのか？」

あまりの凄まじさに若干ドン引いた様子ながらも口にはしている生徒達の声はどこか親しみを感じさせるものだった。あいつならばそれ位やつてのけるかもしれない。どこかそんな納得の色がある。

人はあまりに凄まじすぎる存在を見た時、嫉妬という感情を通り越してある種の畏敬の念を抱く。ここ最近のどこか鬼気迫る様子も相まって大半の生徒はそんな風のリインはある種特別視していた。

「ふふふ、流石だな我が宿命のライバルよ。多忙を極める身ながらも成績を維持するどころか更に高めるとは……それでこそこのヴィンセント・フロラルドのライバルに相応しい！」

大仰な芝居がかかった様子でそう自称宿命のライバルたるヴィンセントがリインに声をかける。その声は悔し気ながらも自らのライバルが強い事を喜ぶ色が見えていた。

「だが、次こそは私が勝ち、帝国貴族の誇りを君に示してみせるとしよ

う」

「ああ、楽しみにしているぞ。最も俺が今回の成績を維持すればお前が勝つことは不可能だがな」

そのライバルの宣戦布告にリインは苦笑しながら応じる。言動に見合うだけの実力と気高さを有し、生徒会で共に活動する仲間でもある目の前の相手にリインはそれなりの敬意と好意を抱いていた。負ける気は、さらさらないが。

そしてヴェインセントもまたそんなライバルの言葉に笑みを浮かべながらその場を立ち去っていく。宣言通りにリインに勝つために彼もまた表には出さないう陰で努力を重ねるのだろう。

「ふん、調子にのるなよオズボーン。所詮はたかがテスト。測れる事など知れている」

打って変わってかけられた敵意に満ちたその声にリインは一理あることを認めた。そう所詮こんなものは目安に過ぎない。故にこの程度で満足してはならない、自分が目指すべき場所。それはツールズ士官学院の首席という地位で終わりではないのだから。これはあくまで通過点に過ぎない。

「その通りだ。たかがテストだ」

そう首肯した後、リッテンハイムに対する皮肉が続く事を予想した周囲だったが、予想に反してそれだけ告げるとリインはその場を立ち去っていく。

まるで真実この程度誇るに値しないとでも言うかのように。もはやリッテンハイムに関わっている時間すら自分にとっては惜しいのだと言わんばかりに。

以前までなら激しくやり合っていた相手のその様子にリッテンハイムとその取り巻き達も売った喧嘩が不発に終わったような鬱憤を抱えながらその場を後にする。

「……なんというか、大人になったよなリインの奴」

「ああ、2年になる前まではリッテンハイムにあんな事言われたら大体小馬鹿にするような皮肉ぶつけていたのに」

そしてそんなリインの変化は好意的に受け取られていた。

大人になつたのだと。成長の証なのだ。リインとあまり接点が薄い生徒だけではない。

彼を担任として受け持つハインリツヒ教頭も、親友であるアンゼリカやクロウでさえも彼のその変化を成長の証だと捉えていた。後輩の面倒を見るようになって、先輩としての落ち着きが出来てきたのだとそんな風に。

皆彼の変化に気づかない、あるいはそれをこれまでと同じ成長なのだと思えていた。

「……………」

ただ一人、トワ・ハーシエルだけが、そんな彼の様子にどこか言いようのない不安を覚えていた。

……

「ねえ、最近のリイン君どこがおかしくないかな？」

テスト結果も張り出され、ナイトハルト教官に稽古をつけて貰う約束があると申し訳無きような様子で断つたリインを除き、技術棟へと集まったクロウ達はそんなトワの発言に目を丸くする。

「そうか？別に特に変わらねえと思うが……ま、確かに色々忙しい癖に全教科満点なんてやりやがった辺り、ついにあいつの変態っぷりも行き着くところまで行き着いたって感があるけどな」

以前より勉強と鍛錬が趣味と言った在り方のリインをクロウはそう揶揄する。まあ元帥だの宰相だのと言った地位にまで上り詰めるような奴らはそれ位ネジが外れているものでないと務まらないのかもしれないが。

そう、リインが勉強や鍛錬に打ち込むのはずっと前からそうだった。むしろだらけたリインなどクロウの想像の埒外である。故にクロウ・アームブラストも気づいていなかった。

「ふむ……まあ言われてみれば若干付き合いが悪くなった気がしないでもないが……だが何もリインの友人というのは我々だけじゃないんだ、そんなものじゃないかい？」

確かに以前よりも自分達よりも教官の所に行く時間が増えた気はする。しかし、それとて別段自分達を避けているというわけではない。たまたま先約が入ったりしたただけだ。実際今回の集まりに参加しなかった理由もそうだったし、断る時のリインは申し訳なさそうにしていた。

彼が教官に熱心に指導を受けに行くのはもはや日常的な光景であるので、そう変わったことではない。間が悪かったただけだ。実際数日前の自由行動日の際には5人で揃って導力バイクの調整を行ったし、リインも楽しそうな笑みを浮かべていた。

元よりそう四六時中ベタベタと一緒に居る等というノリはアンゼリカの趣味じゃないし、リインが2年になり第三学生寮に移ってから行動をとる時間も1年の頃より減った。

それ故アンゼリカ・ログナーもリインの変化に気づかない。何故ならリインがこの四人に抱く友情、それ自体は何ら変わっていないのだから。

「まあ確かに変わったって言えば変わったって言えるのかな。今日も以前だったら「最もそういう事を満点なりとられていない状態で言われても、負け犬の遠吠えにしか聞こえんがな」とか小馬鹿にした笑みを浮かべながら言うんだろーって思っていたけどそのままスルーしていたし」

リインのこれまでとは違った様子で真っ先にジョルジュに浮かぶのはそれだ。だが、この変化は所謂成長、大人になったと呼ばれる部類だろう。好意的になりこそすれ、特に非好意的になる理由がない。実際貴族クラスのタンニンたるハインリツヒ教頭等は受け持ちのクラスが大分平和になって胸を撫で下ろしているし、リインの成長を好ましく思っていた。

「後輩の面倒見てあいつも丸くなったって事かねー」

そしてそうなった理由を教官も2年の面々も先輩になって後輩の面倒を見るようになったからと捉えていた。Ⅶ組の担任であるサラ教官は得意気な顔をして、ハインリツヒ教頭から「……オズボーン君が後輩の面倒を見ているという事はつまりそれだけ担任が頼りに

なっていないということではないかね？」等と嫌味を言われている。「そう……なのかな？」

信頼する友人達、自分と同じ位にリインのことを知っている、とトワは思っている、3人が揃って自分の抱いた疑惑を否定した事でトワは自分の判断に自信がなくなる。

何せこれは極めて感覚的な事だったから。この学院に入ってから一番リインと共に時間を過ごしてきた、リインの事を一番良く見ていた彼女だからこそ抱いた些細な違和感。

だからこそ、信頼する友人達の筋道だった言葉を聞いて次第にトワは自分の抱いたその懸念が杞憂や気のせいではないかという方向に傾いていく。

元々彼女は士官学院にて次席を務める才媛だ。そういった感覚的なものよりも理性や論理を重んじる傾向がある。

何せ元々理由は説明できないが、どこかおかしい気がする等という曖昧なものなのだ。

リイン本人に何か悩んでいる事はないか？と聞いても、柔和な笑顔を浮かべて「いや、別にないよ。トワの方こそ何か悩んでいる事があれば俺にいつでも相談して欲しい」

と返答され、確かにその表情に悩んでいる様子は何も見受けられなかった。

「お前さんも中々に心配性だからなー」

「私としてはトワの方はトワの方で気がかりなんだけどね」

「そうだね、生徒会会長で次席の優等生。トワもあんまりリインの心配している場合じゃないレベルで激務だと思うんだけど」

そう矛先が自分の方に向いだせばトワは慌てながら弁解をする他ない。

故に唯一リインの変化の兆しに気づきかけていたトワも結局、自分が心配性なだけだったのかもしれないという結論に至るのであった

……

・・・

カランと双剣が弾き飛ばされる、そして無手となった自分に対して

突きつけられるサーベルを前にしてリインは……

「参りました、ナイトハルト教官。やはり、まだまだ教官には敵いませんね」

素直に白旗を挙げる。鍛錬というのはがむしやらにやれば良いというものではないし、退くべき時を見極められないのはただの愚者だ。そんな今もまた突きつけられた達人との壁を前にしてマグマのように煮えたぎる感情を切り離して、冷静な理性による判断で。

「ふ、私はお前より10以上も歳が上なのだぞ。そうそう追いつかれては敵わん。だが研鑽を怠っていないようだな、着実に成長している。……少々悔しいがおそらく私が士官学院生だった頃よりもお前は強い。この分ではもう数年もすれば追いつかれるかもしれない」

そう目の前の可愛い弟分を学生としては破格の実力だと賞賛する。基本スパルタの彼が此処まで絶賛するのは早々ない。目の前の少年は間違いなくいずれ軍を背負って立つ存在となるだろう。

自分が兄貴風を吹かせていられるのも一体いつまでなのか、いずれは自分の方こそが目の前の少年の方に部下として敬語を使わなければならぬ日が来るだろうとナイトハルトは期待半分の確信を抱いていた。

「ありがとうございます、それでこの後なんです教官のご都合さによろしければ、軍事学について現役の士官たる教官に教えて頂きたいことがあります」

「もちろん構わんぞ」

どこまでも向上心に溢れた様子で貪欲に知識を吸収していくそのリインの様子にナイトハルトは笑みを深める。全くもって将来が楽しみだと。

既に学年首席という立場に有りながらも、決して奢ること無きその飽くなき向上心をナイトハルトは好意的に受け止めながら、限られた時間の中で全霊を持って指導に当たるのであった……

鉄血の子と悠久なる大地 《ノルド》①

日課である朝の鍛錬を一通り終えたリインは腕時計へと目をやる。時刻は7時。以前であればこのまま学校へと趣き学生会館で朝食を取るころであつたが、ラインフォルト家のメイドであるシャロン・クルーガーが来て、食事を用意してくれるようになってからは専ら後輩達やトワも含めて皆で食事を取るようになっていた。アリサは反対していたが、正直リインも含め他の面々にとつては有り難い事の上なかつたので、圧倒的な賛成多数を持ってシャロン・クルーガーの第三学生寮管理人就任はあつさりを受け入れられた。

一番諸手を挙げて喜びそうな教官たるサラ・バレストラインが若干渋い様子だつたのが意外と言えれば意外では合つたが。

「なるほど、そんな事があつたのか」

朝食の場でリインはⅦ組の面々から昨日の顛末を聞く。以前フリーデルより聞かされていた増長の傾向が見られる一年生、ハイアームズ家の三男坊が曰く実技テスト中に絡んできたのだと。そして負けたハイアームズの三男坊がそれはもう負け犬の遠吠えの生きた見本とでも言うべき醜態をさらしたと。

(分水嶺だな)

パトリック・ハイアームズがユース・アルバレアのような家を依りどころにするのではなく誇りとする気高さを持った真の貴族になれるか、それともヨアヒム・リッテンハイムのような家に縋るだけの貴族となるか、その境目がおそらく今だろう。此処で自らの敗北を内省出来るのであればⅦ組の面々への言動やこれまでの行動も若気の至りで済むだろう。しかし、此処で自らの失言を正当化するようであれば後はリインの打倒すべき存在たる腐敗した傲慢なる貴族へと転げ落ちていくだけである。

自分がクロウ・アームブラストという父の覇道の犠牲者と出会つた時と同様、今がパトリック・ハイアームズという男にとつての正念場だろう。そしてあの時の自分はトワが、掛け替えのない友人が居たから踏みとどまる事が出来た。パトリック・ハイアームズにはそういう

存在は居るのだろうか？

(……フリーデルに相談された手前、義理立て位はしておくか)

自分が直接論してどうこうというわけではない、革新派である自分から言われてはむしろせつかく内省しかけているところを逆に反発心から悪化する方向に行きかねないだろう。事が貴族としての誇りという問題である以上、それはトワも同じだ。

平民からの説教を心穏やかに受ける事は出来ないだろう。故にそう、ことこういった貴族生徒の相手として最も適切なのは――

……

「なるほど、つまり私にハイアームズ殿に貴族の何たるかを教えてやれと」

放課後の生徒会室で、優美な、と本人は信じているのだろうが、まさに優美さの極致とでも言うべきルーファス卿に出会ったライインからしてみると三枚目にしか見えない様子でライインの宿命のライバルにして同じく副会長を勤めているヴィンセント・フロラルドはライインから持ちかけられた話しに頷く。

「ああ、フリーデルからも以前相談されたんだがな、どうにも彼は貴族の誇りを履き違えている部分があるようだな。そこで貴族の鑑たるフロラルド殿の方からそれとなく真の貴族の何たるかを教えてやってほしいんだ」

多少のリップサービスはこめているものの全てがお世辞というわけではない。実際知勇兼備であり、平民に対しても寛大に接するヴィンセント・フロラルドは貴族の鑑と言っても過言ではない、どこか漂う三枚目の空気もある種の親しみやすさになっており、そんなわけで貴族生徒相手の対応という点に関して言えば生徒会で一番の適任は目の前の男であった。

「ほほう、フリーデル嬢がな」

ピクリとフリーデルが手を焼いているという言葉にヴィンセントが反応する。気高く美人であり実家も武門の名門である伯爵家令嬢の人気は高い。例によってヴィンセントもまたそんなフリーデルに

懸想している一人であった。

彼の頭のなかではすでに颯爽とパトリックを更生させる自分、そして自分を尊敬の念で見つめるパトリックと「私じゃ出来なかったパトリックくんをこうも見事に更生させるだなんてヴェインセント君ったら素敵！」等と言うフリーデルの姿が浮かんでいる。無論あくまで彼にとつての都合の良い妄想であり、現実が彼の希望通りに動くとは限らない。特に最後の妄想の実現の可能性は凡そ絶望的と言えるだろう。

「ふ、話はわかった。先輩として、そして副会長としてこの私ヴェインセント・フロラルドが見事ハイアームズ殿を導いて見せようではないか。君は大船に乗ったつもりで特別実習とやらに行ってくると良い」「ああ、よろしく頼む」

自分が打てるとしてはこんなところまでだろう、後は本人次第だ。そんな感慨を抱きながら友人であるフリーデルに対する義理立てのために特別実習の前日にリインは宿命のライバルと言葉を交わすのであった。

...

「一難去ってまた一難というか、お前達は本当に一筋縄ではいかんな」
ユースとマキアスが健全なライバル関係となり、ようやくクラスに平和が訪れるかと思つたのも束の間、帝都に向かう列車内にて火花を散らし合うフィーとラウラの二人を見てリインは苦笑を溢す。

「先輩たちはやっぱりずっと仲が良かったんですか？」

「ああ、そうだな。トワについてはもう言うまでもないと思うがジョルジュにしても温厚なやつだし、アンゼリカはあんな感じだしな。喧嘩らしい喧嘩をしたのは大体俺とクロウの奴位だったよ」

エマからの問いかけにリインは昔を懐かしむような心境で穏やかに笑いながら答える。よくよく考えてみればまだ出会って一年とちよつとしか経っていないんだなとリインはいつの間にか十年來の友のように思っていた自分自身に苦笑する。この分では老人になる

頃にはそれこそ子供の頃からの付き合いだったかのようにボケて勘違いするのではないか、等と。

「あの以前から気になっていたんですけど、どうしてクロウ先輩とそんな大喧嘩をしたのか聞いてもよろしいでしょうか」

チラリと火花を散らし合っている二人の少女とその間を取り持とうとしている年長の少女、そして出発前の意気込みはどこへ行ったのかすっかりと置物と化した男子二人を伺いながらエマは問いかける。今では親友通しと化した二人がどうして喧嘩したのか、そしてどうやって仲直りしたかを聞けばひよつとして今冷戦状態にある二人の仲直りのきつかけになるのではないかという期待を込めて。

「まあ別に構わんぞ。正直、若気の至りというか今思い返すと赤面ものではあるんだがな」

大人が聞けば自分のような若輩者がこう言うのは失笑物だろうがそれでも今の自分からするとそう言わざるを得ない程に一年前の自分は未熟だったと若干恥ずかしい気持ち覚えながらもリインは語っていく。元々不良生徒という事で自分がクロウを良く思っていなかった事を、そして仮面を被っていたクロウの様子がどうにも癪に障った事を、そして向こうに父と姉を侮辱されて後は売り言葉の買い言葉の大喧嘩になったことを。

「ふむ、些かに意外だな」

「確かに。ちよつと意外かも」

リインの語った内容にⅦ組の面々は驚きを示す。彼らにとってのリイン・オズボーンはまさしく絵に描いたようなエリートと言った頼りになる先輩としてのリインだから。友人達から影響を受けて成長した、貴族が相手でも公明正大で不良生徒に対しても叱責しながらも寛容さを持ったまさに副会長に相応しい懐の大きさを持つ立派な先輩、それが彼らの抱くイメージなのだ。

「もしも俺が君たちと同じ年に入学していたらそうだな、さぞ委員長を務めるエマにとっては頭の痛い事になっていただろうさ」

もしも自分の入学が一年遅れていたらマキアスやラウラと意気投合する一方で、アンゼリカと出会わなかった事で自分の中の貴族に対

する偏見は拭いきれずに、おそらく大貴族であるユーシス相手に意地を張つただろう。

クロウと喧嘩をしなかつた自分は父を絶対視し、何よりもトワと出会わなかつたことで自分の目指す軍人という仕事もまた「誰か」を殺すという矛盾を受け止めようとしなかつただろう。そして獵兵であるフィーに対して敵意を燃やしたはずだ。おそらくマキアスと一緒にユーシスを敵視し、今フィーとの関係が微妙になったラウラへと同調していた事だろう。全くもって大惨事と言うべき有様になつていたことだろう。

「しかし、それほどに激しくやり合つたというのにきちんと和解し、今では友となれたのだから大したものだ。自分の過ちを認めて謝罪するというのはそうそう出来る事ではない」

感心したようにガイウスがそう言うが、おそらく同じ状況になればそれをきつちりで行えるであろう人間に言われてもリインとしては苦笑するしかない。本当にとんでもないが後輩には思えなかつた。

「何、それに関してはトワのおかげさ。彼女のおかげで俺は自分がどれだけ恥知らずな事を言つていたのかに気づく事が出来た。彼女には俺は教わつてばかりさ」

「あーはいはい、ごちそうさまです。本当にもう、さらつと惚気けるわねこの人は」
「別に惚気けてなどいないがな。ただ純然たる事実を述べているだけだ」

またいつものパターンかと言わんばかりに辟易とした様子で呟くアリサに対してリインは小首を傾げながら何故惚気などと言われるのかがわからないといった様子で告げる。

「まあとにかくだ、喧嘩の時は相手が悪いと思うもんだが、後々振り返れば自分にも改めるべきところがあつたりするもんさ。その辺を一度冷静になつて考えてみるのが大事だと、一つ先輩風をふかさせて貰つてこの話は終わりにさせてもらうとしようか」

正直に言えば獵兵に対する隔意が全く無いとはリインとて言えない。命じた大貴族こそが自分にとって母の仇なのは当然だが、実行犯

である獵兵に対する憤りとして当然ある。だが、フィーは年齢から考え
ても事件に関与しているはずがないし、そも自分の目指す軍人として決
して綺麗なだけの存在ではない。

人を殺すという点では国のためだろうとミラのためだろうと同じ
だ、等と言う論は些か暴論に近いとは思いますが、さりとて事情を知りも
せずに獵兵だからという理由だけで一方的に蔑むというのもそれは
それで何か違うと思うわけである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな誰に向けられているのかが明白な最後のリインの言葉にど
こまでも実直な青髪の少女は少しだけ気まずそうな顔を浮かべ、奔放
な銀髪の少女は知らんぷりをするという二人の性格の違いがそのま
ま現れたような対照的な反応をするのであった……

鉄血の子と悠久なる大地 《ノルド》②

ノルド高原へと向かう旅路は中々にハードであった。

トリスタよりおよそ5時間かけてようやくルーレへとたどり着いたA班であったが、ノルドに行くには此処から更に貨物列車に揺られる事4時間。ようやく道半ばと言った状態である。

(やはり専門書を2冊持ってきて正解だったな)

今回の旅路に際してリインが持ってきた本は2冊。ハイブリッヒ教頭より勧められた経済と政治の本である。授業からの範囲は大分外れているが、それでも質問に来たリインの問いに対して教官が、本来は学術院で学ぶような内容となってくるのだが等と前置きした上で勧めてくれたものである。行きの列車で読み終えて、帰路の際に復習の意味を込めてもう一回読み返す、そして学院に帰ったら不明瞭だった分を質問することで知識をきちんとみにつける事ができるだろう。景色を眺めるのも悪くはないが、自分には学ばなければならぬ事がまだまだ幾らでもある。一つ知識を得ればそれに付随して新たに知りたいと思うこと、知らなければならないと思うことが5つ浮かんでくる。ともかくにも時間が幾らあっても足りない、それがリインの心境であった。

そんな事を考えながら、乗り換えの間にノルドに就くまでに食べる昼食の弁当でも買っておくかという話になったところでⅦ組の面々は呆気にとられる。朝トリスタにて別れたはずのシャロンが作りたての弁当を携えてルーレに来ていたのである。しかもアリサの母親であるイリーナ・ラインフォルト氏と共に。

「貴方がリイン・オズボーン君ね、昨年度に引き続きARCUのテストの任を引き受けてくれた事感謝しています。現場の観点から書かれた貴方のレポートはこちらとしても大変参考になっていますわ」

「いえ、学生の身にも関わらず随分と好き勝手な事を書いてしまった身としては恐縮するばかりです」

昨年度リイン達が運用したARCUは完全な試作段階で技術的なトラブルが数多く散見された。ジョルジュは技術者としての観点

から、リインはいずれ軍人としてそれを運用する事になったらどうか？という観点からその問題をレポートに書いて報告していたわけなのだが、今思えば学生の身では些か出すぎていたという気がするわけなのである。

「感想文を送られてはこっちとしても困るけど、貴方のはきちんとしたレポートだった、理路整然と問題点が列挙されていた、ね。そしてそれが貴方達が今使っている改良型の試作機へと結びついた。だから畏まる必要は全く無いわ」

過度の謙遜など不要。自分は能力に対しては公正に評価を下すと言わんばかりの温かみは欠片も有していない様子でただ事実を述べするような態度でイリーナはリインを賞賛する。そしてそのままの様子で

「どう？卒業後はウチでテスターをやってみる気はない？導力技術に対する体系的な知識を有していて、なおかつ技術畑ではなく現場の観点から理路整然と意見を出してくれる貴方みたいな存在は結構貴重でね。不満を持たせないだけの待遇を用意する事は約束するけど」

所謂優秀な人材の青田買い、それを敢行していた。冗談やリップサービスではないのであろう傍らにいるシャロンは既にそつと契約書のようなものを用意し始めている。もしもリインが此処で乗り気な様子を見せればそのまま詳細な条件を取り決めて、社員へとするつもりなのだ。

「自分に対する評価は有り難いですが、生憎自分が選ぶ道はもう決まっています」

そこでリインは一度軽く息を吸って

「俺は軍人になります。故に貴方のそのお誘いは申し訳ないですが、断らせていただきます。イリーナ会長」

自らに対しても改めて宣誓するように、そう静かにだがはつきりとした口調で真っ直ぐな瞳でイリーナを見据えながらそう言葉を告げた。

軍人が「自国の民を護る」という綺麗事だけでは済まされない存在である事は知った、「理性と感情を切り離して行動する」という標榜が

如何に無慈悲で過酷なものなのかも臆気ながらも理解した。

かつて夢に焦がれていただけの子供ではない、軍人という職務の過酷さ重みそれらを臆気ながらもリインは感じている。憧れだけで務まる程に容易い仕事ではない事も、「必要悪」を担うという事がどれほど大変なのかも。

だがそれでも国家にとって軍隊、そして軍人とは必要な存在なのだ。誰かが担わなければならないというのならばそれを自分が担いたい、「憧れ」ではなく確固たる意志と覚悟を以て。それがリインの今の思いだった。

「そう、残念だけどそれならばしょうがないわね。気が変わったら何時でも言って頂戴」

その気のない人間を強引に引き込んだところで何の意味もないと言わんばかりにリインの意志の強さを察したイリーナはあつさり引き下がる。そうして用は済んだと言わんばかりの態度でそのまま立ち去ろうとするが……

「いい加減にしてよー」

そんな態度こそが我慢ならぬのだと言わんばかりに娘であるアリサ・ラインフォルトが怒りの言葉を告げていた。

「いつつもいつつも私のことなんてどうでも良いと言わんばかりに仕事の事ばかりを最優先して！そんなにリイン先輩を社員として引き込む事が大事だったの!? 家出した実の娘を叱る事よりも優先するほどに！勝手に家を飛び出した娘に対して言うことは無いの!」

「お嬢様……」

怒りの言葉をぶちまけたアリサに対して傍に仕えて彼女の抱く寂しさを良く理解している姉同然の存在であるシャロンは気遣わしげな視線を送る。しかし、血の繋がらない存在がそんな風にアリサに対する愛情を見せる中裏腹に血を与えた実の母はどこまでも冷淡な様子で

「貴方自身の人生、好きにすればいいわ。ラインフォルトを継ぐことも強制する気はないわ。あの人のように勝手気ままに生きるのも悪くはないでしょう」

言っている言葉、それ自体はある意味では娘の意志を優先した理解
有る親の発言にも思える。だがそこには親が我が子にかける言葉に
本来込められているべき愛情がないと、少なくとも言われたアリサを
含め周囲で聞いている者には、思えるものだった。

「その上で最低限どういう学院生活を送っているか把握できている娘
よりも、将来有望な若者の勧誘を優先したとまあそういう回答になる
わね。換えが効かないというわけではないけど、とかく武術に優れた
人間ほど導力技術への関心や知識が薄い傾向にあるから、彼のように
武術を修めていてかつ体型だった知識を修めている存在というのは
中々に貴重なのよ」

残念ながら色よい返事は貰えなかったけどねとどこまでも平然と
した様子でイリーナ・ラインフォルトは言い放つ。こちらはそちらの
動向を把握しているからいちいち話を聞く必要もないし、する必要も
ない。それよりもどんな組織に置いても常に必須な将来有望な若い
人材を獲得する事をこの場では優先しただけだと。

絶賛と言っているいいレベルで賞賛されたにも関わらずリインとして
は当人には一切非がないのに、どうにもアリサに悪いことをしている
ような気がしてあまり嬉しくなかった。

「それじゃあこれで私は失礼するわ。理事として特別実習、応援させ
て貰いうわね」

それだけ言うともまだいい足りないことがあるのだと言わんばかり
の様子のアリサを気にもとめずイリーナ・ラインフォルトはその場を
去っていくのであった……

・・・

「あの場に現れて俺たちに挨拶をするだけマシというものだ。――
少なくとも完全な無視よりはな」

憤懣やるかたないといった様子で母に対する不満を述べるアリサ
に対してユースはそう釘を刺すかのように告げる。良い親とは呼
べないかもしれないが、そこまで悪い親かと。実際物質的には何不自
由のない生活をさせているという点で言えばイリーナ氏は親の勤め

を最低限を果たしていると言えるのかもしれない、その上で一応はメイドであるシャロンを派遣して曲がりなりにも生活の様子を気にする素振りを見せているのだ。親としての愛情が全く無いというわけではない、とそう言えるのかもしれない。少なくとも、息子に対してした冷淡な態度を反省しているように見せかけてその実、リインとマキアスを拘束する際の邪魔者を排除するためだったどこかの父親に比べれば。

それに気づいたのだろう、アリサはどこか気まずそうな様子で口を噤む。

「そういえば、聞いて良いのかどうか分からない話題故これまで口にして来なかったが班長殿の方はお父上との仲はどうなのだ？」

「7年前、10歳の誕生日に会ったきりだな。まあ多忙さを思えば無理からぬ事だし、わざわざ家庭教師を二人も付けてくれた辺り決して冷え切っているというわけではないよ。クレイグ家の方々が俺にとってはおもう一つの家族だから寂しい思いも特にはしなかったしな」

平然と、とリインは自分では思っているが周囲からするとどこか自分にそう言い聞かせているかのような響きを感じ取り、アリサは気まぐずそうな顔をする。なんだか自分が恵まれているにも関わらずつまらない事でいちいち騒ぎ立てているとんでもない我儘娘に思えてきたのだ。

「だから、そんな申し訳無きような顔をする必要はないって。人の事情なんてそれぞれだし、他人から見るとどうでも良いことに思っても、それは本人にとって見れば切実な問題だという事とてある。真剣な悩みを他人が「その程度」等と勝手に言っているものではないだろう。俺は親に対して思うところは無いが、アリサは思う所がある、それだけの話だろう」

「……そうだな、詮無いことを言った。忘れてくれ」

リインのどこまでも穏やかに告げられたその言葉にユースも先程の自分の言葉が、半ばある種の八つ当たりに近いものだと思ったのだろう、そうアリサに対して軽い謝罪の言葉を述べる。

「……ひよつとしてリイン先輩が軍人になろうとしているのはお父さ

んの力になるため何ですか？」

普段とても頼りになつて大きく見える立派な先輩が、一瞬だけ父親の話になった時だけまるで親に必死に褒めてもらいたくて頑張っている小さな子どものような錯覚を覚えたエマはそんな風に問いかける。アリサとリイン、親に反発して居る者と親を尊敬して力になろうとしている者、一見対照的に思えるが実はこの二人はただ親に振り向いて欲しい子供という点で実は同じなのではないかと、そんな奇妙な感覚を覚えながら。

「無論、それもある。だがそれだけじゃない、俺が軍人を目指すのは父のためだけじゃない。祖国とそこに住まう民を護るため、そして何より俺自身がそう在りたいと思うからだ。俺は誰に強制されたわけでもない、俺自身の意志で軍人となる事を選ぶ」

そう告げるリインの様子は常と変わらないどこまでも堂々としたものだった。故に皆、先程抱いた奇妙な感慨を自分達の錯覚だったのだと結論づける。そうして談笑を終えたリインはルーレまでの道中でもそうだったように厚い専門書を自身の荷物から取り出す。

「しかし、軍人になる事が目標という割には随分と熱心に政治や経済について学ばれておられるようだが、いずれはお父上に倣われる気かな？」

鉄血宰相ギリアス・オズボーンは元々帝国軍准将にまで登り詰めて、やがては軍神ウオルフガング・ヴァンダイクの後継として軍を率いるはずだったが百日戦役の折リベールとの講話を取りまとめた功績によって皇帝によって宰相に任ぜられ政界へと転出した、故に息子であるリインもまたそれに倣う気なのかというユーススに対してリインは苦笑して

「政治に左右されない軍事など在于えないし、そしてその政治とは経済によって左右される。故に経済と政治から切り離された軍事など在于えん……と尊敬する人に教わってな。中央士官学院じゃなくてツールズに決めたのもその人に勧められたのが最終的な理由だったよ。何せ軍事に関しては何れも学べるが、他分野を専門家である教官の指導を受けながら体系だって学べる機会等というのはもう

早々ないだろうからな」

人間は学ぼうという意志さえあればどこでも学べる、とは言うものの現実はそうそう上手くいかない。仕事についてしまえばどうしても直接関係のない部分へと割ける時間などというものはほとんど無くなってしまうからだ。加えて言うのなら、自習をするにもある程度の基礎を身に着けて置かなければ、どの文献が参考になるのかと言ったことさえもわからない。

故にリインは帝国でも屈指の教官陣に指導を受けられ、豊富な蔵書を誇る図書館に気軽にアクセス出来る学院生という立場を卒業までの間最大限に利用することにしたのだ。無論専門たる軍事を疎かにする気などは欠片たりとてないが。

「はあ……これはあの基本的には人物評価が辛い母様があんな風に欲しがるわけだわ」

真面目で強い向上心を持つ名門士官学院の首席、リイン・オズボーンは間違いなくこの世代を代表するトップエリートである。彼のような人材を欲しがらない組織、というのはまず存在しないと断言していいだろう。先程母が自分よりも目の前の先輩の青田買いを優先させたことで胸に灯った八つ当たり染みだと思えば、それらが霧散していく想いをアリサは感じ取るのだった……

鉄血の子と悠久なる大地 《ノルド》 ③

「ふっー！」

早朝、リインは特別実習中にも関わらず何時もと変わらず鍛錬を行う。ガイウスの方は言うところの羊の放牧を行っており、他の三人は未だ眠ったままである。歓待を受けた身として手伝いを申し出たが、客人にやらせるわけには行かないと断られ、加えて言うのならば全くの未経験である以上手伝うどころか足を引つ張る可能性の方が高い故、こうしてリインは日課である剣の修練を行っているわけだ。

(しかし、ゼクス中将閣下ほどの方がこの地におられるとは……政府はそれだけ共和国がこの地の近くに基地を建設したという事を重く見ているという事か)

ゼンダー門の司令を務めるゼクス・ヴァンダール中將は《隻眼のゼクス》とも称され、最強と謳われる第四機甲師団の長たる《赤毛のクレイグ》とも並び称される帝国正規軍で五指に入る名将とされる。前年に起きた《リベールの異変》に際しても《鉄血宰相》の意を受けて、オリヴァルト皇子殿下と共にどの近隣諸国よりも先んじて友邦に救援として駆けつけた。その旗下の第三機甲師団もまた精鋭と称されるに足る部隊で、そんな彼らが此処ノルドの地に駐屯しているという事は即ち政府がそれだけ共和国の建設した軍事基地の存在を憂慮しているという事だろう。

ノルド高原の戦略的な価値は乏しい。軍事的にも要衝とは言いがたく、何か特別な資源が眠っているわけでもない。この地が帝国に併合されずに長らく友邦として帝国と良き関係を築けているのは、中興の祖たるドライケルス大帝に助力したという歴史的事実が大きな要因では有るが、それ以上にわざわざ併合する価値がない、そんな打算的な理由も存在した。

元より国家や政治とはそういうもの、『国益』の前には個人の抱く友誼や情などは容易く飲み込まれてしまうものだ。逆に言えばこのノルドの地で、ある日莫大な資源が発見される等といった事でも起きない限りはノルドと帝国は良き友で在り続ける事が出来るという事で

もあり、数年前まではゼンダー門の警備は退役間近の老将が務める半ば閑職扱いだったのだが、そんなノルドの地に数年前転機が訪れる事となる。

東の脅威《カルバード共和国》による軍事基地の建設である。ゼムリア大陸において大国としての地位を築き上げているエレボニア帝国が唯一脅威として認識している敵国、それがカルバード共和国である。そしてそれはカルバード共和国にしても同様。《鉄血宰相》という豪腕を持つて知られる指導者により推し進められる拡大政策、次々と小国を併合していき強大となつていく帝国と正規軍。そんな脅威に対する恐怖が彼らに基地を築き上げさせた、すなわち今はノルドを友邦として扱っているが何時併合してこちらを攻める橋頭堡にしてくるかわからない、故にそれに備える必要がある、というわけである。

そして東の脅威が軍事基地を建設してきて帝国側も黙っていられるはずがない。カルバード共和国より以東の地は近年加速している砂漠化により不毛の地と化している。そして共和国とはそんな東方よりの移民を受け入れている事で、耐えず国内では移民に対する潜在的な不満を抱えている国である。内部のそういった不和を解消する一番の特効薬は『共通の敵』を作ってしまう事である。これは帝国も同じ事、帝国は帝国でカルバード共和国の勃興以後、貴族と平民の対立を抱え続けている国でも有る。故に両国の指導者は決まつてこう叫ぶのだ、「我らは同じ国の者同士。真の敵とは東の脅威カルバード共和国（西の脅威エレボニア帝国）である！我らが互いに争うことは真の敵を利用するだけである」と。このような背景からカルバード共和国とエレボニア帝国は長年に渡る不倶戴天の仇敵同士なのだ。

加えて言えば共和国は徐々に自国の領土にまで近づいてきている砂漠化現象に対する不安を抱えている国でもある。そんな国が未だその不安の薄い、西にある豊穡の地を欲するというのは言わば必然であろう。だからこそ、そんな脅威たる共和国が軍事基地を建設しているながらそれを座視する事は帝国として出来ない。共和国に備えるべく監視塔を築かせた。そしてダメ押しとばかりにゼンダー門には名将と称される隻眼のゼクスが赴任してきた、というわけである。

かくしてノルドの地を取り巻く情勢は加速度的に悪化した。とは言えゼクス・ヴァンダールの赴任は一説には鉄血宰相の怒りを買った左遷によるものではないかという噂も飛び交っており、この地の戦略的な価値が両国にとつて乏しい事は変らない。ただ敵に奪われるわけにはいかない、そんな意地の張り合いによるものなので、同じ係争地でも《クロスベル》に比べればはるかに平和と言えるであろう。しかし、係争地である事は変らない。何かきつかけ一つで帝国と共和国の大規模な軍事衝突が起きかねない、それが今のノルドの状況であつた。

「……………」

昨夜受けた歓待をリインは思い出す。ノルドの人々はそんな大国のエゴに振り回されている状況下にありながら、帝国人であるリイン達を心より「友」として歓待してくれた。願わくば、獅子心皇帝以来の友誼が末永く続く事をリインとしても祈りたい心境であつた……

・
・
・

あの後羊の放牧を終えたガイウスと共に班員達を起こすと用意された朝餉に舌鼓を打つ。ミルク粥は鍛錬後の空きつ腹に実に良く聞き、おそろくは滋養に良く香草等も入っているのだろう身体の芯から活力が溢れてくるようであつた。そうしてリイン達は族長であるラカンより特別実習の依頼へと取り掛かり始める。用意された依頼は3つ監視塔への配達、薬草の採取、そしてゼクス中將からの依頼である魔獣退治である。

監視塔への配達ではこの地における軍とノルドの民の蜜月関係が窺い知れ、薬草の採取では高原を馬にて駆け回る事となった。そうして最後の依頼である魔獣退治を終えたりイン達はゼンダー門のゼクス中將へと報告に赴いたのであつた。

「魔獣相手とはいえ軍をみだりに動かすような自体は出来るだけ避けたいところだからな」

そうゼクス中將は朝リインが想いを巡らしたこの地の微妙な緊張状態への配慮を滲ませた言葉を述べる。その言葉はノルドの民の事

を思えば早期に退治しておきたい、しかし軍を動かして共和国を刺激する事は極力避けたい、軍人としてのそんな政治的な配慮が感じられる言葉であった。

とかく軍人は武力による強引な解決をしようとする傾向にある、というのは良く中央の官僚たちが軍に対する不満として述べる言葉であるが、どうやらゼクス・ヴァンダールはそういった強引さとは無縁のようであった。

流石は領邦軍とは違い、身分に関係のない実力主義を標榜する帝国正規軍において中将まで登り詰めただけの事はある、と言うべきであろう。

「オズボーン候補生、君は軍人志望と聞いている。ならばこそ覚えておいてもらいたい。我々軍とは国家における最大の力を擁する暴力機構だ。故にこそ、我々が出向くのはあくまで最後の手段と弁えよ。力というものは振るわずに済むに越したことはないのだからな」

軍のために国家が存在するのではなく、国家のために軍が存在する。その大前提を決して忘れてはならないのだと帝国屈指の名将と称される男は、いずれ軍を背負う事となるであろう若者に重々しく忠告の言葉を述べる。とかく血気盛んな若者程に焦りがちな事を憂慮するよう。

「は、肝に銘じておきます！」

偉大なる先達より伝えられた忠告にラインもまた真剣な口調で答える。剣は凶器、剣術は殺人術。守護の剣を標榜する我々においてもそれは変らない。誰かを護るために剣を振るうという事はその大切な誰かを脅かす、敵を殺すという事である。ラインがヴァンダールの剣術道場にて最初に習った事がこれであった。

軍人は理性によって感情を律して国家の敵を打倒せねばならない、これもまた軍人を志すと告げた時にオーラフやナイトハルトと言った多くの先達に教えられた言葉であった。

これらの重みをツールズに入学するまでの間、ラインは真の意味では理解していなかった。だが、今は違う。クロウ・アームブラストという親友に国益のために止むを得ない少数の犠牲を作ると言う事が

どうということなのかを教えられた。

クロスベルの地にて軍人になれば好感を抱ける人物だろうとその剣を向けねばならないときが訪れる事を知った。

そしてトワ・ハーシエルという優しい少女に武力に頼らず対話を模索し続ける優しさという強さを教えられた。

故に万感の想いを込めてリインはゼクス of 言葉を受け止める。自分達軍人は出来る限りは使われないほうが良い道具なのだ、その心に刻み込む。

そしてそんなリインの姿を見てゼクスもまた満足げに頷く。この分ならば心配は要らないと。

鉄血宰相の愛息子という事で心の何処かで抱いていた警戒心。それを解きほぐすのであった。

・
・

「リインさんから見て貴族というのはどういう存在なんでしょう？」

午前中の課題をすべてこなしたリイン達は昼餉をウォーゼル家にて頂くと再び午後の課題へと取り掛かっていた。

まず行ったのは子どもたちに対する特別授業の依頼、帝国という外の事を子どもたちに教えて欲しいというものである。

半ば必然的かつ順当に首席であるリインが務める事になったが、最後とばかりに問いかけられたのはそんな質問。

すなわちノルドに於いては存在せず、帝国に於いて存在する。貴族がどういう存在なのかという問いかけである。

「そうだな……」

リインは考える、打倒すべき敵手か？それとも手を取り合える同胞か？敬意に値する存在か？

リインの中に浮かぶのはこれまで出会った幾人もの貴族たち。

アンゼリカやフリーデルのような友と、そう呼べる存在もいる。

リッテンハイムとアルバレア公のように決して相容れぬ存在もある。

ユーシスやルーファス卿のような敬意に値する存在もまた居る。

故にそれらを纏めて貴族という存在をどういう存在かと聞かれればそれは……

「同じ人間だな。嫌いな奴も居れば好きな奴も居る。一緒に笑い合える奴も居れば、一秒たりとて同じ空気を吸う事さえ嫌な奴も居る。貴族と一纏めにされるけどいろんな奴が居る。だから、俺達と同じ人間さ」

そんな、当たり前前の結論を告げていた。最も平民にこんな事を言われると「我ら貴族を平民風情と同列視するなどなんたる不遜な！」等と怒り狂う存在も中には居るんだろがという言葉が胸の内に秘めて。

「ちなみにその辺り、四大名門が一角、アルバレア公爵のご子息であらせられるユーシス・アルバレア殿はどう思われるかな？ 君にとって、貴族とは何だ」

「『誇り』だ」

突如として自分に対して振られてきた問いかけに、ユーシスはそう短くも確固たる意志を以て言い切る。

「誇り……ですか」

「ああ、そうだ。偉大なる先祖に恥じぬようにしようという思い、民の生活を護り、家臣からの奉公に応える責務、そういつた自らの血に流れる高貴なる者の義務を果たさんとする『誇り』こそが貴族を貴族たらしめる。……少なくとも、俺は兄からそう教わった」

ユーシスの言葉に迷いは無い。それこそが彼の思い描く真の貴族なのだろう。ラインが軍人とは国家とそれを構成する民を護るためにこそ存在すると信じているのと同様に、ユーシスもまた貴族とは高貴なる者の義務を果たすからこそその貴族なのだ、そう信じているのだろう。

その思いが気高く素晴らしいものである事は疑いようのない、若者の抱く高潔な理想、これを聞いて嘲笑うような者はよつぽどのひねくれ者と言うべきである。だが、高潔な理想というのは抱く事よりも、抱き続ける事、貫き続ける事こそが難しい物なのだ。それを実現できる者が少ないからこそ、『高潔』とそう評されるのだ。何故ならば、

世の大多数の人間がそれを実行できるのならばそれは「普通」の事なのだから。

「おーカツコイイ〜」

だが、そんな世の無情さを知らぬ子どもたちはただユーシスの言った言葉に眼を輝かせる。

言葉の意味を理解したわけではない、ただそこに込められたユーシスの思いの本気さ、それにこそ彼らは魅せられたのだ。何時の世も人を魅了するのは言葉それ自体ではなく、言葉に込められた思いである。

「とまあこういう立派な貴族のお兄ちゃんも居れば、中には困った人も居てな。だから結局のところ貴族も同じ人間なのさと、それが俺の回答になるが満足して貰えたかな？」

「はい、ありがとうございます、ユーシスさんも！」

「ありがとうございます」

そうして子どもたちからの感謝の言葉を受けて、ツールズ士官学院首席によるノルドの子どもたちに対する特別授業は幕を閉じるのであった。

鉄血の子と悠久なる大地 《ノルド》④

北部の探索に出かけた《帝国時報》のカメラマンであるノートン氏を巨像の前で無事発見したりイン達は彼を集落へと連れ帰る。そうして集落へと帰還すると村に一台しかない運搬用の導力車が壊れているところへと出くわし、導力製品に詳しいと評判のラグリマ湖畔の傍にて隠居をしている老人をリイン達は訪ねる事となる。

そうしてラグリマ湖畔を訪ねたリイン達はその隠居していた老人がラインフォルト社の会長を勤めていたアリサの祖父《グエン・ラインフォルト》氏である事を知り、彼を引き連れたリイン達に対してノルドの人たちは昨晚に続き客人に対する歓待の席を用意するのであった。

「しかしお前さんも物好きじやのう。こんな爺共の話に混ざるよりもアリサやエマちゃんのような若い女の子達と話したほうが楽しいじやろうに」

「彼女たちは学院で話せますし、それよりも俺としては人生の先輩であるお歴々にお話を伺いたいと思ひまして」

RFグループ社という巨大な組織の長であったグエン氏、そして一族の長としてノルドの民を纏め上げているラカン・ウオーゼル氏。一見すると軍人とは関係ないように思えるがどちらも長年に渡って人を率いていたという共通点がある。ラカン氏からは少数の集団を率いる場合のコツを、グエン氏からは大組織を率いる場合のコツを参考までに教えてもらえればそれはどこかで役に立つかもしれない。一見関係のない分野の知識が予想もしてなかったところで生きてくる時がある、これは士官学院に入学する前に教わり、リイン自身も最近実感していることだった。だからこそ、リインはここぞとばかりに食いついているわけなのだ……

「そう言われてもな、私のやっている事など当たり前の事に過ぎんよ。危険な魔獣退治に赴かねばならない時は自らもそれを引き受ける、最終的な決断をする前に皆に相談し意見を聞く。そしてガイウスの話を聞くにこれらは皆全て君も出来ている事だ、故、改めて私の方から

特に君に伝える事はないな」

ラカンが告げたのはそんなリーダーとして当たり前の心構え。幼い頃からラインが何度も聞かされた指揮官は部下に対してその勇気を示すべし。自らも命を賭けるからこそ部下はそんな指揮官を死なせまいと奮い立つのだという教え。そしてそれはラインも出来ている事だとラカンは言う。

「儂の方はそうじゃな、お前さんはもうちっと遊び心を持ったほうが良いと思うぞ」

「遊び心……ですか？」

飄々とした様子で告げられたグエンの言葉、それにラインは目を丸くする。それは今までラインが接してきた人たちが言ったことは……

(いや、そういうえばレクターさんやクロウにも何度か言われたな)

お前は堅すぎるのだという指摘。言われた頃の自分は不真面目な人間の戯言と思って受け流したものだ……

「そうじゃ。お前さんは優秀じゃよ。真面目で責任感が強くてラカンの殿の言っていたリーダーとしての心構えを見事体現している。正直年齢の割には出来すぎな位じゃ。」

だがのう、そういう優秀すぎて隙のない人物というのはどこか下の人間からすると接していて息苦しくなって来るものなんじゃよ」

ラインではない別の誰かを思い描きながら、ラインフォルト社という巨大企業の長として人生の酸いも甘いも噛み分けた老人はそう、優秀な人間が陥りがちな陥穽を指摘する。

「わかっているつもりです。だからこれでも自分では柔らかくなったつもりなんですが……」

クロウという親友を得たことで多少なりとも改善したという自負のあるラインはそう反論するが、グエンは深い溜め息について

「改善してそれとは……いやはやお前さん思った以上の筋金入りじゃな。こういう言い方は口幅ったいのだが……お前さん達の通っているところは大帝縁の名門中の名門ツールズ士官学院。」

当然そこに通っている生徒は皆この帝国の未来を背負って立つエ

リート中のエリートよ。

一見不良や落第生のように思える者が居たとしてもそれはあくまで、トールズ士官学院という名門校の中での劣等生じゃ。このエレボニア帝国全体で見れば十分優秀よ。

わかるかの、お前さんが接してきている不良や落第生というのはあくまでエリートの中の劣等生なのだよ」

「……………」

グエン氏の言葉にリインは考え込む。今まで幾度もクロウのような不良生徒を副会長として注意してきた。その度にどうしようもない奴らだと思つたものだったが、グエン氏はそういう者たちも帝国という大きな枠組みの中で見れば列記としたエリート達なのだと言う。

「監視塔を訪問したそうだがその時お前さんはどう思つたかのう？」

「住民であるノルドの民と良好な関係を築けている事は評価に値しますが、正直随分と緩んでいるなとそう感じましたね」

「ふむ、まあそうじゃろうな。だがのうアレが所謂普通の人間だと僕は思うわけじゃ」

「……俺の言っている事、やっている事は一部の人間にしか出来る事じゃない。だから、怠惰を許し甘やかせと。それはあまりにも……」

恥知らずにも程が有るのではないかとリインは憤りを込めて言葉を発する。「正しい」行いをする側が何故か忌避される、そんな不条理があつて良いはずがないと。

これまでも幾度か受けた、アイツは特別だからという言葉。自分がどれほどの研鑽を重ねたのかも知らずにただ「才能」の二文字で片付けて、自らを高めようともせず現状に甘んじようとする輩。

それらを思い出し、リインの言葉は自然と棘のあるものになるが、グエンはリインがそういう反応になることを予期していたかのようにとどこまでも飄々とした態度で

「別にそこまではいわんよ。お前さんのような存在が希少な側ではあるものの正しい事も、組織に於いて必要なのも確かじゃ。そういう存在が居ない組織なんてものはどんどん腐敗していつてしまうからのう。だがのう陳腐な言葉だが、水清ければ魚住まずという奴よ」

どれほど茨の道だろうが突き進み正しい事をなそうとする高潔な存在、それは希少で時にうつとおしく思える存在かもしれない。だがそれでも世において必要な存在では有るのだ。何故ならば世を構成する大多数の凡人はそういった歯止めをかけてくれる存在がいなければどんどん墮落していつてしまうものだから。

「お前さんが正しく在り続ける事は立派な事よ、賞賛にも値する。だがのう、そうあれな者達が居ることを心に留めておいて欲しいのじゃよ。誰とて心の何処かには正しく在りたいという心を持つていたりするものじゃ。

だからこそ、お前さんが上に立って「正しくあれ！」と呼びかける際にはこれまた陳腐じゃが、そういった者たちへの思いやりを心に持つておいて欲しいのじゃよ。それでこそ、彼らの心に響く」

同じ言葉であつてもそこに確かに自分に対する思いやりが込められた言葉とただ自分の理想通りになれと強制する言葉では受け取られる印象が違う。そして後者の言葉は響かず、押し付けに対する反発となる。アイツは自分達とは違う存在なのだ、というわけである。

だがそこに自らを思う心があれば違う、どれだけうつとおしく煩わしく思える言葉であつても信頼する友や家族の言葉はやはり心の何処かに響くものなのだそんな理想論をグエン氏は語る。

「ま、そういうわけで最初に告げた遊び心を持つべきだという話しに繋がるわけじゃよ。完璧な存在なんてのはとっつきにくいからのう、仕事では厳格だが奥さんには頭が上がらないだとか、実は子煩悩だとか、酒には目が無いとかそういうった人間味が大事になってくるわけじゃな」

「……なるほど」

先程までの真面目だった雰囲気を一変させた飄々とした空気です。インクをしながら告げるグエンの言葉をリインは受け止める。なるほど、確かにこうやって冗談めかした言われる事でその忠告は確かに胸に刻まれながらも、押しつけがましきを感じなかった。こういった剛柔の使い分けを身に着けるという事をあの不真面目な兄貴分は自分に言いたかつたのだろう。……今度会った時は少し優しくしよう

とリインは一瞬思ったが、あの手のタイプは優しくするとつけ上がるので辞めたほうが無難だろうと思ひ直す。

「で、そういうわけはどうじゃ、お前さんとして年頃の男子なわけだし気になる女の子の一人や二人位居るじゃろ。いっちょ「コイバナ」で盛り上がるのでしょうか。ん?」

「は、はあ……」

「なんじゃノリが悪い、コイバナトークは古今東西男女を問わず王道の話題じゃぞ。そういう所が堅いと言うとるんじゃ」

(いかん、この方は俺の苦手なタイプだ)

一時撤退すべきかという考えがリインの頭を過るが

「のう、ラカン殿、ファトマ殿、あなた方も気にならないか。おたくの家の子であるガイウスにそういう相手が居るのかどうかと」

「ふむ……あれも確かに17、私にとつてのファトマのような存在と出会っていてもおかしくはないか」

「どうでしょうかりインさん、あの子には誰かそういう人はいるのでしょうか?」

そうはさせじとグエンは愛息子の恋愛事情という親であれば食いつかざるを得ない話題をガイウスの両親へと振り、すかさずリインの退路を断つ。

「そ、そうですね……自分はその手の事情にはあまり詳しくないんですが、確か同じ美術部のリンデという少女と結構親しくしていたと思います。恋愛感情があるかどうかは本人達に聞いてみればわからないですけど」

グランローズをガイウスに贈呈させる事で恋人同士に周囲に思わせるというクロウの解釈は彼女の双子の妹であるヴィヴィによる犯行だと判明した事で腹黒疑惑は晴れたが(その誤解を聞いた時リンデは顔を真赤にして涙目になって否定して、ヴィヴィは流石に悪戯が過ぎたと反省し、ガイウスは「なるほど、そのような見方も存在するのか」と特に怒りもせずどこまでも悠然としていた)、ガイウスがⅦ組以外の女性陣で一番親しい存在と言えば彼女だろう。傍から見ても関係は非常に良好に思えた、それが恋愛に発展するものかどうかは生憎

唐変木たるリインにはわかりかねるものだったが。

「ほほう、そのリンデちゃんはどういう子じゃ？可愛い子かのう？」

「容姿はそうですね、優れている方だと思います。性格も淑やかで慎重深い感じでしたし、そう悪い印象はありません。もともと俺と彼女はそこまで接点があるわけじゃないのでこれ以上の事は」

「なんじゃ、役立たずじやのう。副会長だったらその特権を利用して女子生徒の3サイズを全員把握することだって出来るじゃろうに」

「そんな恥知らずな事はこのリイン・オズボーン、空の女神と誇りに誓ってする気はありません！」

「冗談じゃよ、冗談。そう熱くならずリラックスせい、リラックス」

やはり苦手なタイプだとどうどうとこちらを宥めながら飲み物を差し出してくるグエン氏を見てリインは再認識する。

「ふむ……リンデ嬢か」

「ふふふ、今度あの子にそれとなく聞いてみましょうか」

「えとえとえと、ガイウス兄ちゃんの良い人って事は私達の義姉さんになるかもしれないって事ですよね」

「お義姉ちゃんが増えるのーえへへ、優しい人だと良いな」

「あ、あまり先走りすぎないようにお願いしますね。ただの友人同士という可能性も十分に有り得ますので」

（すまん、ガイウス）自分の不用意な一言のせいでおそらく家族から質問責めに合うことになるであろう後輩へとリインは心の中でそつと詫びる。まあガイウスならば特に焦らずに悠然とした様子で問い詰められても冷静に答えそうだが。

「それでお前さん自身の方はどうなんじゃ」

「は？いえ俺は今軍人になるために学ばねばならぬ事があるのでそういう事に現を抜かしている暇は……」

「かーだ・か・ら、そういう所が堅物だと言っているんじゃ。お前さんだって健全な年頃の男子じゃ気になる女の子の一人や二人位は居るじゃろ？」

「いえ、そう言われましても俺には本当にそういう存在は……」

居ないのだろうか？とふと自問してみる。すると脳裏に過るのは

二人の女性。綺麗で優しく子ども頃からの憧れの青髪の女性ととても優しい大切な栗色の髪をした少女の姿。

「お、なんじゃなんじゃどうやら居るみたいだのう。安心したぞ、ここできつぱりと居ませんかと言われたらどうしようかと思っただが、ちゃんとお前さんにも年相応の部分があつて。ほれどうい子か言ってみ、言ってみ。此処は一つ百戦錬磨の儂が悩める若人にビシッとアドバイスしてやろうではないか」

「い、いやそういうわけでは……ただ姉のような存在だったり、掛け替えのない親友と親しくしている大切な人達だからふと頭に過ぎただけです……」

「ほほう、まだ自覚していない淡い気持ちという奴か。青春じやのう……それでその子はという子なのかのう」

「いや、ですから……」

そうしてリインは大人たちに優しい眼で見守られながら百戦錬磨のグエン氏にその日の宴中玩具にされるのであつた……

鉄血の子と悠久なる大地 《ノルド》⑤

——監視塔が昨夜攻撃を受けた。

早朝、課題へと取り掛かろうとしたリイン達の下にそんな事態の急変を告げる知らせが届いた。急ぎゼンダー門へと駆けつけたリイン達は「今のうちに帝国本土に帰還せよ」という中將の配慮を辞退して、今回の事件の調査を申し出る。そうして調査を開始したリイン達は共和国の基地もすぐ前に何者かに攻撃されていたこと、攻撃に使用された迫撃砲が帝国のラインフォルト社製のもの、それも既に正規軍は使わず傭兵が使用するような旧式の型式の物だったことから背後に両国を激突させたい何者かが潜んでいると推定。そして計算により割り出された砲撃地点へと赴くと、そこでリインの旧知の少女と出会うのであった……

「久しぶりだな、ミリアム」

もしやこの少女が犯人なのかと警戒する四人を他所にリインはとも親しげにその少女へと語りかける。その様は不審人物である容疑者に向けるものではなく、ともすると家族に語りかけるようなとても親愛に満ちたもので

「早速だが、あまり時間がない。今回の事件でお前が掴んでいる事があれば教えて欲しい。戦争を回避するために、俺達も協力は惜しまないつもりだ」

自分達を温かく歓待してくれていたノルドの人達の笑顔のリインは思い出す。彼らのあの笑顔を守りたいとそう思う、例えば国は違えども彼らのような人々の暮らしを護る事、それが自分が軍人となる理由なのだから。

「うーん、確かにリインだったらちようど良いかも。でも、他の人達は大丈夫かな？多分戦いになると思うんだけど」

「大陸最強と謳われる赤い星座や西風の旅団クラスならばともかく、そこらの傭兵に劣らないだけの実力が有ることは俺が保証する。加えて戦術リンクの恩恵も有るしな」

ミリアムから告げられた足手まといにならないかという危惧を

リインは否定する。戦術リンクの恩恵を受け、サラ・バレストラインという実力者のシゴキも受けている後輩達は既に精鋭と呼ぶに足るだけの実力を備えていると。

「リインがそこまで太鼓判押すなら大丈夫かな。そもそもそこまで練度が高そうでもない、傭兵くずれって感じの連中だったから僕とリインの二人だけで十分お釣りは来そうだけどね」

その自分の実力に対する確かな自負とリインの実力に対する信頼の言葉を聞きリインは笑みを浮かべる。義姉の足手まといとなってしまうケルディックやバリアハートの時とは異なり、義妹と肩を並べて父のために戦える事に微かな喜びを心の奥底で覚えながら。

「決まりだな。そこまでの自信を見るに、どうやらミリアムは今回の事件の犯人達と潜伏先を把握しているという事だな」

「うん、犯人は数名くらいの武装集団。高原の北の方に潜伏しているよ」

「よし、そうと決まれば事は急ぐ。早急に向かうとしよう」

そうしてミリアムとの話し合いを終えたリインは背後でポカンとしている後輩達の方を振り返り

「これより、俺たちA班は監視塔攻撃の犯人と目される武装集団の拘束に向かう。ミリアムの情報によれば練度は大したことがないとの事だが、それでも相手はプロだ。これまでの魔獣達を相手にしたとは違った戦いになる。全員気を引き締めていけ。ゼクス中將への報告は集落につき次第行うものとする」

そうリインが宣言するも四人の反応は鈍い。そんな後輩達の様子をリインは訝しがり

「どうしたお前達、まさか怖気づいたのか？それならば、お前達には中將への報告に向かつて貰い、武装集団の拘束には俺とミリアムの二人で向かうが……」

「いえ、そういうわけではなくて……」

「どうやら、その少女と先輩は旧知の仲のようだが」

「説明してもらいたいものだな、そいつは何者だ」

そんな後輩達の問いかけにそういえば彼らはミリアムの事を知ら

ないんだつたと自分が若干焦っていた事にリインは気づき簡易的な紹介を行う。

「彼女の名はミリアム・オライオン。我が父、ギリ阿斯・オズボーン宰相の直属でもある帝国軍情報局の局員だ」

「よろしくねー」

天真爛漫な様子で挨拶をするミリアムの姿はどこからどう見ても元気いっぱいな年相応の子どもにしか見えず、故にⅦ組の面々は困惑する。

「え、えつと……」

「何かの冗談……ではないんですよね？」

「こんな緊迫した状況下でそんな笑えん冗談を飛ばすつもりはないな。彼女は正真正銘の現役の情報局員だ。……まあ俺たちは愚かフィーよりも年少の彼女を見て困惑するのはわからんでもないが」

気持ちはわからんでもないと初めて会った時の自分を思い出しながらリインは告げる。

「ふむ、その情報局というのは……」

「帝国軍情報局、かの鉄血宰相の肝いりで設立された帝国政府の外交政策・国防政策・内政政策の決定と遂行に必要な情報の収集や工作を主に担当する組織だ」

ガイウスの疑問にユーススがスラスラと組織の概要を説明する。そうしてリインの方に冷ややかな視線を送って

「ふん、どうやらオーロックス砦への侵入の件については全くの冤罪だったというわけではないようだな」

貴方の身内の犯行だったんじゃないかと責めるユーススの言葉と視線にリインは肩を竦めて

「いいや、冤罪だとも。親類までもその罪を負う事になるのは皇族弑逆や国家転覆、または敵国への内通と言った重罪だけだし、それにしても3年前の法改正によって親族にまでその罪を負わせる事は廃止された。」

故に仮にミリアムがオーロックス砦への侵入の容疑者だったとしても領邦軍が俺を拘束したのは事実無根の言いがかりという奴さ」

自分自身は至って清廉潔白だとしれつとリインは言つてのける。そもそもミリアムの容疑もあくまで疑惑に過ぎないぞとすつとぼけながら。

「まあまあ、今は味方同士で争っている場合じゃないって！戦争のピンチなんだから、此処は一致団結して協力し合わないと!!!」

「疑惑の張本人たる貴様が言うな、貴様が」

「あ、あはは……」

かくしてミリアムを加えたリイン達一行は事件を解決するべく動き出すのであつた……

……

途中目的地へと向かう前に寄つた集落からの通信で半ば強引な形で15:00までの活動許可を取り付けたリイン達。そうして犯人達が潜伏している現場へと趣き、話し込んでいた眼鏡の男と猟兵崩れ達へと投降の勧告を行ったのだが……

「ふむ……お前達は……」

そうして一体何者かと主犯と思しき眼鏡の男は少しだけ思案するかのように現れたリインとミリアム、そしてガイウスの3人を見つめるが

「ク、クククククク、フハハハハハハハハハハハハハハハハ」

リインの姿を目にした、その瞬間に狂つたような哄笑を突如として始める。

「……何がおかしい」

「ククク、いやいやこれが笑わずにいられるか。何せ予期していなかった獲物が自らこうして飛び込んでくれたのだからな。飛んで火に入る夏の虫とはまさしくこの事かと、そう思っただけさ。」

まさかケルディックでの仕込みを邪魔してくれたあの男の息子にこのような場で巡り会えるとは思つても居なかつたよ」

鉄血宰相はあの男と呼ぶその言葉の中に宿つた深い深いヘドロと化したような漆黒の憎悪をリインは感じ取り、少しでもゾクリとさせられる。父に対する憎悪のこもつた言葉はこれまで幾度も受けてき

た。だがその多くは今自分達が持っているものを奪おうとする篡奪者に対する貴族の憎悪であつた。

だが目の前の男が発したその憎悪はこれまでリインが幾度も感じたそれではない。それは、全てを奪われた者の憎悪。復讐者の宿す漆黒の憎悪であつた。

それはリインが今まで感じたことのないもので――

(いや、待て)

自分がかつてこれに似たものをどこかでぶつけられたことが有ると記憶のどこかに引っかけかりを覚える。

(そうだ、アレは確か……)

その瞬間にリインの脳裏を過るのは今では一番の親友と呼べるだけの絆を紡いだ最高の相棒との最悪とも言えるファーストコンタクト。自分に現実を教えてやるとそれまで被っていた仮面を脱ぎ捨てて悪意にまみれた呪詛を発していた親友の姿。それが、目の前の男の姿と重なつた。

この男もあるいはクロウのように父の霸道によつて轢き潰された犠牲者なのかもしれない、そんな考えが頭を過るが……

「我が名はギデオン、それだけ名乗らせてもらおう。同志達からは《G》と呼ばれている。――もつとも、すぐに死にゆく事になる者たちには不要な事かもしれないがね」

大仰な様子で《G》と名乗つた男はそうして再び笑い始めて

「ははは、本当になんたる僥倖だ。ああ、唯一残された実子を奪われたとなればさしものあの男も多少はその鋼の心にヒビが入るかな？ それとも全く意に介さないか、まあどちらでも良い。あの男の手駒を一つ削れる事には変らない。」

申し訳ないが、そのノルドの民と思しき若者とはぼつちりも良いところでは有るのだが、この場にてその若い命を散らしてもらおうしよう。恨むならばあの男の息子と行動を共にした自らの不明さを呪つてくれたまえ」

「ふん、さつきから聞いていれば、一人で盛り上がってくれたが貴様はどうやら計画を練ること自体は得意でも実戦の指揮に関してはお粗

末も良いところのようだな」

親友と一瞬重なったことで僅かだが芽生えた同情の心をリインは断ち切り、どこまでも冷然と言い放つ。

例えこの男にやむを得ない事情があつたとしても、その恨みが正当であつたとしても。

目の前の男のやっている事、それは正当でも何でも無い。今日の前の男のやっている復讐のせいでノルドの民は故郷を失いかねない状況に立たされているのだ。

言いたい事があるのならば、それは捕らえてから司法の場で存分にやってもらえばいい。

自分がなすべきこと、それは目前の犯罪者共を捕縛し、共和国との戦争を回避すべく動く事であるとする決意の心を強く燃え滾らして。

下らぬ甘さを捨て去り、怒り、碎き、焼き尽くせと。敵への同情など研ぎ澄ました刃に刃毀れを生じさせるものでしか無いのだから。

「何……？」

「そんな猟兵崩れの連中如きが俺たちに敵うとでも？ 鉄血の子も随分と侮られたものだ。見たところ、貴様自身も大した実力を有していないだろう。頭でっかちの学者崩れといった所か」

殊更挑発的に嘲笑するようにリインは告げる。この男は先程わざわざケルディックの邪魔をしてくれた等と言わなくても良い情報を喋っていた。

即ち典型的な自己顕示欲の強いタイプの犯罪者、憎き男の息子に煽り立てれば色々と情報を吐いてくれるかもしれないとそんな思いから。

「こ、この餓鬼……」

「調子に乗りやがって……」

そしてそんな餓鬼の挑発に容易く乗った猟兵崩れの面々を見てリインはどうやら目の前の連中が文字通りの猟兵崩れに過ぎないと確信を抱く。強いものが必ずしも立派な精神を宿しているというわけではないが、それでもある程度以上の実力者ならこんな安っぽい挑発にああまで容易く乗るといふ事はないだろう。

「ククク、大層な口を聞く。若いとは良いものだな。父親は皇帝陛下の信認厚き平民の味方等と称される宰相、自身は名門士官学院の首席。さぞ、恐れを知らぬ事なのだろうな。自分の未来は栄光に満ちたものであり、自分の父親は正しい存在で私は愚かなテロリストであり、犯罪者であると思うっているのだろう」

そしてそんな風に挑発に乗った獵兵崩れとは裏腹に《G》と名乗った男はリインの挑発の言葉に意外にも静謐な意志でもって応じていた。

「ああ、そうだ。誰も彼もがあの男の輝きに目がくらんでしまっている。あの男の真の恐ろしさに気づいていない。ならばこそ！例え汚名を着ようとも私がやらねばならない！」

それはただ憎しみに取り憑かれただけのものではない、例え悪を為す事になろうともやらねばならぬ事があるのだという使命感。それらを感じ取り、リインは一瞬困惑するが、それもまたすぐに思考の隅へと追いやる。

戦いに於いて敵への思いやりなど甘さでしかないのだから、聞いたことが有るのならば捕らえてから尋問なり何なりをすればいいだけの事。優先順位を間違えてはならないのだと、そう自分に言い聞かせる。

「ならばこそせめてもの慈悲だ。そうして夢を見たまま空の女神の下に召されるが良い！さあ、お前達この世間知らずのお坊ちゃんに現実というものを思い知らせてやれ！」

そう後方より雇った面々へと《G》が指示を下した瞬間にもうこちらで頃合いだろうと判断してリインは不敵な笑みを浮かべて

「いいや、現実を知るのはお前達の方だよ。一体、此処に乗り込んだのがどうして今、目の前に居る俺たち三人だけ等と思っただ？」

その言葉に敵は何？と訝しがるが時既に遅し。姿を現さずに後方にて控えていたユーシス、アリサ、エマ。

今回のメンバーの中でも導力魔法オーブ魔法に高い適性を持つ三人の準備万端で整えられた大規模攻撃魔法が目の前にいるリイン達へと襲い掛かろうと身構えた武装集団を飲み込んだ……

鉄血の子と悠久なる大地 《ノルド》⑥

「身、身の安全の保証を要求する……」

「安心しろ。俺達は榮えあるトールズ士官学院の生徒だ。犯罪者とは違いルールは守る」

図々しくもそんな事を要求してくる武装集団へとリインはそんな事を告げる。内心で共和国と帝国の軍事施設を攻撃したような後ろ盾もない犯罪者の末路など碌な物じゃないだろうがなと毒づきながら。

奇襲により、呆気なく武装集団を無力化する事に成功したりインたちだったが、生憎と後方に控えており射程外にいたギデオンまでは捉える事ができなかった。

そうして状況を把握したギデオンはおそらくは《アーティファクト》と思しき笛を使い、この遺跡の主である魔獣を呼び出した。

これの撃退自体には成功した物の、交戦している間にギデオンを取り逃がしてしまふのであった。

(俺にもっと力があれば……！)

そうすればギデオンもこの場で捕らえる事ができたはずだとリインは強く拳を握りしめる。

ギデオンが魔獣を呼んだ時、自分にもっと力があれば自分達が魔獣の相手をしている一方、ミリアムにはギデオンを追ってもらおうという事とて出来たのだ。

だが、その選択肢は取れなかった。何故か？それは偏に自分が、リイン・オズボーンが弱かったからに他ならない。

こんな魔獣如きに手こずる程度の力しかなかったからだとリインはそう断じる。

——もしもこの場に居たのがクレア義姉さんだったら

——レクターさんだったら

——ナイトハルト少佐だったら

ミリアムに追撃を任せても全く問題なく魔獣を蹴散らす事ができ

ただろう。

だが、自分は出来なかった。ミリアムを欠いた状態だとあの魔獣相手に万が一が有り得ると判断したからだ。

奴は同志からは等と何がしかの組織に所属している事を示唆していた。

此処で奴を捕らえる事が出来なかった事が後々大きな禍根に繋がりにかねない。

それを思うと自分の不甲斐なさに腹が立って仕方がない。

(力が欲しい)

わかっている、こんなものはただの現実逃避だ。

思いだけで強くなれば苦労はしない。強くなるために必要なのは適切な指導を受けた上での地道な鍛錬。それ以外にない。

技術にしても肉体にしても一朝一夕では変わらない、がむしやらにやったところでそれは身体を痛めつけているだけだ。

これ以上修練に割ける時間は自分にはない、無理に休養する時間を削つてもすぐに身体に限界が訪れてむしろ歩みは遅くなるだろう。わかつては……いるのだ。

(だけど)

リイン・オズボーンは目標意識が高い男だ。100点満点のテストで95点取れば普通の人間は良しとするだろう、だが彼は100点を取れなかった事を悔しく思う。

そして今の彼が自分に求める水準というのは明らかに常軌を逸している。どれだけ優秀だろうと彼はまだ学生の身に過ぎない、そんな身でクレアやナイトハルトと言った俊英を持って知られる現役の将校と同レベルの働きを自分に課すなど、それはもはや傲慢と言うべきだろう。

彼らとて未熟な時代は存在したのだから。積んできた経験の差が彼我の間には存在するのだから。

そんな事はリインも頭では理解している、だが彼の心の中に焼き付いた光景が彼の足を止めさせない。

――ある日、唐突に奪われた幸福が

――倒れ伏す母の姿が

――燃え盛る生家の姿が

――胸に走る痛みが

彼を駆り立てる。強くなれ、強くなれ、強くなれと。さもなければまた失う事になるぞと。

温もりの大切さを知っているからこそ、それがそのまま失う事の恐怖へ繋がり、より強さへの執着を生む。

それが、今のリインの状態であった。

「まあ首謀者っぽいのは取り逃がしちゃったけど、実行犯達は捕まえられたから上出来上出来。後はレクターがこいつらを取引材料になんとかしてくれるよ」

そんなリインの内面を見透かしたのかのようにミリアムは極めて明るい声でそんな言葉を告げる。

「ありがとね、リイン、みんな！僕一人だとその人達あのでっかい蜘蛛の餌になっちゃってた可能性もあったから君たちが居てくれて助かったよ！」

どこまでも明るい笑顔と声で告げる妹分の姿にリインは張り詰めていた心を一旦解して穏やかな笑みを浮かべて応じる。

「どういたしました。俺達の方は俺達の方でミリアムがいなかったら犯人達の居場所がわからず手詰まりになっていただろうからな、助かったよ」

「ニシシ、兄妹の絆の勝利！って奴だね」

自然と頬が緩むのをリインは感じる。基本的に年上から可愛がられる事の多いリインにとっては目の前の妹分との交流は敬愛するクレア姉さんとはまた違った方向で清涼剤となってくれる心の癒やしであった。

「ふん、一段落したところで改めてオーロックス砦の件について改めて伺いたいものだな」

「えーまだ引きずっているのー？しつこいなー粘着質な男はモテナイんだぞー。女の過去は深く詮索せずにそつとしておくのがモデル男の秘訣って奴だぞー」

どこからどう見てもお子ちゃまにしか見えないミリアムにそんな事を言われたユーシスは鼻で笑って

「貴様のようなチンチクリンにモテずとも俺は一向に構わん」

「ムカー女の子の身体の事をあげつらうなんてデリカシーって奴が足りてないぞー！僕だってもう数年もすればクレアみたいな大人の女って感じになっていくんだからなー！その時に吠え面かいたって知らないぞー」

「……まあ夢を見る権利は誰にとてある」

「こらーそこで急に憐れむような目を向けるなー！！」

ミリアムと漫才を行っているユーシスも、そしてそれを笑いながら聞いている他の面々も気づいていない。気がつけばすっかりと当初の問題の対象となっていたオーロックス砦侵入に関する話が有耶無耶になっている事に。これがミリアムが演技で行っている意図的なものであったならば、そこにわざとらしさを感じ取り気づく事が出来ただろう。しかし、ミリアムにそんな意図はない。どこまでも自然かつ天然である。故に周囲はその容貌も相まって自然と毒気を抜かれて気を許してしまう。

これこそが《白兎》の異名を持つ情報局員ミリアム・オライオンの真骨頂であった。

・
・

「よう久し振りだな、クロスベルに行った時以来だから大体4ヶ月振り位か。元気にしていたか、魔界皇子様」

下手人達は捕らえたものの交渉の窓口が存在しないためにこのままでは戦端が開かれる事を止められない、そんな緊迫した場面で、待ち望んでいたその男はどこまでも気安い様子でそんな弟分の黒歴史を穿り返す事を告げていた。

(やはりこの男には優しくする必要など一切ないな)

再会して早々に後輩達の前で忌まわしき記憶を掘り起こしてくれた男を前にして、リインは青筋を立てながらそう強く思う。今回の面々には昨年学園祭に来ていた人間はいなかったため、魔界皇子とい

う単語に疑問符を浮かべているのがせめてもの救いだらう。

「もー遅いよレクター！せつかく僕とリインが頑張ったのにお兄さんの君が台無しにするところだったんだぞー」

プクーと頬を膨らませながらミリアムはそう赤毛の青年レクターを責める。その様はさながら散々兄に待ちぼうけを食らった妹といった様子だ。

「悪い悪い、ちよつとクロスベルの方に出張していたもんでな。ちなみに支援課の連中も元気そうだったぜ。今じゃすっかりクロスベルの英雄って感じだ」

「……そうですか」

その時自分の胸に走った思いは何だったのだろうか。僅かな間だったが同じ時間を過ごした友人が報われた事を祝福する気持ちか。未だ学生の身に過ぎない自分と差がついてしまったことに対する妬心か、寂寥感か。あるいはその全てが入り混じった心か、いまちリインは判断がつかなかった。

「さてと、せつかくだから久方ぶりに会った義弟としばらく戯れていたいところだが、やらなきゃいけない仕事があるんでな。寂しいだろうが此処は一つ我慢してくれ、義弟よ」

「ええ、たまにはクレア義姉さんのようにどうか兄貴分として素直に尊敬できるところを存分に見せて下さい」

どこまでも冗談めかした様子でそんな事を告げる義兄にリインは肩を竦めながらそう告げる。素直に尊敬し辛い存在では有り、そのおちやらかした態度に物申したくなかったことは両の指では到底足りないが、それでもリインはこの目の前の義兄を無能だと思つた事は一度たりとてなかった。

「改めて名乗らせて頂きます閣下。帝国軍情報局特務大尉レクター・アランドールと申します。共和国軍との交渉ルートを担当するために参加致しました」

そうして中将の了承を取り付けたレクターは《通商会議》を控えて軍事衝突を避けたいのは共和国も同じ事であり、すでに交渉へと入っているという旨を告げて

「じゃあな、リイン。あんまり勉強だの鍛錬だのといった不健全な事ばかりしてないで年頃の男らしく彼女の一人や二人でも作っておけよー」

「バイバイリイン、みんな。また機会があったらよろしくねー」
そんな言葉を残してその場を去っていくのであった

「ふむ、なるほど。今の二人が鉄血アイアンブリードの子どもたちというわけかね」

「ええ、ご推察の通りです閣下。二人とも父の信認厚き俺の兄妹です」
リインはそう肩を竦めながらゼクスからの問いかけを首肯する。別段隠す必要もない事だし、先程のやり取りを見ていればわかる事だ。

「ふむ、あまり顔は似ていなかったし髪の色も違ったが先輩の兄妹だったのか？」

だが、その割には名字が違ったような等と帝国の事情に疎いガイウスは本人は大真面目な天然ボケをかますが

「義理のな。戸籍上では他人だが、まあそういう形容が俺たちの間柄を示すものとしては多分一番相応しい」

上司の息子、父親の部下、あくまで表向きの関係性だけを言えばそういう形容になるのだろうがリインが彼らに抱く思い、そして彼らがまたリインへと抱く思い、それらを考えれば兄妹という言葉こそがもつとも自分達には相応しいとそうリインは思っていた。

「で、でもさっきのミリアムって子はリイン先輩よりも年下でしたよね？」

「そ、そうよ。まだ日曜学校に通っているような年齢の子だったじゃないー」

「それとも会長殿のようにああ見えて実は副会長殿よりも年上だったりするのかな？」

「……まあその辺については色々複雑な事情があつてな」

実は俺もミリアムの詳しい事情については知らない等とプライドに賭けて言えるはずもなく、リインはそう意味深な言葉で誤魔化した後に澄み渡った青空のように晴れやかな笑顔を浮かべて

「これ以上知りたいという事ならば、それは俺達の身内になりたいと、そう受け取るがいいのかな？もちろん、お前達ならば革新派^{ウチ}としては大歓迎だが」

突如として行われた先輩のそんな営業トークにⅦ組の面々は釈然としない想いを抱えながらも閉口するのであった。

鉄血の子と悠久なる大地 《ノルド》 ⑦

ノルド滞在3日目の夜は昨日を上回る盛大な宴が開かれた。昨日の宴の主役はグエン氏であったが、今日の主役は当然の事ながらリン達トールズの面々である。ノルドの地のために戦火を回避するべく尽力した、若き獅子達。それはノルドの民達にとって獅子心皇帝以来紡いだ帝国との友誼を強く実感させるものであった。

一族でも随一とされる笛の名手ドルジの演奏、昨晚をも上回る豪華な食事の数々、若干の照れくささを覚えながらもこうして歓迎されて悪い気がするはずはない。饗しの数々にⅦ組の面々は存分にその心を癒やされるのであった……

そんな宴の最中、酔っ払ったグエン氏に昨日に引き続き絡まれたラインは速やかな戦略的撤退を行い、天幕を抜け出していた。「ときにガイウスよ、お前にはリンデ嬢という親しくしている女性が居るらしいな。一体どう思っているのだ」等と家族からの集中砲火を食らい目を丸くしているガイウスに心のなかで詫びながら。

(ミリアムの奴も参加できたら良かったんだが……)

今回の事件の一番の功労者は間違いなくミリアムだろう。犯人達の潜伏先の特定まで行っていたのだから。本人自身もご馳走にありつけるとなればきつと目を輝かせて喜んで参加した事だろう。そう思うと少々ラインは妹分に申し訳ない思いがした。

(B班の方は今頃、どうしているだろうか)

ラウラとファイ、対照的故に反発しあっていた二人の様子を思い出す。ユースとマキアスの対立は立場故の対立だったが、あの二人はどちらかと言えば気質の対立。優等生と不良生徒という生まれや育ち以上に考え方が正反対だからこそその反発。もしも上手く噛み合うような事があれば、あるいは自分とクロウと同じ最高の相棒同士になれるのではないかとそんな予感もしている。

そうしてラインはふと、何気なく空を見上げる。それは久しく行っていないなかった何気ない行動、そしてラインは目に写った光景に心を奪われる。見たこともない満天の星空。まるで手を伸ばせば届くので

はないかと錯覚するほどに星が近く感じられる光景がそこには広がっていた。

(あいつらにも見せたかったな……)

満天の星空を見てリインが思い出すのは数ヶ月前にした、掛け替えのない友人四人たちとの誓い。卒業前にまた全員で星を眺めようという誓いと卒業後の旅行の約束。

(……………)

鋼鉄と化していた心に迷いが生じる。卒業をしたら5人で一緒に旅に出よう、そんな約束を自分達は交わした。あの時は本当にそれも悪くない……いや、楽しみだと思った。彼らと一緒に過ごした日々で自分は成長したという実感があったから、軍に入る前に帝国の外を知る事は有益だと思ったから、何より純粹にあの四人ともっと一緒に居たいと思ったから。

(だけど本当にそれで良いのか)

自分は立ち向かわなければならぬ現実から目を逸して、ただ自分にとって心地よい楽園に浸っているだけではないのか、そんな思いがリインの心に過る。それは皮肉にも彼が自分の目指す軍人という職業の持つ負の部分に目が向けられるようになったからこそ生じてしまった疑問。

すなわち自分は何だかんだと理由をつけて、友情にかこつけて結局のところまだ答えを先延ばしにしようとしているだけではないかというそんな自分自身への疑念。

軍人になればリインはこれまでも幾度となく目の当たりにした現実、すなわち国家のために「必要悪」を為す決断を強いられる事となるだろう。だが、友人達と旅に出ていればその必要はなくなる。何せ自分はまだ民間人なのだから。

別段逃げているわけではない、見聞を広めるための旅の最中なのだ……そんな言い訳づくりのために自分は友人達を利用しているだけではないのか、そんな思いが心に過る。

「こんなところで星を眺めていたんだな」

リインがそんな自縄自縛の思考に囚われているとそんな風に声を

かけられる。振り返ればそこには今日共に死線をくぐり抜けた後輩の姿があつた。

「ああ、どうやら後輩達は後輩達同士で随分と仲が良いみたいだからな。昨日仲間はずれを食らった哀れな男はこうして一日遅れで一人寂しく星空を眺めていたわけさ」

昨日自分がグエン氏に玩具にされていた傍ら、何やら宴を抜け出して青春真っ盛りなトークをしていた後輩四人を揶揄するようにそんな拗ねた言葉をリインは口にする。別に一人だけ仲間はずれを食らって寂しかったわけでは決して無い。リインにとて無類の友と呼べる存在は居るのだから別段羨ましかったわけでもない。無いっただけなのである。

「すまない、別段先輩を邪魔に思ったわけではないんだ。いやむしろ頼りにしている。俺だけじゃない、エマにアリサにユースもきつとそれは同じだろう。この数ヶ月本当にお二方には世話になっていて感謝に絶えんと思ってる」

「冗談だ。そう真面目にとらえるな」

まあ一割ほどは本気だったが等と内心でリインは呟きながら肩を竦める。

「どうだろうか、このノルドの星空は」

「素晴らしい光景だな。俺が今までに見た中で二番目に素晴らしい星空だと思うよ」

「ほう、これ以上の光景を見たことがあるのか。それは是非とも教えて貰いたいものだな」

故郷の光景を二番目と言われてもガイウスの声に怒るような色は一切ない。あるのは純粹な感嘆、これ以上の光景があるのなら是非とも見てみたい、そんな思いだ。

「ああ、数ヶ月前トワにクロウにアンゼリカにジョルジュ、あいつら四人と一緒に見上げたトリスタでの夜空さ。だからあいつら四人と一緒にこの星を見上げていたら議論の余地なしに此処の星空が一番だよ」

「なるほど、そういう事ならばいずれまたその四人も引き連れて先輩

には来て頂きたいものだ。この光景を護れたのは先輩達のおかげなのだから、皆感謝している」

「礼には及ばん。あの《ギデオン》と名乗った男は俺の父に対して並々ならぬ憎悪を抱いていた。今回の事件を引き起こしたのも父の邪魔をするためだったのだろう。言わば、今回の事件は元を正せば我が帝国が招いたもの。自分で自分のケツを拭いただけの事、感謝されるような事じゃないさ」

「……いや、それでも礼を言わせて欲しい。確かにこの地に仇を為そうとしていたのは先輩方と同じ帝国の人間だったのかもしれない。だが、それでも先輩方がこの地を救うために尽力してくれた恩人である事もまた事実だ。だから、ありがとう」

ゼクス中將から帝国本土に帰るよう勧められたにも関わらず、この地を守るべく奔走してくれた仲間たちの友情、それを思い出すとガイウスの心を暖かなものが満たす。なるほど、確かにこの地を仇為そうとしたのは帝国人だったのかもしれない？だがそれが一体何だと言うのか、目の前の先輩、そして掛け替えのないⅦ組の友人達はそれを止めんと尽力してくれたのだ。その友情、想いを目の当たりにして「そもそもお前達と同じ帝国人のやったことなのだからそれ位当然だろう」等心ある人間ならば思えるわけがない。

「ああ、どう致しまして。こういう光景を護るために俺は軍人になりたいと思った。強くなりたいと、そう思った。だから、それがこの地を、ノルドの人々の笑顔を護る事に繋がったというのならこんな嬉しい事はない」

そうしてガイウスからの感謝の言葉にリインは穏やかな笑みを浮かべるのであった。

・
・
・

そんなリインとガイウスのやり取りをエマ・ミルスティンはひっそりと伺っていた。今回だけではない、エマは入学以来何かとリインの事を気にかけていた。それは年頃の少女らしい淡く儂い想いをリインに抱いているから……というわけではない。彼女がリインの事を

気にかける理由、それは彼女が魔女として導くべき起動者の候補であるからに他ならない。

エレボニア帝国の伝承で謳われる「巨いなる騎士」その担い手の候補がリインであり、彼女はそんな起動者を導く使命を帯びた魔女である。巨いなる騎士、《騎神》は絶大なる力を有する。それは時に災厄を退けて人々を守り、時に全てを破壊して支配する支配者としても存在した。文字通り起動者次第では神にも悪魔にもなり得る存在、それが《騎神》なのだ。

だからこそエマはこの3ヶ月間その担い手の候補たるリインを注意深く観察し続けていた。果たしてこの方は《騎神》を正しく使ってくれる人なのかと。そうしてこの3ヶ月リインを見続けたエマは今、その決断を下そうとしていた。

(信じてみよう……リイン先輩のことを)

下した決断、それはリイン・オズボーンを起動者として認めるというものであった。

彼女はこの3ヶ月リインと接して彼の姿を見てきた。

——厳しくも優しく自分達を導いてくれる先輩としての姿を見た。

——バリアハートでユーシスとマキアス、いがみ合う二人を仲立ちするために尽力してくれた姿を見た。

——そして今、護るためにこそ強くなった、護れて良かったという穏やかな笑顔を浮かべる姿を見た。

だから、彼女は決めたのだ。リイン・オズボーンを信じると。

(多分、先輩の性格から考えてもきつと《騎神》の事を軍に報告するでしょうね)

日頃からまさに理想の軍人候補生といった様子のリインの姿を思い出す。彼の性格上《騎神》という存在を知ってそれを軍や国に隠すという事はまず考えないだろう。打ち明けて報告し、指示を仰ぐだろう。兵器としての運用、それを考慮に真っ先に入れて祖国と革新派のためにその力を振るおうとするだろう。

だが、それでもエマは「護るためにこそ強くなりたいと思った」と

穏やかな笑みを浮かべるリインを信じると、信じたいと思ったのだ。善なる《起動者》の代表例である、かの獅子心皇帝と槍の聖女とてその力を振るったのは祖国のためであった。権力と結びついたからと言って悪というわけではないだろう、どのみち《騎神》という強大な力を有する者を国家が放置しておくはずがないのだから。遅いか、早いかの違いである。

そんな決意を抱いてエマ・ミルステインは自分が魔女として導くべき存在、穏やかな笑みを浮かべて空を眺める青年の姿を見つめる。きつと、あの人ならば正しく騎神の力を振るってくれるとそう信じて……

「……ねえ、エマってひよつとしてリイン先輩の事が好きなの？」

「わ、わあ!? アリサさん、一体いつからそこに！」

背後から突然かけられたアリサの声、それに驚きの叫びをエマは挙げる。危なかった、この場にセリーヌがいなくて良かった、もしもセリーヌが居れば自分はリイン先輩を起動者として導く決心をしたと伝えて居ただろうから。喋る猫という言葉の訳の余地が不可能な光景を友人に見られることとなっていただろうから、そんな風に思っ

「ついさっきよ。リイン先輩とガイウスだけでなくエマまで居ないからどうしたんだろうと思っで、どうなの？」

「どうとは？」

「だからリイン先輩の事が好きなの？」

「……え？ どどどどどど、どうしてそんな風に思っただんですか？」

想像の埒外の疑問をぶつけられてエマは一瞬その優れた頭脳を停止させた後に再起動を果たして大慌てでそんな問いかけを行う。彼女からすればそれは想像の埒外の事を言われたための戸惑いだっただが、アリサから見るとそれは凶星をつかれて大慌てしているようにしか見えなかった。

「いや、だってエマってばなんか入学以来気づけばリイン先輩の事をすぐに目で追っているし。今先輩を見つめる目なんて完全に憧れの先輩を見る恋の乙女のそれだったというか……」

「ち、違うんです！ リイン先輩のことを気にしていたのはそういうの

「じゃなくてですね！」

エマ・ミルスティンがリインの事を気にかけていたのは魔女の使命という誰も知らぬ彼女の事情が理由だ。そう、誰も彼女のそんな事情を知らないのだ。故に使命を果たすための起動者候補の観察も傍から見ればそれは、恋する乙女が憧れの先輩の事をついつい目で追ってしまったっているようにしか見えなかった。

それを恋と呼ぶ程のものかは定かではないが、エマのリインの抱いたある種の憧憬と言える感情。それ自体は決して嘘ではないからこそ、その疑惑は加速する。必死になって否定するエマの姿もアリサから見ると乙女心の発露にしか見えなかった。

「そ、それにリイン先輩にはすでにトワ会長っていう相手が居るじゃないですか！」

リインとトワ。この二人が恋人同士ではない等と思っているのは学園ではもはや当人たちのみ。親しい友人たちからもすでに後はいつ正式にくつつくかの問題だろうと思われている状態であった。

「うーんまあ確かにねえ。傍から見てもあの二人つてば明らかに両思いというか、ナチュラルに惚気けて来るし。リイン先輩なんて普段は厳しさの中に優しさが見えるって感じなのに、会長に対してはその比率が逆転しているような感じで露骨に態度が違うし」

立ちほだかる正妻の存在、それを想いアリサは確かに強敵だと頷く。

「でも、まだ正式に付き合っているわけではないみたいだしエマだって可能性がないわけじゃないと思うわ。少なくとも私は応援するわよ！」

「だ、だから本当にそういうんじゃないですってばアリサさくん」

他人の恋話というのはこの年頃の少女たちの大好物である。そんな大好物を前にしてキラキラと目を輝かせだした友人を前にエマ・ミルスティンは天を仰ぐのであった……

幕間く初夏の帝都く

ゼムリア大陸屈指の大国エレボニア帝国。そのエレボニアを統べる皇帝の居城たる《バルフレイム宮》に帝国政府の首相たる宰相ギリアス・オズボーンの執務室は存在する。その扱いは彼が皇帝の代理人である事を如実に示すものであり、貴族からは忌み嫌われている《鉄血宰相》への現皇帝たるユーゲント・ライゼ・アルノールⅢ世からの信認の厚さを示すものであった。

11年前軍部の平民派の重鎮であったギリアス・オズボーンがいかにしてユーゲントⅢ世からの信認を得たのかを帝国における大きな謎とされている。彼が卓越した才幹を有する人物であったことはそれまでの実績からも明らかであったがそれはあくまで軍人としての実績。政治家としてのオズボーンの才幹はその当時ほとんど未知数であったと言つて良い。

加えて言うのならオズボーンと皇帝の関係も然程親密であったわけではない、多くの武功を挙げて皇帝の手ずから勲章を授与される事はそれまでも幾度かはあったが、それでも突如としてのエレボニアの歴史上でも初となる平民を宰相に抜擢するという異例の人事を行う程の信認をそれだけで得たとは考え辛い。一体何が彼を宰相位にまで押し上げたのか、それは大きな謎であり、当然の事ながら四大名門を筆頭とした貴族勢力からは猛反発を受けた。

だが、そんな異例の抜擢に対してオズボーンはその実績で持つて反対勢力を黙らせた。リベールという小国相手に喫したまさかの敗戦から見事帝国を立て直し、誰もが望む「強いエレボニア」を取り戻した。失墜した軍部の信賴を取り戻すべく、その地位に見合わないと思しき家柄だけの将官を更迭する一方で《赤毛のクレイグ》を筆頭に平民出身の優秀な若手将校を次々と抜擢して出自に囚われない実力主義を浸透させ、軍部の大胆な改革を行った。

平民の権利の獲得のために大貴族相手に一歩も引かず大胆な法改正、税制改革を行った。帝国全土に軍事と民需、それぞれに対応できる大規模な鉄道網を張り巡らせる事で経済と流通の活発化を図った。

治安に不安を抱える小国を合意の下次々と併合する事で領土は飛躍的に拡大した。

革新派は言う、ギリアス・オズボーンこそ稀代の名宰相、数十年に一度現れるおとぎ話の英雄の如き奇跡のような存在、そんな指導者を空の女神は我々に遣わしてくれたのだと。平民達よ今こそ団結の時だ。貴族により支配されてきた古い体制を終わらせる時が来たのだ。宰相閣下と我等でそれを為すのだと、そう彼を絶賛し崇拝する。

貴族派は言う、ギリアス・オズボーンこそエレボニアを破壊する怪物で有ると。人心を惑わし、陛下を誑かす事でこのエレボニアを破滅に導こうとしている存在なのだ。誇りある貴族よ、この怪物を誅戮し、以てあるべき秩序を取り戻すのだと、そう彼を罵倒し憎悪する。

崇拜と憎悪、込められた感情は正反対なれどこの両派のギリアス・オズボーンに向ける感情にはある共通点が存在する。すなわちどちらもはや、ギリアス・オズボーンを一人の人間とは見なしては居ない事である。『英雄』、『怪物』形容は異なれど彼をそんな『お伽噺』の存在だと見なしているのだ。

そんな中数少ない私人としての彼の素顔を気にかけている存在、《鉄血の子ども》たる鉄道憲兵隊大尉クレア・リーヴェルトは先日起こったノルド高原での共和国との戦闘状況、その交渉の成果を上司たる宰相へと報告していた。

「……共和国政府との交渉は完了。ノルド高原における戦闘状況は完全に回避されたとのことです。代わりに実行犯である傭兵団を先方に引き渡す事となりましたが……」

クレアが告げるのはレクター・アランドール、リインの兄貴分たる彼がきちんとその職務を果たした事を告げる言葉。リインとミリアムという二人の鉄血の子が捕らえた傭兵団を交渉材料に《かかし男》が交渉を纏める。まさしく鉄血の絆此処に在りとも言うべき、見事な連携であった。

「……まあ、仕方あるまい。基より帝国側の事情で起きた事件だ。

《通商会議》を前にロックスミスに貸しを作ってやったと思えばいい」
基より掃いて捨てる程にいる使い捨ての駒。大した情報も持っていない以上、そんな連中の身柄に拘泥したところで特に意味はない。軍事施設を攻撃した実行犯の身柄の処遇など、精々こちらで処刑するか、それともあちらで処刑するかその程度の差だと。

帝国側よりも共和国側の方が被害が大きく、死者の数も多い以上共和国が自分達の手で処分したいと思うのは至極妥当であった。

「はい、仰る通りかと。ただ実行犯はともかく『彼ら』の一人は取り逃がしたままです。おそらく幹部クラスの一人である事は間違いないかと」

リインとミリアム、義弟と義妹からの報告を思い出す。

「主犯格の男は自らをギデオンと呼称。同志からはGと呼ばれている等と言っていたことから背後に何がしかの組織が有ることが推定される。高い知性を感じさせる一方で戦闘指揮に関してはお粗末だったこと、貴族勢力との繋がりを示唆する発言、宰相閣下への激しい憎悪、何らかの使命感を有している事から貴族寄りのインテリ層である可能性が高いと思われる」

「おじさんの事すっごく恨んでいたよ。メガネかけていて頭良さそうな感じだったけど戦いの方はお粗末だったから多分元々は学者さんか何かだったんじゃないかなあ」等とそれぞれ記されていた。それぞれがどちらの報告かは言うまでもない。

「フフ、そうだな。此処までの仕掛けを施されては我々も慎重にならざるを得まい。まずは帝都の夏至祭、『子どもたち』をどう動かすべきかな」

慎重にならざるを得ないと発言しながらもその言葉に恐れの色は欠片も見られない。挑んでくるというのならば受けて立とう、自分への怒り、憎悪それらを全て受け止め、呑み干して自分はこの道突き進み続けよう。そんな鋼の意志の込められた覇者の自負がそこには込められていた。

そうして告げられたクレアの答えにオズボーンは満足気に頷き、「自分に甘すぎるのでは無いか」とそんな親しみの込められた他愛な

い言葉にその助力に感謝する言葉を告げ

「夏至祭の方は君に一任する。なんだつたら、我が不肖の息子を使っても良いだろう。バリアハートでは未熟さを晒したようだが、今回の一件ではどうやらそれなりの働きをしたようだからな」

「それは……」

その提案にクレアは顔を曇らせる。正直今回の一件でもあの子が傭兵団と交戦したという話を聞いた時は驚きのあまりコーヒーを零してしまった。未だ学生の身である義弟を心配する姉心、そんな私情が敬愛する上司からの提案に彼女にしては珍しい事に反発めいたものを覚えさせていた。

「既に鉄道憲兵隊に加わったとしても何ら問題のない実力を有している、一年前にアレに対してそう評したのは他ならぬ君だ。それともアレはただのリップサービスだったかな？」

「そのような事は決してございません。おっしゃる通り実力で言えばなんら問題はないでしょう。ですがあの子は、リインさんは未だ学生です。力を借りるのではなく、大人として我々のほうが護らなければならぬ存在なのではないでしょうか？」

姉さん、クレア姉さんと自分を呼んでくれる宝石のような笑顔、それをクレアは思い出す。何時までも護られる子どもでない事はクレアとて百も承知。もう数年もすれば自分と肩を並べ、そして追い越していくのだろう。だが、それでも学生である後ほんの僅かな間だけでも出来る限り危険な事をして欲しくない、それがクレアの偽らざる私情であった。

「子供とは言うがアレも既に17。15で兵士となる者も数多くいる以上、一概には子どもとは言えまい。何よりツールズ士官学院の学生という立場は逆に便利でも有る。遊撃兵としてはある意味持つてこいの立場だ。その事は君とて理解しているだろうか？」

帝都は革新派のお膝元では有るが全権を掌握しているというわけではない。皇族の守護を務める近衛兵は領邦軍の精鋭から選抜されている。当然の事ながら鉄血宰相の子飼いたる鉄道憲兵隊との仲は最悪と言つていい。鉄道憲兵隊への協力や介入を頑なに拒否する可

能性は大いであつた。そして領邦軍にも人材を輩出しており、皇族が理事長を勤め、生徒の中にも貴族が存在する特科クラスⅦ組がそんな自分達よりも動きやすくはあるという事を。

「……」指摘の数々はいちいちごもつともです。ですが閣下「……」
平行線であつた。それはさながら期待しているからこそ我が子を千尋の谷へと放り込もうとする厳しき父の愛と我が子に危ない事をしてほしくないのだという母の愛の対立。そして公人としての情を挟まない我が子であろうと一つの駒としてみなす冷徹な判断と「大切な存在だから危ない目にあつて欲しくない」そんな私情の対立であつた。

世の中では往々にして有り得る対立であつたが、奇妙なのは冷徹に駒として扱おうとしているのが血の繋がった実の父であるのに対して、私情にかられている側の方には一切の血のつながりがない点であつたであろう。

そんな常が無いクレアの様子をオズボーンは叱責するでもなく興味深そうに眺めていたが……

「閣下、お話中のところ申し訳ございません。レーグニッツ閣下がいらっしゃいました」

「ああ、入っていたきたまえ」

そうして革新派のNO2たる帝都知事カール・レーグニッツが現れたことでその話は打ち切りになる。両名への挨拶を行い、クレアはその場から退出するのであつた……

・
・
・

「ふふ、筆頭は彼女ではないがね。だが彼女を含め全員よくやってくれている。老獪なる大貴族共《四大名門》の古狸共を相手に」

とても領邦軍から《氷の乙女》等と恐れられている子どもたちの筆頭とは思えない、そんな風にクレアの事を表する知事へとオズボーンは応じる。彼女が筆頭というわけではないと。

「ああ、なるほど。確かに、閣下にはご自慢のご子息が居られましたね。私も理事として学院からの報告は聞いておりますが全くもつて

将来が楽しみな若者です。うちのマキアスも随分と世話になっていくようで……いずれは彼が閣下の後継となられて彼女たちを率いて行くというわけですか？」

最古参たる彼女が筆頭ではない、その言葉にリーグニッツ知事はすぐに一人の少年を思い出す。すなわち目の前の人物の唯一の実子たるリイン・オズボーンの姿を。カール・リーグニッツのリインへの評価は高い。同じ革新派に位置する、もしも自分達が志半ばに果てるような事があればその遺志を継いでくれるであろう将来有望な若者と、そんな風に思っている。また個人的にも息子であるマキアスの貴族嫌いを何とかするのに一役買ってくれたというのは、親として一度礼を述べたいところであった。

「さてどうでしょうか、アレは未だ若く未熟です。現状に満足して天狗になるようであればそこまでです。……何よりも私の後継となり得るのは私を上回るだけの才幹と実績を周囲に示したものです。

血の繋がり等ではなく実力によってその人物が在るべき地位へと収まる社会、そんな国へとするためにこそ革新派は立つたのですから」

ただ貴族であるというだけ優遇される社会、そんな体制を否定するためにこそ我々は戦っているのにその我々が我が子であるというだけで権力を移譲してはならないだろうというその言葉にリーグニッツ知事は苦笑して

「なるほど、中々に手厳しい意見ですがごもつともです。閣下の後継者となるものは血筋ではなくその実績によつて決まるというわけですな」

「ええ、その通りです。そしてそれは何も私の死後でなければならぬという道理はないでしょう」

自らを上回るだけの才幹と意志を持った者が現れて自分を打倒するというのはならば、それはそれで望むところだと。自らに対する宣戦布告を行ったとある皇子の姿を思い浮かべてオズボーンは不敵な笑みを浮かべる。

「……自らの身命よりもこの国の行く末をこそ重んじる閣下のご覚悟

には感服致しますが、どうかもう少しご自愛下さい。貴方が居なくなれば我々は仰ぐべき指導者を失う事となるのですから」

カール・レーグニッツは革新派のNO2と目されている。その識見と才幹は卓越したもので、彼が優秀な政治家である事に異論を唱えるものは政敵たる貴族派を除けばほぼ皆無と言っている。

だがそれでも彼ではオズボーンの代わりにはなり得ない、行政官僚出身たる彼は正規軍の7割を掌握しているオズボーンとは異なり軍部からの支持が薄いからだ。

彼に対する軍部や革新派からの支持はあくまでオズボーンの補佐役としてのもの。故に万一オズボーンが倒れるような事となれば、まず間違いなく革新派は割れる。

だからこそその身辺にはくれぐれも気をつけて欲しいとどこか自分自身の命さえも冷徹に見放しているような目の前の盟友へとレーグニッツ知事は懸念を伝える。

「無論、理解しておりますとも。この国が『呪い』から解き放たれるところを見届けなければ死んでも死にきれませんからな」

貴族による支配体制を指して『呪い』等と称するそのオズボーンの過激な物言いにレーグニッツ知事は苦笑を浮かべるのであった。

・
・
・

バルフレイム宮の一角、皇族専用のその一室にて二人の兄弟が語り合っていた。片方は放蕩皇子等と称されるオリヴァルト皇子、そしてもう片方は帝国の至宝と謳われるセドリツク皇太子。

平民出の母の子のため皇位継承権を有さない長兄と次代の皇帝たる皇太子。ともすれば骨肉の争いへと繋がりがかねない二人でありながら、両者の間にそのような険悪な雰囲気は皆無であった。自由闊達で奔放ながらも政治や芸術といったあらゆる分野に深い造詣を見せる兄を尊敬し慕う弟と次期皇帝という重みに押しつぶされそうになっている真面目で責任感の強い弟を励ます兄、そんなエレボニアの民が見れば皇室への敬愛を深めるであろう光景が繰り広げられていた。

そして兄たるオリヴァルト皇子は「もう少し、君は自由に振る舞っ

てもいいと思うのだが」と何かと気苦勞の絶えない生真面目な弟を氣遣う言葉をかける。そうしてそんな言葉にセドリツク皇太子は憧憬の対象として二人の人物を挙げる。一人は他ならぬ目の前にいる自由闊達に振る舞う兄オリヴァルトであると。そしてもう一人の人物が父の信頼厚きオズボーン宰相だと。帝国男子としてその力強さに憧れると。どこか弱々しい自分に対するコンプレックスを感じさせる言葉を述べながら。そんな弟の様子にオリビエは危懼を抱き、彼の持つ危険性を教えんとしたところで

「そういえば、オズボーン宰相と言えば、兄上が理事長を勤めているツールズにそのご息がいらつしやるんでしたよね。確か、リインさんというお名前だったと思いますが」

「ああ、その通りだが良く知っていましたね」

「クルトが良く話してくれていたんです。尊敬するもう一人のお兄さんみたいな人だって」

自分の守護役を務める事となる友人が良く目を輝かせながら教えてくれた、曰くまさに帝国男子の鑑とも言うべき尊敬する兄弟子がいると。

「なるほど、確かに彼の事は我が親友も高く評価していたよ。きつと良い軍人になるだろうと、そんな風にね。理事長として聞いたところの話によると成績も首席で人格も公明正大とまさにそんな非の打ち所のない優等生らしいよ」

「ああ、やっぱり凄い人なんですね。……僕は来年ツールズに入学してちゃんと父上の名を汚さないように振る舞えるでしょうか？」

「こちら、さつき言っただけだぞ。あまり深刻にならずに肩の力を抜き給え。一つの事を貫き通す鋼の如き強さも結構だが、その前に君はもつと多くの人と出会うべきだ。何せ君はまだ、この宮廷の外の世界というものをほとんど見たこと無いんだからね。ツールズでは多くの出会いが君を待っている、そんな友人達と時に馬鹿をやって青春を謳歌したまえ。自らの意志と覚悟を定めるのはそれからでも遅くはないさ」

そうどこか焦りが見える弟を宥めるかのような言葉を告げた後に

オリビエはからかうような口調で

「何せ、私なんてついこの間まで我が親友を振り回してリベールでぶらぶらしていたのだからね。君も精々親友であるクルト君を振り回してやりたまえ」

自分の中の意志を定めた忘れられない旅と出会い。それらを思い出してオリビエは穏やかな笑みを浮かべながら真面目な弟に告げる、もう少し我儘になれと。

「……それじゃあ、兄上に早速ですが一つお願いがあるんですが」

そうしてセドリツクは決心する、目の前の兄の言葉に甘えて少しだけ我儘を言ってみようと。

「ふむ、何かな。可愛い弟の頼みだ、大抵の事は叶えてみせようじゃないか」

「はい、兄上がツールズ士官学院の理事長を勤めている事を見込んでの頼みなんですが」

そうして告げられた弟からの細やかで微笑ましい頼みごとをオリビエは喜んで快諾するのであった。

鉄血の子と《巨大なる騎士》

3回目の特別実習から帰還して数日が経過した。リイン達A班は戦争を回避するために貢献したという事で両班通じて初めてとなるS評価を獲得し、トワ達B班はラウラとフィーの二人の関係改善こそされなかったもののどこかの大人気ない二人のように四六時中火花を散らし合い空中分解寸前になるという事もなく、概ね問題なくこなした事でB評価となった。そうして夜中リインが日課である自習を行っているとコンコンと自室をノックする音が聞こえてきて……

「夜分遅くにすみませんリイン先輩。……大事な話があるんです、お部屋に入らせていただいてもよろしいでしょうか？」

「？わかった。部屋の鍵は空いているから入ってきてくれ」

「失礼します。すみません、勉強の邪魔をしてしまつて」

「構わんよ、後輩の相談に乗る程度の時間なら捻出するさ。それで一体どういう要件なんだ？」

真剣な面持ちで夜中に同年代の女子が自室に大事な話があると訪ねてくる。普通この年頃の男だったら何かそういう勘違いしてをドギマギしてもおかしくなさそうだが、リイン・オズボーンにそんな様子は欠片も見受けられなかった。

そうしてエマは改めて決心するかのよう一度大きく深呼吸を行つて

「まず最初に言いたいののはこれから私がお話をするのは冗談でもお伽噺でも妄想でもない、紛うことなき真実であるという事を前置きさせてもらいます。それをまずは信じてもらうために……セリーヌ、リイン先輩に挨拶してくれないかしら？」

真剣な面持ちで連れてきた飼猫にそんな事を語りかけるエマの様子にリインが訝しがると

「はいはい、何回か会っていると思うけど改めて自己紹介させてもらうわ。私の名前はセリーヌ、この子の使い魔をやっているわ。よろしくね、リイン・オズボーン」

「……何らかの手法で俺を騙そうとしているというわけではないんだ

な」

「違います。今の言葉は間違いなくこの子が、セリーヌが発したものです」

「ま、疑うのも無理はないけど。でもこれからこの子が喋る話をもっと色々つぶつ飛んだ内容になってくるから信じてほしいわね。その辺の話がこの子の妄想じゃないとわかってもらうためにこうして私が喋っているんだから」

「どうやら話の腰を折ってしまったみたいだな。続けてくれ、おそろしく聞いて居る内に色々疑問は湧いてくるだろうから、総て聞き終えてから改めて質問させてもらう」

「では……」

そうしてエマは語りだす、自分がお伽話に出てくる魔女と言われる存在である事を。そして自分はある使命を果たすためにこの学院に入学したことを。そしてその使命とは伝承に謳われる《巨大なる騎士》、《騎神》の担い手である起動者を導くことだという事を。

「……なるほど、なんとなくだが話が見えてきたよ。この話を俺に打ち明けたという事はその起動者とやらの候補がつまり俺なんだな。そして件の《騎神》とやらはあの旧校舎に封印されていると、そういう事だな」

「はい、ご推察の通りです。セリーヌに調べて貰いましたがリインさん達はすでに第一の試しのところまでは到達していた様子。そしてここから先の試練を受けるには私達《魔女》の導きが必要になります」
「そして俺はどうやら君にその起動者たる資格ありと認めてもらえたと、そういう認識でいいのかな？」

知らず、言葉に力が籠もる。曰く「時に災厄を退けて人々を守り、時に全てを破壊して支配する支配者」そんな文字通り降って湧いた「力」を手に入れる事が出来るかもしれないという望外の好機に心が高揚するのをリインは感じていた。

ただの力としてだけではない、今の技術を超える騎神を解析する事で帝国が得られる技術的な恩恵は計り知れない、エマの言うことが事実ならばそれはなんと手に入れたい、いや手にいれなければな

らない代物だ。

「はい、ノルドの地を守れて良かったとああいう人達を護るためにこそ自分は強くなりたいといった先輩の言葉を私は、信じたいと、そう思いました」

真つ直ぐな瞳で告げられた自分への信頼の言葉にリインは一瞬息を呑む。そして自分が降って湧いた望外の力に振り回されていた事に気づく。そして魔女の導きとやらが起動者候補に必要なわけを理解する。必要なのだ、人には何のための力かを教えてくれる存在が。強い力に溺れぬように、何のために力を求めたかを思い起こさせてくれる存在が。魔女はそうして「私は貴方がそれを正しい事に使ってくれることを信じている」と告げる事で起動者が力に振り回される事を食い止めるべく存在しているのだろうか。

「……俺はこの力を軍に報告して祖国のために、革新派のために振るうつもりだ。それが最善の選択だと俺は信じている」

そうしてリインはエマの信頼へと応えるべく自分もまた真つ直ぐに虚飾無く言葉を紡ぐ。エマ・ミルスティンは自分を信じてくれた。ならば自分もその信頼を裏切ってはならないだろう、故に騙すような事はしない。自分が《騎神》を手に入れたらどうするか、それを隠す事無く伝える。それこそがせめてもの誠意だと思って。

「……ええ、知っていました。多分、リイン先輩だったらそういう選択をするだろうという事は」

告げられた言葉をエマもまた静謐に受け止める

「白状してしまうと、それがこれまで先輩を起動者に相応しいかどうか迷っていた理由でもあったんです」

祖国のためという大義の元にその力を奮うだろうことが予想できたから、そして振るっていく内に今までも幾多も存在した多くの起動者達のようにその力に吞まれて行ってしまうのではないか、そんな危惧を抱いたから。

「でも、それでも私は綺麗事だろうとなんだろうと『護るため』に強くなりたいたいとそう仰った先輩のあの誓いを信じます。ノルドの星空を見上げながら告げた、あの穏やかな笑みを信じたいと、そう思った

んです。だから、お願いします。どうか、私を後悔させないで下さい。貴方を信じて良かったと、そう思わせて下さい」

この3ヶ月でリインの性格を知ったエマはそう笑みを浮かべながら告げる。責任感の強いリインのような人物にはこういう風に言っておくのがおそらく一番効果的だろうと、そう思つて。

「ああ、心するよ」

そうしてリインもまたそんなエマからの信頼の言葉に穏やかに微笑むのであつた……

・・・

「……以上が、あの旧校舎に隠された秘密になります学院長閣下」

厳粛な面持ちでそう告げる自慢の教え子の一人たる副会長の言葉に学院長たるウォルフガング・ヴァンダイクは重々しく頷く。そしてそんな彼の後ろには曰く《魔女》である一年生のエマ・ミルステインが控えている。

「……なるほど、あの旧校舎にそのような秘密が隠されておつたとはな」

にわかには信じ難い話では有る。だがこのゼムリア大陸に於いては「早すぎた女神の贈り物」と称される現代の技術を上回るロストテクノロジーの産物たるアーティファクトが存在する故一概に有り得ないお伽噺と切つて捨てる事は出来なかつた。

「しかし、獅子戦役にそのような秘密が隠されていたとはな……ふふ、トマス教官辺りが知つたら大騒ぎしそうな話しだ」

獅子心皇帝ドライケルス・ライゼ・アルノールには謎が多い。その一つが僅かな戦力に於いて如何にして勝利したかというものだ。庶出の母を持つ第三皇子であつたドライケルスは獅子戦役の序盤に於いて歯牙にもかけられぬ言わば泡沫の候補であつた。競馬で例えるなら大穴も良いところだつたのである。

彼が挙兵した際に付き従つたのは腹心のロラン・ヴァンダールの他ノルドの勇士17名のみ。如何にドライケルスが卓越した才幹を有した英雄であろうと、如何に彼に付き従う勇士達が勇猛な戦士であろうと想いだけで勝てる程現実には甘くない、そのはずであつた。だが、

ドライケルス・ライゼ・アルノールはそんな現実を覆すかのようなお伽噺の如き英雄譚を成し遂げた。戦をすれば百戦して百勝し、そのカリスマと称すべき人格に惹かれ槍の聖女を筆頭とした名だたる英傑たちがこぞって彼の陣営へと馳せ参じるようになった。そしてやがてロランとリアンヌという最高の友と最愛の人をその過程で失いながらも彼は獅子戦役を終結させ、帝国中興の祖と称されるようになったというまさに「英雄譚」としては文句のつけようのない「お話」なわけなのだが、ここで「歴史」として見た場合大きな謎が存在する。

それは如何にしてドライケルスは勝利を収めたかというものである。おかしいのだ、如何に彼が所謂天才と言われる軍事的才幹を有する英雄であり、彼に付き従う兵士たちが命を惜しまぬ勇士であったとしても常識的に考えればどう足掻いてもドライケルスの敗北で終わるはずの会戦を彼は数十以上にも渡って行って、その尽くに勝利しているのだ。あるいはそう、表立っては言えぬような英雄たる獅子心皇帝のその御名に傷がつくような秘密があるのではないかとも言われたが、その理由が今こうして明らかとなったのだから歴史学者にしてみればまさに垂涎の事実と言っていいだろう。

「確かにそうかもしれないでしょう、公になればアルテリア法国辺りも放っておかないでしょう」

ゼムリア大陸における最大宗教であり七耀教会はアーティファクトの保管と回収を行っている。あるいは《騎神》もアーティファクトとみなされ、それを回収するべく教会が動いてくるという可能性は大いにあった。

「だから、君はそれを獲得して技術に落とし込んでしまおうとそう考えているという事かな」

「はい、その通りです閣下。曰く《巨いなる騎士》と謳われる《騎神》、それを解析して得られる技術的な恩恵は計り知れないでしょう。そして一度技術に落とし込んでしまえば、教会の介入として防げます」

「ふむ……」

告げられたラインの言葉、それにヴァンダイクは士官学院生として

は非の打ち所のないものである事を認める。正規軍名誉元帥として考えれば祖国の国益を第一とし、こうして学院の責任者たる自分にも報告にきているその姿勢に文句のつけようはないだろう。だが……「わかっているのかねリイン君、それをしてしまえば君はもはやただの学生では居られなくなる」

巨大な力を有する個、そんな存在を国家というものは放置する事はできない。懐柔か排除か、そのいずれかを取る事となる。そしてリイン・オズボーンという少年の国家に抱く忠誠は揺るぎないものだ、故に革新派は諸手をあげて宰相の息子という立場も相まって彼を英雄へと祀り上げようとするだろう。そしてその革新派と敵対している貴族派は当然ながら彼を排除しようとする。

結果としてリインはもはやただの学生ではどう足掻いても居られなくなる、巨大な力とそれに伴う責任、媚態に嫉妬そういったありとあらゆるものが彼を押し潰そうとするだろう。

「覚悟の上です」

そしてそんなヴァンダイクからの危惧にリインもまた静かに宣誓する。それら総てを自分は背負い込んでみせると。例え敵と自分の血で塗れる事となる茨の道だろうと、それでも自分は他ならぬ自分の意志でこの道を進むと決めたのだと。そんなリインの決意にヴァンダイクは嘆息して……

「二つだけ聞きたいことが有るリイン君、君にとって貴族とはどういう存在だね」

ヴァンダイクがもう一つ気がかりなのはその点だ。すなわち目の前の少年がその力に溺れてしまわないかという事だ。自分は正義で敵は悪であるという思考は驚く程の早さで人を傲慢にしていく。自らの正義を疑わぬ者こそがこの世に於いて、最も残酷になれる事をこの老将は嫌というほど知っていた。そして目の前の若者のような青く正義感と責任感の強い真面目な者程、そのようになりかねない事を。

彼の背後に控えている人物の存在を思えば、彼はこの力を祖国のそして革新派のために奮う気なのだろう。それ自体は別に良い、自分と

あの皇子等はまた違った思惑ではあるが、目の前の少年の立場を思えば革新派へと傾倒する事は当然の事だろう。だから彼がその力を革新派のために、祖国のために奮おうとする事を掣肘する気はヴァンダイクにはない。

しかし、もしも彼が自分達こそが絶対的な正義であり、貴族派は腐敗した邪悪な敵でしかない等と思っているならヴァンダイクはどれほど自分の立場が危うくなるかとそれを止めるつもりであった。祖国のためにも、そして教育者として一人の若者を正すためにも。

「同じ人間です閣下。敬意を払うに値する真の貴族と言うべき存在もいれば、とても貴族とは思えないように気さくな者もいる、腐敗した傲慢な者もいる。我々革新派と同じく。故に、同じ人間だと俺は思っています」

そんな問いかけにリインはかつてノルドで語った事をもう一度語る、そしてその上で

「閣下、数ヶ月前お話いただいた事を自分は決して忘れていません。己の正義を信じて疑わぬ者こそ最も邪悪になることも、敵であろうと同じ人間であるを忘れてはならぬ事、しかとこの胸に刻み込んでいます」

敬愛するエレボニアの英雄が自分のために教えてくれた金言の言葉、それを忘れる気はリインは毛頭ない。かつて平然と「必要悪」等と犠牲者に対して嘯いた未熟で傲慢だった若者の姿はそこにはない。数多の出会いを経て彼は若き軍人の卵から雛鳥となり、そして幾多の経験を経て今飛び立とうとしている。

「老兵は死なず、ただ去るのみか……」

此処までの意志と覚悟を若者に見せられたというのならばもはや老人としては言える事は何も無い。後は見守っていくしかあるまい、決定的な過ちを目の前の若者がしないように。

「あいわかった、君の意志と覚悟の程は見せてもらった。旧校舎の探索はこれより君に一任する、見事獅子心皇帝陛下の残せし試練を突破してみせよ」

そうして告げられたヴァンダイクの言葉にリインは無言で敬礼を

行い、その場を立ち去るのであった……

鉄血の子と姉弟喧嘩（前）

「以上が、今日此処に三人に来てもらった理由だよ」

騎神が眠る旧校舎にてエマから聞いた騎神、起動者の件それらを信頼する兄妹3人に語り終えたリインはそこで一度大きく息を吸い込んで

「改めてお願いしたい、俺が騎神の起動者となるための試練を共に受けて欲しい。クレア姉さん、レクターさん、ミリアム」

起動者となるための試練は仲間と共に行っても良い、それを聞いたリインが協力者として選んだ者たち、それは血よりも濃い鉄の絆があると信じる彼の兄妹達であった。

彼がこの三人を選んだのは実力もある、個人的な信頼も有る、だがそれ以上に彼らが同じ革新派であるという事実が大きく働いていた。

トワにクロウにアンゼリカにジョルジュ、リインが抱く彼らに対する信頼と友情は揺るぎないものだ。特科クラスVII組の面々もまた頼もしい後輩として信頼をしている。

だが、彼らは掛け替えのない友人ではあっても、同じ理想を抱く同志ではないのだ。

騎神を手に入れるための試練というのは極めて政治的な意味が大きくなる、リインは革新派としてその力を振るうつもりなのだ。そんなリインが騎神を獲得するために付き合わせる事、それはすなわち彼らを革新派へと加担させ、騎神を巡って巻き起こるであろう様々な戦いに巻き込む事になるのだ。

アンゼリカに至ってはかのログナー候の息女だ。元々父との折り合いが悪いらしい彼女がよりにもよって鉄血宰相の息子が力を手に入れることに加担したと彼の父が知ればどうなるだろう？ どう足掻いても良い方向に進む事はありえないだろう。

そしてトワにクロウにジョルジュの三人は革新派と貴族派の争い等関係のない存在だ。そんな彼らを革新派と貴族派の争いに等巻き込む事はできない。これは自分が選んだ道なのだから、掛け替えのない大切な友人だからこそ自分が背負うべき苦難を彼らに味合わせた

くなどない。

彼らこそが、彼女こそがリインにとっては何よりもその幸福を護りたいと願う存在なのだから。

かくしてリインは同じ父の子たる血に勝る鉄の絆を持つ兄妹達を頼る事を選んだわけなのだが……

「うん、もちろん良いよー。リインの頼みだもん！こうやって僕達四人勢揃いで一緒に何かするなんて機会そうそうないしねー。仲良い兄妹って感じて楽しそう！」

真つ先に口火を切ったのはこの場において最年少のミリアムだった。行うのは命がけの戦いだというのにはまるでピクニクにでも赴くような気軽さでほとんどノータイムで笑顔を浮かべて彼女は了承の意を告げる。

「……やれやれ真剣な様子で俺たち三人揃ってトールズに来て欲しい。話したい事があるなんてこの間渡した鉄血おれの子どもたちも専用の通信機で連絡してくきて、来てみりやその巨乳眼鏡っ娘と一緒に居たからてつきりその娘が俺達の義妹になるという報告かと思っただぜ」

ウインクをしながらそんなからかいを述べた後にレクター・アランドールは真剣な表情を浮かべて

「……良いんだな。わかっちゃいると思うがそいつを手に入れたら、お前はもうこれまでと同じじゃ居られなくなる」

ギリアス・オズボーンの実子であるという事実、それは確かに重い事実ではあったがそれでもそれだけならば精々配属や昇進の時に配慮が働いたりする程度で済んだかもしれない。

だがそこに《騎神》等という代物を扱えるという事実が加わってしまえば話は違う。実際の程度の代物かは手に入れてみないとわからないが、それでも《巨いなる騎士》等と呼ばれている代物だ、生半可な力ではないのだろう、それこそ共和国や貴族派との戦いの切り札として扱われる可能性もある。そうなってしまえば目の前の義弟分は立ち止まる事をもう、許されなくなる。

革新派の若き英雄として、本来であれば背負い込まなくても良かったはずのものを背負わずには居られなくなるだろう。故にレクター・

アランドールは問いかける、考え直すならば俺達だけしかその事実を知らない今のうちだぞと。

鉄血宰相直属の《かかし男》としてではなく、義弟を心配する一人の義兄として。

「学院長閣下にも同じ事を聞かれましたよ。……覚悟の上です。誰に強制されたわけでもない、俺は俺自身の意志でその道を選びます」

常のからかう口調とは異なる自身を本気で案じる言葉にリインもまた真剣な言葉でもって応じる、それらも総て受け止めて見せると。父のような鋼の如き意志と強さを手に入れて。

「そうかい、義弟がそこまでの覚悟を持って決断したんなら応援してやるのが兄貴分の役目って奴だな。……いろんな根回しだとか裏工作とかは任せておけ、そういうのも期待して俺らを頼ったんだろ？」

「ええ、頼りにしていますよレクター義兄さん」
「ああ、任せときな」

そうして二人の男はどちらも笑みを浮かべてグツと拳を互いに突き合わせる。

ミリアムとレクター、二人からの了承を得られたリインは残ったクレアは見つめる。

幼い頃からずっと自分の味方だったこの優しい姉がきつと今度も困ったような笑みを浮かべながら、協力を申し出てくれる事を信じて。しかし……

「私は反対です」

告げられたのはそんな冷たい否定の言葉。予期してなかった反対にリインは一瞬思考が止まる

「リインさん、貴方はまだ学ぶべき学生の立場に有ります。心技体、総てまだ今の貴方は成長の途上にあります。それにも関わらずそのような強大な力を得るのは貴方のためにならない、そう私は思います」

これまでもリインが幾度となく聞いた、まだ学生なのだという言葉。貴方はまだ子どもなのだからそんな背伸びをしなくて良いのだと告げる言葉。

「俺がまだ未熟なのは百も承知している。だけど、それでもこれは大

きなチャンスなんだ！騎神を手に入ればそれは革新派おれたちにとって大きな＋になる。もっと多くの人を護れるようになる！力がなければ、何も出来ないこと位姉さんにだってわかっているだろう！」

「……バリアハートの一件は聞きました。自分自身の身すら護れないのに「誰かを護る」等とあまりに思い上がり過ぎるのではないですか？」

領邦軍に捕まったという話を聞いた時クレアは誇張抜きに心臓の止まるような恐怖を味わった。だからこそ告げる、どうかもっと自分の身を大事にして欲しいと。まだ私に護られていて欲しいと。

「……ッ！」

そしてその言葉はリインの胸に何よりも突き刺さる。バリアハートで味わった自分は未だ目の前の義姉達にとつて護られるだけの足手まといにしかならないのだと突きつけられた出来事だったから。掌から血が滲む程に強く拳を握りしめ、それでもリインは声を絞り出して

「だけど、俺だつて成長した。実際ノルドではミリアムと協力して武装集団を拘束したんだ。もう姉さんに護られるだけの子どもじゃない」

どうしてわかってくれないんだ、俺はただ貴方と肩を並べて戦いたいとそう言っているだけなのに。そんな憧れの存在に一人前の男だと認めて欲しいのだという思いがリインを駆り立てる

「……ッ！ですから、それが思い上がりだと言っているんです！確かに貴方は優秀です、ですがそれはあくまで学生としてはという話に過ぎません。未だ一人前には程遠い状態で他者を護るだの救うだの傲慢が過ぎます！貴方は、今はまだまず自分の事を第一に考えるべきです！」

どうしてわかってくれないんですか、私はただ貴方に危険な目にあつてほしくない、もっと自分を大切にして欲しいとそう言っているだけなのに。大切な義弟だから、もう二度と失いたくないからこそ安全な場所に居て欲しいのだとそんな思いがクレアを駆り立てる。

「だったら、試してみればいい。俺が姉さんの言うような何時までも

守られるだけの子どもなのかを！」

「……良いでしょう。血氣に逸る弟を諫めるのも姉の役目です。貴方がまだ子どもに過ぎないことを教えてあげます」

そうしてリインは双剣を、クレアは愛銃をそれぞれ構えて――

「レクターさん、合図と審判をお願いします」

仲良くそんな事をハモリながら告げてくるので、レクターはその剣幕と急展開にいつも余裕のある彼にしては大変珍しい事に若干引きつった笑みを浮かべて

「えーそんじゃ、まあアレだ。どっちも怪我には気をつけて。どっちかがまいったというか、気絶するか、あるいは明らかに勝負が決着ついたら俺が止めに入るって事で……はじめー！」

告げられた言葉と同時にリインが全速力でクレアまでの距離を詰めんとする。姉の戦闘スタイルは把握している、導力銃を使ったその明晰な頭脳から繰り出される未来予知じみた正確な射撃。距離を取っての戦闘ではどう足掻いても自分に勝ち目はない、だが近接戦闘に持ち込んでしまえば自分にも勝機がある、そう考えて。

だが

「その程度の事すら読めないでも？ 随分と舐められたものですね」
貴方の考えている事は私はお見通しなのだと最初に銃を数撃放つたと思つたクレアがなんと逆に自らリインへと接近する。

「モーターミラーージュ!!」

そうして高速機動によってリインの背後へと回ったクレアは導力銃による攻撃を叩き込む。すんでのところで躲したリインであった

が
「フリジットレイン！」

それも予期していたかのようにリインの回避先へと作り出された氷塊が叩き落される。とつさに身体を闘気で覆ったことで即座に戦闘不能にこそならなかったもののリインの身体には少くないダメージが与えられる。加えて――

「これで、終わりです。此処から先、貴方は何も出来ません」

リインが回避と防御に費やした、そのわずかな間にミラーデバイス

をセットしてリインを封殺する必勝の布陣を整えたクレアはそう、弟に自身の勝利を告げた。

・・・

「レクター、一体何がどうなっているの？クレアってば何であんなにリインがそのらいぎーっていうのになるのを嫌がっているのかなあ？」

そそくそと戦いに巻き込まれぬように避難した先でそうミリアムはポツリと呟く。その表情や声色は普段優しい姉の怒ったその姿に怯えたりするでもなく、純粹な疑問といった様子だ。

「あーまあ……なんというかアレだ弟離れ出来ない過保護な姉ちゃんの心境って奴なんだろうなあ。まあリインの奴はリインの奴で確かに危なかつしいところはあるからなあ」

しみじみとレクターはバリアハートの時にあつたクレアの取り乱しぶりを思い出しながら呟く。

「ふーん僕はてつきりあの日ってやつかと思つたよ。ところでレクター、あの日ってどういう日？」

「……男の俺が言うとセクハラとかで訴えられかねないんでな、エマちゃんだったか。このおチビに説明してやってくれねえか？」

「え、ええええええええ？」

予期せぬキラークラスに同じく避難していたエマ・ミルスティンは困惑する。ついに魔女の使命を果たす決心をしたと思つたらいつの間になら姉弟喧嘩に巻き込まれている辺り彼女もなかなか不幸と言ふべきであつた。

「そ、そのクレアさんに聞いてみたら良いんじゃないでしょうか」

そうエマは逃げる。何が悲しくて今日あつたばかりの他所の子に性教育を実施しないといけなかないかという話なのでこれは無理からぬ事であつた。

「しかし、あいつもやるようになったな。ボコボコにされているけど食い下がっているじゃねえか」

「うん、リインってばどんどん強くなっているよー。この間もおかげで助かつちやつた」

目の前で義姉弟が戦っているというのに二人に特に心配する色はない。まるでポップコーンを食べながら劇を観賞するかのようなテンションである。それはあの二人ならば万が一にも相手に大怪我を負わせるような事はしない、そんな信頼があるからだろう。

「とはいえ、このまま行けば負けるのが遅いか早いかの違いだな。さてさてどうなるやら」

「うーんでもさレクター、リインが負けちゃったらどうするの?」

騎神という力が魅力的だと告げるリインの言葉はそのとおりだ。レクター達が鉄血宰相の忠実なる部下として動くのならば正直報告しない理由も確保しない理由も存在しない。しかし

「そんな時はまあ過保護の姉ちゃん意志を汲んでやるさ。あいつが自分で子どもじゃないっていうんなら言葉だけじゃなくて行動でそれを示さねえとな。負けたらその時はあいつがまだ、クレア義姉ちゃんの言う通りに子どもって事だ。自分で自分のケツも拭けねえガキが、大きな力を手に入れたって碌な事にはならねえからな」

クレア程ではないにしてもレクターも同様にリインはまだ子どものままで良いのだと、そんな思いを抱いている事はミリアムは見透かして

「ニシシ、クレアの事を過保護過保護って言うけどレクターもなんだからだでリインの事が大事みたいだよね♪」

「ま、兄貴ってのはそんなもんさ」

照れるでもなくレクターは苦笑しながらそう告げる。表立っては姉ちゃん程ではないように見えて何だかんだで弟の事を気にかけてしまうのが兄であり、兄弟とはそういうものなのだと。

「はーい、それじゃアレクターお兄ちゃん。可愛い可愛い義妹からお願いがあってるんだけどー」

「はっはっは、却下だ。我が麗しの義妹よ」

「ぶーまだ何にも言っていないぞー」

そんな仲睦まじい様子を見せる義兄妹の姿にエマ・ミルステインは血の繋がりに等絆のの深さには関係ないのではないかと、そんな感慨を抱いて再び己が起動者として選んだ人物の戦いを見届けようとする

の
だ
っ
た
…
…
…

鉄血の子と姉弟喧嘩（後）

四方八方から次々と襲い来る銃弾の嵐に晒されながらリイン・オズボーンは必死に耐えていた。

歯を食いしばりながら、意識を刈り取られるような攻撃だけは確実に叩き落として直撃を受けないようにする。

身体に走る痛みは意志の力で耐える。

本来であれば当に決着がついていて当然のリインとクレアの戦いは思いの外長引いていた。といっても、なんとかKO負けを避けていくというだけであって此処までクレアが受けた攻撃はまるで0、リインに直撃した攻撃は既に100を超えるというボクシングであればとつくの昔にレフェリーのストップが入っているであろう一方的も良いところの展開だったが。此処まで一方的かつ彼我の実力差が明らかでありながら未だ決着がついていない理由は2つある。

一つ目はクレア・リーヴェルトの本領はあくまで集団戦闘にこそあるという点。彼女の本分はあくまで軍人として、指揮官として部隊を運用する事にある。

身につけた戦闘術も集団対集団を想定したものであり、個人対個人の戦闘は不得手というほどではないにしても彼女の真価を発揮するには程遠いものなのだ。

それに対してリインの身につけたヴァンダールの剣術とは即ち戦場で英雄足らんとするもの。一騎打ち、あるいは単騎にて集団を相手取る事を想定したものだ。

加えてリインは学院でこの手の強者との一騎打ちを幾度となく行っている。それはフリーデルという剣友であったり、アンゼリカであったり、ラウラという後輩であったり

ナイトハルトやサラといった帝国有数の実力者の教官陣でもある。この手の一騎打ちはリインの十八番なのだ。

そして二つ目の理由、これこそが最大の要因ではあるのだが……

「……ッ、レクターさん！もう十分でしょう！私の勝利は揺るぎません、勝敗は比を見るよりも明らかです！」

のほほんとした様子でこちらを眺めているレクターへとクレアは怒りを露に叫ぶ。戦況は開始してから一方的な推移で進んでいる。クレアが攻撃し続け、リインは守勢に回り続けている。

時折攻勢に出ようとするものの当然、クレアはそれを許さない。詰チエスの如くあつさりど、順当にその攻撃の起点を潰す。もはや戦いと、少なくともクレアの主観的には、呼べるものではない。ただただリインが嬲られているような状態であった。

そしてクレアは目に入れても痛くない位に可愛い愛する義弟をいたぶって苦痛に歪む姿を見続けて喜ぶような特殊性癖の持ち主では断じて無い。

だからこそクレアは叫ぶ、何を悠長に見ているのか。早く審判としての勤めを果たして欲しいと。

「ふーむどう思いますか、解説のミリアムさんや」

「リインの目はまだ死んでおらん……決着をつけるには時期尚早じゃ……」

一体誰の真似をしているのか、ミリアムとレクターはそんな兄妹漫才を繰り広げる。そもそも解説に意見を求めるのは実況の役目で審判の役割ではない。

「つーわけだ、この状態で止めたら後で俺がぶつくさ文句言われそうだからなー。元々リインを止めようとしたのはお前なんだし、しっかりと責任とって仕留めてくれや」

今の状態で止めれば俺はまだやれた！と俺がそいつに食ってかかれるだろ。そんなのは面倒だからごめん被ると事もなげにレクターは、そんなクレアにとっては多大な苦痛を擁する事を平然と告げる。

「武器を弾き飛ばされたわけじゃない。戦意を失ったわけじゃない。身動き出来なくなっただけでもない、だっただけお前さんが有利で勝ち目が極小だろうとリインの負けが確定したわけじゃない。降参させるか、気絶させるかまで追い込めば良い。そうだろ、アイス・メイデン氷の乙女」

お前がその異名に相応しい普段の戦闘時における冷徹さを見せて

いれば、もうとつくの昔に終わっている勝負だぞと。

「……ッ！」

此処まで勝敗が長引いている最大の要因、それは優位にある側クレア・リーヴェルトの精神状況にあった。

彼女は軍人であって武人ではない。武術を収めた人間には多かれ少なかれ、強者との戦いに高揚するといった所謂戦闘好き側面が多かれ少なかれあるものなのだが、彼女にはそういったものが一切存在しない。

それは物語で英雄たちが行うような華々しさとは無縁のもの。無慈悲かつ淡々と、冷徹に最善手を打ち続けて追い詰めていく。それが彼女が《氷の乙女》と呼ばれるようになった由縁。

平時には心優しく穏やかで可憐な淑女でありながら、戦時には感情を切り離して冷徹な軍人という仮面を被る。

非常時に於いて人格を切り離して理に従う、そんな軍人教育の成功例こそがクレア・リーヴェルトなのだ。

だが、しかし

「いい加減に降参して下さいリインさん！これ以上粘つても無駄に傷が増えるだけです！勇気と蛮勇は全く違います、その程度の事、貴方にわからないはずないでしょう!？」

貴方はずっと物分りの良い子でこんなにも私を困らせた事なんて、今まで一度もなかったのにどうして今回に限ってこんなにも意固地なのだとかレアは叫ぶ。そこに《氷の乙女》等と称される冷徹な軍人の姿は欠片も存在しない。いるのは、ただ弟離れが出来ずに泣き叫んでいる一人の女性だ。

「何故ですか、私の言っていることはそんなに間違っていますか!？貴方はまだ学生なんですから、危ないことは私達大人に任せていければ良いんです！」

告げる言葉はどこまでも私情塗れのものだ。

本来、革新派の軍人として見ればリインが《騎神》という力を得るというのは諸手を挙げて歓迎すべき事態なのだ。レアが革新派の軍人として、鉄血宰相の腹心として動くならば反対する理由など存在

しない。

だが、彼女はそれに異を唱える、一人の弟を心配する姉として。それは本来であれば責められる事ではないのかもしれない、だが彼女が普段のように軍人の仮面を被っていけば出るはずのない言葉なのだ。断言しよう、今のクレア・リーヴェルトの戦闘力は通常時を大幅に下回っている。

心を切り離れた理に従う氷のような冷徹さこそが彼女の強さの秘密であればこそ、荒れ狂う感情をそのままに表に出している今の彼女はひどく、脆かった。

感情が表に出ているからこそ、普段であればそのまま仕留められているタイミングでリインの笑顔が通り、躊躇いが生まれて機を逸す。もしも大怪我を負わせてしまったらどうしよう、そんな恐怖が放つ導力弾の威力を落として、昏倒させるに至らない。

「……ああ、わかってているよ。姉さんが、俺を心配してくれていることも。力を欲しているのが俺の我儘だって事も」

そしてそんな精神がボロボロのクレアとは裏腹にリインは冷静さを取り戻していた。

戦う前に抱いていた、どうして自分の味方をしてくれないのかという子供じみた甘えから来る怒りも消え去っていた。

それは目の前の大好きな姉が今にも泣き出してしまいそうな悲痛な顔をしているから。自分が傷つくたびに、苦痛に顔を歪める度にまるで自らも傷を負っているかのように顔を歪めるから。

自分のことを目の前の女性がどれだけ心配してくれているか、それがわかったから。

だが、それでも、いいや、その上で

「だけどそれでも俺はもう姉さんに守られるだけの子どもじゃない！ 貴方と肩を並べて戦いたいんだ!!」

そう告げるリインはこの戦いがそもそも《騎神》という力を得る事を認めさせるためのものだったという事を忘れていない。彼の今、心のなかに有るのはちっぽけな意地。すなわち貴方に護られるんじゃない、俺が貴方を護れるようになりたいんだというそんな男の意地で

「カレイドフォース！」

放たれたクレア・リーヴェルトの奥義。迫り来るその奥義を前にしてリインは……

「!?」

双剣を自ら手放した。そうして自らの持つ闘気を0にまで落とし込み、その攻撃を受け流して

「ラグナ・ストライク！」

拾い上げた双剣から自らもまた奥義を放ち、クレアへと叩き込むのであった。

・・・

「やるじゃねえか、まさか本当に勝つとは思わなかったぜ」

昏倒しているクレアの介抱をエマへと任せてレクターはクレアよりも余程ぼろぼろな義弟の元へと駆け寄ってそう賞賛する。

如何にクレアのメンタルがボロボロで普段とは程遠いコンディションであったと言つてもそれでも本来であればリインに勝ち目はないはずだった、それにも関わらず見事勝利を手繰り寄せた。全くもって大したもんだと。

「あんな隠し玉を持っていたとはな、いつの間にあんな芸当できるようになっていたんだよ」

「ついさっきですよ……ははは、ぶっつけ本番でなんとかなるもんですね」

「ほくそれはそれは」

告げられたリインの言葉にレクターは真剣な表情で考え込む。自分が専ら教えてきたのは諜報だとかといった所謂邪道だったり、座学であったりしたわけだがこいつはこと戦闘に関しては「天才」と言われる人種なのかもしれない。そんな風に目の前の義弟に大器の片鱗を感じ取って。

「う……私は……」

「あ、二人共クレアが起きたよー」

目覚めたクレアはそうして駆け寄ってきたリインとレクターの姿

を見て何かを察したように

「そう……ですか。私は……負けたんですね」

「ああ、コンディションが最悪だったし、本来であればお前さんが負ける可能性は0だったし、ミスって勝負を焦ってもそれでもこいつの勝てる可能性は万に一つだった」

それだけの力量差が未だクレアとリインの間には存在する

「だが、それでもこいつはその方に一つを手繰り寄せた。リインの勝ちだ、クレア」

告げられた言葉にクレアは黙り込む。認めざるを得ない、こうして結果が出てしまった以上。だが、しかしそれでもと納得し難いような表情を浮かべるが……

「あんたねー、一体何時までそうやって渋っているつもりよ。こいつのこと子どもだ子どもだって言っていた割にあんたのほうがよっぽど大人げないじゃない」

「ちよ、ちよつとセリーヌ！」

「何よ？そもそもこいつが力を手に入れるのなんてむしろ遅すぎる位なのよ。あの女の導きでとつくの昔に《騎神》を手に入れて《起動者》が最低一人は居るんだから。悠長にまだ早いまだ早いなんて言っている場合じゃないのよ。力を手に入れるのが遅くなればそれだけ不利になるのはコイツなんだからね」

早すぎる早すぎると言っているが自分に言わせればむしろお前達は悠長にしすぎなのだ

「わかる？あんたのその過保護ぶりがコイツを逆に殺すのかもしれないのよ？それともあんた、《騎神》が相手だろうとコイツを大人として護ってみせるだなんて言えるの？」

「ッ!？」

起動者となればそれは古来より続く《巨いなる争い》へと巻き込まれる事となるのだから、力を得る事が決まったならばそれは早いほうが良いに決まっているのだとセリーヌは告げる。

「セリーヌー！言い過ぎよー！」

「な、何よ……本来だったらこの辺はあんたが言わないといけない事

なのよ……それをあんたがうだうだと何時までも《起動者》に相応しいかどうかわからないので迷って、ようやく決心したらこいつがまだ早すぎるだのなんだの言い出すから……」

「クレアさんはリイン先輩のお義姉さんなのよ。心配に思うのは人として当然だわ」

「……ふん、悪かったわよ。どうせ私は人の気持がわからない使い魔よ」

それだけ告げると拗ねたようにセリーヌはその場から立ち去ってしまう。自分の過保護さが結果としてリインを不利にする、そう告げられたクレアは動揺を露わに表情を強張らせるが……

「姉さん、セリーヌはあんな風に言っただけで俺は姉さんが俺の事を大事に思ってくれるってわかって嬉しかったよ」

そんなクレアにリインは優しく微笑みながらそう告げる、その笑顔は子どもの頃向けていたただひたむきで純真なものとは違った大人びたもので

「でも、俺は守られるんじゃないって護りたいんだ。この国を、そこに住もう人々を。そして姉さんを、だからどうか力を貸してくれないかな？」

そうして差し伸べられた手をクレアはとって立ち上がり、どこか寂しく切なさそうな笑顔を浮かべて

「……わかりました。私も貴方が《騎神》を獲得するための試練に力を貸しましょう」

「ありがとう、クレア姉さん！」

割り切れない思いを心に残しながら告げられたクレアのその了承の言葉にリインは彼女がずっと見続けてきたその宝石のような満面の笑顔を浮かべるのであった。

北風と太陽

「女子生徒の隠し撮りに取引だと？」

「そうなんだ……」

沈痛な表情を浮かべながら生徒会室を訪れた写真部部長フィデリオの相談内容にリインは顔をしかめる。曰く、後輩のレックスという生徒が女子生徒のきわどい写真を撮り、男子生徒と何やら裏でこっそり取引を行っている。

「話は良くわかった。隠したりせずによく相談してくれたなフィデリオ」

柔和な笑顔でリインはそう、一年の頃より貴族生徒に有りがちな傲慢さなどが欠片もなかった友人へと告げる。安心して欲しいと言わんばかりに。

「ただちにその取引の現場とやらを抑えてその一年生には然るべき処罰を与えよう」

そうして告げられたどこまでも厳格かつ毅然とした言葉にフィデリオは表情を強張らせる。そしてそんな表情の変化に気づきながらもリインは意に介さずに話し続ける。

「無論、こうして部長の君が報告してくれた以上君たち写真部全体の責を問う気はない。当該生徒には教官会議にかけられた上でそれなりの罰が下るだろうが、写真部自体はこの事件に一切の責任はない事、部長たる君が報告してくれたことは俺からも教官には報告しておく」

故に写真部がこの件で活動停止になったりするような事はないと告げておく。どんな組織にもはみ出しものというのは存在する。そんな一部の馬鹿の行いのせいで他の非のない者までとばっちりを食らうのはとても公正とはいえないだろう、こうして部長自ら報告に来てくれた以上写真部自体が関与しているわけではない。故に罪に問われるべきは実行犯たるそのレックスという生徒ただ一人だろうと。淡々とだが断固とした意志を見せつつ。

「な、なんとか穏便に済ませる事は出来ないかな……レックスも悪い

奴じゃ無いんだ。ただちよつと考えなしな所があるだけでさ」

最悪退学も有り得る事を想像して心優しいフィデリオはその後輩を庇おうとするが

「それを決めるのは俺じゃなくて教官方だな。心配せずともうちの教官方は皆、公正な方々だ。彼の行った罪に見合っただけの適切な裁きを下してくれるだろうさ」

取り尽く島も無くリインはそう無慈悲に告げる。穏便に済ませるかどうか、それを決めるのは報告を受けた教官方が決めることだと殊更原則論を淡々と。『革新派製鋼鉄の戦車』、『歩いて喋れる規則』、『堅物野郎』そんな風に揶揄される目の前の友人の評判をフィデリオを思い出す。

それでもなんとか後輩をかばおうとフィデリオが言い募ろうとする

「うーん、リイン君。まずはこつちでそれが悪質なものかどうか判断してから先生たちに報告するのを決めるのはどうかなあ」

捨てる神もあれば拾う神有り、そんな諺を体現するかのよう會長、否トールズの天使たるトワ・ハーシエルが助け舟を出す。普通この手の問題については女子の方が嫌悪感を示しそうなものにもかかわらず、彼女には犯人たるレックスを侮蔑するような色が一切見られなかった。

「……事が事だ。俺は教官に報告して然るべき罰を下してもらおうべきだと思うが」

「でも、先生達の会議にかけられるってなったら先生方が穏便にしてくれても皆から見られる目が厳しいものになっちゃうでしょ？出来るだけ私達生徒会で、生徒同士で解決できるに越したことはないと思うの」

盗撮を行って教官の会議にかけられる。まず間違いなくその時点でレックスは針の筵のような目に合うだろう。女子生徒からはそれこそ汚物を見るような目で見られる事となるだろうし、トールズに所属する女子の気性の荒さを思えば日頃武術訓練で培った成果が存分に発揮される可能性は大いにあった。

「だが、彼はフィデリオが穩便に説得して済ませようとしたにも関わらず誤魔化したと聞く。甘い対応だどつけ上がって再度犯行に及ぶ可能性は十分に有り得ると思うがな」

他者の優しさに甘えて増長する輩、この学院や帝都での活動の際にも時折見かけた眼の前の少女の優しさにつけこみ甘える輩共、そんな存在を思い出してリインはあくまで毅然と対応すべきだと主張するが

「……その時は部長の僕が責任を取るよ。こうしてレックスを庇った身としてね」

どこまでもお人好しな二人の友人の様子にリインはため息をついて渋々と言った体で折れて

「……わかった。じゃあ具体的な方法だがどうする、言葉だけでは反省の色を見せない以上、現場を抑えないとならないが……そうだな囹捜査でもするか」

「囹捜査？」

「ああ、要はその取引とやらの相手だと思わせて証拠を押さえてしまいうわけだ。強引に捕まえても良いが、穩便にという要望だしな」

とはいえ本気になったリインから逃走しきれるものなど学生の中ではフイー位だろうが。氣配察知能力と鍛えられた肉体で凡そ学生を超えた領域の身体能力を持つリインから武術の心得も大してない一年生が逃げ切る事など不可能と言っている。ただ、出来るだけ穩便にという要望なのでリインはそれを汲む事とした。

副会長であるリインに一年生が追い掛け回されているという時点で、その一年が何かをやらかしたと生徒の多くは察するだろうからだ。

「悪くないと思うけど誰がその囹役をやるの？僕はレックスから警戒されちゃっているし、リインもとてもじゃないけどそういうのをやるとは思えないから警戒されるだろうし、トワに至っては女の子だし」「二人うってつけの人材を知っている。如何にもその手の取引にノリノリで手を出しそうな奴が男子と女子にそれぞれ一人ずつ俺たちの学年には居るだろう？」

告げられたリインの言葉に二人は少しだけ考え込んだ後にすぐに思い至って「あー」と声を挙げる。

「……正直、あの二人がこの件に既に関与していないかが俺は不安だよ」

アンゼリカ・ログナーとクロウ・アームブラスト、規則などゴミ箱に捨ててしまえばいい等と置いていそうな二人の悪友を思い浮かべて、リインは遠い目をするのであった。

・・・

旧校舎の前で二人の生徒が陣取っていた、一人は件の対象である隠し撮りの犯人たる一年生のレックス。そしてもう一人はそんな彼と取引にやってきた一年生である。取引を終えようとしていた二人であつたが近づいてくる足音に身構えると

「やあ君かい、素敵な子猫ちゃんたちの写真を一杯用意している子と
いうのは?」

微笑みながら告げられたその言葉に二人は警戒を解く。目の前の先輩は学内でも評判の人物だったからだ。さつそうたる麗人として知られる二年生のアンゼリカ・ログナー。四大名門ログナー候の息女でありながら、そういった貴族らしい尊大さなど欠片もない気さくさと何よりもルール破りの常習犯でも有り、美女美少女には目が無いと専らの噂の人物であつた。

ゆえにこそ二人は警戒を解く、片方は自分と同じ目的でもう片方は新たな上客だとそう判断して。

「へっへっへ、いい写真一杯用意してますよ〜」

「ふむ、代金は幾ら位かな。金に不自由した事はない身なのでね、写真の内容次第では金に糸目はつけないつもりだよ」

「いや〜流石に直接ミラとやり取りするのは不味いと思うんすよ。だから俺はこうして男の夢を皆に分けているわけだから、男の夢には同じ男の夢で返してもらおう事になっているんですよ。こういうのです、
こういうの」

そうして先程渡されたグラビア誌をレックスはアンゼリカへと見せつける。一先ず金銭のやり取りをしていなかった事が確認できた

事でアンゼリカは胸を撫で下ろす。四大名門の人間たる自分が金に糸目をつけないなどと言っているのにこう答えた以上本当に金銭のやり取りは行っていないのだろうか。

「なるほどね、生憎今は手持ちがないんだが……サンプルとして君の持つその写真を見せてもらいたいんだが……かまわないかな？」

待ちきれないと言わんばかりのウキウキとした様子でアンゼリカはそう告げる。その様子はどこをどう見ても演技に見えない、というか真実彼女は欠片も演技する事無く見るのを楽しみにしている。そういう役得があるからこそ彼女は今回の仕事を引き受けたのだ。

「ええ、勿論ですよ」

「ほう、これはこれは……皆素晴らしい表情をしているじゃないか」

「へへ、そうでしょ。苦労したんですよこの辺の写真をこっそりと撮るの。特にそのトワ会長の写真なんて撮った直後に話し相手の副会長が何かに気づいたみたいにくっちの方を振り向いてきたんで生きた心地がしなかつたつすよ」

自分の特技を褒められれば普通の感性を持つ者は基本的に嬉しい。お世辞ではないアンゼリカの純粋な賞賛を受けてレックスはそう得意気にこの写真が隠し撮りによるものであることを暴露する。

「まあリインはその手の鋭さに関しては大ピカイチだからね、そっち方面の機微に関する分のポイントも振っているとしたか思えない領域で」
「いや、本当に苦労したんですよ。あの副会長やたらと鋭くてすぐに察知してくるけど、トワ会長が一番良い表情を浮かべてるのって大体副会長と一緒に居る時なもんなんで。やっぱりせつかくだから一番好い表情を撮りたいじゃないですか」

トワ・ハーシエルが一番幸せそうにしているのはリイン・オズボーンと一緒に居るときだと、そんな事を何気なくレックスは告げて「やっぱり、トワ会長のこの笑顔が向けられる相手って副会長だったのか……」

そして改めて客観的に告げられるその事実にとワ会長フアンその生徒は深い溜め息をついてやるせない表情を浮かべる。目は口程にものを言うという諺があるが、女の子を撮る事には妥協しない男た

るレックスが一番良い表情を浮かべているのは副会長と断言し、そしてその曰く副会長へと向けられているその会長の微笑みは百の言葉よりも雄弁に無情なる現実をその生徒へと突きつけていた。

「はあ……そうだよな。副会長と来たら首席の上に学年最強だなんて言われる位に強い上におまけに宰相の息子だもんな。卒業したらどんどん出世して行くエリートなわけだし、それに比べたら俺なんて……別に強くないし、成績だって普通だし……親も別に宰相でもないただの平民だし……」

男の誉れとも言うべき非の打ち所のないまさにパーフェクトエリートでも言うべきリインの姿を思い浮かべてトワへと片思いしているその生徒は落ち込む。最も彼とて名門たるツールズ士官学院に入学できている以上、知力にしても体力にしても一般的に見れば十分優れていると言って差し支えないのだが、こればかりは比較対象が悪いと言うべきであろう。

「まあ元気出せよ。こればかりは相手が悪いって。しょうがねえよ副会長みたいな人は生まれつき特別なんだからさ」

そんな風に慰めるレックスの言葉を聞いてアンゼリカは少しだけ目を閉じた後に

「ふむ、その勘違いは少々いただけだね」

真摯な瞳で二人を見据えながら言葉を告げていた。

「君のその言い方だとまるでトワがリインが学年最強で強いから、首席だから、宰相の息子で将来を約束されたエリートだから彼の事を好きになったみたいなの聞いて聞こえるね。君がリインと自分を比較して落ち込むのは君の勝手だが、まるでリインの美点がそこだけかのように言うのは友人としては少々見過ごせないね」

「す、すいません……」

「わかってくれれば良いさ。話が逸れてしまったね、どれも素晴らしい写真だがレックス君、これよりも更に過激な写真とかはないのかな？」

「いや、流石にあんまり過激すぎるのはちよつと……俺はあくまでこういう女の子が、なんとかその子らしい表情をしているところを

撮るのが好きなんですよ」

「そうかい、その言葉を聞いて安心したよ」

告げられた言葉にアンゼリカは安堵する。どうやらこのレックスという生徒は常識こそ薄かったものの良心は存在したようだ。この分ならこの素晴らしい才能を教官に突き出さなければならなくなる等という事はどうか避けられそうだと。

「悪いね二人とも、実は私はその副会長の手先だったのさ♪」

その言葉とともにがっしりと腕を掴まれた状態で現れた三人の姿にレックスは青ざめた顔を浮かべ、総てを悟るのであった……

・・・

件の盗撮写真の囹捜査をクロウとアンゼリカ、二人の悪友どちらに囹捜査を任せるのか悩んだリインであったが、もしも盗撮写真が過激な者だった場合出来る限り男の目に触れない方が良いだろうという事で、一応生物学的には女性に分類されるアンゼリカへと依頼する事とした。

そうしてアンゼリカの活躍によってそれほど悪質なものでない事は判明し、改めてその写真の検分を行ったわけなのだが、写真に映る女子生徒の姿は皆生き生きとした素晴らしい表情を浮かべていた。そんなレックスのカメラマンとしての才能を実感せざるを得ない作品を見てトワとフィデリオは思わず感心した様子を見せる。(最も自分も隠し撮られていた事を知ったときは流石に恥ずかしそうな様子を見せていたが)

そんな二人の好意的な反応を見て調子に乗り出すレックスを見てリインは……

「調子に乗るな」

勘違いするなど冷やかな声で戒めの言葉を発していた。その様はまさしく『鋼鉄の戦車』そのものでも言うべき峻厳な態度であった。

「どれだけ作品が優れたものであっても、写っている当人たちの許可を得ていない時点で論外だ。罰の内容は生憎俺が決める事ではない

が、教官会議にかけられた上でそれ相応の処罰が下るだろうから覚悟しておけ」

教官へと報告する。その言葉を聞いた瞬間にレックスは青ざめた表情を浮かべ、フィデリオの方は事前に話していたのとは違い厳しい態度を見せるリインへと戸惑いの色を見せるが

「と、俺としては言いたいところではあるがトワとフィデリオの二人はお前を庇ってな。初犯という事で今回に限り、特別に今撮っている写真をネガまで含めて総て処分する事。そして当然ながら二度と行わないことを条件に今回は内々で処理することとなった」

そうして安堵の表情を浮かべるレックスへと再度リインは釘を差すように

「だが忘れるな。これはあくまで今回限りだ。次に同じ事を行った場合は二人がどれだけ庇おうと俺は断固とした処置をお前に対して取る。その事を努々忘れるな」

本当は俺はお前のような生徒には然るべき罰を下したかったが二人が庇うから仕方がなく矛を収めたのだと言わんばかりの態度で

「……フィデリオに感謝しておくんだな。そいつはもしもお前が同じ事を繰り返すような事をすればそのときは部長として自分も責任を取るとまで言った。くれぐれも、その顔に泥を塗るようなことだけはするなよ」

「こつそり撮った写真でもこれだけ素敵な写真が撮れるレックスくんなら、了承してくれた子たちを撮ったらもつと素敵な写真がきつと取れると思うんだ。今度からはきちんと許可を取るようになしよな」

厳格な様子と天使と称する他無い柔和な表情というどこまでも対象的な様子を見せながらそうして会長と副会長のコンビは立ち去っていくのであった。

・・・

「いつもごめんね、リイン君にばかり憎まれ役を引き受けさせちゃって……」

いつも自分と一緒に生徒会の活動をしていると殊更厳格な様子を見せたり、原理原則論に拘る様子を見せるリインの配慮にトワは申し

訳ない想いを抱いていた。

「別に俺は本心を述べているだけだから君が気にするような事じゃないや」

「もう、そんな事言っつて……わかってるんだよ。リイン君が甘いところがあるから、あえてああして厳しい態度を取っている事くらい……」

トワ・ハーシエルは優しい少女だ。それは彼女の紛れもない美点では有るのだが、世の中には相手の優しい態度を勘違いして居丈高になるでしょうもない輩というのが存在するものだ。そうした厳しさが欠けているところのある自分を隣を歩いている少年は一年の頃から補おうとしてくれていた事をトワはいたいほどよく知っていた。

そしてそれがどうにも申し訳ない。嫌われ役を任せてしまつて自分だけ楽をしているような気がトワとしてはするのだ。

「何度も言うが、俺は俺がやりたいようにやっているだけだし、もしも君の想像が正しかったとしても適材適所に配置されて本人としては特に不満なく充実しているということだけは伝えておくよ」

「そっか……本当にいつもありがとね、リイン君」
「どういたしまして」

そうしてしばらく無言で並んで歩いているとトワはおずおずとした様子で

「あ、あのねリイン君……」

エマちゃんと最近仲が良いみたいだけど、何かあったの？とそんな問いかけを行おうとしたが

「ううん、ごめんねやっぱり何でもない」

そう誤魔化して辞める。

聞いてどうするのだろう、二人が仲が良いのは別に良いことだ。

もしももしもあの夜、真剣な表情でリインの部屋へと入っていたエマとなにがしかのやり取りをリインがしている

そういう関係になっていたのだとしても自分にとやかく言う権利など存在しないではないかとそんな風に思つて。

（うん、そうだよ。こうして友達として一緒に居られる今が、私は幸せ

だもん)

そんな風に今の心地よい関係が崩れる事を恐れて、自分を誤魔化して、トワ・ハーシエルはしばらく大好きな少年としばらく同じ時間を過ごすのであった……

鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》①

目の前に広がる光景にリインは懐かしさを覚える、緋の帝都ヘイムダル。西ゼムリア大陸においても最大と謳われる規模の故郷へとリインは帰ってきたのだ。ただし帰省としてではなく、特別実習としてだが。

「それでは、私はこれで失礼させていただきます。3日間の特別実習どうか頑張ってください。……昨年度も活躍されたリインさんとトワさんがそれぞれ班長を勤めているので大丈夫だとは思いますが」

そんな風に微笑を浮かべながらクレアは立ち去っていく。上司にして恩人でも有る宰相から提案されたある案件を依頼するかどうか、それを未だ迷いながらも、そんな内心を表に出さずにどこまでも淑やかに。そんなクレアに対してⅦ組の一同は好意的な印象を受け、その感想を述べていたのだが……

「ふん、各地の貴族からは蛇蝎の如く嫌われているがな。何せ鉄道さえあれば我が物顔で治安維持に介入する連中だ」

そうユーススが嫌味を口にした瞬間にそれまでご満悦といった様子で姉に対する評価を聞いていたリインの雰囲気が一変する。

「だが、その我が物顔で介入してくれる人達が居なければ俺にエリオット、アリサ、ラウラ、フィーは哀れ窃盗犯の濡れ衣を着せられるところだったわけだ。何せ現地の領邦軍は事もあろうに盗人共とつるんでいたのだからな」

「……確かにそれは由々しき問題ではあったが、果たして鉄道憲兵隊が介入したのは本当に盗人達を捕まえて不幸な被害者を助けるためだけだったのかな？何せどこかの誰かさんがやたらと貴族を挑発するような事ばかりしているからな。そんな誰かさんの手駒に対して過敏になるのは止む得ないことだと思うが？」

介入される側にこそ問題が有るんじゃないかというリインからの指摘にユーススもまた怯むこと無く言い返す。罪なき被害者を助けるためと、果たしてそんな綺麗な理由が目的で介入したのかと。

互いの表情は穏やかでは有るが目は笑っていない、マキアスとユース

シスではなくリインとユーシスが睨み合う事となった常に無い構図に他の面々は困惑する。

「で、でも凄いですよね。鉄道憲兵隊と言えば正規軍でも最精鋭と謳われるところでもありますし、それでいてこの間会った時もすごく優しい方でしたし！リイン先輩のことも本当のお姉さんのように大切に思っていていらつしやるみたいですし！」

正直思い入れが強すぎて若干引くレベルでしたけど等という言葉は内心に飲み込んでエマはどうにかリインの気を逸らそうとする。エマのクレアへの評価は基本的には好意的であったが、どうにも数週間前の鬼気迫る様子でリインをボコボコにしていた光景が頭の片隅にこびり着いており、どこか恐れる気持ちが生じていた。

「ああ、小さい頃から良くしてくれてな。俺にとつては大切なもう一人の姉だよ」

一方のリインはあんな目に遭いながらもクレアへの尊敬と憧れは依然全く変わっていない。姉が自分の身を案じてくれてああした事はよくわかつているし、そもそもああやってボコボコにされる事などヴァンダールの道場に通っていた頃は日常茶飯事だったからだ。

「ふふ、そうですね。実は私にもクレアさんとは全然違うタイプですけど血の繋がらない姉さんが居るんです。……先輩にはお義兄さんと義妹さんも紹介して頂きましたし、いずれ紹介したいなと思います」

エマはそんな風に微笑みながら告げる。魔女である事を明かした以上、姉の事もいずれ目の前の先輩には話さなければいけないだろうとそんな風に考えて。当人にはそこまで深い意図はなかった。ただ姉の事は起動者となる目の前の先輩にとつても重要になってくるだろうからとそんな程度の意味合いだった。

だが、彼女はそれを告げた場所が悪かった。ふと周囲を見渡すとどこか唾然とした様子で自分を見つめる仲間たちの姿があつて……

「エマ……家族を紹介し合うだなんて貴方いつの間にか……」

恐ろしい子！とでも言いた気にはんの一ヶ月の間に見事に正妻の座を脅かさんとしている眼の前の友人の姿にアリサは戦慄して

「……やるね委員長。絶望的だった戦況を此処まで持ち直すだなんて。まあでも委員長は敵には持つていない強力な武器があるもんね」
ジーンと自分の胸を見つめながら告げられるフィーの言葉にエマはきよとんとした様子を浮かべた後に「リインから家族を紹介してもらって、自分もリインに家族を紹介したい」等という発言が周囲にはどう思われるかを悟って

「ちちちちち、違うんです！そ、そういうのじゃなくてですね！ただリイン先輩には色々とお世話になってるので今度姉さんを紹介したいなあと思っただけで特にそういう意図はなくてですね！」

「ふーん、それで私たちには今まで一度も話してくれたこともない血の繋がらないお姉さんの話をリイン先輩には話すだけじゃなくて紹介したいだなんて言っただんだ」

「外堀から埋めにかかるだなんて委員長は中々に策士だね。良い参謀になれると思うよ」

大慌てでの弁解は完全に火に油だった。面白がったアリサとフィーは揃ってエマをからかい出す。

「……すまない、一体何がどうなっているのだ？私には何故エマがあそこまで戸惑っているのかもアリサやフィーが何を言っているのかも良くわからないのだが……」

リインと同じくその手の機微にはとことん疎いラウラは何がなんだかさっぱりわからないといった様子で盛り上がる女性陣の中一人だけ外されたような疎外感を味わい困惑した表情を見せて

「い、いや僕にも何がなんだかさっぱり……」

クレア大尉に鼻の下を伸ばしていたと思ったら、ユースと一触即発の雰囲気になって、そして今度はエマとの交際疑惑が持ち上がりだすという今まで尊敬する先輩に培ってきたイメージが大きく揺さぶれる出来事にマキアスも困惑して

「……副会長殿は中々におモチになるご様子のようにだ」

舌戦を繰り広げる雰囲気ではなくなった事でユースはどこか毒気を抜かれた様子を見せて

「ふむ、委員長には姉が居たのだな」

そんな空気の中でもガイウスは動じること無く常と変わらぬ悠然とした様子を保ち

「あ、あはははは多分姉さんや父さんがこのことを知ったらまた大騒ぎするんだろなあ」

エリオット・クレイグはそんな風に苦笑してと各々異なる反応を見せるが

「ね、ねえリイン君。お義兄さんや義妹さんも紹介したってど、どういう事なの？」

何故自分は此処まで動揺してこんな事を必死に問い詰めているのだろう、別段何か問題のある行動というわけではないのにと理性が囁くが、そんな理性の静止を振り切り胸のうちより溢れ出る感情の赴くままにトワ・ハーシエルはそんな問いかけを行っていた。

そしてそんなトワの様子にⅦ組の面々は黙り込む。どこか面白い様子を見せて囁し立てていたアリサとフィーもまた口を噤む。世話になっていく先輩の修羅場等に放り込まれば後輩としては困惑する他ないだろう。

「ああ、ミリアムとレクターさんの事は君も知っているだろ？ 昨年学園祭の時に君も会った赤毛の飄々とした人と天真爛漫な青髪の子だよ」

しかしそんな周囲のハラハラとした心境とは裏腹にリインは特に動じるでもなくそう泰然とした様子で説明する。君の方が先に紹介されていると本人は全く意図しないながらも見事なまでの宥めの言葉を述べて。

「この間トリスタにちょうどその三人がちよつと事情があつて俺に会いに来ていてね。その時にちょうどエマとも会ったからついでに紹介したんだが……それがどうかしたのか？」

嘘はいつていない。ただ《騎神》という三人がトリスタに来た理由とエマに会うことになった理由を伏せているだけだ。

「え？ その……特別何かあったとかそういうのじゃなくて私もクレアさん達が来ていたなら久し振りに会いたかったなあって思つて」

「ああ、三人もトワには会いたがつていたんだけど……悪いな、三人共

色々忙しい人達だったものだからさ」

「う、ううん。別にいいの、こんなの私のただのワガママなわけだし」
心の中を覆っていたどこかモヤモヤした気持ちが吹き飛ぶのをトワは感じながらそんな風に告げる。

そうして何時もの様子へと戻った二人を見てⅦ組の面々は

「……うーん、やっぱり手強いわね」

「頑張れ委員長、男は大体大艦巨砲主義。腹立たしい事に」

「で、ですから違うんですってば」

「……良くわからんが、仲良き事は美しい事だな」

「……そういえば僕も昨年の学祭の時に会っていたな。そうか先輩のご兄妹というのはあの人の事を指して言っていたのか」

「ふふ、リイン先輩も姉弟仲が良いようで何よりだ」

「はくあんまりクレアさんとばっかり会っていると姉さんがまた拗ねるよりイン」

「……とりあえずいい加減に実習を始めないか」

そんなユーススの言葉を契機によく色恋沙汰で沸き立つ思春期の少年少女達は榮えあるツールズ士官学院生の顔へと戻り行動を開始するのであった……

・・・

実習を始めて手始めに宿泊場所を探しにアルト通りを訪れたリイン達A班は手始めに聞き込みがてら、実家を訪れたわけなのだが、ちようど家に滞在していたフィオナからエリオットとリインの二人は揃って熱烈な抱擁を受ける。そうして他の三人の班員達も紹介がてら少しの間雑談に興じるのであったが……

「ええっ……!?ウチに泊まっていかないの!?!」

宿泊場所を探しているという旨を伝えた途端そんな風にフィオナ・クレイグはこの世の終わりのような表情を浮かべる。

「い、いや姉さん……今回来たのはあくまで士官学院の実習としてだからきちんとケジメはつけないとならないし……」

「でもでも、去年は実習だったけど夜はウチに止まっていたじゃない

！」

「去年は俺もトワも二人揃って帝都出身だからって事で、知事閣下もあえて宿泊場所を用意されなかつたんだらうけど、今回はわざわざ宿泊場所を用意されている以上班長の俺が勝手な行動を取るわけには……」

「ぼ、僕もリインがそうする以上一人だけ勝手な行動するわけには行かないし……」

「気まずそうな様子でそう告げる二人の弟にフィオナは涙目になりながら」

「……クスン、きつと、エリオットもリインもお姉ちゃん離れの年頃なのよね。複雑だけど、見守るのがお姉ちゃんの役目よね……」

「大げさな様子でそう告げるフィオナに二人は乾いた笑いを浮かべながらもなんとか丸く収まりそうな雰囲気にはホッと胸を撫で下ろすが」

「……でも、もうひとりのお姉さんには凄いわつたりな感じだったけど。ユーシスにちよこつと嫌味言われただけでムキになっていたし」「フィー！貴様!?!」

「颯爽とそれを言えばどうなるかわかりつつ丸く収まりかけた場をぶち壊すフィーの言葉にリインが焦るが、時既に遅し。」

「うわーん！そうよね……私なんてピアノや料理位しか取り柄がないダメなお姉ちゃんだもんね……クレアさんみたいにリインに勉強を教える事なんて出来ないもの。クレアさんにお姉ちゃんの座を取られちゃうんだわ……」

「グスリグスリと泣き出した義姉をリインは必死に宥める。これを招いた元凶を睨みつけるもフィーはどこ吹く風とばかりにそっぽを向く。」

「その……どうでしょうか先輩、此処まで先輩の事を思ってくれている義姉さんがいるわけですし、エリオットと先輩の二人は今日はこちらに泊まられては」

「ある人を思い出しながらマキアスはそんな風に告げる。せつかなのだから家族と一緒に過ごされてはどうかと。」

「い、いや……しかしだな……班長としてそういうわけには……」

「我々として先輩が居なければ何も出来ない子どもというわけではない。どのみち夜になればもうほとんど活動はできなくなる。ならばその後どう過ごすか位融通を利かせても誰も文句は言わぬだろう」

「ん。流星に帝都の真ん中で襲われるってこともないだろうし、それなら別に夜は別々に行動したって問題は無いと思う」

告げられた三人からの気遣いの言葉にリインとエリオットは顔をつき合わせて互いに苦笑を浮かべて小さく頷き合って

「……わかった。それじゃその言葉に甘えさせてもらおうでしょう。

姉さん、今日はやっぱり久し振りに泊まっていこうと思うんだけどかまわないかな？

久し振りに姉さんの作ってくれた料理が食べたくてさ」

「うん、やっぱり僕達にとっては姉さんの料理が一番だもんね」

告げられた言葉にグスングスンと泣いていたフィオナは輝くような笑顔を浮かべて

「ええ、ええもちろん！お姉ちゃん、腕によりをかけてご馳走を用意するからね！

皆の分も用意して待っていますから、うんとお腹を減らしてきてね！」

告げられた言葉に5人は了承の意を告げてその場を跡にするのであった。

……

「フィーよ、そなた、わざとあのような事を言ったのか？」

クレイグ家を跡にした後宿泊場所たる遊撃士教会へと向いながらラウラは傍らを歩くフィーへとポツリと語りかける。

「何のこと？」

「先程リイン先輩とエリオットがフィオナ殿と一緒にいられるようにあえてそう仕向けたのではないかとそう問うておるのだ」

あの真面目な二人の性格上、ああでもしないと固辞するだろうと予測してあえて火に油を注ぐような事を言ったのではないかと

「……別に。ただ思った事を言っただけで深い意味はないよ」

「……………」

「ただ、そうだね、家族は出来るだけ一緒にいられるうちは一緒に居たほうが良いんじゃないかってそんなふうな事も少しだけ思ったかな。どれだけ仲が良い家族でも、ある日、突然離れ離れになることが有るんだから。そうなった時に後悔しないように」

「そなたは……………」

告げられた言葉は自分自身がかつてそんな想いを味わったという実体験に基づくかのようなものだったからこそラウラは考え込む。自分自身もかつてある日唐突に母と別れて、もつと一緒に居たかった。母のために何かもつと出来る事があつたのではないか？とそんな後悔を抱いたが故に。

「ま、一番の理由はやっぱりあの堂々とした先輩が戸惑う珍しい光景が見られて面白そうだと思つたからだけだ」

ニンマリと悪い笑みを浮かべながら告げるフィーにラウラはため息をつく。この少女は何時もそうだ、こちらが感心するような事を言つたかと思うとすぐにそれを台無しにするような事を言う。

(やはり、どうにも合わんな)

後ひと押し、後ひと押しで確かな絆を紡ぐ事ができる。そんなもどかしい関係性のラウラとフィーも含めてA班は帝都へイムダルでの特別実習へと取り掛かるのであつた。

鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》②

昼食を終えたリイン達A班はガルニエ地区に存在するホテル《デア
||ヒンメル》を訪れていた。午前中依頼者たる支配人が不在だった
ことでこなせなかった、地下水路の魔獣退治をこなすためだ。そうし
て支配人から内容を確認したリイン達は早速依頼に取り掛かろうと
したのだが、そこで2階から現れた人物の存在で空気が変わる。

《蒼の歌姫》ヴィータ・クロチルダ、帝国最高のオペラ歌手と呼ばれ
る彼女の存在にマキアスとエリオットの二人はすっかり浮かれポン
チと化していた。そして疑問符を浮かべる帝国出身ではないフィー、
地方の人間であるラウラに対して信じられないと驚愕の表情を浮か
べる。

「あはは、有名だなんて言ってもオペラの世界だけだもの。知らなく
たって無理ないわよね」

そしてそんな自分を知らない人間に対しても《蒼の歌姫》は気さく
な笑みを浮かべながら特に怒った様子も見せず笑って流していた。
こういった有名人の中にはとかく自分を知っている事は当然でちや
ほやされるのもまた当然だなどと自己顕示欲が強い者もあり、ラウラ
やフィーのような反応をされるとあからさまに不機嫌な様子になる
ものも居るからだが、目の前の女性はそんな素振りを一切見せない。
そんな様子にリインは好感を抱いた。

オペラに興味の無いリインは生憎精々《帝国時報》の文化欄で見か
けたために知識として知っているというレベルでマキアスやエリ
オットのようなミーハー的な反応にはならなかったが、それでもこの
クロチルダという女性は自らの高名さを鼻にかけたところのない立
派な女性だとそんな風に。

ちなみに余談では有るが、士官学院にてヴァンダイク元帥を初めて
目にした時のリインはちょうど今の二人に負けず劣らずの浮かれよ
うであった。リインに言わせればヴァンダイク元帥こそ史上初の生
者での《リアンヌ・サンドロット勲章》の受賞者。まさにエレボニア
の生ける伝説そのもの。軍属となる事を志す人間ならば拝して当然

等となるのだが、それを聞いていた会ったばかりのアンゼリカは当然ながら引いていた。

ヴァンダイク自身もその事を知れば苦笑しながら「見目麗しい女性よりも、自分のような老人に会って喜ぶのはどうかと思う」等と評する事だろう。

「ヴィータ・クロチルダ、オペラ歌手をやっているわ。よかったらご鼻屑にね」

気さくな様子で挨拶をするとクロチルダはリイン達A班の面々を興味深さに観察する。そうしてリインの顔を見たところで驚いたような顔を浮かべて

「あら……あなたひよっとして……」

「あの、自分が何か？」

少しだけ考え込む素振りを見せると一変して何故か潤んだ瞳でリインを見つめだして

「突然だけど、一目惚れって経験したこと有る？」

「は？」

この人は一体突然何を言い出すんだろうそんな思いがまずリインを満たす。ついで何やら第六感が警告を放っている。言うなればそれは蛇に遭遇した蛙、この手のタイプは自分の天敵であるとなんな本能の雄叫び。しかし、まさかこの状況でこの場を離れる事も出来ずリインは訝しがりながらも返答する。

「いえ、特に経験したことは……」

「そう。それじゃあ一目惚れ自体についてはどう思う？安っぽくて惚れっぽい馬鹿な奴がやることだと思ってる？外見だけで相手を判断していて内面なんかどうでも良いと思ってるって事だとか思ったりしない？」

「きつかけという点では別に特に非難されるような事ではないと思います。何がきつかけで好きになったかなんて事は他人がとやかくどうこう言うものではないでしょうし、重要なのはその後どれだけ互いに理解を深めて、絆を結べるかではないでしょうか？最も未だ交際経験もない若輩者の戯言ですが」

「そう……良かった。そういうことなら誰に憚る必要もないわよね」
そうしてそつとクロチルダはラインに縋るように上目遣いで顔を近づけてきて

「あ、あの、クロチルダさん!？」

「ヴィータって……そう名前で呼んでくれないかしら、ライン君」

「い、いや……初対面の年上の方にそんな馴れ馴れしい事は……」

「年上は……嫌い？」

「いえ、嫌いとかそういうのじゃなくて礼節の問題としてですね……」
「言われる当人がそう呼んで欲しいと言っているのよ……だつたら良いじゃない。私、貴方に一目惚れしちゃったみたいなの。だからどうかお願い……ヴィータと、そう呼んで。好きな人からクロチルダさんなんて他人行儀な呼び方されたくないもの……」

甘い香りがラインの鼻腔を撥る。

蠱惑的な視線が向けながらそつとその柔らかな肢体が押し付けられて

ラインから理性を剥ぎ取ろうとする。

夢も理想も全て放り捨てて目の前の女性に溺れたい、そんな今まで味わったこと無い衝動がラインを駆け巡るが……

「クロチルダさん、そのご好意は嬉しいのですが、貴方のお気持ちには応えられません」

必死に鋼の理性を総動員させてラインはクロチルダを引き剥がす。
「それは……どうしてかしら？」

まさか断られるとは思わなかったのだろう、一瞬呆気に取られたような表情を蒼の歌姫を浮かべる。

その言葉には一世一代の告白を断られたというのにショックを受けたような色はほとんど無く、むしろどこか面白いような雰囲気があった。

あいにくこちらの分野に関しては未だ実戦経験は愚か訓練さえ乏しい新兵未満のラインでは、気が動転していて気づけなかったが。

「俺には叶えたい理想と夢があります。そのためには今は色ごとに現を抜かしている暇はないんです」

きつぱりとそう告げる、本当は誘惑された時に一瞬何故か大切な栗色の髪の少女が頭を過り、なぜだか彼女に申し訳ないという気持ちが生じたのが最後のひと押しになったのだがあえてそれは言わなかった。妙にそれを告げるには何時もと違って気恥ずかしい思いがあったからだ。

「……わたし、これでも尽くす女のもりよ。貴方の邪魔にならないようにするわ。それでも……駄目?」

「なんと言われましても今の俺にはそのつもりはありません」

「ふーん、そっか。それじゃあ今は無理でもきちんとお互いの事を知ればそのうちOKしてくれるかもしれないって事よね」

「い、いえ、ですから……」

きつぱりと断っているつもりなのにどこ吹く風とばかりにめげずにアタックを繰り返すクロチルダにリインはたじたじとなる。戦闘経験は豊富でもこと恋愛関係、それも年上の女性が相手となるとリインはすこぶる弱かった。

そしてしばらくそんな事を繰り返しているとクロチルダはクスリと笑って

「なーんちゃって。嘘嘘。ごめんなさいね、帝都に住んでいる男の子にスルーされるだなんて最近ほとんどなかったものだからついムキになつてからかつちやつたわ。

でも、貴方も悪いのよ。貴方があまりに真面目だからかい甲斐があるんだもの」

「あ、あのですね……」

「ごめんごめん。そんなに怒らないですよ。お詫びと言つては何だけどこれをあげるから」

そんな言葉と共にリインへと手渡されたチケットを見た瞬間それまで呆然としながら眺めていたマキアスがあまりの衝撃に叫び出す「帝国劇場のプラチナチケット!? 皇族や大貴族や関係者の一部VIPしか手に入らないと言われている幻の!」

「ふふふ、本来あげる予定だった子が「俺はオペラになんか興味ない。こんなもんよりは競馬場のVIP席のチケットが欲しいなんて可愛

くない事を言っちゃってね。他にあげる候補も居ないし、貴方にあげるわ。よかつたら、これを機会に贖罪してくれと嬉しいわ、未来の軍人さん。要らなかつたら別に売ってくれちゃっても構わないから。それじゃあ、またね」

爽やかにウインクをして蒼の歌姫をその場を跡にする。

残されたのは困惑した様子でチケットを持つリインと、そんなリインを羨望の眼差しで見つめる二人の男。

そして白けた様子でリインを眺める2人の女子であった。

「ふむ、この場合災難でしたねと言うべきなのか。それとも役得でしたねと告げるべきなのか」

「災難!? 災難なわけ無いだろう! あのヴィータ・クロチルダにあそこまで言われて、おまけにS席のチケットまで貰って!!! 羨ましいにも程がある!!!」

今にも血涙を流しそうな勢いでリインを見つめながらマキアスは叫ぶ。入学までに培った信頼がなければ今すぐに殴りかかって来そうなレベルである。

「良いなあ……良いなあ」

「……先輩って実は弟属性だったんだね」

告げられた好き勝手な論評を他所にリインは貰ったチケットをどうしたものかと考え込む。

そんなに欲しいならお前達にやると言おうとしてリインは既のところまで呑み込む。

チケットは一枚しか無い、そんな事を告げればラウラとフィーではなくマキアスとエリオットの間まで不和を抱えかねないからだ。

さりとて自分もオペラに興味があるわけではないし、そもそも行けるかどうかもわからない。

(フィオナ姉さんにもプレゼントするか)

音楽好きのフィオナならばオペラにも興味はないという事はないだろうし、何より帝都在住のために都合もつけやすいだろう。流石に好意で渡してくれたものを売っぱらうというのは気がとがめる。そんな結論を下すと、浮かれ気味の心を引き締めなおして、リイン達は

地下水路の魔獣退治へと取り掛かるのであった。

「いよいよ表舞台上に上がるみたいだけど気分はどうかしら、千両役者さん」

先程までリイン達と談笑していた蠱惑的な様子はそのままに蒼の歌姫はそう傍らの男に問いかける。

歌姫の言葉だけを聞けば、それはこれから始まるオペラの主演に対して語りかけるもののものであったが、場所と何よりも語りかけた相手の異質さがそうではない事を示していた。

そこは彼女が普段万雷の拍手を浴びている劇場ではなく、帝都の薄暗い地下。そこに一人の仮面をかぶった男が居た。

「別にどうという事はない。鉄道憲兵隊の動きと情報局の動きは既に把握している。《同志G》の計画はおよそ完璧だ。不確定要素が入らない限り私が舞台へ上がるまでもなく今回の作戦の目的は達成されるだろう」

「その下手くそな変装辞めたら？私の前でやる必要はないでしょうに」

「下手くそとはひでえ事言いやがるな。我ながら中々の演技力と自負しているんだが」

取り外した仮面の中から現れるのは銀髪の青年。リイン・オズボーンの掛け替えのない親友の一人たるクロウ・アームブラストであった。

「ブルブランに比べたらまだまだだよ。あの子だったらそんな仮面つけずとも変装が出来るもの。そんな仮面つけていたら素顔に何かありますよって言っているようなものじゃない」

「……流石にそりや比較対象がキツすぎんだろ」

大陸にその名を轟かせる変装の名手《怪盗B》そんな本職と比べられたらまったもんじやないとクロウは辟易とした様子で告げる。

「それで、その不確定要素とやらの貴方の親友や後輩達がなるとそう思ったという事かしら」

「ああ、計画自体は完璧だ。《氷の乙女》の奴なら、マーテル公園が本命だと見抜いてくるであろう事も、そしてその対策としてあいつらを使ってくるだろうという事も織り込み済みだ」

近衛隊との縄張り争いという問題ゆえ自前の戦力たる鉄道憲兵隊が配置出来ない代わりにその手の自由が効くライン達トールズの生徒を投入してくるであろうという事、それらだけでは想定外とは足り得ない。

「その上でもしも彼らが追ってきたとしても《降魔の笛》で呼び出した魔竜の餌食になる、とそういうわけね」

「ああ、そうだ。幾らあいつらが優秀だって言ってもそれで終わるはずだ。まず間違いないな。だが……」

「英雄による魔竜退治、そんな万が一の奇跡を彼らが成し遂げるんじゃないかと、そんな予感が貴方にはあるというわけね」

「ああ、買いかぶりすぎかもしれないねえけどな。あいつらなら……いや、あいつならそんな予感がどこかにあつてな」

ライン・オズボーン。自分にとって最高の友であり、そして決して相容れない敵でも有る存在。

今は自分に及ばぬが、それでもあいつならば何とかするのではないか、万が一の奇跡をそれこそ物語の英雄のように手繰り寄せるのではないか、

そんな想いをクロウは抱いていた。あるいはただの身内鼻負めいた感情なのかもしれないが。

「ふふふ、確かに面白くてからかい甲斐のある子だったわね。私の魅了にも抗ったし。エマも中々に面白い《起動者》を選んだみたいね。最も、私の見つけた《起動者》の方が上だと私は信じているけどね」
「……当たり前だ。あいつはあくまでまだ候補だが俺は《オルディーネ》を手に入れて既に三年経つんだぜ。戦えば俺が勝つさ」

成長著しいとは言え本気を出した自分と親友の間には明確な実力差が存在する。それは奢りでもなんでもない、客観的な事実であった。

「貴方がきちんと本気を出せばね」

「……何が言いたい」

まるで自分の内面を見透かしているかのように告げられた言葉、それがどうにも癩に障ってどこかクロウの声は刺々しいものとなる。

「騙しているって負い目が有るんじゃないの？今はまだ《鉄血》を討つって目的があるから良いけど、それを果たしてしまった後だったら？貴方の目的は鉄血を討つところまでなんでしょうけど、私はその先が本命だからそこで燃え尽きられちゃ困るんだけど」

お伽噺の結末を書き換えること、そしてそのためには貴方の《騎神》の力が必要なのだと告げる自分を導いてくれた《魔女》の言葉にクロウは苦笑して

「わかっているさ。あんたにもカイエンのおっさんにも世話になってる自覚は有る。義理はきっちり果たすさ」

「……そう」

告げられた義理という言葉、もしもクロウが鉄血の子どもたるリインに遅れを取ることがあるとすればそれは即ち想いの差になるのではないか、そんな感慨を抱きながらもヴィータは特に二の句を告げる事無くそこで話を打ち切る。言ったところでどうにかなるものでもないだろうからだ。

「ま、そんな事を今話すのは取らぬ狸のなんとやらって奴だ。今はまずあの野郎の首を取ること、それしか考えちゃいねえよ」

「ええ、第一幕《蒼の騎士の復讐劇》、特等席で見物させてもらうとするわ」

それだけ告げるとヴィータはその場を立ち去っていく。

後に残されたクロウは何かを振り切るように目を閉じて……

浮かび上がる友人たちとの思い出。それらを捨て去るかのように仮面を被る。

気さくな友人、ツールズの学生クロウ・アームブラストそんなものはあくまで仮初の姿だと。

自分は《C》、帝国解放戦線のリーダー《C》なのだそう自分に言い聞かせるように……

鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》③

朝食の場に現れた3人の姿にリインとエリオットは訝しがる。マキアスが妙にぐったりしているのに対して、ラウラとフィー、どこかぎくしゃくしていた二人がすっかり意気投合して友人、いや親友同士といった様子になっているのだ。

そして疑問符を浮かべるリイン達にマキアスはポツリポツリと語る、昨夜あの後ラウラとフィーが心の中を整理するために公園で一騎打ちを行ったことを。そして胸の内を明かしあつてすっかりわだかまりが溶けたことを、そしてそのとぼちちりで自分まで憲兵に2時間あまりの説教を受けたことを。

「その担当した憲兵の方が如何にも古風な方で「お父上があんなにも立派な方だというのに息子の君がそんな事でどうするのだね！」だとか「帝国男子たるもの毅然と止めんでどうする！」だとか言われて本当に大変でしたよ……言っている事自体は正論でしたので無下にも出来ないですし……」

「あ、あははは、お疲れ様……」

「すまぬ、そなたには迷惑をかけた。やはり副委員長という事でな、つい頼りにしてしまった」

「うん、マキアスはとても頼りになる副委員長だからつい甘えちゃう」「む？そ、そうか。ま、まあ僕は副委員長だからな！同じクラスの仲間
の面倒を見るのも仕事の内ではある！」

ラウラの本心からの言葉とそんなラウラの発言に乗ったフィーのお世辞にマキアスはすっかり気を良くする。なんというか人間的には好感を抱けるが、本当に政治家としてやっていけるのかとリインとしては少々心配になる光景であった。

「しかし、そういうことならば相談してくればヴァンダールの道場をお借りできないか、師範代に掛け合ったものを。なんだってまた三人だけでマーテル公園に行ったんだ」

アルゼイドの後継者と《西風の妖精》等とも謳われた一流の獵兵の試合、師であるオリ工師範代ならおそらく門下生の、そして息子であ

るクルトの良い刺激になると判断して快く許可してくれた事だろうとリインは問いかける。その言葉の中には咎める色こそないものの、若干拗ねるような色が含まれていた。

「い、一応何回かリイン先輩のARCUUSにも連絡はしたんです。ただ、何回かけてもお出になられなかつたので止む得なく……」

マキアスとてまず真っ先にこの尊敬する先輩を頼ろうと思ったのだ。悲しいかな自分ではこの二人に力で及んでいないが、リインならば止める事もできると思つて。だが、そんな彼の切なる祈りを空の女神は叶えてくれなかつた。

3回目のコールでも出なかつたところで二人の戦闘大好き系女子は知性と理性を重んじる文明人たるマキアスの静止を振り切り、公園での決闘という暴挙に及んだのだ。

「……そういえば雑念を振り切るためにちようど師範代にお願いして撃剣訓練100本を行つているところだつたな」

昼間にあつたヴィータ・クロチルダからのからかい混じりの誘惑、それに惑わされた自分の不甲斐なさが許せずフィオナ手製の夕食を食べ終えたリインは、挨拶も兼ねてヴァンダールの道場へと赴いた。導力トラムも使わずに街中を疾走しながら。

「なるほど、それで肝心の迷いは晴れましたか？」

昨日見たクロチルダ相手に狼狽する姿で若干失望したラウラだったが、それを乗り越えるために特訓を行つたというリインの言葉を聞き、再びリインを見るその目に輝きがやどりだす。

「ああ、やはり剣術は良い。思う存分に身体を動かし、剣を振るえばそれだけで色香や悩みは吹き飛ぶ……お前達も何か迷つたときはとりあえず思い切り身体を動かすのが一番だぞ。自分と同格の相手との試合、あるいは格上の相手に稽古をつけてもらえるならなおの事良い」

澄み渡る青空のような晴れやかな顔でリインはそう告げる。その言葉と表情にマキアスは悟る、目の前の尊敬する先輩も文明人の皮をかぶつた戦闘民族だつたのだと。

「流石はリイン先輩。全くもつて見事な見識をお持ちだ。昨日は少々

何時もと違った様子で戸惑いましたが、どうやらいつもの自分を取り戻したご様子。安心しました」

なんて冷静で的確な判断なんだ！とでも言いた気な様子でラウラはリインの言葉に安心する。あの不真面目な先輩と友人という事で実は同類なのではないかという抱いたわずかな疑念、それらが霧散して行く。ああ、やはりこの方は尊敬に値する先達なのだと、天然極まりないリインの言葉にどこまでも天然な様子で感じ入る。

「すまないな、女性の色香に惑わされ、後輩を不安にさせるなどやはり俺はまだまだ未熟のようだ。だが、安心して欲しい、それらの迷いは昨夜血と汗と共に振り払った。やはり剣は素晴らしい、振るう事で己を取り戻させてくれる」

「ふふふ、それでは今日もよろしくお願い致します。昨日迷惑かけた分を見事取り戻してみせます、なあフィー！」

わだかまりが溶けた友の方を向きラウラは告げる。きつと今の自分達ならばこの感動を共有出来ているはずだと、そんな風に信じて。

「……………あ、うん。昨日迷惑かけた分はしっかりと取り戻すから安心して欲しい」

しかし、そんな期待は実らない。昨夜熱い友情を結びあった片割れの少女たるフィーは二人のノリについていけないものを感じつつもとりあえず合わせておく。

「……………なあエリオット、リイン先輩って実は結構天然な人なのか？」

今まで見てきた威厳と覇気に満ち溢れた堂々とした尊敬する先輩というイメージをこの数日で大きく揺さぶられているマキアスはポツリと傍らにいるエリオットへと問いかける。

「うん、リインは昔から割りとこういう感じだよ」

思春期を迎えてからのリインはクレアとそういったハプニングが起きる度、昨夜のようにヴァンダールの道場で修行を行い、ボロボロになりながらも爽やかな顔を浮かべて帰ってきたものだった。そのためアルト通りにおいて昨夜全力疾走しながら道場へと向かうリインの姿を見た住人たちは「ああ、帰ってきたんだな」と懐かしさすら覚えたものだ。

「ふふふ、大人びて来たと思っただけどやっぱりこういうところは何時までも変わらないわねリインは」

そして、そんな成長しても変わっていない弟のどこか子どもっぽい部分に姉であるフィオナは食後のコーヒートを淹れながら、嬉しそうに微笑むのであった。

・・・

2日目の特別実習、ヘイムダル港へと魔獣退治に赴いたリイン達はそこで依頼人である《ダンベルト》氏から話を伺う。曰くまたしても地下水路に魔獣が湧いているとのことだ。昨日と昨年度に引き続き、もはや地下水路に湧く魔獣に関しては帝都が慢性的に抱える問題と言って良いだろう。

軍とて手を拱いているわけではない、定期的に魔獣の掃討は当然ながら行っている。何せここはこの国の象徴にして頂点たる皇帝陛下のおわす帝都。当然駐屯している兵士の規模も他の都市の比ではない。しかし、如何せん帝都の地下水路は広大過ぎる上に複雑すぎる。加えてどうしても軍というのは動かすのに様々な手続きを要するもので、どうしても対応が若干遅れる側面が有る。そんな住民生活における痒いところに手が届く便利屋のような立ち位置が支える籠手こと遊撃士と呼ばれる存在であったのだが、あいにくその遊撃士協会はある事情によって現在帝国に於いては大幅に活動が縮小している。そんなわけでツールズ士官学院の課外活動として回ってきたわけなのだが……

「へー兄ちゃん達はそれぞれ、あのオズボーン宰相とリーグニッツ知事の息子さんなのか。さぞかし鼻が高いだろう、あんな立派な親父さんを持つたら」

依頼人であるダンベルト氏から告げられるのは帝都における革新派の人気を改めて実感させるそんな発言。

「え、ええと……はは、そうですね……」

「父は自分の誇りです。父の名を穢さぬように自分も勤めたいと思っています」

なんと答えて良いものやらと控えめに同意するマキアスに対して
リインは慣れた様子で返答する。そうギリアス・オズボーンはリイン
にとって依然変わらず誇りだ。決して全面的に肯定されるものでは
ないだろう、その覇道の過程で親友のような嘆きを生み出している事
も事実だろう。誰も彼もが父に好意的である義務はない。

だが、父が皇帝陛下の信認厚く、目の前の人物のような多くの平民
から絶大な支持を誇る冠絶した指導者である事もまた事実だ。クロ
ウのように犠牲となった者が恨むのは当然だろう、彼らにはその権利
があるし、最大多数の幸福に寄与したのだから黙って我慢しろと加害
者側が言うのは傲慢という他ないだろう。

だが、そうして犠牲を生み出したからといってその総てを否定する
というのもまた公正ではないだろう。父の行っている事が多くの平
民の幸福に寄与しているのも、また揺るぎない実績なのだから。

だからこそリインは父に対する賞賛をありがたく受け止める、親友
のように犠牲となった者も居ること、総ての平民が父を支持する義務
はないのだという事、敵である貴族派にも彼らなりの正義が存在する
ことを心に留め置きながら。

「おう、あの二人は俺たち平民の希望だからな！兄ちゃん達も立派な
親父さんに負けないように頑張ってくれよ!!」

そうして和やかな様子で会話を進んでいたのだが、メンバーの一人
であるラウラの口調に引つかかるものを感じ、彼女が貴族である事を
知ったダンベルト氏は露骨に不機嫌になり打って変わった様子で告
げる。

「貴族なんていうのは腹の底じゃ、俺たち平民を見下しているんだ
ろう？そんな連中の力を借りるのは正直ゴメンなんだがな」と。この
国おける平民と貴族階級の断絶をそのまま物語るかのように。

気が短い程ではないラウラも流石にそうした悪意を正面からぶつ
けられてムツとした様子を見せる。無理からぬ事だろう、彼女にして
も彼女の父である光の剣匠にしてもそのように言われる謂れはない
のだから。

「……落ち着いて下さい、ダンベルトさん。仮に彼女がそうした傲慢

な貴族だったら、鉄血宰相の息子である俺や平民である他の面々ところうして仲良く一緒に居られると想いますか？」

「む、そいつは……」

「知つての通り我が父は貴方のような平民からは支持されている一方、大貴族からは忌み嫌われています。もしも彼女が貴方の言うような平民だからという理由で見下すような人物でしたら、そもそもこうして仲良くなれていませんよ。その手の輩は俺が鉄血宰相の息子であるという理由だけで近づきたがらないでしょうし、俺とてそんな輩と付き合うのはゴメンですから」

高圧的にならぬように柔和な言い方を心がけながらリインは告げる。

「ラウラ・S・アルゼイドは誇り高い真の貴族です。自分は貴族だからという理由で平民を見下すのではなく、自分は貴族だからこそ気高く在らねばならないと思っっている、そんな人物です。その人格も実力も班長である俺が保証します」

「そ、その僕もラウラから平民だからって理由で見下されたような事は今まで一度もありません。むしろ助けられてばかりです」

「……ラウラは剣の腕は確かだし、義理には人一倍厚い。他人を見下して仕事に手を抜くような真似は絶対しない」

「……その僕もみんなと同様です。貴族だとか平民だとかを抜きにして、ラウラは一人の人間として尊敬に値する人物だと思っています」

告げられる怒涛の擁護にラウラは感動した様に目を丸くし、ダンベルト氏は何かを考え込むような様子を見せた後に

「……いや、悪かった。俺とした事が実に心の狭い事を言っちゃったみてえだ」

そうして手渡された水路の鍵を受取り、依頼内容の説明を行つてくれたダンベルト氏にラウラは感謝を述べる。そんなラウラの真摯そのものと言った様子に余計にダンベルト氏は先程の自分の態度を恥じ入るような表情を浮かべて

「……一方的に決めてかかって失礼な事を言っちゃった。どうか許してくれ。」

貴族つてのは平民とは決して相容れないと思っていたが、貴族にもいろんな奴が居るんだな」

気まずそうな表情を浮かべながら素直に謝罪の言葉を述べたその事実は彼が決して狭量な人物ではない事を示すものだっただろう。だからこそ、それはすなわちより一層今の帝国における平民と貴族の断絶の深さを物語る。特別狭量ではない、自分の非をきちんと認められるだけの器を持った人物が「ただ貴族である」というだけで反感を抱き、「平民とは相容れない存在」だと思つていふ事なのだから……

「……………」

だからこそ、その事実はリインにも重くのしかかる。

平民と貴族の間の断絶の深さ、それに父の貴族への挑発的な態度が無関係とは決して言えないのだから。

(いや、その点についてもはや自分にどうこう言う権利はないのかもしれんな)

何故ならば自分は《騎神》の力を革新派のものとしようと行動しているのだから。

それはすなわち、貴族派と戦う事を選んでいるのと同じ事。

貴族にも尊敬に値する立派な人物が居る事、個人的に友誼を結んだ多くの友がいて、そういつた者も貴族派の中にはいる事を承知しながら、結局、自分は鉄の絆で結ばれた兄妹達を頼る事を選んだ。

革新派であることを、鉄血宰相の息子である事を選んだのだから。

「特にフィー、そなたがあんな風に言ってくれるとはな。正直嬉しかった」

「…………別にお礼を言われるような事じゃない。事実を言っただけだから」

そんな自分の内心とは裏腹に目の前の後輩たちはすっかり打ち解けた様子でその絆を見せつける。

それは間違いなく昨年、自分も手に入れたもので、どこか懐かしさ

を覚えるものだったからリインは微笑ましそうにその光景を見つめる。

「さて、それじゃあ行くでしょう。」

ラウラ、フィー。昨日の分は今日の働きできっちり返してもらおうかな

「承知した。しっかりと名誉挽回させてもらおうでしょう」

「……その内、ツールズ最強コンビの座を私達で先輩たちから奪ってみせるから楽しみにしてて」

「ほう、言うじゃないか。ならば俺も二年生最強コンビの片割れとして一年最強コンビに恥じない働きをしないとな」

立場を超えた友情。絆。全くもって素晴らしい事だ。

それは確かに多くの事を自分に教えてくれた。

だが、同時に多くの苦しみも齎す。

自分はいずれ、そんな絆で結ばれた友と敵同士になる時が訪れるという事に気づいてしまったから。

(乗り越えてみせるさ……！)

それでも知って良かったとリインは思う。

今味わっている苦しみは自分が成長するために必要不可欠のものだったはずだから。

この苦しみを乗り越えた先にこそメッキではない、真の《鋼》の強さを得られるとそう信じて。

真実とは、時として自分の想像すら超えて残酷なのだという事を知らないままに鉄血の子は無情なる世界へと飛び立とうとしていた

……

鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》④

聖アストライア女学院。

それは帝都に存在する貴族の子女のみが入学が許される由緒正しき名門の女学院。

現在帝国の至宝たるアルフィン皇女が在学している事もあり、非常に厳重な警備が敷かれており、通っている生徒の父兄であろうと事前のアポイントメントなしでは門前払いを喰らう、帝都においては皇帝の居城たるバルフレイム宮の次に一般人が立ち入ることは困難と言っても過言ではないだろう。

そんなアストライア女学院にて今リイン達は……

「初めまして。ツールズ士官学院の皆さん。僕の名はセドリック・ライゼ・アルノール、一応この国の皇太子を務めています」

「私はセドリックの姉のアルフィン・ライゼ・アルノールです、弟共々よろしくお願い致しますね」

《帝国の至宝》とも謳われる二人の皇族へと拝謁するという予期せぬ栄誉を賜っていた。

あまりの衝撃にフリーズした思考をどうにか再起動させ、慌てて挨拶をしていく一行であつたがリインが挨拶をすると皇太子は満面の笑顔を浮かべて

「ああ、貴方がリインさんですね！クルトから良く話を聞いていました。自分にとって尊敬するもう一人の兄のような存在だと。こうして会えて本当に嬉しいです！」

「……光栄です、殿下。私こそこうして殿下とお会い出来たのは望外の喜びです。正直、今日だけでこの一年分の幸運を使い切ってしまったのではないかと思う次第です」

「そんな、大げさですよ。僕など兄上に比べれば未だ皇族としての責務も満身に果たせていませんし……」

「もう、そんなに気にするものでなくてよセドリック。お兄様と私達は10以上も歳が離れているんだから、これからよこれから」

皇太子でありながら尊大さなど欠片もない謙虚な、されどどこか自

分を不甲斐なく思っているような様子を見せる双子の弟を皇女はそう励ます。《帝国の至宝》という呼び名は決して虚飾というわけではないことをその光景からリインを実感する。なんというか、愛する祖国の皇族が今、目の前にいる二人のような人物でよかったと不敬ながらそんな想いを抱く光景であった。

「とりあえず、何時までも立ち話も何ですから、どうかおかけ下さい皆様。すぐにお茶を用意いたしますから」

「ひ、姫様！私が淹れますから！」

「あら、良いのよエリゼ。貴方にはここまで案内役をお願いしたんだから、私もこの位は働かないとね」

微笑みながら優雅な手つきでアルフィン皇女は紅茶を淹れていく。

「さあ、どうぞ皆様。何分まだまだ修行中の身。お口に合えばよろしいのですが」

紅茶を呑む際の正しい作法はどんな感じだっただろうか。一応その手のマナーや作法も二人の教師には教わったが、流石に皇女殿下下ずから淹れて頂いたお茶を飲む機会などリインとしても初めてである。若干何時にも比べてぎこちない動きになる。それは大半の他の面々も同じだろう、ユーシスだけは流石と言うべきか洗練された所作を見せているが。

「……大変美味しゅうございます」

これはお世辞でなく本音だった。最もフィオナの料理で育ったリインは馬鹿舌というわけではないものの、紅茶には然程詳しいわけではないので舌の肥えたユーシス等は別の意見もあるかもしれないが、彼とて皇女殿下に淹れて貰ったとなれば舌の方を無理にでも合わせるだろう。

「うーん、やっぱりエリゼさんに淹れて貰ったほうが良かったんじゃないの？せつかくの良い茶葉なのにこれじゃ蒸らし過ぎて台無しだよ」

そんな中、一人セドリツク皇太子だけはそんな風に苦笑しながら中々に辛辣な論評を行う。流石は皇太子というべきか舌が肥えている上に当然ながら相手が皇女だからといって気後れした様子は一切

ない。まあ双子の姉弟なのだから当たり前なのだが。

「……皆様、どうやらセドリックはもう要らないとの事ですので、無礼な弟の分もどうぞ存分に召し上がって下さいね」

「ごめんごめん。謝るから拗ねないでよアルフィン」

「全くもう、私相手だけじゃなくて他の女性相手でもそれ位しつかり物が言えれば良いのだけど。今日だって此処に来るまでの間にちよっと他の生徒にキヤーキヤー言われた位で顔を真赤にしちやつて情けないわよ」

その言葉にリインはこの庭園につくまでの間に散々生徒たちから好奇の視線で晒された事を思い出す。自分達であるの騒ぎ立てようだったのだ、セドリック皇太子殿下が来たともなればどうなったかは推して知るべしという奴だろう。

「わあ、皆さんの前でそれを言わないでよお！僕だって、来年は皆さんと同じくツールズ士官学院の一員になるわけだし、もう少したくましくなりたいと思ってるんだから……」

するとセドリック皇太子はどこか羨望の色の籠った眼差しをリインへと向けて

「リインさんはツールズで首席を務めているというお話でしたよね？此処にいらしたときも堂々とした態度でしたし、僕もリインさんみたいになれたら良いのですが……」

そう言われる事自体は面映くも嬉しくないと言えば嘘になるが、どうなのだろうか。目の前に居る皇太子が自分のようになってしまつたらそれはそれで嘆く人々がそれなりに居るのではないか、そんな感慨をリインは抱いた。

「恐縮です。自分もツールズに入学したばかりの頃は未熟も良いところでしたが、こちらのトワを始めとする掛け替えのない友人たちと出会った事で大きく成長できました。自分と彼女は入れ違いとなつてしましますが、殿下にも、そうした出会いがあればと祈っております」
そうしてリインはⅦ組の面々の方へと視線を向けて

「そういうわけだから、頼むぞ後輩諸君。俺たちが居なくなつた後もしつかりな」

「うふふふ、その時はよろしくお願い致しますね皆さん。どうぞ弟をビシバシとしごいてやつて下さい」

微笑みながら告げられたアルフィン皇女の言葉にⅦ組一同は緊張した面持ちで頷く。そうしてセドリツク皇太子はせっかくの機会とばかりに先輩たちへと学院生活の質問をしていたのだが……

どこからともなくリユートの音が響きだす。開かれたドアと共に現れたのは二人と同じく輝く黄金色の髪を持った青年が現れる。美青年と呼んで何ら差し支えない整った顔立ちをしているのどこか三枚目な印象を受けるのは本人の人徳という奴だろうか。

いぶかしがる一同を他所に待っていたと言わんばかりに二人の至宝はその現れた金髪の青年へと輝く笑みを浮かべて

「兄上、お待ちしていました！」

「お疲れ様です、お兄様。今お兄様の分のお茶も淹れますね。……それともせっかくの茶葉を台無しにしてしまう私などよりもエリゼに淹れて貰ったほうが良いかしら？」

この帝国においてこの二人から兄と呼ばれる人物はただ一人。

「わ、悪かったからそんなに根に持たないでよお、アルフィン」

「ははは、エリゼ君に淹れて貰うというのも良いんだが、ここはせっかくだから我が愛しの妹に淹れて貰うとしようかな」

慈愛に満ちたその眼差しと言葉は発した人物の弟と妹に抱く愛の深さを示すものであった。

母の異なる弟と妹、平民の母だったために皇位継承権を持たない自分に対して皇位継承権を有する二人。

そんな事情が有りながらも彼の弟と妹に抱く愛には何一つとして暗いものがない、彼は真実兄として惜しみない愛を二人に対して抱いていた。

そうしてその皇子は弟と妹に向けるのはまた異なる優しい笑みをリインたちへと向けて

「オリヴァルト・ライゼ・アルノール——通称“放蕩皇子”さ。そして、トールズ士官学院のお飾りの理事長でもある。よろしく頼むよ——トールズ士官学院の諸君」

アストライアの聖餐室、そこでリイン達トールズの面々は3人の皇族と食事を共にするという栄誉に預かっていた。そこで語られたのは「VII組」の設立が理事長たるオリヴァルト皇子の発案だったという事実。各地を巡る事で帝国を担っていく若い世代に現実にある様々な《壁》が存在することを知り、自ら主体的に考えてもらえるようになって貰いたいというそんな願い。そして口々に告げられるVII組の生徒たちからの《VII組》に入ることが出来て良かったという言葉を聞き、理事長たる放蕩皇子は顔を緩めて

「そう言ってもらえるだけでも、私も作った甲斐があったというものだ。VII組の発起人は私だが、既にその運用からは外れている。それでも一度、君たちにあつて今の話だけは伝えたいと思った。そこに可愛い弟がせっかくだから先輩たちの話を聞きたいと、微笑ましいお願いをしてきてね。それを聞いたアルフィンがこうして顔を合わせる場を用意してくれたというわけさ」

「すみません、皆様には僕のワガママで忙しい身だというのにご迷惑をおかけしてしまって」

「いえ、迷惑などともありません」

「そうですよ！こうしてお会い出来てむしろ本当に光栄の至りというか、まるで夢でも見ているんじゃないかという心境です!!」

トワ・ハーシエルは彼女にしては珍しい事に非常に浮かれていた。市井の民が皇族にお目にかかれる機会など夏至祭の時のパレード位なのだからそれも当然だろう。

「ふふふ、VII組の設立と運用にあたってはただでさえ多忙を極める身でありながら、君たち二人には特に苦勞をかけてしまったね。トワ・ハーシエル君にリイン・オズボーン君」

「どうかお気になさらず。むしろ得難き経験を積ませていただき、殿下には本当に感謝しております」

これは別にオリヴァルト皇子に対する気遣いではなくリインの本心であった。特別実習、そして昨年度その予行演習として行われた

数々はリインにとって得難き財産となっているのだから。

「えへへへ、私もリイン君と同じ気持ちです。……帝国の各地を實際に目で見て肌で感じる事で机の上だけでは学べない事をたくさん勉強させてもらって本当に有り難いです」

「やれやれ、ヴァンダイク学院長から話は聞いていたが本当に話通り、学生の鑑と称する他無い二人だね。君たち二人と比較すると学生時代の自分がとんだ不良生徒に思えてくるよ」

冗談めかしながら告げられたオリヴァルト皇子の話に一同は苦笑するが、彼の親友がこの場に居ればおそらくこう言っただろう「その二人と比較せずとも絶対評価でお前は不良生徒だっただろうが」と。

……

「それにしても皆さんは本当に仲が宜しいですね。羨ましいです、僕もツールズに入学したらそんな友人が出来るんでしょうか……アルフィンにエリゼさんのような友人が出来たように……」

談笑を続けているとふとセドリック皇太子は姉とその友人、そして特科クラスⅦ組の面々の仲睦まじさを見てポツリとそんな不安を溢す。そこにいるのは皇太子という以前に、新しい環境に本当に馴染めるのだろうかと不安がる、そんな年相応の少年の姿があった。

「ご心配されずとも殿下ならきつと出来ますよ。何しろ今ではこうして談笑している面々にしても散々自分や彼女の手を焼かせてくれたのですから。」

これまでの会話でも殿下はご自身が皇太子という立場でありながら、その立場を振りかざすような真似は一切なさりませんでした。そんな殿下ならばきつと……掛け替えのない友人が得られるはずです。何しろ、鉄血宰相の息子である私が四大名門ログナー侯爵家のご息女と親友になれた位なのですから」

だからこそリインもまた臣下としてではなく先輩としての言葉を述べる。それほど上手くもないユーモアを交えながら。

「それに……そのような言い方をされるとクルトの奴が落ち込みますよ。殿下は自分が傍に居るのでは不安なのだろうか」とね」

「そうよセドリック、エリゼが私相手にこういう風に接してくれるま

でどれだけかかったことか。ミュラーさんがいるお兄様もそうですけど、クルトさんという友人が最初から居る貴方は十分に恵まれているじゃない」

苦笑しながら告げられたリインの言葉とそれに乗ったアルフィン皇女の言葉にセドリック皇太子は苦笑して

「あはは、そうですね。僕にはクルトという友人がいるんですから。その時点で知り合いが誰もいない人達に比べてはるかに恵まれていますね」

そんな風に談笑しながらもリインはふと思う。特化クラスⅦ組をオリヴァルト皇子が設立した理由、それはこの場で語られた内容だけでなく弟であるセドリック皇太子の為という兄心があつたのではないかと。

トールズ士官学院は入学した時点でどのような大貴族あるいは皇族であろうと平民生徒と対等であるという建前となっている。

皇族の男子が必ずトールズに通う習わしとなっているのも、そんなトールズに通うことで平民、貴族の別なく将来この国を背負うにあたって得難き多くの知己を得る事を狙ってでもある。

だが、そうは言っても「わかりました。そういうことならば皇太子だろうと自分は気にしません」等と言える者は圧倒的少数派だし、躊躇いなくそんな態度を取れるのは皇族という存在の重みがわかっていない物知らずか、あるいはよほどの大物位であろう。

皇太子ともなれば平民生徒は遠い存在として、貴族生徒は将来自分が仕える相手と見なして、どうしても対等の友を得るとするのは難しくなる。

生まれ持った立場や価値観の差異というのはそういうものだ、それを乗り越えるのは容易ではない。

そしてオリヴァルト皇子はそんな容易ではない立場の差を乗り越えるきっかけをこの特科Ⅶ組で用意したかったのではないだろうか。

ユースとマキアス。四大名門アルバレア公爵家の息子と革新派のNO2たる帝都知事の息子である二人が貴族派と革新派という立

場を超えていがみ合いながらも敬意を抱く好敵手となったように。

ラウラとフィー。アルゼイド子爵家の令嬢と猟兵出身という対象的な価値観を有する二人が互いに認め合い、信頼できる友となったように。

弟御であるセドリック皇太子にもそんな立場や価値観を超えた友を一人でも多く作れるように、彼が皇帝となった時に直面する多くの《壁》について考える事が出来る機会を設けられるように、そしてそれらの思惑を抜きに恋に部活に友情といった甘酸っぱい青春を皇太子としてではなくただのセドリック・ライゼ・アルノールとして謳歌出来るように。

「うーん、それにしても考えてみると不公平じゃありません？どうしてお兄様にはミュラーさん、セドリックにはクルトさんがそれぞれいらつしやるというのに私にはそういう守護役の方が居ないんですか？」

「い、いやその辺りは僕に言われても……」

「はははは、件のクルト君にもそれこそ君たちのように双子の姉でも居れば良かったのだろうがね」

深い絆で結ばれた至尊の血を引く、三人の兄妹。そんな三人の様子に誰もが皇室に対する敬愛の念を強めながら、一行はしばし楽しい一時を過ごすのであった……

鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》⑤

「やあすまないねリイン君、わざわざ君だけ残ってもらって」

「いえ、どうかお気になさらぬようお願いします。それで一体話しようのは何でしょう?」

宴も酣と言った様子でリインはオリヴァルト皇子へと呼び出され、一人その場に残っていた。曰く、「他の人間を交えずに一对一で話したいことがある」との事である。

「うん、率直に聞こうか。君は、《騎神》の力をどう扱うつもりなんだい?」

問われた内容はリインの予想したとおりであった。先の会話からも目の前の皇子がヴァンダイク学院長と懇意なのは明らかだったのだから。当然自分が話した内容も学院長から伝えられたのだろう。

「それを決めるのは自分ではありません。強大な力は国家によって管理、運用されるべきでしょう」

首輪に繋がれていない犬は野犬として駆除されるが飼い主に忠実な猟犬はそれなりの待遇を受ける事が出来る。とかく国家の狗という言葉は侮蔑の言葉として使われるが、リインとしては権力と見るとやたらと噛みつきたがる狂犬に比べればはるかにマシだろうというのが個人的な意見であった。

「ふむ、士官学院生としては模範的と言っている回答だね。だが国家と言ってもそこには様々な思惑が存在する。君も実感していることとは思いますが、貴族派と革新派の対立は日に日に増すばかりだ。――下手をすれば内戦になるのではないか、そんな危惧が声高に叫ばれる位に。」

そんな中で鉄血宰相の息子である君が《騎神》という力を手に入れることの意味、君ほどに優秀な若者ならば当然理解しているだろう?」

「ええ、無論です殿下。革新派は勢いづき、逆に貴族派はますます革新派への警戒を強めるでしょうね。元々純軍事的に見れば革新派が優位なのですから。それこそ警戒は恐怖へと変わり、貴族派の暴発を生

むかもしれない」

《騎神》それ自体の力もだが、何よりもそれを解析して得られるであろう技術的な恩恵。それを革新派が獲得すれば帝国正規軍は更に強大となるだろう。そしてそれは貴族派にとつては脅威以外の何物でもない。

「そこまでわかつていながら、君はそれでも《騎神》の力を手に入れる事を選んだ。それは何故かな？ 私はその理由が知りたいんだ」

「それは無論、我々革新派にとつてそしてひいてはこの国の大きな益となるとそう判断したからです」

「……君にとつては革新派が、そして君のお父上である宰相閣下こそがこの国を導くに相応しい存在であると思っていると、そういう事かな」

「はい、殿下。無論、父は非の打ち所のない完全無欠の超人では有りえません。当然非難する声とてあるでしょう、不安視する声もあるでしょう。それらが必ずしも外的な物であるとは自分とて思っておりません」

かつて父を盲信して父を非難するような者は私欲に凝り固まった大貴族共等と思っていた頃とは違う。非難されるべきところとてある事はリインとて認識している。父の行いによつて何の罪もなくある日幸福を奪われた存在が居ること、大貴族の中にも尊敬に値する人物が居ること、それらをリインは知ったのだから。

「ですが、それでも自分は父の成そうとしている事、貴族や平民と言つた生まれではなくその人物の持つ実績によつてこそ評価される社会という理想が間違っているとは思いません。……他ならぬ殿下ならばそれは理解できるのではないですか？」

オリヴァルト皇子は卓越した才覚を有しながら、母が平民であるというだけで長男であるにも関わらず皇位継承権を有する事ができなかった。二人の弟と妹に抱く彼の愛には何一つとして偽りは無いだろう、だが思うところがないはずがないのだ。

「……そうだね、確かに君の言う通り、別段皇帝の座に興味があるわけではないが、それを抜きにしても私とて四大名門のお歴々に思うとこ

ろがないと言えば嘘にはなる。だが、同時に私は宰相閣下にも不安を抱いている。——彼は一体、この国をどこへ導こうとしているのかそんな不安をね」

「……殿下は父を、オズボーン宰相閣下を危険な野心家だと思つていると、そういう事でしょうか？」

「そこまで言う気はない、彼が傑出した才覚と確かな実績を有する優れた指導者である事は確かだろう。」

しかし、彼のやり方はあまりに性急であり過激に過ぎる。そして彼のその傾向は加速するばかりだ。

私はそこにどうしても不安を抱かざるを得ないのだよ、彼が《騎神》という力を手に入れたとして、それを果たして国を護るためだけに用いようとするのか、とね」

そうしてオリビエは告げるべきか否か、幾ばくかの葛藤を抱えたかのようにわずかな間目を閉じて……

「《リベールの異変》については君も知っているね」

「はい、導力停止現象という異常事態に見舞われた友邦たるリベール王国に殿下とゼクス中将閣下旗下の第三機甲師団がいち早くに駆けつけてリベールのクロードディア王太女や現地の遊撃士と協力して見事解決なされたという。殿下のご活躍を耳にした時は帝国人として誇らしく思いました」

「ああ、表向きはそういう事になっている。だが実態は違う、あの時第三機甲師団が派遣されたのは「百日戦役の報復としてリベールは新兵器を開発したのではないか？」そんなこじつけを建前とした恫喝と示威行為を宰相閣下によつて命じられたためだ」

「!?」

告げられた真実にリインは瞠目する。リベールとエレボニアの雪解けの象徴、そんな風に教えられていた美談にそのような裏があつたことをこの時初めて知つたからだ。無論、実情は公式発表ほどに綺麗なものではない国家としての打算があつたのだろうとは思つていたが、それでも打算にまみれたものであつたとしてもそれはあくまで友邦への救援を企図したものだと思つていたからだ。

「……お言葉ですが殿下、エレボニア帝国の宰相の役目はあくまでエレボニア帝国を繁栄へと導くことです。それが国益に適うというのならば、時としては非情とも言える手段を取らなければならぬのが指導者という立場なのは殿下の方が自分などよりわかりでしょう。そして、そのための《必要悪》を担う事こそが軍人の役目という事も。」

絞り出すような声でリインは師であるレクターより教えられた無情な現実を伝える。すなわち国家と国家の間には真の友情など存在せず、国益と国益がかち合えばそれ自国の利益を優先するのは当然である。そんな政治の世界において凡そ人としての正しい道徳を放り捨てる事が必要だという事を。

「ああ、無論君の言うことも理解できるとも。国家の運営においてどうしても《必要悪》と言われるものを飲み干さざるを得ないことはね。総ての人間を救う等というのはそれこそ《空の女神》にしかなし得ない事だ」

世の中には優先順位というものが人によって存在する。誰とて赤の他人よりも家族や友人と言った人物の幸福を優先するものだし、それは特に非難されるようなものではない。そして自分の所属する共同体の利益を優先する事は政治家として当然の行いだ。

「だが、君は言ってくれたね。帝国人として友邦であるリベールの救援へと赴いた私の行いを誇りに思うと。」

それは、つまり君自身も友邦の危機に於いてつけ込むのではなく、手を取り合えるというのならばそれこそが理想だと、そう思っているという事ではないかな？」

「それは……」

「私の語っている事は確かに理想論であり、綺麗事なのだろう。皇位継承権のない皇子、そんな権威はあれども権力はない無責任な立場だからこそ言える言葉なのかもしれない。」

だが、それでも私は愛する祖国が他国とも憎しみ合い蹴落とし合うのではなく、手を取り合える未来が来ることを望んでいる。

国家を運営するに辺り生じる避けようのない《必要悪》、それを君が

担う覚悟があるという事も理解したつもりだ。

その上で私はあえて言おう、君はまだ軍人でも何でも無い、未だ学ば立場にある学生に過ぎないのだと。力を手に入れたからと言って、君が何もかも背負い込む必要はないんだよ、リイン君」

表情を緩めて穏やかな視線で自分を見つめるオリビエのそんな綺麗事にリインは押し黙る。

反論の言葉は……紡げなかった。何故ならば目の前の皇子が語っている言葉を他ならぬリイン自身が綺麗だと思ってしまったから。

そして同時に大人として未熟な子どもを案じる真摯な思いを感じてしまったから。

「改めて聞かせて欲しい、リイン・オズボーン君。

軍人としてでもない、鉄血宰相の息子としてでもない、それら全てを取り払って君が何のために《騎神》という力を振るいたいのかを。

何のために力を求めたのかを」

《騎神》という力、それを目の前の少年が手に入れる事を止めるつもりはオリビエには無かった。

既にその力を手にした存在もあり、この手のものを放っておかない組織をオリビエは良く知っていた。

リベールがそうだったようにこの帝国でも何らかの計画が動き始めているのだろう。そして目の前にいる少年はその運命に巻き込まれてしまった。

おそらくは獅子心皇帝の代より、いやあるいはそれよりもはるか前、この国が始まった時から仕組まれていた巨いなる運命に。

だからこそ、オリビエは力を手に入れる事は止めようとしな、基よりこの少年がその気であるのなら自分とヴァンダイクが如何に止めてもすぐさま彼の父、そして軍や政府の知るところになるのだから。

故に出来るのは目の前の少年が力に呑み込まれないよう、何のために力を手に入れようとしたか、それを思い起こさせる事位だ。

「自分は……俺は……たくさんの人を護りたいです。理不尽な目に合って泣く誰かがいないように。大切な人を失って悲しむ人を少し

でも減らせる様に」

そんな青臭い綺麗事こそが自分の抱いたきつと最初の願いだったのだと。そう告げるラインの言葉にオリビエは微笑んで

「そうか……どうか、その気持を忘れないで欲しい。そして卒業するまでの短い間でもいい、一人の若者として思う存分に青春を謳歌して欲しい。それが理事長としての私の偽りなき願いだ。

私が、君と話したかった事というのは以上になる。長い時間付き合わせてしまつて悪かったね、ライン君」

「……いえ、頂いた金言しかと胸に刻み込んでおきます」

纏いかけていた鋼の心に再びわずかな亀裂を生じさせ、深々と一礼を行うと鉄血の子はその場を立ち去つていくのであった……

鉄血の子と緋の帝都《ヘイムダル》⑥

オリヴァルト皇子との会談を終えて女学院を出たリインを待つていたのは、どこか複雑そうな表情を浮かべた敬愛する義姉のクレアであった。曰く、協力をお願いしたい事があるとのこと、他の面々は既にヘイムダル駅の一角にある鉄道憲兵隊の司令所に集まっているとの事である。

そしてそこで語られたのはノルドで対峙したギデオンと名乗る男が所属している何がしかの組織が夏至祭を狙って何がしかのテロを行うのではないかという事、そしてその対策のためにリイン達に「遊軍」として働いて貰いたいというものであった。

「なるほど、そういうことならば俺達はマーテル公園で待機していた方が良さそうですね」

与えられた資料と情報を整理したリインはそう結論づける。テロリストが狙ってくるならばまず間違いなく此処だろうと。

「……何故、そう判断したか理由を聞いても良いですか?」

2年前までに幾度も経験した教え子の回答を採点する教師のような表情をクレアは浮かべて問いかける。

「第一に、マーテル公園での園遊会にはアルフィン皇女殿下とリーグニッツ知事閣下が参加されます。」

例のギデオンという男の発言からしてテロリストは帝国そのものというよりはオズボーン宰相閣下への怨恨という線が高い。となれば目的は革新派を失墜させるという政治的な動機の線が高い。一般市民を標的とするものよりはそういった要人狙いで来る可能性が高いでしょう」

一般市民を標的としたテロは市民からの恐怖もだが同時に怒りと憎悪も買う。そして怒りに駆られた帝国人はテロリストに対して断固とした処置を取る、強いリーダーを求めよう。そしてギリアス・オズボーンはそんな強いリーダーの象徴とも言える豪腕で以て知られる指導者である。一般市民を標的にしてしまえば、むしろ火に油

となつてオズボーンに対する支持を逆に強める結果となりかねないのだ。

だが要人、それもこの国の象徴とも言える皇族が危機に晒されたとなれば帝国人はテロリストへの怒りを抱くと同時に、危機に晒した警備体制にも同時に厳しい目を向けるだろう。加えて革新派のN02と謳われるリーグニッツ知事が凶刃に倒れるような事になればその時点で革新派にとっては当然ながら大打撃だ。

「ですが、皇族の方々が出席されるのは何もマーテル公園だけではありませんよね。

オリヴァルト殿下がご出席される帝都競馬場、セドリック皇太子殿下がご出席される大聖堂。

特にセドリック皇太子殿下は次代の皇帝となられるお方。我々の失点を狙うというのならばそちらも十分に考えられるのでは？」

それだけでは不合格ですよと告げられる師の言葉にリインは頷きながら続きを述べていく

「ええ、なので当然そちらも狙われる事となるでしょう。まずは市内各地において散発的な騒ぎを起こして混乱させた上で、それに乗じて皇族の方々を狙った襲撃を起こす、そんなところでしょうか。

——ですが、その上で『遊軍』である自分達が最も警戒すべきはマーテル公園だと考えています」

「それは、知事閣下が参加されるからですか？」

「いいえ、理由は至って簡単です。マーテル公園の警備には近衛隊が出張っているからです」

「……大好きなお姉ちゃんが指揮取っていないから危ないって言うわけ？そりやいくらなんでもシスコンが過ぎるんじゃないの？」

学院を出た際の自分の顔を見た時と隣にいるいけ好かない女を見た時のあからさまな態度の違いを見せた教え子に対する教官の揶揄にリインは頭を振って

「違います、サラ教官。確かにリーヴェルト大尉は極めて優秀な将校であると自分は思っていますが、別段リーヴェルト大尉が指揮を取っていないからそのまま警備に穴があると思つていうわけでは

ありません」

鉄道憲兵隊が正規軍から選抜された精鋭部隊なら、近衛隊とて領邦軍から選抜された精鋭部隊。皇族を守護する彼らの士気は旺盛だし、決して無能では在りえない。

「指揮系統が憲兵と近衛隊で分割されている場所であるという事、それ自体が付け入る隙になっていくという話です。指揮系統の確立と一本化という基本中の基本が出来ていないんですから」

例えば襲撃が起きた際に持ち場をあくまで堅守するのか、それとも襲撃箇所の援護に向かうのかといった判断。こういった際に兵士は指揮官の指示の下に動く。だが、マーテル公園ではその指揮系統が分割されている。近衛隊の指揮官が指揮権を有するのはあくまで自らの部隊である近衛に対してのみである。非常時の際に周辺の警備を行っている憲兵隊へと命令を下す権限が彼らには無いのだ。

加えて言うのなら貴族派と革新派の対立もある。プライドが高く、皇族を護るのは我らの役目であると鉄道憲兵隊からの協力要請を拒否した彼らが果たして有事の際に、すぐに一度突っぱねった相手に対して援軍を要請する事が出来るのかは怪しいところであった。

「更に言うならばマーテル公園には魔獣がうじゃうじゃとひしめく帝都の地下道へと繋がっているところがあります。そして、件のギデオンは魔獣を操ると思しきアーティファクトを所持していたのが確認されています」

あの時自分がみすみす取り逃がしてしまったがためにという内心の忸怩たる想いを心のなかで押し殺しつつリインは続けていく

「以上の事から、一番『遊軍』たる我々の力が必要となるのは園遊会が開かれるマーテル公園だと自分は判断致しました、リーヴェルト大尉」

「……ええ、ほとんど文句のつけようがない回答です。本当に頼もしくなりましたね」

数週間前にまだ小さな子どもだと思っていた眼の前の少年に喫したまさかの敗北。

それはクレアに否応無しに可愛い義弟が何時までも自分に護られ

るだけの子どもでない事を突きつけた。

そして今もまた、そんな義弟の成長を実感させる光景を見て嬉しさと同時に寂しさを味わっていた。

「これも一重に、6年間も素晴らしい教師の教えを受けたおかげですよ」

今の俺があるのは貴方のおかげなんだとそうリインは感謝の言葉を目の前の大切な義姉へと伝える。

「……ケルディックの時も思ったけど、本当になんというか何時もと露骨に態度が違うわね」

「実はシスコンの年上好き」

初日にユースとやりあった事、女学院から出た際の露骨な態度の違い、そして今も見せている様子も相まってケルディックの時にはまだ疑惑の段階であったリイン・オズボーンのシスコン疑惑は女性陣の中で確信へと変わっていた。

「しかし、分析的的確さと判断力の高さは流石と言う他ない。やはり大したお方だ」

「流石は首席殿と言ったところか」

だがそんな中でも理路整然とした内容と判断にツールズ士官学院首席の座は決して伊達ではないのだと示した事で彼の威厳はかろうじて保たれていた。

「ふむ、そうなると俺たちB班は競馬場と大聖堂の方を警戒した方が良いという事かな」

「……競馬場の方に関して言えばそこまで心配はいらないと思うぞ。何せオリヴァルト皇子殿下ご自身が卓越した武芸の腕を持つ上に、殿下のお傍には守護役たるミュラー少佐がいらっしゃるからな」

ヴァンダール流皆伝であり、ナイトハルト少佐とも並び称される帝国正規軍若手の双壁たるミュラー・ヴァンダール。彼が常時警護についている以上、それこそ光の剣匠クラスの隠し玉がテロリスト側に居る等といった事態にでもならない限り、ことオリヴァルト皇子の身に關してはまず方が一は有り得ないだろうとリインは考えている。逆

に、もしもミユラー少佐が遅れを取るような手練が敵に居た場合、現状の自分達では相手取るのはまず不可能だろうとも。

「確かに、あの皇子様ふざけているようで隙がなかった。かなりの実力者。ぶつちやけ私達よりも強いかも」

「ふむ、放蕩皇子等と揶揄されているが中々どうして大したお方だったな」

「ところで君たち、結局協力するって事で良いのかしら。ラインが受ける気満々だからそういう流れになっているけど、これはあくまで要請であって命令ではないわ。受けるも、受けないも君たちの自由よ」

「……サラさんの仰る通りです。協力を依頼している側が言うのもなんですが、これは本来我々軍人が行うべき仕事です。皆さんはあくまで士官学院生、未だ学ぶ立場にあるのですから」

そう自分達での判断を促すサラの言葉に乗っかるようにクレアもまたどこか釘を刺すように告げるが……

「トールズ士官学院特別実習A班——テロリスト対策に協力させていただきます」

「同じくB班、協力したいと思います」

先程まで会話をしていた仲睦まじき3人の皇族の笑顔、それが彼らの決断を後押しした。

あの素晴らしき人達の笑顔を守るのだと、そう誰もが決意して。

「……ありがとうございます。皆さんの勇気と献身に心よりの感謝を。それでは明日はよろしくお願い致します。くれぐれも無理だけはどうかしないように」

「何度も言うけど、君達はまだ学生の身。庇護を受けるべき立場なんだからね。もしもの時は自分の身をきちんと優先するように、良いわね」

そんな、どこか特定の人物に対して特に強く念押ししているような二人の言葉で会議は締めくくられるのであった……

かくして？英雄？は舞台へと上がる

7月26日。帝都ヘイムダルは夏至祭に湧いていた。

10時より始まった皇族3人のパレードはつつがなく終了し、その後バルフレイム宮を出立してヘイムダル大聖堂、帝都競馬場、マーテル公園へと到着。時刻は15時30分。特に問題が起きる事もなく、夏至祭の初日は終了しようとしていた……

「良かった〜昨日クレアさんから話を聞いた時はどうなるかって思ったけど何事もなく終わりそうで」

「ああ、後30分で園遊会も終わりだ。だからこそ注意しろ、ここからが一番危険な時間帯だ」

「……だね。あと少しで無事に終わる。そういう緊張が緩んだ時こそが襲撃する側にとっては最大のチャンス」

人間常に集中している事は出来ない。どうしてもふとした気の緩みが出る時というのが存在する。基本的に守勢に回る側というのは攻撃する側に比べて不利なのだ。攻撃側は目的の時間のみに意識を集中すれば良いのに対して、守る側は常に気を張りつづめていなければならぬからだ。

そうして告げられた言葉にエリオット・クレイグが慌てて気を引き締め直すと、巨大な地響きが鳴り響くと同時にマーテル公園に多数の魔獣が出現していた。

・
・
・

パトリック・ハイアームズは浮かれていた。

いけ好かない寄せ集めたるⅦ組の面々が警備に駆り出されている中、自分は園遊会へと優雅に出席するというのは先月有り得ないはずの醜態を晒してしまった彼の自尊心を癒やすのに大いに貢献していた。

皇女殿下を遠目に眺める事しか出来ないⅦ組の面々と、こうしてハイアームズ家の人間として皇女殿下にお目通りが叶った自分というのはまさしく四大名門の一員たる自分と所詮は寄せ集めでしかない

彼らの学院を出た後の立場の差というものをこの上なく顕していると思えたからだ。

それはⅦ組の面々だけではなく、一応は先輩に当たるあの副会長にしても同じ事だ。やれ首席、学生最強、鉄血宰相の息子等と言っても結局の所は自分のような上に立つべき者に使われる使いつ走りとしての力でしか無いのだ。

だからこそ、先月たかだか実技で負けた事程度何時までも引きずるような事ではない、自分が養うべきはそのような匹夫の勇ではないのだからとそんな風に自分を慰める。

そして彼が浮かれているのはそれに加えてもう一つの理由が存在した。

エリゼ・シユバルツァー、清楚可憐という言葉を体現したかのような少女にパトリック・ハイアームズは一目惚れをしたのだ。貴族の中に於いては最下級の男爵位でこそあるものの、シユバルツァー男爵家は皇室とも縁が深い列記とした帝国貴族。

彼女の両親であるシユバルツァー男爵夫妻においても社交界において特に悪い噂を聞いた事はないし、何よりも目の前の少女はどうやら皇女殿下からかなりの信認を得ているようだ。

自分が三男で家督を継ぐ可能性がまずないことを考えれば、自分の相手としては決して有り得ないというわけではないだろうと常に無く浮かれた様子で。

彼女にしても四大名門たるハイアームズ家の自分に見初められて、断るはずがないだろうとそんなどこまでも実家頼みの心境でそれとなくアプローチをかけていた。

そんな人生薔薇色と言わんばかりに浮かれていた彼は今……

「う……あ……」

「御機嫌よう、知事閣下。招待されぬ身での訪問、どうか許していただきたい」

常の尊大さをどこかへやった様子で、ただ目の前の光景へと恐怖し立ちすくんでいた。

クリスタルガーデンにて催されていた皇族主催の園遊会。粛々と進行していたこの会は、無粋な乱入者によってその静寂さを打ち破られる事となる。

ガーデン内の石畳の一部が地下から爆破されて、侵入してきたその男の名は《ギテオン》、かつてノルドにてリイン・オズボーンが会敵し、取り逃がしてしまった大魚である。

複数の同志と共に乱入した彼はすぐさま今回の最重要目的たるアルフィン皇女の身とその傍にいた付き人たるエリゼ・シュバルツアーを確保し、これを拘束。

これを阻止せんとしたレーグニッツ知事は左肩を撃たれて負傷した。

そしてパトリック・ハイアームズはそんな状況にあつて皇族を守護するという貴族としての誇りを示す事も、ただ惚れた少女を護ろうとするという男の意地を示す事も出来ずに、ただただ怯えて立ちすくんでいた。

四大名門のハイアームズ家の三男坊として育つた彼は武を尊ぶ帝國貴族としての英才教育によってユースにも匹敵するだけの宮廷剣術の腕前を有していた。

賊がその姿を表した時、もしもエリゼ・シュバルツアーへと熱心にアプローチをかけていた彼が、皇女をその身を呈して護ろうとしたレーグニッツ知事のように、エリゼを護ろうとしていたら、最重要目的たる皇女はいざ知らず、エリゼだけは今ああして賊の手に落ちずに済んだかもしれない。だが、彼はその瞬間にただ怯えるだけで何も出来なかつた。

もしも命を落とす事になったら、そんな人として当たり前の恐怖に立ちすくんで、他ならぬ匹夫の勇を持ち合わせてなかつたが故に。

その事自体で彼を特別責める事は出来ないだろう、自らの命よりも誇りを優先する気高さ、そして他者の命を優先できるような献身。それらを持っている事は賞賛に値するが、だからといって出来ない人物を責める事は出来ないのだから。何故ならば、出来ないことの方が当たり前なのだから。

だが

「……殿下は関係ないだろう！二人を解放したまえ！」

自らの命を狙うテロリストの言葉、それを聞いても臆する事無く、人質とされた二人を庇おうとする平民の知事のその姿が彼の心を揺さぶる。

他ならぬ平民である彼が、武術を収めているわけでもない人物が、その身を呈して皇族を護らんとしている。

それにも関わらず、誇り高きハイアームズ家の一員たる自分がただ見ているだけで良いのかと。

「ククク、それは応じられぬ相談だ。こちらのお二方には君たちの陣営の致命的な失点となって頂く。命までは奪うつもりはないがね」

先程告げた言葉通りレーグニッツ知事に対しての恨みはさして無いのだろう。どこか冷静な、されど己が勝利を確信した笑みを浮かべながら首謀者たるギデオンは大仰な仕草をしながら告げる。そうしてそのまま二人とは異なり、あの男の盟友と謳われる人物の命を無慈悲に刈り取るべく指示を下そうとした瞬間

「殿下と、そして我が娘を返してもらおうか不屈き者よ」

無手でありながら不退転の覚悟を抱き、賓客の一人である一人の貴族が姿を顕した。

「ほう……確か貴方は……」

「父様！危険です、私の事は構いませんからどうかお下がり下さい!!!」
「ご息女の言われるとおりだ。私たちの狙いはあくまであの男にある。別段貴方に対して特に思うところはないのだよ。ここは一つ、退いて頂けると手間がはぶけて有り難いのだがね」

そうして前へと出た貴族の男性は安心させるような笑みを娘へと向けた後に、打って変わった静かなされど鋭い眼光を狼藉者へと向けて

「笑止！皇室に忠義を捧げし誇りある帝国貴族として、そして娘を愛する父として、どうしてこのような暴挙を見過ごす事が出来ようか。

このテオ・シユバルツァー！例え我が身と引き換えにしても娘と殿下を救い出してみせよう！」

(……………！)

高貴なる者の義務を体现する真の貴族のその姿にパトリック・ハイアームズは何よりも打ちのめされる。

その意志と覚悟を宿った背中なんと眩しい事か。あれこそが真の貴族なのだ、その勇姿はどこまでも未熟な少年の心へと焼き付けられる。

そして翻って今の自分のなんと不甲斐ない事か。仰ぐべき皇族が、好意を抱いた少女が危機に晒されていながらこのまま何も出来ずにただ指を咥えて眺めているだけでいいのか？——良いはずがない。

決意と共にパトリック・ハイアームズは小さな、されど彼にとつては大きな一歩を踏み出した。

あふれる恐怖を必死に堪えながら、今にも震えだしてしまいそうな足を誇りによって律して。

「君は……………」

「貴方は……………」

エリゼ・シユバルツァーはその前へと現れた青年の姿に驚きを隠せなかった。

何故ならばその人物はどこまでも実家であるハイアームズ家の威光を頼みにした様子で今日自分に対して散々言い寄ってきた人物だったのだから。

そしてエリゼ・シユバルツァーのパトリック・ハイアームズに対する印象は好意的なものではなかった。

領主は領民に寄り添って生きるべしと幼き頃より両親に教えられ、皇女という立場にありながら尊大さとは無縁の大切な友人を持った身として、どこまでも実家だよりといったパトリックの姿はひどく傲慢で幼稚に思えた。

決して性根から腐っている人物というわけではないのだろう。されど昨日会った同じツールズ士官学院の面々の誇り高くも凜々しく、立場を超えた絆に結ばれた様子を、鉄血宰相の実子という立場でありながら貴族である自分に対して何ら含む様子も見せず誠実に接していた大人びた青年の姿を思い出すと、家柄へとしがみついているパト

リックの様子は余計にその尊大さが鼻についたのだ。

だからこそパトリック・ハイアームズから好意めいたものを感じてもエリゼとしてはただ困るばかりであった。ハイアームズ家の人間という事で決して無碍には出来ない、されど人間的にはどうしても好感を抱けない。どう接すれば良いのかと、そんな具合に。

「シユ、シユバルツァー男爵の仰るとおりだ。皇女殿下とエリゼ嬢を今すぐに解放したまえ。そうすれば、誇り高き帝国貴族として不敬なる狼藉者にも格別の慈悲を以て接してやろう！」

「ククク、あまり無理はされないほうが良いのではないかな。可哀想にそんなにも震えて声が上がずっておられる。怖いならば怖いで素直に下がっておられた方がよろしいかと。あいにく、私達は見ての通りの狼藉者。――ご実家の威光は我々には通用しませんぞ？」

「ふん、皇女殿下を攫おうとしている貴様らのような不屈き者どもにそんな事は端から期待していない。僕が今、この場に居るのはハイアームズの威光を頼ってではない。誇り高きハイアームズ、その名に恥じぬように僕自身が在るためだ！」

されど今、目の前の青年の見せた勇気のなんと眩しい事か。

恐怖を押し殺し、震えながらも告げられたその言葉は先程告げられた歯の浮くような百の美辞麗句よりもはるかにエリゼ・シユバルツァーの胸を打った。

「……濟まないが、君たちのその忠道に付き合っている暇はないのでね。その気高き姿には、この国を憂う者として感じ入るものもあるが、されど邪魔立てするということのなら容赦するわけにはいかない。」

しかし、ギデオンにその覚悟は伝わらない。片手を軽く上げ、それを合図に武装集団たちの軽機関銃の銃口が一斉に向く。加え、二匹の魔獣も唸り声を上げて近寄って来た。

時間を食ったと、所詮その程度にしか考えていなかった。否、状況だけ見ればそうだろう。今回の作戦の本命たる此処を襲撃したメンバーは同志たちの中でも選りすぐりの精鋭であり、気前の良いスポン

サーに恵まれた事もあつて、武装も実力も帝国正規軍にとて引けを取らないという自負がある。それに対してあくまで賓客たる彼らは当然ながら武器を持ち込む事など出来るはずもなく、当然無手である。

誇りではどうにも出来ない無慈悲なる力によつて気高き二人の貴族の骸が作られようとしたその刹那

「……そこまでだ」

脇役達が稼いだその時間の間に、主役がついに舞台へと躍り出た。

……

「やってくれたな……！」

双剣を構えながら守護を宣誓するかのように三人の前へと出たリインは今にも飛び掛かりたい衝動を必死に抑えながら・射殺さんばかりの眼光を目の前の敵へと向けていた。

リイン・オズボーンは憤激していた。

このような暴挙へと及んだ目の前の敵手に。

そして何よりも、それを許してしまった自分自身の不甲斐なさに。

こうなることは読めていた。わかっていたのだ。

だが、それが一体何になるといふのか。予測出来たところでそれを防げなければ意味がない。

自分にもつと権限があれば……

あるいは此処に来るまでに交戦した魔獣共を一蹴できるだけの力があれば……

そしてあのノルドの時に目の前の男を捕らえる事が出来ていれば……

今、ああして皇女殿下とエリゼ嬢をみすみす賊の手に明け渡す事など無かつたはずなのだ。

「現れたな、トールズ士官学院……ノルドでの仕込みに続いてまたもや。だが、今回ばかりは邪魔されるわけにはいかん」

そうして二体の魔獣をけしかけてギデオンは人質二人を連れてその場を立ち去る。それをリインは歯噛みしながら見るしか無い、迂闊に飛びかかれれば背後に控えたVIPの命が危ないからだ。まずは目

前の魔獣を掃討しなければならぬ、可及的速やかに。

「総員、戦闘準備。事は一刻を争う。速攻で片をつけて奴らを追うぞ！」

「一応！」

・・・

「此処までだ。皇女殿下とシュバルツァー嬢を大人しく解放してもらおうか」

地下道を走りながら、ついに賊の姿を捕らえたリインたちは、取り囲みながら一応の降伏勧告を行う。即座に仕留めにかからないのは一重に暴発して人質に危害がかかることへの危惧と荒事に不慣れであろう二人の少女の前で流血沙汰は出来る限り、避けたほうが懸命だろうという判断からだ。

「ククク、恐れ入った。ここまで早くにあの魔獣を仕留められるとはな、流石に想定外だった」

その未だ余裕を有する様に警戒を行いながらも、リインはある確信を抱く。目の前のテロリスト達にはすぐさま人質である二人を害する意志がないのだと。それは何らかの奥の手があるからかもしれない、だがそもそも皇女殿下へと銃口を突きつけられて「武器を捨てろ」と言われれば、その奥の手を切らずともこの場を切り抜けられる可能性はあるはずなのだ。無論、人質は生きてこそ意味があるものだからそれを指摘してこちららもむぎむぎとそれに従う気はないが。

しかし、この場において敵はアルフィン殿下の友人であるエリゼ・シュバルツァーも確保している。

皇女自身には傷をつけずとも、「殿下の大切なご友人がどうなるか保障しかねる」とでも言われれば友情に篤い皇女がそれを見捨てる事が出来るはずもない。皇女直々に「エリゼを助けるために要求を飲んで欲しい」等と言われれば、こちらとしても打つ手が無くなるところだった。

だがどうやら現状目の前の犯人達は人質を有効活用するつもりはどうやらないようだ。その事にリインは安堵する。ノルドでの言動等から目の前のギデオンと名乗る男は父に対する憎悪を燃やす一方、

皇族に対する畏敬は持ち合わせていると思っていたが故の半ば賭けだった、どうやらその賭けは実ったようだ。

それは未だ何らかの奥の手を有しているが故の余裕によるものなのかもしれないが、ならばその奥の手を破った瞬間こそが人質を取り戻す絶好の機会だと心する。

「ああ、本当に危ないところだったよ。後わずかに追いつかれるのが早かったらどうしようもないところだった。だが、空の女神はどうやら我々に微笑んでくれたようだ」

視線で合図を送られたギデオンの配下たちは何らかの薬品を人質二人へと嗅がせて昏倒させる。曰く、これからの光景はご婦人方に見せるにはシヨックが大きいだろうからとのことであるが、これはリインにとつても好都合。これで躊躇いなく、やれるというものだ。

響き出す笛の音。そして辺りに轟音が鳴り響いたかと思つと現れたのは巨大な骨だけとなった怪物。

数百年も前、かつて帝都を死の都へと変えた魔竜、“ゾロIIアグルーガ”。神話と思われた怪物が屍のままに蘇つたのだ。

「ハハハ、どうだ！これこそがかつて帝都を死の都へと変えた魔竜！かの偉大なるヘクトル帝が自らの命と引き換えにやつとの思いで討ち果たした伝説の存在！どう足掻いても、お前たちが勝てる相手ではない!!!」

本来であればこれ呼び出した時点でギデオンがこの場に残留する由はない。

だが、彼はこの場に留まらざるを得ない理由が存在した。魔獣を操る事ができる《降魔の笛》は決して無制限かつ無条件に操れるわけではない。操れる有効距離と時間はその魔獣の強大さに反比例して落ち込んでいく。

生きている魔獣ならば、その場を離れるまで自分達を襲わないように命令して置くだけでいい。だが、今回蘇らせた魔竜は元を正せばはるか昔にヘクトル帝によって討伐された存在。それを強引に蘇らせた形であるため、《降魔の笛》の効力が切れてしまえばその時点で元の屍へと戻ってしまうのだ。

「将来有望な若者たちの命を奪うのは些かに心苦しいが……まあ、あの男の息子に協力した自らの不明さを呪う事だ」

自らの勝利を確信してギデオンはそう告げる。

例え屍と言えどもこの存在はこれまでとは桁が違う。

伝え聞く《光の剣匠》や《アルノールの守護神》、そして《黄金の羅刹》といった人の形をした怪物共ならばいざ知らず、目の前の学生ごときでは勝ち目などあるはずがないと。

「魔、魔竜だなんて……そんなのお伽噺の中の存在だとばかり……」

「こ、こんなの相手にどうすれば……」

「……敵戦力不明。動きが読めない」

「……クツ、このような巨体相手となるとどうすれば」

その巨体の発する威容と得体のしれぬ不気味さにⅦ組の面々が気圧されかけたその時

「狼狽えるな！そして良く見ろ、奴の背後に控えるアルフィン皇女とエリゼ嬢の姿を！」

指揮官先頭。そんな言葉を体现するかのように気圧されかけた後輩たちを鼓舞するべくリイン・オズボーンは前へと踏み込み後輩たちを叱咤する。

「そして思い出せ！彼女たちと昨日交わした言葉とその笑顔を！」

尊大さなど欠片も存在しない気さくで天使のような愛らしさを持ったアルフィン皇女。そしてその親友たるエリゼ・シユバルツァー。

昨晚初めて会っただけの浅い付き合いに過ぎないが、それでも彼女たちのその姿は、生命を賭けて護ろうと誓うに値するものだったはずだ。

「思い出せ！絞り出すような声で娘の身を自分達へと託したシユバルツァー男爵の姿を！」

自らの無力さを噛みしめるかのような苦渋を飲み干す様子で「どうか娘を助けて欲しい」と頼み込んだ貴族も平民も関係ない、娘を思う一人の父親の姿。

そんな当たり前の幸福を護るためにこそ自分達の手に入れた力は存在するのだと。

「臆するな！我ら是有角の獅子の紋章を掲げるもの。ただの巨大な骨の塊など恐れるに足らん!!」

告げられたその宣誓に四人の瞳に意志の力がやどりだす。それは恐怖を知った上でなおそれを乗り越えんとする勇氣。

図らずもパトリック・ハイアーズムがほんの少し前に自らの殻を打ち破り、示したものと同じ黄金色に輝く意志の輝きであった。

「クツ……諦めの悪い。行くが良い、暗黒時代の魔物よ！」

この愚かで哀れな夢見がちな若者たちに現実というものを教えてやるがいい！」

攫われたるは帝国の至宝。

対峙するは魔竜。

舞台はすべて整った。

「行くぞー！総員、死力を尽くせ！」

さあ、《灰色の騎士》の英雄伝説を始めよう。

《魔竜》退治

巨大な威容を誇る魔竜それを相手に、臆する事無く前へと躍り出たのは三人。

リイン、ラウラ、フィー。トールズ士官学院に於いても屈指の実力者達が果敢に魔竜へと挑みかかる。

「まずは様子見」

懐に忍び込ませていた閃光弾を魔竜の眼前へと炸裂させる。凡そ生物であるならばしばらく視覚と聴覚が使い物にならなくなる轟音と閃光が炸裂する。

しかし

「……ま、予想はしていたけどやっぱり効かないか」

生物相手ならば効果靦面のそれもすでに死骸である魔竜に対しては意味がない。半ば予想は出来ていたが、それでもその光景にフィーは辟易とした表情を浮かべる。フィー・クラウゼルはラウラ・S・アルゼイドのような正道を往く武人ではなく、あくまで猟兵である。

その戦闘スタイルも真っ向からねじ伏せにかかるものというよりは、敵の虚を突いたり、攪乱したりする事を前提としている。どちらの戦闘スタイルも一長一短が存在する故、一概にどちらが秀でていくというものではない。だが、今回の敵が自分にとっては何れもやりにくいタイプに位置する事をフィーは悟らざるを得なかった。

「鉄砕刃！」

「クロスエッジ！」

続いてヴァンダールとアルゼイド、帝国における二大流派の剣士がまずは小手調べとばかりに、その戦技を叩き込む。放たれるは全身全霊の力の込められた大剣による袈裟斬りと双剣による十字斬り、並大抵の敵ならばこれだけで終わるであろう、痛烈な一撃を足へと叩き込まれても魔竜は微動だにしない。屍体である魔竜には当然ながら痛覚も存在しないため声をあげる事さえしない。結果、二人の攻撃は魔

竜を構成する骨の一部を砕く程度に終わった。されど砕いたのは足の骨、この巨体を支えるともなれば当然四肢にかかる負担とて並大抵のものではないはずだ。故に一つ脆いところを作ってしまったえば、そこから一気に崩れるのではないかと目論んだのだが……

「な!？」

「ハハハ、どうした。伝説に謳われし魔竜だぞ。まさか骨を砕いた程度でその動きを止めるとでも思ったのか!？」

骨が砕かれた事など関係ないと言わんばかりに魔竜の周りを覆っている瘴気が砕かれた骨を繋ぎ止めていく。

状況は明らかにリインたちにとって不利だった。こちらは人間である以上体力にも集中力にも限度がある、これだけの質量の敵ともなると一撃貰っただけでこちらは瀕死になりかねない。故に前衛を務める三人は的を絞らせぬように耐えず動き続けているわけなのだが、当然体力の消耗は激しい。

「エリオットー!」

「うん、今回復するね皆。ホーリーソング!」

発動するのはエリオットが最も得意とする回復系の導力魔法。響く音色と共に静かな水の調べが広がり、三人を癒やしていく。しかし、その直後にそれまで前衛の三人、魔竜から見るとうっとおしく飛び回る羽虫といったところだろうか、それを相手にしていた魔竜はエリオットの方を向いて

音の出ない咆哮。同時に、口から漆黒のブレスを吐き出した。

「……えっ?」

導力魔法を使った直後の硬直、それを狙い済ましたかのように高速で飛来したそれをエリオットは躲す事が出来ない。既に屍体でありながら、回復役を狙いに来るといふ戦術的めいた行動を取ったのは死してなお魔竜の中に宿る戦いの遺伝子によるものだったのだろうか。しかし、それは当然織り込み済みである。

「アダマスシールド！」

エリオットの傍らに控えていたマキアスが得意とする地属性の導力魔法により、障壁を展開する。支援役たるエリオットを護る事、それが今回のマキアスの役割であった。

「ありがとうマキアス、助かったよ」

「気にする事はない、今回の僕に出来るのはこの位しかないんだからな」

こと戦いに於いて自分が出来るのはこうして後衛を護る事、後は銃によつて牽制の攻撃を入れる事位なのだから。そして今回の敵には銃による牽制など凡そ意味がない。そんな現状にマキアスは齒噛みする。今、前衛で死闘を繰り広げている三人に比べて自分のなんと弱いことかと。しかし、無いものねだりをしては仕方がない。支援役を護ること、これとて重要な役割なのだから。

状況は膠着状態に見えてリインたちの不利であった。

エリオットからの支援を前提とし、スタミナを度外視した全力戦闘によつて何とか五分に持ち込んでいるこの状況、エリオットからの支援がなくなってしまうとさきま前衛の三人に限界が来るのは明らかである。そしてそのエリオットの体力と導力とて有限なのだから。それに対して魔竜の方は屍体であるために疲労等というものは持ち合わせていない上に、生半可な攻撃では立ちどころに治ってしまうと来たのだから、時がどちらに味方をするかは比を見るよりも明らかというものである。

加えて

「むう……」

「……っ」

「……厄介だな」

魔竜の身を覆う瘴気、それがリインたちの精神を徐々に蝕んでいく。毒とはまた違った、まるで魂を奈落に墮とされそうな奇妙な感覚。物理的なものではない以上、エリオットの支援魔法でも回復する事は出来ない。そしてそれは、後衛の二人も同じことだろう。前衛よ

りも距離が離れているため前衛ほどではないが、それでも奇妙な圧迫感のようなものを抱いていた。このままいけば、いずれ危ういところで成り立っている戦いの天秤が敵の方に傾くのは明らかだった。

（火力が要る……それもサラ教官の切り札である《ノーザンイクシード》級の！）

回復の暇すら与えない最大火力で一気に吹き飛ばす、この手の相手となるとそれしかない。

そして必要なのは瞬間的な大火力だ。自分達三人の切り札を三連撃で叩き込んでもおそらくあの謎の瘴気によって再生されてしまう。

必要なのは、瘴気もろとも吹き飛ばす圧倒的な火力なのだ。そうこれこそ呼吸を完全に合わせて切り札を同時に叩き込む位しなければ効果は薄いだろう。

しかし、現有戦力にそんな手札はない。

自然とリインは自分にとっての最高の相棒、あいつがここにいてくれればと、そんな想いを抱くが……

（現有戦力でなんとかするのが前線指揮官だ！柔弱な考えは捨てる！考えろ、この場でそれを叩き出せる可能性があるとするれば何かを……）

そこでリインは思い至る。今こうして戦っている最中にも激烈にコンビネーションが研ぎ澄まされていつている一年生最強のコンビを。

自分達からツールズ最強のコンビの座を奪い取って見せるとそう豪語した姿を。

心を繋いだパートナー同士が使えるコンビクラフト、此処にいるメンバーでサラ教官のアレに匹敵する程の火力を出せるとしたら可能性はそれ位だろう。

（だが、大博打も良いところだぞ……）

コンビクラフトは一朝一夕で出来るものではない。自分達にしてもサラ教官のそれを上回るまでには1年近くの歳月がかかった。

ぶっつけ本番で成功させるといっただけでも難事だというのに、成功させた上でノーザンイクシード級の破壊力にするともなればそれは

もはや奇跡と呼べる領域だろう。

凌いでいけば、おそらく遠からず鉄道憲兵隊の援軍が駆けつけるはずだ。ならば博打に打って出ずに持久戦に持ち込むというのは一つの手ではあるが……

（二人を奪還するならば、向こうが俺達の事を学生風情と侮っている今がチャンスだ）

敵は自分達の勝利を全く疑っていない。故に敗れるはずのない切り札が敗れ去った時の動揺こそが二人を奪還する最大の好機とまではずだ。しかし、義姉指揮下の鉄道憲兵隊が到着すればおそらく冷静さを取り戻すはずだ。形勢の不利を悟り、最後の手段に出てくる可能性はある。

そしてそうなれば義姉も軍人として非情の判断をくださなければならなくなるだろう。

すなわち、皇族であるアルフィン皇女殿下はともかく一男爵家の令嬢に過ぎない、エリゼ・シュバルツァーを見捨てるという冷徹な判断を。無論、最大限どちらも救出出来るように尽力はするだろう。しかし、そうしなければならぬ時が来たら《氷の乙女》というその名の通り、情を切り離れた理による判断で皇女の身を最優先するだろう。――冷徹な軍人という仮面の中に隠した私人としての素顔を歪め、心を痛ませながらも。

叶うのならば優しい姉にそんな想いは味わってほしくない、何よりも自分達はテオ・シュバルツァー男爵と約束したのだ。必ずやご息女を救ってみせると。その約束を破りたくはない。

決断しなければならぬ。他ならない自分が。全滅のリスクを覚悟してでも博打に打って出るのか、それともジリ貧とわかりつつも安全策を取ってこのまま持久戦で援軍の到着を待つのかを。決断することこそが指揮官の役目なのだから。

「フィー・ラウラー！数ヶ月前に俺とクロウが教官相手に見せたコンビクラフトは覚えているな！」

俺が奴の相手をする！呼吸を合わせて、お前たちでそれをやれ！！コイツを倒すには、それしかない！！」

わずかな逡巡の後、リインは決断を下した。大博打に打って出る事を。それは軍人として見れば凡そ教科書から外れた選択である。軍事学の講義やテストでこのような回答をしたらまず間違いなく不正解である。訓練でも成功させた事のないものを仲間がぶっつけ本番に成功させる事を期待した死力頼りなど。

「……正気？訓練でもやったことのないような事をぶっつけ本番でやれだなんて、そんなの……」

「流石に、今の我々でアレをやるのは……」

「出来る!!お前たち二人なら!!この俺が保証する!!」

そして指揮官の役目とは一度決断を下したならば堂々と自信を持つことだ。

指揮官の弱気は部下へと伝播する、例えどれだけ勝ち目が薄くても、俺達は勝てるのだと、そう鼓舞する事こそが指揮官の役目である。

「何故なら、俺とクロウはぶっつけ本番で成功させたからな!!お前たちが俺たち二人を超えるというのなら、やってみせろ!!」

俺たちに出来たのだからお前たちにも出来るはずだとどこまでも自信満々に失敗する等と欠片も思っていないように振る舞うそのリインの言葉に

「やれやれ……不用意な発言はするもんじゃないね」

「だが、出来るはずだ。私とそなたの二人ならば」

信頼と共に微笑み頷きあう二人。それを確認してリインは更に前へと踏み込む。

「エリオット!これから少し無茶をする、悪いが援護を頼むぞ!!」

「う、うん。任せて!」

後輩二人にぶっつけ本番でコンビクラフトを成功させろという無理をやれと言った以上、先輩である自分も三人で相手取っていた魔竜を一人で釘付けにするという無茶の一つや二つやらねばならないだろう。

「おおおおおおおおおお」

魔竜の攻撃が幾つか直撃して血みどろになりながらもリインは双剣を振るい、しのぎ続ける。

戦闘開始からずっと無理な動きを続けているせいで、徐々に体力ではなく肉体そのものが悲鳴をあげ始めているが、それもねじ伏せる。ヴァンダールの剣とは護るための剣なのだから、背後に控えた大切な仲間を、そして囚われた二人を助けるためにも自分が此処で倒れるわけにはいかないと心して。

ラウラ・S・アルゼイドは奇妙な心地を味わっていた。

数日前に今と同じ事を言われたら、どれほど尊敬する先輩に言われたといっても出来るわけがないと答えていただろう。

だが、今の自分は違う。傍らに立つ自分よりも小柄な少女、数週間前に「我らは合わない」と自分が拒絶の言葉を述べた相手に全幅の信頼を抱いていた。

こいつと一緒にならば誰が相手だろうと負ける気がしない、そんな錯覚さえも覚えていた。

出来る！とそう自信満々に告げられた瞬間に、そうだ何を臆していたのか。自分達二人ならば奇跡の一つや二つ程度、安いものだとな風にさえ。

「……ゼノとレオも、何時も二人一緒に戦っている時はこんな気持ちだったのかな」

「その者達も、そなたの家族か？」

「ん。性格も戦い方もおまけに外見も全然違っただけで、すっごく仲が良くてね。何時も二人でつるんでいた」

「そうか……機会があればいずれ会ってみたいものだ。そなたの家族にも」

「それじゃそうするためにも、邪魔者を手早く片付けちゃおうか」

「ああ、皆に迷惑をかけた分を今、此処で取り戻すでしょう！」

そうして二人は全く同じタイミングで魔竜へと向かって駆け出した。

「ラグナストライク！」

こちらへ向かって接近する二人を確認したリインは血みどろにな

りながらも己が切り札を魔竜の足に向けて放つ。これだけで仕留めきれないのは百も承知、だがそれでも復元するまでの間にわずかな時間を擁する。足止めには十分だ。

前足を粉碎された魔竜はバランスを崩して倒れ込む。

そして、そこに――

「洗翼風精陣！」

呼吸を合わせきった、一年生最強ペアのコンビクラフトが炸裂した。

絶望

身に纏う瘴気每吹き飛ばされ、断末魔をあげる事もなく崩れ落ちていく魔竜。

それを為したのは有角の若獅子達。その光景にギデオンはただ呆然となる。

それは、まさか敗北するわけがないと思っていた切り札が敗れた故か？——無論それもある。

だが、それ以上にその光景に彼らは魅入ってしまったのだ。

若き英雄たちによる魔竜退治、そんなお伽噺のような光景にただただ圧倒されてしまった。

これはギデオンが元来戦闘のプロフェッショナルではない学者だったからこそ。

優れた頭脳を有して、計画を立てる事は出来る。されど、その精神はどこまでも戦士からは遠かった。

——そして、そんな隙を彼らは見逃さなかった。

「マキシマムショット！」

これまで攻撃らしい攻撃をしていなかった、マキアスがギデオンめがけてフル出力の導力散弾銃の一撃を叩き込む。

奴らが切り札を失った瞬間こそが最大の好機だ、そんな風に事前にラインから言われた通りに。

「!？」

ギデオンがようやく忘我から己を取り戻すも——遅い。

放たれた導力弾は《降魔の笛》を砕き、止まること無くギデオンの身体を貫いた。

幹部と思われる彼は極力生かして捕らえると予め言い含められていたために、非殺傷状態で放ったが、それでも防弾ベストの上からでも人一人を昏倒させるには十分過ぎる威力であった。

「フラッシュ・グレネード」

そして指揮官を失った敵の隙を歴戦の猟兵たるフィー・クラウゼルは見逃さない。

迸る閃光が残された二人のテロリストたちから視界を奪い取る。

この状態においても彼らは手元にいる人質を有効活用する事ができなかつた。

それはこの場のリーダーたるギデオンから、くれぐれも丁重に扱うように言い含められていたから。

そして、事前に伝えられていたのは仮に追いつかれたとしてもこの場で魔竜の餌食にしておしまいだと言うところまでだったから。

事前の指示、予期せぬ切り札の敗北、そして判断を下すべき指揮官の不在、奪われた視界。

これらが重なったことで生じた硬直時間、その間に距離を詰めたフィーとラインの刃が呆気なくその首を切り裂いた――

「やれやれ……本当に二人が眠っていて良かったよ」

自分が絶命させた相手からエリゼ・シユバルツァーを奪還し、その手に抱えたラインはその場から下がる。

血みどろの助けに来た相手と首無し死体というのは、確かにご婦人方に見せるには些か以上にショック過ぎる光景である。

「何にせよ、エリオット。今のうちに回復をしてくれると助かる。と
いっても、テロリスト共を仕留めてこうして人質も確保した以上、もう滅多な事はないだろうがな」

「……あ、うん。今回復するね」

発動する戦闘中にずっと世話になっていた回復魔法。ボロボロだった身体が癒されるのを感じながら、ラインは目の前の青ざめた顔を浮かべた兄弟を見つめて

「あまり、気にするなよ。敵の命なんてのは戦場に於いて最も優先順位の低いものだ。生かして捕らえるなんてのは、彼我の戦力差がよほど開いていてこちらに余裕がある時に考慮する程度で良い」

加えて言うのならこれほどの事をやらかした犯罪者などどう足掻いても死刑を免れる事はまず不可能だろう。結局死ぬのが遅いか早いかの違いである。痛みも恐怖も感じる間も無く逝けたという点では、あるいはこちらの方がまだマシな死に方だったという見方さえ

あるかもしれない。

「先輩の言うとおりでだよ、エリオット。やらなきややられるのが戦場なんだから。優しくするのは味方にだけで良い」

魔獣退治はこれまで幾度もやったものこうして人が死ぬところをもつと言えば知り合いが敵を殺すところを見るのは初めてだったのだろう。ショックを受けた様子のエリオットへとリインとフィーは語りかける。

「う、うん……ごめんね……」

「……別に謝る必要はないけど。ただ、下手な躊躇いは自分や味方を危険にさらすって事は覚えておいてね」

平時に於いては優しさと呼ばれる人としての美德も、戦場に於いては甘さという悪徳に変わるのだと容赦なく、されど仲間への気遣いを見せながら語るフィーにエリオットはどこか気まずそうに黙り込む。

そしてそんな光景を見てリインは改めて再確認していた。

やはり、この優しい親友は軍人の類には向いていないと。

幼いころよりエリオットは荒事の類が苦手であった。決して臆病というわけではないのだが、優しい彼は自分に非がなければ一步も譲る気のなかつた負けん気の強いリインとは対照的に、それで場が丸く収まるならばと相手に譲るといふ事が多かつた。根本的に他者と争うといふ事、それ自体が苦手なのだ。

更に言えば、音楽によつて人は分かり合えるなどという純粋な夢を掲げる位なのだ、エリオット・クレイグという少年が国家における最大の暴力機構たる軍人などといふ職に向いていないことは明らかだった。

いずれ、きちんと自分からもそのことは義父であるオーラフに伝えたいほうが良いだろう、そうリインは決意する。最もオーラフとてそれがわかつていたからこそ、中央士官学院や完全な軍学校とは指定せず、にツールズ士官学院というある種の抜け道を用意しておいたのかもしれないが……

何にせよ、その辺の事は今、此処で喋るような事でもないだろう。

「まあ……その辺の事は後にしよう。何にせよ、よくやったなお前たち。幹部と思しきギデオンを生きた状態で捕らえて、皇女殿下とエリゼ嬢も傷を負わせる事無く救出できた。この上ない、俺達の完全勝利だ」

空気を入れ替えようと明るい表情で四人の後輩に向けて告げた後に、リインはラウラとフィーの方へと視線をやり

「特にラウラ、フィー。魔竜を退治出来たのはお前たち二人のおかげに他ならない、見せてもらったぞ一年最強コンビの実力をな」

「ふふ、これで今まで迷惑かけた分の名誉を挽回する事が出来ただろうか?」

「ああ、十分すぎるほどにな」

「……一年最強なんだ。トールズ最強じゃなくて」

「悪いがその座を手に入れたかったら後8ヶ月待つんだな。そうすれば自動的にお前たちが繰り上がりでトールズ最強だ」

「……そんなに待たなくても、2年最強を私達で倒したらその時点で私達が最強だよな?」

「ほう……何時になく積極的じゃないか。もちろん、挑戦は何時でも受けて立つぞ」

「ふふ、であれば学院に戻つたら是非とも手合わせ願いたいものだ。今の私とフィーならばそうそう遅れを取らぬ自信がある」

常にないやる気を見せるフィーを含め、盛り上がる三人達。そんな三人をどこか呆れた心境で見つめる二人。

誰もが自分達の勝利を確信し、いい加減この辛気臭い場所を離れて地上へ戻ろうとした、その時だった。

「!?」

「何……この感覚……」

「なんだ……この、とてつもない邪気は……」

とてつもない悪寒が、全員の身体を駆け巡る。

霧散したはずの瘴気、それが粉々に砕けた魔竜の屍体へと集まりだす。

そして、砕けたはずの骨が復元されていく……のみならず

「あ、ああ……」

「な、何がどうなって……」

肉が形成されていく。

血が通い出す。

闇のような漆黒の鱗が輝きを放つ。

そして、禍々しさに満ちた眼が開く

「ゴギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

魂の芯から凍えるような咆哮が響き渡る。

かつて、帝都を死の都に変えた魔竜“ゾロロアグルーガ”が再び姿を現した。

ギデオンは優秀な男であった。

その優れた頭脳は彼の専門たる政治学以外にも如何なく発揮された。

古文書を読み解く事で伝承に存在した魔竜の墓所を突き止めて、《降魔の笛》の力によってそれを利用する事を目論んだ。

そう、彼は優秀だった。現代を生きる学者としては。

彼は魔竜の持つ真の恐ろしさを理解していなかった。幾ら恐ろしかった魔竜とはいえ、既にはるか昔に討伐された存在。故に《降魔の笛》で傀儡出来ると、愚かにもそう思い込んだ。

恐ろしきは魔竜の執念。

降魔の笛によって呼び寄せられた僅かな残留思念を核については、肉体を形成するまでに至ったそのしづとさ。

無論、肉体を形成したと言っても、かつてヘクトル帝が自らの命と、《紅の騎神》と引き換えにやっとの思いで討ち果たした全盛期から見ればほんの搾りかすに過ぎない。

騎神がなくとも《光の剣匠》や《アルノールの守護神》、《黄金の羅刹》といった《獅子心十七勇士》にも列席されている帝国最高峰の実力者ならば生身で討ち果たす事も、可能かもしれない。

されど

「う……あ……」

「う、嘘だろう……」

未だ巢立ちを迎える前の未熟な雛鳥、その心をへし折るには十分過ぎる程であった……

「全滅」その二文字が頭を過る。

「絶望」その二文字が心を満たしかける。

人は真の恐怖に遭遇した時、思考が麻痺してしまう。

どこか現実感を伴わなくなり、まるで夢の中にいるかのような心地となり

立ち向かうという選択は愚か、「逃げる」という決断さえも下す事ができなくなるのだ。

「ツ！総員、殿下とエリゼ嬢を連れて撤退しろ！！殿は俺が引き受ける！！」

故に指揮官たるリインは忘我から強い意志によつていち早く復帰し、指示を出す。

指揮官は突撃を行う際には陣頭に立ち、撤退する時は最後まで残るべし。そんな、教えを体現するべく。

「……………ツ！！」

そしてあまりの恐怖に思考が凍りついたエリオットとマキアスはその与えられた命令に縋りつくように、弾かれたように動き出す。

アルフィン皇女とエリゼ・シユバルツァー眠ったままの二人を抱えながらその場から一目散に逃げ出す。

そして魔竜はそんな二人を追わずに、未だ戦意を失わずにこちらを見据える三人の勇士をその禍々しい瞳で睥睨していた。

「……俺は、「総員」といったつもりだったんだがな。命令違反は軍じゃ重罪だぞ」

「ふふ、幾らリイン先輩と言えども一人で残つては生存の目は残るまい。だが、三人居ればなんとか活路も見えてこよう。

我らはまだ正式な軍人ではなく、リイン先輩はあくまで「特別実習」の班長に過ぎない。流石に、コレの相手も特別実習の範囲に含めるには無理があらう」

「含んでいたらあちこちから非難轟々間違い無し、哀れサラは責任を取らされて失業」

「故にこそ、今此処に私が残ったのは特科クラスⅦ組所属、特別実習A班の班員としてではない。」

リイン・オズボーンの剣友、ただのラウラ・S・アルゼイドとして残ったつもりだ」

「……部下が自分の意志で殿に付き合った時、指揮官は怒るんじゃないって喜ぶべき。」

それだけ、その指揮官を死なせたくない人だっと思ってっているって事なんだから。部下からの信頼を勝ち取った証拠」

微笑と共に告げられたその信頼にリインは心を綻ばせる。

そうだ、臆するな。自分にはこんなにも頼もしい仲間がついているのだ。

一人では無理でも、三人居れば活路が見えてくる。

「フィー・ラウラ！さっきやったアレをもう一度出来るな!!とてもじゃないが、長期戦は無理だ。」

最大火力を奴の顔にぶち込んで何とか眼を潰す。そうしたらとつとと離脱する」

「承知！」

「了解」

恐怖を乗り越えた黄金色に輝く勇氣。

その気概、結集した意志。

そののなんと素晴らしい事か。

未だ未熟な雛鳥である事など関係ない。

今の彼らはまさしく「英雄」と呼ぶに足る存在だ。

故に、彼らは必ずや勝利する。何故ならば「魔竜」などというのは「英雄」によって討伐されるのが運命が故に。

「ラグナストライク！」

「洗翼風精陣！」

「……されど、忘れるな。」

今、ここに存在するのはそこらの怪物とは格が違う。

そんな幾多の「英雄」達を喰らい尽くした伝説の「魔竜」ゾロアグルーガなのだ。

光の矢となって自らへと向かってくる、三人の若き「英雄」それを相手に魔竜は歪んだ欲望を滾らせる。

「……そうだ、自分がかつてこんな眼をした者達を幾人も相手取つた。

他者のためにその命を投げ捨てるような奇特極まりない、黄金の財宝にも匹敵する輝く勇士達。

今にも逃げ出したい恐怖に駆られながらも、自分達は負けない、勝つのだ！とそう言い放つ気概。

おお、なんと極上の獲物なのか。決して逃さぬ、その血肉も魂の一片も余す事無く、必ずや喰らってやろうと。

「「おおおおおおお」」

先程の比ではない瘴気が突撃を敢行したリインたちの心だけでなく、今度は身体までも蝕む。

まるで酸の海にでも落とされたかのような激痛が三人を襲うが、それでも歯を食いしばりながら堪えて。

放たれた乾坤一擲の一撃は……

「……あ」

「馬鹿……な……」

「こん……な……」

何気なく、振り上げられた前足に阻まれて、呆気なく終わった。

骨を断つどころではない、肉を切り裂く事すら出来ずに、その頑強な鱗と、何よりも攻撃された箇所集中させた、その禍々しい瘴気に弾かれて。

絶望に歪む三人の表情を魔竜はその顔が見たかっと言わんばかりに嘲笑う。

そして、放たれた灼熱の業火が三人を包み込んだ。

覚醒

勝敗は決した。

如何に残滓とはいえ、魔竜を相手取るには未だ雛鳥でしかない彼らでは、余りにも早すぎた。

「無情なまでの力量差、それが灼熱となってリイン達をその矜持と絆毎燃やし尽くした。」

「……………ツ！」

「う……………ぐう……………」

「こんな……………ところで……………!!」

致命傷こそ避けられたものの、それは幸運だったことを意味しない。

むしろ不幸とさえ言えるだろう、もはや身じろぎするのがやっとの状態で生きたままに食われる恐怖を味わいながら、その生を終える事となるのだから。

いや、あるいはだからこそ即死しなかったと言うべきだろうか。

自分へと挑む輝く意志を持った勇士、そんな人類の至宝とも言うべき勇者たちの心をへし折り、その慟哭を余す事無く頂く事こそがこの魔竜にとつての最高のご馳走なのだから。

魂の一片も残さずに喰らうとはそういう事だ。

目覚めたてで、その身体はかつて持っていたものとは比べ物にならない程に脆弱なものとなってしまった。そう、魔竜は実感する。

今の自分は圧倒的に弱い、それこそかつて自分を討伐したあの忌々しい勇者が相手となると、《騎神》がなくとも敗れかねない程に。

それが証拠に今、目の前で倒れている勇士たちの攻撃を防ぐために気合を入れて防御をしなければならなかった。

かつての自分であれば忌々しい《魔女の眷属》共の邪魔さえなければ、そんな事をする必要さえなかったというのに。

弱体化は深刻だ。今の世にどれほどの勇者がいるかはわからない

が、自分がこうして目覚めた以上《騎神》もまた目覚めるだろう。何故ならば、アレはそういう存在なのだから。

力を取り戻さなければならぬ。それもできるだけ早急に。再びこの世へと君臨するために。

そんな自分を討ち果たさんと立ち上がる勇者たちを、余さず喰らい尽くすために。

だからこそ、目覚めて初めてありつける、せつかくのご馳走はゆつくりと味わなければならぬ。食べ残しがあつては勿体無いではないか。

ジロリとそこで魔竜は倒れ伏した三人を睥睨する。

さて、そうなるのとどれから喰らうべきか。この場に於いて最も強かった勇者を真つ先に喰らい、残された二人の絶望を味わうのも悪くはないが……

「まだ……だー……こんな……ところで……俺は……！」

やはり、一番美味そうな獲物は最後にとっておくべきだろう。

雄を食べる前には、雌を目の前で食べてからのほうが、より味わい深くなる。それが今までで学んだ傾向という奴だ。

さあ、それでは思う存分に久方ぶりのご馳走を味わうとしよう。

動け。動け。動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け。

どれほど強く思っても自らの身体はそれに応えようとしない。

リン・オズボーンはかつて無い無力感をその身に味わっていた。

このままでは終わる、自分だけではなく自分に付き合い留まった大切な仲間共々。

相手は人間ではない真正正銘の怪物。慈悲などというものを当然持ち合わせているわけがない。

そして、あの魔竜相手となると姉が鉄道憲兵隊を率いて到着しても無駄に犠牲者が増えるだけだ。

何故ならば自分達三人がかりの決死の攻撃でさえもあの魔竜には

傷一つつけられなかったのだから。

鉄道憲兵隊の携帯する火力ではどう足掻いてもダメージなど与えられないだろう。

あの魔竜を打倒するとなれば、それこそ第二機甲師団の動員さえも視野に入れなければ……いや、違う！

戦車もこのような地下に送る事は出来ない以上、人の手で討ち果たさねばならないのだ！

何故ならば、アレが地上に出てしまえば、それは多くの罪なきエレボニアの民が犠牲になるという事なのだから！！

それだけは絶対に許すわけにはいかない！この場で、やつを討ち滅ぼさねばならないのだ！！

そうだ、師範ならば、《アルノールの守護神》、マテウス・ヴァンダールならば生身でも打倒する事が可能だろう。

ならば、同じ人間である自分にとて不可能ではないはずだ！！

故に立て、立つんだリイン・オズボーン！！此処で立てずに一体何が守護の剣か！！

そう、強く願っているのに身体はそれを裏切る。それでも諦めるわけには断じていかないとリインはただひたすらに力を求める。かつて無いほどに強く、強く。ただひたむきに。

そして、そんなリインを嘲笑するかのように横目で見ながら、魔竜は倒れ伏した二人の少女の下へと近寄っていく。まるで、そこで指をくわえて大切な仲間が食われるのを黙って見ていると言わんばかりに――

脳裏に過るのはかつて大切な人を失った光景。何も出来なかった無力な自分。

――自分は、あの頃と何一つとして変わっていないのか？

――また、失うのか？

ふぎけるな！！もう何も、何一つ奪わせてなるものか！！

そう、決意した瞬間に心臓がドクンと大きく跳ねた。

心のなかに灯っていた火が広がっていき、それが大きな焰と化していく。

「……本当にそれで良いの？」

「そう、身を案じる優しい母の声が聞こえた。」

「……後悔しないのかな」

「覚悟を確かめる厳しい父の声が聞こえた。」

「ああ、勿論だ」

大切な誰かをそれで護れるというのならば……この身が焰と化そうと構わないのだから。

「ラウラ……ごめん、私の家族に会わせるって約束はどうやら果たせそうにないや」

「迫りくる魔竜、それを前にしてフィーは身動き一つ取れぬ身体で唯一どうにか動かせる口から謝罪の言葉を紡ぐ。」

「フィー……諦めるでない!!私とてそなたに故郷であるレグラムを見せてられていないのだぞ!」

「そう言いながら、親友の下へとなんとか這つてたどり着こうとするが、満身創痍のラウラはそれすらも出来ない。」

「ふふ、団の仕事であちこち行ったことはあったけど、友達の家遊びに行くなんて事はなかったから私も、行ってみたかったな……」

「ならば、諦めるでない!!這つてでも逃げるのだ!!そうして、少しでも遠くに行けば、稼いだわずかな時間で援軍が駆けつけるかもしれない!!」

「ラウラは……強いね。いつでも真つ直ぐで。そんな真つ直ぐなところが苦手で、でも同時にすごく眩しくて……ずっと尊敬していた」「フィー……う？」

「そう穏やかに語る言葉はまるで遺言のようで」

「私は猟兵としていろいろとやってきたから。今度は私に番が回ってきたってだけ。……ま、流石に竜に食べられて死ぬなんて死に方は予想してなかったけど」

「近づいてくる魔竜、それを前に苦笑交じりに最期の言葉を伝えるように」

「だから、生き残るべきなのは私よりもラウラみたいな人。私が食べられている隙に少しでも遠くへ逃げて、なんとか生き残って。死ぬにしても、友達を庇って死にたいから」

「フイーー・駄目だ！」

ラウラ・S・アルゼイドは己が力の無さを呪う。そして自然と、祈る。空の女神に。

奇跡でもなんでも良い、どうか助けてくれと。

「邪悪なる魔性の竜。」

その犠牲になろうとしている少女。

助けを求める祈りの声。

条件は整った。

悲劇を焼き尽くし、物語に救いを齎す者こそが「英雄」なれば。

今こそ、その殻を打ち破り飛翔を果たす時である。

「神気合一」

推奨BGM：光の殉教者

告げられた静かな宣誓。

その言葉と共に漆黒だった髪が白く変わっていく。

そしてその瞳も真紅に染まっていく。

鋭き眼光に宿るのは圧倒的な殺意。

邪魔する者はすべて討滅せんとする鋼の意志。

しかし、身体から立ち昇るのは神聖なる白い焰。

「邪悪なる魔竜を退治すべく、「英雄」が立ち上がった。」

「ギャオオオオオオオオオオオ」

響き渡るのは魔竜の悲鳴。

白焰を纏った双剣が邪竜の鱗を破り、なんなく切り裂いた。

先程までそんな事は不可能だったというのにまるで当然のように。

人の身を侵す瘴気もリインの身に纏った白い焰へと阻まれ、真価を発揮する事ができない。

「――何故、満身創痍だったはずの獲物が立ち上がっている。
――先ほどとは比べ物にならないこの力は一体何なのだ。
そう困惑したのも束の間、邪竜は目前の相手を獲物から自分の命を
脅かしうる敵と認識する。」

立ち昇るのはそれまでの比ではない、瘴気。それによってリインの
双剣が阻まれる。

「どうだ、見たことかと勝ち誇るかのような魔竜に対して

「小賢しい」

これで足りぬというのならば、身を護るための焰も攻撃に費やせば
良いだけの事だ。

そう言わんばかりにその身に纏っていた焰が双剣へと収束されて
いく。

必然、リインの身に猛烈な激痛が襲う。剣を振るう事は愚か立つて
いる事さえ苦しいはずのそれをリインは胆力で耐える。

この敵は、己が身を可愛がっていて勝てるような甘い相手ではない
のだからと。当然のように。

痛みという身体の発する悲鳴を鋼鉄の意志でねじ伏せる

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

始まるのはデッドヒート。

リインの振るう双剣が魔竜のその身を切り裂いていく。

魔竜の瘴気がリインのその身を侵していく。

リインの双剣が魔竜を殺し切るのが先か、それとも魔竜の瘴気が
リインを殺し切るのが先かというそんな根比べ。

魔竜が何とか捉えようと攻撃を行うも、リインは白焰をスラスト
のように噴出した高速機動でそれを縦横無尽に躲す。

断裂していく筋繊維、負荷に耐えきれずひび割れていく骨。そして
沸騰していく血液。

まるで本来積むはずではなかった高性能のエンジンを積んでし
まったかのように、その出力に耐えきれずリインの肉体が無理だ、無
謀だと悲鳴を挙げますがそんなものに耳を貸すな。

何故ならば、無茶と無謀を通して道理を覆す者こそが「英雄」なの

だから。

「人間は怪物には勝てない」そんな世界の敷いた道理を突破して、人々に希望を齎す理の破壊者こそが英雄なのだから。

そして、そんな様に魔竜は恐怖した。

何故ならばそれこそが、かつて自分を打ち破ったモノだったのだから。

このまま行けば敗れるのは自分の方である。

本来であれば、巨大な体躯を持つ竜と矮小な人、我慢比べをしてどちらが勝つのかなど自明の理だ。

大きいという事はそれだけ頑強であるという事なのだから。

だが、そんな道理を覆すのが「英雄」だ。

故に魔竜は思考する、何がこの手の手合いに有効なのかを。今までに喰らってきた数多の勇士との戦いの記憶から検索する。

そして視界に写ったものを確認した瞬間、魔竜の顔が醜く歪んだ。

次の瞬間魔竜はリイン達を壊滅に追い込んだ灼熱の業火を倒れているラウラとフィーへと吐き出した。

「!？」

察知した瞬間リインは弾かれたように動いていた。あまりの急加速によるGに身体が悲鳴を挙げるが、それを無視して後先考えずにその身を魔竜の狙い通りに二人の間へ割り込ませる。

「ぐうううううううううう」

リインの許容値を超える炎がその身を焦がしていく。

それこそがお前たちの最大の弱点なのだ。魔竜は嘲笑う。

霞んでいく意識、溶け落ちていく肉体。まだまだ、まだまだと吠えるも訪れた限界。

リイン・オズボーンが道理を踏破出来なかった英雄自殺志願者という数多いた存在の列に加わろうとした刹那

「ノーザンイクシードー！」

「カレイドフォース！」

放たれたのは紫電と氷の一閃。リインを殺す事に全精力を集中させ、無防備となった魔竜へとそれが突き刺さる。

必然弱まる炎の勢い。尊敬する二人の師が作ってくれたその好機を逃さず、魔竜の炎さえも自らの剣へと集中させ
「ブレイズ・ストライク!!」

放たれた焰の一閃が魔竜を飲み込んだ。

代償

巢穴に響く断末魔。邪悪な魔性は露と散り、かくして英雄譚が幕開けた。

クレア・リーヴェルトは自分がお伽噺の一員になってしまったかのような錯覚をしていた。

アルフィン皇女殿下が誘拐されたという急報を受けて、現場に到着し、負傷したレーグニッツ知事と皇女と共に攫われたエリゼ・シュバルツアーの父たるテオ・シュバルツアー男爵より状況を聞いたクレアはすぐさま旗下の中でも選りすぐりの隊員を率いて地下道へと赴いた。

そうして地下道を進んでみれば、現れたのは人質である二人を抱えて、恐慌状態へと陥った特化クラスⅦ組所属の二人。

曰く、とんでもない怪物、お伽噺に出てくるような竜が現れて残りの三人が殿になって戦っている、どうか助けて欲しいと嗚咽混じりに語る彼らと攫われた二人の保護を部下へと任せ、クレアとサラは即座に現場へと急行した。

正直、竜などと言うのはクレアにしてもサラにしても半信半疑であつた。

なにせマキアスにしてもエリオットにしても常とは違ったパニツク状態へと陥っていたから、混乱のあまりに強力な魔獣を指してそんな事を言ったのだろうと。

だが、マキアスにしてもエリオットにしても既にそれなりの訓練を積み、修羅場も潜っている。そんな二人が狂乱状態に陥っているという事からも、残った三人が対峙しているのは尋常な敵でないという事は想像できた。

なにせ二人がこうして人質を抱えて逃げてきたというのはすなわち、自分達5人では打倒しきれない敵で撤退を前提にしなければならぬとリインが判断したというのと同義なのだから。

普段は穏やかなる関係のクレアとサラもこの時ばかりは思いは一つだった。すなわち、一刻も早く現場にたどり着かねばならない。

「大事な義弟／生徒を守るためにも」と。

そうして現場へとたどり着いた二人が眼にした光景は……

「オオオオオオオオオオオオオオオオ」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオ」

鬼の如き姿で双剣を振るう白髪の剣士、そしてそれと死闘を繰り広げる魔竜の姿であった。

あまりの事態に一瞬忘我へと陥った二人の間隙を縫うかのように魔竜が倒れている二人へと炎を吐く。しまったと思うも遅い、どれだけ急いでも自分達では間に合わない。だが、白髪の剣士がボロボロになりながらも二人を炎から庇った。

そこに来てようやく忘我から復帰したサラとクレアは魔竜へと攻撃を叩き込み、その隙をつく形で見事魔竜退治を成し遂げたというわけなのだが……

何者なのだろうか、この少年は……等とは思わない。

何故ならば倒れていたのは二人だけであり、少年がその身に纏うものも、顔立ちも、何もかもが自分のよく知るものと同じなのだから。目の前の人物が誰なのか、などというのは自ずとわかることだろう。

ああ、けれど、それでもそう言わずにはいられない。

何故ならば余りにも魔竜と対峙していたその姿を常の彼とかけ離れていたものだったから。

鬼気迫る、いやもはや鬼そのものと言った気迫。鋭い眼光から溢れ出る殺意の本流。

そしてそれらを律する鋼の如き意志。何もかもが自分の知っている優しい質朴な義弟とはかけ離れていた。

故にクレアは躊躇してしまふ、なんと声をかけて良いのかを。

「……あんた達一体、何があったの。アレは、ラインであっているのよね？」

「わかんない……流石にコレは終わったかなと思ったたら突然先輩があの風になって……」

「我らの方も正直何が何やら……サラ教官でしたら何か心当たりがあ

るのでは？」

ラウラの意図しているのは実力者であり、遊撃士として幅広い知識のあるサラ教官ならばという意味であってけっして亀の甲より何とやらの意図ではない。

「あいにくだけど、私もあんなのを見たのを初めてよ。そこら辺どうなのよ、お義姉さん。何か心当たりないわけ」

「……私にもあいにくと。とにかく、此処からすぐにでも離れて傷の手当をしましょう」

改めて確認してみるとリインの姿は酷いものであった。皮膚は剥がれ、肉は焼け焦げ、無数の裂傷がその身には刻まれていた。その酷さたるやこういうのには慣れっこなはずのサラやクレアをして目を背けたくなるものであった。正直、立っているのが、いや生きているのが不思議な重症である。

瞬間

殺気を感じて、その場から三人は動けない状態の二人を抱えて離脱する。

三人の先程までにいた地点、そこに銃弾が炸裂する。

現れたのは三人。厳つい顔に傷のついた大男と、眼帯をした赤髪の女。そして黒ずくめの姿に仮面をつけた正体不明の存在であった。

「まさか……このような事になるとはな。作戦に想定外はつきものとはいえ、これは流石に想定外にも程があった。同志《S》、同志《G》の様子は？」

「大丈夫よ、衰弱しているけどちやんと息はあるわ」

「そうか、それは何よりだ。さて、一つ提案がある。《紫電》、《氷の乙女》、そして《鉄血の継嗣》よ」

「何よ、こつちのこと一方向的に知っているみたいだけどこつちはあんなの事なんか全く知らないのよ。まずは自己紹介したらどうなの？」

「これは失礼した。我々は《帝国解放戦線》。静かなる怒りの焰を燃やし、度し難き独裁者に無慈悲なる鉄槌を下す者である。そして私の名は《C》。以後、お見知りおき願おうか」

「帝国解放戦線……それに度し難い独裁者ねえ……」

誰のことを指しているか、それはもはや火を見るより明らかであった。個人的感情を言えばサラも大嫌いな、そして横にいる二人は趣味が悪い事に大好きなあの男の事であろう。

「さて自己紹介を終えたところで本題に入らせてもらおうとしよう。互いに負傷者を抱えた身、どうかな？ここらでお互いに手打ちにするというのは？」

「それは……」

告げられた《C》と名乗る、リーダー格の男の提案にクレアは逡巡する。

軍人として考えれば此処で逃す訳にはいかない。目の前にいる三人、そして気絶している男はおそらく幹部格。

此処で捕縛する事が出来るなら、それはすなわち後顧の憂いを断てるという事である。

今回しかした事件の規模を考えれば、此処で逃がす手はない。そう、多少の犠牲が出ようが見逃すわけにはいかない。

しかし

「何やら迷っているようだが、ご決断は早くした方が良いのではないかな？そちらのお嬢さん二人はともかく、貴女の義弟御等はすぐに手当をしないとその身が危ないと思うのだが？」

「……ッ！」

自分の葛藤を見透かしたかのように嘲笑う《C》の言葉にクレアは顔を歪めるもその言葉が正しい事を認めた。

このまま戦えばリインは間違いなく死ぬ。目前の三人、特に仮面の男《C》はかなりの手練だ。一筋縄ではいかないだろう。

そして、そうなれば今のリインの身体は保たない。かといって自分とサラの二人だけで目の前の三人を相手取るのは厳しい。故にクレアは内心で葛藤する。

《氷の乙女》たる自分はこの場で戦い目の前の三人を捕縛するべきだと主張する。義弟一人の犠牲でこれから起こる事件を防げるならば安いものだと、どこまでも感情を排して冷徹に。

私人としての自分は叫ぶ。《C》の提案を受け入れるべきだと。もう二度と大切な弟を失いたくないと。

そして、それはまたサラもまた同じであった。素直ではないものの何だかんだで可愛い大切な教え子の命が天秤に乗せられた事で、容易に判断を下す事ができない。

「論外だな。これほどの事をしでかした貴様らを見逃す道理など有りはしない。全員この場で始末する。」

生け捕りにするにしてもそこで伸びている男が一人居れば十分だ。お前たち三人は、残らず地獄へと俺が叩き送ってやる」

決断出来ない二人の女が変わって告げられたのは鋼の宣誓。

立つ事すら危うい重傷だとは思えない、不屈の戦意を滾らせながら、リイン・オズボーンがそう宣言していた。

「随分と威勢が良いがわかってんのかよお坊ちゃん、そうなったら死ぬのはお前だぜ」

それは脅しでも何でもない純然たる事実だ。リイン・オズボーンの肉体は限界寸前、いや限界などとうに超えている。この状態で無理をすればどうなるかは明らかだ。

「それがどうした。まさか俺が、我が身惜しさに退くとでも？ 悔るなよ、テロリスト。」

剣をとったその時から、この命を祖国に捧げる覚悟などとうに出来ている。俺の身と引き換えにこの場で貴様達を捕らえられるなら十分すぎるほどの成果だろう。

なにせ俺は宰相でも帝都知事でもない、一介の士官学院生でしか無いのだからな」

故にそんな一介の士官学院生一人の命と引き換えに後顧の憂いを断てるならば安いものだどこまでも冷徹にリインは告げる。

自分が死ねば悲しむであろう多くの人の嘆きなど無視して。どこまでも国益という大きな視点で、自分の命さえも駒として見て。

「……なるほど、確かにあの男の息子ね。ええ、嫌になるほどにそっくりだわ。轆かれて砕かれた路傍の石ころなんて知ったことじゃないと言わんばかりのその態度、我慢ならぬわ」

忌々しそうな様子で《S》と呼ばれたその女はリインを睨みつける。ああ、本当に瓜二つだと言わんばかりに。

「それは結構。俺も貴様らのようなテロリストなど、どう足掻いても好きにはなれん。意見が一致したようで何よりだよ」

目の前の者にも譲れない事情があるのだろう、父を憎む理由があるのだろう。だが、だからといってそれがなんだというのだ。

生憎とこれほどの事をしでかしたテロリストに対して同情するほどにリインは慈悲深くない。自分が不幸な目にあつたことは他者に不幸を押し付ける免罪符では断じて有り得ないのだから。

申し開きがあるなら、それは裁判の場かあの世で慈悲深き《空の女神》に対してすれば良い。どの道、祖国に仇為すテロリストを前にして自分が為すべき事など一つなのだから。

そしてそんなリインの様子に傍らに立つクレアは困惑していた。

これは誰だ。この敵対者への容赦の無さ。自分の命すらもまるで斟酌していかない冷徹さ。

そして何もかも飲み干さんとする鋼鉄の意志、これではまるであの人そのものではないかと。

敵意に満ちた視線が交錯する。視線に宿った戦意と敵意はそのまま両者の断絶を示すものであつたであろう。

そしてリインが双剣を構えて、再びその白き焰を纏つて突撃せんとした刹那

「生憎だが、奴本人ならともかく奴の息子如きと心中する気はなくてね。此処は、退かせて貰うとしよう」

瞬間轟音が響き渡る。この事態に備えて事前に地下へと仕掛けた爆薬が炸裂したのだ。

崩落していく地下空間、こうなつては追撃する事もできずに止む得なくリイン達もその場から離脱するのであつた。

「ラウラ、フィー！」

「良かった！無事だったんだね！」

クレアとサラにそれぞれ背負われた二人の大切な仲間を確認した

るものかと、そう強く思つて。

霞みゆく意識の中、リインは強く念じる。

今の肉体では駄目だ。出力に耐えるだけのより強靱な肉体がいると。

それは鍛えるとかそういう次元ではなく、文字通り血も肉も内蔵も神経さえもより相応しいものが必要だと。

ついに飛翔を始めた「英雄」はどこまでも純粹に、更なる力を渴望するのであつた……

父と子

5日間に渡る夏至祭は終了した。

初日のテロもあって、無事とは流石に言い難いものの負傷したレーグニッツ知事が陣頭指揮を取った事もあり、混乱は最小限に収められた。そして夏至祭終了の翌朝、初日に見事な活躍を見せたトールズ士官学院の面々は予定通りに帝都を跡にしようとしていた。

「いや、君たちには本当に世話になった。兄妹共々士官学院には足を向けて寝られなくなってしまったよ」

そう、気さくな笑みでオリヴァルト皇子は礼の言葉を述べる。リイン達A班の活躍の傍らで、トワ達B班もまたテロ阻止で大きく活躍したのだ。

「特に、その身を呈してアルフィンを救ってくれたリイン君には本当に心より礼を言わせてもらいたい。妹を助けてくれて本当にありがとう。こうして今、妹と笑い合えているのも君のおかげだ」

「お兄様の仰る通りです。あのまま攫われていたらどんな運命が待ち受けていたかと思うと、本当に何度お礼を言っても足りない気分です」

「……勿体無きお言葉。守護の剣を授けて頂いた身としてどうか師に顔向けが出来そうです」

恭しく礼をしながらリインは満たされる想いを覚えていた。ああ、この方たちの笑顔を自分は護れたのだと、そう思えるだけで味わった苦痛など如何程のものかとそう思えた。

「私からも改めて、礼を言わせて下さい。本当にありがとうございます。父も是非この御礼をしたいと申しとおりましたので、機会がございましたら、どうかユミルへと遊びに来て下さいね。心よりのおもてなしをさせていただきます。」

……それと、本当にお身体の方は大丈夫なのですか？一昨日の夜、ようやく目を覚ましたばかりというのに、もう退院するなど」

瀕死の重傷を負ったリイン・オズボーンはすぐさま軍病院へと搬送された。

鉄血宰相の実子でもあり、皇女救出の功労者でもある彼には当然帝國でも最高峰の治療体制がただちに敷かれ、なんとか峠を超えたわけなのだが、それでも眠り続けている3日間の間は彼を知る多くの者達にとつては気が気ではない日々であった。

フィオナ・クレイグは夏至祭中出店する予定だった屋台を臨時で休み、ほとんどつきつきりで彼の見舞いを行った。

クレア・リーヴェルトもまた軍務の合間の忙しい中、超人的なスケジュール管理によつてなんとか時間を捻出して彼の病室を訪れた。

VII組の面々とトワ・ハーシエルも当然ながら特別実習の傍ら何度も見舞いに訪れた。

そしてそれはエリゼ・シュバルツアーもまた同じであった。自分達を救出するためにそんな重傷を負った恩人を放つておく程に彼女は不義理でも恩知らずでもない。当然ながら彼女もまた合間を縫つて見舞いへと訪れた。

そんなわけで彼は目覚めると同時に涙ながらにそれを喜ぶフィオナとエリゼ嬢、情報を聞いてすぐさま駆けつけたクレアにVII組の面々、そして泣きじやくりながら、「バカバカバカ。どうしてリイン君はいつつもそんな無茶ばかりするの!?!……本当に生きていて良かったよ」等と言うトワに囲まれて何とも居心地が悪い思いをしたのであった。

だが、リインとしては当惑するしかなかった。何故ならば目覚めた後の彼の体調はすこぶる良かったのだから。

まるで生まれ変わったかのような爽快感と活力が身体を満たして今すぐにも飛び回りたい気分であったのだ。

絶対に安静にしないとダメだと言う周囲を押し切り、見舞いに持ってきてもらった林檎を素手で砕き

「こんな事は有りえるはずが……」と困惑する医師の入念な検査の下、問題ないと信じてもらうのにおよそ1日かかり、ようやく今朝退院できたというわけなのだ。

「その辺りに関しては全く問題ないよ、快調そのものさ。むしろ、怪我をする前よりも調子が良くなった位だ」

それは別に気遣いでも何でも無いただの事実だったのだがエリゼはそう捉えない。

何故ならばそんな事は常識的に考えれば有り得ない事だからだ。人体というのは使われないと驚く程早くに劣化していく、3日間昏睡状態だったのに目覚めたら全快していたなどそんな事は有り得ないのだ。

昏睡状態に陥った程の重傷が3日足らずで治るはずがないし、3日間寝たきりだったのに以前と全く変わらず動ける事など人間ならば有り得ないはずなのだ。

故に、ラインの言葉は自分達に対する気遣いによるものだと捉える。もう治ったから気に病む必要はないと、そう言っているのだと。「……ま、心配なのはわかるけどコレに関しては医師に太鼓判を押してもらっているから心配しなくても平気よ。そうじゃなければ過保護なお姉ちゃん二人が許可するわけないしね」

そしてあの状態のラインを見ていたサラ・バレストラインは訝しがる。

結局あの鬼のような状態と化していた件については本人も何故かはわからないと答えた。

ただ、この有り得ない治療速度に無関係とは到底考えられない、さりとて本人も知らない以上後は本人を良く知る人物に尋ねる位しか術はないだろう。

しかし、家族であるエリオットにしてもフィオナにしてもそしてクレアにしても知らなかった以上、知っていそうな人物となればもはやそれは、血の繋がった実の親位しか……

「むしろ、俺としてはあのまま入院している方が逆に身の危険を感じましたね。

検査の途中から医師の目が血走りだして、「もしもこの異常な回復速度の理由を解明できれば人類の夢たる不老不死も……」だとかブツブツ言い出していましたから」

眉間にしわを寄せながら告げるラインのその様子に周囲は安堵する。どこからどう見ても、それは以前の彼と同じ様子だったから。理

由は不明だが、こうして無事であるならばそれが何よりだと、そう考える。

それはそうだろう、何故ならば彼にはこれまでに培った信頼があるのだから。多少常人離れしたところを見せたからと言って、その程度で気味悪がる程に彼らが培った絆は柔なものではないのだから。

アルフィン皇女にしても、エリゼ・シユバルツァーにしても恩人の身体が無事である事を喜びこそすれ、それを気味悪がる人物ではない。

「理由は良くわからないが、元気そうでよかった」、多少の疑念はあれど、それが彼らの胸のうちの大部分を占める想いであった。

そしてその後に見れたセドリツク皇太子からも改めてアルフィン皇女救出への礼を言われて、以前にもみた仲睦まじき姉弟の様子へと心を癒され、トールズ士官学院の理事たるレーグニツツ知事からも改めて労いの言葉をかけられて、和やかな空気のままにそろそろ出立しようとした、その時

「どうやら、皆お揃いのようなすな」

姿を現したその人物によって、場の空気がガラリと変わる。

一目見ればわかる常人とは違う圧倒的な存在感。

軍の第一線から退いた今持つて衰えが見られない堂々たる体躯。

そしてその両眼に宿るのは何もかもを呑み込まんとする鋼の意志。

“鉄血宰相” ギリアス・オズボーンがその姿を現したのだ。

「アルフィン殿下におかれましては、ご無事で何よりでした。これも女神の導きでありましょう」

「ありがとうございます、宰相。ですがその件につきましては女神の導きよりも何よりも貴方のご子息であるリインさんを始めとする、トールズ士官学院の皆さんのおかげですわ」

故に貴方はまず真つ先に自分を助けるために生死の境をさまよった実の息子を労ってやるわけではないかという皇女の言葉を受けて、オズボーンは微笑を讃えながらリインの方へと近づいていき……

「リインよ、今回の一件については聞いている。良くやってくれた。父として、お前を誇りに思うぞ」

肩からその温もりが伝わる。その大きな手から伝わる温もりは自分の記憶のままだった。

伝えられたその言葉にリインは全てが報われるような気がした。血反吐を吐きながら剣術の鍛錬に勤しんだ毎日も、二人の師の下で知識を蓄えたのも。

今まで自分が重ねてきた研鑽の日々は全て全て全て……この時のためにあったのだと。

涙を流さんばかりに心を歓喜が満たしていた。

「は、はい！ありがとうございます！」

そう応えるリインの姿はこれまで誰も見たことがない年相応の否、年不相応のまるで子どものような笑顔だった。

そこにいるのはトールズ士官学院主席でも、帝国男子の鑑と称されるような硬骨漢でもない、ただ大好きな父親に褒められて喜ぶただの子どもであった。

「しかし……残念ながら、満点をやるわけにはいかんな」

だが、それで満足してはならないと父は我が子に対して伝える。満足してしまえば、そこで終わりだぞと言わんばかりに。

《帝国解放戦線》、今回の騒乱を巻き起こした悪逆なる恐怖主義者共^{テロリスト}。その幹部と思しき者とお前は矛を交えながら、それを取り逃がしてしまったそうだな。些か画竜点睛を欠いた結末だと言わざるを得んだろう」

「……!!」

告げられた父の戒めの言葉にリインは深く恥じいる。そうだ、一体何を自分は浮かれていたのか。

結局今回もまた幹部と思しき連中を自分は取り逃がしてしまっただのだ。

アルフィン皇女を奪還できたのは1をようやく0に戻せたという程度に過ぎない。

今回の事件を巻き起こした《帝国解放戦線》を殲滅出来て初めて勝利したと言えるのに。

未だ何も何一つとして終わっていないのに一体自分は何を満足し

ていたのかと強く拳を握りしめる。

「やれやれ、あまり他人の家庭事情に首を突っ込むのは無粋なんだろうが、流石にそれはいくらなんでもスパルタが過ぎるんじゃないかな、宰相殿。未だ学生の身としては十分すぎるほどに良くやってくれたと思うがね」

「殿下の仰る通りかと。理事として彼の学院での様子について大まかに聞いた限りでは、まさしく士官学院生の鑑と称すべきものです。私も命を救われた身として言わせてもらえれば、閣下の仰る事は余りに要求するハードルが高いと言わざるを得ませんな」

「これは失敬、つい私の息子ならばとそんな風に考えてしまいました。な。いやはや、親バカも大概にしないとイケませんな」

自分の息子だからこそつい期待をかけて厳しくしてしまうのだと父が告げたその言葉を聞いた瞬間にリインは弾かれたように答えた

「次こそは必ずや閣下のご期待へと応えて見せます！貴方の息子として恥じぬように……！」

「ふふ、期待しているぞ。我が息子よ」

そして親子の語り合いを終えたオズボーンは我が子の背後にいる若獅子たちへと視線をやって

「諸君も、今後とも我が不肖の息子とどうか仲良くしてやってほしい。一体誰に似たのか随分と武骨に育ってしまった故、何かと苦勞をかけると思うがね」

ほんの一瞬、その場に居合わせた面々は心が緩むのを感じた。

何故ならば、そう告げた時のオズボーンは本当にただの、どこにもいる息子を案じる父親のようだったから。

鉄血宰相ギリアス・オズボーンとしてではなく、リインの父ギリアスとしての言葉。そんな風に感じたのだ。

だが、そう感じたのも一瞬。すぐさまオズボーンは再び鋼鉄をその身と心に纏って

「そしてこれからも、どうか健やかに、強き絆を育み、鋼の意志と肉体を養って欲しい。

これからの『激動の時代』に備えてな」

告げられた言葉のその圧力に若き獅子達は気圧される。

これまでも多くの人物に出会ってきた。

イリーナ・ラインフォルト、カール・レーグニッツ、ルーファス・アルバレアの学院の理事を務める3人。

生ける伝説とも称される「軍神」ウオルフガング・ヴァンダイク名誉元帥。

そして理事長たるオリヴァルト・ライゼ・アルノール皇子。

皆、「傑物」と称されるに足るだけの優れた人物であった。

だが、そんな彼らと比較してなお目の前に立つ人物は別格であった。

何もかもを呑み込まんとする鋼の意志。それに呑まれないようにするだけで彼らは精一杯であった。

その世に於いて「カリスマ」等と称される、その魔性のような存在感にどこか危険なモノを感じ取って。

それはあるいは本能の挙げた警鐘だったのかもしれない。

ただ、一人リイン・オズボーンだけは告げられたその言葉を臆する事無く受け取り、更なる飛躍を心に誓った。

この父のような鋼の如き強さを必ずや手に入れて見せると、ただ父に憧れる小さな子どものように……

作られた英雄

「英雄」、その言葉を聞いた時に悪い印象を抱くものはそうは多くないだろう。

無論「一人殺せば殺人犯でも百人殺せば英雄」だとか、その在り方を皮肉る言説も中には存在するが、それでも「英雄」という存在に悪印象を抱く者というのは何時の時代に於いても圧倒的な少数派だろう。

何故ならば、彼らは都合のいい存在だから。戦時中において多くの「英雄」が生まれるのは往々にして有利な側ではなく劣勢な側である。そう、国家が「英雄」と呼ばれる存在を求めるのは往々にして自らの政治的な失敗を覆い隠す時なのだ。「英雄などというのは見栄えの良い鍍金を施した生贄の事である」だとか、「民衆は英雄の到来を誰よりも待ち望みながら自らがその英雄となろうとはしない」等といった「英雄」そのものというよりは英雄を讃える国や民衆を皮肉る言説が存在するのも、英雄の誕生には往々にして政治的な理由が介在することと無関係ではないだろう。

そして、皇女救出という功績を打ち立てたリイン・オズボーンもまた、そんな「英雄」になろうとしていた……

「事実の一つであっても真実なんてものは人によって違う」

日課である3つのクオリティペーパーの購読と大衆紙である《帝国時報》へと目を通しながらリインはふとそんな兄貴分の教えを思い出していた。

どの紙面も専ら主題となっているのは先頃起こった帝都の夏至祭、その初日に起こった《帝国解放戦線》の武装蜂起に関するものである。現在帝国には主として三つの派閥が存在する。

一つは言わずと知れた革新派、鉄血宰相ギリアス・オズボーンをリーダーとした中央集権体制と貴族特権の廃止を掲げる派閥である。派閥を構成するのは主に平民出身の高級軍人や行政官僚であり、その改革の恩恵を一身に受けている帝都の平民からは特に絶大なる支持

を誇っている。当然一口に革新派と言っても水面下では軍人と行政官僚の対立などがあつたりするわけなのだが、リーダーたる鉄血宰相の絶大なる統率力も相まって現状その対立はおおよそ健全と言えるレベルで収まっている。

二つ目はそんな革新派へと対抗する四大名門を筆頭とする貴族派である。純軍事的には革新派に対して不利だが、それでも黄金の羅刹と筆頭に優秀な将帥を抱える領邦軍の戦力も侮りがたいものがあり、加えて言うのなら長年良くも悪くも帝国に君臨し続けてきたその影響力は確かなものである。彼らが掲げるのは今までと変わらぬ帝国であり、革新派、特にそのリーダーたる鉄血宰相をエレボニアを破壊する怪物と忌み嫌っている。あくまで鉄血宰相憎しで固まっている派閥であり、水面下ではアルブレア公とカイエン公が主導権を巡って争っており、革新派に比べると些かまとまりに欠けると言える。

そして3つ目は皇道派とも言うべき派閥である。この派閥は主に自分達はあくまで皇帝陛下の臣下であるというスタンスの者達が所属しており、派閥としては貧弱も良いところなのだが、皇室という權威を掲げている事も相まって他の両派もあまり強く出れないところがあり、そういった事情も相まって貴族であっても貴族派とは距離を置きたいような貴族、鉄血宰相の性急さにどこかついていき難いものを覚えている官僚などが所属している。唯一固有の武力を持っていないが、《光の剣匠》ヴィクター・S・アルゼイド、《アルノールの守護神》マテウス・ヴァンダール、《軍神》ウォルフガング・ヴァンダイク名誉元帥といったエレボニアにおいて武に携わるものならば知らぬものはいない実力者がいることもあって両派にしても無視できぬ影響力を有している。おそらくこの派閥の睨みが効かなくなつた時が、ついに革新派と貴族派の戦端が開かれる時であろうというのが大方の予想である。

そしてリインが目を通した3つのクオリティパーパーもそれぞれその3つの派閥の主張を代弁する事で有名な三誌であつた。自派閥のものだけ読んでいれば心地いいかも知れないが、どうしても得られる情報は偏つたものとなる。多少不快になる事があるろうとも、必ず新

間は複数のものに目を通せ、これは二人の師どちらにも教えられたことであった。どの紙面も皇族の襲撃という暴挙を行った《帝国解放戦線》なる悪逆なるテロリスト共を厳しく非難しているという点では同じだが、アルフィン皇女殿下が一時誘拐されかけたという事件について触れた時に各紙の特色が出ていた。

まず一冊目、革新派寄りで知られる《プロレタリア・フロイント》は園遊会の警備を担当していた近衛軍が領邦軍から選抜されていたものだったことや、セドリツク皇太子殿下とオリヴァルト皇子に対する襲撃は鉄道憲兵隊指揮の下見事撃退した事から原因は近衛軍にあつたとし、もしも両皇子殿下の警備同様に鉄道憲兵隊が指揮していればそのような事態にはならなかったであろうという正規軍の退役軍人の論客の意見が掲載されていた。

続いて二冊目、貴族派寄りで知られる《エーデル・ヴァイス》ではそもそも帝都でこのような大規模なテロを起こしてしまった事自体が革新派の責任であり、警備に不備があつた証拠である。アルフィン皇女の誘拐を一時でも許す事になつたのはその後手に回つた警備体制の不備の煽りを食らつた形であり、責任は全体の警備を担当した鉄道憲兵隊にこそ有るのだから、その責任の所在を明らかにすべきであるというこちらは領邦軍出身の退役軍人の論客の意見が掲載されていた。

そして三冊目、皇道派として知られる《インペリアル・タイムズ》ではそもそも指揮系統が鉄道憲兵隊と近衛軍という二つに別れてしまつていた事にこそが原因がある。こうして皇女殿下が誘拐されかかるという許されざる失態に際してなお、互いに罪をなすりつけようとしている貴族派と革新派の対立こそが全ての元凶である。両派は共に頭を冷やし、互いに歩み寄るべしという《アルノールの守護神》と名高きマテウス・ヴァンダール大将の意見が掲載されていた。

どの意見にも理はあるだろう。リインはと言えば姉を擁護したいという私人としての思いで言えばプロレタリア・フロイントの意見に同意したくなるし、一方エーデル・ヴァイスのそもそもこれ程の騒乱を起こす事を許した事自体が失態であり非難に値するというのにも

ある程度の理はあることを認めていた。……裏にあるであろう思惑はともかくとして。そして軍事的に見ればマテウス大将の意見には同意する他ないだろう、そもそもリイン自身が園遊会こそが警備の穴であると考えた理由がまさしくそれであったのだから。流石はクオリティパーパーというべきか、どの紙面もそれなりの理を持つてある一定の説得力を有するものとなっていた。それこそ紙面の内容を鵜呑みにしてもおかしくはない位に。

そして最後の帝国時報へと目を向けた瞬間、リインはなんとも言えない気持ちになった。そこには余りにも見覚えのある写真が写っていたからだ。具体的に言うとう毎朝鏡を見ると目にする顔である。そう、他ならない自分の事が写真と共に紹介されていたのだ。アルフィン皇女をその身を呈して救出した「英雄」として。

意味じくもエーデル・ヴァイスでの論客が指摘したように、革新派のお膝元である帝都にて起きた今回の騒動は革新派にとって大きな失点となった。無論、そこには《プロリタリア・フロイント》や《インペリアル・タイムズ》で指摘されたような様々な事情や要因が働いたのは事実だが、それでも大多数の帝国人からすると帝都というのは革新派のお膝元であり、そこで起こった騒乱は革新派の威信を大きく削いだ。

そしてそんな状況下を何とかするために革新派は古今東西における常套手段をとった。すなわち「英雄」を祀り上げるといいう手段である。そして、その対象としてリイン・オズボーンはこの上なくうってつけであった。

鉄血宰相唯一の実子にして自身もトールズ士官学院主席という曇りの一点も見られない経歴

忠君愛国、質実剛健を地で行く帝国男子の鑑ともいえる性格と素行端正ながらも引き締まった精悍な顔立ち

守護の剣を掲げるヴァンダール流の若くして中伝という実力
そして、アルフィン皇女殿下を救出したという功績

どれもこれもが革新派にとっては文句のつけようのないものであった。

かくしてリイン・オズボーンは革新派勢力の全面的なバックアップを受けて、皇女を救出した“若き英雄”となったのであった。

悪逆なるテロリストからアルフィン皇女殿下を救出した、リイン・オズボーンこそまさしく革新派の、いや帝国の誉れであるというわけである。ちようど通商会議を前に控えているからか、昨年自分が政府に提出したクロスベル自治州に関する論文までもが掲載され、「未だ学生とは思えぬ卓越した識見。将来は軍を担う幹部となる事疑いなしである」等と言った軍の高官のコメントなども載せられている。

リインはというと内心少々複雑であった。自分の功績を称賛されて嬉しい気持ちはある、こうして自分が持ち上げられている事で間接的に“英雄の師”である義姉の株が上がり、今回の警備の責任を問われて苦境にある義姉の役に立っているという事も嬉しい。されどこゝうもあからさまに持ち上げられると、流石に落ち着かないというのが本音であった。

（まあ、あまり気にしてもしょうがないな）

どこまで言つても自分が父の息子であるという事実からは逃れられないし、そもそも逃げようと思つた事はリインは一度たりとてない。革新派からは否が応でも父の後継としての期待を受けることになるだろうし、逆に貴族派からは怨敵として憎悪を買うことになるだろう。そしてそれは、自分が軍で高みを目指し、実績を積み上げるに比例して加速し続ける事となるだろう。

「期待しているぞ」とそう告げてくれた父の言葉を思い出す。父は、自分などとは比べ物にならないレベルの憎悪と崇拜と言つた感情を受けながらも、それら総てを呑み干してああも、堂々としているのだ。ならば、自分とてこの程度でひるんではいられないだろう。決して奢る事も萎縮することもなく、どこまでも堂々と鋼の如き意志で自分を律して前進し続けるのみだ。

そしてそのためには何時までも中伝で足踏みをしているわけにはいかないだろう。“達人”と、そう称される領域をそろそろ目指さなければならぬ。幸いなことに明日から士官学院は5日間の夏季休暇となり、貴族生徒は申請すれば更に長期の休暇を得る事もできる。

普段であれば馬鹿馬鹿しい特権だと思うところだったが、今回ばかりは自分もその特権を利用させて貰うとしよう。

幸いなことに3日間の眠りから覚めてから、まるで生まれ変わったかのように自分の身体は調子が良かった。

身体能力が軒並み強化されたローおかげでよりハードな鍛錬を課す事ができるようになった。

3時間足らずの睡眠でも全く生活をおくるのに支障がなくなつたローおかげで睡眠に費やしていた時間をより鍛錬や勉強へと回せるようになった。

死線を乗り越えたためか、妙に頭が冴え渡り問題を問いている際にもまるで答えが「見える」かのような感覚を抱くようになった。

直感が研ぎ澄まされて、漠然とだがまるでこれから先何が起こるかかわかる予知じみた感覚を抱くようになった。

そして魔竜との戦いの際のあの膨大な力の本流。

今の自分ならばきつと皆伝へと至る事が出来る、そんな予感を覚えている。

だからこそ、奥義伝授を頼み込むならば今しかないのだ。ヴァンダール流宗家総師範マテウス・ヴァンダールが帝都へと滞在している今しか。

授業を欠席した分は戻ってから取り戻せば良い、今の自分ならばおそらく、そう難しい事ではないはずだ。何せ、1を聞くことで10を知る事ができるようになったのだから。

(ああ、でもそういういえば……)

夏季休暇にはまた互いの家に挨拶しに行こうと、そんな約束を大切な少女と交わした気がする。

「おじさんとおばさんも会えるのを楽しみにしているみたい」とそんな事を優しく微笑みながら言っていた記憶が一瞬ラインの心を揺さぶるが……

「私の息子ならば」とそう告げた父の言葉が再びその心に鋼を纏わせる。

父が自分に期待してくれているのだ、ならば足踏みをしているわけ

にはいかないだろうと心に灯り、焰となったその意志は止まらない。
どこまでも貪欲に、肉体の次は技だと言わんばかりに強さを求める
のであった……

鉄血の子と《アルノールの守護神》

ヴァンダール流。

それは代々皇室守護を務めるヴァンダール家が起こした守護の剣。その武名は帝国全土へと知れ渡っており、帝国各地にもいくつもの道場を有する帝国を代表する二大流派の一つである。現在総師範を勤めているマテウス・ヴァンダールは帝国正規軍にて武術総師範も勤め、大将の地位にも位置する高官だが、「自分は皇帝陛下の剣である」と常々公言しており、革新派、貴族派双方へとその絶大なる武名を持って睨みを利かせている。当然のように《獅子心十七勇士》にも列席されており、《光の剣匠》共々帝国で最強の武人は誰か？という話題になれば必ずその名が挙がる人物でもある。

そしてそんな人物と今、リインは帝都にあるヴァンダールの練武場にて向かい合っていた。

「……約束通り、私に一太刀でもいれられれば奥義の伝授を行おう。だがそれすら出来ないようであれば、未だその資格なしという事だ、良いな」

目の前の若者が告げた奥義の伝授を願いたいという言葉。本来であれば奥義の伝授などというのは師が弟子の成長を見て行うものだ。この者ならば奥義を授けるに足ると判断されて初めて、その資格を得る。

故にリインが告げた奥義の伝授の願いなど本来であれば「思いつがぬ未熟者」と一喝されて終わりのところではあつたのだが……

「は、承知しております。忙しい身でありながら、私の身勝手な要望へと応えてこのような場を設けていただき、感謝いたします」

「構わん。功には報いるところがなければならん」

されど今回マテウスにはリインのその我儘を無碍に出来ない理由があつた。

それはリインがアルフィン皇女救出という功績を打ち立てたためである。ヴァンダール家は代々皇室守護役を務める家であり、皇室に対するその忠誠心は《アルノールの剣》等と讃えられる程に絶対的な

ものである。だからこそ、今回マテウスはアルフィン皇女を救出するという功績を成し遂げたリインの我儘を聞き届けた。

元よりマテウス自身のリインへの評価は高い。《鉄血宰相》の推薦で7年前から道場へと通いだして、決して奢ること無くその実力を練磨し続け、皇室と祖国に対しても確かな忠誠を抱くこの愛弟子の事をマテウスもそれなりに気に入っていた。あいにく自分は忙しい身故、指導はもっぱら妻であるオリエへと任せていたが、それでも息子であるクルトが世話になっていく事も相まって、いずれは奥義の伝授を行おうと思う程度にはこの愛弟子の事をマテウスは買っていた。

故に、「自分に一太刀いれられれば」という条件付きではあるが愛弟子の我儘を聞き届ける事としたのだ。

向かい合う両者の間に鬨気が高まっていく。そしてリインは双剣をマテウスはその大剣を構えて……

「ヴァンダール流中伝リイン・オズボーン！」

「ヴァンダール宗家総師範マテウス・ヴァンダール」

「推して参る」

宣言と共に師弟は此処に激突を開始した。

ヴァンダールの剣は守護の剣であり、その真価は後の先を取ることこそある。

しかし、これは決して自ら攻撃することが出来ない消極的な剣術を意味しない。

「攻撃こそ最大の防御」という言葉があるように、主を守るならば敵を殺す必要があるのだ。

ただ防御をしているだけでは何時まで経っても主を狙う脅威が取り除かれないという事なのだから。

主を護るために敵を殺す、それこそが守護の剣の本質である。

そして、後の先を取る事に長けているというのはそれだけ見切りに長けているという事でもある。

相手の行動を、体格、骨格、筋肉の動き、得物の特徴、そして相手の心や感情から意識を把握し見切る事、それこそがヴァンダール流の極意。

つまり、こうも言えるだろう。相手の動きを見切る事ができるのならば、その挙動を察知して相手が攻撃へと移るその前にこちら側の攻撃を先に叩き込むことも可能であると。

故にこそ後の先を取る事に長けた流派というのはあくまで中伝までの段階。ヴァンダール流を極めた皆伝者においては後の先を取ることを極めたが故の先の先、という矛盾のような現象が発生する事となるのだ。

「才はある。積み重ねた確かな研鑽も見て取れる。されど、その程度ならば奥義を受け継ぐには未だ能わず」

そして、そんなヴァンダール流を極めた総師範の猛攻にリインは晒されていた。

「……………ッー」

まるで何もかもが見切られているかのような絶望感。何をどう足掻いても察知されてその出鼻をくじかれる。

目覚めてから強化された反射神経、そして研ぎ澄まされた直感と言った諸々がなければとつくの昔に終わっていただろう。

リイン・オズボーンの成長は目覚ましい。天性の才能、飽くなき向上心により一時足りとも止むこと無く続けた弛まぬ研鑽、互いに切磋琢磨し合う剣友、得難き師、くぐり抜けた死線、そして生死の境を乗り越えてから手に入れた強靱な肉体と超感覚。全てがリインを成長させ、その実力はすでに学生という領域を超えて「達人」と呼ばれる頂へと至らんとしている。

しかし

「どうした、守勢に回っているばかりでは私に一太刀入れる事など出来はせんぞ」

マテウス・ヴァンダールはそんな「達人」と呼ばれる領域の中でも最高峰たる武の理に至りし者。未だリインとの間には歴然たる実力差が存在する。ならばとばかりに魔竜の時に使ったあの力の使用を試みるもどういうわけだか、まるで応えようとしな。何かが決定的に足りていないかのよう。

「……………わからぬな、何故それ程までに焦る。貴殿はその年にしては十

分に強い、そこまで焦らずともいわずれ必ずや皆伝へと至る事が出来るだろう」

それはお世辞でも何でも無い真実だ。リイン・オズボーンは彼が見てきた弟子の中でも屈指の剣才を持つている。そして弛まぬ研鑽を積んできたのも見て取れる。いくら手加減をしているとはいえ、こうして自分と打ち合いながらも未だかろうじて持ち堪えられているのがその証拠だ。おそらくもう数年も経たぬうちに自分の方から奥義を自ずと授けていただろう、それにも関わらず何故それ程までに強さを求めているのか、それがマテウスには不可解だった。

「何故？何故かと問いますか師よ。そんなもの今の状況が全ての答えですよ！貴方にこうして圧倒されているというのに一体何が十分な強さのものか!!」

学生にしては、未だ未熟な若者としては十分な強さ。それが一体なんだというのかと言わんばかりに、今こうして軽くあしらわれている自分が不甲斐なくてたまらないとばかりにリインは師の問いに烈火の如き意志を叩きつける。

「守護の剣を掲げる者に敗北は許されない。何故ならば我らの敗北はすなわち我らが護りたいと願うものの死も同時に意味するものなのだから！」

それは剣を授けられた際に教えられた事、どれほどの勝利を積み重ねようと時にたった一度の敗北で砕け散る事となるのが戦いなのだと。そう教えられた

「今の俺はこうして貴方に圧倒されている。ならば、相対する敵の中にマテウス・ヴァンダールがいないとどうして言い切れるのですか!!」

《C》と名乗った解放戦線のリーダーと思しき男を思い出す。あの男もまたかなりの実力者であった。おそらくはサラ教官と同等あるいはそれ以上の実力を有しているとそう思えるほどの。

ならば、自分はそれよりも強くならなければならない。未だ学生だから等という事を関係ない。何故ならば、自分は鉄血宰相ギリアス・オズボーンの息子であり革新派の“英雄”なのだから。

期待しているぞと告げられた父の言葉を思い出す。ならば、自分はそれに応えなければならぬ。

もう二度と、大切な存在を失わないためにも。

求められるのは学生としては優秀などという領域ではない。目の前に立つ人物のような圧倒的な力。どのような敵相手だろうとも打ち砕き勝利を齎す絶対的な存在。

どれほどの脅威が相手だろうと胸を張り堂々と大切な存在を守り抜く事のできるお伽噺の「英雄」。

それこそがリイン・オズボーンの目指すべき境地に他ならないのだから、故に奮起しろ。覚醒しろ。目の前に聳える師という巨大な壁を乗り越えて、いざさらなる高みへ至らんと決意する。

感じるのは再び胸の奥より溢れ出る焔の如き勝利への飢え、自分自身さえも焼き尽くしかねないそれへとリインは再びその手を伸ばして……

「神気合一」

変貌するリインの肉体。

内より溢れ出るその力はリインの肉体を内側から焼くが、それでも以前に比べればその反動ははるかにマシとなった。

それは自らの肉体が強靱になったというのもあるが、出力自体が以前に比べて落ちていたためだろう。

絶対に負けるわけにはいかなかった魔竜との死闘の際とは異なり、今回のこれはあくまで稽古に過ぎないのだから。

力を求めるその思いの深度にも明確な差が生まれる。

「オオオオオオオオオ」

しかし、そんな事情も今のリインには関係ない。

全身全霊でもって突撃を敢行する。目の前の相手に区々たる小細工等意味がないのだから。

届きうるとするならば、それは自分の全身全霊の一撃以外にありえない。

そしてそんな弟子の不可解なその変貌にもマテウスは一切動じること無く明鏡止水の境地で迎え撃ち

「破邪顕正！」

放たれた大剣の一撃が容赦なくリインの意識を刈り取った。

・・・

(危ういな……)

マテウスはそう実感する。今のリイン・オズボーンは非常に危うい。どこまでも貪欲に強さを求めている。

剣は凶器であり、剣術は殺人術。それは確かな真実だ、守護の剣という題目を掲げるヴァンダールの剣でもその本質とはすなわち護るために敵を殺すという事なのだから。

されど、その本質を理解した上でそれでもなお「誰かを護る」という綺麗事を掲げてこそその守護の剣なのだ。

なんのために強さを求めたのかを忘れて、剣術の本質ばかりを追求してしまえば後は修羅道へと転がり落ちていくのみ。その才も相まって「怪物」を生んでしまうだろう。

そしてマテウスから見て今のリインはその端境に位置するように思えた。一歩間違えば、先程発したあの鬼の如き力に目の前の愛弟子は呑み込まれかねないだろう。

故にあるいはそれを理由に奥義の伝授を断るべきなのかもしれないが……

(しかし、そうなった日にはより一層先程の力へと固執するやもしれぬ)

リイン・オズボーンの力への飢えはもはやありきたりな言葉だけで止まる程度のものではない。

もしも、ここで自分が奥義の伝授を断ればそれこそますます一層先程の力への傾倒を深めるだけだろう。

故に、ここはあえてリスクを覚悟した上で奥義の伝授を行うとマテウスは決意する。

少なくとも、強さを求めながらもその剣には、確かに誰かを護るためという想いが込められていた。故にマテウスはそれを信じてみることにしたのだ。

(何よりも、約束は約束だしな……)

それは、かすり傷程度のささやかな傷だった。されどリインの剣は確かに自らへと届いていたのだから、自分も男としてその約束を守らねばならぬだろう。

精一杯の思いを伝えて、この若者が修羅道へと堕ちぬように祈りながら。そうマテウスは嘆息しながらも奥義伝授の決意をするのであった。

鉄血の子と守護の剣

奥義の伝授は苛烈を極めた。修行期間中、文字通り剣の鍛錬のために総てを注ぐ勢いでリインはそれに没頭した。優しい大切な少女に約束が果たせない旨を伝えて、悲しそうにだけど堪えるようにしてそれを了承してくれた少女の顔や、休み中道場で寝泊まりする事を伝えてこの世の終わりをするような義姉に胸を痛めながらもそれらを振り切り文字通り全身全霊でもって挑んだ。

行われた奥義の伝授はどこまでも実戦形式のスパルタなもの、元より基礎に関して言えばリインは既に十分以上に出来ているため、いままさら改めて行う程のものではない。故に行われたのは実戦形式の立会。この技とこの型はこの場面ではこう使うのが有効だから、さあやってみると言わんばかりに帝国最高峰の武人マテウスから叩き込まれる。そしてそれを再現しようとしてやってみれば、「そうじゃない」と言わんばかりに見惚れんばかりに洗練された技が自分の身に刻み込まれる。

そしてマテウスが所用で外す際には、師範代であるオリエや門下生との手合わせを行った。リインは目隠しをした状態で。曰く、視覚のみに頼らず気配を察知してそれを下に戦うための訓練である。これが出来るといった時、貴殿の剣は大きく向上するとそう言われてしまえばリインがやる気にならないはずもない。

日頃厳しい訓練を課されている門下生たちをして青ざめるような、地獄の如き修練へとリインは明け暮れていた……これを乗り越える事で自分は強くなれるとどこまでも飽くなき向上心と鋼の如き意志を以て全身全霊で。

そしてリインがそんな日々を送っている頃、5日間の短い夏季休暇を挟んだ後、長期休暇を取得した貴族生徒を除きツールズ士官学院では授業と訓練が再開されていた。どういう風の吹き回しかアレほど嫌っていたそういった貴族生徒にのみ与えられた特権を利用して、合

計で20日に及ぶ休みをとった一人を除き、技術棟へと集まった友人たちにトワ・ハーシエルはある相談をしていた。

「ふむ、つまりリインの奴がトワの実家に招待されるといってもなく羨ましくもけしからん約束をしながらそれを破ったと、よし、戻ってきたら一発殴ろう」

笑顔とは本来攻撃的なものである、そんな言葉を実感させる物騒な言葉を爽やかな笑顔を浮かべながら告げる親友の様子に相談をしたトワは慌てる。

「そ、それは止めてよアンちゃん。リインくんもその件についてはちゃんと謝ってくれたし、私も納得しているんだから……」

納得していると言いながらもどこかその表情には陰りがある。理屈の上では納得できている、されどそれでもやはり寂しさを覚えるのが人の情というものである。

「おいおい、そうやって甘やかすとつけあがっていつてそのうち家に帰ってきてても「風呂。飯。寝る」しか言わなくなる亭主関白の生きた見本みたいになるぞー。一回その辺ガツンと言った方が今後のためって奴だぞー」

「あははは、確かにリインは放って置くとそんな感じの如何にも仕事人間って感じになりかねないよね。奥さんがしつかりと手綱を握っておかないとね」

「も、もう……クロウ君たちもそんなおばさん達みたいな事言ってる……」

友人たちのからかいへとトワは顔を真赤にしてうつむく。

こんな風に囃し立てられているが、実際どうなのだろうか。

何時までも自分と彼は一緒に居られるのだろうか？そんな疑念が頭をかすめる。

何と言っても彼は……

「しかしまあ、普段見ている顔だということにこうして記事に載っているとまるで別人に思えるね」

帝国時報に書かれた若き「英雄」リイン・オズボーンの特集記事、手元にあるそれに視線を落としながら、アンゼリカはため息をつく。

「帝国男子の鑑、トールズ士官学院主席の俊英、うーん書かれている内容に一切嘘がないってのがまた性質が悪いっていうか……」

「10年に一人の逸材。配属先は未だ未定だが、それでも帝国軍をいずれ背負って立つ事疑いなし」と軍の高官も絶賛と来たもんだ。ちよつとした芸能人みたいな扱いだなこりゃあ」

革新派の行ったリイン・オズボーンを「英雄」と祀り上げる事でアルフィン皇女殿下誘拐という失態から目を背けさせるという作戦は革新派の予想通りの効果を挙げた。

若い女性からはその端正な容姿と精悍な眼差しから人気となり、年配の男性や女性からはその如何にもな帝国男子の鑑と言える優等生的な発言が好評を博し、リイン・オズボーンは一躍時の人となった。そして人気になれば当然、人々はその情報を求め、新聞も載せれば売れ行きが好調になるのだからとばかりに連日リイン・オズボーンの特集が組まれる事となったのだ。

そしてそれがトワの心に逆に陰りを生む。ここ最近の様子と合わせて彼がどこか遠くへと行ってしまおうのではないかと……そんな不安が頭から離れないのだ。

「しかし、トワとの約束を破るだなんて流石に今までなかった事態だね」

「あいつはクソ真面目だからなくこうやって『英雄』扱いされているんだから自分はその期待に応えないとならない！だとかまた思い込んでいるんだろうなあ」

「……それもあると思うけど、それ以上にお父さんからの期待に応えたいって思っているんじゃないかな」

「お前を誇りに思うぞ」とオズボーン宰相に言われた時にリインが浮かべた、これまで見たこともないこどものような笑顔、それを思い出してトワはポツリと眩く。

「ふむ……リインのお父上と言えば、言わずと知れたかの鉄血宰相殿だが……」

「うん……凄い人だった。噂では聞いていたけど本当に噂以上だったと言うか……」

常人とは異なる圧倒的な存在感と総てを飲み干さんとする鋼の意志を宿したその眼光。

トワ自身はどちらかと言えば、皇道派に位置するスタンスだが、革新派の人達が崇拝するのも納得だとそう思ったのだ。

「それで、その宰相殿とリインに何かあったのかい？」

「うん、最初はねオズボーン宰相に褒められてリインくんもすごい嬉しそうにしていたの、それこそ今まで見たことがないような笑顔を浮かべていた。」

でもね、その後でオズボーン宰相が言ったんだ。「テロリストを取り逃がしてしまった以上、満点をやることは出来ない」って」

「それはまた……」

あまりのスパルタぶりにジョルジュが流石に引いた様子を見せて

「ふん、7年ぶりに会った実の息子に言うことがそれとはな。つくづく容赦だとか加減だとかって言葉を知らねえみたいだな、麗しの鉄血宰相殿は」

鉄血宰相に対して思うところのあるクロウは仏頂面で忌々しそうな様子を浮かべる。

「……なるほどね。そして我らが麗しの宰相閣下の息子殿はそんな父親からの期待にクソ真面目にも応えないとならないと思っっているわけだ。全く親の勝手な期待など無視すれば良いものを」

「アンが言うと言得力があるね、本当に」

四大名門ログナー侯爵家の息女、そんなもの知ったことかと言わんばかりに人生を謳歌し、父の侯爵家の息女として相応しく最も淑女としての作法をく等と言った説教などどこ吹く風、嫌な見合い話など見向きもせずにそのままゴミ箱へと放り捨てる自由人アンゼリカの言葉にジョルジュは呆れとも感心とも取れる眩きを漏らす。どこかその立場に囚われない生き方に羨望の色を覗かせながら。

「ま、トワが何を心配しているのかは良くわかったよ。戻ってきた一つ、皆で遊びにでも行こうじゃないか。そしてやたらと背伸びしたがついている我らの友人に思い出させてあげよう、学生時代の今だからこそ、いや今しかできない事の楽しさってやつをね」

「アンちゃん……えへへ、そうだね！そうすればリイン君もきつと前みたいに戻ってくれるよね」

「今しか出来ない青春か……ああ、本当にそうだね。僕らも二年生でもうじき学院生活も終わるんだから、それまでの間に精一杯思い出を作っておかないとね」

「……はは、全くちよつとくさすぎるんじゃないかねえのか？」

いつか終わるとはわかっている。されどだからこそ今を大事にしようとする四人は約束するのだった。きつと、此処にはいない大切な友人も同じ気持ちだと、そう無邪気に信じて……

「これにて奥義伝授を終了とする。20日に及ぶ厳しい修練へと良くぞ耐えた」

「はい、ありがとうございますございました師範」

息を荒げながらもリインは目の前の師範へと礼を述べる。

「私から貴殿に教えられる事はこれにて全てとなる。これより先は自分自身でその剣を磨いて行かなければならない。そうすればいずれ、貴殿ならば理に達する事も出来るだろう」

改めてマテウスは目の前の愛弟子の剣才、いやその執念へと感嘆する。この20日余り、マテウスはそれこそ地獄すら生ぬるい修練を愛弟子へと課した。元より無茶苦茶な要望をしたのはそちらなのだ、ならばこの程度乗り越えてみせろと言わんばかりに。そして目の前の愛弟子はそれを見事に乗り越えた、才能ではない、他ならないその鋼鉄の如き意志を以て。素晴らしい、故に恐ろしくもあり危うくもある。

「貴殿はこれにて“達人”とそう称される領域へと足を踏み入れた。故に改めて伝えておこう、どれほど綺麗なお題目を掲げようと剣は凶器であり、剣術は殺人術。如何に守護の剣というお題目を掲げようと我ら武人がするのは人殺しに他ならない。その本質から目をそらすてはならん」

それはヴァンダイクからも告げられた軍人としての心構えとも似ている。正義は人を何よりも酔わせる。正しい事のために自分は力

を使っているという実感は振るう剣をやがて軽くさせていき、使い手を凶行へと走らせる。故に、あくまで自分のやっていることは人殺しに過ぎないだという事、それを忘れてはいけないのだと告げるマテウス言葉にリインは頷く。覚悟はしている、どれだけ言い繕おうが自分のする事はそういう悪行なのだ。そしてその避けられぬ「必要悪」を担う事こそが軍人の役目なのだから。祖国と父のためにその手を穢す覚悟はどうに出来ている。

「だが、それと同時にその本質に吞まれてもいかん。良いか、我らが掲げるのは守護の剣である。誰かを護りたいと言う心、それを見失ってはいかん。その誇りこそが我ら武人をあくまで人足らしめるのだ。理想を見失ってしまえば、後は鬼や修羅へと堕ちるのみよ」

そうだ、大切な人達を守り抜くためにこそ自分は強さを求めた。エレボニアの民の幸福を輝きを、そして何よりもあの優しい大切な少女を笑顔を守り抜けるならば例えこの身が焰と化しても――

「そして、最後にその上で自らの身も守り抜かねばならん。例え大切な者を守りきれたとしても、自らが命を落としてしまったら、それは守護の剣としては半人前も良いところよ」

そこで今まで師の言うことに同意し続けてきたリインは一瞬呆然とする。何故ならばそれはリインがまるで予期していなかったことだから。

「どうした、何を呆けている。当たり前前の事であろう。守護の剣を担う者が途中で死んでしまったら、それ以後一体誰がその者を護るのだ。何よりも命を護られた側の気持ちはどうなる。」

自分のために誰かが死んだというその事実を一生その者を背負っていかねばならんのだぞ。故に守護の剣を掲げる者は自らの命を軽んじてはいかん」

リインの脳裏に過るのは自分が目を覚ました時に涙ながらにそれを喜ぶ義姉たちの姿。本当に良かったと心から自分の生還を喜ぶ姿。

ああ、そういえば自分が助けた少女も心から安堵したような表情を浮かべていたなとその事を思い出す。

「……仰る事は最もですが、でしたらロラン卿はどうなるのですか？

あの方こそまさに帝国の武人にとっての目標と言つていい存在だと思つているのですが」

ロラン・ヴァンダールは自らの命と引き換えに主君たるドライケルス帝の命を救つた。そしてドライケルス帝はそんな親友に報いるために無数の名誉を送つた。

彼の名を冠した《ロラン・ヴァンダール勲章》もその一つだ。ロラン・ヴァンダールこそまさに忠臣の中の忠臣。武人の鑑とも言える存在であるとそう多くの書では称賛されているのだが……

「逆に問うがロラン卿が死んだことをドライケルス帝が嘆き悲しまなかつたとしても貴殿は思うのか？」

「それは……!?!」

そんな事は有り得ない。自らの親友たるロランを失つた時のドライケルスはそれこそ酷い落ち込みようだったといくつもの史書に記されている。

あるいは、そのままへし折れてしまうのではないかとそう心配する者さえも居た等と記される位に豪放磊落で知られる獅子の心を持つ皇子は深く嘆き悲しんだとされる。

度々、「もしもロラン^{アイッ}が居てくれれば……」等とそう、彼らしくもな
い事を漏らす事さえもあつたと。

「そういう事だ。ロラン・ヴァンダールは確かに我らヴァンダール家にとつても尊敬すべき偉大なる先祖よ。自らの命さえも主君のために捧げた彼の献身は讃えられるべきであろう。

だが、それでもヴァンダール流の総師範とあえて私は言おう。自らの命と引き換えに護るようでは半分しか護れていないのだとな」

帝国中から武人として、臣下としてまさに鑑だと讃えられる偉大なる先祖の最期に駄目出しを行う師の言葉にリインは思わず呆然とする。

「だからこそ言おう。守護の剣を掲げる者ならば生きる事を決して諦めるな。これが、師として貴殿に最後に贈る言葉だ。

そして、これを以てヴァンダール宗家総師範として此処にリイン・

オズボーンをヴァンダール流皆伝者と認める。以後守護の剣を掲げる者として恥じぬよう、その剣を振るう事だ。なんのために剣を取ったのか、それを決して忘れぬようにな」

「はい……」指導ありがとうございます」

最後に告げられた言葉、自分が死ねばそれを悲しむ人が居るのだという当たり前の事実。

その言葉に泣きじゃくりながら自分の生還を喜んでくれた少女を思い出し、此処にリイン・オズボーンはヴァンダール流皆伝の資格を得るのであった。

父の想い、宰相の言葉

20日間という強行軍にて奥義の伝授は無事済み、リイン・オズボーンは若くして皆伝へと到達した。

そしてこれは同時に彼がある任務へと抜擢される事の決定も意味していた。

そもそも本来であればリインは貴族生徒用の特権をフル活用して奥義の会得に一ヶ月かける予定だった。それが何故20日間という強行軍で行われたのか、それにはある事情が存在していた。

夏季休暇へと突入し、帝都へと帰省したリインは義姉であるクレアに連れられて帝都のバルフレイム宮にある宰相執務室を訪れていた。一体何事かとは思いつながらも、敬愛する父に呼ばれたリインの選択など当然一つである。今にもスキップをしそうな位に弾む心を抑えながらもあくまで息子としてではなく一士官学院生として宰相へと接する様勤めていた。

「ふふ、早い再会となったな。我が革新派の『若き英雄』よ。まさかとは思うが、『英雄』等と持て囃されている事で天狗になってはいないな」

「まさか、未だ皆伝にも至らず閣下からも満点を貰えていない身。この程度で増長する事などとてもではないですが、出来ませんよ」

不敵に笑い合う親子に傍で聞いているクレアは苦笑を浮かべる。この光景を見れば、目の前の二人が親子である事を疑う人間は誰もいないだろうなとそんな思いを抱いて。

「ならば良い。さて本題へと入ろうか、近々クロスベルで行われる通商会議については当然知っているな」

「ええ、それは無論。……最もあくまで知っているのは公式発表の内容程度ですが」

『英雄』等と持て囃されようと現状のリインはあくまで士官学院生に過ぎない。

当然独自の情報網など持っているはずもなく、あくまで彼の情報ソースは新聞と言った情報メディア

後は時折会う情報局の兄貴分の齎すもの位だ。

「私の護衛としてそれに同行する気はあるか？」

告げられた言葉に一瞬リインは忘我へと陥る。それはリインにとってはこの上なく望外の事だったから。自分が父の護衛となる、すなわち尊敬する父を自分の手で護れる等これ程の喜びがあるだろうか？

「どうなのだ？可憐なアルフィン皇女殿下ならばともかく、このようないかつい男を護る等ごめんかな？」

「め、滅相もございません！身に余るあまりの榮譽にただただ歡喜するばかりです！粉骨碎身励ませていただきます!!」

見ているクレアの方も思わず嬉しくなってしまうような心の底から喜色に満ちた笑みを浮かべ、声を弾ませながらリインは答える。そしてそんな光景を見てクレアは「ああ、大人びてきてもやはりこの子は昔のままだ」と安堵する。やはり、あんな鬼のような姿など目の前の弟には似合わない。

「ふふ、ならば決まりだな……と言いたいところではあるが、お前は私の血を分けたただ一人の息子だ。そして実の息子を護衛へと抜擢するとなれば要らぬ誤解を招きかねない。それはわかるな」

「……実力ではなく、我が子可愛さ故の私情による依怙贖と取られかねない」と

「そうだ、そしてそれは我ら革新派にとっては絶対に避けねばならぬ事だ」

重々しい父の言葉にリインは無言のままに頷く。革新派とは血統によって特権を有する貴族制から本人の実力によってその地位が定まる社会をこそ目指して一致団結している派閥だ。その派閥のリーダーが我が子可愛さに依怙贖をしたとなれば、それは派閥に大きな動揺を生むだろう。

結局はあの方も貴族と変わらぬのかと失望する者も出るかも知れない。そして自分がそんな風に自分が父の足枷になるなどリインにとっては絶対に避けねばならぬ事であった。

「故に、お前は自らが血縁によるものではなく実力によって抜擢され

ただと周囲に示さねばならない。そんな邪推が入る余地など一切残らぬように。

我が子だから私の護衛になれたのではない、護衛を務める優秀な士官候補生がたまたま息子だっただけだと。そんな風にな」

そこでオズボーンは試すような目でリインを見据えて

「10日前だ。通商会議が開かれる10日前の8月20日までに見事お前の修めている守護の剣、その皆伝へと至ってみせろ。

そうすれば、お前の抜擢に対して血縁故のものだ等と言う者は居なくなるだろう。居たとしてもそれは単に其の者が武に対して余りに無知だというだけだからな。皆伝の重みを知る者からは失笑されて終わるだけだ」

皆伝に至るとはそういう事だ。それはすなわち、最低でも単騎で一個中隊にも匹敵するだけの戦力を持った「達人」と呼ばれる人間兵器となった事を示すのだから。多少なりとも武について嚙ったものならば一目を置かざるを得ない。

そして流石のリインも一瞬躊躇う。元より自分の見立てでは一ヶ月を費やすとそう踏んでいたのだ。それを3分の2の期間でやるというのは流石に無理ではないかと、そんな思考がわずかに顔を覗かせる。

「閣下、お待ち下さい。それは余りにも……」

無茶苦茶すぎるとクレアは告げようとする。確かに義弟の成長は著しいがそれでも皆伝に至るといのは並大抵のことではない。才あるものが常人では想像もつかないような修練を重ねた果てによりやく到れるのが皆伝と呼ばれる領域なのだ。

如何にリインが天才と称されるような秀でた才覚を持っているにしても20日での会得などもはや無茶無謀を超えている。それこそ地獄すら生ぬるい目に合うことだろう。

故にクレアは止めんとする、リインの方をではなく主の方を。何故ならばこんな事を父の父に言われてこの義弟が退くはずがないのだから。

「出来ないのであれば、他の者にするだけの事だ。」

流石に会議の当日や前日に急遽ねじ込むというわけにはいかんからな。10日前がリミットとなる。

私としてはお前ならば出来るとそう思っているのだが、これは親の欲目という奴なのかな？」

父にそう告げられた瞬間にリインの中の弱気が吹き飛ぶ。

一体自分は何を迷っていたというのか、父がこうまで言うからには自分が出来ないはずがないのだ。

無茶？無理？無謀？そんな常識論に耳を貸すな。必要なのは何が何でも成し遂げるといふ鋼鉄の意志だ。

そう、今の自分では無理だといふのならそんな限界を超えれば良いだけの事だ。

「いいえ、閣下のお目が正しかった事を必ずや20日後に証明してみせます！」

そう宣誓した瞬間にリイン・オズボーンに退路は消えた。

父の期待に背く事など彼にとっては耐え難い恥辱なのだから。

元より燃え盛っていたところにさらなる燃料を注がれた燃え盛る焰はすでに臨海寸前だ。

このまま行けば遠からず自分自身さえも焼き払う事となりかねないだろう。

自分が死ねばそれを悲しむ人がいるというそんな当たり前の事実に気づかなければ。

「ふふ……では20日後を楽しみにする事としよう。見事、至ってみせろ」

そして間に合ってみせろと最後にポツリと漏れた言葉はリインたちの耳に届かない位に小さなものだった。

だが、そこに込められていた意味は単に通商会議に対してのものではなかっただろう。

そうして話はこれで終わりだと告げるオズボーンへとクレアとリインは敬礼を施して退出していくのであった。

そして今、リインは再び父の下へとその姿を現していた。

その様子にギリアスは笑みを浮かべる。宰相となったことで前線に立つことはなくなつたが、彼もまた達人と称される域に至つた腕前。目の前の息子が20日前とは別人のような強さを持っている事はわかつた。

「ふふ、男子3日会わざれば刮目して見よとは言うが、いわんや20日も会わなければと言うものだ。流石は私の息子だ。

それでは改めて命じさせてもらおうとしよう、ツールズ士官学院所属リイン・オズボーン候補生。貴殿に西ゼムリア通商会議における護衛を命じる。

階級は准尉待遇であり、期間中の身辺警護が主な任務となる。さて、返答や如何に？」

「謹んで拝命させていただきました宰相閣下！どのような敵が現れようと、生き抜いて必ずや宰相閣下をお守り致します!!」

敬礼を施しながら告げたリインの言葉にクレアとギリアスは少しだけ意外そうに目を丸くする。

「ほう……我が身に代えてでも、とは言わんのだな」

「ええ、護衛である自分が途中で果てては宰相閣下をそれ以後お守りする事が叶わなくなりますから。……我が身可愛さに駆られた不心得な護衛だと思われませんか」

苦笑しながら告げられた義弟の様子にクレアは胸を撫で下ろす。数週間前に感じた危うさ。

それが大分薄れ、今のリインからはどこか風格めいたものを感じたからだ。

これならばよほどの手練と交戦するような事がなければ安心だろう。

会議の場にはかの《風の剣聖》も出張するという話なのだから、仮に《帝国解放戦線》が襲撃をかけたとしてもまず遅れを取ることはないだろうと。

「いいや、それでいい。国にとって人材というのは宝だ。一人の優秀な士官を育成するのにどれほどの予算と時間を費やしているかを考えれば、テロリスト如きと相打ちになどなつてもらつては困るから

な」

告げるオズボーンの言葉はどこまでも宰相として士官候補生に対してのものだ。

それに若干の寂寥感を抱きつつもリインはその思いを振り払う。

今、目の前にいるのはエレボニア帝国政府代表の宰相閣下なのだから。

父として我が子を案じる言葉を聞きたがるのは自分の我儘なのだとそんな思いがよぎった事自体を恥じるように。

「……それに、それではカーシヤが浮かばれまい。アレは、最期までお前の身を心から案じていたのだからな」

「あ……」

一瞬、ほんの一瞬だけかつてと同じ優しい父の顔へと戻り、告げられたその言葉にリインは深く心を揺さぶられる。

そうだ、自分の命は母が文字通り命を賭けて救ってくれたものなのだ。それを簡単に投げ捨てるなど母の死に様に泥を塗るのも同然だと。

そしていま一度師に伝えられたその意味を実感する。こういうことなのだ、誰かの命と引き換えに自分の命を救われるというのは。

「さて、それではゼムリア会議が始まるまでの間、これにリストアップされた本を熟読しておくように。任務は護衛だが、各国の代表から話しかけられる事もあるだろう。その際に無知を晒したくなければな」

渡された用紙にかかっている書物は、いずれもかつて自分がクロスベルへと赴いた際に読んだ内容からさらに一步踏み込んだ内容となっているものだ。クロスベルという地に纏る歴史に地理に文化、そして政治に経済に技術と言った多岐にわたる分野の内容の専門書が記されている。

おそらく一ヶ月前の自分であれば、此処に記されている本の内容の半分が理解できれば良いところだっただろう。

だが

「出来るはずだ。今のお前ならばな」

あの日を境に目覚めた統合的共感覚とでも言うべき、一部と全体を結びつける超感覚それを見透かしたかのように告げる父の言葉にリインは頷く。そう、かつて1を聞いて3を知るのがやっとなんといった状態だった頃とは違い、1を聞いて10を知る事が出来るようになった今の自分ならば可能はずだと自信を持って。

かくしてリイン・オズボーンの常人から見れば地獄のような、当人からすればかつて無いほどに充実した夏季休暇は幕を下ろすのであった……

変わりゆくもの

ガギンと甲高い金属音が鳴り響く、そしてそれと同時にフリーデルがその手に持っていたレイピアが宙を舞う。そしてフリーデルの喉元に突きつけられたのはリインの構えた双剣。勝者がどちらかが明らかかな光景を目にして、武術教官たるサラ・バレストアインは若干の嘆息の後に宣言する

「それまで。勝者リイン」

そしてその光景に他の生徒は呆然とする。これまでも幾度も渡り合ってきた好敵手たる二人の決着がこうも一方的にかつ早期に終わった事など今までなかったからだ。戦績自体は確かにリインの方が良かった。されどフリーデルもそんなリインに五分とは言えないまでも十二分に渡り合える学院最高峰の実力者だったのだ。

故にこそ休み明けに行われたその二人の果たし合いはさぞや、見応えのあるものになるとばかり予想していたのに……

「……参ったな。何時の間にそんなに強くなっちゃったの？」

行われた戦いは数分も経たぬ内にリインの勝利で終わった。そしてそんな事実フリーデルは悔しさを滲ませながらも嘆息する。

「強敵相手に死線をくぐり抜けた。良き師の下で鍛錬へと勤しんだ。まあ、そんなところだな」

「……なるほど、夏季休暇をリイン君が取得するなんて一体どういう風の吹き回しかと思っただけど、帝都の道場で特訓していたってわけね」

「ああ、大変に充実した日々だったよ」

その結果が今、目の前に広がる光景である。皆伝へと至ったリインは、入学以来共に切磋琢磨し続けた剣友を大きく追い越していた。

(本当に、未恐ろしいわね)

もはやこれでは成長ではなく進化だ。それ程までに今のリインは一ヶ月前とは桁が違う。フリーデルとて決して怠けていたわけではないというのに、こればかりは相手が悪かったとしか言えないだろう。そのあまりの変貌ぶりにサラは言いようのない不安を感じてい

た。

思い出すのはあの鬼の如き殺気に満ちた姿。そして総てを飲み干さんとする鋼の意志。あの時自分は目の前の教え子に対して恐怖を抱いた。単純な強さにはない、その在り方なのだ。

頼もしい先輩になったと思っていた。友人たちと笑い合うその姿は自分の嫌うあの男とは違うものだから、これならば安心だとそう思っていた。

されど帝都でのあの一件以降、サラはどうにも教え子に対して一抹の不安を覚えてしまうのであった……

……

「どうだミリアム、Ⅶ組の面々とは仲良くやっついていけそうか」

学院内を案内しながらもリインは急遽編入してきた可愛い義妹分へと問いかける。最もこの天真爛漫な少女に関して言えば然程心配はしていないが。

「うん！皆いい人ばかりで楽しくなりそう。一週間後には特別実習だったので皆でお出かけもするみたいだし楽しみだなー」

「遊びに行くわけじゃなくてあくまで学院での実習として行くんだからな。士官学院生として恥ずかしくないように行動しろよ」

「わかってるわかってるって。それにしてもリインはおじさんと一緒にクロスベルに行くんだっけ？お土産よろしくねー」

「……買う時間があればな」

そのまま取り留めの無い話をして行くが、人気のない屋上へとたどり着いたところでリインは真面目な表情でミリアムを見据えて

「……ミリアム、この時期にお前がわざわざ編入してきたという事は、この学院に《帝国解放戦線》の関係者が居るといふ事か？」

《帝国解放戦線》なる組織が世に現れ、貴族派が裏で何かを画策しているこの情勢下で《鉄血の子》たるミリアムがわざわざ編入して来るなど、それ位しか考えられないだろう。

何せ帝国軍情報局にしてみれば今の時期はそれこそ猫の手も借りたくらいに忙しいはずなのだから。そんな時期にまさか、本当にた

だの社会勉強のために派遣されるなどというのは凡そ考えにくい事であった。

「うん、そうだよ。《帝国解放戦線》のリーダーと思しき仮面の男《C》。それがツールズに居るんじゃないかって事で、僕が派遣される事になったんだ」

「……聞いておいてなんだが、良いのか、それを明かしてしまつて」「リインだったら別に平気でしょ。なんたって僕らの筆頭なんだし」

アルフィン皇女殿下救出によつて「英雄」となつたリインはその名を一気に帝国中へと広める事となつた。《鉄血の子どもたち》たるレクター・アランドール特務大尉とクレア・リーヴェルト大尉に幼少期から英才教育を施させた秘蔵っ子という事実も相まつて革新派と貴族派双方にある確信を抱かせる事となる。すなわち、リイン・オズボーンこそが《鉄血の子どもたち》の筆頭であり、やがては兄妹達を率いていく存在なのだろうと。そして今回通商会議で護衛へと抜擢したという事実はその噂を加速させていくだろう。徐々にされど確実に、リインの扱いは一介の士官学院生というものから変化しつつあつた。

「ま、それはそれとしてせっかくだから学院生活をめいっぱい楽しむつもりだけどね！えへへへ、楽しみだなあ。確かもう少しだったよね、去年リインがすごいカツコイイ格好して歌を歌つたりしていたガクインサイって」

「……ああ、存分に楽しむと良い。きっとそれがミリアムにとつても掛け替えのない財産になつてくれる。」

それじゃあ、そろそろ寮へと帰るとしようか。今日はミリアムとおまけのもう一人の歓迎会という事でシャロンさんが腕を奮つてくれるらしいからな」

「わーいー！馳走楽しみだなあ」

年相応といった様子で喜ぶその義妹の姿にリインは心を癒やされながらも、帰路へとつくのであつた……

「しかしまあ、阿呆だ阿呆だとは思っていたがまさか此処までの阿呆

だったとはな……」

第三学生寮にてささやかながら催された、今日の主賓にあたる新たなメンバー二人の良く見知った二人の内のもう一人にリインは呆れきった眼差しを向けながら、疲れ切ったような表情でつぶやく。

「うう……まさかクロウ君の必要な単位が足りてなかっただなんて……気づかないだなんて友達失格かも」

「いや、この場合は単にクロウが学生失格なだけでしょ。別にトワは全く悪くないよ」

「うむ、全くもってジョルジュの言うとおりで。必須単位の見極めを怠ったクロウが間抜けだったただけだ」

「だーてめえら、なんだその容赦の無さは！少しは哀れな友人を慰めようとは思わねえのか!!」

ボロボロにけなされたクロウがそう憤慨の言葉を述べるが一人を除き、どこまでも冷たい視線を向けて

「何を言っている、一年の時に俺とトワが再三注意したというのにそれに耳を貸さなかつた度し難い阿呆はどこのだいっだ」

「うぐっ」

別段体調を壊したという止む得ない事情があつたわけでもない上に地頭とてそれ程悪くないのにも関わらず、留年の危機に陥つたのは自業自得以外の何物でもないだろう。そしてリインはこの手の本人の怠け根性故に陥つた窮地に対しては友人だろうが、とことん辛辣なタイプであつた。

「この分だと明日の自由行動日、クロウは大人しく勉強していた方が良いかも知れないね。遠出している場合じゃないでしょ」

「うむ、さらばだクロウ。君の犠牲は無駄にはしない」

「お前ら！それでも友達か!!」

「……別に去年の夏の時に、僕だけ置いてけぼりにしてアンと二人揃って帝都に行っていた事を根に持っているとかじゃないよ」

「根に持ってるんじゃないか!!」

珍しく自分ではなく温厚で仲裁役に回る事の多いジョルジュがクロウと喧嘩らしき行為をするという光景に苦笑しながらもトワは

ラインへと語りかける

「ねえ、ライン君。明日なんだけど久し振りに5人揃ってどっかに遊びに行くのはどうかな？2年生になってから忙しくて中々そういう時間取れなくなっちゃったし。来月からは今度は学院祭の準備が始まりだす頃でしょ？だから、どうかなって」

はにかみながら告げられたその言葉にラインは

「……悪いけど、これからしばらく通商会議までの間は忙しくて予定が埋まってしまっているんだ。准尉待遇で宰相閣下の護衛の任に就く事になったからな。会議の間までにクロスベルの地について学んでおく必要がある」

申し訳無さを滲ませながらもその誘いを断る。父から与えられた課題をこなすためにラインのスケジュールはかなりのハードスケジュールとなっている、夏季休暇を取っていた事も考えれば流石に友人たちと遊ぶ時間を捻出するのは厳しかった。

「悪いな、せつかく誘ってくれたのに」

「う、ううん。そういう事情じゃしょうがないよ」

そしてその言葉を前にトワは何も言えなくなる。何故ならばラインの言葉は正しいから。大役を任されたからそれに備えて少しでも学んでおく必要があるというその言葉は何ら非難に値するものではない、むしろ称賛されて然るべきものだろう。だからこそラインと同じく優等生のトワはもう何も言えなくなる。むしろ自分も通商会議へと行くというのに、ラインのようにしなくて良いのだろうかという罪悪感めいたものさえ感じてしまっていた。

「ふむ……君のその意気込みは立派だとは思いますが、流石に最近の君は根を詰めすぎというものじゃないかい？君の役目は護衛、つまりは武官としてであってトワのように文官としてではないだろうか？」

半年前にクロスベルに一度行つて一通りの学習はしているわけなんだから、この上となるとそれこそ本職の文官顔負けの領域となってくると思うんだが……」

故にこそ、そんなラインの有り様に対して苦言めいた言葉を呈す事が出来るのは不良娘を自認するアンゼリカとなる。

ラインに対してその手の事を言える不良生徒の友人というのはもうひとり居るのだが、生憎留年しかけている男がそんな事を言っても逆襲を喰らいズタボロになるのが目に見えているので。この場では口を噤む事にしたようだ。

「武官だからといって文官の知識が不要というわけじゃないだろう。何せ俺は鉄血宰相の息子であり、トールズ士官学院を代表して行くわけだからな。軍事だけしか取り柄がないと他国に思われるのは避けたいところだ」

されどラインはそんな友人からの気遣いにも揺るがない。どこまでも貪欲に自分は上を目指すと告げるのみだ。

なおも言い募ろうとするが、それでもラインの硬い意志に説得を断念する。結局アンゼリカ達も友人の真面目さにどこか危うさを感じながらもため息混じりに当初の予定を白紙に戻すのであった……

鉄血の子と《西ゼムリア通商会議》①

8月30日午前10時。

開催される西ゼムリア通商会議へと参加するために諸外国より来た使節団は、ここクロスベルの新庁舎前へと集まっていた。

居並ぶメンバーは圧巻という他ない。エレボニア帝国よりは皇帝の名代として《放蕩皇子》などと称される趣味人たるオリヴァルト・ライゼ・アルノール皇子と政府代表として豪腕を以て改革を断行するギリアス・オズボーン宰相。

リベール王国よりは、まさしく可憐と称する他ない、国民からも絶大な人気を誇る次期女王たるクロードディア・フォン・アウスレーゼ王太女。

レミフェリア公国よりはその誠実で温和な人柄から国民から高い支持を誇る元首たるアルバート大公。

カルバード共和国よりは庶民派を以て知られる、移民問題に揺れる共和国政界を見事束ねる海千山千の政治家たるロックスミス大統領。

そして主催者たるクロスベルからは市民より熱烈な人気を誇るデーター・クロイス市長とクロスベル政界の重鎮にして良心と讃えられるヘンリー・マクダエル議長が新庁舎たるオルキスタワーの前へと集まっていた。

もしも今、この場で導力爆弾が炸裂するような事があればこの大陸の未来は大きく変わるだろう。それ程のVIPが此処には集結していた。無論、そんな事になってしまえばクロスベル自治州にとつては破滅を意味するため、そんな方が一は無いように蟻の子一匹とて通さない入念な警備が行われているのだが。

そして式典の始まる前に際して、居並ぶ各国の首脳は互いに軽い挨拶を行っていた。

「おお、これはオズボーン宰相閣下。お久しぶりですなあ、相も変わらぬご壮健なご様子で閣下の友人としては胸を撫で下ろした思いです。」

「これはこれはロックスミス大統領閣下。大統領閣下もご健勝なよう

で、大統領閣下の友人として大変喜ばしく思います」

エレボニア帝国とカルバード共和国は西ゼムリア大陸の覇権を巡って争う不倶戴天の宿敵と見られている。

エレボニアは共和国を指して東の脅威と呼び、カルバードもまた帝国を西の脅威と称する。

だが、そんな中で両国の首脳たる二人はまるで年来の友人と再開したような和やかな様子で挨拶を行っていた。

おそらく彼らは握手をするように記者に求められれば、喜んで行うことだろう。片方の手に短剣を忍ばせながらも。

そのまま表面上は和やかな談笑を行っていく二人だったが、ふとしたタイミングでロックスミスは眼前の相手の傍らに控える少年の方にも気さくな笑みを浮かべて

「おお、君がオズボーン宰相閣下の秘蔵っ子と噂のライン君か！君の話は聞いているぞ。何でも悪逆なるテロリストへと囚われた皇女殿下を見事救ったそうじゃないか。まるでお伽噺に出てくる騎士のようで話を聞いた時は年甲斐もなく心が踊ったよ」

ロックスミスは心からそう思っているかのような人懐っこい笑みを浮かべた後にまじまじとラインの顔を見つめて

「ふうむ。しかし、写真で見るとよりも実物はずっと男前だなあ。

宰相閣下もさぞや鼻が高い事でしょう、このような立派なご子息を持たれて」

あからさまなおべっかでありながらも半年前に出会ったハルトマン議長とは異なり、全く不快な印象を受けず、むしろ気を強く持たなければ懐へと引きずり込まれそうな奇妙な感覚、それがラインを襲う。鋼鉄の強さを持つ父とは違う、されど紛れもなく目の前にいる人物もまた大国の長である事をラインは実感せざるを得なかった。

「ふう、まあ確かに良くやっている方ではあるでしょう。この程度で満足して貰っては困りますが」

そしてそんなラインを引き戻すのは彼が敬愛して止まぬ父親の声。まだまだだ、お前ならばもつと飛躍する事が出来るはずだと告げる鋼

の意志がリインの心に火をつける。

そうだ、現状に満足してしまえばそこで終わってしまう。10へ到達したなら次は100を、そして100へ到達したなら1000をただひたすらに前へと進み続けるのだと強く意識する。

「いやはや宰相閣下は中々に手厳しいですなあ。いや、それともそれだけご子息へ寄せる期待の現れという事ですか。何と言つても実力主義を以て知られる宰相閣下が護衛へと抜擢する位なのですから、実力に関しては折り紙つきというものでしょう」

苦笑しながら大統領が告げるのはリインが周囲からどうみなされているかを示す言葉。

皇女救出という華々しい功績によりデビューを果たし、そしてこの重要な国際会議において宰相の護衛へと抜擢された唯一の実子ともなれば注目を集めないはずもない。果たしてリイン・オズボーンなる少年は鉄血の後継者たり得る竜なのか、それとも我が子可愛さに駆られた父親の鼻肩を受けたボンボンに過ぎないのか、海千山千の狸は笑顔を浮かべながらも推し量るような視線をリインへと送っていた。

「確かに、宰相殿は些か以上に手厳しすぎると思うね。17歳の若さで皆伝に至るなど驚嘆する他ない。私の護衛を勤めているミユラー少佐でさえ、皆伝に至ったのは22歳の時だったのだからね。もう少し息子に優しくしてあげても罰は当たらないだろうと私などは思うのだが」

「なんと!?」この若さで皆伝へと至るとはそれはまた驚きですなあ。やはり男は父親の背中を見て育つもの、これも一重に宰相閣下の大きな背中を見て育ったが故というものでしょう。

私は見ての通り武術に関してはからっきしの男ですからなあ。良く妻や娘にもダイエットをしたらどうかなどと叱られてしまいましたてな……」

リインが皆伝へと至ったという言葉を聞いた瞬間にロックスミスは真実驚いたかのような様子を見せるも、すぐにまた元の調子へと戻り愛嬌のある笑みを浮かべたかと思えば、しゅんとした落ち込んだような顔を浮かべと百面相のようにコロコロとロックスミス大統領は

表情を変えていく。

指導者や政治家というのは非常に大雑把な分け方をすれば二つのタイプに分類される。一つはこの人に従えば安心だと思わせる、豪腕によつて人々を引つ張つていくタイプ。ギリアス・オズボーンはこの典型例と言つて良いだろう、強引さ故に忌避も買うが、同時にその強引さが頼もしさにも繋がっているのだから。

もうひとつのタイプはどこか放っておけない、自分が支えてやらな
いといけないと思わせるタイプだ。こちらの典型例の一人がオリ
ヴアルト皇子であり、ロックスミス大統領だろう。

「ご歓談中のところ申し訳ありません。定刻となりましたので、そろ
そろ開催の挨拶をさせていただければと思います。続きはこの後の
昼食会、そして夜に執り行われる晩餐会にて行つて頂きたい」

「おお、これは失礼しました。ついつい旧友と会えた喜びに舞い上
がってしまったな。オズボーン宰相、続きはこの後の昼食会で改
めて。リイン君も、その際に是非詳しい事を聞かせてくれたまえ」

ウインクをしながら立ち去つていくその背中を見送り、オズボーン
は傍らに控える我が子へと周囲には聞こえない程度の声で語りかけ
る

「ふふ、アレが我が宿敵の一人たるロックスミスだ。中々どうして大
した食わせ物だろう。率直に聞こう、どう思った」

どこか楽しげな様子で問いかける父へとリインは……

「……恐ろしい方ですね。大統領閣下の噂は自分も聞いていましたか
ら、十二分に警戒しているつもりでした。」

どのように向こうが煽つて来ようと、相手はあくまで宿敵カルバー
ドの元首、決して気を許してはならない相手だと、そう心して。

それにも関わらず、先程のほんのわずかなやり取りで自分はある方
に好感めいたものを抱いてしまいました。

……もしも閣下が傍に居ずに、二人きりで会いでもしていたら、そ
れこそ取り込まれていたかもしれない

見えを張ること無く素直な所感を述べる事とした。ルーファス卿
にレーグニッツ知事といった一流と称されるような政治家に、これま

でもリインを出会ってきた。

そして改めて実感する彼らの持つ、単純な武力では決して測れない、魔性の如き魅力を。吸い込まれるのだ、さながら巨星の引力に囚われた衛星のように。

「それがわかったのなら合格と言えるだろう。それが真に政治家と呼ばれる存在だ。そして今日この地に集まった者達は皆、そんな政治家の中でも真に一流と称されるに足る者ばかりだ。

学べ。彼らの一挙手一投足を全力で観察する事だ、間のとり方。表情、仕草、そして発する言葉。それら総てを余さず吸収しろ。無論護衛の任を果たしながらな」

その程度当然出来るだろうと告げる父の言葉にリインは深い頷きをもつて返事とする。

父から寄せられる期待、それが心で燃え盛る焔に注がれる新たな燃料となる。そして改めてこのような得難い経験を積める事を感謝するのであった。

・
・
・

導力先進国と名高きリベールの中でも最高傑作と謳われる高速巡洋艦《アルセイユ》。リベールの宝たるクローディア王太女を運んだこの船で3国の人間が集っていた。

一組目はこの船の主たるクローディア王太女と親衛隊長を務めるユリア・シュバルツ准佐。

二組目はクロスベルの「英雄」としてその名を響かせる《特務支援課》。

三組目はエレボニア帝国の皇子オリヴァルト・ライゼ・アルノールとその護衛を務めるミュラー・ヴァンダール少佐である。

エステル・ブライトという共通の友人を持つ彼らは、ちよつとした茶飲み話として自治州政府には伝えられていない

ロックスミス大統領とオズボーン宰相を付け狙う反動勢力が彼らを狙っているという話を共有しあったわけなのだが

「そういえば、鉄血宰相殿と言えば、如何にも側近って感じで彼の護衛を勤めていた彼は何者なんだい？ どうやらロイドたちは面識がある

みたいだけど」

如何にもといった大国の軍人然とした精悍な顔立ちをワジは思い出しながら問いかける。

そういえば自分も半年前、確かあんなような顔を見た覚えがあると記憶を手繰り寄せながら。

「ああ、彼は……」

「彼の名はリイン・オズボーン。《鉄血宰相》ギリアス・オズボーン唯一の実子であり、先程挙げた《鉄血の子どもたち》の筆頭とも目されている少年さ」

「ふーん、あの宰相閣下殿がまさか息子可愛さの身内鼻屑で抜擢した……という事は当然ないんだよね」

「そういう理由だったら、私としてはまだ安心だったのだがね。生憎彼は明確な実績を示しているんだよ」

「近衛軍一個中隊を単騎で相手取った演習で勝利。提出された論文は本職の書記官も顔負けの内容。」

それが今回鉄血宰相の護衛に就くにあたって彼が示した実績だ」

クロスベルへと出立する3日前。リインは父から読むよう言い含められた資料を読み進めながらも書いた論文を帝国政府へと提出した。そしてそれと同時に行われたその演習にて、自らのその実力を内外へと示したのだ。

決して宰相が自分を選んだのは血縁に依るものではなく、その實力を見込んでの事だと否応なく理解できるように。正規軍ではなく、わざわざ近衛軍が演習相手へと選ばれたのには先月あった夏至祭での出来事に対する、革新派の貴族派への牽制という意味が多分に込められていたが。

「加えて言うなら彼のそれまでの素行もなんら文句のつけようのないものでね。特に異論が出る事もなく、未だ学生の身である彼が護衛役となることはすんなりと決まったというわけさ」

「へーそりやまたなんというか、本当に絵に描いたように出来たエリートさんだね。今日も遠目から見ただけで如何にもって感じだったし」

「アレで中々どうして年相応の少年らしいところもあるんだがね」

女学院で行った会話、オリビエは目を閉じながらそれを苦笑しながら思い出す。

せめて学院の理事長たる自分だけでも、革新派の若き英雄、そんな色眼鏡での少年を見ないようになければならないと心に留めて。「話がそれてしまったね、まあ宰相閣下もそんな風に襲撃への対策は色々行っているわけだが、その備えが無駄に終わるに越したことはない。

そのためにも君たちには頑張ってもらいたいとまあそんなところさ」

そしてその後も和やかながらも時に物騒な話を交えて、共通の友人を持つ一行の茶飲み話は幕を閉じるのであった。

鉄血の子と《西ゼムリア通商会議》②

8月31日。西ゼムリア通商会議日程2日目。

昨日の軽い視察や懇親会を終えた各国の使節団はオルキスタワー35階国際会議場へと集まっていた。会議場の前を固めるのは各国の首脳陣が連れてきた武官。

リベール王国からはユリア・シユバルツ准佐を筆頭とした親衛隊、エレボニア帝国よりはミュラー・ヴァンダール少佐を筆頭とした第七機甲師団の精鋭と宰相直々に抜擢したリイン・オズボーン准尉が、そしてレミフェリア公国とカルバード共和国よりも選りすぐりの精鋭が護衛の任へと就いていた。

そしてひとつ下のフロアには非常時に際して何時でも駆けつけられるようにクロスベル警備隊の精鋭部隊一個中隊が控えており、遊撃部隊としては《教団事件》解決の立役者たる「クロスベルの英雄」《特務支援課》が控えており、会議場の中には理に至りし者、《風の剣聖》アリオス・マクレインが待機している。

まず安心と言つていい警備体制だろう。それこそ、戦略兵器で建物毎吹き飛ばされでもしない限りはこれ程錚々たる布陣を突破するのはまず不可能と言つて良い。もしも仮に、この鉄壁の布陣へと挑む者が居るとするならば、それは命知らずと、そう呼ぶ他ないだろう。

そしてそんな警備が功を奏してか、会議の前半は大きな波乱が起きる事もなくつつがなく進行していき、進行役たるマクダエル議長の号令で小休止へと突入するのであった……

「お久しぶりです、皆さん」

休憩時間の最中リインは父に呼ばれた客人達を出迎えていた。

「皆さんのその後の活躍については《クロスベルタイムズ》で読ませて貰っていました。《教団事件》を解決した「クロスベルの英雄」にこうして再び会えた事を嬉しく思います」

柔らかな笑みを浮かべながら告げる顔見知りの少年のその様子に《特務支援課》の面々は胸を撫で下ろす。鉄血宰相の護衛へと抜擢された事で目の前の少年が、半年前とは変わり如何にも大国の軍人といった

居丈高な様子になっているのではないかと若干心配していたが、どうやらそれは杞憂であつたらしいと。

「ははは、そんな風に言われると少々むず痒いけどね」

《クロスベル・タイムズ》、わざわざ取寄せて読んでくれているんだ」
《クロスベル・タイムズ》はクロスベルにおいては最大手と言つていい新聞だが、帝国や共和国ではそこまでメジャーではない。故に諸外国でそれをわざわざ取り寄せるのは他国に留学中のクロスベル出身者か、それとも余程クロスベルへの関心が高い者位になるのだが……
「ええ、それは勿論。将来国防を担う身としてはクロスベルを避けては通れませんから」

リベールのアリシア女王の仲立ちにより、《不戦条約》が締結された事でクロスベルを巡った帝国と共和国の軍事的緊張は大きく緩和された。

されど、それでもこの地が西ゼムリア大陸の火薬庫である事には変わりないし、それを抜きにしても貿易と金融の中心となりつつあるこの地は経済的な側面でも重要だ。

国政、国防、経済、外交といった国家の要職へと就こうとしている人物が無関心でいたら、それは不勉強の誹りを免れないだろう。

「さて、旧交を温めたいのはやまやまですが休憩時間もそう長いわけではありません。宰相閣下がお待ちです、どうぞ中へとお入りください」

入室を促すリインの言葉に応じて支援課の面々は居室へと入っていく、そして此処に支援課の面々と鉄血宰相のささやかな会談が行われるのであつた。

・
・
・

用意された豪華な応接用のソファアームへと支援課と宰相が腰掛ける中、同席を宰相より促されたリインは直立不動のままに宰相の傍らへと控える。

支援課の面々は父が呼んだ言わば客人だが、自分はあくまで同席を許された一介の護衛役である、ならば億が一の事態の際に父を護れるようにこうするのが最も正しいと信じて。

「直截に尋ねよう。……君たちはこのクロスベルがどれだけ保つと考えている?」

「……ッ!」

「また随分と露骨な質問だね……」

意識調査等と前置きをしながらオズボーンより放たれた問いかけに支援課の面々は表情を強張らせる。

彼らにしてみれば、それは断じて笑い混じりに楽しく話す事が出来るような内容ではない。

しかし、問いかけた本人にとってみれば本当に戯れに過ぎないのだろう。

どこか愉快気に、それでいて眼前にいる若者たちを推し量る色がその言葉には込められていた。

「ふふ、別に深い意味はない。ただ、栄枯盛衰は歴史の常——滅びなかつた国は存在しない。」

ましてや、導力革命によつてあらゆるものが加速したこの時代、この因縁の地がどこまで現状のまま居られると思う?」

「……それは……」

かつて栄華を極めたとされる古代ゼムリア文明でさえも滅び去つた事を思えばそれはそうだろう。

人が不死ではいられないように、国家とて永遠に存在するわけではない。大きな歴史の流れでいくつもの国が興り、そして消えていった。

加えて《エプスタイン博士》によつて50年前に起きた導力革命によつて世界は一気に加速しだした。

移動の手段が馬車から導力車、飛空艇、鉄道へと切り替わり、戦場もまた大きく様変わりした。

軍の大規模な機甲化は戦場から「英雄」を駆逐しようとしている、兵器や技術の発達はそれだけ個人の力が介在する余地を減らす。

かつてであればそれこそ「英雄」と呼ばれる人種は単騎で一軍にさえも匹敵するとさえ謳われた。

されど、発達した技術は個人間の技量差というものを大きく減ら

す。

才あるものが数十年の鍛錬の果てに到った「達人」と呼ばれる人種の代わりを凡人が担うとなれば、かつてはそれこそ1000人単位で必要としたものが最新鋭の装備をさせれば100人程度で十分となった。

そしてそんな「英雄」の代わりとなり得る戦車を二大国はそれぞれ数百台単位で保有しているのだ。

更に言えば列車砲等という戦略兵器もまた生まれた。今は単なる固定砲台に過ぎないが、もしもやがてアレの射程と精密さが伸びれば？それこそわざわざ軍を敵国に送るまでもなく、一方的に他国を蹂躪する事さえも可能となってしまうかもしれない。

そして、そうなれば兵士たちと共に苦楽を共にして戦場を駆け抜け、祖国の命運を決する戦いに赴く「英雄」などという存在は完全に消えて行く事となるだろう。安全で静かで、物憂い事務室にいて、書記官達に取り囲まれて座り、命令を下すものが「英雄」となる。

その一方で何千という兵士達が、通信一本で機械の力によつて殺され、息の根を止められる。そして、国家間の戦争は武力の担い手たる軍人だけではなく、そんな兵器を量産する一般市民さえも対象とした全面戦争へと突入するようになる。

まさしくゼムリア大陸は《激動の時代》を迎えようとしているのだ。そして、そんな《激動の時代》においてクロスベルという因縁の地が無関係で居られるはずもない。

かつて二大国の間に起きた《クロスベル戦役》、それが再び起こる可能性を示唆するオズボーンの言葉にエリイ・マクダエルは顔を伏せる。

なまじ政治家を志す彼女だからこそ、故郷を取り巻く状況の難しさが否応なく理解できてしまうのだ。

「何時までもです！守ろうという意志が自治州の民にあるのならば！」

されど、それでもとノエル・シーカーは毅然と告げる。

彼女とて決して無知なわけではない、むしろ警備隊の隊員たる彼女

こそ、いやという程二大国の強大さを身を以て知っている。何せクロスベルは飛空艇も戦車も保有する事が出来ていないのだから。

いざ、戦争になってしまえば帝国と共和国という強大な力を前に自分達ではほとんど為す術がない事とて当然理解している。

されど、それでも彼女は叫ぶのだ。決して人は強大な力に翻弄されるだけの存在ではないと。祖国を護らんとするこの思いは決して無駄でも無意味でも無価値でもない。

そんな彼女の様にリインは自然と敬意を抱く。現実の苦難を知りながらもそれでもそれに屈せず抗わんとする気概、祖国を思う気持ち、それらは総てリインにとって紛れもなく真実好感を抱くに値する姿だったからだ。

「そう、意志は常に大事だ。時に趨勢をひっくり返し、歴史そのものをひっくり返す事も稀ではないだろう。

人は無力な存在ではない。私もその可能性を信じている」

どこか、それまでの不敵な上から見下ろすかのような態度から真摯さを帯びた口調でオズボーンは、ノエルの吠えた氣勢を肯定する。

そこには自らもまた何か強大な力に抗おうとしている挑戦者としての思いが込められていた。

「……だが、その意志同士がぶつかりあつた場合はどうだ？」

されど、そんな空気は一瞬。オズボーンは再び総てを飲み干さんとする鋼鉄の意志を纏って告げる

「簡単だ……小さな意志はより大きな意志に呑みこまれ、その火勢を大きくするだろう」

告げるのは単純明快な言葉、ぶつかりあうことになれば必然より強いものが勝利するというこの世の理。

「そうして生まれた業火が地上にいくつも現れた時……あらゆる正義と倫理は灼熱に溶け、世界は一面の炎に包まれる。

……そんな光景が容易に幻視出来るのではないか」

だれもが大切なものを護ろうと思ひ抗おうとするからこそ、この世からは争いが消えず、地獄は生み出されるのだと。

ならば、最初から抗おうとせず、強大な力に頭を垂れてしまえばいいのだと、どこまでも大国にとつての都合のいい論理をオズボーンは告げる。

現実には常に無慈悲で無情なのだから。立派であるもの、高潔であるものが必ずや勝利する程にこの世は優しくないのでから、諦めてしまえと。

そんな世の理をねじ伏せる事の出来る「英雄」など、この世には居ないのだと。

そして自分はそんな無慈悲な力を執行する側となるのだという事をリインは改めて突きつけられる。

国家における最大の暴力機構が軍である以上、一度戦いになれば祖国のために、家族のために、仲間のために、友のために、そんな心の底から尊敬できる思いを抱いてエレボニアという強大な力に抗わんとする目の前の特務支援課のような高潔な人々を殺すことになるのが自分の役目なのだ。

「……ああつ……」

「……ううつ……！」

「……ううつ……！」

気圧される。目の前の男の抱くその鋼鉄の意志を前に。

自分のやっている事の非道さ、罪深さ、生まれる嘆きそれらを承知した上でなおもそれを背負い、貫くと決めたその意志の強さに。

まさしく今述べられたとおりに、《特務支援課》というクロスベルの小さな意志が《鉄血宰相》というエレボニア帝国の巨大な意志に呑み込まれようとした刹那

「……確かに、帝国や共和国に比べたら『小さな意志』かもしれませんが……」

ですが、大きな炎が必ずしも小さな炎を呑み込むとは限らないでしょう。

かつて帝国の侵攻を退けたリベール王国のように！」

それでもリーダーたるロイド・バニングスは吠える。一つ一つは小さな意志だとしても仲間が語ったような気高さを皆が持ち、集まれ

ば大きな意志に勝利する事とてあるはずだと。そして、その実例が12年前に起きた《百日戦役》だと。

そんなリーダーの言葉を受けて、呑み込まれかけた特務支援課の面々の瞳に再び力が戻る。気圧されてなるものかと。

今まさしく自分達のリーダーが語ったように、自分達一人一人の意志は小さくとも結集すれば目の前の《鉄血宰相》という強大な意志に抗う事とて出来るはずだと体現するかのよう。

「ふふ、そのとおりだ。意志には『強さ』が問われる。

リベールの小さくも強き意志が、帝国の大きくも乱れた意志に打ち克つたというわけだ。

それは確かにクロスベルにとって一つの教訓と言えるだろう」

そしてそんな氣勢を前にオズボーンは愉快げに笑う。そうではなくては面白くないと、自らに抗おうとするその意志こそが好ましいと言わんばかりに。

「――果たして、クロスベルの民にリベールの民ほどの誇りと強さが備わっているかは知らんが」

その上でオズボーンは無慈悲な事實は突きつける。汚職に塗れ、二大国の食い物とされていたこの地の民は、果たして名君たるアリシア女王の下で一致団結して抗ってみせたりべール王国のようにその意志を結集させる事が出来るのかと。

「更に言えば、あの敗戦から教訓を得たのは何もクロスベルだけではない。我らエレボニアが何時までも乱れたままで居ると思つて貰つては困るな。

そうだな、聞いてばかりというのも退屈だろう。准尉、余計な虚飾や配慮を要らない。率直に述べたまえ、果たして我らエレボニアが丸となってあの戦いに赴いていたら、同じ結末になつたと思うかね？」

「まず有り得ないでしょう。確かにリベールの《カシウス・ブライト》大佐によってなされた飛空艇を使った反攻作戦は当時としては革新的なものでした。それまであくまで陸上での戦いだった戦争に空という概念を齎したのですから。それをなした彼の軍事的才幹には驚

嘆を禁じえませんが、その結果我がエレボニアは分断されて各個撃破されて敗北しました。

「……しかしそれは、我がエレボニアの『英雄』《軍神》ヴァンダイク元帥閣下が指揮をとっていなかったからです。もしも最初から我が国が挙国一致体制でリベールへと侵攻していたのなら、当然元帥閣下が総指揮をとっていたはず。そして、元帥閣下が直々に指揮を取られていれば、みすみす各個撃破させるような事態には陥らなかったでしょうし、そもそも反攻作戦の前に我が国の勝利で終わっていたでしょう」

百日戦役は功を焦った貴族派の一部将校のある蛮行がきっかけでなし崩し的に行われたものであった。奇襲を食らった形となったりベール側と同様に侵攻した側のエレボニアもまた多くの者にとっては寝耳に水なことであり、その侵攻は纏まりを欠いたものとなった。

その証拠こそが当時元帥の地位にあったウォルフガング・ヴァンダイクの不在である。元より貴族派がリベールへと侵攻したのは、平民出身としては史上初となるウォルフガング・ヴァンダイクの元帥就任とその腹心の部下たる当時准将の地位にあったギリアス・オズボーンの台頭などにより隆盛著しい平民派に対抗すべく、軍内部の主導権をリベール王国併合という功を持って奪わんと企図してのもの。

当然ながらヴァンダイクに知らせているはずもなく、功を焦って侵攻した貴族派の師団を凡そ纏まりというものをかき、それが各個撃破される結果を生んだ。もしも元帥にしてエレボニア最高の名将たるヴァンダイクが総指揮官を勤めていれば、みすみすそんな結果にはならなかっただろう。

「最もこれはあくまで仮定の話です。組織というのは大きくなればなるほど意志統一をするのが困難になります。そしてそういった意志を統一させて組織を纏め上げるといった事前準備こそが戦略であり、戦略なき戦術など有り得ない以上、これは些か無意味な仮定でしょう。」

大義もなく、指揮系統の統一という基本中の基本すら怠り、リベールをたかだか小国と司令官から末端の兵士までもが侮っていた。

こんな状況で勝利出来るはずありません。あの敗戦は別段奇跡ではなく、必然だったとさえ言えるでしょう」

虚飾や配慮は要らないと言われたリインは淡々と自らの所感を述べていく。アレは負けて当然の戦いだったと。

何故ならばこちら側が戦いに際して最も重要な事前準備を怠っていたのだから。

「ふふ、当時軍の要職にあった身としては中々に耳が痛い話だ。そうだが、我らエレボニアはあの時その意志を結集させる事が出来なかった。いや、むしろ足を引つ張り合っていたとさえ言える。

——ならばつまり、それは我らが拳国一致体制を整えていれば、例えリベールがその意志を結集させたところでどうにもならなかったという事ではないかな？」

故に、例えば強大な指導者の下にエレボニアが一致団結すれば、どれほど小さき意志が結集したところで齎されるのは大きく強大な意志に小さく強い意志が呑み込まれるという順当な結果だとオズボーンは告げる。

——特務支援課の面々は知る由もないことだが、かつてリベール王国において起きたクーデターはまさしくこれこそが原因だったのだ。

クーデターの首謀者であるアラン・リシャル大佐は情報局長として他国の諜報を担っていた。そして彼は否応なく理解してしまった。エレボニア帝国の強大さを。急速に改革を推し進めている《鉄血宰相》という指導者の恐ろしさを。

かつてリベールがエレボニアを退ける事が出来たのは、リインが述べたようにエレボニア内の意思統一がされていなかったからこそであった。では、そのエレボニアが一つに纏まってしまったら？

奇跡の立役者たる「英雄」カシウス・ブライトの無き自分たちが果たしてその侵攻を跳ね除ける事が出来るのか？と。

そんな恐怖と何よりも祖国を思う愛国心が彼を突き動かした。強大な力に抗うには力しか無い、それはすなわち《空の女神》が残したとされる女神の七至宝、それに頼るしか無いと。

結果として彼のクーデターは失敗に終わったわけだが、彼のこの心配それ自体が杞憂だったとは決して言えないだろう。

何故ならば他ならない《鉄血宰相》自身が言外にそれを匂わせているのだから。かつての二の舞を演じるつもりはない、自分は必ずや貴族派を下して、祖国を纏め上げて見せるぞと。

「……ッ！」

反論の言葉を、述べる事はできなかった。ただの大言壮語ではない、目の前の人物にはそれをやってのけるだろうと思わせるだけの實力も意志も備わっているのだから。

《クロスベルの英雄》等と持て囃されても、目の前の人物に比べれば自分達は未だひよっ子に過ぎないのだという事をロイド達は実感せざるを得なかった。

それでもと言わんばかりに必死に吞まれぬように、眼前の相手を見据えながら。

「閣下の仰る通り、そうなっていれば我らが負ける道理はなかったでしょう。——最も勝利した結果が我がエレボニアに益を齎したかについては些か疑問が残りますが」

「ほう……」

思わぬ人物からの反論の言葉、それに対してオズボーンは一瞬驚きの色を帯びた後に推し量るような瞳で我が子を見つめる。

「……申し訳ございません。差し出口を叩きました。忘れてくだされば幸いです」

「いや、構わん。続けたまえ准尉。仮に百日戦役に勝利していたとしても、それは我が国にとつては益にならなかったと君が判断した根拠を聞かせてもらいたい」

よもや安っぽいヒューマニズムに囚われたための発言ではないのだろうと告げる父の言葉を直つ向から受け止めた上でリインは続けていく

「簡単な話です。我が国がリベールを併合したらそれは共和国にとっては喉元に刃を突きつけられたに等しい行為です。まず間違はなく、救援という名目で援軍を派兵した事でしょう。そうしなければ西ゼ

ムリア大陸の覇権は自ずと我が国の物となるのですから、彼らにしてみればそれ以外に選択肢はありません。

そしてそうなれば始まるのは七〇年前に起こった《クロスベル戦役》の再来です。異なるのは戦いの場所がクロスベルからリベールになったというその一点のみ。

——意味じくも宰相閣下が仰ったように、帝国と共和国という大きな意志がぶつかりあった結果、悲劇という業火がリベールを、そして帝国と共和国を焼く事となったでしょう。これでは勝利したところで意味がありません」

必要悪を担うのが軍人の役目なれど、それはあくまで祖国とそこに住まう民へと繁栄を齎すためだ。

戦争に勝利した結果がさらなる争いを呼び、ただ犠牲を生むだけの結果では終わっては意味がない。

——齎された勝利という果実、それを味わう者達がいなければ。祖国の繁栄とそこに住まう民の幸福、それこそがリイン・オズボーンの中にある決して譲れぬ綺麗事なのだから。

「ふふ、中々に卓見だが共和国は共和国で一枚岩ではない、ならば乱れた大きな意志に統一された大きな意志が勝利する事はそうそう難しくもないのではないかな？」

「自分たちに出来た事を相手が出来ないと思うのは些かに希望的観測が過ぎるというものでしょう。何よりも古来より集団を纏め上げるのに一番の常套手段は『共通の敵』を作ってしまう事にあります。

我らエレボニアは閣下という偉大なる指導者を得ました。しかし、《空の女神》は公正なる存在です。我らに閣下を遣わしてくれたというならば、共和国にも同様に『ギリアス・オズボーン』が生まれたいとは限らないでしょう」

告げるリインの言葉はどこまでもエレボニアの利益を代弁する内容だ。

ただただ、共和国と全面戦争に突入してしまえば犠牲に見合うだけのものを得られない可能性が高い、リインの反論の内容はつまるところそれに尽きる。

決してリベールやクロスベルを慮つてのものではない。

「ふふ、なるほどな。つまりは、併合したところでも割に合わないのだからやめておくと、そういう事か」

そしてそんな息子の言葉に父親は顔をほんの少しだけ緩める。まあ、及第点はくれてやろうとでも言いたげに。

「ならば、併合する事こそが祖国のためになると政府が、そして皇帝陛下が判断したというのならば当然異論なく従うという事だな？」

告げられた問いかけにリインは……

「無論です。国家のために必要悪を担う事こそが軍人の使命なれば。それが祖国の益になるというのならば是非もありません」

一片の逡巡も無く鋼鉄の意志を纏って答える。

自分のやることが嘆きを生むとわかりながらも。ただ所属する国が違うというだけで目の前にいるような素晴らしい人達を殺す事になるのだと十二分に理解して。

それこそが軍人の役目なのだ。

そしてそんな半年前とは別人の如き少年のその鋼鉄の意志に特務支援課の面々は気圧される。

迷い、揺れながら、それでも仲間と共に一歩一歩少しずつだが前に進もうとしていた質朴な少年の姿はそこにはなかった。

居るのは鋼の如き意志でどこまでも突き進もうとする《鉄血の継嗣》であった。

「ならば良い。さて休憩時間も終わりだ、話はこの位にするとしよう。

ああ、帝国政府からは特に勲章を送るつもりはない。下手に《平民》に勲章を送ったら貴族勢力がうるさいのでね」

話の終わりを告げるその言葉に支援課の面々は改めて突きつけられた祖国の厳しい状況に忸怩たる思いを抱きながらその場を立ち去るのであった……

鉄血の子と《西ゼムリア通商会議》③

「それでは皆さん、この後の警備も互いに頑張るとしましょう」

会談を終えて部屋を出るとリインはそう支援課の面々に声をかける。そこに居るのは先程までの鋼鉄の意志を宿した鉄血の継嗣の姿はない、どこまでも年相応といった質朴な少年の姿だった。

そしてそんなギャップに支援課の面々は呆気にとられる。鋼の如き意志で討てと命じられれば討つと躊躇いなく言い切ったにも関わらず、今少年が浮かべるのは友人に向けるような柔和な笑顔だったからだ。

「なんというか……大した変わり身だね。あんな事を言った後だというのに」

ワジ・ヘミスフィアのどこか咎める色を帯びた視線を受けながらリインは特に動じる事もなく笑みを浮かべて

「ああ、アレですか。先程までの話しはあくまで仮定の話であり、もしもの話ですよ。」

いわば、軍人としての職業意識を述べたまでの事です。今の我々は所属は違えど、この重要な国際会議の警備を担当する仲間です。

別段無理に険悪になる必要はないでしょう。そもそもクロスベルは自治州ですが、列記とした我々の同胞なのですから。

先程はあ言いましたが、有事の際にはむしろ戦友として轡を並べる事になるでしょう」

クロスベルは列記としたエレボニアの領土なのだから、有事の際とこののはすなわち共和国が侵攻して来た時、あるいは《教団事件》のような犯罪集団が跳梁した時に他ならない。

その時は同じ帝国人としてクロスベルを護るために肩を並べる事になるだろうとそんな、どこまでも帝国軍人としての模範回答をリインは述べる。

「シーカー曹長は確か元々警備隊のご出身でしたね。半年前の演習の際には色々と学ばせてもらいました。」

貴方のような人とならば安心して一緒に戦えるというものです。

もしもの時にはよろしくお願い致します」

告げた言葉には一切の嘲りの色などはない。彼の抱く特務支援課の面々への敬意は決して嘘も偽りもない。

その上で自分はエレボニアの軍人なのだトリインは改めて宣言していた。

「……ッ！」

「……お前さん、随分と変わったな。半年前に会った時は似てねえ親子だっと思ってたもんだが、今のお前はあの親父さんにそっくりに見えるぜ」

ランディ・オルランドは半年前に出会った目の前の少年が決して嫌いではなかった。

真面目で口うるさい堅物、されどどこまでも清廉に誰かのためにと理想を追うその姿は難からず思っているあるある女性を連想させるものだったからだ。

友人たちと戯れて、現実の壁を前に時に悩み、支え合って、それでも一歩一歩進んで行こうとするその姿は立場は違えど、自分たちと同じだとそんなふうにも思っていた。

しかし、今の目の前の少年は半年前とは違う。まるで迷うこと無く一直線に、立ち足はだかるものを轢き潰しながら、道を突き進む鋼鉄の戦車だ。

強く……なったのだろう。纏う風格も身に着けた実力も半年前とは桁が違う事はわかる。それこそ自分の叔父や従妹ならば舌なめずりをしながら歓喜するかもしれない。

されど、それでも、そんな強さについていけずに掛け替えのない仲間と出会い、その尊さを知ったランディには目の前の少年の変貌を成長だとは思いたくなかった。

仲間や友人と一緒に進んでいたら、歩みが遅くなる。だから、独りで突き進むなどというのはあまりに雄々かなしすぎる在り方ではないかと。

「ありがたい褒め言葉です。宰相閣下は自分が最も敬愛するお方ですから」

どこか悲しげに告げられたランデイの皮肉にもリインは心からの笑みを浮かべて応じる。

父のようだと言われること、それこそが自分にとっては最上級の褒め言葉だと言わんばかりに。

……かつてバリアハートでもしも父が貴族憎しの私情で動いているようであれば自分が止めるとそう決意していた少年の姿はそこにはない。

いみじくも先程述べられたように、リイン・オズボーンという小さな火はギリアス・オズボーンという大きな焰へと呑み込まれつつあった。

——親子の絆があり、暖かな手で撫でられた記憶がある。故に私人としての感情は父に従うべきだと告げる。

——ギリアス・オズボーンは革新派の戴く皇帝陛下よりの信認も厚い偉大な指導者だ。故に軍人としての理性も宰相閣下に従うべきだと告げる。

ならばこそ、リイン・オズボーンが父にしてエレボニア帝国政府代表たるギリアス・オズボーン宰相に背く道理は存在しない。

盲信しているわけではない、父の行いによって生み出された犠牲者の慟哭を知っているから。

自分や父に敵対する者が悪だと思っっているわけでもない。大貴族にも尊敬に値する高潔な者が居ることを知り、目の前の特務支援課のような人々こそを自分はその手にかける事を覚悟しているから。

だからこそ、リイン・オズボーンはギリアス・オズボーンの忠実なる腹心にして後継者足りうる。まさしく今の彼は紛れもない《鉄血の継嗣》であった。

「……帝国軍人としての貴方の考えはわかりました、オズボーン准尉。だけど、私人としての君はどう思っているんだい、リイン君」

そんな鋼鉄の決意に他の面々が気圧される中、それでもとロイド・バニングスはこれだけは聞いておきたいと問いかけていた。

「君は半年前別れ際に言ってくれたね、「自分が言えた義理ではないかもしれないが、頑張ってほしい」と。そう俺たちの事を応援してくれ

ていた。「自分が言えた義理じゃない」なんて言う位なんだ、あの時の君の言葉は決して帝国軍人としてのものではなかったはずだ。

だからこそ聞かせて欲しい、軍人としての立場を取り払った上での今の君の気持ち。宰相閣下の言うように、俺たちクロスベルの小さな意志はエレボニアという大きな意志に呑み込まれるべきだと、それこそが世の理なのだ、君も、そう思っているのか？」

告げられた言葉と見据えられた瞳にリインは一瞬息を呑む。

好意がある、敬意がある。目の前にいる人達とは一週間程度の短い付き合いで、立場も違えど、それでも友だとさえ思っている。

だけどそれでも、政府が討てというのならば討つのが軍人だと理性はそう告げている。されど、それはあくまで軍人としての意志だ。

それらを総て取り払った、もしも軍人でないただの私人としての自分の意見を述べる事が許されるというのならば、それは――

――私は愛する祖国が他国とも憎しみ合い蹴落とし合うのではなく、手を取り合える未来が来ることを望んでいる。

脳裏に過つたのはそんな美しい綺麗事。そう、あの時自分は確かにあの皇子の語った理想に魅せられた。

――リイン君が、不幸な人を作ってしまったことを『必要悪』だなんて切り捨てちゃうところ、私は……見たくないな

どこまでも優しい少女がそう告げた事を覚えている。そう、必要だろうが悪は悪。やらずに済むに越したことはないのだ。

だからこそ、立場も何もかも放り捨ててただ私人としての言葉を述べる事が許されるというのならば、自分の理想は――

「……もしも、本当にそれが叶うというのならば、国など関係なく全ての人々が笑い合って手を取り合える。そんな理想郷が実現する事を俺も望んでいますよ」

もしも本当にそんな青臭い綺麗事を実現できるといふのならば、それこそが一番だと。

纏っていた鋼を外して、夢見がちな青臭い少年としての思いをリインは告げていた。

最もこれは本当にただの理想論だ。現実はそう甘くはない、そう理

性は告げている。

「……ありがとう、その言葉を聞いて良かったよ。立ちはだかる壁が大きい事はわかってる。だけど、それでも、俺は、俺達はそんな未来にするために足掻き続ける。」

だから、もしもそうなた時はまた、クロスベルに皆と一緒に遊びに来て欲しい。友人として案内させてもらうから」

けれど、それでも、もしも本当にそんな未来が来るといふのならと、そんな風に願う感情を抑える事はリインには出来なかった……

・
・
・

休憩を挟み再開された会議の様子は、第1部の時とは違い、不穏な空気を齎し始めていた。議題に上がったのはクロスベルの安全保障問題。

数ヶ月前、二大国からしてみれば“たかが”宗教団体如きに自治州全土が混乱に陥れられた《教団事件》。組織の上層部の腐敗具合がピークに達していた時期とも重なり、治安維持組織である警備隊の面々までもが操られ、IBC本社ビルを襲撃するという事態にまで陥ったことについてオズボーン宰相とロックスミス大統領はここぞとばかりに仲良く責め立てる。その原因となったのはそもそも親帝国派でもって知られたハルトマン議長が教団にスキャンダルを握られ、脅された事でその腰巾着たる警備隊司令に教団の用意した薬を隊員たちに飲ませたため、というある意味では帝国にブーメランが刺さるものではあるのだが、オズボーンはそんな事は意にも介さずにただクロスベルの不祥事としてその件を追求し、ロックスミスもまたそれに追従する。

皮肉にもデーター・クロイス市長が推し進めた改革によってクロスベルの政治体制が健全化されつつある事が不倶戴天のはずの二大国の長が図らずも共同戦線めいた状態を取らせる結果を生んだ。

クロスベルという金の卵を生む鶏の所有権を巡って帝国と共和国は長年争い続けてきた。どちらの管理にするかで揉めている両国だが、クロスベルに自立されてしまっただけでは困るという点では同じなのだ。故にこそその共同戦線、所有権を決めるのはまたあとでやればい

い、重要なのは、まず第一にこの金の卵を生む鶏を自由にさせないことだと言わんばかりに。

大国としてのどこまでもエゴに塗れた主張を何の衒いもなく言つてのける。政争にかまけた結果《教団事件》などという重大な事件を引き起こす事になった上に、そんな政治の腐敗を食い止める象徴たる君主や憲章と言った権威が存在せずに、頼みとするのは自治州法などという脆弱極まりないクロスベルが果たして安全を保障する事が出来るのかと。そもそも自治州法の欠陥も、クロスベルの政治家達が政争にかまける事となったのも原因は二大国の圧力によるものだと承知の上で、どこまでも厚顔に。

そして二大国の要求はさらに加速していく。オズボーン宰相は警備隊などという自国の士官学院生に負ける程度の練度しか持たない上に、戦車も飛空艇も持たず、挙げ句の果に怪しげな組織に操られて市民を恐怖に陥れた役立たずの治安維持組織等解散して他国にそれを委ねるべきだと主張。そして求められれば、精鋭たるエレボニア帝国正規軍がそれを担ってもいいと主張。余りに過激すぎる発言に出席者達が必死に止めんとしたところで、共和国の大統領は冷静にオズボーン宰相の発言は余りに強引に過ぎると諫めの言葉を述べる。

しかし、更に続いて続けられた言葉に一同は凍りつく、「タングラム門に共和国軍が、ベルガード門に帝国軍が駐留するようにすればいい。そうすれば有事の際には何時でも駆けつける事が出来るはず」と。どちらか一方だけが駐屯するとなれば、それは火種に成りかねない。故に、ここは互いに妥協しようと言わんばかりに。

そんなロックスミス大統領の意図を察してオズボーン宰相もまた「二考に値するか」と好意的な意志を見せ、両者は実にこれ見よがしに互いを称え合う。その帝国と共和国以外の小国の意見など考慮に値しないのだと見せつけるかのような光景に、流石に鼻白む列席者達と「ここは二国だけの会議ではない」と諫めるオリヴァルト皇子の言葉にオズボーンはわざとらしくそうに謝罪の言葉を述べる。

これこそが現実なのだと言わんばかりに。皇子へと見せつけるように。

そしてそんな光景を目の当たりにしてリイン・オズボーンは忸怩たる思いを抱いていた。

……思うところがないわけでは決してない。何故ならばリイン・オズボーンは未だ若いから。だから、どうしても希望を信じたくなくなってしまう。

けれど、これこそが現実なのだ。リインは心する。確かに悪辣だが、それでもエレボニアの指導者としての父は決して間違っているわけではないのだからと。どこか、自分に言い聞かせるように。

胸の中にある「他国とも手を取り合える未来」、そんな綺麗事はあくまで理想に過ぎないのだと押さえつけるかのように……

トワ・ハーシエルは心を痛めていた。

彼女とて理解しているつもりであった。政治や外交というものがどうしても『必要悪』と呼ばれるものを孕む事になる、決して綺麗事だけで済むものではないという事は。

けれど、それでもあくまでそれはつもりでしかなかったのだと彼女は思い知らされていた。

彼女は優秀だ。故に理解出来てしまう。オズボーン宰相の発言も帝国の指導者として決して間違いではないのだと。

そして、自分たち帝国人はその恩恵を受けている側なのだと言うことも。

だからそう、そんな自分がオズボーン宰相を声高に非難するというのならば、それこそ恥知らずな行いなのだという事も。

だけど、それでも本当にオズボーン宰相閣下の突き進む以外の道が自分たち帝国人は選べないのかと、そんな青臭い思いを捨てる事が彼女にはどうしても出来なかった。

オリヴァルト・ライゼ・アルノールは憤っていた。

他者に対してではない。無力な自分自身にだ。鉄血宰相の突き進むもうとしている覇道ではなく王道を、威圧ではなく融和する道をこそ自分は選んだ。

だが、それでも今の自分は実に無力だった。鉄血宰相の発言をどう

にか皇族としての立場から諫めはしているものの、それでも宰相はどこ吹く風とばかりに突き進む。

そしてそんな宰相へと同調した共和国の大統領によって、通商会議は完全に共和国と帝国が如何にしてクロスベルというパイを取り分けるかという話へとなつて来てしまつてゐる。

それを、自分は止める事ができない。帝国の指導者としての宰相が決して間違つてゐるわけではないという事がわかつてしまふからだ。

何故ならば政治や外交というのは古来より突き詰めればそういうものなのだから。帝国の指導者が考えるべきは帝国の繁栄であり、他国の繁栄や誇りなどというのは二の次なのだから。

そんな事はオリビエとて理解している。だが、しかし、それでも自分は決して胸に抱いたこの青臭さを捨てはしない。

これこそが自分の目指すべき未来なのだ、そう信じて歯を食いしばりながら、目の前の立ち向かうべき現実をしつかりと見据えていた。

そしてそれら総てを呑み干し、ギリアス・オズボーンは鋼鉄の意志で突き進む。

怒りも、嘆きも、敵意も、崇拜も、忠誠も、総て余さず受け止めて自分はこの道を突き進むのだと鋼の進撃を続ける。

そして、会議の流れがまさに帝国と共和国の二大国の望む方向へと進もうとしている中……

「……方々、下がられよ!!」

議場にて待機していた《風の剣聖》が招かれざる客の襲来を告げた。

《赤い星座》

「宰相閣下……無事ですか!!」

襲撃と同時にリイン・オズボーンは他の護衛とともにすぐさま議場へと駆けつけ、焦りと共にそう叫んでいた。一瞬よぎった、血まみれで倒れ伏す父の姿、それを必死に振り払うように。

「私などよりもまず、オリヴァルト殿下の御身をこそ案じるべきだろう」

しかしして、そんな息子の懸念を父はどこまでも悠然とした様子で吹き飛ばす。

そこには命を狙われているという事に対する恐怖も、予期せぬ襲撃に動転する様子も全く見られない、どこまでも常と変わらない威風堂々とした様子であった。

まるでこの程度自分にとつては非常時でも何でも無い、取るに足らぬ日常だと告げるかのように。

「殿下、お怪我はありませんかな」

「はは、銃弾が特注ガラスに遮られたというのに、何をどうしたら負傷すると言うんだい？見ての通りピンピンしているさ」

そんな調子で各国の武官が自らの主君の安否を口々に確認している。幸いな事に負傷者は誰一人出ていなかった。……もしも出ていたらクロスベルにとつてはそれこそ悪夢であったであろう。

「覚悟してもらおう！《鉄血宰相》ギリアス・オズボーン!!」

告げられたテロリストの言葉、それはリインも聞き覚えのあるとある男の声だった。《帝国解放戦線》、そしてロックスミス大統領を狙った反移民派のテロリスト、それが襲撃犯の正体であった。

テロリストたちの語る弾劾の言葉を大統領も宰相も動じずに一笑に付す。それは別段自分たちの身の安全が武官達に保証されているからのものではない、彼らはおそらく死の間際であっても変わらず一国の代表に相応しい堂々たる態度を見せつけるだろう。

その様は善悪はにおいて、彼らが紛れもない傑物である事を示すものだった。

ここにテロリストたちの末路は定まった。

何せこの場に居る護衛役は遊撃士である《風の剣聖》アリオス・マクレインを筆頭を選びすぐりの腕利きばかり。

どうやら建物がハッキングを食らって階下に居るクロスベル警備隊は足止めを食らっているようだが、そんな事は些事である。

飛空艇に乗れる人員には限りがある以上、たかだか武装したテロリストの相手などこの場に居る面々だけで十分過ぎる。

故に、これは危機でも何でも無いのだと、そう武官達は動き出そうとする。

それは決して自惚れでも慢心でもない、実力に裏打ちされた自信というものである。

断言しよう、そこらのテロリスト如きに今この場に居る精鋭たちが遅れを取る事はまず有り得ない。

ひねり無く、順当に彼らは勝利するだろう。

――本当に襲撃してきたのが、そこらのテロリストのみであったのならのだが。

「む、どうやらまだ一機居たようですね……まあたかだかテロリストの数が10や100程度増えたところで」

大統領の護衛隊長を務める《クロフト・コールドウエル》少佐がそう告げようとする。

彼もまた《ミユラー・ヴァンダール》や《ユリア・シユバルツ》同様に《達人》と呼ばれるに足る実力者。

その言葉は決して大言壮語ではない。実際襲撃者がただのテロリストであればそれこそ彼一人でも100人程度、十分に片付けられるだろう。

しかし、現れた飛空艇に刻まれた紋章を目にした瞬間、コールドウエル少佐は余裕と自信に満ちていたその表情を強張らせる。

そこに刻まれていたのは赤い蠍の紋章、大陸最強と謳われる猟兵団《赤い星座》、それが現れた襲撃者の名であった。

《赤い星座》、それは西ゼムリア大陸でも最強と謳われる猟兵団である。

ゼムリア大陸の《獵兵团》の中でも赤い星座と肩を並べるとされる《西風の旅団》は癖が強く、様々な分野のスペシャリストを抱え、中には戦闘力を然程持たない団員も居るのに対して

《赤い星座》の団員に求められるもの、それはどこまでもシンプルに“強さ”である。

こと単純な戦闘力であれば帝国正規軍において最精鋭と謳われる《鉄道憲兵隊》や共和国の誇る特殊部隊《ハーキュリズ》さえも上回ると言われている。

団員全てが一騎当千と謳われる実力者で、部隊長以上の地位にあるものは全て《達人》の領域へと至った者達で、団長を務める《シグムント・オルランド》に至っては西ゼムリア大陸でも屈指の実力者である。

そんな《赤い星座》が現れたという事実とその場に居た者達は表情を強張らせる。

もはや樂觀出来る状況ではない。この場を集った精鋭たちを以てしても勝利を確約出来る程甘い相手ではないのだ。

流石というべきか、各国の首脳陣はそんな中でも毅然とした態度を保っているが、文官の中には哀れ恐慌状態に陥ってしまう者達も出ていた。

それほどこまでに《赤い星座》の名は重いのだ。

「ふふふ、よもや《赤い星座》を動員してくるとはな。最新鋭の軍用艇といい、どうやら余程気前の良いスポンサーが背後に居ると見える」
しかし、そんな命の危機を前にしてもギリアス・オズボーンは全くもって揺るがない。

むしろ自分の想像の上に行くような手を打ってきた敵手をどこか讚えるような色さえ、そこには存在した。

「いやーこいつは流石にやばくないですかね、宰相閣下。そこらのテロリスト程度ならともかく相手が《赤い星座》となるとちよいと厳しいんじゃないかと」

蛙の子は蛙というべきか、宰相の腹心たる《レクター・アランドール》もまた余裕に満ちた表情を崩さない。

それは、武官達に対する信頼か、はたまた死ぬ覚悟が出来ている故か、それとも何か奥の手でも用意しているのか余人には判断がつかないところであつた。

「確かに君の言うとおりだアランドール書記官。自治州の警備隊ごときには些か荷が勝ち過ぎるというものだ。ここは宗主国としてその手を貸してやるべきだろうな」

そこでオズボーン宰相はさあ、奮えよ我が息子。舞台は整つたぞと言わんばかりにリインを見据えて

「准尉、手を貸してやり給え。守護の剣の皆伝、それが決して飾りでない事を証明して見せよ」

「御意。無謀なる襲撃者共に我が双剣を持って帝国の威信をその身に刻んでやりましょう。誰に喧嘩を売つたのか、それを教えてやりませ」

告げられた父からの命令に対してリインは敬礼を施しながら、鋼鉄の意志をその両眼に宿らせて応える。

その光景は百の言葉よりも雄弁に、彼が《鉄血の継嗣》である事を示していた。

そして、そんなオズボーンへと負けじとロックスマスもまた護衛達へと宗主国として手を貸すように指示。

それはクロスベル側は断る事ができない。

何せクロスベル側が現状動員できる戦力は遊撃隊として待機していた《特務支援課》と捜査一課のエースたるダドリー刑事位なのだ。

いくら彼らが《教団事件》を解決したクロスベルの英雄であっても、元々警備隊の所属であつた《ランディ・オルランド》や警備隊からの出向である《ノエル・シーカー》曹長を除けば本職の軍人でもない。

警備隊が足止めを食らっているこの状況下で彼らだけで襲撃者の相手をするというのは余りに無謀が過ぎるというものだろう。

いや、例え警備隊が足止めを食らっていないなかつたとしても協力を仰がざるを得なかつただろう。

それ程に《赤い星座》は格が違うのだ。クロスベル警備隊のみで相手をするなら、それこそ一個大隊ではなく一個連隊は最低でも必要だ

ろう。

そして苦渋を飲み干すような表情で協力を求めるディーター市長とマクダエル議長の言葉を受けて

リベールのクロローディア王太女、レミフェリアのアルバート大公、そしてオリヴァルト皇子らもまた自らの護衛達へと迎撃に当たるようにと命令を下す。

当然、会場の警備を任されていた《風の剣聖》も遊撃士としての仕事を果たすべく迎撃へと当り、遊撃部隊として待機していた特務支援課もそれへと合流しようとする。

此処に各国の混成部隊と大陸最強の猟兵团《赤い星座》の死闘が、幕を開けようとしていた……

・ ・ ・

「リイン君！」

トワ・ハーシエルは気づけば戦場へと赴こうとしている大切な少年の名を呼んでいた。

まるでこのままどこか遠くへと少年が行ってしまうのではないか、そんな不安が心を過って。

そして、そんな少女の不安そうな顔を見てリインは何時もと同じ柔らかな笑顔を向けて

「心配は要らない。君は必ず俺が護る。例え敵がああ《赤い星座》であろうと、必ずや守り抜いてみせる。だから、どうか安心して待っていてくれ」

ヴァンダールの剣は守護の剣なのだから。そして目の前の少女こそリイン・オズボーンが心から護りたいと願う大切な陽だまりなのだから。

誰が相手だろうと必ずや守り抜いてみせると誇りと共にリインは誓う。

そしてそんな何時もと変わらない優しい微笑みを向けながらも瞳に強い意志を宿した少年の様子にトワは何も言えなくなる。

「行かないで」等と言う事は出来ない、彼が何のために戦おうとしているか、それが痛いほどわかってしまったから。

故に

「待っているから!!」

一言、そう告げる。貴方が生きて帰ってきてくれる事を私は信じていると不安を押し殺しながら。

そして、そんな少女の言葉に少年は微笑みを以て返す。ああ、これは絶対に死ぬわけには行かないなど師の教えを思い出しながら、戦いの場へと赴くのであった……

去っていく少年の姿をトワは何時までも見送っていた。何時までも何時までも、不安になる心を必死に叱咤しながら。

そのまま放っておけば何時までもその場に立っていそうだったが……

「いやはや、青春ですなあ。若いとは素晴らしいものです、そうは思いませんかなオズボーン宰相閣下」

どこかからかうような口調で愉快げに話すロックスミス大統領のその声にトワ・ハーシエルは思い出す。

自分が今、どのような場に居たのかを。

「しかしまあ、彼も中々に隅におけませんなあ。このような可愛らしいお嬢さんをああまで心配させるとは。

こちらの方も宰相閣下の薫陶の賜物ですか?」

「いえ、恥ずかしながら若い頃の私は武骨も良いところでしたな。

アレも私の要らぬところばかり似てしまったなど、そう思っていたのですが……ふふ、父としては少々安心というものです。

帝国政府代表としては場を弁えろ、とそう叱責するべきなのかもしれないが」

どこか愉快気にそう応じる自国の代表の言葉にトワは改めて顔を真赤にする。

自分が一体どこで何をしていたのか、それにすっかり気づいてしまったのだ。

「いやいや宰相閣下。それは些か以上に酷というものでしょう。

愛しい恋人が戦地へと赴くというのならば、一言位告げたくなると

というのが人の情というもの。

むしろ、言葉を交わす程度で済ませただけ十分に自制しているというものでしょう」

「ふふ、アルバート大公の仰る通りだろう宰相殿。

そもそもリイン君にしてもトワ君にしてもまだ正式に官職に就いているわけではないんだ。

多少の事は、多めに見てあげるべきだと思うがね」

青春真っ盛りの少年と少女、そんな光景を目の当たりにした事で緊迫した空気がどこか緩み、各国の首脳陣は実に暖かな視線を少女へと向ける。

状況が改善されたわけでは決して無い、だが真面目くさった顔をして待ってれば状況が改善するというわけでもない。

ならば、少しでも明るく振る舞う事、それこそが自分たち指導者の役割だろうと言わんばかりに。

そしてそんな明るい空気は自然と伝播していき、恐慌状態に陥りかけていた文官たちもまた明るい表情を取り戻していく。

ただ独り、トワ・ハーシエルだけは居た堪れない思いを抱え、しばらく顔を真赤にしているのであった……

オルキスタワーの死闘

死闘が繰り広げられていた。

《赤い星座》はこの戦いに团长たるシグメント直々の指揮の下、5人の部隊長を筆頭に旗下の精鋭達を投入。

“理”とは別種の高みたる“修羅”の領域へと至っているシグメント自身は《風の剣聖》とやり合う傍ら、5人の部隊長もまた旗下の部隊を率いて各国の護衛部隊と交戦へと突入した。

戦況の推移はほとんど五分と言っている、各国の護衛隊長は皆“達人”と呼ばれるに足る実力者だが、それは赤い星座の部隊長もまた同じ。

各国の兵士は自国の首脳の護衛の任に抜擢にされた選りすぐりの精鋭だが、それは赤い星座の団員達もまた同じ。猟兵という戦いに身を置く戦士たちの中でも選りすぐりの上澄みこそが赤い星座なのだから。

士気の面もそうだ、護衛部隊側が自国の首脳を護らんという矜持を抱くのなら、赤い星座もまたプロフェッショナル中のプロフェッショナル。受けた依頼は完遂せんと強い意志を抱いて戦いを挑んできた。

何よりも彼らは“戦い”そのものを愛している生粋の戦争狂の集まりだ。ともすれば一方的な蹂躪劇になってしまいがちな普通の戦いに比べて、珍しく自分たちと五分に渡り合えるだけの得難き敵手の存在に彼らは奮い立っていた。

戦いとはつまるところ、味方を如何に犠牲にせず敵を殺すが大事であり、戦術はそれを最大限発揮するための技術であり、戦略はそもそも五分の戦い、勝利の天秤はどちらに傾くかわからない、そんな状況にそもそも陥らせないためのものだ。

極論強くなるというのは敵を圧倒するためであって、当然上はこの戦力ならばまず負けないだろうという戦場を見繕って部隊を投入する。逆に言えば、そういったお膳立てこそが上に立つものの務めである。

故に戦場において互角の好敵手、そんな存在に巡り会えるというのは非常に稀だと言っていていいだろう。だからこそ生粋の戦争狂達は奮い立つ、なんとも得難き素晴らしい敵だと。

まるで年来の親友、あるいは恋人に対するかのような心境で持つてその戦意^愛を思う存分にぶつけていた。

そしてリイン・オズボーンもまた……

「アハハハ、良いよお兄さん！腑抜けちゃったランディ兄なんかよりも遙かに良い！こんなに楽しめる相手は久し振りだよ!!」

「ご満悦と言わんばかりに暴れる赤髪の少女。『血染め』の異名を持つて知られる赤い星座の部隊長の一人たる《シャーリィ・オルランド》と交戦していた。

ライフルにチェーンソーのようなものをつけた身の丈ほどもある愛用の武器《テストアロツサ》をいともたやすく振るいながらシャーリィは目前の敵手を見据える。

年の頃はおそらく自分よりも少し上と言ったところだろうか、腕の方も自分には及ばないもののそれでも十分過ぎるほどの技量を有しているし、何よりもこちらを見据えるその瞳がたまらなくそそのる。

自分が少女だからと侮る色も、生かして捕らえるだとかといった生ぬるい考えなど一切ない。あるのは純然たる鋼の如き戦意と殺意。

そうだ、戦いとはこうでなくてはならない。生きるか死ぬか、殺すか殺されるか、互いの意志と生涯を本気でぶつけ合うコレこそが戦場の醍醐味なのだから。

(90点……つてところかなあ♥)

シャーリィは目前の敵手をそう採点する。

恐らくは『達人』の粹に最近至ったばかりなのだろう、どうやら目の前の剣士は些か未だ実戦経験が足りていないようだ。

研鑽を重ねてきた事はわかる、決して怠けていたわけではないのだろうし、才能もあるのだろう。

されど実際に命のやり取りの行われる戦場、共に戦っていた戦友が次の瞬間には死んでいるような鉄火場をくぐり抜けた経験値、それがどうやらこの相手にはまだ不足しているようだとしリインよりも

年少の少女が採点する。

もう後少し、経験を積めばそれこそ自分にとっては初めての百点満点の相手にもなり得るかもしれない、そんな将来性を感じさせる。

——最も、次があればの話だが。更に成長しそうだからあえて取り逃がす、そんな気持ちはシャーリイには毛頭ない。

あるいは、これがまだ未熟な雛鳥だというのならその可能性もあったかもしれないが、此処まで自分とやりあえる得難き相手をみすみす逃すなどそんな勿体無いことを出来るはずがないのだ。

何せこれ程の相手に巡り会える機会などそうそうないのだから。後日更に成長する事を期待して逃したは良いが、他の者に奪われる等となつたら目も当てられない。

元よりそう気が長いわけでもない以上、この極上の獲物をなんとしても喰らわんと人食い虎は猛つていた。

(それに比べて……ランディ兄の方は随分とダサくなつちやつたなあ)

そのため息交じりにお仲間と一緒に自分の部下達とやり合っている己が従兄をシャーリイは評す。

従兄である《ランドルフ・オルランド》はシャーリイにとってかつては身近な目標であり、憧れであった。

本来であれば、自分の部下たち程度に手間取るはずがないのだ。彼がかつてのように本気を出していれば、それこそ戦況はもつと敵にとって有利に傾いていただろう。

それにも関わらずシャーリイの尊敬していた従兄は、仲間に合わせてなんともつまらない擬態を行ってしまったている。

自分はこいつらの一員であり、特務支援課あいつらとは違うんだと、赤い星座そんな風に必死に自分に言い聞かせている。

自分の中に流れる《闘神》の血を抑え込んで、仲間と歩調を合わせてしまっているのだ。

そんな従兄のなんとも無様な姿がシャーリイには悲しくてしようがなかった。自分がかつて憧れたあの輝く生粋の戦士たる姿は一体どこへ行ってしまったのかと……

「何を余所見をしている!!」

そんな風に何時になくセンチな様子になっていたシャーリイへと、裂帛の殺意と共にリインは己が双剣を叩き込む。

しかし

「アハハ、ごめんごめん。そうだよね、余所見をするだなんてお兄さんに失礼だったよね」

喜色に満ちた笑みを浮かべる少女によってその攻撃はいともたやすく弾かれる。

そして、叩きつけられるその殺意にシャーリイは笑みを深める。

ああ、そうだせつかくそうそう巡り会えない極上の獲物に出会えたというのだからそつちを楽しむ方がはるかに大事だろう。

腑抜けてしまった従兄の再教育は後日父のすることであり、自分が気にすべき事ではないと気を取り直す。

「それじゃあ、此処からはもつとギアを上げていくから!シャーリイの本気に、ちゃんとしてきてよねえ!!」

その言葉と共に放たれる裂帛の気合、《ウォークライ》と呼ばれる選りすぐりの獵兵が使う闘気を練り上げ高める技をシャーリイは使ったのだ。

宣言通りに一段階上がっていく敵の猛攻を前に徐々にリインは押されていく。

単純な近接戦闘であればリインとてそうそう引けを取らない。だがこの敵は巧いのだ。

遠近両方に対応出来る武装、それを十全に使いこなし、武装を巧みに切り替え、リインの間合いで戦わせない。

戦闘スタイルと実力で言えばこれまでリインが巡り合ってきた存在の中ではサラ・バレストラインこそが最も近いだろう。

目前の少女は紛れもない強敵であった。

リイン・オズボーンは憤っていた。自分よりも年少の少女を相手に押されてしまっている自分自身に。

世界は広い、上には上が居ること、そんな事はリインとてわかっていた。だがそれでもリインは今まで自分よりも年少でかつ自分の上

を行く実力者に出会ったことがなかった。

いつの間にか、知らず自分が学生最強等と褒められて調子に乗っていたことをリインは齒噛みしながら思い知っていた。

もちろん、戦闘に限らない各種分野への造詣等と行った総合力で競えばリインはシャーリイに完勝するだろう。

名門ツールズ士官学院の首席で既に本職の文官顔負けの論文を書き上げ、その気になればこそ軍人以外にも行政官僚となることとて十分に可能なリインとどうにか文字の読み書きと四則演算は出来る程度といった有様のシャーリイとではそれこそ勝負にさえならない。

しかし、こと戦いという分野に関して言えばシャーリイ・オルランドは現状リイン・オズボーンの上を行っていた。

それは才能でも積み重ねた修練の差でもない、くぐり抜けてきた修羅場の差だ。

如何にリイン・オズボーンが優れた師の下でその才能を磨き抜いたとは言え、それでも彼は未だ死線と呼ばれるものを超えた経験が乏しいのだ。いくら実戦形式の修練を行ってきたとは言え、それはあくまで実戦ではない。

一方のシャーリイ・オルランドは11歳の時に初陣を飾って以来、この年で数十以上もの死線をくぐり抜けてきた。

その差が、シャーリイの優位を生み出していた。

それでも、リイン・オズボーンは劣勢ながらも渡り合っていた。

大陸最強の猟兵団赤い星座の部隊長「血染め」のシャーリイを相手に。

それは、彼もまた紛れもない達人の域に達している事を示していただろう。

戦況は均衡状態にあった。この場において最上位の実力者たる《シグムント・オルランド》と《アリオス・マクレイン》の戦いは五分。

赤い星座の各部隊長と各国の護衛隊長もまた個々の戦いにはそれぞれ優位なところもあれば劣勢なところもあるが、リインとシャーリイの戦いも含めた5人全員の戦況を総合的に見れば五分と言つて

いい。

「……わかっているのか、このまま行けば、我々だけではない。そちらも吹き飛ぶ事になるのだぞ」

よもや死を賭してなどという事はないだろう。目前の敵手は死を恐れたりはしないだろうが、それでもそこまでする義理や義務はなはずだろうと告げるアリオスの言葉にシグムントは

「ククク、ああ、奴らが乗ってきた軍用艇に仕掛けられた導力爆弾の事か。その件は心配要らん。

その程度、鉄血や共和国の狸めが読めていないはずもない。まず間違はなく側近の誰かを解除に向かわせているだろうさ」

自分はそちらのことを信じていると告げる。

あの狡猾で周到なる二人がこの場にいる武官達しか手札が存在しないなどということがあるはずがないと。

必ずや隠している何らかの札で対処しているはずだと。

そして彼のこの読みは正しかった。

大統領補佐官を務めるキリカ・ロウランと鉄血の子どもの一人たるレクター・アランドールは今、まさしくシグムントの期待通りに結社より借り受けた屋上の人形兵器を相手取りながら、仕掛けられた導力爆弾の解除へとその手を割かれているのだから。

「なるほど、端からそちらはこちらの戦力を割かせるための陽動という事か」

「ふふ、そういう事だ、《風の剣聖》よ。故に、余計な心配などせずに分分にこの死闘を楽しむとしようではないか!!」

得難き好敵手を相手に高揚しているのはシグムントもまた同じ。

彼ほどの領域にまで至ってしまうと、もはや自分と五分にやりあえる敵手等大陸でも数える位しかない以上尚更である。

そんな目の前の戦鬼の様子に嘆息しながらも、アリオス・マクレインもまた八葉の剣を以て応じるのであった。

そして、そんな膠着状態に陥った戦況においてついに犠牲者が出る。

「ガハッ………」

断末魔と共に消えていく命の灯火。

それはリインも幾度か言葉を交わした帝国軍の士官だった。

自分もトールズ出身なのだ、そう鉄血宰相の息子である自分にも特に壁を作らずに話しかけてくれた気さくな人だった。

当然覚悟していたはずだ、軍人とはこういう仕事なのだ。

戦友を失うこと、それは決して珍しいことではない。

されど、それでもリインにとってそれは初めて経験する戦友の死だった。

ほんの一瞬、時間にすれば数秒にも満たない鋼の戦意に空白の時間が生じる。

死んだ戦友を悼む気持ち、そんな人間らしい当然の気持ちが生じる。致命的な隙を生んだ。

「駄目だよ、お兄さん。余所見なんかしてちや」

「!?しまっ」

そこいらの敵であればなんら問題のなかった隙とすら本来呼べるようなほんの僅かな空隙、それをシャーリイ・オルランドは見逃さなかった。

潜ってきた修羅場の差、戦友の死という戦場をくぐり抜ければ必然経験する事になるそれをこれまで経験して居なかったこと、仲間の死を悼むという当たり前の心、それがここに来て決定的な差を生んでしまった。

「バイバイ、お兄さん。本当に本っ当に楽しかったよ。シャーリイも多分いずれそつちに逝くと思うから、その時はまた相手してね♪」

そんな楽しかった時間が終わってしまうこと、得難き遊び相手と別れる事を惜しむ気持ちを滲ませながらシャーリイ・オルランドはその勝敗を決定づける一撃をリインへと振り下ろした――

好きな男の人のタイプは強い人

振り下ろされたテストロツサの一撃、それはリインの右頬と左胸をえぐり取った上でその肉体を吹き飛ばした。

とつさに回避を試みたため、即死にこそ至らなかったもののそれでも、それは致命傷と言つて良い傷をリインへと与えた。

壁に激突し、そのまま倒れ伏したリインの身体から流れ出る命の雫が純白だった床を赤く染めていく。すぐに治療を施さなければ手遅れとなることは明らかであった。

しかし

「くうっー！」

そんな余裕は誰にも存在しない。

均衡状態にあった戦況は戦力の一角を担っていたリインがシャールィに敗れた事で完全に赤い星座側へと傾いた。

不味いと、誰もが表情を強張らせる。されど、その欠けた戦力を補う術は現状の彼らには存在しない。

彼らとてそれぞれの敵手の相手で手一杯なのだ。

必然自由となったシャールィがその守備を突破せんと猛り、その矛先を部下と交戦していた特務支援課へと向けんとする。

「シャールィてめえー！」

怒りを以て見据える従兄の視線を受けてもシャールィ・オルランドはきよとんとした顔を浮かべ

「何をそんなに怒ってるのランディ兄。そもそもランディ兄がちゃんと本気を出していればこうはならなかったと思うんだけど」

「ッ!？」

戦況はほとんど五分五分の状態だったのだから、本来であれば「達人」級の實力者たるランディが本気を出してさえ居ればこんなことにはならなかったのだと。リイン・オズボーンがやられたのはランディ・オルランドがつまらない擬態をしていたからなのだ、戦場のあらゆる要素を愛する生粋の戦闘狂は容赦なく己が従兄の欺瞞を指摘する。

「あーあ、本当になんでそんな風に腑抜けちゃったのかなあ。今のランディ兄は正直見るに堪えないよ。せつかく最高の気分だったのに……台無し」

先程まで向けられていた心地よい殺気と戦意に満ちた眼差しに比べて眼前の従兄のなんと情けない事かと、シャーリイ・オルランドはかつて憧れた存在の醜態に先程まで高揚していた気分が目に見えて落ち込むのを感じていた。

ああ、アレほどに素晴らしい相手にはそうそう巡り会えないだろうなど、そんな自分が屠った相手の死を心から悼んでいた。

「少しはさつきのお兄さんを見習ってよ」

「ぐおおっ」

ため息混じりに繰り出されたその一撃にランディは吹き飛ばされる。

「ランディー！」

仲間たちの自分を案じる叫び声が響くもランディ・オルランドもまた床に倒れ伏し、戦闘不能へと陥る。

リインと異なり、傷が浅いのは次代団長と見据えている身内故だろう。

あるいは、現状のランディでは殺す価値もないと思われたのか。

「うーん、此処まで腑抜けちゃっているとなると……やっぱり、アレかな。ちよつと強めの気つけが必要かな。」

「……例えば、大切な仲間さんを失うとかね」

良いことを思いついたと言わんばかりのその従妹の無邪気な笑顔にランディは背筋に薄ら寒いものを覚える。

「……不味い、こいつは躊躇いなくそれをやってのけるとそう心が警鐘を鳴らす。」

「……勝てない、この従妹には今の仲間たちではまず間違いなく。」

「……援軍、それも期待できない。他の面々も手一杯なのだから。故に、此処で何とか出来るとするならそれは自分以外居ないのだ。」

「だからこそ、もう取り繕う事は止めるべきなのだ。ずつと、良い夢を見せてもらってきた。」

血まみれで罪に塗れた自分でもお人好し共に囲まれている間に、本当の仲間になれた気がした。

こんな自分よりも間違はなく彼らは生きるべき存在なのだから。

例え、本性を明かした事で化物と、そう罵られる事になったとしても――

そんな決意と共にランドルフ・オルランドがシャーリイ・オルランドの期待通りに己が本性を解き放とうとした刹那

シャーリイの予想も期待もはるかに超えた事態が起こる。

ゆらりと立ち上がり、こちらを見すえる視線を感知したシャーリイは思わず口笛を吹いてそれを喜ぶ。

「――へえ、すごいねお兄さん。その傷でまだ立ち上がれるだなんて。」

うんうん、やっぱりお兄さんは最高だよ♪」

――95点と、そう不屈の闘志を前にしてシャーリイ・オルランドは目前の敵手の点数を上げる。

そして再び獰猛な笑みを浮かべて油断なく構える。この手の本当ならば立ち上がれないような傷を負いながら、なおも立ち上がっていくような手負いの相手こそ一番油断してはならない存在だと熟知しているが故に。

命が散華される前のわずかな一瞬、そのときこそ一番輝くと知っているが故に。

期待以上だった極上の獲物をいぎ、心ゆくまで味わい尽くそうと。

「神気合」

――その瞬間、シャーリイ・オルランドは彼女にとっての『運命』へと出会った。

「……………わあ」

それを目にした瞬間、先程までの無垢な子どものような様子から、打って変わった深い深い情念を込めた吐息が自然とシャーリイの口から漏れていた。

シャーリイ・オルランドはこれまで幾度もカツコイイと思う存在へと出会ってきた。

それは死んだ伯父であったり、父であったり、かつての従兄だった
りと言った本物の戦士だ。

今まで喰らってきた獲物の中でも極上の存在はそんなシャーリイ
がカツコイイと思うような戦士だった。

それでも彼女は何処までも生粋の戦士である。だからこそ、それは
初めての経験だった。

戦いの最中に敵に見惚れてしまうなどという、そんな事は。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

響き渡る獣のような咆哮、それを聞き、その内面で猛り狂う殺意を
律する鋼の如き意志を宿した凜々しい顔を見た瞬間にドクンと胸が
大きく跳ねたかと思っただらやけにドキドキとしてしょうがない。

ああ何なのだろうか、この感覚は。その視線に宿る濃縮された殺
意、それをぶつけられただけでキュンとお腹の辺りが疼くのを感じ
た。

「愛する祖国のために。道半ばで散った戦友へと報いるために。大切
な者を必ず守り抜くために。そして彼女の下へと必ずや生きて帰る
ために。」

「……貴様たちは此処で俺が殺す」

ああ、本当に止めて欲しい。そんな事を言いながら傷を炎で焼き
切って止血するだなんてそんな無茶苦茶な事を平然とするだなん
て……どこまでこの人は自分をドキドキさせるつもりなのだろう
か。

いや、そもそも先程からのこの胸の高鳴りは何なのだ。

いつもと同じ極上の獲物に出会えたことに対する喜び？……似
てはいるけど違う、だってこんな胸が締め付けられるような切ない思
いを自分は今まで味わった事がない。

ならば、「恐怖」とそう呼ばれる感情なのだろうか？……いい
や、それも違う。何故ならば今日の前にいる素敵な人よりも強い相手
と出会った事は今までもあったが、それでも自分は恐怖したことなど
なかった。

何よりもこんなにも胸が高鳴って馬鹿みたいに浮かれている状態

た。

戦いで高揚する事は何時だとしてあった、されどそれは自分と同格の強者であれば誰でも良かったのだ。

故に、それは断じて恋ではなかった。だってそうだろう？「恋」とは曰く、その人でなければ嫌だ、他の人間など目にも映らないといった状態になることらしいのだから。

ああ、一体「恋」というのはどんな気持ちなのだろう、それはとても素敵で自分と同年代の少女たちは皆夢中になるものらしいが、どうも自分は他人に比べてズレているみたいだから果たしてそんな相手が本当に出来るのだろうかと、

そんな年相応の少女らしい事を悩んだ事もあったが——何のことではない、ただ自分は出会ってなかったただけなのだ、運命の人に。

(この人が……シャーリイにとつての運命の人だあ♥)

——100点満点？否、点数化する事など出来はしない。もはや従兄の事も、先程までは魅力的に写っていた他の達人達もどうでもいいものにしか今のシャーリイには見えなかった。

恋する乙女の目に映るもの、それは愛しい相手しか有り得ないのだから。

ああ、なんてなんて素敵な人なんだろう。必ずこちらを殺してやるぞと殺意に満ちたその情熱的な視線で見据えられるだけで子宮の辺りが疼いてしょうがない。

そしてそんな鬼のような殺気を持ちながらもそれらを律する鋼の如き意志の宿ったその凛々しい顔を見ているだけで胸のトキメキが抑えられない。

(ああ、女神様ありがとう)

——こんなにも素敵な人と巡り合わせてくれて。

故にさあ、女神の与えてくれたこの機会を絶対にモノにしなければ行けないだろう。

告白してくれるのを待つ？——冗談じゃない、そんな事をして愛しい彼が間女や間男に奪われたら一体どうするとかいうのか。

そんな事になったら自分は絶対に堪えられない。だからさあ、いざ

この思いを伝えに行こう。

「オーガクライ」

そして「英雄」に恋した「怪物」は覚醒を遂げる。

最上位の猟兵が纏う事ができると呼ばれる漆黒の闘気、それをも超えた闘神の血族のみに許された高みへとシャーリイ・オルランドは至った。

全てはただ一つ、目の前の愛しい彼に相応しい女でありたい、そんな健気でいじらしい乙女心によって。

「行くよ、お兄さん。どうか、シャーリイのこの思いを受け止めて♥」

無垢な少女から女となって、深い深い情念の込められた言葉を告げると共に、シャーリイ・オルランドにとっての夢のような睦言の時間が始まった。

再び激突し合う両者だが、繰り広げられる戦いはもはや先ほどとは別物だ。

繰り出す技の練度が違う、速度が違う、威力が違う。何もかもが桁違いになっている。

そして、それは加速度的に激しさを増して行く。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「英雄」はどこまでも高みへと至っていく——貫くために、守り抜くために、背負ったものへと必ずや報いるために、優しい陽だまりへと必ず生きて戻って帰るためにと。

それはかつて魔竜相手にやった、我が身を省みない捨て身ではない。

彼には此処で終わるわけには行かないと思わせるいくつもの宝があるから。祖国を、民を、愛しい少女を守り抜かんと戦う今の「英雄」は無敵だ。

人を喰らう魔性の怪物など「英雄」によって討滅されるのが定めならば、ひねり無く順当に彼は勝利を掴み取る——

「ああ、良いよ……最高!!私、今、誰よりも幸せ♥」

否、此処にいるのはもはや単なる怪物ではない。

「恋する乙女」は無敵なれば、「英雄」が大切な物へ報いるために

と覚醒を遂げるのならば彼女もまた覚醒を遂げる。

誰かのためなどではない、ただただ愛しい彼に相応しい女でありたい、そんなないじましい乙女心によって。

身を焼く焰も、つけられた傷跡も何もかもが今の彼女にとっては愛らしい。

ああ、私死んでもいいわ、ううん、貴方とずっと一緒に居たい、そんな相反する心がシャーリーの胸を満たす。

「ぐうっ！」

「アハハ！」

そして激しさを増していく死闘の最中で互いに致命打が叩き込まれ、両者は吹き飛ばされ壁へと激突する。

死闘のさなかに互いに蓄積されたダメージ、そしてここに与えられた決定打。ここに死闘は幕を下ろす相打ちという形で――

「まだだ！」

――否、否、断じて否だ！

自分は勝利を掴み取り、生きて戻らなければならない。

何故ならば自分は守護の剣を掲げる者なのだから。

自分の敗北はすなわち、大切な者の死をも同時に意味するのだから。

護るために“英雄”はあらゆる不条理をねじ伏せて立ち上がる。

「――ああ、どこまで素敵なの貴方は♥」

そしてそんな愛しい人の輝く勇姿を見て恋する乙女もまた立ち上がる。

だってそうだろう、愛しい彼があんなにも素敵な姿を見せてくれたというのなら自分もそれに応えねば女が廃るといふものではないか。

ただただ、愛しい人に釣り合う女でありたい、そんな恋心によって“怪物”もまた道理を蹴飛ばし、無茶を押し通す。

互いに残された力はもはや少ない、立ち上がった両者が決着をつけるべく残された力を振り絞り、最後の激突を行おうとしたところで

「総員、撤退する!! 退却準備へと移れ!!」

《シグメント・オルランド》の作戦の継続を断念する号令が響き渡つ

た。

恋する乙女は竜をも超える

「撤退って何で!？」

響き渡った団長命令、それを聞いた瞬間シャーリイ・オルランドは生まれて初めて、己が父からの命令に反発していた。

シャーリイ・オルランドは生粋の戦闘狂だ。彼女にとっては強者との戦いこそが人生である。故に詳しい本来の任務そっちのけで興が乗ってしまうという事は良くあることだ。

しかし、それでも彼女は生粋の獵兵でもある。故に明確に命令を下されて、それに反発するなどという事は今まで無かったのだ。猫のように気ままに奔放でありながら、それでも彼女はプロ意識を持つ獵兵なのだ。

これがあるいは彼女が国家に所属する軍人で、座学が出来るだけの頭でっかち、あるいは家柄だけが取り柄のボンボンのような者が上官にでもなっていれば、それこそその士官は不幸にも後ろからの誤射で女神に召される事となっただろうが、彼女が所属する赤い星座の団長は先代であるバルデルにしても今代の団長たるシグムントにしても凡そ、無能という言葉とは対極に位置する人物だったので、彼女がその命令に反発めいたものを見せるといのはコレまでには存在してなかった。

そんな聞き分けの良かった自慢の娘について訪れた春と反抗期に對してもシグムントは苦笑めいたものを浮かべて

「やれやれ、どうやらすつかりとその小僧に執心になってしまったようだな。普段のお前だったら気づいただろうに。

——屋上に行っていた手練二人がこちらに向かっている。このまま交戦を続けても突破出来る可能性は限りなく薄い。こちらが退き時と判断した」

己が父の言葉を受けてシャーリイが気配を探してみると、なるほど確かに屋上に向かっていた達人級の実力者二人がこちらに向かっているようだ。今も油断なくこちらを見据えている愛しい彼に夢中ですつかり周りが見えなくなっていた事にシャーリイは気づく。そし

て団長の言葉に理がある事を認めた。

基よりこの作戦は言わば奇襲に近いものだったが、それをこうして凌がれた以上じきに足止めを喰らっている警備隊とやらも駆けつけてくる事だろう。そうなれば今が均衡状態にある以上、天秤がどちら側に傾くのが必然というもの。故にシグムントの判断は至極妥当だ。退き際を見極めるのも、また指揮官の役目なのだから。

「ううっ……でもでもこんな機会またあるかどうか……」

戦士としての理性は父の下した判断を是としながらも、それでもシャーリイは己が私情から何時になくうしろ髪を引かれる思いを味わっていた。今までシャーリイは誰に討たれようとそれはそれで良いと思っていた。何故ならば自分は戦士であり、弱い者が死ぬのが戦場なのだから。自分が幾多の戦士を喰らってきたように、自分が死ぬ時はその番が回ってきただけなことだから。

だが今の彼女は違う、自分に終わりを齎すとすればそれは、目の前の愛しい人がいい、いや目の前の彼でなければ嫌だ、そんな思いが心を占めていた。そして同時に彼が自分以外の誰かに討たれるなど、想像するだけで気が狂いそうになる妬心に駆られる。それは恋をすれば誰もが多かれ少なかれ持つ、可愛らしい独占欲の発露であった。

「良いのか？お前も、その小僧もまだまだ強くなるはずだ。この一回を最初で最期の逢瀬にするというのは余りにもつたいないとそうは思わんか？お前たちならばいずれ、兄貴や俺、そしてあの獵兵王の領域にまで到れる事が出来るだろう。」

現に今日の戦いだけで、お前もその小僧も大きく飛躍したのだからな」

「!?」

嘆息しながら告げるその父の言葉にシャーリイを思い起こす。宿敵同士と言われた先代団長たる伯父《バルデル・オルランド》とその宿敵であった獵兵王《ルドガー・クラウゼル》の二人を。

確かにそうだ、自分達二人は未だあの二人の境地にまでは至っていない。なのにたった一回限りで終わりにするなど余りに勿体無いし、あの二人のように幾度も戦場でやりあってその度に互いに刺激し合

い、彼は男に、自分は女にそれぞれ磨きをかけていき、その果に心中出来るというのならそれはまさに文句のつけようもない、夢のような終わり方だとシャーリイは己が父の言葉に、さながら恋人との結婚生活を想像する乙女のようにうっとりとする。

しかし、それでもシャーリイは一つ気がかりがあった。それは……「うーでもでも、もしもシャーリイ以外の誰かにお兄さんがやられちゃうような事があつたら……」

シャーリイの最大の懸念はそれだった。何せ自分の愛しい人はこんなにも魅力的なのだから、絶対に自分から彼を奪おうとする間男や間女が雲霞の如く湧いて出てくる事だろう。もちろん彼の身持ちの固さをシャーリイは信じている、そんな誘惑などに彼は決して屈しないと思っている。

それでも、愛している故にどうしても一抹の不安が離れない、もしも自分以外の誰かにやられるなんて事になったらどうしよう。そんな事になったら自分は堪えられないとおそらく、シャーリイは生まれて初めて恐怖という感情を味わっていた。

例えば家族や自分が死の危機に瀕したとしてもそんな思いを今まで彼女は抱いたことはなかったというのに。

「お前の運命の相手なのだろう。ならば自分以外には決してやられないと、そうお前の男を信じてやれ。それが、イイ女というものだ」
「……!? うん、うんそうだねパパ！信じて待つことが出来るのがイイ女って奴だもんね！」

そうしてシャーリイは頬を赤く染めながら潤んだ瞳でリインの方を見つめて

「あのね、シャーリイはね。シャーリイ・オルランドって言うの！赤い星座の部隊長をやっている、パパは団長を勤めているシグムント・オルランド！」

お兄さんの……名前を聞かせてくれないかなあ……?」

もじもじと、告げるその言葉だけ聞けば、年相応の可憐な少女に見えたかもしれない。周囲に死体がいくつも転がっていて本人自身も血まみれになっっていて、凡そ少女には似つかしくない巨大な武器を携

えている点に目をつぶればだが。

「帝国軍特務准尉リイン・オズボーンだ」

ふざけるなど一喝してしかるべきだろう、されどリインの脳裏に
過ったのは気つけのためと言ってランディ・オルランドの仲間を眼の
前で屠ろうとした光景。この手の手合いを無視するのは自分の周囲
に危険が及ぶ可能性がある。

そう判断したリインはあえて目の前の人食い虎の相手をしてやる
ことにした。

「リイン……リインかあ。えへへ、素敵な名前だね！」

愛し気に自分の胸に刻みつけるかのようにシャーリイはリインの
名前を何度も口にする。

「あのねリイン……シャーリイ以外の人にやられちゃったら嫌だよ。
リインを殺すのはシャーリイだし、シャーリイを殺すのはリインなん
だからね。絶対に絶対にシャーリイ以外に殺されちゃったら嫌だよ
……」

信じている信じたい、だけどそれでもどうしても一抹の不安が拭い
きれない。だから安心させて欲しいと言わんばかりに告げられた言
葉にリインは

「誰が相手だろうと殺される気など俺は毛頭ない。祖国のためにも必
ずや勝利を手にする事こそが軍人の役目なれば。貴様も必ず俺が討
ち果たしてやる、シャーリイ・オルランド」

生きて護り続ける事こそが守護の剣なれば。道半ばで果てる気な
どリインには毛頭ない。当然目の前の相手に殺される気とて。

そして目の前の“怪物”を目覚めさせた責任からも逃れる気はさ
らさらなかった。

「うん……うん……うん……そうだよね！リインはシャーリイの愛しの英雄な
んだもん!!他の誰かにやられる事なんて有り得ないし、シャーリイみ
たいなのを許せるはずがないもんね!!」

叩きつけられた戦意と殺意、それを前にしてシャーリイはまるで告
白に対してOKを貰えたかのように本当に嬉しそうな表情を浮かべ
る。ああ、良かった。これならばどうやら愛しい彼を振り向かせるた

めに、彼の大切な者を奪う必要など無さそうだと。もしも歯牙にもかけられていなかったのならば意識して貰うために、そうせざるを得なかったがどうやら自分のアプローチはきちんと実っていたようだと安堵する。

「えへへ、それじゃあねリイン！今度会った時はもつともつと貴方に相応しい素敵な女になってみせるから、その時はまた思う存分に殺し合おうね!!」

そんな言葉を最後に告げて赤い星座達は引き上げていく。そして、それを追撃する余力はリインたちの側にもなかった。

潰走ではなく整然とした撤退である以上、無理な追撃は余計な被害を出す可能性の方が高い。そんな判断から各国の隊長も追撃命令を下すことはなく旗下の負傷者達の手当を優先。

ここに、オルキスタワーの死闘は幕を閉じるのであった。

・
・

赤い星座の所有する強襲揚陸艇《ベオウルフ》、その中でシャーリイ・オルランドはリインに刻み込まれた腹部の傷、それを愛おし気にさすりながら先程の夢のような一時を思い出していた。

思い起こすのは愛しい彼のあの殺意に満ちた素晴らしい眼差しとそれを律する鋼鉄の理性を宿した凛々しい顔。

ああ、本当にあんなにも素敵な人がこの世に居たなんてとシャーリイは未だ夢心地の中に居た。

(本当に本当に楽しかったなあ……)

これが恋という感情なのか、なるほどこれは素晴らしい、確かに夢中になるのもわかる。

これからずっと自分はリインの事を事ある毎に思い出してしまいうに違いない、今までなら十分に満足できた相手でもおそらく物足りなさを覚えてしまうだろう。

それを思うと自分は随分と贅沢になってしまったとも思うが、それでもシャーリイはリインに出会った事に対する後悔など毛頭なかった。

だって彼に会えない時の寂しさや物足りなさはそれだけ、彼との逢

瀬の充実さを証明するという事なのだから。

心配しなくても機会は必ずや巡ってくるだろう、何せこれから訪れるのは《激動の時代》なのだから。

そして彼はもつともつと強くなつていく事だろう。その鋼の意志で以て総てを呑み干し、より強大で魅力的になつて。

ならば、自分もその時に備えて女を磨かなければならないだろうとそんな決意と共に

「ねえパパ、パパはランディ兄をバルデル伯父さんの後釜に据えるつもりなんだよね」

「ああ、腑抜けてしまったがアレの実力はお前も良く知っているだろう。数年程度鍛え直せば、まあものになるだろうさ。——何せ、アレはどこまでいっても俺達と同じなのだから」

ランドルフ・オルランドは紛れもない《闘神》の血を受け継ぐものなのだから。

そしていずれ来る《激動の時代》、それを前にした時必然アレは力を求めざるを得なくなるだろう。

何故ならば護るにしても抗うにしても力が必要なのだからとそうシグムントは踏んでいた。

実際リインが覚醒を果たさなければ、シャーリーの狙い通りにランディは己が本性を解き放つつもりであった以上、このシグムントの読みは凡そ正しいと言えるだろう。

「私じゃ駄目かな」

不敵な笑みを浮かべながら告げられた娘の言葉、それを前にしてシグムントは一瞬目を丸くした後

「ククク、ハーハツハハハハハハハハハハ!!! そうだな、確かに今のお前ならばその資格は無いでもないが……何故そんな事を言いだしたか聞かせてもらおうか」

どこか意地の悪い顔を浮かべて問いかける父に娘の方は恍惚とした顔を浮かべて

「もう、わかつていくくせに。そんなの決まっているよパパ。愛しい彼に見合うだけの女に成りたい、そんな乙女心が理由だよ♪」

愛しの彼はどこまでも強くなっていくことだろう。それは単純な戦闘力だけではない、恐らくは兵を統べる将としても、やがては一軍を任される長になっていくだろう。ならばそんな彼に釣り合おうと思うならば自分もそれこそ《闘神》の名を受け継ぐ位の気概を持たなければならぬだろう。

再会した時に「なんだ、貴様はその程度だったのか」と彼に失望されるような事になれば自分は堪えられない。愛しの英雄が「こいつは自分が討ち果たさなければならぬ」とそう思うに足る存在にならなければ。

「ククク、確かにアレは中々に大したタマだった。己の中に住まう鬼、それに怯えるでもなく振り回されるでもなく見事に御していた。流石は鉄血の息子といったところだろう、腑抜けたランドルフの奴にも見習わせた位だ」

力は所詮力に過ぎないこと、それを理解しながらそれを律する鋼鉄の意志を宿し、甘さなど欠片も存在しないリインをシグムント・オルランドは高く評価していた。それこそ向こうにその気があるとするならば、娘の婿として迎え入れても良いとさえ思うほどに。

「良いだろう、ランドルフのやつを連れ戻すのが本命ではあるが、他ならぬ可愛い娘の頼みだからな。改めて俺の持てる総てを叩き込んでやろう」

ニヤリと笑みを浮かべながら告げられたその言葉は、すなわちこれよりシャーリイ・オルランドが地獄を見る事を意味していた。

しかし、そんな常人にとつての地獄を前にしてシャーリイは年相応の少女らしい輝く笑みを浮かべて

「パパ大好き!!」

我儘を聞いてくれた父親に抱きつきながら礼を述べる。まるで欲しかったプレゼントを買ってもらった子どものように。

（えへへ待っていてねリイン。私、必ず貴方に相応しいだけの女になつてみせるから♪

それで、お互いに成長して再会したその時は……思う存分に殺し、殺され合おうね♥）

まるで結婚の約束をした恋人との再会を夢見るかのように、英雄に恋した怪物は英雄との再びの逢瀬を夢見ながら己が爪と牙を研ぎ始めるのであった……

祭りの前

通商会議の最後、データー・クロイス市長の行ったクロスベル自治州の独立宣言は帝国と共和国どちらの方からも非現実的な妄言として切って捨てられていた。それはそうであろう、何せクロスベル側は結局テロリストの襲撃に対してほとんど為す術無く終わり、その防衛力の低さを露呈したのだから。

最初に大きな要求をする事でも譲歩したように見せて、当初想定していたラインの要求を通すのは交渉の基本中の基本。恐らくは独立宣言という形でクロスベルの民の独立心が強いことを帝国と共和国に示し、その上で帝国軍と共和国軍のクロスベルへの駐留は住民の反発が大きくなると主張する事で、現状を維持するのが目的だろうというのが諸外国の大まかな見解であった。

一歩間違うと暴走しだした民意を御しきれなくなる可能性もある危険な手だが、データー市長本人のクロスベル市民からの絶大なる支持と盟友たるクロスベル政界の重鎮たるマクダエル議長が見事連携し合えばそれは決して不可能とは言いつけない手でもあった。当然帝国と共和国はクロスベルへの圧力を強め、大陸では徐々に緊張が高まり始めていた。この緊張をうまく制御して着地させられるか否か、それはデーター・クロイスという男の政治家としての器量次第であろう。

最もこの辺りは政府の中枢にいるような者達が対応を考えることであつて、大半のエレボニア国民にとっては「なんだか知らんが属州が調子に乗っている」という程度の認識が過半を占めていた。戦車や飛空艇を所持しない上にテロリストの襲撃さえも自力で跳ね除ける事ができなかつたクロスベル州等、帝国にとっては脅威でも何でも無く、目下の注目的はアルフィン皇女殿下の誘拐未遂という暴挙を行っただけに留まらず、ガレリア要塞襲撃未遂という大胆極まる事件を引き起こした《帝国解放戦線》なるテロ組織への対策、そして激化している革新派と貴族派の対立と内戦への不安によるものが大きかつたからだ。

そしてそんな情勢下においてトールズ士官学院では半年に一度の理事会が開かれていた……

「……以上を持ちまして本年度、前期課程における運営報告を終わります」

「……なるほど、各種行事など運営面は問題無さそうですね。」

他の士官学校や高等学校に比べても学力・成績などに関してはお上回っている」

学院長からの報告を受けて理事の一人たるカール・レーグニッツはそう満足気に言葉を溢す。

トールズ士官学院は列記とした士官学院だが、近年軍事色が薄まって来ており、軍事に留まらず政治や経済など広範な知識を学ぶ名門学校となりつつある。それは社会の様々な分野へと人材を輩出し、視野の広い人物を育成することにも繋がっているのだが、あちらを立てればこちらが立たずというのが世の常というもの。ともするとどれもこれも中途半端に聞きかじっただけということにも繋がりがかねない、そしてそんな事になれば大帝縁の士官学院の沽券に関わるというものだ。何せ来年はいずれ至尊の座に就くこととなる、セドリック皇太子殿下も入学する事となっているのだから、もしも成績の下降が見られるようであれば理事としては何らかの対応を考えねばならないところだったが、どうやらこの分であれば三人の理事が学院側に対して叱責を行う必要はなさそうであった。

「2年生も負けてはいませんね。生徒会長を勤めている女子等成績以外の活動も目覚ましいですし、副会長の方に関して言えば圧巻の一言に尽きるでしょう。」

色々と忙しい身の上にも関わらず、まさか全教科満点を達成する等、流石は宰相閣下のご子息と言ったところでしょうか」

未だ学生の身にも関わらず革新派の若き英雄等と謳われている存在、かつてバリアハートで邂逅した少年の姿を思い出しながらルーファス・アルバレアはそう素直に称賛の言葉を述べる。

まだまだ自分の敵に等到底値しないとそうバリアハートで会った際には思っていた。しかしどうだろうか、この成長ぶりは。まさしく

男子三日会わざれば刮目して見よという言葉の生きた見本だろうと、ルーファスはどこか嬉し気な様子を見せていた。

それはまるで対等の敵手というものを求めていた指し手が好敵手の登場を喜ぶ姿にも、純粹に生徒の成長を喜ぶ理事の姿にも、あるいは弟の成長を喜ぶ兄のようにも思える様子であった。

「確かに、その二人に関しては理事長としても言うことなしとそう評す以外にないね。」

彼らを見ていると学院時代の私がとんでもない不良生徒だったように思えてしょうがないよ」

「ご安心ください殿下。その二人と比較せずとも殿下は我々から見て立派な不良生徒でございました故」

冗談めかした師弟の心温まるそのやり取りに三人から思わず笑いが漏れる。

会議の前半は主にそんな和やかに進んでいたのだが、リーグニッツ知事が夏季休暇明けの貴族生徒の成績が落ち込んでいる事を指摘し、オリヴァルト皇子が「今の時代にはそぐわない特権だろうか」と告げると空気は一片。

ルーファス理事は「伝統とは保たれる事に価値がある」と主張し、続けて「伝統が時代にそぐわぬのではなく、平民は貴族を仰ぎ、貴族は皇帝を戴くのがエレボニアの在るべき秩序である。もしも伝統がそぐわない等と感ずるのであれば、本来有り得るべき秩序そのものが歪められつつあるのではないか」と主張。革新派であるリーグニッツ知事との間にどこか剣呑な雰囲気漂いだす。

しかし、理事長であるオリヴァルト皇子が「本当にそうならば、私ももつと楽を出来るはずなんだが」とどこか冗談めかした様子で告げた事で再び空気は和やかなものとなりだす。基よりルーファス理事にしてもリーグニッツ知事にしても、両派の中で言えば穏健的として知られる人物故、当然ながら彼らの身内同士のように大人気ない喧嘩を始める等という事はなかった。

そして議題は新たに特科七組の運用、すなわち特別実習をどうするかという方向へと向い出す。すなわちこの情勢下で果たして予定通

りにカリキュラムを実施して良いのかと。ガレリア要塞を襲撃したテロリスト達の相手でⅦ組の面々は決して少なくない貢献を果たした。結果だけを見れば、なるほどそれは称賛されて然るべきものだろう。

だがそれはあくまで結果論に過ぎない、うまく行つたから良かったがそれこそ勇み足の結果逆にサラ教官やナイトハルト教官の足を引っ張る可能性とてあつたのだ。無茶無謀は若者の特権であり、主体的に行動できる人間を育成するのがツールズ士官学院の方針とは言え、それにしても些かⅦ組の面々は大人から見ると無茶が過ぎるようには見えたのだ。これまではそれでも良かったかもしれない、多少は危ない目に合うこともある意味では若い内にしておく勉強のひとつなのだから。

だがガレリア要塞での一件は多少の度合いを超えているように思えたのだ。とかく暴走しがちな若者を時に憎まれ役になつてでも、静止するのも大人の役目なればと告げられたイリーナ理事の言葉に他二人の理事も賛意を示していき、中止の判断が下されようとしたその時

『若者よ。世の礎たれ』

理事長たるオリヴァルト皇子が告げたその言葉に学園の理事達は揃つて理事長の方へと視線を向ける。

『ご存知の通り、学院に伝わるドライケルス帝の言葉さ。』

そして《Ⅶ組》の諸君は、ガレリア要塞の事件においてその言葉をまさに体現してくれた。

列車砲発射という惨劇を阻止して“世の礎”を見事に守つてくれたのだ」

もしも列車砲がクロスベルへと発射していたら言うまでもなく、エレボニア帝国の国際的な信用は確実に地に落ちていた事だろう。それこそエレボニアという国そのものが吹き飛びかねない事態となつていたはずだ。

「命令されてではない——自分たちで覚悟を決める形で」

オリビエにとつてはそれこそが何よりも誇らしかった。

彼らとて当然わかっていたはずだ、命の危機がある事くらい。

それでもなお自らの意志で彼らは戦う覚悟を決めてくれたのだ。

「無謀かもしれない、軽拳かもしれない。身の程知らずかもしれない。

だが、それでも私は学院の理事長として《Ⅶ組》の諸君を誇りに思う」

きつと、その意志こそを「勇気」と人は呼ぶのだろうか。

そんな目の前の皇子の言葉に三人の理事も心を動かされる。

オリビエの語った言葉は綺麗事であり、理想論だろう。

若者の勇気や献身が必ずや報われる等というのは物語の中だけだ。

理屈で見れば三人の方こそが正論と呼ぶべきものだろう。

されど、それでもその言葉には人を動かせる何かがあった。

政財界を渡り歩く海千山千の三人の心さえも動かす何かが。

「今後、エレボニアは、いやゼムリア大陸そのものが激動の時代を迎えるかもしれない。

だが、だからこそ《特別実習》の意義は大きい。激動の時代を共に乗り越える「強さ」と「手がかり」を手に入れるという意味において。

そうは思えないだろうか？」

かくしてⅦ組の特別実習の継続が満場一致にて決まるのであった

……

・ ・ ・

そんな理事会が行われる傍らでリインは学院祭を前に控え、副会長としての仕事を精力的に励んでいた。ようやく周囲も自分の頬にくつきりといった傷跡に慣れてきたようで、右頬の辺りに視線を感じるような事はなくなっていた。

——最も、軍人故それなりに耐性があるであろうクレアはまだしもフィオナと顔を合わせる時を考えると若干気が重くなるが、まあこればかりは自分の未熟さのツケと思うしか無いだろう。傷を負うこと無く敵を倒す事ができなかつた自分が悪いのだから。

学院祭に際しての打合せにて議題へと挙がったのは飲食関係の出し物における衛生面の管理だ。トールズ士官学院の学院祭には三人の理事を始め、多くのVIPが来賓として訪れる。当然、そこで食中毒でも起これば責任問題へと繋がりがかねない、それ故ハイソリティ教頭などからは「責任を取れないのならば、止めるべきだ」という声も挙がっていると生徒会のメンバーの一人が主張するが、それでもやはり飲食関係の屋台は祭りの盛り上がりとして外せないとなり

「そういう事ならばきちんとした衛生管理のマニュアルをベアトリクス先生に監修して頂いた上で作成して、飲食物を扱う者にはその遵守を徹底させれば良い。」

——事前に生徒会にて抜き打ち検査を実施する事を伝えて、もしも護れないようであれば即刻許可を取り消す旨を伝えてな」

「あくそうですね、副会長直々にその辺言ったら多分誰も脅しだとは思わないでしょうし、効果ありそうですね」

苦笑しながらも生徒会メンバーはラインの言葉に賛意を示す。

前々から居るだけで場の空気が引き締まるようなタイプではあったが、通商会議に出て頬に傷まで出来てそれは加速するばかりだ。

やると言ったら目の前の副会長はやるだろう、それこそそれだけ必死に泣き落としてこようが断固とした意志を持って。——最も、副会長がそんな峻厳な態度をとった後に会長がそれとなく助け舟を出して、副会長はそれに渋々折れるというのが何時ものお約束ではあるが。

「えつとじゃあ、衛生面に関しては生徒会の方で指導して行くという事で」

「異議なし」

「異議なし」

「それじゃあ次の議題は……」

・
・

生徒会での会議が終わりに、学院祭に備えた商店街での買い出しを終えて帰路へとついていた。

「ごめんねライン君、荷物持ちなんてしてもらっちゃって」

「別に気にすることはないさ、帰る場所は同じなんだし。一人で持つには大変な量だろう？」

「うくでもでも手伝ってもらった側である私のほうがリイン君よりも持っている荷物の量が少ないってのは流石にどうかと」

「適材適所ってやつさ。心配せずともこの程度の荷物、何てことはないよ」

それは別段気遣いでも見栄というわけでもない。真実今のリインにとつては抱えている荷物程度、大した重さではなかった。優しく微笑みかけてくれるその少年の姿にトワはホツとした心地になる。

端正な顔に傷跡がついてしまっても彼のその柔らかな見ていて心が暖かくなってくるような笑顔はなんら変わっていなかつたから。

徐々に近づきつつある青春の終わりを前に、それでも少女は“今”を目一杯に楽しんでいたのであった……

鉄血の子と過去からの試練

粗方の買い物を終え、ミュヒト氏が店主を勤めている交換屋を出た頃にはすっかり辺りは暗くなっていた。

そうして帰路へとついていた二人だったが……

「あら、貴方達もしかして噂の士官学院の名物カップルさん？ふふふ、こんな時間まで仲良く二人で買い物かしら」

凜と良く響いた声を掛けられて振り向くとそこにはプロポーシヨンも抜群の妙齡の美女がどこかいたずらっぽい笑みを浮かべていた。「えっとその声……ひよっとして《アーベントタイム》のミスティさんですか？」

「あら、聞いてくれているの？嬉しいわね、ありがとう。今後ともよろしくね。トールズ士官学院生徒会長のトワ・ハーシエルさん♪」

なんで自分の事を知っているのか？って顔ね。そりゃ知っているわよ、有名だもの貴方達。

小さいけど頑張り屋さんな会長さんと如何にも士官学院生って感じの真面目な副会長さんの名物カップルって事だね。

うんうん、やつぱりこういう買い物の時は彼氏君がちゃんと荷物を持ってあげないとね。そういうところでしたっけ男の子している子はお姉さんのにもポイント高いわよ♪」

どこかからかうような笑みを浮かべながら告げる目の前の顔見知りの女性にリインは苦笑する。ああ、またこの手の勘違いかそんな風に。

「何故かよく間違われるんですが、俺達は恋人同士というわけではないですよ。無論、心の底から尊敬している大切な友人ではありませんけど」

「あら、そうなの？こんな時間まで若い男女が一緒に連れ歩いているからてつきりそういう関係だと思ったんだけど」

「学院祭に近いからその買い出しと一緒にやっていたっただけですよ。どうにも若い男女が一緒にいると皆さんすぐにそっちの方に結

びつけたがりますけど」

「そうですよ……私とリイン君は今はまだ恋人同士ってわけじゃないです……」

おや？とそこでリインはトワの様子に違和感を覚える。この手の勘違いを喰らうのは初めてではない、そしてその度に二人でその勘違いを訂正するというのがお決まりのパターンだったわけだが、なぜだか今回の彼女はどこか元気がなかった。

（彼女も色々忙しい身だからな、やはり疲れが溜まっているのかもしれない）

そんな自分の事を棚に上げた解釈をリインがしていると、目前の女性はまだでちょうど良いおもちゃを見つけたかのように瞳を妖しく光らせて

「それじゃあ、フリーって事よね。どうかしら、此処は一つ年上のお姉さんと付き合ってみる気はない？色々と優しく教えてあげるわよ」

妖艶な笑みを浮かべながらそんな事を言い出す女性、美女と呼んで何ら差し支えのない女性からのその誘いにリインはまたかため息をついて

「同じ手は食いませんよ、クロチルダさん。また以前みたいに俺をからかっているんでしょう」

やれやれとでも言いた気に告げられたリインのその言葉に相手は目を丸くして

「……驚いたわね。きっちり変装していたつもりだったのにこんなにあっさり気づかれるだなんて」

「ああ、これに関してはある種の特殊技能みたいなものであって、別段貴方の変装が下手だったとかそういうのではないのでご安心ください」

ヴァンダール流の皆伝へと至った事でリインの気配感知能力は一層研ぎ澄まされた。人が発する気配というかオーラというか、そういうものには人それぞれの特色があるのだ。無論本来であれば、一度顔を合わせただけの人物等そうそう覚えていないが、クロチルダ氏はやはりスターだけあってかどこか特別な気配を纏っていて、それ故にこ

うして判別がついたというわけなのだ。

「あら残念、てつきり声で一発で判別出来る位に私の事を思ってくれていたのかと思つたのに」

「またそんな事を……」

「ふふふ、実は冗談めかしているようで、これでも結構本気なんだけど」

そこでチラリと困惑しながらもどこか焦つたような様子を見せているリインの傍らの少女の方にクロチルダは視線をやって、クスリと笑つて

「ま、あまりやりすぎて馬に蹴られて死にたくはないからこの辺にしておこうかしら。——最も本当に本気で欲しくなったら他人の者だろうと遠慮なく奪い取るのが私の流儀だけだ。」

それじゃあね、恋人同士じゃないカップル未満の士官学院の名物コンビさん」

何時までも現状に甘んじているならば横から搔つ攫れても知らないわよと少女に対する警告を残してヴィータ・クロチルダ、もといラジオの人気パーソナリティ、ミステイは立ち去つていくのであった。

「えっと、リイン君……その、ミステイさんの事をクロチルダさんって呼んでいたけど……」

「ああ、かの高名な《蒼の歌姫》ヴィータ・クロチルダ氏だよ」

「えええええええ、あ、あの帝国でも最高のオペラ歌手って絶賛されている!? 顔見知りみたいな感じだったけど、一体どうして!？」

「ちよつと、特別実習の時に縁があつてね。まあ一方的にからかわれているって感じさ」

目の前の少女の滅多にない血相を変えた様子にリインは戸惑いながらも返答する。

これは別段彼女がミーハーだからというわけではなく、マキアスとエリオットもそうだったが、帝都に住んでいる者だとトワ達の反応こそが一般的でリインの反応が余りに薄すぎると評すべきだろう。リインからしてみると入学時にエレボニアの生ける伝説たるヴァンダイク元帥閣下に会つて訓辞を頂けるといふ史上の榮譽を拝しながら

らもどこか反応が薄かった他の面々の態度こそが不可解だったのだが。

「そ、そうなんだ」

「ああ、そうなんだよ」

それで話は終わり二人は再び帰路へとつく。

ただ「横から搔つ攫れても知らないわよ」という歌姫の警句がまるで魔女の残した呪いのようにトワの心にどこか重く刻み込まれる。

（うう、クレアさんも今のクロチルダさんも、それにエマちゃんも皆スタイル良いのに私の方は……）

ツルペタストーンと言った感じの同年代の他の少女には訪れたそれが全く持つて訪れずに13歳位からほとんど成長が見えない我が身。栄養状態に問題があつたわけでもないし、不摂生をしたわけでもない。むしろ隣の少年には及ぶべくもないが、それでも自分とて列記とした士官学院生である以上身体だつて鍛えている方だ。

同年代の中ではかなり健康的な生活を送つたと言つていいだろう。それにも関わらず自分の身体は期待とは裏腹に全く以て成長してくれないなかつた。

（男の人って胸が大きいほうが好きだつて言うけど、ライン君もやっぱりそうなのかな……）

ジョルジュが聞けばそのへんは本人に聞かないとわからないんじゃないかなあと誤魔化すであろう。

クロウが聞けば「当たり前だ！男は皆おっぱいが好きだ!!」と力説するであろう。

ライン本人が聞けば一瞬頭を空白にした後に自分がパートナーに求めるのは外見よりも内面だ等と言うであろう。

アンゼリカが聞けば「気にする事はない！トワはそのままで良いんだ！」と力一杯に力説するであろう。

そんな年頃の少女らしい悩みを抱えて、トワ・ハーシエルは気になる少年の見え隠れする女性たちと己が身を比較して少し落ち込むのであつた……

・
・
・

「実は先輩たちにお問い合わせがあるんです」

寮へと戻って来た二人に対して意を決した様子で委員長たるエマは夕食の場でそんな事を改めて告げてきていた。

「他ならぬ命の恩人達の頼みとあれば大抵の事は喜んで聞かせて貰うぞ。察するに学院祭の出し物決めに關する事かな？」

《帝国解放戦線》によるガレリア要塞の列車砲奪取未遂事件についてはリインも聞き及んでいた。一步間違えばそれこそ取り返しのない事態となっていたことも。いくら銃弾程度では死なないにしても、流石に列車砲の直撃などを食らっては生き伸びる自信などリインには無い。そういう意味で言えば、目の前の後輩たちは紛れもない命の恩人と言えるだろう。リインはその手の義理というものを重んじる人間なので、出来る限りそれに報いたいと思っていた。――当然、それは目の前の後輩たちならばどこかの悪友と違って真つ当なお願いをしてくるだろうという信頼あつてである。

「ピンポンパンポーン大正解」

「元々私達はよそのクラスに比べて人数も少ないしなんにしようかなって悩んでいたんです」

「ああ、そうだな確かにⅦ組はその辺がネックだよな」

人数が少ないという事はそれだけ人手が少ないという事である。その事から凝ったアトラクションを出すというのを断念したわけだが、劇は劇でちょうどⅠ組がオペレッタを実施する予定があるという事で被りを捨てるために除外。どうしたものかと頭を悩ませていたのが

「そこで僕が言ったんだー去年リイン達がやっていたアレやりたいて」

ピシリとその義妹の無邪気そのものの言葉を聞いた瞬間に食後のコーヒーを口に運ぼうとしていたリインの手がカップを宙に浮かべたままに止まる。

「その、確かに言われてみると人数的にも先輩たちが昨年度やっていたアレはピツタリだなと思って……」

どこか気まずそうな様子でマキアス・レーグニッツは告げる。彼も

昨年度父に連れられて学院祭へと来ていたからリイン達のステージを知っているメンバーの一人であった。

「アレなら役割分担して全員活躍できるし、何よりも皆で音楽やれるなんて僕にとっては願ってもないし！ミリアムが提案した時はどうしてそれを思い出せなかったのかってなったよー！」

久しぶりに大好きな音楽に打ち込めるとあってエリオットはそれはもう嬉しそうな笑みをリインへと向けている。

「と、そんなわけで先輩方が昨年やったステージを私達の出し物にしてはどうかという流れになったんですが……」

「あいにく、そのステージとやらがどういうものかいまいち我らにはピンと来ないのです」

「オーケストラによるクラシック演奏やオペラのようなものならともかく、ステージなどというのは俺も生憎見たことがなくてな」

「そんなわけで先輩たちの昨年やった見本を見せてもらえないかって話になって」

「そういう事ならきつと電子データで記録映像が残っているはずだとクロウ先輩が言って、是非ともそれを見せて貰いたいとそういう流れになったわけだ」

ニヤニヤした笑みでこちらを見つめている悪友の姿がリインにとっては腹立たしくてしょうがない。

正直、出来る事ならばあんな衣装をした自分の姿を他人になど余り見せたくはない。

しかし、後輩たちのお願いというのは至極妥当なものだし、どのみち2年生ならば知らぬ者はいない上に、エリオットとマキアス、ミリアムは既に見たことがあるのだ。ならば、いまさらそこに新たに6人加わったところで如何程のものだろうか。――何よりも己の過去や闇と向き合う事こそ英雄なれば此処で退くわけには行かないだろう。

そんなまるで決死の戦いへ挑むかのような悲壮な覚悟を持ってリインはトワの了承も得てⅦ組の依頼を快諾するのであった。

・・・

「……」

翌日視聴覚室にて映像を見た一同の中にどこか気まずい空気が舞い降りる。

それは言うなれば押し入れを整理していたら思春期の妄想が詰まったノートを見つけてしまったかのような気まずさ。演奏自体は素晴らしいものだった、それは確かだ。

だが一同としてはどうしても良く見知った人物のその余りに奇抜な衣装姿の方にどうしても目が行ってしまうのであった。

リンの方は言うところ、一周通り越して逆にその心は穏やかに澄み渡っていた。それはそれとしてニヤケ顔でいる元凶の横っ面を今すぐに殴り飛ばしたい衝動が絶えず彼の心を襲っているが。

「……意外な趣味」

「……その、服の趣味は人それぞれですから」

後輩たちがなんとかフォローしようという優しさが逆に心に染み渡る。しかし、これは断じて自分の趣味ではない。そのニヤケ顔を浮かべている男の犯行であるとそうリンが主張しようとしたところ

「いやー俺は趣味悪いから必死に止めたんだけどなあ。そいつがどうしてもって言うから仕方がな」

告げようとした言葉を最後までしゃべる事無く歴史の捏造という許しがたい暴挙を行おうとしたクロウ・アームブラストに対してリン・オズボーンは無慈悲なる粛清を敢行した。

拳を顔に叩き込まれてキリモミしながら吹き飛んでいくその元凶の姿を見たことでリンの心は大変に安らいでいた。

「これは先輩としての、いや被害者としての忠告だが、衣装をその男に一任することだけは辞めておけ」

でないとなんの目にも遭うからなと、どこか哀愁を漂わせながら告げるその常ならぬリンの言葉にⅦ組一同は静かに頷くのであった……

終わりの足音

「これで……後は条件を整うのを待つだけというわけか」

ミリアムとエマ、二人の少女を連れて旧校舎を後にしたリインはそう呟く。

そこに第一の試しを突破した時に協力を依頼したレクターとクレアの姿はない。

レクターの方はクロスベル方面への対応で、クレアは貴族派への対応でどちらも多忙を極めており、こちらに関わっている暇がなくなっってしまったためである。

そして、リインが皆伝へと到達した事で無理に二人の協力を求めずとも三人でも十分に突破できるようになったためでもある。

クレアは確実を期して自分達がまた動けるようになってから攻略を行うべきだと主張したが、またしてもセリーヌの「そんな悠長な事をしている時間はない」という無慈悲な言葉の前に沈黙する事となった。

「ええ、準備が整い次第《第二の試し》が発動します。……そしてそれを取り越えた時、先輩は正式に《巨イナル力》の欠片の一端、《騎神》の担い手たる《起動者》となります」

そしてエマは自分自身も改めて決意するように真剣な眼差しをリインへと向けて

「改めて、本当によろしいんですね？これを手にしてしまえば、先輩は古からの巨大な運命に巻き込まれる事となります」

騎神が災厄を退けて人々を守る盾となるか、それとも全てを破壊して支配する支配者となるか、それは先輩にかかっています。そんな責任を背負う事となる覚悟が、貴方にはありますか？」

「ああ、この帝国でかつての《獅子戦役》のような事態やあの《魔竜》が蘇るような事態が起ころうとしているというのなら尚更だ。

本当に巨大な運命などというものが存在するのなら、それを切り開き乗り越えるためには「力」が必要だ」

想いを貫くためには力が必要なのだ。父がクロスベルで述べたよ

うに力の伴わぬ思いは巨大な存在の前に呑み込まれるしか無い。理想を実現させたいというのならば、どうしても力が必要なのだ。力のない理想や正義など、ただの綺麗事にしかならないのだから。

「故に俺は手に入れる、《巨いなる騎士》の力を。運命に巻き込まれたからではない、己が意志で以て道を切り開くためにだ」

運命などというものに自分の人生を決められてたまるものか。

自分がこの道を進むと決めたのは自分の意志によつてだ。決して誰かや人智の及ばぬ巨大な存在に操られた結果等ではない。そこで発生する恨みも憎悪も怒りも自分が背負わなければならぬものだ。断じて自分はやりたくなかったが巻き込まれてそうせざるを得なかった、などと被害者面をする気など無い。

自分は他ならぬ自分の意志で、自らが望んでこの道を選ぶのだとリインは鋼の意志を込めて改めて宣誓する。

そしてそれはすなわち友人たちと交わしたある約束を違える事を意味していた……先延ばしにし続けていたが、いい加減覚悟を決めて告げねばならないだろう。

そんな決意と共に二人と別れたリインは技術棟の方へと歩を進めた……

・
・
・

技術棟に集った5人組、彼らは学内でも特に仲がいいと評判のグループだ。

出自も立場も考えも将来の進路も皆バラバラだが、それでも彼らは妙に馬が合った。

サラ・バレストライン教官の指導の下でARCSのテストへと選ばれた事で5人揃って多くの苦難を乗り越えた。掛け替えのないくつもの思い出がある、確かな絆が存在する。

時に喧嘩する時はあれどもそれでも彼らが集まる時は大体笑顔に満ちた和やかで温かな空気がその場を満たしていた。

しかし

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

常ならぬ重い空気が、その場を満たしていた。

そしてその空気を齎した張本人たるリインは負い目を抱えながらも、自分は断固として退く気はないという強い意志を見せていた。

罵倒は甘んじて受け入れる、されど意見を翻す気はない、と。

泣きながら出ていってしまったトワに対して罪悪感を抱きながらも。

きつかけは改まった表情でリインが告げたある言葉であった。

「自分は卒業と同時に正式に任官する。だから悪いが約束していた旅行にお前たちと一緒にには行けない」と。

当然四人は説得を試みた。それは別段約束していた卒業旅行を反故にする事に対しての怒りではない。

純粹に友人であるリインの身を案じての事だ。

今、エレボニアは加速度的に緊張が高まっている。それは革新派と貴族派の対立もそうだが、新たにクロスベルの独立問題等というもので持ち上がってきたのだ。

無論クロスベルそれ自体はエレボニアにとって脅威でも何でも無い、問題なのは西ゼムリア大陸の火薬庫たるクロスベルが独立を表明したというその事実である。

基よりクロスベルは《クロスベル戦役》により多数の人命が失われた帝国と共和国の双方の妥協の結果両国を宗主国とする形で自治州となった特殊な地域である。

当然帝国にしても共和国にしても独立等認めるはずもない、下手をすれば調子に乗った属州へと鉄槌を下すべきだと両国の過激な国粋主義者等主張するかもしれない。

共和国と帝国の全面衝突によるクロスベル戦役の再来、それさえも下手をすればあり得る情勢なのだ。

そしてエレボニアの抱えている火種はそれだけではない。

既に《帝国解放戦線》の裏で貴族派が糸を引いているというのは半ば公然の秘密であり、革新派と貴族派の対立は激化の一途を辿っている。オリヴァルト皇子等は各地の《皇道派》の面々と接触しまとめ上

げながら、革新派ならばレーグニッツ知事、貴族派ならばハイアームズ侯爵やルーファス卿といった両派に置いて、も穏健的で知られる面々となんとかコンタクトをとって対話による決着を図ろうと試みているが、肝心の両派のリーダーたる鉄血宰相とカイエン公爵は互いに対決姿勢を崩そうとはせず、に現状彼の努力は焼け石に水といったところである。

この情勢下で軍人になって、安全な後方支援の任務につくなど本人とそして彼の父親の性格的にも凡そありえぬ事だろう。十中八九共和国、あるいは貴族派との戦いにおいてリイン・オズボーンはその先陣をきる事となるはずだ。

軍人の役目とはそういうものなのだろう、そして彼がそんな軍人足らんとしていた事を友人である彼らは良く知っている。それでも、やはり大切な友人に危険な事をして欲しくないというのがやはり人情なのだ。

だからこそ彼らは友人の説得を試みた、そこまで焦らずとも良いじゃないかと。どこか遠くへ行つてしまえば友人を引き止めるべく。

しかし、そんな彼らの説得に応じたのは日頃友人たちに向ける柔和な笑みではなく、軍人としての鋼の宣誓だった。

「お前たちが俺を心配してくれる気持ちは嬉しく思う。そして約束を破る形となって申し訳ないともな。

だけど、それでもこの情勢下だからこそ俺は青春の延長をする気にはなれない。

祖国に動乱が迫っているからこそ、誰かがその命を掛けねばならぬというのなら俺はそれを担う者となる」

それでもトワは必死に言い募る。しかし、これまでであれば折れていた少女の頼みを聞いてもリインは約束を破る事に対する謝罪は述べても、己が言葉を撤回する様子は一切見せない。

そして……

「リイン君のバカー……!!!」

泣きながら去っていく大切な少女の姿に心を痛めながら、それでも

泣かせた張本人たる自分が追うわけにも行かず苦い思いを抱えながらもリインはその場を動かない。

そんな事情を察したのだろう、アンゼリカはため息をついた後にリインを一瞥だけしてすぐに自らの親友の後を追いつ出す。リインとしてはこれの発案者である彼女に一発位殴られる事を覚悟していたのだが、予想に反して彼女は殴る事も、責めるような事もしなかった。そして後に残されたのは重苦しい沈黙に包まれた場と三人の男であつた。

「……お前たちは何も言わないんだな。罵倒の一つや二つ位、されるのは覚悟していたんだが」

「して欲しいのか？して欲しいんだったらいくらでもしてやるぜ。この唐変木、朴念仁、女泣かせの堅物野郎ってな」

冗談めかした口調でそんな事を告げた後にクロウは真面目な表情を浮かべて

「ま、別にてめえが間違っているわけじゃねえからな。

約束つたつて元々はほんの些細な口約束だったわけだし、あの頃とは状況も色々と変わってきている。

俺達との約束以上にやりたい事が出来たんだろ？それならしようがねえさ。

人には優先順位つてもものがあるからな。ダチだからつて他の何を差し置いても最優先しなきゃならねえつてわけじゃねえだろ。

お前にとっては軍人になって親父のために働く事が俺達との約束より重かつた、そんだけの話だろ」

物事には優先順位があるのだから、そしてその最上位に常に友情が来るとは限らない以上リインの行為は仕方のない事だとクロウはどこか達観して告げる

まるで元々いずれこうした終わりが訪れる事を予期していたかのように。

「そうだね……アンもそれがわかってるから特にリインを責めなかつたんだと思うよ。

ただの友達でしかない自分には青春を続けるというモラトリアム

の延長よりも、夢を優先したリインを止める資格はない、そう思ったんだらうね」

アンゼリカ・ログナーは元より自分のやっている事がモラトリアムでしかないという自覚があった。

だからだろうか、無いものねだりというわけではないがリインがアンゼリカの奔放さをどこか眩しく思っていたように彼女もまたリインの夢や目標のために一途に走るその姿を眩しく思っていたのだ。

そんな自分には出来ない生き方が出来る相手に対する敬意を互いに抱いていたからこそ、真逆であるリインとアンゼリカ、二人の友情は今日まで長続きしたと言って良い。

「だから、僕からも特に何か言う気はないよ。

別にリインが僕たちの事をどうでもいいと思っているわけじゃないって事はわかってるから」

時に人には友情よりも優先させなければならぬものがあるという事は自分もよく知っているとでも言いたげにジョルジュもまたクロウ同様にリインを責める事はしなかった。

「ただよ、これだけは聞いておきたいんだが……お前自身は本当にそれで良いのか？」

常のふざけた態度とは打って変わってクロウはどこまでも真摯な瞳でリインを見据えながら続けていく

「さつきも言ったように理屈の上じゃ別にお前は何も間違っちゃいないええぜ。

むしろまあ、どつちかと言えばトワの奴のほうがワガママ言ってるのに近いだろうさ。

友人だろうと、あるいは家族だろうと本人がそう決めたのなら止める権利なんてないんだからよ。

ましてやお前は国のため、民のためにその命を賭けるって言うてんだ、それこそ外野からすると「おお、天晴。彼こそ帝国男子の鏡である」ってなもんだらうさ。

当然だな、そいつらにとつちやお前はせいぜい新聞でちよつと見た程度の存在でしか無いんだ。

そんな奴が奇特にも自分たちのために身を削ってくれて言うんだ、そりや有り難くついていくらでも礼程度言うだろうさ」

何故ならば彼らにとつてはリイン・オズボーンはあくまで他人でしか無いから。

極論生きようが死のうがどうでもいいのだから。些か露悪的な側面はあるが、クロウの告げる事は間違っているわけではない。

リインを若き英雄だと讃える多くの者達は、彼が死んだときこそ多少その死を悼むかもしれない。

だが、それで終わりだ。まだ若かったのに気の毒にねと済ませて彼らは彼らの日常へと戻っていくだろう。

そしてそれは別に責められる事ではない、何せ彼らにとつてリインは他人でしか無いのだから。

しかし、トワ・ハーシエルを始めとする彼個人を大切に思う人々は違うだろう。

四六時中考えるわけではない、だがそれでもふとした時に自分の大切な人はもうこの世にいないのだという喪失感を味わいながらその後の人生を歩んでいく事となる。大切な人を失うとはそういう事なのだから。

「なあ、それでお前は本当に良いのかよ？」

大切な女泣かせてよ、自分の身をボロボロに擦り減らして、見も知らぬ他人や国のために尽くして本当に幸せか？」

告げられた親友の言葉に、わずかばかりリインは目を閉じて思索した後に

「……ああ、無論だとも。俺は俺自身の意志と望みでその道を選んだ。

それに何も俺は見も知らぬ他人のためだけにこの命を賭けようと思っているわけじゃない。

祖国を護りたいと思うのはそこに大切な人達が住んでいればこそ。国を護りたいという意志は、俺の愛する大切な人達を護りたいという意志だ」

鋼鉄の意志を宿して再び宣誓をする。誰に強制されたわけでもな

い、自分は自分の意志でこの道を往くのだと。

「……そうかよ。そこまで言うんだったら俺からはなんにも言う気はねえ。まあ、精々後悔だけはしないようにな」

それだけ告げるとクロウはその場を立ち去っていく。

ボタンと扉の閉まる音がして、しばらくの間静寂がその場を包み込む。

「……コーヒー、飲むかい？」

「ああ、頂こう」

ジョルジュより差し出された熱いコーヒーをリインは一息に飲み干す。

強化されたリインの身体は熱湯を突如として注ぎ込まれても火傷する事もなく、それを吸収していく。

しかし、飲み干したコーヒーの味は何時になく苦かった。

少女のワガママ

「……行ってしまう、このままでは彼はどこか遠くへ。」

トワ・ハーシエルの心をそんな恐怖が満ちた。

本当は薄々勘づいていたのだ、バリアハートから帰ってから少しづつ、されど確実に彼が変わりつつあることに。帝都での一件以降それは一気に加速した、アルフィン皇女救出という功績を成し遂げた彼は一躍革新派の若き英雄として時の人となった。

でも自分はそんな事よりも何よりも彼が生死の境を彷徨う重傷を負ったという事を聞いて心臓が止まりそうな思いを味わった。どこかで自分は彼ならば大丈夫だと、そんな風に無邪気に信じていた。

だって彼はとても強い人だったから。入学して出会ってから、どんな時にも諦めずに真つ直ぐにひたむきで努力家で、国を護るために自分は強くならなければいけないだとそう誇らしげに語る姿は何よりも頼もしく見えた。

だからだろう、自分は無意識の内にそんな強い彼がもしかしたら死ぬかもしれないと考えたことがなかった。自分が無事だったのだから、自分よりもずっとずっと強いリイン君なら当然無事に決まっている。そんな風に考えていたのだ。

「……そんな考えが幻想に過ぎなかったのだと私はすぐに知ることとなった。」

意識不明の重体となって帝都の軍病院へと搬送されたと連絡を受けて、到着したらそこには蒼白な顔をしたⅦ組の皆やフィオナさんやクレアさんの姿があつて、幸いな事に彼は無事意識を取り戻したけどそれでも、あの恐怖を私は決して忘れることは出来ない。

「……もう危ないことををして欲しくない、軍人志望の彼に何を言っているのかと思われるだろうけど、それでおそれがその時抱いた私の本音だった。でも、彼はそんな私の願いとは裏腹に、止まる時間さえも惜しいと言わんばかりに『英雄』としての道を走り出した。」

「……信じたい。通商会議の時に約束してくれたように必ず生きて帰ってきてくれるのだと。」

「わかってる。友達でしかない自分に彼を止める権利などないのだと。」

「いや、例えば家族や恋人だったとしても本人が決めた事を止める事など誰にも出来はしないのだ。」

「自分の生き方を決めるのは、本人自身なのだから。思いを伝える事は出来る、翻意を促す事もできる、だけどそれでも本人が決めてしまえばそれを止める事は出来ないのだ。」

「ましてやリイン君のやろうとしていることは決して間違っているわけじゃない、祖国のために軍人になるのだという彼の意志は称賛されて然るべきものだろう。」

「だから、こんな思いは自分のワガママなのだとわかっている。わかっている、いるのだ。」

（だけど……だけど）

それでも、自分は彼に危ない事等して欲しくないのだ。

「だって、自分が好きになったのは『英雄』なんかじゃない、優しくて真面目で、だけど女の子の思いには鈍感な、そんなただの少年リン・オズボーンなのだから。」

「軍人なんて危ない仕事に就くのは辞めて、5人皆で一緒に旅行に行こう」そんなワガママを告げられたらどれだけ良いだろうか。

でもそんな事を言ったところで彼を困らせるだけだろう。だって彼はずっとそれを目標にして頑張り続けて来たのだから。

トワ・ハーシエルは悩み続ける。

「ある意味では彼女が優秀な才女だったことが災いしたと言っているのかもしれない。」

「彼女は理知的で思慮深く、他者への優しさに溢れた才女だ。だからこそどうしても理屈の上で正しい事には逆らえないし、自分のワガママをぶつけるという行為に躊躇いを覚える。」

「私のために危ないことをしないで」と、そんな言葉を男に言う事が出来ないのだ。

「理性と感情、その間で雁字搦めとなってトワは自縄自縛へと陥り、ただただ涙を流す。」

――大切な男の子を失うかもしれないという恐怖から
――それを止めることが出来ない自分が情けなくて。

――掛け替えのない青春時代、その終わりの近づき突きつけられて。

自然、トワの頬より涙が零れ落ちていた。泣いてどうにかなるわけではないのだからと必死にこすって涙を止めようとするも溢れ出した思いを止まらない。早く涙を拭って戻らなければいけない、だってこんなの自分のワガママでしかないのだから。それなのにバカ等と彼の事を罵倒してしまった事を謝らなければいけない、「離れ離れになることが悲しくて八つ当たりしちゃってごめんね」と。それで、今まで通りに戻れるのだから、とそんな風に考えているにも関わらず身体は心を裏切り、全く涙は止まらなかった。

「どうしたら良いのかな……私……」

ポツリとこぼれたそんな弱音。どうするべきかそんな事は決まっているというのに。

それを実行に移せない我が身の弱さが恨めしい。

「とりあえず、思う存分に泣いたら良いんじゃないかな。私の胸で良ければ、貸すからさ」

凜と響いた声、その声に振り向くとそこには困ったように笑うトワ・ハーシエルにとつての最高の友人が居て

「アンちゃん……」

「やあ、トワ。不甲斐ないあの唐変木の代わりになるかは知らないが、来たよ。愚痴にならいくらでも付き合うから、思う存分に言いたいことを吐き出すと良い」

こんなにも健気な少女を泣かせながら夢だの理想だのを追いかけて突っ走ってしまう朴念仁に対する揶揄を口にしながらそつと微笑むのであった。

そしてトワは親友の胸へと飛び込んで語りだす。

ラインがどこか遠くへ行ってしまふのではないかという恐怖を抱いている事を。

だけど、ラインのやろうとしていることは正しいからこそ、自分の

これはワガママでしかなく、言えばリインを困らせるだけだとわかっているという事を。

総て、総て親友へとその胸の内を明かすのだった。

そして、そんなトワの言葉を穏やかに微笑みながら聞いていたアンゼリカは粗方聞き終えると……

「良いじゃないか、そのワガママをぶつけてやれば。あの唐変木を思う存分に困らせてやれば良いのさ」

どこか不敵な笑みを浮かべながら思いもよらなかつた事を言い出す親友の言葉にトワは虚を突かれたように目を丸くして

「だ、駄目だよそんなの。だってリイン君の言っている事は正しいんだもん」

そう、リイン・オズボーンの語る事は正しい。

今、エレボニアは大きく揺れている。そんな中で祖国のためにその命を賭けんとしているリインの思いも行動も決して否定されるような者ではないだろう。己が所属する共同体のために自らの意志で貢献しようとする、その献身を否定するような者など余程過激な個人主義者や無政府主義者位だ。そして、トワ・ハーシエルはその言うまでもなく、そのどちらでもない。

国家はあらゆる人にとって永劫の価値を持つものなどとは思っていないが、それでも国家という秩序があつてこそ自分の家族のような普通の人達が穏やかに暮らせるのだという事を知っている。そして、そんな生活は他ならないリイン・オズボーンのように国家に貢献しようとする者達が居てこそ成り立っているのだという事も。

故にこそ、トワは自分のワガママでそんなリインを困らせてはいけないと悩んでいるのだった。しかし、そんな親を困らせた事がほとんどない良い子に対して親子喧嘩が絶えない不良娘は

「相手が正しかつたらこっちはワガママを言う事も許されないのかい？」

苦笑しながら告げる、筋金入りの優等生を悪の道へと引きずり込むべく。

「良いじゃないか、思う存分に困らせてやれば。国だの何だのを守る

前に私達との約束を守れと、そう言ってやれば。

君みたいな可愛い女の子のワガママに振り回されるといふのなら男にとっては本望というものだろうさ」

呆氣に取られるトワをよそにアンゼリカはウイंकをして告げていく

「私などずっとそうして来たよ。ログナー侯爵家の令嬢として相応しい振る舞いをしろなどという親父殿の説教を聞き流しながらね」

「あ……」

四大名門の侯爵家の息女として相応しい振る舞いをしろというアンゼリカの父の言葉と、それを無視して奔放に振る舞うアンゼリカ。どちらが正しいかと聞かれれば、それはアンゼリカの父の方だろう。貴族とは生まれつきその血に責任を負う者なれば、その血を受け継ぐ者の振る舞いはその者一人の問題では済まないのだから。

「トワからみて私はどうだい、やっぱり貴族としての義務を果たそうとしていないでしょうか、そんな風に見えるのかな？」
「そ、そんな事無いよ！私はアンちゃんの良いところをいっぱい、いっぱい知っているもん!!」

では、アンゼリカ・ログナーは道理を弁えない、どうしようもない悪徳を為す者なのか？否、そんな事はない。

確かにアンゼリカは父親にとって頭の痛い不良娘であろう、だがそれでも確かな気高さを持つ人物である。

それは世間一般で言う立派な貴族の淑女としての在り方からは外れているかもしれない、されどそれでも彼女は紛れもない誇りある真の貴族でもあるのだ。

「ありがとう、トワ。だから、そういうことさ。」

ワガママを言ったからと言って私もジョルジュもクロウも、そしてリンもトワの事を見損なったりなどしないさ」

何故ならば皆、彼女の持つ素晴らしい美点をいくつも知っているのだから。

自分たちが培った絆は、そんなワガママのぶつけ合い程度で揺らぐほどに柔なものではないのだから。

「他人を思いやれる優しさは君の美德だけど、だからといって無理に自分の思いを押し殺す必要はないんだよ。

ぶつけてやれば良いのさ、君の、トワ・ハーシエルの思いを。

極論すれば、この世に絶対の正義なんて存在しない以上、リインのやろうとしている事だつて彼のワガママだつて言えるだろうしね」

どこか冗談めかしながら告げられたアンゼリカの言葉、それがトワの心を解していく。

正しくなければいけないのだと思っていた。リインを止めるには彼が納得できるだけの正しい理屈を用意しなければならぬのだと、そんな風に。

でも、アンゼリカは言うのだ。思いというのはそんな理屈では図りきれないものなのだ。

そしてそんな思いをぶつける事は正しくなくとも、決して間違いではないのだと。

その言葉は思い悩んでいたトワにとっては文字通り、一筋の光明で……

「アンちゃん……ありがとう、アンちゃんが私の友達に居てくれて私、本当に良かったよ」

「ふふ、どういたしまして。私の方こそ、トワに出会えて本当に良かったよ」

伝えよう、このワガママを。

自分は国のためだろうと貴方に危ない目になどあつて欲しくないのだと、そう素直な想いを伝えよう。

きつと、彼はそれでも止まってはくれないだろう。でもそれでも良いのだ。

あの時のように、必ず生きて帰つてくると、そう約束をする事が出来れば。彼はきつとそれを守ってくれるのだから。

もちろん、不安は決して尽きない。それでも、きつと伝えた思いと言葉は無駄にはならないはずだからと。

トワ・ハーシエルは己がワガママを愛しい少年へとぶつける事を決意するのであつた……

想い、伝えて

自由行動日の夜、リインは何かを振り切るように勉強へと動しんでいた。

取り組む内容は既に士官学院生としての範囲を超えたもの。基よ
り溢れんばかりの向上心を抱いていた男が帝都での一件で、その向上
心をフルに発揮できる能力と時間を手に入れた事で、その成長、否進
化は爆発的に加速した。

まるで未来を予知するか如き直感は感覚的に正答を理解させ、一を
聞いて十を知るを体現するが如き統合的共感覚はその正答への道筋
を理論立てて構築させる。無論良いことばかりではない、秀でた能力
というのは往々にして何がしかの欠落を生むのが世の常というもの、
この突如目覚めたある種の異能も同様であった。知ることとは決して
幸福な事ばかりではない故、目覚めた二つの異能はリインに対して
知りたくもないような事実も否応無しに突きつけてくる。

もしも目覚めたのが子供の頃であればおそらくリインはこの力へ
と振り回されて、自分を見失っていたかもしれない。されどレクター
とクレアといった幼少期より自分を導いてくれた義兄と義姉、そして
ヴァーニールの教えというしっかりとした基礎の元、トールズ士官学院
での日々という経験が上乘せされたリインにとっては目覚めた二つ
の異能は有用な武器足り得た。目覚めた二つの異能は成長の効率を
飛躍的に向上させ、頑強になった肉体は研鑽を積むための時間を作る
無茶にも耐え、鋼鉄の如き精神はそれらを十全に使いこなす。

そんな条件が重なったことでリインはもはや芸術以外の科目の力
リキュラムの範囲の内容は総て終えて、何時卒業しても何ら問題ない
状態にあった。無論、サボりとか怠けるといふ言葉などリインの辞書
には存在しないため、教官の了承を得てより高度な内容へと踏み込ん
で勉強しているのだが。

そんな風にいつもどおりに、否、何時にもまして鬼気迫る様子で勉
学に励んでいたリインだったのだが、コンコンと控え目なノックが聞

こえてきて

「リイン君、こんな夜遅くにごめんね。どうしても話したい事があるんだけど、少しだけ時間良いかな？」

おずおずとした様子で告げられた、昼間自分が泣かせてしまった少女のその言葉にリインは面食らいながらも少しだけ歩みを止めて、彼女を己が部屋に招き入れるのであった……

訪ねてきたトワはもう夜中だというのにやけにめかしこんでいるように思えた。派手派手しきはないが、うつすらと化粧もしているようだ。昼間の一件もあつてどこか気まずさもあり、あまりまじまじと見るのも失礼かと思ひ、リインがどうしたものかと思つているとトワは意を決したように真剣なされど不安さを抱いたような様子で

「リイン君あのね、今日こうして訪れたのはリイン君に伝えたい事があつたからなの」

「伝えたいこと？」

やはり昼間の一件だろうか。彼女が自分の身を案じてくれているのはよく解つている、だがそれでも自分はもう止まるつもりはない。平和だけを受け継げる時代は終わろうとしている。訪れようとしている『激動の時代』それを前にして、祖国が焼かれる等という事態はなんとしても避けねばならない。例えそれが他国に負債を押し付けるといふ形であつても、自らの愛する祖国が、正義が、倫理が灼熱に溶け落ちる地獄の如き光景などリインは看過できない。無論自分だけの力ではたかがしれているだろう、それでもだからといってこれ程に情勢が逼迫していながらモラトリアムを延長する気にはなれなかつた。

だからこそリインは常とは違い、大切な少女を前にしても鋼鉄の意志を纏つて相對する。——そうしなければ、彼女の言葉に自分はずいつい流されてしまうとどこかトワ・ハーシエル相手だと弱い自分を自覚しているが故に。

「うん。私はね、リイン君の事が好き」

「—————」

ついに言つてしまった。トワ・ハーシエルは自分の胸が馬鹿みたい

にドキドキと高鳴っている事を実感していた。今ならばまだ戻れるだろう、慌てた様子で「と、友達として！って意味だよ」等と言って誤魔化せば良いのだ。それで、昼間の一件を謝って、物分りの良い友人を演じる、それできつと元通りだ。

でも、それは嫌だ。自分は、彼にとって護りたい人達なんてひとまとめにくくられる存在ではなくて、彼にとっての特別になりたいのだ。彼の歩みを止める事は出来ないかもしれない、一緒についていく事も出来ないかもしれない。それでも彼の帰る場所にはなれるとそう信じて。

トワ・ハーシエルは常になく唾然としたラインのその顔を見つめながら、精一杯思いを伝えていく。

「友達として……じゃないよ。一人の女の子として、トワ・ハーシエルは貴方の事が好きです」

何時好きになったのか、それは自分でもわからない。

気がつけば、何時しかその凛々しい顔を見ると心がキュンとなつて、厳しいように見えて他人のために一生懸命で優しいところに惹かれて、一人で何もかも背負い込んでしまうところを見てそれを支えたいと思うようになっていた。

このままどこか彼が遠くに行ってしまうのではないかと想像しただけで不安で胸が張り裂ける思いを感じた。

だから、もう誤魔化すのはやめよう、自分は彼の事が好きなのだ。この思いを恋や愛と呼ばないのだとしたら、自分はもう生涯恋等出来る気がしない。……だってこんなにも、誰かを愛おしく思った事など自分にとって初めての事だったのだから。

「ライン君にとつての私はどう？ただの友達でしかない？」

潤んだ瞳で告げられた言葉に、ラインは慮外の事態故に停止させていたその頭を再起動させる。

自分が彼女をどう思っているか、それを問われればその答えはきつと……

「俺も、君の事が好きだよ。君に、トワ・ハーシエルという少女に心を惹かれている」

シャーリイ・オルランドとの死闘との最中、致命打を負った自分を再び立ち上がらせたのは目の前の少女の笑顔だった。もしも、此処で自分が死ねば彼女の命が危ない、そして自分が死ねばきつと彼女は悲しむだろうと、そう思ったら此処で死んでたまるかと思つて、それが立ち上がる力になつた。

何時からかはわからない、だけどきつと自分は彼女に心惹かれていたのだろうとそうリインは己が思いを自覚する。

告げられた言葉にトワは不安さを抱えていたその表情を見る見る明るくさせて輝く笑顔を浮かべる。

それはそうだろう、片思いではなく両思いだったのだと明らかになつたのだから。

順当に行けば晴れて正式に恋人同士になつてめでたしめでたしとなるところだろう。

そう、彼女が恋したのが普通の男だったのならば。

「だけど、俺は軍人になる。その思いに変わりはしない。君を心配させてしまう事は申し訳なく思う、だけどそれでも俺はコレに関しては譲るつもりはない」

例え家族や友人、恋人からの言葉だろうと自分は止まるつもりはないとリインは改めて告げる。

大切な少女を泣かせてまで見も知らぬエレボニアの民などという不特定多数に尽くす道で本当に良いのか？と親友は問いかけてきた。

あるいは軍人になどならず、ただ少女と穏やかに暮らしていくという道もあるのかもしれない。イリーナ会長に誘われたように、何も軍人になる以外の道がないわけではないのだから。市井の民として穏やかに愛する女性と家庭を育み、生涯を終える。そんな未来も決して悪くはないだろうと思う。

だけど、自分はそれでは満足出来ないのだ。目の前の少女をこそ護りたいと確かに思う。しかし、同時に自分はエレボニアという国とそこに住まう民もまた護りたいものだ。

祖国を護るといふ事はすなわち、自分と同じような思いを抱く他国の者を殺すことだと理解していながら――

自分が特に護りたいと願う、大切な人々は自分に危険な目に遭ってほしくないと願っている事を知りながら――

理不尽な悲劇によって母を奪われた自分が今度は誰かにその理不尽を押し付ける側に回るのだとわかりながら――

それでも、なお自分の夢と理想は変わらないのだ。

だからこそ、リインは目の前の大切な少女に思いを告げて来なかった。

間違はなく鈍い方ではあるがリインとて、流石に周囲が思っている程に鈍感ではなかった。

目の前の少女に自分が心惹かれている事は自覚していた。

しかし、彼には自分が彼女を幸せに出来るか自信がなかった。

死ぬつもりは毛頭ない、さりとて軍人となればその命を祖国に捧げる覚悟を持たなければならぬ。

軍人とは、誰かが命を賭けてやらねばならぬ時にその命を惜しんではいけない存在なのだから。

「そして俺が軍人になれば戦うのはきつと共和国や魔獣だけじゃない。おそらく、貴族派ともやり合うことになるはずだ。なぜなら、俺はギリアス・オズボーンの息子なのだから。

――そんな俺と一緒に居たらきつと君を、巻き込んでしまう事になる」

それだけではない、リインの脳裏に過るのはかつて大貴族によって理不尽に奪われた大切な母の存在。

幼いリインにとって父ギリアスは自慢の存在だった。母さんにこそ頭が上がない物の強くて優しい父は無敵の存在なのだと思うっていた。

実際、幼い頃の自分では総てを理解していたわけではなかったが、父ギリアスは息子の鼻肩目抜きに傑物と称されるに足る人物であった。

ヴァンダイク元帥の腹心との呼声も高く、実務能力、指揮能力、人望総てにおいて卓越しており、直接的な戦闘力に関しても達人の域にまで至っていた凡そ非の打ちどころのない存在だったのだ。

だが、そんな父でさえも母を護りきる事が出来なかったのだ。

自分が正式に軍人となれば、まず間違いない貴族派から目をつけられることになるだろう。何故ならば自分はギリ阿斯・オズボーン唯一の実子なのだから。

それらに対してリインはひるむところは全く無い、むしろ望むところだ。自分を潰しかかるといふのならそれらを相手取り見事勝利して見せようと、そう思っている。

しかし、それに大切な人が巻き込まれるような事になれば、話は別だ。

目の前の優しい大切な少女と彼女の家族、自分が護りたいと願う平和に幸せに暮らすべき人達までもが革新派と貴族派の抗争に巻き込まれる等という未来はリインにとっては到底看過出来るものではなかった。

だからこそ、リイン・オズボーンは少女に告げるのだ、君を幸せに出来るかどうか俺は自信がない。自分の身勝手な願いとその過程で発生する戦いに君を巻き込みたくないのだと。

だけど、そんな男の強がりにより少女は切ない気にされどそれを上回る慈愛に満ちた笑みを浮かべて

「うん、わかっていたよ、リイン君はきつとそう言うだろうなって。

でもね、私の思いは変わらないよ。私はリイン君の事が好き。——そのせいで大貴族の人達に憎まれる事になったとしても、私は貴方の傍に居たい」

それでも自分は貴方の事が好きなのだトワは己がワガママをリインに伝える。

それは考えなしの若さゆえの暴走なのかもしれない。いずれ自分が如何に考えなしだったのかを呪って後悔する日が来る可能性とてあるのかもしれない。

だけど、それはきつとこの思いを伝えなかったところで同じだ。あの時ちゃんと思いを伝えていればと、そんな後悔をする事になるだろう。

だからこそ、トワは躊躇わない。親友の後押しを受けてその思いを

愛しい少年へと伝えるのだ。

「トワ……」

そしてそんな愛しい少女の思いを伝えられてリインは揺らぐ。

何だかんだと理由をつけて自分は逃げようとしているだけではないのか、と。

男ならば例え何が相手だろうと君を必ずや護り抜いて見せるとそう誓うべきなのではないかと。

「リイン君の事が好きだから、本当は危ない目になんて遭ってほしくない。」

だけど、これは私のワガママでしか無いから、リイン君をこれだけじゃ止める事も出来ない事も解っているつもり。

「……だから、約束して」

「約束？」

「うん、絶対に死んだりなんてしない、自分は必ず生きて帰ってくるって。そう、約束して。」

「……リイン君は嘘つきなんかじゃないから、そうすればきつと必ず約束を護ってくれるって私は信じているから」

涙ぐみながら、それでも必死に紡がれた愛しい少女の健気なお願ひ、そんなものを受けた時に男が取れる選択等決まっている。それは……

「ああ、約束する。俺は必ず生きて君の下へと帰って来る。どんな状況になっても絶対に生きる事を諦めない。」

そして、例え何が相手だろうと君の事を守り抜いてみせる。絶対に、絶対にだ」

抱き寄せながら強く誓う。愛しい相手と己自身の双方へと。

そして愛しい男の温もりに包まれながら少女もまた呟く

「うん……遠くへ行っても良い。だけど、必ず生きて、帰ってきてね。約束、だからね。嘘ついたら、嫌だよ」

そしてそのまま二人は互いの温もりを確かめ合うのであった。

男は絶対に此処に帰ってくるのだと、女は自分が彼の帰る場所になるのだと、それぞれの胸の中に誓って……

鉄血の子と《赤き翼》

朝食の場、Ⅶ組の面々は困惑していた。

昨夜の夕食でリインとトワ、入学以来ずっと世話になって二人の先輩の様子が何やら何時になくぎこちなかったからだ。二人の友人であり、今はクラスの一員でもあるクロウに確認すれば何やら喧嘩をしたとのこと、これはしばらく気まずい空気が漂うのではないかと身構えていたのだが……

「はい、リイン君」

「ああ、ありがとう」

繰り返されるのは仲睦まじいとそう言う他ない二人の様子。以前から仲の良かった二人ではあったが、今朝になって二人の間から醸し出されるのは完全に恋人同士のそれである。

「ふふふ、お二人ともそうされているとまるで新婚のご夫婦のようですね」

第3学生寮の管理人たるシャロン・クルーガーがそんな風に悪戯っぽく告げる。

今までであれば顔を真赤にして慌てていたそんなからかいを受けてトワは……

「……えへへへ、そんな風に見えますか？」

嬉しそうに微笑みを浮かべる。その微笑みはまさしく幸せいっぱいといった様子でその表情に居合わせた面々は総てを確信する。ついに正式にこの二人がそういう関係になったのだと。

「はい、それはもう。大変に仲睦まじい様子で独り身としては少々目の毒ですわ。そうは思いませんか、サラ様？」

「……ちよつと、何でその流れでこつちに話題ふるのよ」

「それはもう、20を過ぎているのに寂しい女やもめの身として色々と身につまされるのではと思った次第です」

「ははーんさては、喧嘩を売っているわね？」

「いえいえ、そんな滅相もございませぬ」

この場において既に成人している二人の女性がそんな漫才を繰り広げるのを他所に二人は相も変わらず甘い空気を醸し出す。人目をばからずにいちやついているというわけではないのだが、なんという二人の距離が明らかに接近しているのだ。もとより前から付き合っているのだと専ら囁かれていた二人だ、そんな光景を見せつけられれば自ずと一行としても悟る事になる。すなわち……

「……とまあ、そういうわけでトワと俺は正式に交際する事になった。無論、学生としての節度を持って付き合うつもりだし、お前たちには努々迷惑をかけないように務めるのでまあよろしく頼む」

「は、はあ……」

「それは、そのおめでとうございます」

改まって告げられた言葉にⅦ組の面々はなんと答えたものやらと言った具合に反応する。正直付き合っていないといわれるたびに本当かと前々から思っていた二人なので改めて告げられたところで今更？と言うのが正直なところである。

「あはは、姉さんと父さんはまたきつと大騒ぎするんだろうな……」

「おーじやあトワが僕のお姉ちゃんになるんだね。クレアとレクターにも伝えておこうつと」

そんなふうにはリインの身内たる二人は新しい家族になるかもしれない存在に自分たちの家族の反応を想像して

「はは、雨降って地固まるって奴かね。おめでとさん」

二人の悪友もまた軽口を叩きながらそれを祝福する。

しかし、一転して真剣な表情を浮かべて

「リイン、友人としてお前さんにこれだけは言っておかなくちゃならねえ。心して聞いてくれや」

常になく真剣な表情を浮かべてこちらを見つめるクロウに、リインもまた真剣そのものの視線で返す。心して聞かなければならないと。「避妊はちゃんとしろよ」

瞬間、クロウ・アームブラストの身体が宙に舞った。

・・・

ライン・オズボーンとトワ・ハーシエルが正式に交際を始めてから数日、今年最後の特別実習の日が巡ってきた。行き先はトワ率いるB班がカイエン公爵が治めるラマル州の州都オルデイス、ライン率いるA班がログナー侯爵が治めるノルティア州の州都ルーレへと赴く事となった。

当然この情勢下で《鉄血の子ども》たるラインとミリアムが四大名門のお膝元に赴く事に対する懸念も述べられたが、教官たるサラ・バレストラインが太鼓判を押したことで決行の運びとなった。学院長たるヴァンダイク名誉元帥がバリアハートの二の轍を踏むとも思えないので、これに関しては信頼して問題ないだろう。

そうして朝、何故か今回に限って両班共に、グラウンドでの集合を命じられて、来てみれば現れたのは真紅の巨大な飛空艇。リベールの《ZCF》とも共同で作り上げた、世界最速たる高速巡洋艇《アルセイユ》の二番艦《カレイジャス》、そしてその艦長を務める《光の剣匠》、ヴィクター・S・アルゼイド、それがオリヴァルト・ライゼ・アルノールが己が理想を綺麗事で終わらせないために手に入れた、否築き上げた“力”であった。

そして艦の帝国各地へのお披露目飛行のついでに自分たちを実習地まで送っていくというオリヴァルトからの好意により、ライン達は《カレイジャス》へと招待されるのであった。

「お初にお目にかかります、アルゼイド子爵閣下。自分はツールズ士官学院2年1組所属のライン・オズボーンと申します。名高き《光の剣匠》へと会えたことを光栄に思います」

敬礼を施しながらラインは艦長席に腰をかけている目の前の人物へと挨拶を行う。

ヴィクター・S・アルゼイド、それは《光の剣匠》の異名を持って知られる帝国における二大流派《アルゼイド流》の総師範を務める人物でもあり、ラインの師であるマテウス同様《獅子心十七勇士》にも名を連ねている帝国において最高峰の武人の名である。マテウス卿同様にかねてより皇道派で持つて知られている人物であったが、それでも列記とした子爵位にある領地持ち貴族でもあったため、革新派と

貴族派の対立が強まっている昨今、その去就が注目されていたが、どうやらあくまで皇道派としての道を貫くつもりのようなのだ。

「そなたの話は娘より聞いています、善き先達に巡り会えたそう喜ぶ手紙とともにそなたのことを褒めちぎっていたよ。そしてこうして実際に顔を合わせてみると、なるほど確かにその若さで大したものだとそう思う。」

私がそなた位の年の頃は未だ中伝の身であったからな。その年で既に達人の領域へと至ったことは驚嘆する他ない」

「名高き光の剣匠にそうまで言つて頂けるとは光栄です」

「ふふ、何そなたが私位の年になる頃にはそなたならば私同様に陛下より《十七勇士》の座を拝命している事だろうさ。実際、すでにいくつかの武勲を立てているようだしな」

「……ありがとうございます。閣下が自身のお目は正しかったと、そう誇れるように努々在りたいと思います」

「ふふ、しかし、娘の手紙を読んだ時は余りにそなたのことをべた褒めしていたのでついに武骨な娘にも春が来たのかと思っていたが、何の事はない、どうやら武人として単に正当なる評価を下しただけだったようだな。」

事と次第によつては見極めなければならぬと思っていたが、やれやれ父としては喜ぶべきなのか、それとも娘の武骨さを嘆くべきなのか」

「父上！」

「はははは……」

苦笑しながら告げられたヴィクターの言葉を受けてリインとしては笑うしか無い。

何せ自分にとってラウラ・S・アルゼイドはよく出来た可愛い後輩、剣友という認識でしか無く、異性として意識した事など無かったが故に。

「さて、余り私のところで呼び止めても殿下に申し訳ない。そろそろ艦橋におられる殿下のところに行くの良いだろう」

「ええ、それでは失礼いたします」

「やあ、リイン君。先月の通商会議の時以来だね」

「ええ、オリヴァルト殿下におかれましては、ご壮健そうで何よりです」
ヴィクターと別れたリインは、何時になく真剣表情で「折入って話がある」と真剣な表情を浮かべたオリヴァルト皇子の下を訪れていた。

「それで、私に話というのは？」

「うん、単刀直入に言おう、リイン・オズボーン君。卒業後、この艦の一員になるつもりはないかい？」

「……………」

冗談、の色は一切無かった。眼前の皇子は本気で告げている。

「身に余る光栄とは思いますが、何故と伺ってもよろしいでしょうか？」

思いもよらなかった誘いの言葉に動揺する心を立て直しながらリインは問いかける。

「ふふ、そんなに不思議なことかな。理事長である私が、自分の学院で首席を務める俊英をヘッドハンティングするなどというのは言わば当たり前的事だと思うがね。」

加えて言うのなら、君が手に入れようとしている《騎神》の力、それが《革新派》のいや、彼のものとなってしまうことを防ぐためというのもある。無論、君自身の才幹や実力と考えを買っているからこそというのが一番の理由だがね」

「……殿下は、それ程までに我が父を、宰相閣下を危険視なさっているという事ですか」

告げられた言葉にやはりかとリインは思い、顔を顰めながら口にする。

眼前の皇子は紛れもなく敬意に値する皇族だ。祖国を憂う思いにも嘘はない、かつて自分に語った理想を本気で実現しようとしており、かの《光の剣匠》さえも口説き落とすほどの傑物なのだという事がわかる。

だからこそ、その事実は重い。私欲ではなく祖国を思う心から眼前

の皇子が父を危険視しているのだという事が嫌というほどにわかってしまうが故に。

「……他ならぬ彼の息子である君に言うには些かに心苦しいが、その通りだ。」

何よりもこの情勢下で《騎神》という新たな力がどちらか一方の勢力に加わってしまうというのが私としては危険だと考えている、これは君ほどに優秀な若者ならば当然理解出来る事ではないかな」

オリヴァルト皇子の言っていることは理解できる、カレイジャスとアルゼイド子爵の艦長就任は一触即発の状況にある革新派と貴族派の二派へと睨みを利かせるためのもの。当初は現場レベルの些細な小競り合いだったのが、誤解とすれ違いが重なった結果に大規模な軍事衝突に繋がったという事例は歴史上に枚挙に暇がない。

そんな時に両派に対して中立で、かつ皇族という権威を有する《赤い翼》が《光の剣匠》という力を伴ってかけつけければ角も立たずに抑止力足り得るというわけだ。

だが、それはあくまで小競り合いであれば。《騎神》という力が加わって基より優位だった軍事面での天秤がますます《革新派》へと傾けば、それこそ強硬姿勢を崩さない革新派のリーダーは貴族派との武力抗争へと本格的に乗り出すのではないかと、そんな危惧をオリビエは抱いているのだ。

「ですが殿下、この情勢下だからこそ“力”は必要です。殿下も当然お分かりでしょう、今、クロスベルを取り巻く状況は加速度的に悪化しています。それこそ共和国との戦争に発展する可能性とて十分にあり得る状況です。」

それに、殿下のお志はご立派だと思います。されど自分はギリアス・オズボーンの息子です。その自分が加わってはそもそもこの《赤き翼》そのものが革新派寄りだと、そう周囲から思われる可能性とてあり得るのではないですか？」

基よりオリビエは長子でありながら、母が平民であったために皇位継承権を持っていないという特異な立場にある皇族だ。それこそ周囲からすれば、その件で貴族勢力に対して不満を抱いていたと思われ

ても何らおかしくないだろう。そんなオリビエが鉄血宰相の息子であり、革新派の若き英雄と目されているリインを赤き翼に迎え入れればどうなるか？

リインが父と距離を取り、皇道派になったのではなくオリビエが革新派勢力と接近したとそう取る可能性が高いだろう。いや、ギリアス・オズボーンならばまず間違いなく、そう思われるように仕向ける。自分とオリヴァルト皇子は同じ理想を抱いた同志なのだと思われよう。周囲に思われるように動くだろう、なし崩し的に皇道派をも自勢力へと引き込むために。

そして、そう思われてしまえば終わりだ。睨みを利かせる中立勢力等というのは公正だと周囲に思われてこそ初めて意味がある。どちらか一方に肩入れしていると思われてしまえば何ら意味を持たないだろう。

「ふふ、わざわざそんなふうにごちらを心配してくれている辺り、私の活動はそれなりに意義があることだと思っただけで貫えているということの良いのかな？」

そう、リインが骨の髄から革新派として父のためのみを思うのならば、このことをオリビエに伝える必要はない。

何故ならば国民からの人気も高い《放蕩皇子》と《光の剣匠》をなし崩し的に自陣営に引き入れられるというのならば、それは革新派にとってはメリットでしかないのだから。

「……少なくとも、同じ帝国人同士が殺し合う等という未来を避けようとしている殿下のお志を自分は尊敬しております。」

そして、殿下のように派閥にとらわれずに調停の役割を担える方が必要だという事も」

調停者のいない争いは悲惨だ。何せ辞め時や落とし所を見つけないのが非常に困難になってくる。

かつて起きた獅子戦役が血で血を争う戦いとなったのも一重に皇帝という調停を担う権威が不在となったからに他ならない。

そういう意味で、リインとしては革新派と貴族派の抗争に皇族を駆り出すべきではないと考えていた。象徴たる皇族には綺麗な神輿で

あつて頂かなければならないのだ。

「ありがとう、その言葉を聞いてやはり私としてはますます君にこの艦に加わって欲しいという思いを強くしたよ。

無論、君の示唆した危険性は十分にあるだろう。だがそれでも、やはり叶う事のならば君には私の同志に加わって欲しいと思う。

それ位はねのけて見せねば、それこそ私の語った理想はただの綺麗事で終わってしまうだろうからね」

手堅い手を打っていて勝つ事ができるのは優位にあるものだけだ。劣勢にある側が状況をひっくり返そうと思えば、どこかで博打に打つて出る必要が出てくる。

「返事は今すぐでなくても構わない。私のやっている事が茨の道だという自覚はあるし、出世コースだとも到底言えない上に、君に非常に酷なことをお願いしているという自覚もあるからね。

だが、そういう選択肢もあるのだと胸に留め置いてくれていると嬉しいね」

微笑みながら告げる皇子のその姿をどこか眩しく思いながら、リンは一礼を施してその場を立ち去るのであった。

鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルーレ①

ルーレへと到着したリイン達A班は理事たるイリーナ氏への挨拶もそこそこに実習へと取り掛かっていた。此処で問題となったのが戦闘をどうするかである。

というのも既にリインの実力は学生のそれを既に大きく上回っている、下手にリインが出張ってしまったては他の班員達の成長の機会を潰してしまう事になる。さりとてリインが戦わないとなると前衛を務める事が出来るのがフィーだけというなんともアンバランスな事になってしまい、余りにフィーの負担が増大してしまう。

そんなわけでリインは武器がない状態の時の事も考えて無手にて参加。見事領邦軍からの魔獣退治の依頼もこなした一行は初日の課題を全て終わらせ、ルーレへと戻って来たわけなのだが……

そこで一行が目にしたのは一触即発でにらみ合う鉄道憲兵隊と領邦軍。

領邦軍は街中にも関わらず何と装甲車までも投入して鉄道憲兵隊を威嚇。

それに怯んだ憲兵隊の面々に対して領邦軍の隊長は此処ぞとばかりに煽りを行うのであった。

一歩間違えば大惨事にも繋がりかねないこの状況、一体どうすべきかとアリサ、エリオット、マキアスの三人からの頼るような視線が、クロウとフィーからの見定めるかのような視線が班長たるリインへと集中して……

「学生に過ぎん俺達が仲裁をしたところで引っ込んでいると言われるのがオチだ。ましてや鉄血宰相の息子である俺が出張ってしまえば、領邦軍にしてみれば鉄道憲兵隊への加勢だと思わんだろう。」

此処は一般市民の安全を最優先に行動しよう。護るべき民間人の保護を疎かにしている領邦軍の代わりに俺達で市民の避難を行う」

鉄道憲兵隊の味方に尽きたい私情を押し殺し、殊更革新派を煽る発言をした領邦軍に対する細やかな嫌味を口にしながら、リインはそう冷静に判断を下す。

己の剣によって装甲車を破壊する事自体は今のリインならば可能だ。だが、そんなことをすれば領邦軍の怒りに火に油を注いでしまうだろう。かといって言葉で止めようにも、革新派の英雄等と持て囃されていようと所詮学生に過ぎない自分では「格」というものが圧倒的に足りていない。

むしろこんな「若造」に怯んだと部下から思われるなど耐え難い屈辱となるだろうから余計に強硬な態度に出る可能性が高い。軍人としての実力は既に十分過ぎるほど身につけたリインだったが、相手を怯ませ、退かせるには未だ「実績」が不足していた。

「ま、確かにそれが妥当だろうな。……ゼリカのやつでもこの場にいりやあもうちよい色々やりようはあったんだろうが」

不良娘とは言えアンゼリカ・ログナーは列記としたログナー侯爵家の人間だ。仕える侯爵家の令嬢が相手ともなれば領邦軍とて高圧的には流石に出れなかっただろう。本人自身はその手の権威を振りかざすような行為は好まざるところではあるだろうか……

「ん、妥当な判断だと思う」

身内鼻肩をすること無く、冷静に下されたリーダーの判断を班員たちも是としてA班の面々が動き出そうとしたところで……

「仰る通りです。領邦軍には領邦軍の、鉄道憲兵隊には鉄道憲兵隊のそれぞれの「役目」がありませんよう」

敬愛して止まぬ上官の声に鉄道憲兵隊の面々はまさしく救いの女神でも目にしたが如く表情を明るくし、リインもまた敬愛する義姉の姿に班員達から見てもあからさますぎるほどにその表情を明るくする。

そして名高き《氷の乙女》の登場とどこまでも凜とした様子で告げられる言葉に周囲に居た聴衆たちもまた鉄道憲兵隊へと好意的になつていき、場の主導権を握られた事を悟った領邦軍の面々は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

(流石はクレア義姉さんだ)

姿を現しただけで場の空気を変えたそれは未だリインが持ち合わせていないものだ。

それを為し得たのは《氷の乙女》等と称されるようになった義姉の実績が為せるもの。

単純な戦闘力可言えば既に引けを取らない自信があつたリインだが、それでも未だ敬愛する義姉には及んでいない事を実感せざるを得なかつた。

悔しさはある、されどそれ以上にリインはそんな義姉の事が誇らしかつた。

そうしてリインにとっては文句のつけようもない形で場の收拾が着こうとしたところで現れた一人の貴公子によつて場の雰囲気は再び変わる。

あらゆる鉄道網を監視下に起いており、空港にしても当然目を光らせている。それにも関わらず何故この人物がルーレに居るのかと訝しがるクレアに対してルーファスはあつさりと答えを告げる。

アルバレア家専用の飛空艇を使って来た、ただし空港を使用せずに郊外の街道に停泊させたのだと。如何に鉄道憲兵隊が帝国全土をカバーしていても、こうして“死角”というものが存在する以上、その地を常に守護する領邦軍は必要なのだを証明するかのよう。

かくして場の主導権を握つたルーファス・アルバレアは双方共に退くようにと指示を下す。

アルバレア公爵家嫡男という立場に在り、かつ忌々しい《氷の乙女》をやり込めるといふ溜飲の下がる光景を見せて貰えた領邦軍にしてみれば当然ながらそのルーファスの言葉に逆らうところなど感情、道理双方の面からして有り得ない。あつさりとその指示に従い、領邦軍は撤収を行う。

クレアも基より部下の救援として来た身。領邦軍が退いたのであればその場に拘泥する理由はない。ルーファス卿への警戒を強めながらも速やかにその場からの撤収を行う。

こうして領邦軍と鉄道憲兵隊が衝突して民間人に被害が出る等という醜態にして惨事は避けられたわけなのだが……

「ふふ、奇遇だな」

「お久しぶりです、ルーファス卿。どうやら色々とお忙しいご様子のように」

優雅にこちらへと挨拶する貴公子の姿を、自然とリインは鋭い視線で見つめる。

この切迫した時期に専用艇を使い、わざわざ空港を避けて秘密裏にログナー侯爵を訪問して会談を行う。

革新派であるリインにとってみれば当然、裏を感じずには居られないからだ。

「ああ、色々難しい時期だからね。

西のオルデイスもそうだが、何時何が起きてもおかしくない状況だ。

残りの3日間――せいぜい大人しく《実習活動》に徹すると良いだろう。

如何に帝都やガレリア要塞、そしてクロスベルで活躍したと言っても君たちは未だ、学生の身分に過ぎないのだからね」

「……忠告、胸に留め置かせていただきます」

またしてもバリアハートの時同様に告げられた、未だ敵にさえ値しないと眼中にないと言わんばかりの大人としての思いやりに溢れたその言葉にリインは自然と手を強く握りしめる。

皇女殿下を救出した、赤い星座の部隊長を退けた、一体それが何だと言うのか。武力という一分野においてようやく並び立てただけで、未だ目の前の人物に自分はあるとあらゆる分野で遠く及んでいない事をリインは実感せざるを得なかった。

そして、そんなリインの視線を受けながらもルーファスは特に気分を害した様子を見せることもなくどこまでも優雅な様子を崩さない。

むしろ、そんなリインの稚気をその程度で満足して立ち止まって貰っては期待はずれだとしても言わんばかりに好まし気に受け、その場を去っていくのであった。

「……………」

立ち去っていくルーファスの後ろ姿を眺めながらリインは更に強く拳を握りしめる。

この悔しさを決して忘れてはいけなさとまだまだ自分は成長していかねばならないと誓って。

そしてそんな鬼気迫る様子を見せるリインの姿に班員達が思わず、なんと声をかけたものかと立ちすくむ中……

「まったく、何怖い顔してんだよ」

一人、クロウ・アームブラストはそんな友人に対して仕方のないやつだとばかりに語りかける。

「言っておくがお前さんだって傍から見ると大概ドン引きなレベルなんだからな？」

宰相の息子で学年首席、ヴァンダール流皆伝、帝都では皇女殿下救出なんて功績まで打ち立てて、あの大陸最強の猟兵团赤い星座の大隊長と五分にやり合った革新派の若き英雄つてな。あまりのすさまじさに1年の頃はあんだけ突っかかっていたリッテンハイムのやつも最近じゃすっかり大人しくなっちゃまいやがったじゃねえか」

「リッテンハイムの奴等端から眼中にないさ。今更あいつ程度に時間を割くのも惜しい。」

……重要なのは、未だ俺がルーファス卿には到底及んでいないというその事実だ」

「何言ってるんだ、そんなもん10も歳が離れていたら当たり前だろ。」

17の時点でのリイン・オズボーンは27のルーファス・アルバレアに及んでいなくても27でのリイン・オズボーンは並んでいるかもしれないじゃないか」

「ああ、そうだな。そして27になった俺は37になったルーファス卿に相も変わらず及んでいないかもしれないわけだ」

「別にお前さんがあの御仁に絶対勝たなきゃならねえってわけでもないだろう。上ばかり見てちゃキリがないぜ」

「現状に満足してしまえば人間の成長はそこで止まる。人間の限界とこののはなクロウ、その人物がそこが限界だと思っただころがそのまま限界になるんだよ」

肩をすくめながら諫める親友の言葉に対してリインはどこまでも強い鋼鉄の如き意志を込めて告げる

「無論意志さえあれば何でもできると言っているわけじゃない、才能、生まれや育ち、現実問題そういう意志や本人の努力ではどうにも出来ない問題というのはいくらでも存在するだろう。だから、出来ない奴らは努力が足りないだけだ、努力をすれば誰でも出来る等と言うつもりはない」

自分は恵まれていてという自覚がリインにはある。

素晴らしい両親の愛を受けて育ち、優秀な師の教えを受けて、夢に向けて思う存分に自らを高める事ができた。

今の自分があるのはそんな周囲の環境に恵まれたからに他ならない。

帝都の一件以降は何やら奇妙な感覚にも目覚めた上に、寝る時間もそれまでの半分で済むようになった。

ある意味ではある種のズルをしているとさえも言えるかもしれない。

だから、そんな恵まれた立場にある自分が誰でも努力すれば出来る事だ等と言ったらそれは恥知らずというほか無いだろう。

故に、意志の力と努力さえすれば何でも出来るし、誰でも出来る等というつもりはリインには無い。

「だがな、最初からやろうという意志を持たなければ絶対にそれは出来ないんだよ。

空を飛ぼうという意志を持たない人間は絶対に空を飛ぶことが出来ない。意志は総てを可能にする魔法ではない。だが、意志が無ければ何も始まらない。

ドライケルス大帝が内戦を終わらせる事ができたのも、大帝が内戦を終わらせようとする志を抱いたからこそだ。無論、それを為したのは彼自身の持つ才幹、血統、巡り合わせ、そして運と呼ばれる物に恵まれたからこそだろうさ。

だが、もしも大帝陛下が内戦を終わらせようという志を抱かなければ、その血に流れる責務を果たそうとせず、自分以外の誰かがやってくれる等と思っていたら《獅子戦役》は終わらなかつただろう」

自分には才能があるのだと皆は言う、ならばこそなおのこと自分より高くを目指さねばならないだろう。

飛びたいという意志があったのに才能という翼を持つことが出来なかつた者の分も翼を幸運にも女神より授かつた身として。

あいつならばしようがないと納得できるようにどこまでも雄々しく高みを目指し続けよう。

「だからこそ、俺はこの程度で満足する気は毛頭ない。

今の自分がルーファス卿に及ばないことは百も承知だ、だがそれに何時までも甘んじるつもりはない。

俺の理想を成し遂げるには彼のような相手を超えねばならないのだからな」

宣誓されたその鋼の如き意志にⅦ組の面々は気圧される。

尊敬に値する、頼りになる先輩だと思っていた。まさしく士官学院生の鑑のような人物だと。

だがそれにしても余りにもこれは凄まじすぎる、その迷いなどまるでないかのような物語に登場する「英雄」が如き気迫に一行はどうか怖れめいた感情を覚えずには居られなかった。

ただ一人、クロウ・アームブラストだけは苦笑して

「やれやれ、トワのやつとようやく恋人同士になってちつとは丸くなるかと思つたら前よりも堅物っぷりに拍車がかかつてやがる。こりやあいつも苦勞が耐えねえだろうな」

やれやれしようがない奴だと親友のその余りにも真面目過ぎる発言に辟易としたかのように、されど馬鹿にするような事だけは決してせずに肩をすくめる。

「そこを言われると少々弱いところだな。彼女にはきつと何かと苦勞をかける事になるだろうからな……」

引き止めた意志を押し殺しながら精一杯浮かべた愛しい少女の笑顔をリインは思い出す。

きつとこれから何度も彼女にはあんな顔をさせる事になってしまふのだろう、それを考えると申し訳無く思う。だが、それでもリイン・オズボーンはこう生きると決めたのだ。

「自覚してんならちつとは直せよ。他をいくら笑顔にしたところで惚れた女を泣かせているようじゃ、男としては三流だぜ」

「わかっているさ。俺だって彼女の泣いている姿なんて見たくないんだからな」

クロウの軽口に鋼鉄の意志を宿した鉄血の継嗣から、クロウ・アームブラストの親友であるただのライン・オズボーンへとなってラインもまた応じる。

そうして張り詰めていた空気はどこか緩んで、ラインたちもまたその場を跡にするのであった……

鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルーレ②

ガツガツとそんな擬音語がびったりの淑やかさとは無縁な様子でアリサ・ラインフォルトはメイドたるシャロンが用意した夕食を貪る。彼女が此処まで不機嫌な理由、それは夕食は共にすると云っていた母親であるイリーナ氏が急用によってそれをキャンセルしたことにある。

自分との約束をすつぽかされることには慣れていたアリサだったが、友人たちを蔑ろにするような母の行いが流石に腹に据えかねたのだろう、怒りのままに用意された夕食を貪っていく。しかし、「ぶっちゃけ太るよ」というフィーからの乙女心を直撃する爆弾ワードを聞き、ピタリと一瞬動きを止め、そこから告げられる友人たちの静止の言葉を受けてどうにか落ち着きを取り戻す。それでも憤懣やるかたない様子で告げる、「自分はともかく、貴方達は自分が理事を務める学院の生徒なの！」と。

されど、そんな後輩の癩癩にリインは苦笑して

「まあ止む得ないさ。ラインフォルトグループは帝国最大の企業。ラインフォルトがくしやみをしただけで、風邪を引く事になる人間は数百万を超える。ツールズの理事としての生徒数人への応対とラインフォルト社会長としての役目、どちらが重いかは明らかだ。」

ラインフォルトという大企業を率いている女傑と話せる事に対する期待がなかったといえればリインとしても嘘にはなる。されど、その背負っている重責に対してリインは理解を示す。それ以上に重いものを背負っている以上そちらを優先するのは仕方のないことだと。

そしてそんな風に割り切り切りきる事の出来ない少女は夕方の様子も相まって、どこか大切な人さえも置き去りにして進み続けてしまいうな目の前の先輩の姿にどこか母の姿をダブらせて……

「……先輩は辛くなったりしたことはないんですか。」

以前ノルドに行く時に聞きました。宰相になってから、父に会ったのは10歳の誕生日の時が最後だって。

私は正直寂しかったし、辛かったです。先輩が言うように会長とし

てやむえない事だったとしても

それでも誕生日をすっぽかされた時は思わず「娘の私よりもそんなに仕事が大事なの！」とそう思ってしまった……」

公人としての素晴らしさと私人としての素晴らしさはしばしば両立しない。

いや、公人としての責任感が強い人ほど、どうしても私人としての時間が取りづらくなる以上必然家族に対しては寂しい思いをさせてしまいがちになるのが世の道理だ。

無論、理解は出来る。されどどうしても心の中に過ってしまうものなのだ「そんなに赤の他人が自分達よりも大切なのか」という思いが。誰かのために懸命に身を削るような素晴らしい人物ほど、身近な大切な人達を泣かせる事になってしまおうというままならない現実。全くもってこの世は不条理と言う他ないだろう。

「なかったと言えば、嘘になるがそれ以上に俺は父を誇りに思っていたからな。」

それにそこにいるエリオット、オーラフ義父さんにフィオナ義姉さん、クレア義姉さんにミリアム、後はおまけにレクターさんと言った人達が俺の周りには居たからな。だから、そこまで不満に思ったことは俺はないよ」

「そうですね……」

本心から言っているのだろう、目の前の先輩には真実無理をしていると言った様子は見受けられない。

やはり、自分は恵まれているにも限らず文句を言っているただのワガママなお嬢様なのだろうか、そんな想いがアリサの心を過る。

フィーのように生きるためには戦わざるを得ないという環境で育ったわけでもない。

義姉代わりの女性を亡くしてから忙しい父を一人で家で待ち続ける事になったマキアスとは違い、シャロンという姉代わりの女性が居てくれたのだから真実ひとりぼっちだったというわけでもない。

音楽家になるという夢を抱きながら士官学校に行く事を強制されたエリオットと違い、家を継げと強制された事もない。

そんな思いを抱いて先程までの母に対する苛立ちはどこかへ行き、代わりに自分がなんとも物分りの悪いワガママ娘に思えてきてしまったのだ。

「つたく、その真面目大王と比較していちいち落ち込むじゃねえよ。良く言うだろ、他所は他所。うちはうちでな。良いんだよ、ワガママぶちまけたって。お前らはまだまだガキで、そういうガキのワガママを聞くのも大人の仕事なんだからよ」

しかし、クロウ・アームブラストはそれを否定する。

そう出来る奴が居るから、他も全員それに倣わなければならないわけではないと。

例え正しくなろうと譲れない思いがあるのならば、それをぶつけても良いのだと。

「……そうだな、これはあくまで俺がそう思ったというだけの話だ。

オズボーン家にはオズボーン家の、ラインフォルト家にはラインフォルト家の親子の在り様がある。

無理に真似をする必要はないさ」

そしてラインもそんなクロウの発言を肯定する。

家族の有り様について、これが絶対的に正しいなどという形はないのだと。

そうしてどこか重い空気に陥っていた夕食の時間も終わり、一行は解散して思い思いの夜の時間を過ごし始めるのであった……

・・・

「お待たせ、クレア義姉さん」

心よりの笑顔を浮かべながらラインは待ち合わせのダイニングバーにて挨拶を行う。

あの後、自由行動になって自分たちの私室以外は自由に使って構わないと言われたラインは曰くグエン氏が揃えたものだという図書室にてマキアスと共に読書を敢行。共にいるマキアスが驚嘆するスピードと集中力で次々に蔵書類を読み漁っていたラインだったが、ク

ロスベルに赴く際に渡された《鉄血の子どもたち》専用の通信機にクレアより連絡が入る。曰く、折り入って話したいことがあるためこれから指定の場所に来てくれないかと。

敬愛する義姉にそんな誘いを受けてリインに断る選択肢などあるはずもない、近くに居たマキアスにだけ一声かけて身支度を整えて外出することとした。何やらフィーがこっそりついてこようとしたので、義姉と久方ぶりに会うから姉弟水入らずで話をしたい旨を告げて彼女を返して。

「いえ、私もつい先程来たばかりですから。それよりもこちらの方こそ実習中だというのに呼び出してしまい、すみません」

たおやかに、そしてリインと同じく心からの微笑みを浮かべるクレアの姿は常の軍服とは違うものだ。そのドレス姿にリインは自然と目を奪われるも義姉に対して、何よりもトワという明確な恋人が居る身としていかんいかんと抱いた邪念を振り払う。

「いや、空いた時間を使って読書していただけだから本当に気にしないでよ。イリーナ会長曰く、時間とは空くものじゃなくて空けるものとのことだし、義姉さんのためだったらいくらでも俺は時間を空けるよ」

「ふふ、ありがとうございます。私も貴方のためだったらいくらでも時間を空けますから、何かあつたら気軽に頼ってくださいね」

「うん、頼りにしているよ」

そんな調子で姉さんとリインが呼んでいなければ、そういう関係にも見えるような仲睦まじい様子で血の繋がらぬ姉弟は久方ぶりに談笑を始める。

「好きな物をなんでも頼んでくださいね。もちろんアルコール以外ですけど」

「わかってているよ、それ位。現役の憲兵大尉の前で法律違反をする気は毛頭ないって」

クスリと笑みを零しながら告げられるその言葉に未だ子ども扱いされる事に若干拗ねる思いを抱いた物の、現実問題未だ自分で自分の食い扶持を稼いでいるわけではない以上、その扱いも止む得ないと思

い、リインは苦笑しながら姉の気遣いに甘える事にした。

「傷……残ってしまったんですね」

痛まし気にクレアは愛しい義弟の右頬を見つめながら告げる。

帝都で瀕死の重傷を負ったと思っただけならクロスベルでは赤い星座の大隊長と交戦して傷を負ったというその事実は、基よりリインに対して心配性で過保護などのある彼女の心を大変に痛めた。

「危ないことをしてはいけないといつも言っているでしょう」などと叱りたいところだが、帝都での一件はそもそも自分が義弟の活躍に救われた形であり、クロスベルにしてもリインが奮戦しなかったらその場に居合わせた各国のVIPの命が危ないところであつた以上そういうわけにもいかない。

「ああ、まあ手痛い授業料だつたと思うしか無いよ。やはり世界は広いなとそう実感したよ。皆伝は到達点なんかじゃない、ようやく俺は勝負の土俵に立てただけなんだと改めて再確認する事も出来たからね」

次は遅れを取らないとそう意志を滾らせる義弟の姿をクレアはどこか遠くを感じる。

数ヶ月前までは確かに自分の方が上を行っていた。万分の1を手繰り寄せられて敗北したものの、それでも実力自体は依然変わらず自分が上だつた。

無論、いずれは追いつき追い越される日が来るだろうとは思っていたが、それでもそれから数ヶ月の内に追い抜かれるなど流石に高性能の導力演算機などと評される《氷の乙女》の頭脳をもつても想像の埒外であつた。

「向上心が高いのは良いことですが、余りトワさんに寂しい思いをさせるような事をしてはいけませんよ」

「……善処するよ」

誤魔化すように頭をかくその義弟の様子にクレアは思わずクスリと笑みを溢す。どうやらこの危なかつしい義弟を諫めるには今後はこの方面から攻めれば良いと思ひながら。そこからしばらくは和やかな姉弟の語らいが続く。話題の種はもちろん、ついに訪れたリイン

の春についてだ。此処ぞとばかりにからかい混じりに問いかけるクレアと照れくさそうに話すリインという、微笑ましいやり取りがしばらく続いたが……

「何時までもこうして居たいところですが、そろそろ本題に入る必要がありますね」

名残惜しさを見せながらもクレアは私人としての顔から《氷の乙女》と称される敏腕将校の顔へと切り替えて

「現在、鉄道憲兵隊ではR Fグループの第一製作所に強制査察を検討しています」

クレアから告げられた言葉にリインは全ての線が繋がるような気がした。

イリーナ氏の突然の夕食の欠席、何やらあちらこちらを飛び回っている貴族派きつての才子の仲介によつて結びつきを強めている四大名門の面々、帳尻の合っていない鉄鋼の量と鉄鉱石の横流し、そして最低でも既に目覚めている《騎神》の存在。何よりも純軍事的には革新派に対して不利にも関わらず強気な姿勢をまるで崩さない貴族派のリーダーである、カイエン公爵の存在。

「第一製作所は革新派との決戦に備えて何らかの新兵器を作つていた。おそらくは、エマの姉の導きを受けた《起動者》の用意した《騎神》を基にして」

「……ええ、それが現在我々が彼らにかけている疑いです」

百点満点と言つていい義弟の回答にクレアは常とは違い、どこか浮かない表情を浮かべる。

以前より優秀な教え子ではあった、されどこれは余りにも鋭すぎる

と。
限られた一部分の情報から正答へとたどり着く能力、そうこれは自分と同じだと。

先輩としてその能力の持つ、負の部分、読み取りたくもない他者の暗い感情や真実、それを熟知しているだけにクレアは痛まし気に義弟を見つめる。

しかし、そんな義姉の気遣いとは裏腹にリインはたどり着いた真実

に齒噛みをする。

心に過るのはやはり自分は力を手に入れるのが遅すぎたと、そんな思いだ。

何故もつと早くに打ち明けてくれなかったのかとそんな怒りめいた感情さえ己が導き手であるエマ・ミルステインに対して浮かんでくるが、そんな思いをリインは頭を振って打ち消す。

騎神という強大な力の扱いに対して、慎重になるのは当然なのだから仕方のない事だし、彼女を責めても仕方ない。

ともかくにも、もはや一刻の猶予もない、何としても自分は《騎神》の力を手に入れなければならぬと決意する。

そして、義姉の任務の重大さもまた理解する。皇室所有のザクセン鉱山の鉄鉱石を貴族派が横流しにして新兵器を秘密裏に開発していた。

証拠を掴むことが出来れば四大名門の一角ログナー侯爵家とてタダでは済まない大スキャンダルだ。それこそ皇帝陛下への謀反を目論んでいたと疑いをかけられても言い逃れ出来ないだろう。

故にリインの取るべき選択肢など決まっていた

「話はわかったよ義姉さん。俺に出来る事があれば何でも言っただけいい、喜んで協力するから」

どうか力にならせて欲しいと熱く語りかける義弟のその姿にクレアは静かに首を振って

「いえ、その必要はありません。確かに貴方は強くなりました、単純な武力で言えば既に私よりも上でしょう」

少なくともこと一対一において言えば、赤い星座の大隊長と対等に渡り合ったリインは既にクレアを上回るだろう。

だが

「ですが、これは単純な武力によってどうこうなる問題ではありません。……私がこうして話し合いの場を儲けたのは協力を依頼するためではありません。」

今のルーレが非常に危うい状況にあるという事を伝えて、そうした「危険」に出来るだけ近寄らないようにしてもらうためです」

言い募ろうとするリインを他所にクレアは話はこれで終わりだとばかりに席を立つ。

「いつかもしいましたが貴方はまだ学生の身です。そして先輩として後輩たちの面倒を見ないとならない立場でもあります。」

「危機」輪郭を見極め、できるだけ近寄らないようにする。血気に逸ること無く自制する。それもまた「士官」として重要な資質だと私は思います」

それだけ告げて去っていく姉の姿を見送りながらリインは強く拳を握りしめる。

未だ「学生」の身でしか無い自分が不甲斐なくてたまらないと言わんばかりに。

「武力」ではどうにもならない、巨大な壁を突きつけられて、その壁を乗り越える事も打ち砕く事も出来ない自分自身の無力さを何よりも憎みながら……

鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルーレ③

翌朝、リインは班員達にクレアとの会話から得た情報を《騎神》関連の情報を除いて班員達に説明。領邦軍と鉄道憲兵隊が一触即発の状況にある事、そしてそれにはラインフォルト社の各派閥も大きく関わっている事を説明した。流石にシヨックを受ける様子のアリサに気づきつつも、リインは自分自身にも言い聞かせるように、未だ士官学院生に過ぎない自分たちが首をツツコめるような案件ではない事を説明。大人たちの忠告通りに、課題を大過なくこなすようにする旨を伝えて、課題である《ノルティア街道の魔獣退治》を大過なく終えて、ルーレへと帰還するのであった。

しかし、帰還したリインたちを迎えたのは鳴り響くサイレンの音とラインフォルトの工場から黙々と立ち昇る黒い煙。異常事態を察して現場へと急行したリイン達は、正体不明の魔獣のような存在が中で暴れていること、そして逃げ遅れた工員たちがまだ工場内に居る事を伝えられると、すぐさま決断を下し、工場内へと突入する。

何故ならば軍人の使命とは祖国と、それを構成する罪なき民を護る事にあるのだから。危機の輪郭を見極めた上で誰かがやらねばいけないのならば、それを力なき民の代わりに担うのこそが軍人なのだから。此処で我が身を可愛がっているような者に軍人になる資格など無いとそうリインは鋼の意志を燃やして。

・
・
・

「く、来るな……」

「女神よ……」

突如として現れた巨大な兵器それを前にして取り残された工員達は立ちすくむ。警備を担当していた兵士達がどうか携帯していた導力銃にて応戦を試みたものの結果はその分厚い鋼鉄の装甲を少しへこむのがやっとという無慈悲な結果に終わった。基より彼らは正規の軍人ではない、多少の訓練を受けた民間人でしかない。その光景を前にあつさりとした彼らの戦意をへし折られる、むしろ工員たちを見捨てず逃げ出さなかったただ称賛されて然るべき職業意識と言えるだ

ろう。

そして荒事の経験などない工員たちはその威容を前にただ立ちすくむしか無い。人間相手であれば命乞いも出来るだろう、されど無機質な機械相手にはそんなものをしたところで一体何の意味があるだろうか。故に、彼らに残された手段はただただ祈る事のみ。

辛い時、苦しい時にどこからともなく現れて助けてくれる無敵の英雄、そんな存在を女神が遣わしてくれる事を祈って。特別じゃない、自分たちを護るために戦ってくれる英雄の到来を待ち焦がれて。向けられる銃口を前に、そんな叶うはずもない祈りを抱きながら彼らを目をつぶって死を覚悟する。

ある者は残す事になる愛する家族の幸せを祈りながら、ある者はこんなところで終わる自分の運命を呪いながら、皆自分たちが一体何をしたのかとこれを仕組んだ犯人たちに対する怒りを抱きながら。

瞬間、甲高い金属音が鳴り響く。そして予期していた痛みは何時までも全身を巡る事無く、恐る恐る彼らが目を開けるとそこに居たのは双剣を携えた若き「英雄」の姿。その「絶対に護る」と何よりも雄弁に示す覚悟に満ちた背中を目にした瞬間に、魂が叫びだす「ああ、自分たちは助かったのだ」と。

その表情には未だどこか年相応の少年らしい幼さが見え隠れする、単純な年齢で言えば未だ成人にも満たないだろう。しかし、彼らの心には「不安」の文字はなかった。何故ならば、この若者は自分たちなどとは違う存在だから。歴史の中で幾多もいた凡百として埋もれていく自分たちなどと違い、その名を響かせる事となる紛れもない「英雄」だから。そう、彼の名は《リイン・オズボーン》、革新派の、そしてエレボニア帝国の誇る最も新しき「英雄」がありふれた悲劇を覆すために当然のように舞台へと現れた。

だからそう、自分たちは助かるのだ。何故ならば「英雄」がこんなただの機械如きに負けるはずがないのだから。ただ、黙って彼の勇姿を見ているだけでいい。そして終わった後に涙を流しながら感謝の言葉を告げれば良い、英雄の日常を彩る端役として。

それは単なる現実逃避なのかもしれない、何故ならばこれは物語な

どではなく現実なのだから。素晴らしい人物だから遅れを取らない、負けないというわけではない。素晴らしいかと弱ければ、いや相手より強くとも何が原因で命を落とすのかわからないのが戦いなのだから。されど、その場に居る者達にはとてもではないが、目の前の英雄がただの機械に負けるところなど想像が出来なかった。

だってそうだろう？見るだけでわかってしまうのだから、彼がどれだけ本気で自分たちを護ろうとしているのか。こんな物語の主人公のような存在をその目で見たことなど無かったのだから。《帝国時報》で書かれていた彼に対する賞賛の記事は嘘や偽り等ではない、真実なのだ。心の底から理解できてしまったのだから。

そして繰り広げられた光景は彼らの抱いた期待を一切裏切ることがなかった。鎧袖一触、英雄の振るう双剣は鋼鉄の身体をまるでバターでも切り裂くかのように両断し、わずかに二撃であっさりとして順当にその機能を停止させた。

「皆さん、お怪我はありませんか」

そしてその若き救い主は心から慮った表情を浮かべながら、優しく声をかける。

そこには救ってやったのだという驕りを感じや称賛を求める心もない、そんな様子がまた救われた者達の感動を助長する。ああ、本当にこんな人間が居るのだと。見も知らぬ誰かのために真実本気で、躊躇いなど見せる事無く全力で護らんとする「英雄」と呼ばれる存在が。

「ああ、ありがとう。本当になんとお礼を言つて良いのやら……」

「お気になさらず、それよりも此処は危険です。速やかに避難を。我々が出口まで案内いたします」

我々という言葉に辺りを見回すとそこには目の前の「英雄」と同じような制服に身を包んだ若者たちが居た。ただこの少年たちは、なんとというか年相応であった。

おそらく彼らもまた自分たちを助けに来てくれたであろう事を思うと、こういつては失礼なのだろうが、少々頼りなく思えた。

無論、そんな失礼なことは口には出さない、黙って頷き導かれるま

まに脱出し、無事九死に一生を得るのであった。

そして彼らは日常へと戻っていくのだ、世の中には本当に「英雄」と呼ばれる存在が居るのだという事を心に刻んで、時に酒の肴にでもしながら。

・・・

そんな風に無事救出に成功したリインだったが、その表情は若干浮かぬものであった。

緊急事態ゆえ止む得なかった事だし、自らの行いに一切の後悔はない。あそこで動けない軍人に一体何の価値があるのかとそう思っている。

しかし、それはそれとして義姉に釘をさされて起きながら昨日の今日でこれというのは、これから待ち受ける義姉のお説教を思うと若干気が重くなるというものであった。無論、リインとしても反論の余地はある。

今の自分が遅れを取るような敵等そう滅多なことでは居ない、故に自分があの時突入したのは人命を思えば間違いない最善解だった。だが、現実問題自分は未だただの学生に過ぎないのだ。明確な指示もなしに、独断で勝手な行動をとった勇み足と言われればそれに対して返す言葉はない。

（ああ、そういえばケルディックの時も似たような事を言われたな）
つくづく、未だ学生である我が身が恨めしい。既に軍人として働いても何ら問題ない事を自分はクロスベルの一件で示した、そのはずだ。自惚れではなく、今の自分ならば鉄道憲兵隊でも機甲師団でも、将校として任官しても問題なくやってのける自負がある。されどいくら能力がそうであってもその立場と権限を未だ自分は有していない。それが、なんとももどかしくてしょうがなかった。

無論、組織に入れば学生の時にはなかった様々ながらみがあることはリインも熟知している。学生だから軽んじられているというのは逆を言えば、学生だからこそ大目に見てもらっているという事でもあるのだと。されど、リインはそれこそがもどかしくてしょうがない

のだ。過ちを犯したのならば、学生だからと大目に見るのではない一人前の大人として正当な罰を下して欲しいのだ。

「なーにしかめっ面してやがんだよ。そんなにあの美人な義姉ちゃんに怒られるのが嫌なのかよ？」

「別にクレア義姉さんに怒られる事、それ自体が憂鬱なんじゃない。たかだかこの程度の案件で義姉さんを心配させてしまう我が身が不甲斐ないだけだ」

ニヤニヤとからかい混じりに問いかける親友のその言葉にリインは若干苛立ちながらもぶつきらぼうな口調で応える。自分は断じて義姉が怖いわけではないと。

「うーん、その辺りはどっちかというとお前さんよりも向こう側に問題があるんじゃないかと気がするけどなあ。

帝都の一件以降のお前さんと来たらサラとも渡り合える位の実力なわけで、赤い星座なんて連中ともクロスベルじゃどんぱちやり合ってたわけだろ？

正直、そんなお前さんが遅れを取るような怪物が相手だったら、それこそ宰相閣下ご自慢の鉄道憲兵隊だって対処できるかどうか怪しいレベルだろ？」

「それはまあ、確かにそうだな」

こと単純な戦闘力で言えば今の自分は「奥の手」を抜きにしても義姉と五分以上に渡り合えるだろう。

「奥の手」を加味すれば今の自分より明確な格上と言えるのはそれこそ、《獅子心十七勇士》にも列席されている方々位だとそう自負している。

「じゃあよ、つまりお前の義姉ちゃんがお前を心配しているのは実力だとかそういうもんじゃなくてもっと根本的なところだよ。

お前さんが義弟だから心配なんだよ。まだ学生だからとかそういうのは皆お前さんを言いくるめるための方便だろうさ

だから例えばお前が帝国最強と呼ばれるような存在になって、元帥だとかそういう地位になっても変わらずお前の事心配するんじゃないのか？」

告げられた言葉にリインは目を丸くする、リインの中でのクレアは普段はまさしく空の女神の如き深い慈愛を持った優しい淑女でありながら、有事の際には情を切り離し理によって行動できる模範的な軍人であり、自分の目標とすべき憧れの存在という認識だったからだ。故にそんな優秀な姉にしてみれば自分は何んとも危なかつしく映るからだ、そう思っていた。しかし、目の前の悪友はそれを否定する。

鉄道憲兵隊大尉として危なっかしい後進を諫めているのではない、単純に義弟を思う義姉心なのだ。

「なるほど、そうなる」と甘んじて受け入れるしか無さそうだな」

苦笑交じりにリインはそう告げる。理を超えた思いに起因するものならば、それはもう甘んじて受け入れるしか無いと、少し前にそんな思いをぶつけてきた一番大切な少女の事を思い出しながら。

「それにしても領邦軍の連中は遅いですね。昨日アレだけ、あくまで鉄道憲兵隊は他所者でしか無い。この地を真に護れるのは我々だけだ、などと豪語していたにも関わらず」

不機嫌そうなマキアスの何気ないボヤキ、それを聞いた瞬間にリインの頭が高速で回転しだす。

そうだ、領邦軍は何故来ていない。街に到着したばかりの自分たちがサイレンの音に気づいてすぐに駆けつける事が出来たのだ。当然駐屯している領邦軍が気づかないなど有り得ない、あまつさえ鉄道憲兵隊の後手に回るなど。いくら義姉の行動が迅速であり、領邦軍の指揮官が無能だったと仮定するにしても余りに到着が遅すぎる。

まるでこちらのことなど端から眼中になどないかのよう
に――

「お疲れ様でした皆さん。軽傷を負った方は幾人が居ますが、重傷以上の方は皆無。被害の方もなんとか軽微で済みました」

そんなこちらに対する労いの言葉をかけながらこちらへと歩んできたリインが心からの信頼を寄せる女性、それを確認した瞬間にリインは弾かれるように声を挙げていた

「リーヴェルト大尉！領邦軍の到着が余りにも遅すぎます！おそらく

「こちらはただの陽動です！」

突如として叫びだした義弟の様子に最初は面喰らった様子を見せていたクレアだが、その意味するところを瞬時に理解する。

「やられたと、そんな思いと共にすぐさま部下達へと指示を下そうとした瞬間」

「クレア大尉!!」

「ザクセン鉄鉾山の方に動きが!!《帝国解放戦線》なるテロリスト共に占拠されたと!!」

血相を変えて現れた隊員たちが齎した凶報、それはこちら側が完全に後手を踏んでしまった事を示すものであった……

鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルーレ④

人形兵器による工場の襲撃事件という陽動にまんまと引つかかってしまった《鉄道憲兵隊》は完全に後手へと回った。クレア達がそちらの事件へと対処している間に、領邦軍がテロリストが占拠した《ザクセン鉱山》を完全に封鎖してしまったのだ。

無論、軍人の使命が自国民の生命と財産の保護にある以上、この対処は止む得ざるものであっただろう。実際、今回の一件で工場に居たもの達は対処してくれた《鉄道憲兵隊》への信頼を深め、現れもしなかった《領邦軍》に少なからず不審感を抱いたという点では決して無意味でも無駄だったわけでもない。

しかし、現実として《ザクセン鉱山》の占拠という帝国の屋台骨を揺るがす事件に対して後手へと回ってしまった事は事実であった。封鎖を行った領邦軍は人質に取られた者達がいる上に、下手に刺激をすれば鉱山そのものを吹き飛ばされかねないと入り口を封鎖するだけして鉄道憲兵隊の介入を頑なに拒んでいた。

もってもらしい理由をつけているが、昨日市民に犠牲が出る可能性もありながら、街中で装甲車を持ち出した強硬姿勢を思えば、上からの意向が働いていることは明白であった。このどさくさに紛れて、鉱石横領の証拠を処分するのが目的なのだろう。そういう意味では、鉱山それ自体を爆破される危険性は薄いと言えるかもしれない、本当に鉱山が爆破されてしまえば帝国経済への悪影響は甚大なものとなり、それは革新派だけの問題では終わらないのだから。――最も、中で人質にされている者達の安否などという些事についてまでこの事件の絵面を引いた者達が考慮しているかは怪しいところではあるが。

そうしてザクセン鉄鉱山に赴き、そんな状況を確認してルーレへと帰還したライン達に実家の不正を嗅ぎつけ、導力バイクにて駆けつけたアンゼリカとジョルジュが合流。人質にされている鉱員達はラインフォルトの社員でもあると意気込むアリサと領民を護るのが貴族の務めと常に無い真面目な様子なアンゼリカの二人は、身内がそれを

怠っているというのならば代わりにそれをやるのが役目だと、市内に設置されている非常時用の通路を利用しての突入を提案。二人の提案を受けたリインは情報を下に、突入及び人質確保の作戦を立案した上で専用の通信機を利用して義姉と連絡を取るのであった……

「というわけで、これより自分たちは《ザクセン鉄鉱山》へと突入して人質の救出を行います」

「リインさん、貴方は私の昨晚の話を聞いていましたか？」

あ、この声はかなり怒っているなとリインはその優しい声色を聞いた瞬間に思った。

ちなみに通信機の向こうのクレアはとても綺麗な微笑を讃えている。ただし、傍で見ている隊員たちが思わず声をかける事を躊躇うような威圧感を身に纏っているおまけ付きだが。

「もちろん拝聴しております、大尉の貴重な金言、一言一句漏らすことなくこの胸に刻んでおります」

「では一体どういふつもりで、そんな提案をしているのですか？『危機』の輪郭を見極めて、出来るだけ近寄らないようにするべきだと、そう伝えたはずですが？」

「ですが、それは背中に護るべき民が居ないときの話です。今、こうして悪逆なるテロリスト共に生命を脅かされているエレボニアの民が居る。ならば、例え危険だろうとその身を惜しんではいけないのが軍人のはずです。違いますか、リーヴェルト大尉」

「……貴方はまだ軍人ではありません。あくまで士官学院生です、故にそれは我々が果たすべき役割です」

真剣そのものの口調で伝えられた義弟、否後進の言葉にクレアも真剣な様子で応える。しかし、事此処に至って、リインとて引き下がる気はなかった。

「ですがリーヴェルト大尉、これは武力で何とかなる問題ではないでしょうか？」

「……………」

「自分ならば解放戦線の連中に遭遇したとしても遅れは取りません。

そしてテロリストにしても領邦軍にしても意識がそちらに向いて

いる以上、我々はこの上なく虚をつけるはずです」

何故ならばリイン達は未だ学生に過ぎないから。宰相直属の最精鋭部隊たる《鉄道憲兵隊》に対しては意識を割いていたとしても、いやそちらに意識を割いている以上実習に来ている士官学院生等という存在への注意はどうしても疎かになるはずだと主張するリインの提案にクレアは理があることを認めた。

クレアとてむぎむぎ手を拱いているわけではない、領邦軍の封鎖を突破すべき手を色々と打っているわけなのだが、そうして解放戦線と交戦状態に陥った時に事前に人質が解放されているに越したことはないし、事前にリイン達が潜入を果たしていれば色々とやりやすくなるだろう。

「加えて言うなら、我々はオルヴァルト殿下が理事長を務めていらつしやるツールズ士官学院の現役生です。

社員が拘束されているイリーナ会長の了承も頂ければ、領邦軍とてあまり強くは出れない、違いますか？」

《ザクセン鉄鉱山》はその重要性からこの地を治めるログナー侯爵家ではなく、皇室直轄となっている。故に皇族が理事長を務めている大帝縁の名門たるツールズ所属のリイン達が、理事を務めるイリーナ氏より自社の社員の救出を依頼されたという体裁を取れば、領邦軍も余り強硬に出る事は出来ないだろう。何故ならば、その件で不法侵入の罪にでもリインたちを問おうものなら、それはつまり領邦軍がザクセン鉄鉱山の警備の責任を担っていたと主張するようなもの、なし崩しの的にテロリストに占拠された責任も取らなければならなくなるのだから。

無論肝心要の皇族の方々に咎められれば一巻の終わりだが、VII組の活動に好意的なオリヴァルト皇子の人柄等からその心配は薄いだらう。好意に甘えるような形で申し訳ないが、事態が事態だ。使えそうな権威には素直に頼らせてもらうでしょう。

「……わかりました。ただし、絶対に無理だけはしないこと。人質と、そして自分たちの安全を最優先に動く事。良いですね？」

公人と私人の間での葛藤の末、クレアは深い溜め息を尽きながら

リインの作戦を渋々許可する。

リインの提案は公人としてみればクレア達にとってメリットしかないものだった以上、反対する理由は基より自分の個人的感情以外に存在しない、故にこそその判断だった。

「うん、肝に銘じておくよ、クレア義姉さん」

その言葉を最後にリインは通信を切り、己が親友と後輩たちの方へと視線を寄越して

「というわけで、後はイリーナ会長を何とか説得するだけだな」

今回の作戦の決行、それにはRFグループ会長たるイリーナ・ラインフォルト氏を口説き落とす事が前提となっている。

勝算はある。イリーナ氏の人格は娘であるアリサからも聞いたことである程度は把握している。

イリーナ氏は徹底したりアリストだ。情を介在せずに実力と実績を重んじ、そして企業のトップとしてRF社のメリットを第一に行動している。

故にこそ提示すべきは、作戦の勝算と作戦が成功した結果のメリットの提示。これを行えばいい。

要は学院生である自分たちにザクセン鉄鉱山に潜入して、鉱員を救出するという依頼をしたというリスクを上回るメリットを示せば良いのだ。必要なのは帝国軍人としての誇りや人としての道義といった情に訴えかける事ではない。どこまでも理に基づく具体案だ。

おそらくリインがただの士官学院生であればイリーナ氏を説得する事は困難を極めただろう。だが今の自分にはあの赤い星座とやり合ったという実績がある。この実績を基にこちら側に犠牲者が出る可能性は極めて少ないこと、そしてその上でこの非常時にRF社の会長が直々に社員達の安全を確保すべく動いたという事実が与える影響、それらを説けば十分に了承を得る自信がリインにはあった。

「……先輩、母様の説得なんだけど私に任せてくれないかしら」

そんなリインの思考を遮るように班員であるアリサが静かな決意をその瞳に湛えながらそんな宣言を行っていた。

「勝算があるのか？」

「ううん無いわ、そんなもの。でも娘としてラインフォルトを継ぐ者として、どうしても伝えたい想いがあるの。だから、お願い」

「……わかった。君に任せよう」

もしも上手くいかなかったときは改めて自分も説得すれば良いな
どと思いつながらアリサのその意気を買ひ、一行はRF社の会長室へと
赴くのであった……

……

「おおよそ幼稚で、勢いだけの発言だけど……まあ今の貴方が紡げる言葉としては上出来でしょう」

アリサの言葉、それを受けてイリーナ氏はそんな事を言いながらほんのかすかだが微笑を讃える。

そこにはRFグループ会長としてではない、確かな母としての愛情が見えるものであった。

しかし、そこでイリーナ氏はどこか見定めるような顔をして

「それで意気込みはわかったけど、具体的にはどうするつもりなのかしら？」

これは訓練ではなく相手は手段を選ばないテロリスト、そんなところに勝算もなしに勢いだけで赴こうとしているというのなら親として、学園の理事としてあなた達を止めざるを得ないのだけど」

さあ、自分を納得させるだけの根拠を示して見せろというそのイリーナ氏の問いかけにアリサは不敵に笑って

「もちろん、作戦ならちゃんと用意しているわ。リン先輩がね！」

「こちらが今回の作戦案になりますので目を通して頂ければと思います」

「……具体的な作戦行動に関してなんては流石に門外漢だわ。シャロン、目を通して頂戴」

「はい、かしこまりました」

いや、メイドもこの手の分野に関しては専門外なのでは？という当然過ぎる疑念が一行の頭に過るがそれを封殺する。

目の前のメイドに関して言えばメイドと言う名の護衛も秘書もメイドも兼ねたイリーナ氏の万能の補佐役とでも認識したほうが良い

だろう。

「……流石はリイン様、ほとんど文句のつけようがないかと」

シャロン・クルーガーはそうリインの作戦案を評する。リインにしてみれば義姉であるクレアを説き伏せる事が出来た時点で作戦案にそれ相応の自信を抱いていたので、当然のようにその賛辞を受け入れる。

「ただ一点、末端の兵士たちはともかく解放戦線の幹部達、こちらの相手に些かの不安がありますね。」

何しろサラ様やナイトハルト様ともやり合えた程の使い手、おそらく「達人」の域に達している使い手でしょうから」

「どの指摘だけど、その点についてはどう考えているのかしら？」

門外漢と言えどイリーナも「達人」と呼ばれる者達の実力については知識として把握している。

国家間の戦争レベルになればともかく、この手の小規模な戦闘において彼らの存在感は絶大なものとなる。何せ他ならぬ、今傍らに控えているシャロンもまたその域にある人物なのだから。

「その点に関しては自分を信じて頂きたいですね。」

《V》と《S》、解放戦線の幹部たちについては自分も教官方や後輩たちから聞き及んでいます。

たかがテロリストと、そう侮れる相手ではない事もまた十分承知しています」

諸々の事情が重なった結果とは言えガレリア要塞の鉄壁の警備を掻い潜り、列車砲奪取まで行き、ナイトハルト少佐とサラ教官、この兩名でも仕留めきれなかった二人をリインは決して甘く見てはいない。

「ですが、その上で言いましょう。それでも《赤い星座》の大隊長、《血染めのシャーリイ》程ではないと。故に自分が遅れを取る道理は存在しません」

言葉に込められたのは確かな自負。

敵を侮っているわけでも、自分の力を過信しているわけでもない。

どこまでも冷静にプロフェツショナルとしての判断でリインは

語っているのだ。自分は決して負けないと。

「……わかりました。その言葉を信じましょう、貴方にはそれを信じさせるだけの確たる実績が存在するのだから」

赤い星座の雷名はイリーナとして当然聞き及んでいる、そしてクロスベルにてそれを目の前の少年が退けたという事も。だからこそイリーナ・ラインフォルトは目の前の少年の語る言葉を若者の血気盛んな意気込みを語ったものとは捉えない、確かな実力を有するプロの言葉として耳を傾けるのだ。

「それにしても、結局意気込みを語っただけで具体的な部分は先輩任せとはね。本当に正しい道とやらを示せるものなのかしら？」

「何よ、母さまだつて内容についての確認はシャロンに任せているじゃない。なんでも出来る万能の超人なんて居ない以上、信頼できる専門家とのコネクションを有している、そういう人脈だつて歴とした力の一つでしょ」

ほんの少しだけ笑いながら告げるその母親の言葉に娘もまた堂々と言い返す。これもまた私が士官学院で手に入れたものなのだと胸を張って。

かくしてここにリイン達は《ザクセン鉱山》への潜入を果たすのであった……

鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルーレ⑤

作戦は順調に進んでいた。ザクセン鉄鉱山への侵入を果たしたリイン達は、途中で囚われていた人質の半数の解放に成功。当初の予定通りにマキアスとエリオットの両名へと人質の保護を任せて残り半分も解放するべく、奥へと進んでいた。

マキアスとエリオットが選ばれた理由は至って簡単である、二人がリインと同じく革新派の要人を父に持つ者だったからだ。戦力的にリインはどうしても外す事は出来ない、しかしエリオットとマキアスに関して言えばアリサ共々、今回のメンバーの中では戦力的には下位に位置する。鉄血宰相の息子に加えて、帝都知事と赤毛のクレイグの息子までもが居ては流石に革新派色が強くなり、学院生としてイリーナ理事から人質の救出を依頼されたからと強弁するのが難しくなる、それゆえの判断であった。

そして突入した中央コントロール室で、リイン達は今回の事件の実行犯達と対峙する。

そこにいたのは帝国解放戦線きつての武闘派足る幹部《V》とその部下、もとい同志達。

怒り心頭な様子でアリサは告げる、此処に何かあつたら帝国そのものが危ないのだと。

しかし、そんな彼女の常識的な意見に頷きながらVは応える、これはあのくそつたれな鉄血野郎の首を取るために必要なのだと。憎悪をむき出しにして。

そんな憎悪を前にしてアリサは問いかける、何故そこまでオズボーン宰相を憎むのか、と。心優しい彼女にはわからなかった、誰かを殺したい程憎んだ経験など彼女にはなかったから。

まして、そのために無関係な人々を巻き添えにしてまでそれをやろうとする気持ちなど彼女には到底理解できないものだったから。

「貴様らにはわかるまい……………」

「あの男の『改革』の下、どれだけの人間が『故郷』を失い寄る辺なき身となったかを……………」

そして解放戦線の面々は怒りを顔に告げる、恵まれたお前たちに自分たちの気持ちはわからないと。

そんな解放戦線の八つ当たりも良い言葉にアリサはひるむ、何故ならば彼女は故郷を失ったことなどないから。

父を失い、母は仕事に取り憑かれて、寂しい思いをした。それでも恵まれているか否かで言えば、自分は恵まれた立場にいる自覚があったから。

そんな自身の不幸を盾にとったような発言にアリサは反論を出来ない。だって、彼女には目前の相手の言った通りに彼らの気持ちはわからないから。

「恵まれたお前たちにはわからない」等という事実上の言論封鎖を行われてしまえば、紡げる言葉等ないのだ。

「……だからこそ、反論の言葉を紡いだのは同じく宰相に故郷を奪われ、だが宰相の息子と『親友』になったという数奇な運命を持った男だった。

「で、あんた達が宰相の野郎に恨みを抱いているのはわかったが、それと今回、巻き込まれた鉦員のおっさん達と一体どういう関係があるってんだ？」

「何……」

「あんた達は言ったよな、宰相の奴をぶつ殺す『必要な作戦』だって。つまりあんたらは此処の連中や今までの行いを『必要な犠牲』と正当化したわけだ。

「……なあ、国のための『やむ得ない犠牲』としてあんた達から故郷を奪った鉄血宰相殿とあんた達の行いに何の違いがあるってんだ？」

むしろ曲がりなりにも国のためという大義のある鉄血の方があんた達よりもマシなんじゃねえのかと告げるクロウの言葉に解放戦線の面々は怒りを露にして

「黙れ！ 貴様のような恵まれた者に我らの気持ちは……」

「俺も故郷を鉄血の野郎に奪われた。あいつの推し進めた鉄道網の拡充計画のためにな。」

それで先祖代々の土地を失ったショックで祖父さんはぽっくり逝っちまって、生きがいは失った親父は飲んだくれて、お袋は逃げた。俺はそんな親父から逃げるように学院に入学したってわけだ」
「ならば何故我々の邪魔をする！ 貴様とてあの男が憎いはずだ！ それとも、そこにいるやつの子に絆されでもしたか!!!」

その言葉にクロウは少しだけ考え込むような素振りをして
「ま、確かにあの野郎は俺だって憎いさ。それが国のためだろうが何だろうが、あの野郎は俺から故郷と家族を奪った。到底納得なんて出来やしねえさ」

自分は鉄血宰相の事を憎んでいるのだとそう宣言する。決して割り切れずにくすぶり続けている怒りの焰が自分の中にはあるのだと。

しかし、そこでふいにクロウは口元を綻ばせて
「だけど、どうやら俺はあんた達の言うようにどうにも絆されちゃったみたいだな。

その真面目大王と来たら、本気で国のため、見も知らぬ民の為にやらに自分はこの命を捧げるとかほざくんだぜ？

だったら、俺も何時までもうだうだといつの親が仇だから、こいつも俺の敵なんだと憎しみを引きずるなんてダサイ真似は出来ねえだろ、親友としてよ」

ウインクをしながら告げる、奪われたからその恨みを晴らす、その過程で誰が巻き込まれようが知ったことかと他者を思う気持ちなどなく、ただ自分の怒りをぶつけるためだけに行動する、そんな行為は間違いなく正しくない行いなのだ。

「……あんた達の気持ちはわかるつもりだ、けどなあんだ達が、いや俺達が不幸な目に合ったことは決して無関係の他者を巻き込む免罪符にはならねえんだよ。

——少なくとも、帝都での一件に、ガレリア要塞での一件、そして今回の一件。これだけの事をしでかして、無関係な罪もない奴らが大勢巻き込んだ、中には死んだ奴も居る。

その時点でアンタたちは自分から鉄血の野郎のやり口を非難する資格を手放した、何時までも自分たちは被害者ですみたいな面で居る

んじやねえよ。今のアンタ達は歴とした加害者だ、自覚しろ」

お前たちはもうすでに奪われた側から奪う側に回ったのだと、憎き仇敵と同じ穴の貉なのだとかクロウ・アームブラストは容赦なくテロリスト達の非を指摘する。

「……君たちには君たちの事情があるのだろう。だが冷たい言い方になるが、それはあくまで君たちの事情でしか無い。

少なくとも、今この場で巻き込まれた人達は君たちが憎む宰相閣下と縁もゆかりも無い者達だ。故に、私は私の事情を押し貫かせて貰う。貴族は領民を護るべし、そんな幼い頃に教わった義務を果たすためにね」

そしてそんなクロウの言葉にアンゼリカもまた続く。そちらに譲れぬ事情があるようにこちらにも譲れぬ事情があるのだと。そこに、普段のふざけた様子は欠片もない、今の彼女は紛れもない、真の貴族であった。

「く、何を偉そうに！そもそも今回の一件、ログナー家が清廉潔白だとしても思っているのか!？」

「わかっているさ、親父殿が今回の一件に噛んでいる事はね。だからこそ身内の恥をすすぐべくこうして行動しているのさ」

一体誰が領邦軍に封鎖の指示を出していると思っているのかというテロリスト達の言葉にもアンゼリカは揺るがずに応える。そんなことは百も承知だと。痛いところをつかれた故の苦し紛れの負け惜しみでは、彼女の高貴なる決意を崩すことは出来なかった。

「……もう良い、これ以上の問答は無意味だ。どの道、目の前のテロリスト共に“死”以外の道など有りはしないのだから」

テロリストには断固たる措置を持って臨む、これは国際的な常識だ。そして《帝国解放戦線》に関しては既に帝国政府より直々に指名手配されている、“生死を問わず”という形で。その意味するところは、可能であれば情報を搾り取るために生け捕りにせよ、だが難しいようならば殺しても構わないである。

帝国法に基づいても何らかの司法取引でも行われない限り、まず死刑が下されることは確実であった。

「誤った選択は、正しい懲罰によってこそ矯正されるべきだ。こいつらに対して必要なのは交渉でも説得でもない」

何故ならば目の前の連中にはそもそも自らの行いを省みる気など無いのだから。「お前たちにはわかるまい」とこいつらは語った。ああ、全く以てその通りだ。自分には到底理解できない。

父の行いを非難しておきながら、平然と無関係な者達を巻き込める恥知らず共の心などわかりたくもなかった。少なくとも、父の改革には確かな「大義」が存在した。ギリアス・オズボーンがエレボニアの大多数の者に益を齎した事は決して否定できないはずだ。

だが、こいつらの行いはなんだ？こいつらの行いで一体誰が幸福になったというのか？

選んだのだろうか？他ならない、自分の意志で。他人が泣くことになろうと復讐という自らの我儘を押し通す事を。

ならば、既に目の前の連中に父を非難する資格などない。

「語りたい事があれば裁判の場で語ることだ。そこにどんな事情があるろうと、貴様らがこの国に仇なすというのなら俺はそれを討ち果たす」

そこには慈悲など欠片もない。基より軍人とは祖国のためならば尊敬に値する敵は愚かときには友誼を交わした友でさえも討たねばならない存在なのだから。

故に、これほどの事を仕出かしたテロリスト共にかける情けなど彼の中には全く存在しなかった。

そしてそんな親友の語る無慈悲な言葉にクロウ・アームブラストとアンゼリカ・ログナーもため息をつきながら、否定しない。何故ならば彼の対応は正しいから。テロリストに対しては断固たる処置を取る、それは無慈悲に思えるかもしれないが、秩序を維持するためには必要な行為なのだから。

フィー・クラウゼルはそもそも気にも留めない。何故ならば獵兵だった彼女にとって「戦い」とはそういうものだから。「金」、「家族」、「誇り」、それぞれ掲げる物に違いはあるだろう、だが譲れない何かを皆が持っている。そしてそれを賭けてぶつかり合うのが戦

場だ。如何なる事情がそこに在ろうと、関係ない。何故ならば敵の事情等無視して、こちらの事情を押し通すために行うのが戦いなのだから。

ただ一人、アリサ・ラインフォルトはそんな先輩の様子に少しだけ恐れを感じていた。何故ならば彼女は優しい少女だから、「敵」だからという理由でそれらを切り捨てる事ができないから。マキアスとエリオット同様、彼女もまた「戦士」には向いていない人種であった。

「……は、本当につくづくあの野郎に瓜二つだな」

鋼の戦意と共に双剣を構えた仇敵の姿を見据えて、《V》は吐き捨てるように口にする。

ああ、そうだあの男もそうだった。「敵」に対してはどこまでも無慈悲に冷徹に自分の部下たちの命を刈り取っていった。

仕掛けたのがこちらでいる以上、非は自分たちにある。10人に聞けば10人がお前達が悪い、それはただの逆恨みだとそう告げるだろう。

それがどうした。そんなことは百も承知だ、その上で自分はあの野郎に一泡吹かせないと死んでも死にきれないのだ。

基より清廉潔白な聖人君子とは程遠い身。今更あの世で女神に裁かれる罪状が一つや二つ増える程度知ったことではないとどこまでも身勝手な逆恨みを《V》は滾らせる。

「ああ、そうだ。てめえの言う通りだ。どのみちもう俺らは言葉じゃ止まれねえ！」

あの野郎を飲み込むでつかい焔になるまでだ！そしてそれに立ちはだかるっていうのなら、まずはてめえらを先に飲み込むまでだ!!!」「そんな未来は有り得ない。何故ならば、貴様はこの場で俺に殺されるのだからな」

憎悪の咆哮に応じるのは絶対零度の如き冷徹な声。

そんな宣戦布告と共に、両者は激突を開始した。

鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルーレ⑥

「オラオラオラー……どうしたーそんなもんか！」

絶え間なく降り注がれる弾丸の嵐、それをリインは防ぎ続ける。

一見すると防戦一方に見えるこの状況だったが、リインの表情に焦りは一切ない。

素人目にはかつてクレアと戦った時のように圧倒されているかのようにも見えるかもしれないが実情は異なる、何故ならば現状ヴァルカンの嵐の如き攻撃は威勢のいい言葉とは裏腹に一度としてリインに決定打を与えていない。

嵐の如きガトリングガンの弾幕をリインと云えど、流石に全てを防ぐ事は出来ない。されど敵の闘気が込められ、当たれば痛打となるような攻撃をリインは双剣で確実に弾き、それを超えてリインの身体に命中するのは当たったとしてもそれは、闘気を纏い、鋼鉄と化したリインの肉体に致命打を与えるには程遠い少し痛い程度にしかならないものだ。

だからこそヴァルカンは焦りの色を見せ始める。

彼とて人格はこの際置いておくにしても、実力に関して言えば紛れもない“達人”の領域にあるもので、猟兵として幾多の戦場を潜り抜けた経験とである。故にこそ自分と目の前の小僧の実力が拮抗している事を悟らざるを得なかった。

彼は誓って加減などしていない、当然だ。相手は憎き仇の息子なのだから、手加減する道理など彼には存在しない。

それにも関わらず攻め切れない、威勢の良い言葉から血気盛んに襲いかかってくるそばかりに思っていた敵手はイヤになる位冷徹だった。

戦いは解放戦線の側に不利だった。リインとVの戦いは拮抗している、しかしそれ以外の戦いの天秤は完全にリイン達の方に傾いていた。

精鋭部隊もかくやとばかりに見事な連携を見せつける四人に完全に解放戦線の他のメンバーは押されていた。

さらに言えば、領邦軍の封鎖も一体どこまで保つのかわからないこの状況、時間が不利に働くのは解放戦線の側なのだ。

だからこそ、リイン・オズボーンは焦る事なく、ただ《V》を釘付けにする事に専念しているのだ。

(クソツタレがあー！)

そしてそれが《V》には腹立たしい、まるで路傍の石ころでも見るかのように冷徹にこちらを睥睨するその瞳に憎い仇敵を重ねずにはいられずに。

《C》には今回の作戦でくれぐれも短気を起こすなと言われている、あくまで今回の作戦はスポンサーであるカイエン公への義理立てという側面が強く、最終目的を達成するための陽動だと。

《C》は替え玉を用意することでアリバイを作り、敵の目を誤魔化す。そして自分たちはこの場で壊滅させた体を装う、そういう作戦だ。

故にこそこのまましばらくやり合って、ある程度したら下で待機している《S》と《C》の替え玉と合流する、そうすればいい。だが、しかし

(気に入らねえ！)

黙って呑み込まれるとでも言わんばかりのその在り方、瞳、冷徹さ、何もかもがヴァルカンから全てを奪った男を連想して止まない。この気に入らない野郎をこの場でぶちのめしたい、こいつをこの場で仕留められれば、あの鉄血野郎にも一泡吹かせる事が出来るはずだとそんな欲がヴァルカンの中に芽生え始める。

そうだ、いくら目の前のこいつが若くして達人の領域に至った天才であろうと、自分たちの中には未だ埋めがたい経験の差があるのだから。付け込む隙はあるはずだと、次第に《V》の思考は当初の目的の達成から憎い仇の息子を殺すというものへとシフトしていく。

そしてVは一計を案じる、戦いの年季の違いを教えてやろうとでも言わんばかりに。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

瞬間、Vは己が闘気を収束させだす。このままではジリ貧だから、

如何にも焦って博打に出たのだとそう見せかける。

そしてVの狙い通りにリインはまんまと引つかかってこちらへの突撃を敢行しだす。

それを確認すると同時にVは見せかけの闘気の収束を辞めて、こちらへ向かって来るリインを蜂の巣にしようとするその照準を合わせる。

(所詮は若造、戦いの年季が違うんだよ！)

Vの判断は真つ当なものだったかもしれない。

現実としてリイン・オズボーンの戦いの経験値は未だ歴戦と呼ぶには程遠い。

だが、彼はある事を失念していた。世の中には時として常人の発想のはるか上を行く「英雄」がいるのだと。

かつてそんな存在に部下を皆殺しにされた身として目の前の少年の姿がそんな「英雄」にそっくりだと自ら評した事をもっと重く受け止めるべきだったのだ。

「神気合一」

宣誓の瞬間、リインの身体が変貌する。

それは歴戦たるVをして経験したことがない光景。

ウオークライに近いのだろう、しかしそれとは明らかに別次元の変貌だった。

別人の如く著しく向上した身体能力、突撃の速度は桁違いになる。しかし、それを相手にしてもVは内心の動揺を抑えて迎撃せんとする。

しかし、リインは自らの身体に飛来する弾丸を一切斟酌する事なく、そのまま突撃を敢行する。

Vの闘気を纏わせた渾身の弾丸のいくつかはリインの纏う白焰を突破し、その肉体を抉るが、されどリインは一切止まらない。

皮を裂き、肉体を抉ることは出来ても、骨は断てない以上致命打には程遠い。ならば痛みなど気合で我慢すれば良いだけだと、その速度を一切緩める事なく。

だが、それでもVとて歴戦の猟兵、そんな接近する敵手へと獲物たるガトリングガンから近接用のナイフへと武装を持ち替えて、迎撃せ

するかもしれない。

最も、その必要もすぐに消えるかもしれないが。

飛来してきた法剣の一撃、それをリインは双剣を使い何なく弾く。

そして暗闇から姿を現したのは帝国解放戦線の幹部《C》と《S》の両名であった。

「どうやら、何時でも脱出できるように下の方に停めている飛空艇でそれぞれ待機していたようだが、判断を誤ったな。お前達のお仲間はこの通りすでに虫の息だ」

「……そのような、認めなければならぬだろう。貴様を侮つていた事を」

「……まさか、Vが此処まであっさりやられるなんてね」

挑発的な笑みを浮かべるリインを《C》と《S》は憎々しげに見据える。

猟兵の団長を務めていたという経歴を持つ《V》は解放戦線きつての武闘派であり、その実力は折り紙つきだった。先月正規軍きつての俊英たる《剛撃》のナイトハルトと五分に戦ったという事実からも、まづ遅れを取らないだろうとそう踏んだのだ。

いくらあの男の息子が強いと言っても、それでもナイトハルト以上でなければ《V》が遅れを取ることはまず有り得ないとそう踏んで。

しかし、現実には彼らの想像の上を言った。単純な実力だけによるものかはわからない、されどリイン・オズボーンはいとも容易く解放戦線きつての実力者たるVを破ったのだ。

そしてしばしの間両者はにらみ合う。

解放戦線にしてみれば何としても倒れている同志たちを回収したい。

しかし、リイン達は当然それを許すつもりはない。故にこそその均衡状態であった。

そして睨み合っている最中でリインは確信する、目の前に居る《C》は紛れもない帝都の地下で邂逅したときと同じ人物だと。

リインが確信した理由、それは《C》の発する闘気だ。皆伝に至った事でより研ぎ澄まされたリインの感知能力が告げているのだ、これ

は紛れもないあの時と同じ人物なのだと。

故にこそ、此処で逃す事は出来ない。Gはすでに亡く、Vは確保した。残る幹部は眼前の二人のみ。

ここでこの二人を捕らえるか、仕留めるか出来れば解放戦線は事実上壊滅するのだ。

張り詰めた空気の中、今まさに激突せんとしたその刹那

「ええい、待てと言っているに聞けんのか！」

そんな怒声を挙げる領邦軍と意に介さない鉄道憲兵隊がその場へと乱入してくる。

誰もがほんの一瞬、そちらに意識をやったその刹那リインは弾かれたように動き出した。

気絶したVの巨体、それを軽々持ち上げたかと思うと、S目掛けて投げつけたのだ。

大事な仲間なんだろう？ほら、返してやるぞとも言わんばかりに。

「な!？」

飛来してきた同志の姿、それに完全に意識を奪われたSは反射的にその身体を受け止める。

半ば反射的な行動だったが、Sの背後が崖となっている以上それ以外に選択肢などあるはずもない。

Sが受け止めなければ、Vの身体は谷底へと転落していき女神の下へと召されるのは確実なのだから。

「煌赫墜翔、発動！」
ニュークリアスラスト プーレスト

そして爆発加速によって距離を詰めたリインは、意識と視界を完全に奪われたSの肉体をその抱きとめた者毎両断した。

状況を把握することもなく逝ったのだろう、断末魔さえも挙げる事ができずに憎き仇の最期を見届ける事もできずに鉄血宰相の領土拡充政策によって故郷と家族を失った被害者にして加害者たる女は、憎き仇の息子にその命を奪われて短い生涯を終るのであった。

「ク……」

形勢の不利を悟った《C》は誰もがリインの行ったその冷酷な行動

に、呆気に取られている間に背後の崖へと姿を消す。同志を失いながらもその仇を取ること無く、撤退せざるを得ない己が身の不甲斐なさに極大の憤怒を抱きながらも。

「全員、射撃開始―」

「二「イエス、マム!!!」」

轟音と共に姿を現した飛空艇、それを撃墜するべく鉄道憲兵隊は動く。

当然だ肝心要のリーダーと最新鋭の軍用飛空艇という足を失われれば解放戦線はまた動き出すに決まっているのだから。

愛する義弟の余りの変貌に忘我に陥っていたのも一瞬、クレア・リーヴェルトはすぐさま立ち直り、部下へと指示を下す。

「か、勝手な事をするな！お前たち、何としても止めさせるのだ!!」

「二「イエス、サー」」

だが、なんとそれをあろうことか領邦軍があからさまに邪魔をする。

度重なる妨害に加えて、このあからさまな行為に冷静なクレアが流石に怒りを露にすると

「覚えているが良い！《鉄血の継嗣リイン・オズボーン》!!」

飛空艇のスピーカーより響き渡るのは憎悪に塗れた呪詛の言葉。

「散っていた同志の無念、必ずや私が晴らしてみせる！

―――全ての準備を整った、次こそが貴様達の主人の最期だ!!」

そんな捨て台詞を最期に飛空艇は飛び去っていくこうとする。

それにクレアは歯噛みし、領邦軍は安堵する。

帝国解放戦線のリーダーたる《C》を取り逃がすというその事実に。
だが

「いいや、次などない。貴様は此処で終わりだよ、《C》」

放たれるのは鋼の宣誓。お前はここで俺が殺すという死神の死刑宣告だ。

そしてその宣言と共に、リインは鉄道憲兵隊と領邦軍が小競り合いを行っていた間に己の身に纏う焰を全て収束させた双剣を構えて――

「ブレイズ・ストライク！」
焔を収束させた閃光が《C》の乗った飛空艇を飲み込んだ。

鉄血の子と《黒銀の鋼都》ルーレ⑦

テロリストの撃墜、それを確認したリインは元の姿へと戻る。

そして強力な力の代償として激痛がその身に襲いかかるが、それをなんとか堪える。

初めて発動した時に比べればそれは根性で耐えられる程度のものでなから問題はない。

少し休めば問題なく回復することは前回《血染めのシャーリイ》との戦いで使ったときからわかっている。

（やはり、重要なのは心を強く律する事、そして“敵”という指向性を与えてやることだな）

何度か使用する事でコツを掴んできていたリインだったが、今回はついに偶発的な物ではなく意図して“力”を使う事に成功した。荒れ狂うような殺意の奔流、それはともすれば自らさえも焼きかねない焰だったがリインは見事に制御してのけた。

重要なのはその殺意に呑まれない事、そして殺意に指向性を与えてやることだとリインは確信する。

すなわち殺すべき敵を明確にした上で、殺す事そのものが目的にならぬように自分が何のために剣を振るうか、それを強く思い浮かべる事。護るために殺すという矛盾じみた行為をやつてのける鋼の意志こそがこの力を制御するのには必要なのだ。

例えばこの力を使いながらも敵を殺さないように留める等というのはおそらく至難を極めるだろう。

心の内より溢れ出す殺意、向ける相手を用意せずに無理に押さえつけようとすれば、待っているのは破滅だ。

際限なく溢れ出す殺意を精神力によつて無理に蓋をしても、持ち堪えられるのはわずかな間、やがてはその蓋を吹き飛ばして溢れるか、さもなければ自分という器それ自体が壊れるかだろう。

故に大事なのは誰にその殺意を向けるかを明確にすることなのだ。そうしてやれば溢れ出る殺意は全てその敵手へと向ける事ができる、自らを見失う事も、見境なく暴れる獣になる事もなく。

(師範の仰っていた通り稽古の時に使うのは厳禁だな、これは)

お前は私を殺す気か？と師に冗談めかしながらも言われた言葉を思い出す。

一本とは到底呼べない程度のかすり傷を師に与えて、目覚めた後に懇々と説教を喰らった事を思い出す。

それは断じて稽古で使って良いような能力ではないと。

いや、でも貴方にはそうでもしないと届かなかったではないかと軽くあしらわれたリインとしては反論したかったものだが……なるほど、こうして使いこなせるようになった今では実感する。これは殺し合いの時以外には使ってはいけない「力」だと。

この力は強力だ、自分の意志に呼応するかのように力が溢れ出てくる。自らの限界を突破してどこまでもどこまでも、高みへと到れる心地よさ、それは何者にも代えがたい快感だ。

だからこそ自らを戒めなければならない。強さの誇示にかまけ、ただ磐石を求めようになれば、それは信念に惰弱を招く。高みに挑む気概を忘れないためにも、この力を振るう時をしかと見極めなければならないだろう。

解放戦線の幹部を壊滅させたという功績を打ち立てながらもリインの心に一切の緩みはない。さらに次の戦いを見据えて飽くなき向上心を燃やし続ける。

「き、貴様どういうつもりだ！」

余りにもあつけない解放戦線の最期、そのショックから立ち直った領邦軍はリインを取り囲み詰め寄りだす。

「いくらテロリスト相手と言えど、問答無用で撃墜するなど！」

それだけではない、何故このような場に居る！場合によってはただでは済まさんぞ」

その声は上ずり震えていた。取り囲む兵士達にも怯えの色が見える。

そう、領邦軍はリイン・オズボーンを恐れているのだ。

もしも、激昂して目の前の敵が先程テロリスト相手にやったように自分たちに襲いかかってきたら？彼らではとてもではないが太刀打

ちできない。呆気なくその死骸を晒すことになるだろう。

故にこそ領邦軍は恐怖している、それは平然と冷酷極まりない行動をやつてのけた、得体の知れない怪物を前にした人としての根源的な恐怖であつた。

「は、順にお答えさせていただきます！」

しかし、返つてきたのは見事な敬礼とハキハキとした返答。内心はともかく儀礼的には上官に対する礼節を完全に遵守した態度であつた。

「まず第一の質問に対してですが、当然ご存知かと思いますが、帝国解放戦線についてはすでに政府より『生死を問わず』捕縛しろとの通達が出ております。

テロリスト共はリーヴェルト大尉らの威嚇射撃にも応じる事無く、この場から離脱しようとしておりました。そのため、生かして捕らえることは困難と判断、止むを得ず撃墜する事としました」

言外にどこかの誰か達が鉄道憲兵隊の邪魔をしていなければ、生かして捕らえる事もできたかもしれないとリインは匂わせる。

その言葉に流石に先程の行動は余りにもあからさま過ぎたと自らの失態に気づいたのだろう、領邦軍の士官はどこか後ろめたい表情を浮かべる。

「そして二つ目の質問に対してですが、これはRFグループの会長イリーナ・ラインフォルト氏からの依頼によるものです」

「イリーナ氏の依頼だと？」

「はい、領邦軍に人質の救出を依頼したがどうにも動きが鈍い、故にどうか我が社の社員を助けて貰いたい。社員というのは会社にとつて何者にも代えがたい宝なのだからと、そう仰つておりました」

「イリーナ会長がそんな事を……」

「冷たい人だとばかり思つていたが……」

救出された鉱員たちの驚く様子にリインはイリーナ会長への義理立てを果たせた事を確認する。

領邦軍の反感を喰らう覚悟で社員の安否を案じ、行動した冷たい人に見えるが実は社員思いの人というイメージ像の流布。

それが今回イリーナ氏にリインが提示したメリットだ。ザクセン鉄鉱山で働く鉱員たちは前会長であるグエン氏に比べて、イリーナ会長は冷たい人だという不満を抱いていた。

無論、イリーナ氏はその程度のささやかな不満や悪口など意に介さない、そこが余計に冷たい人という印象を加速しているのだが、されど、こういう末端の不満というものを案外馬鹿にならないものだ。積もり積もって暴発すればストライキ等といったことにも繋がりにかねない。

故にこそ、リインの発言は生きてくる。自分たち末端の社員がどうなろうと意にも介さない冷血人間と思っていた会長が、領邦軍に睨まれる危険性を犯してまで救出に動いてくれたという事実、それは命を救われた者たちにとっては大きな意味を持つだろう。

今後不満を抱くような事があっても、「でもアレで俺達を助けるために頑張ってくれたんだ。冷たく見えるけどきつと不器用なだけなんだ」等と彼らは好意的に解釈してくれるといった具合に。

騙しているようで少々気が咎めるが、イリーナ氏が例えポーズであろうとリスクを背負って彼らの救出に動いたことは事実と言っている、まあこの程度は構わないだろう。

「以上が私の返答になります、何かご不明な点はございますでしょうか？」

「ぐ……だ、だが如何にイリーナ氏の依頼であったと言えど、未だただの学生に過ぎない身でこのような勝手な真似をして……」

「勝手な真似とおっしゃいますが、それは貴方方とて同じ事でしょう」
一転、それまでのうやうやしい態度からリインは鋭い眼光で領邦軍を睨みつける。

「ザクセン鉄鉱山はアルノール家の直轄地です。故に本来であれば貴方方領邦軍にも入り口を封鎖して、鉄道憲兵隊を締め出す権限などなかったはずだ。

にも関わらず、貴方方は鉄道憲兵隊の介入を一切拒んだ、まあそれ自体はこの地を護る者としての意地だと理解しましょう。

しかし、未だただの士官学院生に過ぎない我々がこうして人質の救

出とテロリスト共の殲滅が出来たというのに、何故栄光ある領邦軍の方々がみすみす手をこまねいていたのか、納得出来るご返答を頂きたいですね。

「――少なくともリーヴェルト大尉率いる鉄道憲兵隊が最初から事件に対応していれば、我々が動く必要などなかったでしょう」

告げられたこれまで幾度も経験した、未だ自分はただの学生に過ぎないという言葉。それをリインは逆手に取る。

たかが学生に過ぎない自分が出来たのだから、領邦軍にその気があれば出来ないはずはないと告げたのだ。

そしてそのリインの言葉に鉄道憲兵隊の面々は良くぞ言ってくれたと得意気な顔を浮かべ、鉦員達は恨みのこもった視線を領邦軍へと向け、領邦軍は忌々し気にリインは睨みつける。

実際のところ領邦軍がリイン達と同じ事が出来たかは極めて怪しい。

リイン・オズボーンは紛れもない俊英だ、十年に一人の逸材とそう軍の高官が彼を評したのは決してただのリップサービスではない、紛れもないリインの才幹が為し得たものだ。

そして死の淵からの生還による覚醒を果たし、通商会議にも同行してその経験を余さず糧とした彼のその能力は、到底ただの学生如きとはそう呼べない水準だ。

しかし、それでもリイン・オズボーンは未だただの学生に過ぎないのだ。故にこそ領邦軍はリインの言葉を否定できない、否定すればそれは即ち自分たちはたかが学生如きに劣る無能者ですと宣言するに等しいからだ。

さりとて、自分たちとて出来たに決まっているとそう豪語することもある、それを言えばならば何故出来たのにしなかつたのかという話になってくるからだ。

それは即ち自分たちがテロリストと手を結んでいたと宣言するにも等しい行為、いくら裏では公然の噂になっているとは言え、それを表立って肯定など出来るはずがない。

故にこそ領邦軍は何も答える事ができない、ただ目の前にいる「生

意気な黒髪の孺子^{こぞう}”を忌々し気に睨みつけるだけだ。

そしてクレア・リーヴェルトはその光景に舌を巻く。

イリーナ・ラインフォルト氏の依頼という大義名分を用意し、その代わりにイリーナ氏には鉞員からの支持というリターンを与える。

その上で鉞員たちには自分たち革新派側が必死に彼らの救出を試みたが、領邦軍がそれを邪魔したのだと告げて領邦軍への反感と自分たちへの好感を同時に植え付ける。

更には士官学院生という自らの弱みである脆弱な立場を逆に領邦軍を袋小路へと追い込むために利用する。

完璧と称してなら差し支えない行動だ。

(いい加減、認めないといけませんね。もう彼は子どもではないのだと)

単に強くなっただけではない、権威を利用する強かさ、周囲を取り込む扇動能力そういった物をリインは既に身につけつつある。

ほんの半年前ケルディックで会ったときはまだ大人になりつつある、背伸びをした子どもという印象だったというのにあの頃とはもはや別人と言って良い。

そしてクレアは心する、いい加減自分も義弟離れをしなければならぬ時期が近づいてきたのだと、言いようのない寂寥感を覚えながらも、そう自分に言い聞かせる。

一触即発でにらみ合う両者だが、余裕が無いのは領邦軍の方であった。

何せ領邦軍は先程のリインの為した冷徹極まる行動を目撃して、その心に“恐怖”を植え付けられた。

故にこそ力づくで強引に拘束するという行為に対してどうしても二の足を踏む。

さりとして言い負かされたままに退くというのは領邦軍の沽券に關わって来る。

そんな風に、如何にして鉄道憲兵隊とリインたちを追求するかという攻めの姿勢から、如何にして面目を保つてこの場から退却するかという及び腰に領邦軍がなっていると

「双方それまで。この場は私が預からせてもらう」

現れたのはこの国において最も尊き血を宿す金色の髪を有する青年。

ザクセン鉄鉱山の真の所有者たるアルノール家に名を連ねる、オリヴァルト皇子であった。

一斉に跪く一同に対して皇子は普段の気さくな態度とは異なる、上に立つものとしての威厳と風格を纏いながら皇帝陛下の代理人としてこの場を預かる事を宣言。

ライン達の行動をたしなめつつもその献身と行いを讃え、ラインに対しては「流石は私の護衛を務めるミユラーと同じく守護の剣の皆伝者だ」と称賛する事で彼は特別なものだから、彼に出来る事が出来ないからと言って恥じ入ることはないとばかりに領邦軍へのフォローを入れた後、領邦軍に対してこの場よりの撤収を指示する。

その言葉に面目を保たれた形の領邦軍は速やかにその場より撤収。オリヴァルト皇子の指揮下に入った鉄道憲兵隊によって事件の収拾を図るのであった。

そして状況調査の結果、ラインに撃墜された飛空艇より《C》と思しき存在の遺体が発見。

幹部であるVとSの死亡と併せて、帝国政府は革新派の『若き英雄』ライン・オズボーンによって解放戦線が壊滅した事を高らかに宣言するのであった。

束の間の休息（前）

ルーレでの実習を終えてリイン・オズボーンは再び時の人となった。

皇女殿下誘拐未遂、ガレリア要塞の襲撃、そしてザクセン鉄鉞山の占拠という許しがたい暴挙を行った《帝国解放戦線》を自称する逆賊共を2ヶ月前にも皇女殿下救出という功績を成し遂げた革新派の若き英雄が討伐したという話は帝国臣民を大いに喜ばせた。

皇帝たるユーゲント3世はこの若き英雄の功績に「鳳翼武功章」を以て報いる事を発表。未だ正式に任官していない身で、皇帝陛下直々に勲章を授与されるというのは前代未聞であり、《帝国時報》には若き英雄リイン・オズボーンの記事が連日乗る事となった。

褒め称える周囲とは裏腹に当人の心境はと言えば、自分の成し遂げた功績を認められて、嬉しくないと言えればそれは嘘になるが、流石《獅子心十七勇士》への列席も疑いなし、ヴァンダイク元帥に続く史上二人目となる《リアンヌ・サンドロット勲章》の授与者になるだろう等と書かれると流石に居心地が悪いものを感じて、なんとも落ち着かない気分になるのであった。

（気を引き締めなければならぬな）

これだけの注目を浴びると、任官後に求められるハードルも高くなってくる事だろう。基より父が宰相である以上目立つことは避けられなかったが、任官前の「鳳翼武功章」の授与などというのは極め付きだ。心しなければならぬだろう、自分がこれに奢るようであれば、それは父に革新派、そして皇帝陛下に泥を塗る行為だという事を。示し続けなければならぬ、あいつならば納得だとそう思われるだけの実績を。

そう、故に何時如何なる時とも精進せねばならない、例えオリヴァルト殿下の凶らいによる小旅行中だろうと自らを高めるためにその移動中も――

「もう、リイン君ってば。せつかくのみんなでの旅行だっていうのに、難しい顔して本なんて読んじやって」

そんな言葉と共に広げていた本をすりと横より奪い取られる。

そうして視線を向けてみるとそこには何よりプクリと頬を膨らませた恋人の姿があつて――

「勉強熱心なのはリイン君の良いところだと思うけど、こんな時まで読むのはいくらなんでもやり過ぎだよ」

メツだよ等と注意してくるその姿にリインは苦笑を浮かべて

「いや、だけど」

「だけでもでも無しだよ！卒業旅行の約束をリイン君がすつぽかしちゃうんだから、今回の旅行はそれの代わりにするにはもってこいなんだよ！」

「う……………」

その件を言われるとリインとしては弱い。なにせやむにやまれぬ理由があるとはいえ、自分が「約束」を破る事になったのは事実なのだから。

「……………そんなに私と一緒に居て楽しくない？」

「い、いや。そんな事はないさ！」

一転落ち込んだ様子を見せるトワにリインは慌てた様子でフォローを入れる。

「ふ、以前より思っていたが副会長殿も会長殿には随分と弱い御様子だな」

「ふふ、俺の父も族長として一族でも随一の使い手と言われているが、家の中では母に頭が上がらないものだし男というのは往々にしてそんなものなのだろう」

「尻に敷かれている」と評す以外にない、そんな光景を見て後輩たちは好き勝手に論評をします。

「…………サラも早く出来ると良いね、尻に敷ける人」

「…………あんだだつてそんな相手いないでしょうが」

「私はまだ15だし、サラよりも10歳も若いし。これから」

「このガキは…………見てなさいよ、必ずや渋いオジサマを捕まえてギャフンと言わせてやるんだからね！」

ニンマリと笑みを浮かべるフィー・クラウゼルにサラ・バレストアイ

ンは額に青筋を立てる。そして何時になく優しい、Ⅶ組の面々に言わせると気色の悪い、猫撫声で

「どうラウラ、新しいお母さん欲しくない?」

「ふむ、父上が新しい相手を見つけられるというのならそれはそれで祝福するが……亡き母上はサラ教官とは凡そ正反対のタイプであった事は伝えておこう」

「うぐっ……いい、いやでもむしろタイプが真逆のほうが逆に比較されずにチャンスが!」

「あははは、クレアが此処から巻き返せる位には可能性あるかもねー」
「ちよっと!私をあのブラコンこじらせ女と一緒にするんじゃないわよ!」

入学してから既に半年以上が経過してすっかり教え子たちからの扱いが雑となつてしまい、いろいろと弄られるサラ・バレストアイン。そんな光景にリインたちも懐かしそうに目を細めて

「いやはや、昨年を思い出すね。入学してからすぐの頃は美人の先生が入ってきたと男子諸君は大喜びしたものだだったが」

「二ヶ月もしたらあつという間にボロが出てあんな感じの扱いになつたっけな」

懐かしいなど目を細めながらリインたちも笑い合い、そのまま思いつ話にしばし、華を咲かせながらユミルまでの道中を過ごす。

この日、リイン・オズボーンは久方ぶりに時にボンヤリと列車の外の光景を眺め、時に友人たちと談笑を行いながら旅の道中を楽しんだ。

それは、バリアハートでの一件以降、久しくリインが忘れていたものであつた……

・
・
・

トリストアを出発して途中ルーレの駅で乗り換えて合計7時間の道のりを終え、ユミルの駅へとついたりリインたちは身体を軽くほぐす。ユミルの町までケーブルカーが出ているのだが、7時間も列車に乗りっぱなしだったため此処は景色を楽しみながら山道を歩いていく事をリインが提案。行動派のフィーやラウラも賛意を示して、一行は

山道を歩いていく。散歩というにはなかなか険しい山道であったが、彼らは歴とした士官学院生。その程度で音を挙げるほどやわな鍛え方をしているものは誰もいなかった。

「ミリアム、アガートラムを使うんじゃない」

「えー僕とガーちゃんは何時如何なる時も一心同体。ガーちゃんは僕の身体の一部みたいなものだよ。ラインの言っている事は足を使わずに歩けって言っているようなもんだよ」

「良いから、しまいなさい」

「ぶーじゃあ、代わりにおんぶして！」

そんな言葉と共にアガートラムから飛び降りて背中に飛びついてきた義妹分にラインは苦笑して

「やれやれ、しようがない奴だ」

怒るでもなくそのまま背負いながら山道を歩きはじめる、まあ足腰の鍛錬代わりにちょうど良いだろうとそんな調子で。基本的にスバルタな男だが、どうにもこの天真爛漫な義妹には甘いところがあった。

「じー」

「……こちらを見てもお前は背負わないからな、フィー」

「ケチ」

ラインの背中に心地良さそうに体重を預けるミリアムを羨ましそうに見るフィーだが別段疲れたわけでも、ミリアムのようにラインに甘えたいわけでもない。単に楽をしたいだけなのである。

そんな光景をアリサは後ろから複雑な心境で眺めていた。以前までは他の皆と同じく、自分もああいふ光景を見て和む事が出来た。だけれどルーレの一件以降、どうにも駄目なのだ。あの日以降、あの先輩の姿を見るとどうしてもあの時の鬼のような姿がちらついてしまう。まるで塵を処分でもするかのように平然とテロリスト達を殺した姿が浮かんでしまうのだ……

「せっかくの旅だというのに浮かかない顔だね、アリサくん」

「アンゼリカさん……ちよっと7時間も列車に乗りっぱなしだったせいで疲れちゃったみたいで」

語りかけられた言葉をアリサはもつともらしい理由をつけて誤魔化す。

何せリイン先輩と目の前のアンゼリカさんは親友と呼んでなんら差し支えのない仲なのだから。

そして自分たちもずっと世話になってきた恩のある先輩なのだから。

その先輩を「怖い」等と自分が言いだしたら、せっかくの楽しい空気が台無しになってしまう事は目に見えている。だからこそその行動であった。

「隠さずとも良いよ、リインの事が怖いんだろう？」

まるで今晚の夕食について尋ねるようにさらりと正鵠を射抜く言葉にアリサは思わず息を呑む。

「ど、どうして……」

「どうしてわかったかって？そんなの簡単さ。私も怖かったからね、あの時のリインは」

あつけらかんと言いつ放つアンゼリカにアリサは目を丸くして

「とてもそんな風には……」

「見えないって？そりやそうさ、あの時のリインは怖かったけど今のリインは私の大事な、良く知る親友のリインだからね。怖がる道理なんてどこにもない」

怖いものなどまるでない女傑とみられるアンゼリカだが、彼女にとて当然怖いものはある。

テロリストをああも容易く、冷徹に殺してのけた親友の姿は肝が太い彼女をして確かに恐ろしいものだった。

だが、それはあくまであの時のリインだ。今の彼はアンゼリカ・ログナーの大切な友人、堅物という言葉がピッタリな真面目で、されど根底には確かに他者への思いやりがあるトールズ士官学院副会長のリイン・オズボーンだ。

故にこそアンゼリカ・ログナーに彼を恐れる道理など存在しない。

「彼はね誠実で真面目で、真実この国を愛しているんだと思う。」

愛しているからこそ、その自分の愛している国を脅かすテロリスト

が許せないと怒る。

誠実で真面目だからこそ、国のための汚れ役を自分が引つ被ろうとする。

人間、真剣であればあるほど、そうじゃない人間から見るとどこか怖いものだからね」

それはアンゼリカ・ログナーには出来ない在り方だったから。少なくとも彼ほどに真剣に自分はこの国の行く末に思いを馳せたことはない。

何時いかなる時も全力で走り続けるその様は見ていると怖くもなる、だけど同時に尊敬出来るものでもあったから

「少なくとも、理由もなしに、見境なしにああいう事をする奴じやないってのは君だって理解しているだろう?」

「それは……まあ」

アンゼリカたちに及ぶべくもないが、アリサとてリインとは既にそれなりの付き合いがある。

だからこそアンゼリカの語る言葉はアリサも理解できる。

「怖がるな、なんて言う気はないよ。私だってあの時の彼は怖かったからね」

だけど、それでもあいつがああしているのは誰かを護る為なんだという事を理解してやって欲しいね。

友人として私が言えるのはそれ位さ。それでも怖いものは怖いというのならば、それはそれで止めない。後は君次第さ、アリサくん」
それだけ告げるとアンゼリカはスタスタと前へと進んでいき

「さあ、フィー君! おんぶならば私がしてあげよう! 存分にこの胸に飛び込んでくると良い!!」

「……いい、やっぱり自分で歩く」

「ガーン、何故だ! リインは良くて私は何故駄目なんだ!」

「身の危険を感じるから」

男であるリインよりも身の危険を感じる等と言われてアンゼリカはその場で大仰に崩れ落ちる。

ザクセン鉄鉱山のはしごを登る際も「眼福眼福♪」等と言っていた

のでこの辺は完全に自業自得というものであろう。

そしてそんなアンゼリカを見て一同は苦笑しだす。本当に仕方のない奴だと、ラインも含めて。

そんな光景を見てアリサもまたうつむいていた顔を上げて、気を取り直す。

心の奥底に染み付いた恐怖はある、だけどだからといって何時までもそれに囚われていても仕方がないと。

せつかくの大切な友人たちとの旅行なのだから目一杯楽しまなければ損だと、そう考えて。

そうして楽しい思い出をまた一緒に作れば、彼女のように恐怖を乗り越える事が出来るだけの絆を作ればきつとまた前のように接する事ができると信じて胸を張って歩き出すのであった……

束の間の休息（後）

およそ小一時間の道のりを歩きユミルへとたどり着いた一行を案内したのは、この地の領主の息女たるエリゼ・シュバルツァー嬢であった。皇族からの紹介に加えて、領主の一粒種を救った恩人たるリイン達をユミルの住人は最大級の礼儀を持って饗した。

時の皇帝陛下より下賜されたという由緒正しき宿泊施設《鳳翼館》へとリインたちは案内されて、ひとまず持ってきた荷物を下ろすのであった。そして学院祭の出し物をどうするかの打ち合わせを行う後輩たちを尻目に、リイン達5人は夕食までの間に周辺の散策へと赴いていた。

「……良いところだな」

「うん、皆穏やかで幸せそうにしている」

広がる街並みは素朴で帝都や州都に比べるべくもない慎ましやかなものだ。だが、暮らす人たちの姿には確かな笑顔が見える。この地を治めるシュバルツァー男爵の人柄が窺い知れるような良い場所だとリインは思った。加えて言うのなら妙な懐かしさを覚えるのだ、自分の記憶の限りでは此処を訪れた事はないはずだったが、あるいは記憶にないだけで幼い頃に訪れた事でもあったのだろうか？とリインは奇妙な感慨を抱いていた。

「……帝都も良い所だけど、私たちが数十年経ってお爺ちゃんやお婆ちゃんになつたら、リイン君が軍を退役して、子ども達も独り立ちしたらこういうところで静かに暮らすっていうのもきつと素敵だよね」

ポツリと呟いたトワの言葉にリインは虚を突かれた思いがした。退役、そうだ今の自分には想像もつかないがいずれは自分も引退する時が来るはずなのだ。軍と言う組織はその特性上民間よりも引退する年齢が早い。概ね50歳程度で引退して予備役に編入されるのが一般的だ。将官ならば55歳、頂点たる元帥ならば60歳と引退は遅くなるが、それでもいずれは第一線を退くことになる。

だがリイン・オズボーンはこれまでそんな先の事を考えたことはな

かった。何故ならば彼にとつては軍人となり、祖国と民のためにその身を捧げる事こそが総べてだったのだから。何せ今のリインは山に登る準備を終えて、いよいよ登ろうとしているところ、頂点にまで登りつめた後の事など考えたこともなかった。

いや、頂点に上り詰めた後の事ならば考えてはいた、与えられた職責を全力で果たして祖国に永久の繁栄を齎す事、それが目的なのだから。だが、頂点の座をいずれ訪れる後進へと譲り渡さなければならぬ時期と譲渡した後どうするか等と言うのはさすがに思いもよらなかった事だ。

引退して老人となった自分、それはリインにとつては中々に想像し辛いものであったが……

「ああ、そうだな。こういう静かなところで穏やかな余生を送るつても悪くないかもな」

傍らで微笑む愛しい少女と共に年を取り、日がな一日をゆつくりと過ごす。そんな老後も悪くないかもしれないとリインは思うのだ。

「でも流石に今から考えるには気が早すぎないか？俺たちはまだ20にもなっていないんだからさ」

「えへへ、幸せそうに笑っているお爺さんとお婆さんを見たらついそんな事が頭に浮かかんじゃなくて」

「確かに……俺たちもあんな風に美しく老いる事が出来たら、それは素晴らしい事だろうな」

二人は気付いているのだろうか、さも当然のように自分たちは夫婦となつて仲良く連れ添い続ける事を前提とした会話を繰り返している事に。恐らくは気が付いていないのだろう。

「……えーと、二人とも」

「もしかして、私たちは邪魔かな？」

「……長い付き合いだから忘れがちだけど、考えてみたらお前たちは付き合い始めたばかりだもんな。」

悪かったな気を利かせてやれなくて」

そんな無自覚のままに自分達二人は生涯を共にする事が既定路線のような会話を繰り返す二人に三人は遠い目をしながら自分たち

は飛んだお邪魔虫なのではないかと気を利かせようとするが

「?三人とも、何言っているの?クロウ君にジョルジュ君、それにアンちゃんか邪魔だなんてそんなのあるはずないじゃない」

トワは心底どうしてそんな事を言うのか、わけがわからないと不思議がり

「ああ、俺たち5人がこうして揃って行動できるなんてのはこれから先どんどん難しくなって来るだろうからな。

せつかくの機会なんだ、目一杯思い出を一緒に作ろうじゃないか」
リンもまた一切の銜いなく、お前たちは掛け替えのない友なんだとその想いを伝える。

そしてそんな二人の様子に三人はひそひそと話をし始めて

「なあおい、どう思うよ。こういうえばちつとは慌てるなりするかと思ったらどうやら完全に素でやっているみたいだぜあいつら」

「……まあ、以前からどう考えても付き合っている恋人同士みたいな調子だったのに頑なにただの友人だって主張していたから、正式に付き合い始めたらどうなるものやらと思っはいたけど」

「やれやれ、どうやら我々は間近で二人のおしどり夫婦っぷりを見なければならぬようだね」

二人つきりになりたいというのであれば、三人が気を利かせれば良いだけであつた。

だがどうにもあの二人は有り難い事にも、今回の旅行は自分達5人での思い出づくりだと思っているようだ。つまり全くの無自覚かつ素で二人はああしていちやついてるという事なのだ。

これでもしも気を利かせて二人つきりにしたら、自分達三人を探そうとするだろう。

「えへへ、こんなに素敵なところにみんなで来られるなんて思ってもみなかつたよ」

「ああ、オリヴァルト殿下には感謝しないとな」

無自覚にいちやつき続ける3人にとつても大切な二人の篤い友情に独り身たる三人は涙が出そうな喜びと壁を殴りたくなるような衝動に襲われながら、ユミルの街で存分に残り少ない学生生活の思い出

を作っていくのであった……

……

本格的な観光は明日改めてという事で、軽い散策を終えた5人は打ち合わせを終えた後輩達と合流して、夕食前に鳳翼館自慢の温泉へと浸かりに行く。

「かーなんとというか五臓六腑に沁み渡るねえ」

「クロウ、オヤジくさいよ」

未だ20にもならぬ若者でありながらまるで中年男性のような言葉を漏らす友人に苦笑しながらジョルジュはツツコミを入れる。

「何言ってやがんだよジョルジュ、そういうお前の腹だつて大概の貫録じゃねえか」

「……それを言われると弱い所だなあ、一応僕としては動けるデブを自認しているんだけど」

ジョルジュ・ノームとて歴とした士官学院生、厚く覆われた脂肪の奥にはしっかりと鍛えられた筋肉がついている。その体格は単なる肥満と言うよりは、古代ゼムリア時代に神事を司つたとされるRIKISHIと呼ばれる存在に近いものだと言えよう。

しかし筋骨隆々とまでは言わないまでも、引き締まった精悍な肉体をしている親友に比べればおおよそニツチな需要だという事はジョルジュとて自覚していた。まあどうでもいい大多数にいくら持て囃されようと、本命に振り向いてもらえなければ何の意味もないので、重要なのは彼の意中の存在に需要があるかどうかなのだが……

「リインの方は傷も相まって、なんとというかすごい風格だね」

ジョルジュはそうして傍らにいるリインの方を伺う。入学当時170リジュだったリインの身長はこの1年と半年の間に伸びて180リジュ程になった。限界まで、否人間の限界を超えて鍛えられたその肉体はしなやかさを伴いつつも屈強そのもので、頬に刻み込まれた傷跡も相まってまず積極的に喧嘩を売ろうなどとは思えない外見となっていた。

「体に付けられた傷跡などと言うのは未熟さの象徴であつて、別段自慢にするような類ではないが……まあ賛辞と思つて受け取つておく

よ」

とかく若輩者というのはそれだけで侮られる。敵に侮られる分には一向に構わない、こちらを侮ってくれろというのならその油断に付け込めば良いだけの事なのだから。だが味方、それも部下に侮られては話にならない。親しまれるのと舐められるのは違うのだから。

リインは卒業後には士官として任官する事になる、通常中央士官学院以外の士官候補生は准尉での任官だが、首席卒業者は例外的に中央士官学院と同様に少尉での任官となるため、この調子でいけば少尉での任官となるだろう。そして士官として任官するという事は部隊の指揮官として部下を持つという事である。

そして兵士たちは耐えず自分の上官は信ずるに足る存在なのかというのを推し量っている。当然だ、彼らにしてみれば上官の有能無能は生死に直結して来るのだから。そしてそんな彼らの信頼を得るにあたって、外見の与える印象というのは馬鹿にならないものだ。

いや、これは軍隊に限らない。人間というのは外界から得る情報の9割を視覚に頼っている生き物だ、故に外見と言うのは重要視される。例えばトワなどが良い例だ。彼女は彼女で大抵縁の名門トールズ士官学院の次席にして生徒会長というまさしく、才媛と呼ぶに相応しい少女だが、初対面で彼女がそんな才女だと見抜ける者はほとんどいない。実際通商会議の際も、肩書だけ聞いて如何にも出来る美女、例えばクレア大尉のような、と言った外見を想像していた文官団は何度もトワの持つ生徒手帳を確認したと言う。

一方如何にもといった外見と態度をしているリインの方は士官学院生と名乗ると大抵の人間が納得した様子を見せたものだった。

このように外見というのは馬鹿にならないものだ、無論トワ・ハーシエルという好例が示すように外見だけで人を判断すれば思わぬところで手痛い思いを受けるのだが、それはそれとして人心掌握という観点からすると決して疎かにしてはいけないものなのだ。

これを特に熟知しているのが政治家と呼ばれる人種で、彼らは何もただの贅沢で豪華な服や装飾品を身にまといつていては訳ではない。一重に外見の与える印象というものを重視してるからこそ、それに見

合った服を身に纏い、言葉や仕草にまで細心の注意を払って、頼れる指導者像、あるいは親しみのもてる指導者というものを演出しているわけだ。

基よりレクターとクレアという二人の師にも教えられていたことだが、通商会談の場で各国代表というこの上ない教師を目にした事でそういった素養も今のリインは着実に身に付けつつあった。

だからこそリインは頬に付けられた傷跡を自らの未熟さに対する戒めと認識しつつも別段悲観してはいなかった。何故ならばこういった顔につけられた傷跡というのは否が応にも目立つから、これだけで激戦を潜り抜けた歴戦の戦士という印象を相手に与えるのに一役買ってくれるわけだ。

無論実態がそこに伴っていないければ何の意味もないが、これを付けたのはゼムリア大陸において武に携わる人間ならば知らぬ者はいない、かの赤い星座の大隊長である。ある種の箔付には持つて来いであつた。

そういう意味で痛ましい表情で見つめる周囲とは裏腹にリインは全く持つて悲観していない、それどころか色々やり易くなると思つている位であつた。

「うう、僕だけ華奢で何だか肩身が狭いなあ」

そしてそんなリイン達、そして居並ぶ級友たちの引き締まった精悍な肉体とどうにも恵まれない己の体軀を見下ろしてエリオットはため息をつく。需要の問題で言えば、彼が父のような筋骨隆々になつた日には恐らく姉であるフィオナを筆頭に多くの女性が涙を流すことになると思われるので、そのままが良いのだろうか、本人はどうにもそんな男らしくない自分にコンプレックスを抱いているようであつた。

「そう、気にすることもないだろう」

「ああ、俺たちはエリオットの持つ勇氣と優しさを知っている」

「外見でお前を侮るような阿呆は自らの不明さを自ら晒している事にも気づかぬ度し難い阿呆だ。馬鹿につける薬が存在しない以上、そん

な輩は無視するが良いさ」

しかし、そんなエリオットのコンプレックスをⅦ組の友人たちは否定する。入学してから既に半年の付き合い、エリオット・クレイグという少年が争いに不向きな優しい性格な事も、その上で仲間や友のために踏み出すことのできる勇気を持つ少年だと言う事も三人は知っている。故にそんな外見を理由に友人を侮る気など彼らには毛頭なかった。

……何よりも学院際のステージに向けてのあの静かな迫力に確かなる「猛将」の血を感じずにいられなかった三人にしてみれば、そういった友情を抜きにしても静かなる闘志を内に宿しているこの音楽家志望の友人を侮ることなど出来ようはずもなかった。

「ありがとう、みんな」

そんな友人たちからの気遣いにエリオットは微笑みながら礼を言う。そこには無理をしている様子はない、彼を強引に士官学院に入れたオーラフ・クレイグの願いどおりにエリオットはたくましく成長した。もう血の繋がらぬ兄弟と自分を比較して、落ち込むという事は無くなりつつあった。

そしてそんな光景を見てリイン・オズボーンも胸を撫で下ろす。強引に入れられる事になった士官学校だったがどうやら、そこでの出会いは確かにエリオットにとつての糧となったようだ。

・
・

「わーい温泉だ、温泉だ」

「ミリアムちゃん、走ると滑って危ないから駄目だよー」

「はいいごめんなさい、トワお義姉ちゃーん」

そして男性陣がゆっくりと湯に浸かっていると俄かに女湯の方が騒がしくなりだす。どうやら女子たちもまた男子たちにやや遅れて、存分にこの露天風呂を堪能しに来たようだ。

「ふふ、寮ではシャワーだったのでこうして皆で風呂に入ると言うのは中々に新鮮だな」

「ん。猟兵時代を思い出すかも」

「む？そなたの団には女性の団員も居たのか？大体話を聞くのは男ば

かりだったが」

「そういえば言っけなかつたつけ？いい機会だからラウラが興味あるのなら話しても良いけど」

「ふふ、よろしく頼む」

どこか落ち着かない様子となり、静まり返る男湯とは対照的に女湯の方は華やかな言葉が聞こえだす。

「……ああ、満天下に謳いあげたい。私は今、生きている。桃源郷はここにあったんだ!!」

「あ、あのアンゼリカさん……そのいくら同性と言えどそうまじまじと見つめられると恥ずかしいんですけど……」

じつと己が胸を凝視し続けるオヤジの心を持った麗人に対してエマ・ミルスティンが恥ずかしげに頬を赤らめて己が腕でその圧倒的破壊力を持った質量兵器を隠そうとすると、それはタユンと揺れて

「……………ブフオー」

そんな仕草がトドメの一撃になったのだろう、アンゼリカ・ログナーは己の鼻腔からその身に流れる尊い（はずの）青い血を吹き出した。

「ア、アンゼリカさん!!」

「ア、アンちゃん大丈夫！しっかりして!!!」

慌てて駆け寄るアリサとトワ、そんな二人のタユンと揺れる豊かな山脈とまるで動かない平らな双丘をアンゼリカはその眼に焼き付けて……

「……………我が生涯に一片の悔いなし」

そんな言葉を呟きながらアンゼリカ・ログナーはそのまま湯に沈んでいく。当人にとっては悔いがないのかもしれないが、彼の父ゲルハルト・ログナー候が聞いたら末代までの恥さらしだ！等と叫び、怒りの余り血管の数十本が断裂してそのまま憤死して、哀れログナー家は当主とその息女を両方共失う惨状になりかねないだろう。

……

「ふん、一体何を想像しているのやら」

「な、僕は別にいやらしい想像なんてしていないぞー！」

そしてそんな女湯の喧騒が聞こえてきてどこかそわそわと落ち着かない様子となったマキアスをからかうようにユーシスが口にする。ちなみに彼とて健全な年頃の男である以上、全く意識していないなどという事は無くどこか落ち着かない様子となっている。むしろそうして昂ってしまったて己の意識を逸らすためにマキアスという喧嘩相手に矛先を向けたと言うべきであろう。

「よし、行くか」

そしてそんな中で一人の馬鹿が決意をその両の瞳に漲らせながら立ち上がる。

健全でノリの良い年頃の男連中であればあるいは「クロウ！やるんだな、今ここで！」などと言いなながらその足跡へと続いたかもしれない、その背中を見て

「クロウ、一応友人として忠告しておくけど辞めておいた方が良くと思うよ」

「止めてくれるなジョルジュ、男にはな、絶対に引けない戦いがあるんだ」

「その言葉自体には同意しておくが、今貴様のやろうとしている事は戦いでもなんでもなくただの犯罪だぞ」

呆れ果てた視線を送りながら二人の友人は全く続こうとはしない。むしろその目は友人ではなく、処刑台を自ら登る罪人を見る蔑みの込められたものであった。

「うるせえ！ゼリカの奴がアレだけ良い思いしているんだ、俺だけお預け喰らってられるかよ!!!」

「クロウ、君たちからするとついつい忘れそうになるかもしれないけど、アンは歴とした女性だからね」

「うむ、故にあいつが女湯に入ることは帝国法上一切の問題がない。だがお前のやろうとしている事は紛れもない犯罪だ。退学処分とて十分に有り得るぞ」

「……お前達との日々は絶対に忘れねえ。あばよ、ダチ公。それでも俺は行く、桃源郷を目指してな！」

うおおおおおと言いなながら走り去っていくその姿をリインは黙っ

て見送る。ああ、本当にあの馬鹿はどうしてこうもこんなにも予想通りの事をしでかす馬鹿なのかと。

「……止めなくて良かったのライン？」

「先ほどユースがいきみじくも言っていただろう、馬鹿につける薬はないと。心配せずとも、予想通りだ」

・
・
・

恵まれた身体能力を活かしてクロウ・アームブラストは瞬く間に竹製の囲いを超えんとする。

クロウ・アームブラストは優秀だ。士官学院生としての成績こそそこそこといった程度だが頭のキレ、戦闘力、そして人を率いる能力そのいずれもがその若さに対して不釣り合いな程に卓越している。

故にもしもクロウがその全能力を駆使して、覗きを敢行しようとしていた場合、その阻止はこの世代を代表する俊英たるラインを以てしても一筋縄では行かない熾烈なものとなったのだろう。

だが、今回のクロウの行動はあくまで突発的なもの。溢れ出す衝動の命じるがままに行った本能に支配された、獣のごとき行動に過ぎない。

故に

「P.E.Θ.P.S.E」

その蛮行を防ぐのには余りに容易かった。

柵を乗り越えたクロウの視界に映ったもの、それはアンゼリカ・ログナーが辿り着いた桃源郷ではなく、銀色の物体であった。このような事態に備えて待機していた、曰くミリウムと一心同体の頼もしき相棒アガートラムは主の裸体を拝もうとした不埒な輩を忠実に迎撃し、無謀なる馬鹿は黒こげになって落下するのであった……

・
・
・

楽しい時間というもののはあつという間に過ぎて行くものだ。風呂から上がった後の一行は（ああ、天の国はここにあった等と言いながら、鼻の穴にティッシュを詰めてその美貌を台無しにしていた侯爵家令嬢、ずたボロのボロ雑巾にされた挙句簀巻きにされた馬鹿の姿を男

性陣は見なかった事にしてスルーを決め込んだ。)用意された山の幸に舌鼓をうち、遊戯室で楽しい一時に興じたり、めげない馬鹿によって提案された夜這い、もとい女子の部屋への突撃提案を華麗にスルーして翌日に備えて眠りに着くのであった。

そして深夜の2時、3時間の睡眠を終えてリイン・オズボーンの意識は常と変わらず覚醒を果たす。

まるでお前にはもはや立ち止まっている暇などないのだと告げるかのように。こうなることを、仲間たちと一緒にゆっくりと歩んでいくのではなく、独りでどこまでも先に走り続ける道を望んだのはほかならぬお前自身だろう?と告げるかのように。

そしてリイン・オズボーンは熟睡する周囲を他所に寝る前に枕元に置いておいた資料を読み進め始める。明りは一切ともっていないが問題ない、帝都での一件以降、夜目もずいぶん利くようになったのだから。明りを点けぬまま、本を読むことも造作もないと。

このまま5時までこの資料を読み耽り、朝になったら双剣を携えて山の方にも鍛錬に行く。それで良い、そうすれば周囲はただの早起きだと思ふのだからと。

鉄血の継嗣はその羽根を休める一時の休息の際にも、その爪を研ぎ澄ませるのであった……

鉄血の子と最後の学院祭

ユミルでの思い出作りを終えて帰還した一行は迫りくる学院祭の準備に追われる事となった。元々特別実習などで準備期間が短くなっていたⅦ組の面々は「猛将」エリオット・クレイグのスパルタ指導の下、急ピッチでステージの練習へと取りかかり、トワとリインも生徒会長及び副会長として多忙を極める事となった。

多忙を極めながらリイン・オズボーンは燃えるような充実を味わっていた。

何故ならば予算の配分、教官陣という上位者との折衝、生徒たちの統制、スケジュールの調整、それらは軍、いやあらゆる組織で必要となつて来る経験に他ならないからだ。生徒の自主性を重んじるツールズ士官学院では生徒会にかなりの権限が与えられている。将来人を率いる立場になる者にとっての予行演習としては申し分ないものなのだ。故にこそリイン・オズボーンは全力を以て士官学院祭を遂行せんとその学生離れた指導力を思う存分に振るう。それは何時までも音沙汰がなく、発動しない最後の試練に対する鬱憤晴らしも兼ねているものであった。

——少なくとも、ツールズ士官学院副会長としてその能力を発揮して得難い経験を積んでおく事は間違いなく大きな益となることだし、そんな打算を抜きにしても自分にとっては青春時代の締めくくりとなることなのだからと。

そんな鬼気迫る様子のリインに触発されるかのようにトワもまたその能力を存分に発揮する。

クロスベルの通商会議という経験を経て大きく成長したのは彼女もまた同じこと。放っておけばどこまでも飛んで行ってしまいそうな恋人を独りぼっちにはさせないとばかりに全力を以て会長の任を果たす。

二人のリーダーシップと実務力は名だたる人物を輩出してきた名門ツールズ士官学院の中でもトップクラスと言つてよかつた。単体で二人に伍する、あるいは凌駕する生徒会長や副会長はこれまでも

いた。それは最も新しい人物で言えば現在鉄道憲兵隊の敏腕将校として名を馳せるクレアであったり、数十年単位で遡るならば言わずと知れた鉄血宰相ギリアス・オズボーンであったりである。

しかし、コンビという点で見ればこの二人に並ぶとなれば、それこそ現在領邦軍の「双璧」として知られるオーレリア大将与ウォレス准将、獅子心皇帝亡きあとの帝国を支えた名宰相サンフオード、常勝將軍ヴェルツのコンビ位ではないかというところであった。

かくしてトワ・ハーシエル会長、リイン・オズボーン副会長率いる生徒会メンバー主導の下行われた準備は終了し、此処に歴代でも屈指の完成度を以て学院祭当日を迎えるのであった……

そんな感無量と行つて良い学院祭当日、立役者の一人たる副会長の表情は些か硬くなつていた。

学院祭当日を迎えたことによる緊張……等ではない、自信というのは事前準備の周到さ、そして本人がこれまでに積み重ねた経験によつて裏打ちされるものだ。そしてリイン・オズボーンにはそのどちらにも対して相応の自負がある、故に土壇場になつて狼狽える等という事は全くない。

ならばなぜ硬い表情を浮かべているかといえば、それは今朝方発表されたあるニュースが原因である。クロスベルで実施された住民投票、その結果圧倒的な差を以て宗主国からの独立を望む声が上がつたのだ。

無論これは何ら実効力を伴わないもので、既にカルバード共和国とエレボニア帝国の両政府は「論評に値しない妄言である」とこのクロスベルの声明を一蹴し、既に両国はクロスベル周辺に駐留する部隊の動員準備を進めている。

このように西ゼムリア大陸の緊張は今、一触即発の状況と言つて良い。

それを思うと、果たしてこんな時期に呑気に学院祭をやっている場合なのかとそんな思いも過るが――

「リイン君」

そんな事を考え込んでいると傍らにいる少女は優しく微笑みなが

ら語りかけてきて

「色々心配なのはわかるけど、今私たちがすべきことはそつちじゃないと思うんだ」

何故ならば自分たちはツールズ士官学院の会長と副会長なのだから。

帝国宰相の役割が国家戦略に関わる問題への対処ならば、会長と副会長の役割は今日の前にある学院祭を無事終わらせる事だと。

「私たちが、皆が一生懸命準備してきた学院祭をしっかりと終わらせる事。それが私たちの今やるべきことじゃないかな？」

遠い未来を見据えるがために、今を疎かにしてはいけないと伝えるその少女の言葉にリインは苦笑して

「ああ、全くだ。君の言う事はいつも正しい。

国家戦略や政治に介入出来もしない、俺が真面目くさってクロスベルの事に思いを馳せていたところで事態が好転するわけでもない」

そこでリインはまるで自分が帝国元帥や参謀長にでもなっていたかのような気分で居たなど、自嘲して

「今の俺がすべきことは、ツールズ士官学院副会長として会長である君をしっかりと補佐してこの学院祭を無事終わらせる事、そして」

そこでリインは彼にしては非常に珍しい悪戯っぽい笑みを浮かべて

「俺には勿体無い可愛らしくて素敵な恋人をしっかりとエスコートして、一緒に学院祭を満喫する事だったな」

そんな言葉と共に頼もしい生徒会の後進達より「何かあったら連絡しますから、会長と副会長も学院祭をちゃんと楽しんで下さい！」などと言われながら手渡されたチケットをリインは懐より取り出す。

「えへへ、せつかく皆が私たちのために用意してくれた時間だもん。目一杯楽しもうね」

そうしてはにかみながら手を差し出す最愛の少女の手を握りしめながら、リイン達は会長、副会長としてではなく一生徒として各所を巡り始めるのであった……

「け、景品のみっしいうストラップになります……」

唾然、呆然。そんな形容が正しいだろう。

1年Ⅲ組の生徒は若干引きつった笑みを浮かべながらリインへの景品を手渡す。

学院祭の出し物を回り始めた二人がまず訪れたのは1年Ⅲ組の出し物であるみっしいうパニック。

ルールは至って簡単で出現してくるわるっしいうをたたけば加点、誤ってみっしいうの方をたたいてしまえば減点で、所定の点数以上を獲得すれば景品プレゼントというものだ。

お祭り故軽く楽しんで流して終わらせようと思っていたリインだったが、トワが景品であるみっしいうストラップを「そういえば結局クロスベルでは買い忘れちゃったなあ……」等と欲しがったために一変。

基本的に欲に乏しいこの恋人の数少ないおねだりに応えるべく、リイン・オズボーンはヴァンダール流皆伝の実力を如何なく発揮。その気配察知能力と反射神経すべてを注ぎ込み、ノーミスで出現したすべてののわるっしいうを常人では追う事すら困難な高速で叩き続けた。その光景はさながら子どもが楽しむための縁日で大人げなく無双する良い大人といったような光景であった。

「ありがとうリイン君」

そして手渡されたそのみっしいうストラップをトワ・ハーシエルは嬉しそうに眺める。

商品それ自体に対するものというよりは、リインが自分のために手に入れてくれたというその事実こそが嬉しいのだろう。今日という日の思い出をこれを見る度に思い出せるように、大切に大切にしまひこむのであった……

「ふふふ、これは私たちも負けてられないわねログインス君。私たちフェンシング部の意地を見せてあげましょう」

「へいへい、サポートさせてもらいますよ部長様」

そしてそんな学生最強が恋人のために作り上げたレコードを超えるべく、腕に自信のある学院生達はこぞって挑み始めて、盛り上がり

出す場を尻目に二人はその場を跡にするのであった……

一通り見終えた二人は最後に1年IV組の出し物である東方風喫茶を訪れて一心地ついていた。

抹茶という紅茶やコーヒーとも違った味わいの飲み物をゆつくりと飲みながら歓談しているとリンデとヴィヴィの双子の姉妹が近づいてきて、縁結びと開運くじのどちらかを引くことの出来るサービスだと告げて来るのであった。

「それじゃあ、開運くじの方を引かせてもらおうとしようかな」

ほとんど即答で二人は答えていた。

「ええ、せっつかくの恋人同士なのにそれじゃ面白く……もとい勿体無いですよ、せっつかくだから縁結びの方を引いてみたらどうですか？」
「縁結びなんて引く必要ないさ。もう、大切な人との縁なら結ばれてるんだからな」

「うん……女神様は大切な人との縁をしつかり結んでくれたんだもん」

そんな事を言いながらそつと寄り添い合う二人の姿に流石の悪戯っ子もたじろぐ。何せ如何にも小悪魔っぽい様子でさも経験豊富みたいな風を装っているが実は彼女には未だ交際経験というものが存在しない。故に自分のからかいに慌てるどころか、いちやつきの材料にするカップルなどを相手にしてしまえばどうしていいものかわからなくなってしまうのだ。

彼女とて年頃の少女、素敵な恋人といつか巡り会ってみたいという思いを相応に存在する。故にリン・オズボーンという優良物件を掴まえた会長をどこか羨望の色を籠った視線で眺めてポツリと呟く

「会長、一体どうやったら真面目が服を着て歩いているみたいなの副会長をそこまで籠絡できるんですか？」

「ちよ、ちよつとヴィヴィ……すいませんお二人とも。私の方からちゃんと叱っておくので、とりあえずくじの方をどうぞ」

「何よ、リンデだって気になるでしょう。ガイウス君を籠絡する参考になるかもだし」

「も、もう何言っているのよ！本当にこの子は……」

仲睦まじく喧嘩を始めた双子に苦笑いを浮かべながら引いたおみくじの結果それは……

「大凶。心せよ、決別の時は近い。遠くへ思いを馳せるのも良いが、時には身近な者たちへと今一度気を配るべし。運命というのは時に汝が思っている以上に残酷なものである、迷った時は汝が何のために剣を取ったかを思い出すべし。さすれば絶望の中にも活路は見えるであろう」

「大凶。覆水盆に返らず、どれだけ嘆き懐かしもうと壊れたものは戻らない。過去に戻りたいと願うのではなく、未来を見据えて前へと進むべし。さすれば今一度運命が変わる時は必ず訪れる。その時が愛する者を？ぎとめる事のできる、最大にして最後の機会となるであろう」

開かれたおみくじの結果を読み上げた二人は顔を見合わせて苦笑を浮かべる。

揃って大凶を引くとは何とも運がない事だと。占いなどと言うのはそういうものだと言つても、書かれている内容もまた何ともそれっぽいのがいやらしい。

決別の時という言葉でリインが真つ先に浮かぶのはアンゼリカの存在だ。

貴族派と革新派の争いに対して中立のトワにクロウにジョルジュとは異なり、彼女は歴とした四大名門ログナー侯爵家の人間であり、自分は鉄血宰相ギリアス・オズボーンの息子だ。

こうして立場の違いなど些細な事だと言い放てるのは、トールズ士官学院の生徒だからこそ。

卒業して大人になれば、一筋縄では行かなくなってくるだろう。私人としての感情よりも公人としての立場を優先させなければならぬ。いつが訪れるのが大人になるという事なのだから。

そして親友と恋人がそんな風に対立する事になればトワ・ハーシエルという優しい少女は間違いなくその心を痛めるだろう。どうしてこんな事になってしまったのか、と。リインとアンゼリカの二人が立

場など関係なくただの友人同士であれた学生時代に戻りたいと思うかもしれない。

全く以て実にそれらしい内容だ。誰かの作為があるのではないか等と疑ってしまう程に。

「やれやれ、これはアレかな？ 幸せなカップルに対する意趣返しという奴かな？」

幸せ一杯といった様子のカップルには警告の意味を込めて、不吉な内容ばかりが書かれたくじを引かせる。如何にも目の前の悪戯好きな少女ならばやりそうな事だとリインは思つて告げると、同じ事に思いついたのだろう慌てた様子でリンデは双子の妹の首根っこを掴まえて、その場から姿を消して

「ちよつとヴィヴィー！ いくらなんでもこういう悪戯は感心しないわよ！」

今度ばかりは真剣な様子で双子の妹へと雷を落とす。何せこの出し物はクラス全員が協力して作り上げたものだから、お客様に気分良く帰ってもらうために、くじの中に不吉なものはいれないでおく。それが事前の話し合いで決めた内容だったのだから。流石に悪戯としても度を越している。

しかし、そんな姉の怒りにヴィヴィはきよんとした様子を浮かべ

て

「いや、今回は私は無実だよ」

姉の疑いを真っ向から否定する。自分はそんな事をした覚えはないと

「……本当に？」

「うん、信じてよ。いくら私でもクラスの皆で決めて頑張ってきたことを、悪戯で台無しにしようとは思わないって」

ならば一体誰がそんな事をしたのかとリンデは気味が悪い思いに囚われる。

結局あらためて箱の中身を確認したところ、不吉な事が書かれていたのはアレだけで二人はクラスの中の誰かの悪戯だろうと結論付け、無理に犯人捜しをして楽しい空気を台無しにすることもないと思ひ、

そこで犯人捜しを打ち切るのであった……

・・・

「運命は残酷……か」

そんな事は当の昔に知っている。

永遠に続くと思っていた温もりが突然奪われたあの日から。

そんな思いを二度としないために、させないために自分は強くなったのだから。

残酷な運命とやりに抗うために、いやねじ伏せるために。

傍らにいる何よりも誰よりも大切な少女を必ず護りぬくのだと
リインは今一度強く誓って……

「心配しなくても大丈夫さ。俺たち5人が培った絆は、運命なんてものに流されて壊れる軟なものじゃない。そうだろう？」

どこか不安そうな顔をしたトワを安心させるように優しく微笑みかける。

何故ならば初めて会った時からわかっていたのだから。自分とア
ンゼリカの立場が決定的なまでに違うという事は。

その上で、自分たちは親友同士となった。故に、例え立場の違い故に敵対する事になろうともその程度で壊れるほどに軟なものではないとリインは信じている。

不滅なものなどこの世にはないと知っている、それでも自分たちのこの紡いだ絆と重ね合った時間には決して嘘などなかったのだと、そんな風に。

「リイン君……うん、そうだよ。もしも二人がすれ違うことになっちゃうような事があったとしても、その時はしっかりと私が繋ぎ留めてあげるから安心してね」

そしてトワもまた笑顔を浮かべながらリインの言葉にうなずく。そして二人はその場を立ち去り出す。

存分に満喫したので、そろそろ会長と副会長の仕事に戻ろうとどこまでも真面目な様子で。

待ち受ける運命の残酷さをこの時の二人は、まだ真実理解していなかった……

鉄血の子と《灰の騎神》

旧校舎の奥底に現れたくく巨大なる影の領域くく、そこをリイン・オズボーンは単騎で踏破していく。目的はただ一つ、巨大なる力の欠片、帝国の伝承に謳われるくく騎神くくをその手に掴むためである。

最終試練は独りで受ける事となる、これは事前にリインの導き手たるエマ・ミルステインによって聞いていたことである。如何なる理由と意図かはわからないが、最後の試しは起動者候補が独りで受ける事となり、それまで試練を共に潜り抜けてきた仲間が居たとしても独りで受けるようになっていいる、これは全ての騎神に共通しているのだと。

これにはこの試練を作り上げたくく地精くくの意図が関わっている。

そもそもこの試練は騎神の力を振るうに相応しい起動者を選定するためのものであるが、では此処で一つの疑問が湧いてくる、何を以て起動者に相応しいとするのかである。

「――正しき心を持つものだろうか？否、”正しき”等というのは時代と場所によっていともたやすく移ろうもの、故にそんなあやふやな正しさだとか優しさ等といったものは地精の用意した起動者の選定には影響しない。

そもそも、そういった心的な要素が起動者の選定に既に関わっているというのなら、アレほど導き手を務めるエマ・ミルステインはリイン・オズボーンを起動者と認めるまでに時間を要さなかつただろう。魔女の眷属ヘクセンフリップが騎神という力の担い手として相応しいかを見極めるのが、”優しさ”だとか”正しさ”だとかといった人の主観によってでしか図る事を出来ないものを基準としているのなら、地精の用意した試練の基準はどこまでも単純なもの、すなわち”力”である。

どれほどの名刀であつても使い手が木偶であれば、その真価を發揮する事は出来ない。

だからこそ、彼らは自らが作り上げた”傑作”と称するに足る騎神という道具の使い手にもそれ相応の名人を求めた。

量産機ならば使い手を選ぶことのない汎用性が求められるが、この世にわずか7機しか存在しない騎神は決して使い手に道具を合わせようような生易しい代物ではない。

むしろその逆、「我らが作り上げた騎神という傑作を振るうに足る使い手である事を証明してみせよ」、つまるところ地精の用意した試練というのはそういう事を言っているのだ。

だからこそ、地精の用意した最後の試しは起動者候補が単騎で突破するしかないのだ。

何故ならば、騎神を振るうのはどれほど心を通わせた仲間が居ようと、どこまで行っても起動者一人なのだから。

故にこそ求められるのは単騎にて試練を突破できるだけの力を有する者。

無論、最初からそれを求める程に地精とて鬼ではない、高い潜在能力を持つが現時点ではまだ未熟な雛鳥、そういった存在が成長できるように段階を経て試練を突破出来るようにしている。

あえて言うならば、それまでの試練は試練というよりはむしろ起動者候補を鍛え上げるための訓練場、地精が用意した真の意味での最終試練、それこそがこの最後の試しなのである。

そしてそんな道具の方を使い手に合わせるのではなく、道具を振るうに相応しい使い手を求める偏屈技術者集団の用意した試練をリイン・オズボーンは難なく突破していく。早く早く、ひたすらに早く駆けながら、襲い来る敵をその双剣で蹴散らしながら。

(何時になるかと心待ちにしていたが、まさかいくらなんでもこんなタイミングで来るとはな)

よりにもよって学院祭期間中などというとんでもないタイミングで試練が発動した事にリインは舌打ちする。

事情を知っている学院長に<<騎神>>関連だと説明して、何とか待ってもらう事が出来たが、そうでなければ危機管理の観点上学院祭を中止する必要も発生しただろう。

設けられたタイムリミットは0時まで。それまでにこの試練を突破しなければ、全校生徒が必死に積み上げてきた努力が水の泡になっ

てしまう訳だ。

故にこそリイン・オズボーンは全速力で以て試練を踏破していくのであった……

・
・
・

影の領域を踏破した末にリインが到達したのは戦場跡のような荒野であった。

兵どもが夢の跡、そんな形容がまさしくピッタリという他ない不毛の大地。

そこにはいくつもの剣が縦横無尽に突き刺さっていた。錆だらけの剣、刃こぼれだらけの剣、折れた剣。柄も刀身もボロボロに朽ちて、もはや剣としての体裁を保っていないものもあった。

数百、いや数千にも及ぶその大地に突き刺さった剣の中で無傷なものはまだ一つとして存在しない。

それはまるで夢や理想を抱いて戦う事を選んだもの達の夢の果て、その末路を示すが如き光景だ。

譲れない理想や信念、願い、あるいはただただ生きて帰りたいという思い、そんな譲れない何かを、輝く剣を手にして誰しもが抱いて戦場に赴く。

そして、最後にはこうなるのだとその光景は訴えていた。

引き返すのならば今の内だぞと、お前も必ずやこうなるのだと。

そんな光景に臆する事無くリインは先へと進んで行く。

何故ならばその身には成し遂げたい夢と理想があるのだからと。

自分は決して止まらない。折れず、朽ちず、錆びずにこの理想という剣を変わず抱き続けてみせると荒野を進んでいく。

そうして進んで行った先、そこには巨大な影が鎮座していた。

それは世界を護る守護者でも、世界を砕く破壊者にもなり得るもの。

聖性も魔性もどちらも等しく有するもの。

そんな相反する属性がそれの中では絶えず激突し合っていた。

『汝、カラ求メルカ?』

言葉を発しただけで莫大なる力の奔流がリインを襲う。

気圧されてなるものかとリインは強く拳を握り締めて

「ああ、求めるとも。大切な者を護りぬくために、そして敵を打ち砕くための力を俺は求める！」

今、エレボニア帝国は、いや西ゼムリア大陸は激動の時代を迎えようとしている。

<<帝国解放戦線>>が壊滅した事で表向き貴族派と革新派の対立は落ち着いたように見える。

しかし、それはあくまで表向きに過ぎない。既に貴族派が最低でも一機、騎神とその起動者を確保している事とその騎神を基にした何らかの新兵器を開発している事はほとんど明白と言って良い。

新兵器がどの程度のものかは不明だが、もしもそれによって革新派の持つ軍事的優位を覆せると判断すれば、そして革新派側に何らかの隙が生じれば、それに乗じて強硬手段に訴えてくる可能性は大いに有り得る。

そしてクロスベル問題はそんな決定的な火種になりかねない。

クロスベル自体がではなく、それを巡って生じる共和国との争いがある。

貴族派という内憂と東の脅威たるカルバード共和国の存在、どちらを相手取る事になるかは不明だが、それでも<<騎神>>という「巨イナル力」を手にする絶好の機会、それをみすみす逃す道理などリイン・オズボーンには存在しない。

力の伴わぬ理想など子どもの紡ぐ夢物語でしかないのだから。

手に入れたいと欲する未来が、掴み取りたい明日があるのならそれを手に入れるためにも、護りぬくためにもどうしても力が必要なのだから。

その果てに、あの荒野に突き刺さった剣のように我が身がボロボロになったとしても一向に構わない。

何故ならば、祖国を、そしてそこに住まう民の当たり前の幸福を護るのが軍人の役割なれば。

戦う力のない人たちが、己の無力さに嘆くような地獄を味わう必要などないように、戦いという地獄を引き受けるのが軍人の使命なのだ

からと。

どこまでも高潔に強い意志を燃えたぎらせてリイン・オズボーンはその巨大なる影に宣誓する。

「ナラバ証明シテミセヨ」

そう告げると同時にリインを巨大な焰が包み出す。

言葉だけではどうとでも言える、それを真実にして見せろと言わんばかりに。

どこか荘厳で神聖さを覚える白焰になったかと思えば、禍々しい黒焰へと変わりとその焰は姿を変えていく。

その焰は激しきとは裏腹にリインの身を焼く事はない、しかしその精神を焼いていく。

莫大なる力の奔流、それがリインを襲う。嵐の如く荒れ狂うそれはまるで一定の方向性というものが存在しない。

この力に方向性を与えるのは担い手だと告げるかのように、ただただ莫大な「力」がそこには在るだけなのだ。

これこそが鋼の力を宿す騎神の《起動者》がぐり抜けなければならぬ真の最終試練、焰の至宝と大地の至宝が融合した《巨イナル》が自身を振るうに相応しき《起動者》を選定するためのものである。

これまでリインがぐり抜けてきた試練、それはあくまで至宝の眷属達、人が作り上げた後付のものに過ぎない。

焰の眷属たる魔女はこの力を振るうに相応しい心を有しているかを確かめた、巨イナル力には巨イナル責任が伴う、そう信ずるが故に。悪しき者がこの力を手にしないように、正しくこの力が使われる事を願って。

大地の眷属たる地精はこの力を振るうに相応しい使い手かを確かめた、最強の武器は最強の使い手が持つてこそ意味がある、優れた道具を振るうに相応しいの優れた使い手であると信じるが故に。武器の力を自分の力と勘違いする、そんな使い手になど我らのこの「傑作」は相応しくないと思っている。

そして《巨イナル》が自分の力の担い手に求める事、それは「意志の強さ」である。

善悪や正邪、そんなものをこの至宝は問わない。意志を持たぬこの至宝はどこまでも自分という力を欲する人の意志や願いに応えるだけである。

だが内部で自己相克を繰り返す、この至宝を断片と言えど振るうには並大抵の意志では届かない。

必要なのは強烈な意志の強さ、力への飢えとそう称しても構わないかもしれない。

溢れ出る莫大な力の奔流、方向性など持たないそれに指向性与えてやる事。その上でその力に吞まれぬ事

それこそが、この最終試練で起動者に求められる事である。

そして、これに失敗した時、その者は《巨イナル》の持つ呪いにその身を侵される事となる。

本来存在した《七至宝》であれば、無論このような危険を犯す事はなかった。

だがそもそも《騎神》とは焰の至宝と大地の至宝、その激突によって偶発的に発生してしまった《巨イナル》それより溢れ出る莫大な力の奔流を受ける器として用意した、言わば苦肉の策として作られたもの。

だからこそ、これの担い手には強固な意志が必要となるのだ。

——道具とは何時とて人に振るわれるものでしかないのだから。

——力を何に使うか、それを決めるのは何時とて人の意志なのだから。

(身体が熱い……しかし、心地良い！)

膨大な力の奔流、それが焰となって我が身を焼いていく。

だがどういいうわけだか、苦痛はまるで感じない。

どころかそれがたまらなく心地よく感じる。

力。力。力。力。力。

巨大な力がまるで我が身より溢れ出てくるかのような感覚。

それはラインが使ってきたあの鬼の如き力に似ているが、それよりもはるかに強大なものだ。

瞬間、ラインの脳裏に宿るのはかつての記憶。

決して忘れることなど出来ない母を失い、生家を焼かれたあの日の光景だ。

(そうだ、この力があれば俺はあの時失わずに済んだ!)

たかだか猟兵の軍団など取るに足らない、人の身でこの力を前にして抗うことなど出来るはずがないのだから。

(俺から大切な物を奪う存在を、塵に出来たはずだ……!)

そうだ、この力があればそれが出来たはずなのだ。

敵は総て塵にしてしまえば良い、そうすればもう何も失わずに済む。

力とは振るってこそ意味があるのだから。

瞬間リインを纏っていた黒と白、二色の焰のその均衡が破られ徐々に白き焰が黒き焰へと染まっていく。

巨大な力の持つ魔性、それにリインが魅入られ、今までも幾多存在した修羅道へと堕ちた起動者達と同じ末路を辿ろうとした、その刹那

(いや、違う!)

リインの脳裏に過つたのは大切な少女の笑顔。

それを契機にリインの心に次々と大切な人々の笑顔が過る。

そうだ思い出せ、自分が何のために“力”を求めたのかを。

それは敵を殺すためじゃない、護るためだ。

護るためにこそ自分は力を求めた。

敵を殺すというのはあくまでそれを実現させるための手段に過ぎない。

剣は凶器で剣術は殺人術、武とは暴力であり、軍隊とは国家の持つ最大の暴力装置だ。

どれほど綺麗な言葉で飾ろうとそれは決して揺らがない真実だ。

だが、その真実に吞まれてはいけない。

力なき正義と理想はただの綺麗事だが、理想と正義を失った力の持ち主は単なる“怪物”に他ならない。

(そうだ、俺はそんな怪物などではない……いや、怪物になどならない!)

何故ならば、自分は

「俺は、誇り高きエレボニア帝国の軍人リイン・オズボーンだ！」

愛する祖国を、そこに住まう民を、そして大切な人の幸福を護るためにこそ力を求めたのだから。

決意を宣した瞬間、漆黒へと染まりかけていた焰は白く神々しい焰へとその姿を変え、その場を包み込んで行く。

陰惨な戦場、そこを神聖なる輝きが照らし、道を切り開いていく。

「散っていた者たちの願いを背負い、進め」

それこそが「英雄」の役目なのだと言わんばかりに。

その光の道をリインは突き進む、振り返る事無く真っ直ぐに。

それこそが自分の為すべき事なのだと信じて。

そして突き進んだその道の先で――

「汝ガ今代ノ起動者力」

全長八アージュほどの巨大な灰色の騎士人形。

それが発した言葉にリインは不敵な笑みを浮かべて。

「ああ、そうだ。俺がお前の起動者だ。《灰の騎神ヴァリマール》よ」

此処に巨いなる運命はついに動き始める。

“力”を手にした“英雄”は走り出す。祖国のために、民のために、自分以外の誰かのために。

護るべき者たちのために、力尽きるその時まで戦い続けるのだ。

何故ならば英雄譚とは“英雄”の死によって幕を下ろすものだから。

どこまでも高潔に清廉に護るために殺し続けるのだ。

例え我が身が血に染まろうと、地獄へ堕ちようと。

それによって、大切な者を護れると信じて……

鉄血の子と《戦乙女》

学院祭二日目はつつが無く執り行われる運びになった。

試練の終了と共に、旧校舎の異変もまた解消されたからだ。

そしてヴァンダイク学院長への報告を終えると同時にリインは貸与されていた専用の通信機を使い、ついに《騎神》をその手中に収めたことをレクターとクレアへと報告。

騎神とその起動者である自分の処遇をどうするかについては、おそらく理事長を務めるオリヴァルト皇子と学院長であるヴァンダイク名誉元帥と話し合いの上決定されるので、追ってどうするかは指示がされるのでそれを待つようにとの連絡を受けるのであった。

そうして開催された二日目の学院祭、リインとトワの二人はある人達を出迎えていた。

「トールズ士官学院へようこそお越し下さいました、セドリック皇太子殿下、アルフィン皇女殿下、オリヴァルト殿下。案内役を務めさせていただきます」という至上の榮譽をお与え頂き、誠に感謝の念が耐えません」

「精一杯務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします！」

洗練された所作でリインが、如何にも緊張した面持ちでトワはその訪れたVIPへと挨拶を行う。

「あんまりそう、固くならないでください。お二人は卒業してしまわれますが、僕達は来年入学する以上お二人は僕たちの先輩に当たるわけですし」

ね、クルトと傍らにいる友人にして守護役たる少年へと語りかけながらセドリック皇太子は笑顔で告げて

「セドリックの言うとおりですわ、せっかくの学院祭なんですものどうか気軽に、それこそ遠方より訪れたご友人を案内する位の心地で接して頂ければと思いますので」

そこでアルフィン皇女は傍らに控えている今回護衛役を務めてくれている女性へと悪戯っぽい笑みを浮かべて

「そういうわけですから、クレア大尉も私達に気兼ねせず存分に義

弟さんと心温まる姉弟の交流をしてくれて構いませんよ。何なら、私もクレア義姉様と呼ばせて頂いても構わないでしょうか？前々から私、姉様も欲しかったんです」

「さ、流石にそれは余りに恐れ多いかと……」

天真爛漫な様子を見せるアルフィン皇女にクレアは困ったような笑みを浮かべる。

どうにも兄であるオリビエ共々この奔放な兄妹の相手を務めるといふのは一筋縄では行きそうになかった。

嫌というわけでは決して無く、権威や立場を振りかざして尊大な態度を取るような者よりは護衛のし甲斐があるのだろうが、それにしてもクレアのような生真面目なタイプにとってはなかなか苦勞が耐えないタイプと言うべきだろう。

「アルフィン、あんまり無理言って困らせちゃ駄目だよ」

「そうですよ、姫様。姫様のご冗談は些か刺激が強すぎます」

しかし、そんな奔放な皇女を皇太子と皇女の友人たるエリゼ嬢が嗜める。

あるいは、この奔放な皇女に常日頃から振り回される者としてある種のシンパシーをクレアに抱いたのかもしれない。

友人と弟からの苦言にアルフィン皇女は少しだけその天使のような愛らしい顔をしかめて

「……そんなに私は無理言っているでしょうか？アデーレ大尉はどうでしょうか？私からアデーレ姉様と呼ばれたら困りますか」

傍らにいるもうひとりの護衛役を務める金色の髪を近衛軍の女性将校アデーレ・バルフェット大尉へと語りかける。

すらりと引き締まった肉体に美人と称してなんら差し支えのない顔立ち。

そして、その隙のない佇まいは紛れもない“達人”のそれである。「あはは……流石にそれはちよつと、私も困りますね。」

でも、姫様が望まれるようでしたら出来るだけ壁を作らないようにさせて頂きますので」

それまでの凜とした印象を崩して、どこか人懐っこい笑みをアデー

レ大尉は浮かべながらアルフィン皇女の言葉に応じる。

アデーレ・バルフェットはトールズ士官学院を次席で卒業した俊英にして《戦乙女》^{ヴァルキユリア}の異名を持つ近衛軍きつての使い手である。

クロイツェン州のアルゼイド子爵家が治めるレグラム帝国騎士の家に生まれた彼女は歳の近い兄と共に父より剣の手ほどきを受け、父親としてはほんの護身用程度のつもりだったのだろう、結果、その才を見事開花させた。

天稟を有していた彼女が、人格はともかく才においては凡庸であった兄と父を追い抜くのにそう、時間はかからなかった。

此処で彼女の兄と父が大人気なく自分以上の才を女だてらに有するアデーレに妬心を拗らせるような人物であれば、あるいはその才は日の目を見る事なく終わったか、あるいは現在は違う他者に対して刺々しい人物となったかもしれないが、彼女にとって、そしておそらく帝国にとっても幸運な事にこの二人は才こそ凡庸であったものの、その精神はまさしく「騎士」足り得る高潔なものであった。

自分では既にこの麒麟児を育てる事は出来ないと思つた彼女の父ロックス・バルフェットは娘に意志を確かめた「お前の剣の才は私も兄であるレオンも到底及ばぬものである。だが、才があるからといって必ずそれを振るわなければならないわけではない。お前は騎士としてその命を皇室へと捧げる覚悟があるのか？」と。それは騎士としてではない、父としての娘を思う親心であつただろう。

そしてそんな父の問いかけに真剣な面持ちで頷き、答えた事で彼女の歩む道は定まった。

程なくして彼女は父の推薦を受け、帝国においてもその名も高きアルゼイド流の道場へと通う事になったのだ。

そして三年の手ほどきを受けた後、大帝縁の名門トールズ士官学院へと入学し、次席という優秀な成績で卒業した彼女はその実力と経歴を買われて父も所属する近衛軍に入隊。メキメキと頭角を現し、2ヶ月程前に起きた事件の責任を取る形でアルフィン皇女の護衛の任についていた士官が解任された後任としてその地位についたのであつた。

「むう……アデーレ大尉までそう仰るのなら我慢します。

でも、本当にお二人とも気兼ねしないようにお願いしますね。

お二人にとつても思い出深い場所でしょうし」

「お心遣い、痛み入ります」

「ふふ、ありがとうございます殿下。そのお心遣いに心よりの感謝を」
皇族の護衛を務める近衛軍は各地の領邦軍より選抜された、または士官学院を上位で卒業した精鋭達が集う花形部隊である。

選抜される人員は単純な武力に限らず、皇族の守護を担う者として恥ずかしくない作法や気品、そして家柄を求められる。

近衛軍に所属するものは一人の例外もなく最低でも帝国騎士の称号を持つ貴族階級なのだ。

そのためと言うべきか、どこまでも実力重視で正規軍より選抜された鉄道憲兵隊とは互いに有力な人材を取り合いになる事も含め、互いにライバル視しており、夏至祭の時のアルフィン皇女誘拐未遂という事件が起きた事でそれはより一層加速。

もはや不倶戴天と称しても過言ではない位にその関係は悪化したのだが……

「それじゃあ、一緒に頑張りましたようねクレア！心配せずともこの私が居るからには百人力。それこそカレイジャスに乗ったつもりで、どっしり構えてくれていれば良いですよ」

「ええ、頼りにしていますよ」

どうやらアデーレ大尉に関してはそのへんの隔意はないようだ。

いや、むしろどちらかという彼女のクレア大尉への態度は旧友に対するような気安いもので……

（ああそうか、彼女が義姉さんの言っていた士官学院時代の友人か）

諸事情によって士官学院時代のクレアは《氷の乙女》等と揶揄される位、人を寄せ付けず孤高を保っていたが、そんな彼女にも心を許せる人物が3人居た。

一人目は帝国宰相ギリアス・オズボーン、彼女にとつては恩人であり、トールズへ進む事を後押ししてくれた後見人のような立場でもある存在だ。

二人目はそんな恩人たつての頼みによって、家庭教師を引き受けることとなつた鉄血宰相の實の息子であるリイン・オズボーンである。人間不信に陥りかねない出来事を経験した彼女にとつて、純粹に自分を慕ってくれる義弟との日々はまさに宝石のようなものだったのだ。

そして三人目こそが、件のアデーレ・バルフェットである。貴族、平民を問わず寄せ付けずに孤高を保っていた首席の氷の乙女とは裏腹に、気さくで茶目つ気があり、天然の愛嬌さを有する次席の彼女はまたたく間に人気者となつた。

そうなつてくると自分より上の首席に位置する人物という事もあつて気になつてくるのが人の性、入学してから数週間経つたある日アデーレ・バルフェットはクレア・リーヴェルトの下を訪ねて、その愛くるしい笑みを浮かべて告げたのだ「友達になりませんか？」と。それは単に成績が近いのもあつたが、人を寄せ付けずに孤高を保つていながら、どこか寂しさを漂わせたクレアの事を放っておけないと思つた彼女の生来のそして家族の温かな愛を受けて育つた故のお人好しさが為せる、善意によるものであつた。

そんな、男が言われればほとんど即答で、女であっても大半は快諾する誘いに対してクレアは氷のように冷たく拒絶した。今振り返れば赤面するしかない、「あなたのような恵まれた人に私の気持ちは絶対にわからない」等と告げて。

普通であれば、そのまま孤高を保つ平民の才女と愛嬌に溢れた末席とは言え歴とした貴族たる次席の才女と二人の道は交わる事無く終つたかもしれない。しかし、アデーレ・バルフェットの場合においてはそこで終わらなかつた。

彼女はめげずに何度もアタックしたのだ、アデーレがそこまでする必要はないよと友人の行為を無下ににするクレアに対する憤りを抱いた友人達の静止を振り切りながら。

そしてそうなつてくると徐々に絆されていくのが人の情というものである。

基よりクレアが《氷の乙女》等と揶揄される位に孤高となつていたのは、ある悲劇によつて人間不信に近い状態に陥つていた事によるも

のだ。

生来のクレアは決して、独りを好むタイプではなく、むしろ人との交流にこそ喜びを見出すタイプであった。

そして折しも、自分を先生と呼び慕ってくれるある少年と出会って徐々にはあるが、氷となっていたその心が溶け始めていたのもあって……

「貴方には負けました、アデーレさん」

微笑みながら、全面降伏を行い、以後クレア・リーヴェルトとアデーレ・バルフェット、トールズ士官学院221期生の首席と次席のコンビの友情は卒業して道が分たれた今日まで続いているのであった。

・・・

その後、セドリツク皇太子、アルフィン皇女、オリヴァルト皇子を案内するという大役を務める事になったリインとトワは学院の各所を案内する事となった。

みっしいのストラップを欲しがったアルフィン皇女の願いを受けて、みっしいパニックに挑戦したアデーレ大尉がリインの記録を抜こうとムキになるなど軽いハプニングはあったものの、殿下達にも概ね満足頂き、出し物を一通り見終えるとリイン達は講堂の貴賓席へと案内する。

そうしてI組のオペレッタ終了後に始まったのは、リイン達とも縁深い後輩であるVII組のステージ。

スポットライトを浴びながら演奏を行う後輩たち、その中に混ざり笑みを浮かべる義妹たるミリアムの姿にリインは感慨深い思いを味わう。

(良かったな、ミリアム)

結果として《C》はトールズ士官学院に居るといふ情報局のプロファイリング、そしてクロウが《C》かもしれないというミリアムの直感は大外れだったわけだが、その結果、情報局員《白兔》としてではない、トールズ士官学院特科クラスVII組所属のミリアム・オライオンとしての仲間や友人が出来たわけだから怪我の功名と呼ぶべきだろう。

仲間と共に楽しそうに踊り、歌うその義妹の姿にリインは昨年の自分を重ねながら、しばらく幸福な思いを感じるのであった……

夢の終わり

眼の前の光景をクロウ・アームブラストは感慨深い思いを抱きながら眺めていた。

リン・オズボーンとトワ・ハーシエル、アンゼリカ・ログナーとジオルジュ・ノーム、クロウにとつての掛け替えの無い親友たちが幸せそうに踊るその光景を。

(この光景を……俺は自分の手でぶっ壊す事になるわけだ)

引き返すならば……今の内だろう。

ザクセン鉄鉾山の一件で帝国解放戦線は完全に壊滅したという事になっている。

このまま何食わぬ顔をして一緒に卒業する、そうすれば自分は、この友情を失う事はない。

旧ジュライ市国最後の市長の孫にして鉄血宰相に憎悪を焦がす帝国解放戦線Cという本来の素顔を捨て去って、トールズ士官学院所属の不良生徒という仮面がそのまま素顔へとスライドするわけだ。

そうすれば、失わずに済む。友情を。この士官学院で築いた絆を。

そして、友人たちの結婚式にでも呼ばれてしたり顔で「お前もそろそろ身を固めたらどうだ」等とお節介を焼いてくる友人に辟易としながらも、近況を語り合ったり、時に思い出話に華を咲かせてそのまま歳を取って行く……ああ、悪くない未来だろう。

しかし

(は、出来るかよ。そんな事)

そういう未来を、恨みを忘れて前を向いて生きていく、そんな生き方を捨てて復讐する事を選んだのは自分自身だ。

……そのために既に多くのものを巻き込んだ。

……同じ目的を抱いた同志達を捨て駒にさえした。

……何よりも、自分自身がこの胸の奥底にこびり着いた思いをぶつけずには要られないのだ。

故に、自分は選ぶのだ。友情を捨ててでも、過去に対する決着をつける事を。

だから、最後に眼に焼き付けておこう、目の前の光景を。

自分が叩き壊す事となる、幸福を良く心に刻み込んでおくのだ。

そんな事を考えながら、クロウ・アームブラストは後夜祭で誰と踊るでもなく、共にステージを行ったⅦ組の輪に混ざるでもなく静かに独り佇んでいるのであった……

・
・
・

後夜祭、踊り終えたリインとトワはそつと腰掛けて、焚き火を伺いながら話をする。

「……もうすぐ、学院祭も終わっちゃうんだね」

「ああ、そして俺達の学院生活も」

これまで共に乗り越えてきた多くの思い出が二人の心の中に過る。初めて学院で出会った日の事、生徒会で一緒に過ごした日々、そして5人で協力してサラ教官の無茶振りをこなした日々。2年生になつてからは、Ⅶ組という後輩を率いて特別実習に赴きながら、会長と副会長として共に協力しながら数々の行事を成し遂げてきた。

そして生徒会活動の集大成とも言うべき学院祭を今、大成功の内に終わろうとしている。

これで終わりなのだとなんか思いがトワの心に過つて……

「ご、ごめんね……これが最後の学院祭で、もうじき学院生活も終わるんだって思ったら、なんだか感極まっちゃって……」

流れる涙を拭って精一杯笑顔を作りながらトワは気丈に振る舞おうとする。

そんな恋人のいじらしい姿にリインはそつと微笑みながら抱きしめて

「大丈夫さ。学院祭が終わっても、いや学院生活が終わったとしても、それで俺達の関係は終わりじゃない。

常に一緒に居る事は出来なくても俺の、リイン・オズボーンの帰る場所はトワ・ハーシエルの居る所だから」

卒業すれば自分たちはバラバラになる。

それぞれの目指す未来に向けて歩みだす。

故に今までのように常に一緒に居る事は出来なくなるだろう。

それこそが旅立ちなのだから。

だけど、そんな程度で自分たちの紡いだ絆は消えたりなどしない。そして、戦場という戦いに赴く自分が帰りたいと願う場所、それは間違いなくこの陽だまりのような少女の居る所なのだから。

「リイン君……うん、約束忘れないでね」

そうして、二人は残された時間を少しでも一緒に居るために、しばらくそのまま寄り添い合うのであった……

……

そしてそんな義弟の姿をクレアはどこか切なげに見ていた。

めでたいことだ、彼女のトワ・ハーシエルがどのような少女かは良く知っている。

健気で優しい素晴らしい少女だと思う、あの子の異性を見る目は確かだったのだと、そう思う。

どこか我が身を省みない傾向のある子なので彼女の存在が楔になってくればとも思う。

子どもだった思っていた義弟の成長を嬉しく思う気持ちもある。祝福しなければならぬという思いも。

されど、どうしても「クレア義姉さん、クレア義姉さん」と慕ってくれて、自分に向けられていたあの宝石のような笑顔を向けられるのが、これからは自分ではないのだと思うと、どうしても一片の寂しさが過ってしまうのだった。

「貴方の義弟君、なんとというか可愛気がないですね」

そんな風に物思いにふけていると傍らに居た友人がどこか面白くないような顔を浮かべながらそんな事を呟くものだからクレアは眼を丸くして

「そう……でしょうか？ 私にとっては本当に可愛い義弟なんですけど……」

人間不信に陥っていた自分にとって、ただひたむきに慕ってくれるあの子の存在がどれほど救いになったことか。

もしもあの子に出会って居なければ、それこそ今こうして傍に居る友人さえも遠ざけて、どこまでも氷の如き孤高を保っていた可能性さ

えあるのだ。

だからクレアにとってリインは本当に本当に可愛くて仕方がない義弟なのだ。

「……そこに失った実の弟と重ね合わせている側面があったとしても。」

「ええ、可愛くないです。なんですか、あの宰相閣下の実の息子の上に首席でヴァンダール流皆伝の腕前っただけでも出来過ぎな位なのに、おまけに可愛らしい恋人まで居るとか！隙がなさ過ぎてむかつ腹が立つてきますよ！こちとら彼氏居ない歴年齢だというのに！」

そうして告げられた私怨丸出しのその友人の言葉にクレアは思わ
ずずっこける。

「くくく何が《戦乙女》じゃ。こちとら何も好きでいつまでも乙女で居るわけじゃないやい！」

友人が何気なく叫んだその言葉、それがクレアの胸に突き刺さる。
そうだ、考えてみたら自分も既に20半ば、にも関わらず氷の乙女等と呼ばれて、その異名に相応しく未だ異性との交際経験はない。

卒業してから少しでも早く恩人である宰相閣下のお役に立とうと職務に精励していた結果、ある程度の地位に就く事は出来たが、それと引き換えにと言うべきか親しいと言える異性など数える位しかない。

（これは、もしかしてこのまま行くとお局様というやつなのでは……）
子どもだと思っていた義弟がいつの間にかああして素敵な恋人を作ったのだ。このまま行くとそれこそ今はまだまだ子どもである義妹分のミリアムにまで先を越されるのでは……そんな焦燥がクレアを何時にもなく襲う。

「……クレア！私達、何時までも友達ですよね！」

そしてそんなクレアの様子に気づいたのだろうか。
アデーレはとても晴れやかな笑顔を浮かべながら、悲しすぎる形で友情を確認するのであった……

「えっと、お二人とも素敵な方ですからきつとすぐにでもお相手が見つかるとお伝えした方が……」

「辞めておきなさいエリゼ、まだ15歳の私達がそんな事を言っても嫌味にしかならないから」

そんな美女二人の哀しき友情を目の当たりにして二人の少女は少し憐憫の念を抱くのであった

・・・

そんな風楽しく男女で踊る二人組みと踊る相手が居ずに寂しい思いをする者という勝者と敗者を明確に別けながらも後夜祭は和やかに過ぎていったのだが、突如として来賓していたVIPや軍、政府関係者の持つ通信機が一斉にけたたましく鳴り響きだし、オリヴァルト皇子らを筆頭にVIPが姿を消しだした事で、徐々に場は騒然となる。

一体何事が起こったのかとその場に居合わせた者たちが訝しがっている、学院の責任者たるヴァンダイク学院長が姿を現して学院祭の終了を告げる。そして、さらに学院長を続けて

「それと――先程帝国政府より正式な通達がありました。

本日夕刻、東部国境にある《ガレリア要塞》が壊滅……いや、原因不明の“異変”により“消滅”してしまっただけです」

告げられた言葉、それにその場にいた誰もが息を呑む。

当然だ、ガレリア要塞は帝国にとって不倶戴天の仇敵たる共和国より国土を防衛するための最重要拠点であった。

帝国に置いても最精鋭と謳われる“赤毛のクレイグ”率いる第四機甲師団を筆頭に、常時三個師団もの部隊がそこには駐屯していた。

それが消滅したという事は即ち、帝国は自らを護る盾を消失したという事に他ならないのだ。

パニックには、ならなかった。余りの衝撃に頭が追いついて居ないのだ。

だってそうだろう、壊滅ならばまだわかる。共和国の大軍勢が攻めて来て奪われたというのならばまだ理解は出来る。

だが、“消滅”というのは一体どういうことなのか。あの巨大な要塞を一瞬にして吹き飛ばす新兵器でも現れたというのか。

混乱する一同を他所に、そこでヴァンダイク学院長は苦渋を飲み干

すかのような苦い表情を浮かべて、ヴァンダイクの代わりに姿を現したのはリインもよく知る人物で……

「リイン・オズボーン候補生！」

「はー！」

常とは違う帝国政府書記官としての顔で自分の名を呼ぶ、その義兄の呼声にリインは反射的に敬礼を行い前へと進む。

「帝国政府、及び帝国軍参謀本部よりの辞令を伝える。

ガレリア要塞消滅というこの未曾有の事態を受けて政府は特例ではあるが、帝国軍特務少尉へと任命する事を決定した。

帝国軍人として貴官の祖国と皇帝陛下への忠節を期待するものである」

告げられた言葉を聞いた瞬間にリインは総てを理解する。

つまり、政府はいや、父は自分に戦列に加われと言っているのだ。

灰色の騎神という力を以て、ガレリア要塞を消滅させた脅威を、帝国の敵を打ち倒せと。

それ以外にわざわざ、士官学院生である自分を繰り上げ卒業させる理由などないのだから。

「謹んで拜命させて頂きます！この身の総てを祖国と皇帝陛下へと捧げましょう！」

望むところだとリインは意志を燃やしてその命令を快諾する。

手に入れた力を使うべきは今だと、そう信じて。

そしてレクターへと従い、その場を離れようとする寸前

「リイン君！」

かつてのオルキスタワーの時のように不安そうにこちらを見つめる少女の姿

それを確認したリインは安心させるように笑みを浮かべて

「大丈夫だ、トワ。君を、そしてこの国を必ず俺が護ってみせる。

勝利の報告を携えて必ず生きて帰るからどうか安心して待っていて欲しい」

そうしてそのままリインは歩みだす。

その場にいる者たちの姿を目に焼き付けて。必ず護るのだと意志

を燃やして。

どれほどの脅威が相手だろうと自分はそれを打ち破り、必ずや勝利を齎すのだと誓って。

そうして英雄は進み始めた。

黄金色に輝いていた青春時代に別れを告げて。

この輝きこそが自分が護るべき宝なのだと信じて。

——黄金色に輝くその財宝の中に一発の漆黒の弾丸が眠っている事に気づかぬままに。

かくして鉄血の子は “灰色の騎士” となる

「リイン・オズボーン少尉！参りました！」

心の底からの敬意を伴った敬礼を施しながらリインは目の前にいる人物へと挨拶する。

そしてその息子の姿にエレボニアの実質的な最高権力者たる父は鷹揚に頷き

「よく来た少尉。状況についてはアランドール大尉より聞いているな」

「は。クロスベルの新兵器、恐らくは女神の七至宝に連なるものと推測されるそれによってクロスベルへと派遣した第五機甲師団は壊滅。そしてガレリア要塞が消滅したと」

女神の七至宝。それは早すぎた女神の贈り物と称される、空の女神より人が賜ったとされる古代遺物の中でもひととき強大な力を持っていたとされる代物である。曰く、それは人を幸福に導くためのものであったが、人という種それ自体が未だその道具を使うに足る器に達していなかったために、女神は人への愛ゆえに一度与えたそれを取り上げたというのである。全ての人が女神の教えを実践するに足る存在へと至れば、女神は再びそれを人へと授け、全ての人が幸福に暮らせる “楽園” と永久の繁栄が、この地上に齎される等というものである。

良くあるお伽噺、と笑い飛ばす事は出来なかった。お伽噺や伝説とというのは往々にして歴史上の出来事が基になって作られているものであり、このゼムリア大陸では古来よりそのお伽噺を裏付ける、現在の技術をはるかに上回る古代遺物が現れるからという実例があるからでもあるが、何よりも大抵の人間は多かれ少なかれ女神への信仰を抱いているからだ。

ゼムリア大陸の人間にとって七耀教会の教えは生まれた時から付き合うものだ。生まれ落ちると同時に七耀教会の聖職者よりの祝福を受け、成長するに従い教会の行っている日曜学校に通いだして基礎的な教養をそこで学び、やがて成長して大人になり愛する人と結ばれ

る際には教会で式を挙げ、そして老いて死ぬ際には教会で葬式を挙げる。まさにゆりかごから墓場まで付き合う事になるのが、七耀教会と空の女神の教えなのだ。

それ故大小はあれど、この大陸に住まう者にとって女神への信仰というのは半ば当然のものであり、素行不良の人物であつても教会はともかく空の女神はなんとなく信じているものだし、悪徳を犯した犯罪者であつてもやはり漠然と女神の存在を信じているものなのだ。

加えて、女神の存在を否定した“ある宗教団体”が心ある人間ならば憤りを禁じ得ない、まさに女神を恐れぬ所業を行った事もあり、このゼムリア大陸で空の女神を信じていない者等というのは圧倒的な少数派に属する上にそれを公言しようものなら、まず驚きと不信を以て受け止められるものなのだ。

そして“真面目で素直な優等生”として幼い頃より評判だったリイン・オズボーンは無論の事、そういった圧倒的な少数派に属する人物ではないので、当然女神への信仰心もそれなりに持ち合わせているし、七耀教会の教えもまた基本的には信じていた。故に女神の七至宝についても、世の大多数と同じくおそらくそういう強力な古代遺物が存在するのだろうとは思っていたところで、《騎神》等というこの上ない“実例”へと自身が出会う事になってそれは確信へと変わったのであつた。

「ならば当然わかるな、今我らエレボニアは紛れもない“国難”にあると」

「ええ、そしてそれを乗り越えるために我ら軍人に“勝利”が求められている事も」

射抜くような視線と共に告げられた父の言葉にリインは重々しく頷き答える。

対共和国に対する防衛の要であるガレリア要塞の消滅、この信じがたい出来事がエレボニア国民に与えた衝撃はとてつもなく大きい。

国家とはそこに所属する国民に“安全”と“安心”を齎すためにこそ存在する。

“軍隊”等という金食い虫である暴力機構を何故国家が有するか

と言え、それは「建前」の上では、国民の安全を保障するためなのだ。

そしてエレボニア国民にとって《ガレリア要塞》は《カルバード共和国》という「東の脅威」より自分たちを護ってくれる「象徴」であったのだ。——それを失った、いや「属州」であるクロスベルによって破壊されてしまったのだ。

しかも、先ごろ起こった《赤い星座》によるクロスベル襲撃をよりにもよって帝国政府の仕業である等と断定され、帝国人が《IBC》に保有していた金融資産を凍結するなどという暴挙を行った上でである。

帝国にとつては手袋を投げつけられた上に唾を吐きかけられて、頬を思いつきり殴り飛ばされたに等しい行為である。もはや「対話」によって妥協点を探り合うという外交努力でどうにかなる話ではない。この状況でそんな事を言いだしたものまず間違いなく、弱腰だと非難され、その政治生命を失う事になるであろう。

女神の教えは「右の頬を叩かれたら、左を差し出せ」であるが、国家の威信においては「殴られたら二度と齒向かう気が起きないように徹底的に叩きのめせ」こそが最善である。——無論、これはそれが出来るだけの力量差が彼我の間に存在する場合の話で、実際はある程度のところ妥協点を探り合う事が重要となつてきてそれこそが政治であり外交なわけで、相手が「対等の敵手」たるカルバード共和国であれば恐らくはそういう冷静な意見もそれなりに出たであろう。

しかし、今回それを行ったクロスベルはエレボニアの「属州」、言わばエレボニアの民から見たら「格下」の存在なのである。

まず間違いなくエレボニアの民は「蛮行」に及んだ秩序の壊乱者である属州に対する正当な裁きを求めるだろう。

当然だ、何故なら彼らが信じる祖国とは偉大な大国であり、祖国を守護する帝国軍は大陸最強の存在なのだから。

そして実質的な指導者たる鉄血宰相ギリアス・オズボーンは当然ながら、弱腰とは対極に位置する強気の外交姿勢と豪腕でもつて民から

の支持を獲得した人物だ。故にこの状況下で退く事などあり得ない。軍部もまたそうだ、此処で退けば民の怒りは蛮行を行ったクロスベルからガレリア要塞失墜という「失態」を犯した軍の方にこそ向けられる事となるだろう。

当然だ、有事に置いて役に立って貰うためにこそ高い金を費やし維持しているというのに、肝心要の有事で役に立たなかったらそれは、一体何のために存在するのかという話になる。

11年前、小国であるリベールへと侵攻し、まさかの敗北を喫して這々の体で故郷へと帰還した帝国軍の将兵を迎えたのは温かな労いではなく、民からの冷ややかな視線であった。

小国たるリベールに対する敗戦、その原因を民はリベール王国の奮戦ではなく軍部の失態ととったのである。「格下」と見なされている相手に負けるというのはそういう事だ。

軍人である事が恥ずかしい事であるとされた、帝国軍人にとっての冬の時代、それを現在軍の中核を担っている人物たちはこの上ない形で脳裏に刻まれている。

だからこそ帝国正規軍の多くは、そんな冬の時代を終わらせて軍と祖国に威信を取り戻した鉄血宰相を強く支持する。

再び傷つけられたその威信を回復するためにも帝国軍はその総力を挙げて、それこそ決死の覚悟を以て宰相からの命令を遂行せんとするだろう。

クロスベルの併合、そしてその後待ち受けるであろう共和国との戦争に勝利すること、それこそが帝国軍に求められる使命である。

出来るかどうかではない、やらねばならないのだ。それが出来なければ政府と軍は民からの支持を失い、ギリアス・オズボーンの成し遂げてきた数々の改革は全て水泡に帰すこととなるだろう。

求められるのは絶対的な勝利だ。傷つけられた威信を回復して、民と周辺諸国へとエレボニアの持つ「力」を示す絶対的な勝利。

そして向こうが至宝の力を持つというのならば、こちらにもまたそれは存在する。

帝国が開発した最新兵器たる「灰の騎神」を使い、クロスベルの新

兵器を打ち破る事。

それこそがリイン・オズボーンに課せられた使命である。

自分に何が求められているか、それを全て理解したリインは決意の炎を燃やして強く拳を握りしめる。

そしてそんな義弟の姿をレクター・アランドールとクレア・リーヴェルト、血の繋がらぬ義兄と義姉はどこか複雑そうな表情を浮かべたのに対して、血の繋がった実の父親は満足気に見つめて

「そういう事だ。我が帝国の誇る超兵器、『灰の騎神』の担い手たる『灰色の騎士』よ。

お前には、祖国を救う『英雄』となって貰うぞ」

告げられた言葉はさながら神から授けられた託宣の如く。

リインは己が右手を左胸に手を当てて頷く。

それは己が心臓を祖国と皇帝陛下へと捧げるといふ誓いだつた

……

……

「それで、その記憶の引き継ぎというのはどの程度の時間を要するもののだ」

灰の騎神ヴァリマール、その操縦席とも言うべき核の中でリインは己が愛機へと問いかける。

曰く、騎神の起動者は歴代の起動者の持つ記憶を引き継ぐ事が出来る。それ故に操縦法の慣熟を驚くほどの速さで進める事ができるし、それだけではなく年齢に不相応な様々な技術を持つことが出来るというわけだ。

例えば、歴代の起動者の中に剣の達人が剣を振るう経験を、大軍を指揮した者がいるならば用兵の経験を、王が居るのならばその経験をといった具合にである。

「個人差ハアルガ、最低デモ数ヶ月程度ハ要スル。

急激ナダウンロードハ意識ノ混濁ヲ引き起こス危険性ガ高イ。

可能デアルノナラバ、デキルダケ時間ヲ掛ケル事ガ望マシイタメ、本来デアレバ年単位デ徐々ニ馴染マセテイク事ヲ推奨スル」

無論、上手い話には往々にして裏があるもの。

何のリスクもなしにそんな宝を得られる程には甘くない。

当然、それには大きな危険を伴う。

記憶というのはその人物を形作るものだ、それを引き継ぐという事はすなわち自我があやふやになる危険性を孕んでいる。

まして歴代の起動者たちもまた騎神に選ばれた強固な意志を有した存在であり、その記憶は戦いに彩られている。

下手をすれば記憶が混ざり合ってしまう、自分が何者かを忘却してしまうという事態に陥りかねないだろう。

故にこそ、慎重に、本来であれば年単位で行う事が望ましいのだが

……

「そんな時間は無い。一週間でやれ、ひとまず騎神の操縦に関する記憶だけで構わない。」

無論、無茶とか無謀とかそういう言葉を知っていながら平気で無視して我が身を削る英雄気狂いはそんな忠告を平然と無視する。

時間がない、だからやれ。リスクは自分が背負うし、代償は支払うとしても自分なのだからやる価値はある、である。

「警告。ソレヲ一週間テ行ツタ場合、貴殿ノ意識ニナンラカノ異常ガ生ジル可能性ハ、99%。極メテ危険ト判断スル」

「0でないならば問題ない、やれ」

騎神の操縦が出来る様になること、それは勝負の土台に立つための前提条件である。

0でないというのならば、事が精神という分野である以上、後は自分の「意志力」の問題というわけだ。

0でないのならばそれを手繰り寄せて見せる、それさえも出来ずに、己が身を可愛がっていて「英雄」になどなれるはずがないのだから。

そうしてリインは願を掛けるように懐より一枚の写真を取り出す。

自分が何のために力を求めたのか、それを強く意識して己を見失わないようにするために。

この写真に映る掛け替えの無い友を、仲間を、護るためにこそ自分

は戦うのだと強く誓って。

ラインの持った写真、それはユミルの旅行から帰ってきた後にフィデリオに撮って貰ったⅦ組の面々とサラ教官、そしてラインの掛け替えの無い友たるクロウ、アンゼリカ、ジヨルジュに最愛の人たるトワが笑顔を浮かべている集合写真だ。

そしてその写真でラインは心からの笑顔を浮かべながら親友たるクロウ・アームブラストと肩を組んでいた。自分たちのこの友情は永遠なのだ、どんな事があるうと、この紡いだ絆は切れないのだと、そう無邪気に信じて……

鋼の誓い

その写真には、笑顔を浮かべた自分の姿が写っていた。

自分だけではない、自分にとって出来た掛け替えのない友人たちも皆、笑っている。

そこで浮かべている笑顔には何一つとして偽りなどなかった。

自分はこの時、確かに心の底から笑っていたのだ。

眺めているだけで昨日のように思い出す事が出来る宝石のように煌めいていた日々、それらに決別するかのようにそつと、クロウ・アームブラストは写真を伏せて部屋を出る。

「あばよ」

告げた決別の言葉は、誰かに聞かせるためのものではなく自分自身に対する宣誓であった。

そしてそのままクロウ・アームブラストは宝石のように煌めいていた“今”に別れを告げて、“過去”へと戻り始めた……

・
・
・

帝都のドライケルス広場、ここでは帝国宰相たるギリアス・オズボーンの全国民へと向けた演説が開始されようとしていた。帝都守護を役目とする第一機甲師団は戦車も駆り出しているの厳重な警備網を敷いており、さらに宰相直属たる鉄道憲兵隊もまたクレア・リーヴェルト指揮の下第一機甲師団と協力して警備にあたっていた。

そして、そんな中つい先日宰相直属となったリイン・オズボーン特務少尉もまた、帝国正規軍士官の紫紺の制服へと身を包み、宰相の傍らへと控えていた。それは警備へ駆り出されたからではなく、父の指示の下、あるデモンストレーションをこの場に行うためである。

広場には多くの人が詰めかけていた、それはこれから演説を執り行う人物の人気を証明するものであった。

ガレリア要塞消滅という信じ難い凶報を前に誰もがそれを行ったクロスベルへの怒りと同様にこれらから先の未来に不安を抱いていた。つまるところ彼らは“安心”させて欲しかったのだ、彼らの信ず

る強き指導者に。

そしてそんな中、この非常事態にも一切の動揺を見せない常と変わらない堂々とした様子で姿を現した鉄血宰相の演説は始まった。

「帝都市民、並びに帝国の全国民の皆さん、御機嫌よう。」

エレボニア帝国政府代表、ギリアス・オズボーンである」

堂々たる様子でオズボーンはまずは軽く挨拶を行う。

その口調は威厳に満ちながらも、どこか友人に語りかけるような親愛さに満ちたものである。

そして、聴衆の意識が集中しだしたのを確認すると本題へと入り始める。

「――諸君も、ここ数日の信じ難い凶報はご存知かと思う。

歴とした帝国の属州であるクロスベルが独立などという愚にも付かない宣言を行い、あろうことか帝国が預けていた資産を凍結したのである！」

独立宣言までは勇み足でまだ済んだだろう、実際レミアフェアにリベール、そしてアルテリア法国などのクロスベル問題に関して中立の立場を取っている国は、帝国と共和国を刺激しないようにしながらも、「民意は尊重されるべきだ」等と好意的とも取れる声明を発表していた。

しかし、金融資産の凍結、これは紛れもない暴挙と言える行為であった。

クロスベルの今の繁栄、それは共和国と帝国のある種の緩衝地帯となった事により、帝国と共和国、この2大国双方の資本が流れ込んだ事によるものだ。

経済は、いや社会というのは「信用」によって成り立っている。この信用が社会から失われた時に秩序は崩壊する。

その信用をクロスベルは、いやディーター・クロイス大統領は自身のIBC総裁という地位を濫用して独立という自らの政治構想を實現させるために捨て去ったのだ。

元々クロスベルの政治基盤及び安全保障上の脆弱性については通商会議の際に共和国と帝国、両国より懸念が出ている案件であった。

——そして、凶らずもディーター・クロイスはそれを自らの手によって証明してしまったわけだ。

クロスベルの持つ政治上の脆弱な基盤、それを何とかするためには預けられた金融資産を勝手に凍結する、等という銀行にとつては自殺行為とも言える行いを取ったのだから。

一体誰が、預けた資産を勝手に凍結するような銀行を今後利用したいと思うだろうか？

大陸最大の銀行IBCの信用は今回の一件で間違いなく地に落ちた、これを取り戻すとすればそれには最低限、ディーター・クロイスが総裁の座を追われ、あくまでこの一件はディーター・クロイス個人の暴走であったとする必要があるだろう。それでも、失われた信用を取り戻すのは並大抵の努力ではないだろうが。

「当然我々はそれを正すために行動した。それは侵略ではない。宗主国としての権利であり、義務ですらあると言えよう」

そして自国の民の財産が脅かされた状況下で国が動かないわけがない。

国家が保障すべきは自国民の生命と生活なのだから。

人間とは、命さえあれば良いわけではない。豊かな生活をおくるには確かな生活基盤と財産があつてこそなのだ。

直ちにクロスベルのこの暴走を止めなければ、経済活動は停滞して、多くの民が露頭に迷う事となるのだから、帝国にしても共和国にしても、クロスベルの独立の承認などあり得ない以上取るべき選択など一つしか無い。

すなわち武力による誅伐である。そしてそれを招いたのはあくまでクロスベルなのだ。オズボーンは強く訴える。

「しかし、彼らは余りにも信じ難い暴挙に出た。

ガレリア要塞、帝国の誇る鉄壁の守りを謎の大量破壊兵器を持って攻撃……これを『消滅』せしめたのである！

諸君、果たしてそのような悪意を許していいのか！ 偉大なる帝国の誇りと栄光を傷つけさせたままでもいいのか！？」

無論、クロスベル側に聞けば当然クロスベル側の言い分があるだろ

う。

長年クロスベルの民は、経済的な繁栄を享受する傍らでその肩代わりとばかりに様々な負債を共和国と帝国に押し付けられてきた。帝国人と共和国人がクロスベルの地で犯罪を犯したとしても、自治州政府ではそれを裁く事が出来ずに野放しになる。そして両国の行う暗闘の結果、命を失う事となった者もいる。

さらには、列車砲等という大量破壊兵器を常に帝国より向けられていた。自分たちから「誇り」と「生命」を奪い続けてきたのは、お前たちの方だと。今回の一件はそれらを守ろうとしただけなのだと、憤りと共に主張するだろう。

「否——断じて否!! 鉄と血を贖つてでも正義は執行されなければならぬ!」

しかし、帝国側の主張はこうなるのだ。

当然だ、壊滅したのは第五機甲師団だけであり、帝国正規軍が完全に敗れ去ったわけではない。

未だ帝国には壊滅した第五機甲師団以外にも、19もの機甲師団が存在する。四大名門の所有する領邦軍も存在する。

クロスベルに《風の剣聖》が存在するといふのならば、帝国には《光の剣匠》が、《アルノールの守護神》が、《黄金の羅刹》が存在する。

故に退く事など、有り得はしない。始まるのは帝国の総力を結集した全面侵攻だ。

データー・クロイスは決して愚鈍な男ではなかった。彼がクロスベルで就任からわずかの間に成し遂げた数々の改革は彼の才覚を証明するものであった。

だが、それでも元々銀行家であり軍事に携わった経験が無く、政治家としての経験もまだ1年にも満たない彼は余りに国家の威信というものに対して無知であった、あるいは夢想家であったと言っても良い。

クロスベルが列強から干渉と圧力を受けるのはつまるところ「力がないから。故に、経済を締め上げた上で、力による屈服が不可能

だと見せつけければ自ずと帝国と共和国は自国内の資本家からの突き上げにより、クロスベルに対して譲歩せざるを得なくなる、それが彼の抱いたクロスベル独立への構想だったのだろう。

しかし、そうして話を運ぶには彼は余りに帝国と共和国双方を「挑発」し過ぎてしまった。

それは至宝という強大な力に魅入られたが故の暴走か、それとも基より国家というものに対する帰属意識の低さによるものなのか、それとも何かそうせざるを得ない事情があったのか。

もはや、後の祭りではあるがせめて彼は独立宣言の際の非難声明をどちらか一国へと留めるべきだっただろう。

そうして、もう片方の国とは手を結び、その力を示す事で譲歩を求め。

そうすれば、相手取るのは帝国と共和国のどちらか一国で済んだし、至宝の力を有するクロスベルと自国と同格の敵手を同時に相手取ることの困難さから、交渉によって決着を見る事は可能であったかもしれない。

しかし、彼はそれらの外交努力を重ねる事無く、両国を同時に相手取る事を選んでしまった。

これでは、帝国も共和国も退けるはずがない。

「暴拳」に及んだ「属州」への報復を誇り高き「宗主国」の民が求めるのは、自明の理というものであった。

「強いエレボニア」を祖国へと取り戻し、ひるむ事なく鋼鉄の覚悟を抱き演説するその指導者の姿にその場に居た市民は否応なく熱狂していく。

「クロスベルを許すな！」「皇帝陛下万歳！エレボニアに栄光を！」の大合唱がその場を包み込んでいく。

そして、聴衆のその反応を見た宰相は満足気に頷き
「諸君！偉大なるエレボニアの国民諸君！如何にクロスベルが強力な兵器を有していたとしても、恐れる事はなにもない！」

何故ならば、我がエレボニアにはそれに対抗するための力があるのだから！その一端を、今この場に居合わせた方々にはお見せしよう」

その言葉と共に宰相の傍らへと躍り出たのは帝都市民も見知った顔であった。

180リジュ程の堂々たる体軀。

素人目に見ても鍛え抜かれている事がわかるその肉体。

頬に刻まれたその傷跡は否応なく、彼が激戦をくぐり抜けてきた事を理解させる。

何よりも、その覇気に満ち溢れた視線は、隣で立つ宰相と同じく、その身に宿す鋼鉄の意志を感じさせた。

「来い！灰の騎神ヴァリマール！」

その光景にその場に居合わせた者達は誰もが息を呑む。

現れたのは全長8アージュ程もある巨大な人の形をした騎士人形。

造形美と機能美が合わさったそのフォルム、何よりも人の形を模したそれは自然と見たものに対して畏怖の心を与える。

天より舞い降りた、その光景はさながら空の女神が遣わした天使にさえ思えた。

演説の光景を伝える役割を果たしている、ラジオのアナウンサー達もその光景に自らの職務を忘れて、茫然自失となる。それほどまでに天より舞い降りた巨大な人形の兵器というのは見る者の心に衝撃を与えるものなのだ。

「紹介しよう、これこそがクロスベルの『悪』を糺す、我が帝国の開発した、いや女神が遣わした『正義』の力！『灰の騎神』ヴァリマールである！」

そして、それを振るうのはこの『国難』に際して、祖国を護るために立ち上がったライン・オズボーン特務少尉である！」

「ご紹介に預かりました、ライン・オズボーンです。」

私はこの場に置いて誓います。この身の総てを偉大なる皇帝陛下と祖国に捧げる事を。

我が身命を賭して、我らの偉大なる祖国を守り抜く事を！如何にクロスベルに恐るべき新兵器が在ろうと、それを打ち破り、『正義』の何たるかをこの世に示して見せる事を！」

その宣誓と共に広場に爆発的な熱狂が広がりだす。何故ならば、誰

もが「英雄」を求めていたから。

ガレリア要塞消滅という異常事態を前に、国民は怒りと同時に不安を抱いていた。

もしも、共和国とクロスベルが手を組んで攻めてきたらどうなるのか？、ガレリア要塞という盾を失った正規軍は果たして本当に自分たちを護ってくれるのか？

そもそも、ガレリア要塞を消滅した謎の兵器をどうにかする手立てがちやんとあるのかと。

そんな不安を拭い去り、勝ってみせると安心させてくれる存在、どこからともなく現れて「誰か」のために命を賭けて戦い、そして勝利を収める「無敵の英雄」都合の良い存在。

そんな者が現れて、自分たちを救ってくれる事を。

そして、それはこの上ない形で示された。

天より舞い降りた巨大な騎士人形、それは圧倒的な衝撃を齎した。神々しささえ感じるその姿はまさに女神の遣わした天使のようにさえ思えた。

それを駆る革新派の、否、エレボニアの若き英雄の姿のなんと頼もしい事か。

もはやクロスベルの新兵器など英雄譚を彩る敵役でしかないのだと、そんな錯覚さえ抱いていた。

凄まじい熱狂がその場を包み込む、事実を冷静に伝えるのが役割のアナウンサーでさえも、お伽噺の体現者を前にして興奮を露に叫んでいる。

(これで、勝つしかなかったわけだ)

しかし、そんな熱狂を齎した張本人はと言えば、熱狂して自分に歓呼を浴びせる民衆の姿をどこか冷めた様子で眺めていた。

当然だ、何故ならば彼は救いを齎される側ではなく、救いを齎す側なのだから。

齎される側のようにただ無邪気に勝利を信じていれば良いわけではない、現実に勝つための手段、それを考えなければならぬのだから。

今、民衆が自分達に歓呼の声を浴びせているのは「勝利」を齎すと信じているからこそ。

もしも、敗北しようものなら彼らのこの歓声は罵声へと変わるだろう。

だが、それでもこう宣言するしかないのだ。貴族勢力と革新派勢力の対立という内憂を抱えている以上民衆を熱狂させて、その勢いで以て速やかにクロスベルという外患に対して勝利を収める、それ以外に今のエレボニアに取れる手段はない。

それ以外にもはや道はないのだから。進む道が定まっている以上、後はそれを踏破するのみだろう。

——如何なる障害が立ちふさがろうが、それを粉碎して。

——その障害が、自分と同じくただ誰かを護りたいと言う願いから剣をとった同じ人間であったとしても。

(クロスベルの「悪」を糺し、「正義」をこの世に知らしめるか……) 我ながらなんとも空々しい事を言うものだどリインは内心自嘲する。

絶対的な悪と絶対的な善、そんなものが本当にこの世に有るとするのならそれはなんとも「楽」な事だと。

自分は間違いなく地獄に堕ちる事になるだろう。例え、どのような「正義」を掲げようとこれから自分が行うのは「人殺し」に他ならないのだから。

だが、それでも自分は護りたいと、そう思ったのだ。祖国を。そこに住まう民の幸福と輝きを。

(良いさ、俺は地獄に堕ちよう。その代わりに——)

祖国と民に必ずや繁栄を齎して見せよう。

そこそが自分の大切な人たちの幸福にもきつと繋がるのだから。

隣に居る父と同じく、鋼鉄の意志で総てを呑み干して往こう。

何故ならば自分は鉄血宰相ギリアス・オズボーンの子、《鉄血の子》リイン・オズボーンなのだから……

終わりを齎す凶弾

「ラジオをお聞きの皆様……この大歓声が聞こえるでしょうか！」

かくいう私も興奮の色が隠せません！この光景を、我らが帝国の誇る最新兵器と若き英雄の姿を、皆様にお届け出来ないのが残念で仕方がありません!!」

興奮を露にそう伝えるのは常日頃、冷静な口ぶりでのアナウンスに定評のあるラジオ番組のアナウンサーである。「帝国万歳！クロスベルを倒せ！」の大合唱は凄まじいものだ、ラジオ越しにさえ、その凄まじさがわかる。

そしてそれは何も現地に居るものだけではなく、帝国の各地で次々と「帝国万歳！クロスベルを倒せ！」とラジオの前で叫ぶ光景が繰り広げられていた。

トールズ士官学院への対抗意識を燃やす中央士官学院の生徒の中には、トールズの主席に遅れをとってたまるかと教官に自分も戦列に加わりたいと願い出ている者も居た。

しかし、そんな熱狂に身を委ねる事が出来ずに、暗い表情を浮かべている者たちもまた存在した。

「本当に、君は『英雄』になるつもりなのか、リイン……」

自らの退路を進んで塞ぐが如き友人の発言にアンゼリカ・ログナーはポツリと呟く。

彼女は放蕩娘であるが、歴とした四大名門の息女、人の上に立つものとしての教育を施された人物だ。

故に友人の発言が如何に危険なものかわかってしまう。

勝利を約束すると彼は言った。

なんとも威勢が良く頼もしく民衆受けの良い言葉だ。聞いている方はさぞ彼が無敵の英雄、まるでお伽噺の登場人物のように思っているだろう。

だがアンゼリカ・ログナーは知っている、リイン・オズボーンは無敵の英雄などでも何でも無い、ただ水準より優秀なだけのただの人間に過ぎない事を。

必ず勝利する事など出来るわけがないのだ。勝敗とは相対的なものに過ぎないから、彼が幾ら最善を尽くそうとそれでも相手が上を行っていればリイン・オズボーンは敗北を喫する事になるだろう。

そして、そうしてもしも負けて帰ってきたら、彼を迎えるのは罵倒の嵐だ。期待が大きければ大きい程、それを裏切られたと思つたときの怒りもまた大きくなる。

仮に勝利を収めたとしても、彼を待つのは次の戦いだ。その戦果が華々しければ華々しい程に、民は勝手に次を期待するだろう。

そうして「英雄」となつた彼を、貴族派も革新派も当然放つておかないだろう。

懐柔かそれとも排除か、どちらにせよ戦場で勝利を収めた「英雄」には「政治」という次なるステージでの戦いが待ち受けているわけだ。

本来であれば数十年単位で徐々に担う重責を、アンゼリカの友人は未だ成人もしないうちに自ら望んで背負うとしているのだと理解したが故にアンゼリカは拳を強く握りしめる。

どうしてそんなにも一人で突き進もうとするのかと、そんなにも自分たちは頼りにならないのかと行き場のない憤りを抱えながら……

「リイン君……」

トワ・ハーシエルはツールズ士官学院の次席の成績を持つ才媛だ。

故にリインが何故そんな事を言ったのかはわかつてい、わかつてしまう。

彼は帝国の分裂を防ごうと必死なのだ。

帝国解放戦線が壊滅し、赤き翼を率いるオリヴァルト殿下が両派の間を取り持つために文字通り帝国全土を奔走した事もあって、革新派と貴族派の対立は小康状態となつた。

しかし、それはあくまで表面を取り繕つただけに過ぎない。火種は依然燻つたままなのだ。

ガレリア要塞の消滅、そして一個師団の壊滅の齎した衝撃は大きい。

速やかにクロスベルの「脅威」を取り除かなければ、燻っていた火種が爆発してしまうかもしれない。

だからこそ彼はエレボニア国民を安心させる「英雄」を演じているのだろう。

恐れる必要などなにもない「正義」は自分たちにあるのだと、そう言っているのだ。

エレボニアという国を纏めるためにクロスベルという「敵」を「悪」と断じて。

その「悪」へと対抗するためには貴族派と革新派、そんな些細な違いを気にしている場合ではないと。

それは多くのエレボニア国民にとっては抵抗なく受け入れられる内容だろう。

何故ならばクロスベルに実際に住んでいる人たちと交流がある者等帝国では圧倒的少数派だから。

多くの者にとって、クロスベルは鉄血宰相の演説の通りに、突如として暴挙に出た悪の属州なのだ。

だが、トワ・ハーシエルは覚えている。

友人たちと共にクロスベルで過ごした日々を。

特務支援課の人たちと歳と立場を超えた友人となった事を。

「どうか頑張ってください」と控え目に、されど確かな本音を他ならぬリイン自身が告げていた光景を。

「悪」等ときつと彼は思っていない、思っていないのにも関わらず彼はそう振る舞っているのだ。

己が私情を殺して、総ては祖国を護るために。

質朴な優しさを持つ私人としての己を捨てて、ただただ祖国に総てを捧げんとする「英雄」へと成り果てようとしているのだ。

それがトワには酷く恐ろしい。このまま、彼が遠いところへと行ってしまうのではないかと、そんな予感を拭う事が出来ずに。

浮かかない表情を浮かべているのは彼女達二人だけではない、友人たるジョルジュ・ノームも。

教官たるサラ・バレストアインも。VII組の面々も、差はあれど、その

熱狂に乗る事は出来ずに表情を曇らせている。

何故ならば彼らは私人としてのリイン・オズボーンを知っているから。

「英雄」"としてではない、一人の人間としての彼を。

故にどうしても思ってしまうのだ、「どうしてもそこまで」と。

だが彼らのそんな思いとは裏腹に演説は進んで行く。

もはや時代は大きく動き出した、鋼の意志と強さが無ければ、それに抗う事も出来ずにただ呑み込まれていくだけなのだ、未だ巢立ちを迎えていない未熟な雛鳥達へと突きつけるように……

・
・

「無論、彼一人だけの力で勝てるわけではない！いや、例え出来たとしてもそうすべきではない！」

何故ならば、国家の行く末をたつた一人の決戦存在が担う、そんな時代はもう終わろうとしているのだから！

諸君！偉大なるエレボニアの国民諸君！「誰か」ではない、君達自身なのだ！この国の未来を作るのは！

祖国は！皇帝陛下は！特別ではない、君達一人一人の力を欲しているのだ！

如何に生まれが不遇であろうと、血筋が凡庸だったとしても、才を持ち得ていなかったとしてもそんな事は気にすることさえ愚かしい。

必要なのは「護ろう」という意志、愛する祖国、この偉大なる我が祖国を護らんとする意志さえ有ればいい！

今こそ、我々はクロスベルという「悪」に、そして、「東の脅威」へと立ち向かうために手を取り合い、その意志を結集させようではないか！

クロスベルという歴然たる「悪」を前にして理解できたはずだ。革新派と貴族派、俗に言われていた、その対立のなんと細やかなものだったかを。

確かに、我々には無視できない相違点があった。私が貴族派を苦しめた事もあったし、貴族派が私を苦しめた事もあった。

だが、それでも我々は等しく偉大なる皇帝陛下の臣下である！この

偉大なる祖国を等しく愛しているのだ!

諸君、あえて、あえて私は君達に答えのわかりきった問いを投げかけたい。諸君は祖国を、このエレボニア帝国を愛しているか?」

「愛しています!」

「偉大なる皇帝陛下への忠節を貫く覚悟があるか?」

「もちろんです!」

「私の気持ちも諸君と同じだ!祖国を愛している!偉大なる皇帝陛下へとこの身命を捧げた!我々は一つなのだ!」

作り上げられたのは、全国民が一丸とならなければならないという空気が。

この「国難」を前にして、それを乱すものは不忠者であり、帝国人の風上にも置けぬ者であるという空気だ。

異様な熱狂がその場を包み込む。そして、その熱狂を作り出すのにリイン・オズボーンは一役も二役も買っていた。

未だ士官学院生に過ぎなかった彼が、任官を早めてクロスベルへの誅伐の陣頭に立とうとしているその姿、それはまさに口だけではない自己犠牲の体現だ。

リインの祖国にその身命を捧げんとする覚悟は何一つとして偽りのない本気のものだ。

だからこそ、その姿は人々を駆り立てる。偉大なる祖国を護るために、自分も彼のように戦わなければならないのだと。

「――地獄に堕ちるのは自分だけでいい」、そんな彼の願いとは裏腹に。

「このギリアス・オズボーン、偉大なる皇帝ユーゲント三世陛下の神名の下、此処に宣言させて貰おう。」

この「国難」へと立ち向かうために。愛する我らが祖国を護るために。正規軍、領邦軍を問わず帝国の総力を結集させ、クロスベルの「悪」を正し、東からの「脅威」に備えん事を――

熱狂に包まれる群衆を前に、ギリアス・オズボーンはついに自らの演説を締めくくろうとする。

それは、解放戦線の幹部《G》がかつて、ミヒヤエル・ギデオンで

あつた頃に予見した未来。テロリストへと身をやつしてでも、止めようとした未来。

国家の“総て”を戦争遂行へと費やさんとする、“総力戦体制”への移行。

熱狂のままに地獄への片道列車へとエレボニアの民がごぞつて乗ろうとしたその刹那

「言わせねえよ」

ギリアス・オズボーンが踏み潰し、飲み込んできた“過去”より飛来した漆黒の弾丸が彼へと届いた――

先程までの熱狂が嘘のような静寂さがその場を包み込む。

まるでその場の時が止まったかのような、そんな錯覚をリインは抱いていた。

響いた銃声からして、狙撃がされたのは間違いない。

それも、リインの知覚とこの嚴重な警備の外からの超長距離狙撃だ。

そして、その対象となるような人物はこの場に一人しかいない。

故に、すぐにでも駆け寄るべきだろう、だが、動けない。

撃ち抜かれたはずの人物が、胸から血を流しながらも、余りに堂々としているために本当に撃たれたのかと誰もが疑問を抱いてしまっているのだ。

しかし、そうなっていたのもほんの僅かな時間だった。

ギリアス・オズボーン、時代の生んだ“怪物”にしてリインにとって憧れでもある存在は、その巨軀をわずかに蹠踉めかせて

「見事だ《C》……いや、クロウ・アームブラスト……」

自らの想定を上回った敵手への称賛を口にしながら、静かに沈むのであった。

「父さああああああんっ」

!!!!!!!

絶叫と共にリインは父の下へ駆け寄る。

そこに居るのは若きエレボニアの英雄の姿ではない。
祖国にその身を捧げた帝国軍人でもない。

ただの一人の少年の姿だ。

「父さん！父さん！ギリアス父さん！目を開けてよ!!」

必死にリインは父へと声を掛ける。

「……何をそんなに慌てている。帝国軍人たるもの如何なる時にも毅然とせよ」

そんな風に父が常と変わらぬ威厳に満ちた言葉を発してくれる事を期待して。

「……」そもそも今この場において私は、貴官の父である前に帝国政府代表である。公私の区別をつけることだな少尉」

そんな風に自分の醜態を叱責してくれる事を期待して。

だが、父は何も答えない。動かない。心臓の鼓動も息も聞こえてこない。

致命傷であった。死んだ。父は、ギリアス・オズボーンは死んだのだ。

「……………ハハハ」

瞬間、乾いた笑いがリインの口より漏れた

「ハハハハハハ!!!ハハハハハハ!!!ハハハハハハ!!!ハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

何やってんだよお前は！12年間、一体、何やっていたんだよ！ええ!!

何が、守護の剣の皆伝だよ！お前なんか、一体何を護る事が出来るっていうんだよ!!!

何が、祖国を救う若き英雄だよ！お前に、一体何を救う事が出来るっていうんだよ!!!

12年前と、何一つとして変わってなかったお前によお!!!!!!」

狂ったような笑いと共に紡がれたのはひたすらに自分を責め立てる言葉。

そこに、先刻までの「英雄」の姿はない。居るのは、ただの子どもだ。

大切な、大好きな父親を眼の前で失い、泣き叫んでいる。

「母さん……俺は……貴方に護られたあの日から、何も出来ないままだったよ……大切な、たった一人残された家族を護る事さえ出来ない……どうしようもない役立たずの……」

誰も、駆け寄る事が出来ない。

何故ならばその場に居る者たちはただの少年たるリインの事など知らないから。

傷ついた彼の心に寄り添い、支えてくれる存在などその場には居ないのだ。

——そんな者たちを置き去りにして進む事を選んだのは他ならぬ彼自身なのだから。

あるいは、そのまま行けば彼は正気を失っていたかもしれない。

だが、幸か不幸か、世界は何時までも一人の少年が悲劇に浸り続ける事を許容する程に甘くはない。

リインの慟哭等無視して、事態は動き出す。

帝都の上空に突如として姿を現したカイエン公によって作られた大型航空母艦《パンタグリユエル》、そこより巨大な人形兵器、《機甲兵》が次々と帝都へと降下されていく。

それはこの上なく、一体誰が宰相暗殺の黒幕かをこの上ない形でリインへと教えた。

そう、つまり貴族共は母に続いて父までも自分から奪ったのだと

——理解した瞬間に余りの哀しみによって、凍りついていた心が溶け出す。

憎しみという怒りの焰によって。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

瞬間、リインは弾かれたように動き出していた。

獣の如き咆哮と共に、ヴァリマールを操り現れた貴族連合の新兵器を粉碎する。

「誓うぞ……一人も生かして返さない。」

《クロワール・ド・カイエン》、《ヘルムート・アルバレア》、《ゲルハルト・ログナー》、《フェルナン・ハイアームズ》！貴様らの首を我が

父の墓標に捧げよう!!!
「

明かされた真実

クレア・リーヴェルトは目の前の男へと銃口を突きつけながら、射殺さんばかりの視線を叩きつけていた。その相手は、クレアも良く知っている人物であった。

ツールズ士官学院2年IV組所属、否旧ジュライ市国最後の市長の孫クロウ・アームブラスト、掛け替えの無い親友だと義弟より紹介された眼の前の青年こそが、宰相暗殺の実行犯にして帝国解放戦線リーダー《C》の正体であったのだ。

本来の獲物たる双刃剣ダブルセイバーを構えるその姿より立ち昇る威圧感は紛れもない「達人」のそれである。

それはこの上なく、これまで幾度か邂逅してきた時に見せていた姿が単なる仮面に過ぎなかった事をクレアへと教えていた。

「よくも……よくも閣下を!!」

「氷の乙女」、そう称される常の沈着さをどこかへとやり、クレアは怒りを露に目の前の男を睨みつける。

ギリアス・オズボーンはクレア・リーヴェルトにとって「恩人」であった。

絶望に沈んでいた自分に、理不尽に立ち向かうための後ろ盾となってくれ、生きる道筋を教えてくれた。——何よりも一度は失ってしまった、掛け替えの無い宝石へと巡り合わせてくれた。故にこそ仇を前にしてクレアは猛る。

しかし、そんなクレアの怒りを前にしてもクロウはどこ吹く風とばかりに

「まあ、八年前にジュライが帝国に併合された時と同じさ。

気を抜いたら負け——コイツはそういうゲームだろうか？

アンタの親玉が好き「だった」な」

そちらの親玉が、お前たちが今までやってきた事を、これからやろうとしている事を俺はやっただけの事だと。

争点は、どちらが上に行くかであり、善悪だの道徳だのを論じるような資格はそちらにもこちらにも無いだろうと。

告げた、その言葉に、「ゲーム」だと平然と言つてのけた目前の相手の様子にクレアは

「あなたは……あなたはそのためにあの子を利用したと言うんですか！」

先程の比ではない怒声をクロウへと叩きつける。

クレアにとってはそれこそが一番許せなかった。

クレアの恩人たる宰相閣下を撃つただけだと言うのなら、クレアはこれ程の怒りは見せなかつたのかもしれない。

クレアにとっては「恩人」であるが、それでも決して清廉潔白とは言えない人物だったのだから。

故に、奪われた者として、その報復としてやっただけだ、これは因果応報なのだと言われられていればクレアは歯噛みしながら押し黙つたかもしれない。

だが、目の前の男はそのためにしてはならない事をした。

「あの子は……リインは……貴方の事を心から信じていたんですよ!!!」

あの子と過ごした日々も！あの子との友情も！皆、「ゲーム」に勝つための手段だったとでも言うんですか!!」

初めて話を聞いたのは手紙だった。「親友が出来た」とそう書かれていた。

最初は大喧嘩をしてしまったけど、今では掛け替えの無い親友なのだ。本人の前で言おうものなら調子に乗るだろうから言わないが、等と真面目な義弟が冗談めかしながら。

そうしてまさに「悪友」という他ない、クレアもよく知る赤毛の青年にどこか似た印象を受ける目の前の青年の様子に苦笑しながら、クレアは安心したのだ。

だって、彼と一緒に居る時の義弟は本当に楽しそうだったから。口うるさく説教しながらも、その口元をどこか緩んでいたから。

自分と同様に義弟にも「生涯の友」とそう呼べるだけの「親友」が出来たのだと。

それらは全て、目的を果たすための手段に過ぎなかつたとも言えるのか。

「悪いな、《氷の乙女》。美人は歓迎だが、俺が決着をつけなきゃならねえのは 안타じやないんだ」

あつさりと、正確に自分の脳天目掛けて叩き込まれた一撃をクロウは躲す。

本来であれば、こうもあつさりと躲す事などは出来なかった。ロークレアが常と変わらない冷静さを保っていれば。

クレア・リーヴェルトは軍人教育の成功例である。非常時において理に従い、情を切り離して行動することの出来るまさに氷の如き冷徹さを有している人物であった。

そう、本来であれば。

しかし、燃え盛った憎悪と怒りの焰は彼女からそんな氷の如き冷徹さを奪い去った。

故にこそ、その攻撃は酷く読みやすい。格下の相手であれば、その速度を前に為す術無く死骸を晒したであろう攻撃も、実力の近い相手にとっては単調極まる攻撃にしかならなかった。

怒りという感情は人を強くすると信じられている。

それは一面的には真実であり、一面的には間違いである。

怒りという激情を理性によって律する事の出来る人間が強いのだ。

焰の如き憤怒を、氷の如き冷徹さによって律する『鋼』の境地。

そこに至った人間は強い。何故ならば彼らは常人を遥かに上回る心の中で燃える焰を制御してのけるから。

だが、理性によって律する事が出来ていない激情というのは瞬間的な爆発力をこそ生むが同時に酷く、脆い。

暴れるだけの獣は、常人にとっては脅威でも熟練した狩人にとってはただの獲物でしか無い。

ならばこそ、クロウ・アームブラストにとって、怒りに身を任せたクレアの間を突くのは至極容易かった。

クレアのはなった攻撃を躲したクロウはそのまま、ビルの屋上から飛び降りる。

ローもしも、彼女が常と変わらぬ冷徹さを有したままであれば、こうも容易く逃げる事は叶わなかっただろう。

そして次の瞬間に姿を現したのは海のように深い蒼色の騎士人形。
ラインの駆るヴァリマールに酷く酷似した全長8アージュ程の巨大な人形兵器だ。

そしてそのままクロウは、クレアに一瞥をくれる事もなく「蒼の騎神」オルディーネを使い、その場を去る。

目標は今まさに帝都中央にて、貴族連合の機甲兵部隊を相手に無双している己が「親友」だ。

何故ならば、騎神の相手を出来るのは同じ騎神だけな以上、自分が出向かなければ機甲兵部隊は壊滅して、帝都占領に大きく支障を来す……いや、違う。

そんな事などクロウにとってははどうでも良い事だった。復讐を成し遂げる後ろ盾となってくれたスポンサーカイエン公や己が導き手に対する義理は果たさなければならぬと思っっている。

だが、ラインの下へと自分が向かっているのはそんな義理が理由だからではない。

ライン・オズボーンこそがクロウ・アームブラストにとって決着をつけねばならない「宿敵」だからだ。

自分が復讐を果たすために踏みにじった「親友」だからだ。

これを果たさずして、自分は前に進む事を出来ないのだと、クロウは負い目を超えた何かに突き動かされながら、ドライケルス広場を指すのであった。

・・・

「待て！待ちなさい！クロウ・アームブラスト!!!」

何としてもあの子の下に行かせるわけにはいかないとクレアは必死に声を張り上げる。

義弟は宰相閣下の傍に控えていた、つまり目の前で実の父親を失ったのだ。

義弟が実の父である宰相の事をどれほど尊敬していたか、クレアは痛いほどよく知っている。

そんな父親をよりにもよって眼の前で失ったのだ、今の義弟はそれ

こそ絶望の最中にあるだろう。

父親の仇に対する憎悪という感情を核にする事で、なんとか崩壊を防いでいる、そんな危うい状態にあるはずだ。

「……そこに親友だと思っていた相手が仇だ、等という事実が明らかされたら？」

本当に義弟の心は壊れてしまうかもしれない。

だからこそ、あの男だけは自分がこの場で討ち果たさなければならなかったのだ。

しかし、そんなクレアの思いとは裏腹にクロウは一瞥さえくれる事無くその場を立ち去っていく。

途方もない無力感、それがクレアを包み込むが……

「大尉！我々はどうすれば!!!」

駆けつけてきた部下たち、その言葉がクレアに冷静さを取り戻させる。

そうだ、冷静にならなければ行けない。自分は鉄道憲兵隊大尉、部下達の命に責任を負う立場なのだから。

「……現状は革新派にとって最悪と言っている。貴族派は明らかにこのタイミングでのクーデターを狙い準備を重ねてきた。」

この状況から劣勢をひっくり返すというのはほとんど不可能と言って良いだろう。それこそ帝都制圧のために投入した虎の子の機甲兵部隊を全滅させる位しなければ。

無論、クレアにはそんな「力」はない、鉄道憲兵隊は正規軍きつての精鋭だが、役割は歩兵としてのものなのだから。

正面きつて機甲部隊を相手にする事など出来はしない。

故にこの場で自分たちが出来ることと言えば要人の保護位だろう。

「……皇帝陛下の救出、いや不可能だろう。皇族の身辺警護を行っている近衛軍は貴族派の息が懸かっているし、そもそも皇族の身柄の確保は貴族派にとっても最優先と言って良い。皇帝陛下を革新派側が保護すれば、その瞬間に彼らは完全な逆賊となるのだから。故に皇族の保護、それをクレアはまず断念する。」

そしてクレアの中にいくつもの選択肢が浮かんでくる、今後の戦い

の趨勢、救出をする場合のリスクと成功した場合のメリット、それらを次々と天秤にかけて導き出した答えは……

「我々はコレより帝都庁へ向かい、カール・レーグニッツ帝都知事閣下を保護致します。……宰相閣下亡き今、知事閣下まで失うわけにはいきません」

幸いな事にリインが獅子奮迅の活躍をして、機甲兵部隊を相手どっているためか貴族派の帝都占領は未だ完全には至っていない。第一機甲師団も奮戦している今ならば、知事閣下の方にまで手が回りきっていない可能性は十分にある。

そして、救出に成功すれば迷路のように張り巡らせた地下水道を利用して帝都より脱出する事は十分に可能だ。……自分の頭の中には夏至祭の警備の時に叩き込んだ地下水道の地図が正確にインプットされているのだから、追撃を十分に振り切る自信はある。

「イエス、マムー」

指揮官の号令と共に精鋭たる鉄道憲兵隊は動き出す。

最後にクレアは蒼の騎神が向かった方角を少し見据える。そこでは貴族派の機甲兵部隊を薙ぎ払った灰の騎神と第一機甲師団を壊滅させた蒼の騎神が対峙し、今まさに激突しようとしていた。

その瞬間、かつてセリーヌに言われた言葉がクレアの脳裏に過る。

自分の過保護が義弟を殺す事になるかもしれないとそう彼女は言っていた。

その懸念は現実のものとなってしまった。2つの騎神の周囲にはおびただしい数の破壊された機甲兵と戦車が転がっている。

それはまさに「伝説」の名に違わぬ力だ。とてもではないが、自分にあそこに割って入る事は不可能だろう。

……いや、帝国最高峰の実力者、人の形をした戦術兵器等と謳われる「十七勇士」面々でも難しいかもしれない。

彼らとて戦車の1台程度ならば物の数ではないが、流石に数十もの戦車を相手取る事は出来ないのだから。

(リインさん……どうかご無事で……)

祈る事しか出来ない我が身の不甲斐なさからクレアは血が滲むほ

どに強く己が手を握りしめる。

そして、ライン・オズボーンの義姉から鉄道憲兵隊大尉へとその顔を切り替えて、革新派のNO2の保護へと向かうのであった……

《翡翠の城将》は礼賛する

《機甲兵》。それはクロウ・アームブラストの所有する蒼の騎神オルデーネを下に、貴族連合が帝国最高の科学者にして技術者たる《G・シユミット》博士に開発させた、本人の弁に則れば別に貴族派に肩入れしたわけじゃなくて単に学者としての探究心を満たしただけの事、今回の決起に際して貴族連合が用意した最新兵器だ。

装甲の硬さや火力では戦車には劣るものの、その機動力と地形の走破性は今後の戦争を大きく塗り替える可能性を秘めた、まさに貴族連合にとっては虎の子の切り札とも言える存在である。

ロークーデターというのは初動がその成否を大きく左右する。軍や政治の中枢を如何にして速やかに制圧して掌握するか、これにもたつくようでは話にならない。

当然貴族連合の首脳部もそれは承知している、故に今回帝都占領に投入された機甲兵部隊は領邦軍の中でも選りすぐりが集められた精鋭部隊であった。

カイエン公爵家に代々仕える忠誠心に関して折り紙付きの従士である騎士階級の者たちから、腕に覚えのある者達を見繕い選抜した彼らが悪逆にもクーデターを目論見、帝国宰相を暗殺した実行犯である第一機甲師団を壊滅させて、黒幕である帝国軍参謀本部を制圧する。そして近衛軍と共闘してバルフレイム宮に御わす皇族の方々を保護する、そういう手はずであった。

しかし、そんな貴族連合側の目論見は大きく狂わされていた。「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」
たった一体の英雄かいぶつの存在によって。

貴族連合の誇る精鋭部隊、それが為す術無く蹂躪されていく。
模造品デッドコピーへと真作オリジナルの力を示すかのよう。

ダウンロード。ダウンロード。ダウンロード。ダウンロード。ダウンロード。ダウンロード。

騎神を操りながらもリインは次々と、本来後2日かけて終わらせる予定だった騎神の操縦に関する記憶の継承を進めていく。

そして継承した傍からそれを目の前の敵手へと振るつていく。より鋭く、より速く。ライン・オズボーンは今この戦っている瞬間も加速度的に進化を続けていた。

「警告」「警告」とやかましく愛機が叫び続けており、余りの負荷に脳が焼き切れかけているがそれをねじ伏せながら。

鬼気迫る様子ながらも、それでも今のラインは未だ完全な鬼には成り果てては居なかった。

「……何故ならば、彼には背負うべきもの、護るべきものが存在するから。」

友が、家族が、恋人が、民が、そして祖国が彼には存在するのだから。

そんな矜持が彼をギリギリのところまで踏みとどまらせていた。

目前の敵手を一変の慈悲も無く屠る傍ら、その戦闘の余波が護るべき民へと及ばないよう、今にも己の胸の中に燃え盛る憎悪という激情に身を委ねたい衝動を抑えながら、必死に己を律していた。

「……少尉へと続けえ！我らの手で宰相閣下の仇を取るのだ!!!」

そしてそんな様はどうしようもなく人の胸を打つ。

仇討ちというものを『美德』、『美談』と取る価値観というのは古今東西に置いて多かれ少なかれ存在するものだ。

無論、近代以降の社会ではコレは表立っては肯定されるものではない、仇討ちというのを公に認めてしまえば際限がなくなっていくってしまいうからだ。

しかし、それでもやはり正当な理由による仇討ちというのは、そうした理屈抜きに人の心に響く。

故にこそ、先程まで狂乱してた少年が、亡き父の仇を討とうと奮戦するその様は自然と第一機甲師団の面々を感化する。

アレほどに年若い少年が、ああも活躍しているのだ、負けてなるものかと続けと。

そしてそれは何も第一機甲師団の面々だけではない。

ギリアス・オズボーンは帝都市民から絶大なる人気を誇る指導者であつた。

何故ならば帝都の民は彼の「改革」の恩恵を一番に受けた者たちだったからだ。

司法改革によって貴族相手だろうと平民は少なくとも帝都に於いては泣き寝入りしなくても済むようになった。

併合した属州からの税収により帝都のインフラ整備は進み、盟友たるレーグニッツ知事の手腕もあって公共サービスは格段に向上した。帝国各地に張り巡らされた鉄道網は流通を活発化させて、その中心である帝都は多くの経済的利益を受け、まず職にあぶれて食いつぱぐれるような事はなくなつた。

そんな指導者を、国のために立場を超えた団結を訴えた指導者が討たれたタイミングで突如として現れた貴族共の戦艦と部隊は宰相暗殺の下手人が誰であるかを否応なく帝都に住まう者たちに理解させた。

ヴァンクール大通りを北上してバルフレイム宮、この国において最も尊き方々が住まうそこを恐れ多くも土足で踏みじろうとする光景は元より低かつた貴族に対する好感度を最底辺にまで落ち込ませた。

この「国難」に際して、貴族共は私欲によって暴挙に及んだのだと。

しかし、どれほどそれに憤ろうと彼らにはそれを止める「力」が存在しない。

黙つてこの「暴挙」を見過ごすしかないのかと、齒噛みをする彼らの前に繰り広げられたのはそんな貴族共に立ち向かう帝国の「英雄」の姿。

バルフレイム宮を制圧せんと向かう機甲兵部隊を次々と撃滅していく守護神の姿だった。

「悪逆なる貴族」共を相手に「この国の象徴」を守らんと立ちふさがる「英雄」の姿。

護るのだと何よりもその身を持って示すその姿。

それは我が身を護るために避難する中でも、彼らの心の中に強く焼き付くのであつた……

「いやはや、コイツはちよつとヤバいんちやうか」

「ああ、伝承に謳われる『巨イナル騎士』か……伝承というのは往々にして誇張されるものだが、どうやらこの存在に限っては嘘偽り等なかつたらしい」

そんな風にカイエン公へと雇われた元西風の旅団の部隊長たる《ゼノ・クラウゼル》と《レオニダス・クラウゼル》は呟く。

そこに追い詰められている側の焦燥感や、目の前の鬼神に対する恐怖と言った感情はなく、まるで今日の夕飯は何かと話し合うような軽いものであった。

「ちよいと俺らじゃ手におえ無さそうやなあ……」

「ああ、振るう者の力量も我らとそう遜色は無い。で、あるのならば機体の性能差がそのまま戦力差へと直結する。

現有戦力でアレを打破するのは至難と言えるだろう」

「いやあ、こりや参った。一体どうしたもんかなあ」

「……我らの与えられた仕事は帝都の占領にあたって障害となり得る第一機甲師団の排除だ。

あちらの相手は彼らに任せて我々は我々の仕事を果たす事に専念しよう」

現在リイン・オズボーンはドライケルス広場、ヴァンクール大通りの北側にてバルフレイム宮の制圧のために現れた機甲兵部隊を迎え撃っているのに対して、両者は大通りの南側にて現れた第一機甲師団を迎え撃つ形となっている。

故にこのまま第一機甲師団の相手をしていけば、少なくとも最低限の働きをした事にはなるだろうとレオニダスは告げる。

「せやなあ、あんな『怪物』の相手しろって言うんなら特別料金貰わないと割に合わへんで」

「赤い星座の連中なら喜んで挑むのだろうがな」

強者の戦いに燃えるのは武人の性であり、当然レオとゼノの両名を始めとする西風の面々も持っている。

だが、そんな西風からしても引くような、幾度となくやりあった生

粹のバトルマニア共を懐かしみながら両者は少しだけ遠い目を浮かべる。

「触らぬ神に祟りなし。極力触れずに置こうや。幸いな事にこつちにも《蒼の騎士》とやらがいるらしいしな。

そいつの到着の時間をかせぐための哀れな生贄役になるのはごめん被りたいところやで」

「軍人にとっては戦死は名誉なことかもしれないが、我ら猟兵は死んではないもならぬからな」

カイエン公は何かと問題のある人物ではあるものの、少なくともケチではなかった。

彼は自分に味方をするものには気前よく振る舞ったし、自らの臣下である従士達にもそう務めた。

不幸にも「灰色の悪魔」に対する供物となった、忠勇なるラマール領邦軍の騎士達はその献身に彼は厚く報いるだろう。二階級特進による名誉、及び遺族に対する年金など手厚い保障などそんなところだろう。

だがそれは今犠牲となっている者たちが代々カイエン公爵家に仕える忠臣だからこそである。

いくらカイエン公が気前の良い人物と言っても外様に過ぎない傭兵をそこまで厚遇することはないだろうし、しようものなら今度は逆に先祖代々使っている者たちが不満に思うことだろう、そもそも名誉などで報われても二人にとっても欠片も嬉しくない。

故に、二人が取る選択それは……

「というわけで与えられた報酬分は文句を言われない程度に働いておくとしよか」

「ああ、団長が不在の今、我らが西風の名を貶めるわけにはいかんからな」

ボーナズ欲しさに勝ち目のほとんど存在しない難敵に挑む事ではなく、勝てそうな相手と戦いそこそこの殊勲を挙げておく事であった。

「ええい、話が違うではないか！騎神を満足に扱えるようになるにはどれほど早くとも一ヶ月は掛かる。故に、おそらくはアレはただの虚仮威しに過ぎない！そう、あの《魔女》は言っていたではないか!!!」
旗艦パンタグリユエルにて常の余裕に満ちた様子をかなぐり捨ててカイエン公は焦りを露にそう叫ぶ。この日のために彼は入念な準備を重ねてきたのだ。

《蒼の騎神》という飴玉で帝国最高峰の頭脳を釣り、正規軍の戦車に對抗できる新兵器《機甲兵》を用意した。

最大の障害たるギリアス・オズボーンを排除するために、帝国解放戦線なるテロ組織を裏から支援した。

万が一にも皇族の確保に失敗しないためにも、あらゆる政治工作を用いて《アルノールの守護神》をこの帝都から遠ざけさせた。

そしてそれらの企みは今日結実した。今日という日はクロワール・ド・カイエンの《夢》を果たすための記念すべき日となるはずだった。帝国にとつての、貴族にとつての《在るべき秩序》が回復される日となるはずであった。

だが、そんな計画が今土壇場になって狂いかけていた。

ローリーイン・オズボーン、あの忌々しい宿敵の忘れ形見によつて。「我々が威を借る狐だと思っていた存在は実のところ、親と同じ虎であったと、そう認識を改めるしかないでしょうな」

そしてそんな慌てる主宰を他所に総参謀を務める貴族派きつての才子はどこか涼し気な様子で応じる。

そこには焦りの色は欠片もないが、さりとして総てが想定内だと余裕ぶっているわけでもない。

むしろその逆、自分の想定外へと転がり始めた盤面を無邪気に眺めるような、どこか子ども染みた好奇心が存在した。

不可能、そう確かにリーイン・オズボーンのやった事は常識的に考えれば不可能な《奇跡》なのかもしれない。

だがそんな不可能を成し遂げてきた存在こそが自分たちの《宿敵》だったはずだと。

平民出の宰相という身でありながら、如何に陛下の信認があつたとはいへ四大名門を筆頭とした貴族派と伍してきた「怪物」

ライン・オズボーンはそんな「怪物」の息子だったのだから、ギリアス・オズボーンに匹敵しうる「怪物」なのだと想定しておくべきだったのではないかと。

「落ち着いている場合かねルーファス君！もしもこのまま行けば我らは「逆賊」となってしまうのだぞ！」

「確かに、このまま行けば我らに待つのは破滅でしょう。――ですが、そうはならないでしょう」

どこまでも優雅な様子を崩さずに堂々たる態度で臆する事無く「切れ者」の総参謀は己が主宰を宥める。

「何故ならば、我らには、いえ「公爵閣下」にはご自慢の騎士がおられるではないですか。「蒼の騎神」を駆る起動者、クロウ・アームブラスト殿が。」

見事「怪物退治」を成し遂げた「蒼の騎士」殿ならば、必ずやあの「灰色の悪魔」も討ち果たしてくれることでしょう。

――扱うようになって未だ一週間にも満たぬ者と、数年に及ぶ積み重ねのある者。どちらに空の女神が微笑むかは自明の理というものなのですから」

告げられたルーファスの言葉、カイエン公はみるみるその表情を明るくさせて

「全く以て君の言う通りだ！我らには、私には「蒼の騎士」が居る。

「灰色の悪魔」如き恐れるに足らなかつた。何故ならば、「悪魔」などというのは「英雄」によつて討伐されるのが定めなのだから！」

「ええ、ですので閣下にはどうか瑣末事に気を取られず悠然と構えて頂ければと思います。「雑務」は私どもが引き受けますので」

「ふふふ、頼りにさせて貰うとしよう。「総参謀」殿」

そしてすっかりと気を良くしたカイエン公は、控えていた使用人に前祝いに秘蔵のワインを持ってこさせる。

そんな主宰の様子を見てルーファス・アルバレアは当人には気づかれぬようになんともつまらなさそうな表情で少しの間だけ眺める。

しかしそうしていたのもほんの束の間、眼下にて対峙する蒼の騎神と灰の騎神に気づいたルーファスは再びそちらへと意識を向ける。

(ふふふ、さて、どうでるかなリイン・オズボーン君)

己が親友が《C》であったという真実、それを彼は今頃知っていることだろう。

その時彼が一体どうするのか、それはルーファスにとっては興味深い命題であった。

――心が折れてそのまま戦えなくなるのか

――怒りに身を任せて鬼と化すのか

――友情で自分をごまかして、憎しみを捨てるのか

それともそれとも、と。

(さあ、君の持つその輝きを私に見せてくれ、我らが筆頭殿。君が真にあの御方の後継たるならば)

果たして自分がかつて見せられたあの磨き抜かれた鋼の輝き。黄金のような優美さのない、どこまでも無骨な、されど惹きつけられて止まぬあの輝きを君は見せてくれるのかと。

ルーファス・アルバレアは先程どは対照的にどこまでも無邪気に笑っていた。義弟の成長を見守る義兄のように、対等の好敵手の出現を寿ぐように、「英雄」に憧れる無垢な子どものように。

リイン・オズボーンVSクロウ・アームブラスト（前）

「勝てる」、第一機甲師団を率いる、ゲルトルート・トゥルナイゼン中将は自軍の勝利を半ば確信しつつあった。宰相の遺児たるリイン・オズボーン少尉の獅子奮迅の活躍によって、貴族連合が投入した虎の子の新兵器部隊は半ば壊滅しつつあった。

あの鬼神の如き存在を前に、未だ戦意を保ち戦列を保っている事は敵ながら称賛に値するが、それでも時間の問題だろう。こちらの方にも少くない損害は出ているが、それでも未だ第一機甲師団は健在であり、目の前の2機にしても敵部隊の中では別格と言っていい使い手なのだろうが、それでもあの鬼神の如きこちらの「英雄」に勝てることは到底思えなかった。

（彼には助けられたな）

リイン・オズボーンの働き無くして今回の勝利は有り得なかった。

宰相閣下より紹介された時は、まさかあの宰相に限って我が子可愛さで目がくらんだという事はあるまいと思ったが、なるほど確かに大したものだったとそう中将は内心で称賛する。もしもあの灰の騎神がなければ自分たち第一機甲師団は壊滅して、帝都は貴族共によって占領されていただろうと。

（此度の事態の收拾がいたら、私は責任を取らなければならぬうな）

宰相閣下の暗殺を防げなかった罪、それを誰かが取らなければならぬまい。

そして今回の警備の責任者が自分である以上、それは自分以外にあるまい。

更にはギリアス・オズボーンという稀代の指導者をこの国難の際に失ったという重さを考えると、暗澹たる気持ちになるが、それでも何とかクーデターを防ぐ事が出来たと中将が一息つこうとした瞬間――

「閣下！上です!!!」

突如として高速で飛来してきた蒼い騎士人形、その持つ双刃剣によつて愛機毎串刺しにされたゲルトルート・トゥルナイゼンは呆気なくその生命を散らした。

「閣下!？」

「おのれ！よくも中将閣下を!!」

敬愛する上官、それを討つた不屈き者に裁きを下さんと怒りと共に第一機甲師団は姿を現した蒼の騎神へと猛攻を加える。しかし、機甲兵とは比べ物にならない機動性能を前に、影すら捉える事が出来ない。呆気なく、そして順当に第一機甲師団の誇る戦車部隊は蒼の騎神に瞬く間に壊滅させられた。

・・・

灰の騎神ヴァリマールと蒼の騎神オルディーネ。

帝国の伝承に謳われる7体の「巨大なる騎士」そのうちの2体が、今、帝都のドライケルス広場にて対峙していた。

2体の周囲に転がるのはおびただしい数の機甲兵の残骸と戦車の残骸だ。

巻き込まれてはかなわんとばかりに西風の両名を始めとする残った僅かな者たちは、貴族派、革新派を問わずに一時的にだが既にその場より撤退していた。

「……ここからは神話・伝説の領域、英雄共の戦いであり、常人では立ち入れる領域ではないのだと示すかのよう。」

「現れたな……貴族共の切り札!」

貴族側に起動者と騎神がついていること、それは予想できていたことだ。

そしてその切り札をこうして投入してきたという事は貴族側もいよいよ後が無くなって来たという事だろう。

この場で目の敵手、それを討ち取り、その上でバルフレイム宮にいる皇族の方々を保護する。

そうすれば、貴族共の目論見は完全に瓦解する。いや、自分が直接バルフレイム宮に赴かずとも良い。

重要なのは機甲部隊を片付ける事、そうすれば《アルノールの守護

神》と《光の剣匠》が皇族保護の役割を果たすだろう。

近衛軍は精鋭だが、それでもあの二人を止められる程の力量を持ったものは居ない以上、機甲部隊さえなんとかすればあの二人ならばなんとかするだろう。

後は皇帝陛下より正式に今回の事件の黒幕を逆賊とする詔勅を発してもらおう、それで終わりだ。

貴族共は利に敏い、初動をしくじった己が盟主をあつさりで見限り、掌を返す事だろう。

(だからこそ、俺はなんとしても目前の敵手に“勝利”しなければならぬ……！)

騎神を扱う“経験の差”、それらを覆して自分は“勝利”を掴み取らねばならないのだとリインはマグマの如く意志を滾らせて燃やす。憎悪を上回る使命感と決意、それがリイン・オズボーンという剣を極限にまで研ぎ澄ませていく。

「……ああ、お前の相手は俺だ。リイン」

その声を聞いた瞬間、研ぎ澄まされていた集中力が霧散した。

「その声……まさか、クロウなのか」

その言葉は先程までの烈火の如き憎悪とそれを律していた鋼の如き覇気の宿った声とは違い、震えていた。

嘘だ、そんな馬鹿な事があるはずがないと。信じたくない真実、それを知る事になる“恐怖”がそこには込められていた。

「ああ、ツールズ士官学院2年IV組所属……いや、旧ジュライ市国最後の市長の孫にして帝国解放戦線リーダー《C》、そして鉄血宰相ギリアス・オズボーン暗殺の実行犯、それが俺だ。お前たちの親友だったクロウ・アームブラストという男だ。鉄血の子筆頭、“灰色の騎士”リイン・オズボーン特務少尉殿」

告げられたのはリインにとっては信じられない、いや信じたくない真実。

心を許した親友が自分の父親を殺した仇だったというそんな。

「……ふざけた冗談はよせよクロウ、流石にその冗談は悪質だぜ。悪巫山戯が過ぎる。」

お前がC？俺の父を殺した犯人？嘘をつくなよ、だってCは俺がザクセン鉄鉱山で……」

そう、そうなのだ。こうして蒼の騎神に乗って第一機甲師団を壊滅させた以上、クロウが貴族派に協力した起動者である事は確定だろう。

だがそれでも《C》であるはずがないのだ。何故ならば――

「変装上手な知り合いが居てな、ザクセン鉄鉱山の時はそいつに替え玉を頼んだんだよ。」

――お前を、お前たちの目を誤魔化すにはそれ位しなないとねえからな」

「……………」

告げられた言葉、それを聞いた瞬間にリインの身体が震えだす。

ザクセン鉄鉱山で自分が仕留めた相手は間違いなく、帝都の時にも邂逅した《C》本人であったと、そうミリアムに報告したのは自分だった。

そしてその報告が、Cの正体を突き止めるという任務を父から与えられていたミリアムからクロウに対する警戒心を奪い取ったのは間違いない。

――つまり、自分のせいなのだ、父の暗殺を未然に防ぐ事が出来なかったのは。

「……何故だ、クロウ。何故……父を殺した」

絞り出すような声で問いかけられたその言葉にクロウは……

「俺の爺さんが鉄血宰相の野郎の、お前たちエレボニアの『繁栄』のための『生贄』にされたからだ」

お前の父が『必要悪』だと『やむ得ない犠牲』として切り捨てた存在、そしてお前自身がこれから切り捨てる事になる存在こそが自分なのだどこまでも冷たく答える。

「……鉄鉱山の時に解放戦線の奴らに対して言っていた、「自覚を持って」という言葉、アレを言っていた時のお前に演技をしているような様子は見られなかった。それは、俺達が単に節穴だっただけだという

事か」

目の前の親友が父を憎んでいる事、それは知っていた。だが、それでも鉱山でのクロウはそれを割り切れていたようにリインは思えた。

消えない憎しみと怒りはある、されどそれでも前を向いて進んでいくのだと、自分たちと同じく光の道を歩んでいくのだと、そう信じていた。

「いいや、あの時言っていた言葉は紛れもない俺の本音さ。

——俺がギリアス・オズボーンを討つたのは故郷であるジュライのためでも、死んだ爺さんのためでもない。

単に俺自身がそうしないといられなかったからだ」

ジュライが望んで併合された事、それをクロウは知っている。

どれだけそこに悪辣な仕掛けがあつたとしても最終的にクロウの祖父を「生贄」に捧げて、エレボニアに尻尾を振る事を選んだのはジュライの市民自身なのだ。

そして、その判断を正しかつたのだろう。ジュライ市国はエレボニア帝国という大国の庇護の下、経済特区として繁栄を謳歌している。

——最後の市長であつた祖父、誰よりもジュライ市国という国を愛していた人物の死という必要最小限の犠牲と引き換えに。

——ふざけるなよ、なんだそれは。

祖父が鉄道爆破の犯人だと？そんなわけがないこと位、他ならぬお前たち自身がわかつていたはずだろう。

誰よりもジュライという国を愛し、国のために文字通りその身を粉にしていた祖父がそんな事をするはずがないという事位。

そう、わかっていたはずなのに奴らは、あいつらは、あっさり自分たちの利益のために祖父を生贄に捧げた。

憎くてたまらなかつた、祖父を破滅に追いやった鉄血宰相が。そして、それを黙認して共犯者となつたジュライの民も。

鉄血宰相へと快哉を挙げながら、踏みにじられた砂粒等気にも留めずに繁栄を謳歌するエレボニア帝国の人間も、総て。

——等とやさぐれていた時期もあつた。しかし、ある時ふと気づ

いたのだ、結局のところそれは自分の駄々であり我儘でしかないのだと。

自分がジュライで穏やかに暮らしていた時にも、陰で泣いていた人物は居たのはずなのだ。

自分にとつては自慢の家族であった祖父とて歴とした政治家なのだから、鉄血宰相ほどに悪辣じゃないにしても当然「誰か」を犠牲にするという決断をする事とてあつたはずなのだ。

だからこそ、これは自分のエゴだ。

ただ単に奪われつぱなしのままでは終われない、「大義」や「正義」等知つた事か等とは言わない。

それらは確かに尊ばれるべきものだろう、大真面目にそれに殉じようとする大馬鹿野郎の事も決して自分は嫌いではない。

だが、それでも自分はこの胸の中にこびりついた怒りを、憎悪をぶつけずにはいられなかつたのだ。

それが、かつての自分と同様に自分を憎む者を生むとわかつていてもだ。

それは「大義」のために自分のやる事が「悪」だと理解しながらも「誰か」のためにそれを為すリイン・オズボーンの「鋼の意志」とは真逆の、されど決して劣るものではない意志。

自分の行いが「大義」に背く「悪」だと理解しながら、「自分自身」のためにそれを為す「漆黒の意志」だ。

その込められた「漆黒の意志」それを前にリインはもはやあらゆる説得は目の前の親友に対しては不可能なのだと悟る。

そしてその上で、それでもこれだけは問いかけねばならないとばかりに、縫るように口にする。

「……俺はお前の事を親友だと、そう信じていた。違う道を歩む事になつても、それでも生涯付き合う事になる友なのだ。」

そう思っていたのは、俺だけか？俺達の過ごしてきた日々は全部嘘だったのか？お前は、最初から俺の父を殺すために俺の親友のフリをしていただけだったのか!？」

「……それは……」

泣き叫ぶような友の慟哭、常に威風堂々としていたリイン・オズボーンの「英雄」としてでも「軍人」としてでもない、一人の人間としての叫び。それを聞いて初めて、それまでよどみ無く答えていたクロウの言葉が止まる。

嘘、などではなかった。

楽しかった、本当に、楽しかったのだ。目の前の友人との日々は、5人で過ごす日々は。

このまま、コイツラと一緒に恨みと憎しみを捨てて前を見て生きていく。そんな日々も決して悪くないとそう思った事もあった。

「……だが、それが一体何だと言うのか。」

それでも結局自分は選んだのだ、復讐する事を。

目の前の親友の持つ自分への友情、それを利用して自分への警戒を緩めさせ、そして仇を討った。

「……ああ、その通りだ」

黄金色に輝く青春時代、それらと決別するようにクロウ・アームブラストは漆黒の意志を滾らせてどこまでも冷たく告げる。

これこそが自分にとっての最大限の誠意であり友情なのだとわんばかりに。

「そう……か」

それだけ呟くとリインはしばらく黙り込む。

リインの心に魂へと刻まれた多くの温かな思い出。

真実を知り、ヒビの入ったそれらの思い出が次々と砕け散っていく。

もうどれだけ望もうとこの黄金色に輝いていた日々には戻れぬのだと、そう告げるかのようにバラバラに飛び散っていく。

そして

「……………殺してやる」

漏れたのは深い深い呪詛の言葉。

憎悪に塗れた目の前の存在を滅ぼさねば気が済まないのだと告げる、憎悪の言葉だ。

「殺してやるぞー！クロウ・アームブラストオ!!!!!!」

「やってみろお!!!!」

その叫びと共に、トールズ士官学院、否《鉄血の継嗣》リイン・オズボーンと《亡国の遺児》クロウ・アームブラストは黄金色の青春時代に別れを告げて、死闘を開始した。

リイン・オズボーンVSクロウ・アームブラスト（後）

悪夢と、そう称する以外のない光景が広がっていた。

オズボーン宰相が暗殺されるという異常事態、アナウンサーの男性が動揺を露に叫んでいたラジオの音源が突如として途絶えたかと思うと、変わって喋り出したのはラジオ番組アーベントタイムでの人気パーソナリティであるミスティ、否結社《身喰らう蛇》の使徒第二柱、
“蒼の深淵” ヴィータ・クロチルダであった。

そして秘術“幻想の唄”によって士官学院の面々の目に映ったのは、遠く離れた帝都の光景。

リイン・オズボーン、真面目な堅物、されど親切で面倒見の良かったを彼が父の仇を討つのだと憎悪に駆られて凶剣を振るう光景。

クロウ・アームブラスト、学院きつての不良、されど気さくで友人の多かった彼が宰相暗殺の張本人だという衝撃の真実が明かされる光景。

そして、親友同士として、学院の名物コンビとして有名だった彼らが敵意と憎悪を露に死闘を繰り広げる光景だった。

誰も、何も言う事が出来ない。ただただその光景に圧倒されるだけだ。

軍属とは言え、未だ学生に過ぎない彼らの多くは未だに“戦場”を知らないものが大半だ。

だからこそ、その光景を前に何も言うことが出来なくなる、先日まで肩を抱き合いながら談笑していた級友二人が、本気の殺意をぶつけ合う、そんな“悪夢”と称する以外にない光景を前に。

「何で……どうして……こんな……」

そしてそんな“悪夢”のような光景に最も心を痛めているのは間違いなく彼女であった。

トワ・ハーシエル、リイン・オズボーンが陽だまりと称する優しい少女は目の前の光景に膝から崩れ落ちて、涙を流しながら嘆いていた。

「嘘……嘘だよこんなの……リイン君とクロウ君がこんな事になるなんて……だって、だってあの二人は……」

本当に本当に仲が良かったから、羨ましくなってしまう位に。彼女の自分が時々妬いてしまう位に。

すぐに喧嘩ばかりしていたけど、それでもどちらにも本当に相手の事を信頼していたから。

誰も彼女に言葉をかける事ができない。何故ならば、彼女の言葉はその場に居る者達の心情を代弁するものだったから。

生徒だけではない、教官達もそうだ。歴戦の軍人であるナイトハルト・アウラーも、A級遊撃士のサラ・バレストインも、そして「軍神」ウオルフガング・ヴァンダイクでさえもその光景を前に言葉を失っていた。

「止めないと……」

そう呟いたかと思うとトワはゆらりとその場から立ち上がる。

「私が……二人を止めないと……」

そう叫んで今にも駆け出そうとした彼女を……

「ダメだよ会長、今から行っても間に合わない。」

それに例え、間に合ったとしても僕は会長を行かせるわけにはいかない」

張り詰めた言葉と共にミリアム・オライオンが静止した。

その表情と声音は普段の天真爛漫な子どもと言った様子ではない、歴とした情報局員としてのものだ。

「どうしてミリアムちゃん！私があの人を止めないとならないんだよ!!」

何故ならば、あんなにも仲が良かった二人が殺し合うなんて、そんな悲劇は絶対に間違っているのだからと、常に無い剣幕でトワは詰め寄る。

「うん、そうだね。ひよっとするとリインもトワの言葉になら耳を貸すかもしれない」

行って何になるのか、あの状態の二人をどうやって止めるのかと厳しく問い詰められるという予想に反してミリアムから返ってきた言

葉は意外にも肯定の言葉であった。

「だったら……」

「だからこそ、会長は行っちゃ駄目なんだよ。だってリイン・オズボーンにとつてトワ・ハーシエルは最大の弱点なんだから」

どこまでも冷徹に「弱点」とミリアム・オライオンは告げる。

士官学院の後輩としてではなく、「戦場」というものを味わったことのある先達として。

「リインはさ、多分僕やクレアが人質に取られても見捨てられると思うんだよね、だって僕達は一緒に肩を並べる軍人だから。仲間の犠牲が怖くて戦いなんて出来ないんだからさ」

淡々とミリアムは語っていく、普段義兄と慕っている存在はおそらく自分を見捨てる事が出来るだろうという内容でありながら、そこに哀しみの色はない。どこまでもそれが事実だと言うように。

「フィオナは……若干怪しいかな。リインにとっては護りたい人だろうから、でもそれでも悩んだ上で軍人としての筋を通すと思う。」

でもそんなリインでも、もしもトワが人質に取られちゃったら怪しいと思うんだよね。それこそトワの命と引き換えだって言われたら、本来だったらあり得ない事もしちゃうかもしれない」

「待て、つまりお前はこう言いたいわけか。帝都へと赴けばハーシエル会長を貴族連合が、副会長殿を脅すための人質にしようとする。いくらなんでもそれは……」

「するでしょ。ユーススだって見たでしょ、騎神のデタラメさを。アレを人質一人取るだけで、無力化出来るんだつたらやらない理由がないと思うんだけど。テロリストと組むなんて事をしていた連中なんだから」

「……ッ！」

どこまでも齒に衣着せないミリアムの言葉を前にユーススは手を強く握りしめながら俯く。

反論は出来なかった、既に宰相暗殺、そしてクーデターという暴挙をやっているのだ。

クーデターが失敗に終われば待っているのは「逆賊」となる破滅

の未来である以上、それをたかだか平民一人を人質に取る程度で防げるというのなら躊躇いなくそうするだろうとわかつてしまったがために。

正々堂々と敗れ去る位ならばどれほど悪辣と蔑まれようと、卑怯な手を使つても勝利を掴み取る、それが「戦争」なのだから。

「姉さん！こんな光景を見せて一体どういふつもりなの!!!」

自分が弱点なのだときつつけられて、何も言えずに立ち竦むトワの姿。

そんな姿と同様に導き手でありながら、何も出来ずにただ己が選んだ起動者の戦う姿を見ることしか出来ない無力感、それらを誤魔化すようにこれを見せている姉へとエマは怒りを叩きつける。

「どういふつもりもなにも、「忠告」よ」

「忠告……?」

てつきり「確かな絆で結ばれていた二人の起動者が、死闘を繰り広げる。こんな極上の歌劇はそうそう見れるものではないからそのおすそ分けよ」等と言った悪趣味な回答が来るのではと身構えていたエマの予想に反して、姉の言葉はどこか真摯な熱を帯びたものであった。

「ええ。ねえ、エマ。貴方は今、そんなところで何をしているのかしら？」

「何って……」

「起動者を導くことこそが、私達魔女の眷属の務め。にも関わらず、貴方は彼を起動者として見定めるのにずいぶん時間がかかったわね？既に私が起動者を一人導いているとわかりながら、そしてそのためにも彼は騎神を手に入れるのが遅れた。貴方が出会ってすぐにその使命を果たしていれば、もっと彼は安全な道を歩けたかもしれないわね。……たかだが一週間であそこまで戦えるようになった事は驚嘆するしかないけど、逆に言えば、そうなるために彼はとんでもない無理をしている事でもあるわよね」

「それは……」

それはエマにとって否定できない指摘であった。

エマにはエマの言い分がある、幾多の騎神の力に溺れて、
「悪魔」へと成り果てた起動者を知っているからこそ慎重になったのだと。

しかし

「まあ、貴方には貴方の言い分があるのでしよう。

だけど結果として、彼は騎神を手に入れるのが遅れて、今クロウを相手に劣勢に立たされている。

それは動かし難い事実よね？」

「……ッ！」

容赦のない姉の指摘、それを前にエマは唇を噛んで黙り込む。

そしてそんな妹の様子を見ても蒼の深淵は緩める事無く、糾弾を続けていく。

「貴方の決断が遅れている間にも貴方の起動者は決断して進み続けたわ。

だからこそ、とうの昔に決断して先に進んでいたクロウに曲がりなりに追いつく事が出来た。

翻って導き手たる貴方はどうかしら？導く事は愚か、付いて行く事すら出来ていないんじゃない？」

反論する事は、出来なかった。姉の指摘は何もかもがその通りだったから。

そうして黙り込んだ妹に対して姉は、どこまでも優しく語りかける。

「ねえ、だからいつその事もう魔女の使命なんてもので放り捨ててただの女の子として生きなさい。

貴方も、もう年頃なんだから反抗期の1つや2つ経験すればいいのよ、婆様の言いつけなんて無視してね」

魔女としてではない、姉としての妹を思う純粹な善意を滲ませていたのも一瞬、魔女は再びその口調を真剣そのものな様子へと戻して

「それでも尚、使命を果たす事にこだわるのだというのなら、この光景を良くその目に焼きつけておきなさい。

今繰り返し広げられている光景こそが古より続いてきた、巨大なる運命。騎神とその担い手たる起動者の争いよ。

この「現実」を前に抗おうというのなら、確固たる覚悟を抱きなさい。

「でなければ呑み込まれるだけよ、巨いなる運命へとね」

それだけ告げると言いたい事は言い終えたとばかりに、ヴィータは黙り込む。

繰り広げられる光景、親友同士だったはずの二人が、本気の殺意をぶつけ合うその光景は未だ未熟な雛鳥達に否応無しに運命の残酷さを突きつけるのであった……

・・・

戦いの火蓋は空での激突で以て切って落とされた。

クロウ・アームブラストが蒼の騎神を駆り、上空へと躍り出たからだ。

クロウがそうした理由は至って簡単、騎神の操縦において歴代の起動者が最も苦勞するのが、空での戦闘だからだ。

騎神そしてその騎神を下にした機甲兵は操縦者の実力がそのまま反映される機体だ。

それは単純な操縦技量だけの問題ではない、術者の力量がそのままに反映されるのだ。使い手に依らず均一な性能を發揮する戦場から英雄を駆逐していく他の兵器とは真逆の、戦場に「英雄」を再びよみがえらせる兵器、それこそが機甲兵であり、騎神とはそんな機甲兵の基となった存在である。

しかし、どれほどの歴戦の達人であろうとまず経験することのない戦場がある。「空」である。

人は鳥のように翼を持った存在ではない、故にどれほど高く飛翔しようとも一度飛んでしまえば後は落ちてくるだけである。故に如何なる武術でも、まず上空に飛び上がるような行為は下策とされる。一度飛び上がってしまえば後は自由に身動き出来なくなつて、良いのを晒すだけなのだから。

体捌きにしても術技にしても、まず地に足をつけている事を前提として叩き込まれる。当然だ、重ねて言うが空を飛んだまま戦う事など

人間にとってありえるはずがないのだから。

だが、そのあり得ない事が「騎神」に於いては現実となる。

そしてなまじ騎神が生身での動きをトレース出来る人の形をした兵器だけに、その齟齬は大きくなる。

この齟齬を修正して上空でも地上と遜色のない動きが出来るようになるには、騎神に選ばれた起動者、達人であつても生半可ではない。

いや、むしろ身体に地上での動きが染み付いた熟練者であればあるほどに空での戦いに適応するのに苦労することになるのだ。

すなわち、騎神の操縦の経験の差、それが一番反映されるのが空を飛びながらでの戦いなのだ。

だからこそクロウ・アームブラストは空での戦いを選んだ。そこにあえて相手の得意な土俵で戦つてやる等という驕りは一切ない、目の前の「宿敵」の桁違いぶりを知っているからこそ、心の中にある負い目を奥へと追いやり、ただただ全力で勝利を得るために邁進する。誰かのためでもない、自分でもわからない、自分の中にある譲れない思いのために。

そしてリイン・オズボーンは不利とわかりながらもそれに乗らざるを得ない。

戦いにおいて高所を奪うことから齎される優位性はいまさら語るまでもない、星には重力というものが存在する以上上を取ったものは、取った分だけその位置エネルギーを攻撃に利用できるといふ事なのだから、敵が空に上がっているというのに自分は地面に縫い付けられたままでは、一方的な展開になるだけなのだから。

加えて、上空での戦いならば周辺への被害を考えずに思う存分に戦えるという理由も存在した。

かくして灰と蒼、2体の騎神は帝都の上空で激突し合う。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

獣の如き咆哮を挙げながら、リインの駆るヴザリマールは蒼の騎神へと猛攻を加える。

荒ぶる炎のように、胸の中で燃え盛る憎悪という業火を叩きつける

べく。

しかし

「どうしたーそんなもんか!!」

その烈火の如き猛攻は総てあっさりと防がれる。

まるでどれだけの業火であろうと、深遠なる海を前にすれば容易く鎮火されてしまうかの如く。

戦闘開始から数十分、灰の騎神には既に少なからぬ損傷が刻まれているのに対して蒼の騎神は未だ無傷であった。

此処まで戦いが一方的な様相を呈しているのは、無論起動者となつてからの経験値の差もあるが、それに加えて二人の精神状態もまた少なからず関係しているだろう。

クロウ・アームブラストは、こうなることを予想して覚悟していた。己が本願、ギリアス・オズボーンを討つという事はすなわち親友たるリイン・オズボーンと袂を別つ事だという事を。

いずれ、こうなることを想像していたからこそ彼は迷い、その上で決断したのだ。

そして彼はそのための準備も整えていた、間近で見続けたヴァンダールの双剣術。それをいずれ相手取る事になると予想して。

一方のリイン・オズボーンにとって此度の出来事は全くの慮外であった。

貴族連合に起動者が就いている事は予想していた、だがそれがまさか親友だと信じていたクロウ等と。

——更には帝国解放戦線のリーダーである《C》であり、父を殺した張本人である等。

裏切られたという思いは怒りと憎悪に変わり、彼を駆り立てる。

しかし、憎悪によって動く今の彼に振るわれる双剣はどこまでも荒々しかった。

何故ならばヴァンダールの剣とは「守護の剣」なのだから。

「護るために殺す」のこそが守護の剣なれば、今のリインの振るう「ただ殺すための剣」はどうしてもその深奥「武の理」から遠ざかる。

その攻撃は確かに凄まじい、凡百の使い手であれば為す術無くあつさりとその生命を断たれていたことだろう。

されど、クロウ・アームブラストは断じて凡百の使い手に非ず、本来の獲物である双刃剣を振るう今の彼は紛れもないリインと同様“達人”と称するに足る使い手である。

故にこそ、その粗を突くのは至極容易かった。

「何でだ！何で……届かない!!!」

あるいは、完全に胸の中から溢れでる憎悪に身を総て任せてしまえば、その身を完全な鬼へと化してしまえば、こうはならなかったかもしれない。

技術等というのはつまるところ、力無きものが力を持つ者相手に勝利を掴みとるために手に入れた武器なのだから。人という非力な種族が、上位種たる存在に対抗するために身に着けたものこそが“技”なのだから。

そんな小細工等必要のない上位種、“怪物”へとその身を化してしまえば、たかだか“人間”如きを食い殺す事など容易いことだろう。

だが、それは出来なかつた。何故ならば、目の前の復讐者を生んだのが他ならぬ父の行いだったと、そう理解できてしまえるだけに、そんな自分がどの口で父の仇と吠えるのかという思いが心の片隅にあるから。

——何よりも、目の前の親友との黄金の日々が、もう砕け散ってしまいバラバラになったその断片が今も心の中にあつたから。どうしても父の仇と憎み切る事は出来なかつた。

怒りと憎悪に塗れたその双剣は“鋼の境地”に程遠く、されど積み重ねた思い出と常に己を律してきた強固な理性は完全に憎悪へとその身を委ねる事を許さず。

故にその中途半端な揺れる常人と同様の心理状態から出せる力はどこまでも常識的な範囲内となる。

騎神からのフィードバックをその中途半端な憎悪によってねじ伏せてはいるが、それも長く続くものではない。

徐々に、だがされど確実に蓄積していった機体への損傷は動きを鈍

らせていき、そして――

「ガハッ……」

「あばよ、リイン」

お前は間違いなく俺の親友^{ダチ}だったとつぶやいた言葉はリインの耳に届く事はなく、胴体部分を貫かれたヴァリマールはそのまま地上へと叩きつけられる。

上空に佇む蒼の騎神と地に這いつくばる灰の騎神、それは「勝者」が誰であり、「敗者」が誰であるかを否応なく突きつけていた。

憎悪に塗れたその心は、相手の覚悟を理解し、敬意を払った上で超^殺える「鋼の境地」には程遠い、故に今の彼は「英雄」に非ず。

かといって、完全に憎悪に身を委ねた鬼へとなる事もできない、今のリインはそんなどこにでもいるどこまでも中途半端な「人間」だった。

そして「英雄」でないただの人間に突きつけられるのは何時だとて無情で残酷な現実だ。

順当に、経験の差という劣位を覆す「奇跡」を起こす事無く、「灰色の騎士」は「蒼の騎士」へと敗北したのだった。

敗北

勝敗は決した。

憎悪という焰によって自ら纏っていた鋼を溶かした灰色の騎士は、「英雄」という「恒星」へとなること無く、その身を焼かれて天より墜落した。内臓を痛めたのだろう、ゴボリとリインの口より血が吐き出される。

騎神へのダメージは起動者へと還る、胴体を貫いた敵の攻撃を間一髪で振って核に届くのは防いだものの、それでも刻まれた損傷はかろうじて致命傷を避けた重傷と言ったところだろう。もはや、とてもではないが戦闘を出来る状態ではない

「何でだ……何で……！」

今まで出来ていた事が俺は出来ていないのだと、自分の不甲斐なきにリインは血反吐を吐き出しながら、怨嗟の声を挙げる。

常々言っていた事のはずだ、敵には敵の事情がある、だがそんな敵の正義を力によって押しつぶし、自国の正義を押し通す事、それこそが「必要悪」を担う軍人の役目だ。

現にこれまではそれが出来ていたはずだ、クロスベルで《赤い星座》を相手に、ザクセン鉱山では《帝国解放戦線》を相手に。

何も、自分のやるべき事は変わっていない。違いと言えば、たかだか敵が親友であることと父がその親友に殺されたと、その程度の事のはずだ。

だからそう、自分のやるべき事は変わらない。いつもと同じように、胸の中で猛る焰を鋼鉄の意志によって律して目前の敵を撃破する、それだけの事だ。

そう、それだけの事のはずなのにそれが出来ない。

——憎め、目の前の男は父の仇だぞ。憎んで当然だ、狂ってしまえば良い。

中途半端に制御しようとするからそんな無様を晒しているのだ、「力」に総て委ねてしまえばいい。

そう、胸の内より咆哮が猛る。

——憎悪に身を委ねるな、覚悟していたはずだ、父を憎む者も居るのだという事を。

感情を律して理に従うのが軍人なれば、激情を飼い馴らすべし。それこそがお前の目指すべき「鋼の境地」である。

そんな声が頭の中には木霊する。

「憎悪」と「理性」2つの間でリインは揺れ続ける。

父を殺された憎悪という感情が磨き上げた鋼の意志を溶かしてその身を焼く。

だが溶け落ちた鋼はそれでも、憎悪の焰を覆い、その火勢を弱める。

憎悪の焰に身を委ねた「怪物」にも、鋼の意志によって憎悪の焰を飼い馴らした「英雄」にもなることが出来ずにどこまでも「只人」としてリインはどこまでも徹し切る事が出来ずに居た。

そしてそんな中途半端な意志では、身体に刻まれた傷をねじ伏せる事は出来なかった。

まだだ、まだだと吠えているその言葉もこれまでの「鋼の意志」の宿った宣誓ではなく、どこか空虚な響きを伴った空元気の範疇を脱するものにはなりえていなかった。

そしてそんな「親友」を樂にしてやろうとばかりにクロウはトドメを刺そうと近づいていく。

此処に至って、生かして捕らえるという気はクロウの中には存在していない。

目の前の親友の気性はよく知っている、我が身惜しさに貴族連合に与する等、文字通り死んでもリイン・オズボーンはしないだろう。

そしてそれは貴族連合も同じこと、貴族連合に全面的に協力するといふのならばいざしらず、そうでないのならば宰相の遺児たる彼を放置する理由は存在しないはずだ。

既に此度の一件で少くないラマルの騎士が、「灰色の悪魔」の手にかかった以上、虜囚となったリイン・オズボーンに待つ運命などろくでもないものだろう。

ならばこそ、他の誰かの手にかかる位ならば、この場で自分が仕留

める。それがせめてもの誠意であり、友情なのだと信じて。

友を手には掛ける迷いはある、躊躇いもある。

だがそれを上回る漆黒の意志をクロウ・アームブラストは有していた。

目前の敵に確かな敬意を宿した上で超^殺えるためにと振るわれたその剣は寸分の狂いなく、地に這いつくばった灰の騎神へと吸い込まれていきーーーーー

「やれやれ、一体何をやっているのか、この馬鹿弟子めが」

寸前にて甲高い金属音と共に生身の人間によって弾かれた。

「剣の本質を見失うな、されどその本質に囚われて誇りを捨てるなーーーーそう、教えたはずなのだがな」

《獅子心十七勇士》が一角、人の形をした戦術兵器とも謳われる《アルノールの守護神》マテウス・ヴァンダールが蒼の騎神の前へと立ちはだかったのだ。

「マテウス……師範」

「アルノールの守護神……カイエンのおっさんが帝都から引き剥がしていたはずだったんだが……」

マテウス・ヴァンダール、皇室への絶対的な忠誠と武威を誇る彼をどうにかして帝都から遠ざける事、それは今回のクーデターを成功させるために重要な課題の一つであった。

万が一にも皇帝陛下の保護に失敗すれば、貴族連合側に待っているのは「逆賊」となる未来なのだから、基より此度の一件は四大名門の中でさえ意見が割れていた中をカイエン公が半ば強引に押し通したものだ。

もしも初動に失敗すれば、その瞬間に基より貴族内では穏健的な立ち位置に位置するハイアームズ侯、皇室への忠臣を気取っている、カイエン公に言わせればザクセン鉄鉞山の件で散々協力しているながら何を今さらというものだが、ログナー侯を筆頭にこぞって貴族連合からの離脱して此度の一件はあくまでカイエン公の独断に過ぎないと喧伝する事は疑いようがなかった。

だからこそ、万一の事態を防ぐために事前にアルノールの守護神等という怪物を政治的な工作によつて帝都から遠ざけた、そのはずであった。しかし、だというのならば目の前の事態は一体どういう事なのか。

「まさか私の留守中にこのような暴挙を企てているとはな……どうやらオリヴァルト殿下の読みは正しかったようだ」

「なるほど、あの『放蕩皇子』様が手を回したってわけか」

「然様、流石にこれ程の暴挙に及ぶ等というのは殿下にとつても想像の埒外であつたようだがな」

己の戴く主を若干誇るようにマテウス・ヴァンダールは静かに口にする。

実際、クロウ・アームブラストはカイエン公が、いや自分たち貴族連合が放蕩皇子と揶揄されるあの道化を演じている第一皇子の事を若干過小評価していた事を認めざるを得なかつた。

恐れるべきはギリアス・オズボーンという『怪物』とその怪物の手足となつて働く『鉄血の子ども達』と帝国正規軍、拘束すべきは革新派のNO2たるレーグニッツ知事、そして帝国正規軍最高司令官シユタイエルマルク元帥と参謀長カルナツプ上級大将と行つた革新派の重鎮たち。

最優先で『保護』すべきは皇帝ユーゲント三世陛下と皇位継承権を有するセドリツク皇太子殿下とアルフィン皇女殿下、それが貴族連合側の認識であつた。

第一皇子とは言え、皇位継承権を持たないオリヴァルト皇子は無論『保護』すべきお方ではあるが、優先順位は前述の者たちに比べれば落ちる、そのはずであつた。

だが、それはひよつとするとんでもない誤りだったのかもしれない、あるいは未だ巢立ちを迎えていない未熟な雛鳥に過ぎないセドリツク・ライゼ・アルノールとアルフィン・ライゼ・アルノールの二人よりも、オリヴァルト・ライゼ・アルノールこそを優先すべきだったのかもしれないとそんな想いがクロウの心中に過る。

(ま、そこまで俺が気にする必要はないか)

“蒼の騎士”等という大層な二つ名で呼ばれてはいるが、自分の立ち位置はカイエン公に雇われた私的な傭兵という立ち位置のほうが近い。全体の戦略を考えるのは自分の仕事ではないだろう。

今、自分が優先すべき事、それは“灰の騎神”の撃滅とそれを邪魔する目の前の敵を屠る事に相違なかった。

「まさか騎神の一撃を生身で防ぐなんて、噂通りのデタラメっぷりだな。ー！ー！けどわかっているだろう、あんた程の実力者ならば。コイツのデタラメっぷりもな。」

生身同士の戦いだったら、俺はアンタに及ばないだろう。だが、いくらアンタでもコイツを生身で相手取るなんてのは流石に無茶が過ぎるつてもんだぜ、アルノールの守護神殿」

淡々とクロウは告げていく、それは過信ではない、純然たる事実であつた。

「ふん、確かにな。生身でそれを相手取れるような者が居るとすれば、それは既に人の領域から外れた者位だろう。」

ただの非力な人間に過ぎぬ私が相手取るには些か荷が勝ちすぎるというものだ」

何がただの非力な人間だ、化物め。ただの人間に騎神の攻撃を生身で受け止められてたまるか。

そう言いたい衝動をクロウはぐっと堪える。

「……それでも振るう者が木偶で有れば対処のしようもあつたのだがな。その若さで実に大したものだ。」

故にこそ惜しい、何故貴殿はカイエン公に与する。如何なる“誇りを抱いてその剣を振るう”

「……あいにくだが、俺がこの力を振るうのは徹頭徹尾“俺自身のため”だ。」

そこに転がっている野郎みたいに、やれ“祖国”のためだの“大義”のためだの、そんな“誰か”のためなんてあんたら好みの理由は存在しない。

カイエンのおっさんに協力しているのは、俺の目的を果たすために色々と助けてもらったからな、その義理立てみたいなものだ」

祖父のため？否、死人が何を考えているかなど残された側が勝手に想像するしかない。

故にこれほどこまでも自分が許せないという理由でしか無い、あの人はこう思っていたはずだ等と死人の思いを盾に取ろうとする程断じて自分は落ちぶれていない。

ジュライのため？否、ジュライは経済特区として繁栄を謳歌している。むしろ今や特区の庇護者となった鉄血宰相が死ぬ事はジュライにとつてはーになりこそすれ、＋になるはずもない。

ーーーそもそも祖父を「生贄」に捧げた連中のために戦おう等と思える程にクロウ・アームブラストは聖人君子ではない。どれだけ死人が出ようが知ったことか！等と言うほどに恥知らずになるつもりはないが、それでも親友程に、無条件に無力な民は守られるべき存在だ、等とはとてもではないが思えなかった。

故にこそ、何故剣を振るうのかと問われればそれはこう答える以外にないだろう。

それは、「自分のため」であると。

「ーーーそして、今俺が灰の騎神をぶっ倒そうとしているのはカイエンのおっさんへの義理立てじゃねえ。俺自身がそいつと決着をつけねえとならねえからだ。」

だから、退けよアルノールの守護神。俺とそいつの戦いに割って入るっていうんなら、俺は一切容赦する気はねえぞ」

誰にも邪魔をさせる気も譲る気もない、こいつは俺の獲物だと漆黒の戦意を滾らせるクロウを前にマテウスは悟る。

なるほど、これは大したものだと。

多くの人間は「大義」がなければ、自分が正しいのだと思わなければ戦う事は出来ない。

相手と同じ人間であるという事を自覚しながら、なおその命を断つという覚悟が出来る「英雄^{異常者}」等圧倒的少数派だ。

大半は相手は同じ人間だと必死に思い込まないようにする、そのためにこそ各国は兵士を育成する際にはまず反射的に引き金を引けるように訓練する。

“殺人”という悪徳を為すというのはそれほど、良識と常識を養った善良な人間にとつては耐え難い苦痛なのだ。

だからこそ指導者は戦争の前に“大義”を煽るのだ、これは祖国を守るための正義の戦いなのだと。此処で戦わなければ愛する者を奪われる、故に恐怖を乗り越えて戦うのだと。

だが、目の前の相手の語る言葉に、そういった己を誤魔化そうとする色は一切感じられない。

あくまで“己のため”だと言い切る漆黒の殺意がそこには宿っていた。

それはマテウスにとっては手放しに賛美出来るものではない、彼は“守護の剣”を掲げるものなのだから。

綺麗事だと百も承知の上で、“誰かを護る”ためにこそ剣を振るうのが守護の剣の本分なのだから。

だが、その自分では決して至ることの出来ない漆黒の境地には敬意を払わざるを得ない。

それは“武の理”とはまた別の到達点、“修羅”の境地に通じるものであった。

これはいよいよ以て、厄介な敵だとマテウスは目前の相手への警戒度を跳ね上げる。

「生憎だが、それは出来ぬな。怒りによつて己を見失った不肖の弟子だが、それでも其奴は未だ若い。

いずれはこの私を超えていく男だと、そう見込んでいるのだからな。此処でその生命を散らすにはあまりにも早いというものよ」

その穏やかな言葉にリインは悟る、師が自分をこの場から逃がそうとしているのだと。

そのために、自らの命を賭す覚悟なのだ。

そしてそれまでの落ち着いた様子から、マテウス・ヴァンダールは裂帛の気迫を持って宣言する。

「そして貴殿の覚悟、それは十二分に伝わった。その上で、あえて言わせて貰おうか。

舐めるなよ青二才、我が名はマテウス・ヴァンダール！

アルノール家の盾にして剣なり！誇り無き狂犬の牙など、へし折つてくれるわ!!!」

「だったら、その誇り每噛み砕くまでだ!!」

その言葉と共に両者は激突を始める。

生身と騎神という、結果のわかりきった戦いを。

「警告。既ニ機体ヘノ損傷、ソシテ貴殿自身ニ刻マレタ負傷ハドチラモ看過シエヌモノデアル。

コノ隙ニ戦域ヨリ離脱シテ、シバシ休眠状態ヘト移行シテ回復ニ務メル事ヲ提案スル」

「逃げると言うのか……俺に！師を犠牲にして!!父の仇を討つ事もなく!!無様に!!!」

どこか無機質な、されど合理的な己が愛機からの提案にリインは血反吐を撒き散らしながら反発する。

されどそんな己が起動者に対してもヴァリマールはどこまでも冷静に

「然様。既ニ勝敗ハ決シタ。我々ノ敗北ダ。故ニ、コノ上ハ速ヤカニ離脱シテ再起ニ賭カケルベキデアル」

「~~~~~ツ~~~~~!!!」

負けた、そう自分は負けたのだ。クロウに。

クロウ・アームブラストの漆黒の意志にこそ自分は負けたのだ。

経験の差や武装の差、それも確かに存在しただろう。

だが、それ以上に自分は意志と覚悟で負けていた。

憎悪によって自ら纏っていた鋼を溶かした自分と違い、クロウ・アームブラストは確かな覚悟を宿していた。

言い訳の余地のない完敗だ。かつてない屈辱と自分自身への怒りがリインの身を苛む。

だが、それを律しなければならない。

憎悪という焰によってその身を焼いたのが自分の敗因なれば、どれほど厄介だろうと自分はこれを制御しなければならないのだ。

この上、怒り任せに振る舞えばそれは恥の上塗りというものだろ

う。

「……何よりも、命を賭して自分を逃がそうとしている師の犠牲を無駄にする事になるのだから。」

そんな醜態をこれ以上、晒せるわけがない。

「……撤退する！ 目標地点はアイゼンガルド連峰の何れか潜伏に適した場所。……そこで、再起までの時間を稼ぐ」

「承知シタ」

我が身を裂かれるような怒りと屈辱にその身を焼きながらもリインは決断した。

必ず戻ってくる、今度こそこのような無様は晒さない。

「……亡き父の遺志を継ぎ、必ずやこの国に『勝利』と『繁栄』を齎すのだと誓って。」

《灰色の騎士》リイン・オズボーンは無様に敗走したのだった。

七曜暦1204年10月30日。

貴族連合は帝都を占領。オズボーン宰相暗殺はクーデターを目論んだ帝国正規軍及びそれに乗じて権力を手中に収めんとした一部政治家の仕業だと断定。

帝国正規軍最高司令官シュタイエルマルク元帥、総参謀長カルナツプ上級大将を筆頭に帝国参謀本部の主だった面々を拘束。

更にはアルノールの守護神マテウス・ヴァンダール大将もそれに与し、抵抗したために貴族連合の英雄、『蒼の騎士』クロウ・アームブラストがこれを討伐したと高らかに発表した。

最も信賴していた己が騎士が反逆を目論んだというこの事実に心を痛めた皇帝陛下はしばし、ご静養される事にしたというアルノールとヴァンダール、そして帝都の民の神経をこの上なく逆撫でする宣言と共に。

それは、後の世にて《十月戦役》と称される帝国を2つに別つ開戦の号砲であった。

これよりおよそ2ヶ月余り、エレボニア帝国は同胞同士が殺し合う血で血を洗う『内戦』へと突入する事になるのであった……